

大阪市東住吉区

桑津遺跡発掘調査報告

付 田辺東之町遺跡

1998.3

財団法人 大阪市文化財協会

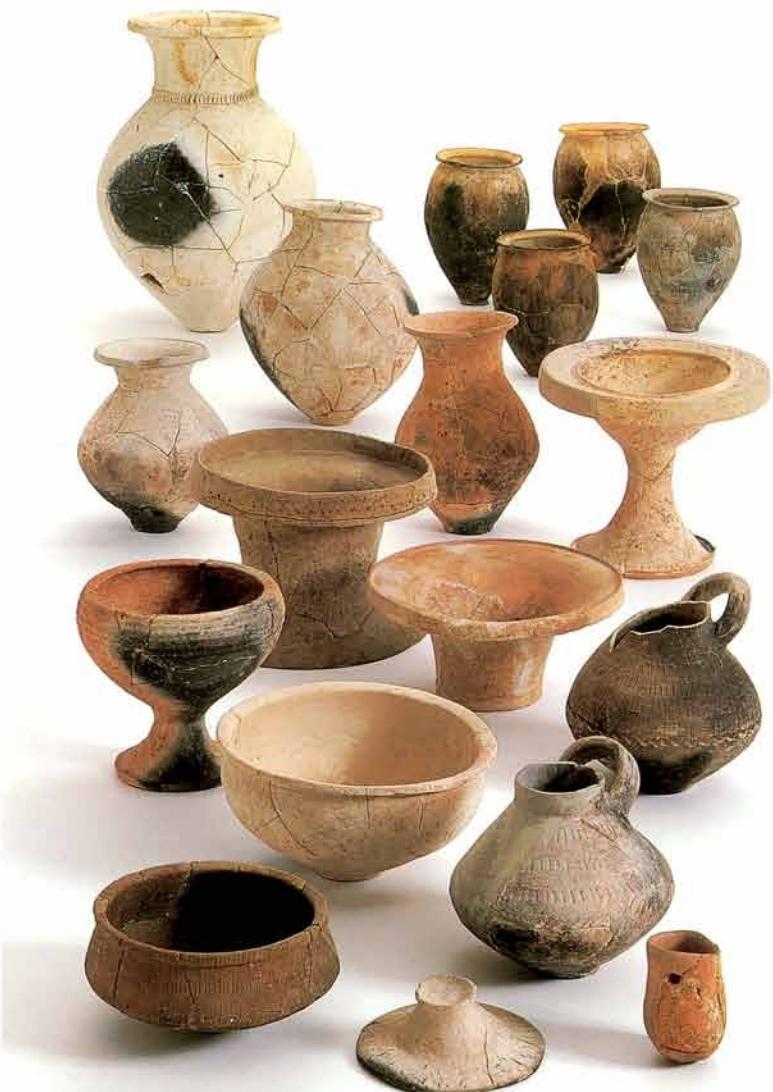
大阪市東住吉区

桑津遺跡発掘調査報告

付 田辺東之町遺跡

1998.3

財団法人 大阪市文化財協会



KW90-14次 SE01出土弥生土器

大阪市東住吉区

桑津遺跡発掘調査報告

付 田辺東之町遺跡

1998.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大正時代、多数の古瓦が出土したことが契機となって、桑津遺跡(田辺廃寺)の存在が明らかになった。戦前には、京都大学と大阪府による調査が行われ、多量の弥生土器や石器が出土し、桑津遺跡は大阪府下の代表的な弥生時代の遺跡として知られることになった。

大阪市文化財協会は、1981年以来、桑津遺跡の調査に中心的な役割を果たしてきた。遺跡が市街地にあるため、中・小規模の調査が多かったが、弥生時代だけでなく後期旧石器時代から現代に至るまでの、多くの成果を挙げてきている。とりわけ、7世紀前半の井戸から出土した木簡は、我が国最古の呪符木簡として注目されるものである。

このたび、桑津遺跡の23件の調査報告とともに、同じ東住吉区の田辺東之町遺跡の調査成果を合わせて、一冊の纏まった報告書として上梓することができた。本書を通して、遺跡に対する理解が深められ、文化財への関心がより一層、高められることを願ってやまない。

最後に、現場作業や整理作業、そして本書を成すに当って、さまざまご支援、ご配慮をくださった関係各位に、深く御礼申し上げる次第である。

1998年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 佐治 敬三

例　　言

- 一、本書は大阪市東住吉区に所在する桑津遺跡および田辺東之町遺跡の発掘調査報告である。桑津遺跡については1981～95年にかけて行った23件の調査、田辺東之町遺跡に関しては89年に行った1件の調査を報告する。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、第Ⅰ章第2節の表1(桑津遺跡)および付章第2節(田辺東之町遺跡)に記した各調査の原因者の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣憲(現調査部長)の指揮のもと、京嶋覚・藤田幸夫・松尾信裕・田中清美・森毅・南秀雄・黒田慶一・高橋工・松本(旧姓今津)啓子・岡村勝行・寺井誠・西畠佳恵・金村浩一(現財団法人東大阪市文化財協会)・櫻井久之・久保和士の各調査員が行った。各調査の担当者・面積・期間などは、桑津遺跡について第Ⅰ章第2節の表1に、田辺東之町遺跡について付章第2節に記した。
- 一、木製品・金属製品の整理および保存については調査課伊藤幸司・鳥居信子が行った。
- 一、本書の作成は1997年4月1日～98年3月31日に行った。編集作業は報告書作成室長八木久栄の指揮のもと同作成室櫻井久之・久保和士が担当した。執筆は上記の現場担当者と討議の上、櫻井(第Ⅰ章、第Ⅱ章第1・2・5～19・21・23節、第Ⅲ章)、久保(第Ⅱ章第3・4・20・22節、第Ⅲ章、付章)が主としてこれに当った。そのうち石器遺物については櫻井が、動物遺体については久保が執筆した。巻末の英文要旨の作成はRobert Condon氏が行い、岡村勝行がこれを助けた。
- 一、遺構写真は主として担当調査員が撮影し、一部の撮影を徳永昌治氏に委託した。遺物写真の撮影は楠本真紀子氏に委託し、一部を調査員が撮影した。また、図版71の赤外線写真は奈良国立文化財研究所牛嶋茂氏による。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査および資料整理・図表作成などの作業には補助員諸氏の援助を得た。深く感謝の意を表したい。

凡　　例

1. 地層名は本書第Ⅰ章第2節に記した「桑津遺跡の層序」に基づき、桑津○層と表記する。
2. 遺構名の表記は、方形周溝墓・土壙墓・土器棺墓について以外、塀・柵(SA)、竪穴住居・掘立柱建物(SB)、溝・流路(SD)、井戸(SE)、池(SG)、土壙(SK)、柱穴・ピット(SP)、その他(SX)の分類記号の後に、各調査次数ごとの通し番号を付している。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では標高○mと表記する。挿図中ではTP±○mと記す。また、挿図中の方位は、磁北にはMN、座標北にはGNを入れて示した。座標値の記載のあるものは国土平面直角座標(第VI系)の値である。
4. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[佐原眞1968]、円筒埴輪：[川西宏幸1978]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1966]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]

桑津遺跡のおもな遺構・遺物 () 内数字はKW一回調査を示す

縄文		有茎尖頭器(82-7、91-18・26)
弥生	中期	竪穴住居(94-1)
		方形周溝墓(82-7、83-8、88-6、90-22、91-2、93-2)
		土壙墓(93-2)
		土器棺墓(87-23、88-6)
		井戸(82-7、90-14、95-5)
		綾杉文器台(90-14) 矢羽根形文器台(93-2) 台形土器(90-14、93-2) 飯蛸壺(90-14、90-22、93-2) 土玉・算盤玉状土製品・磨製石剣(90-14) 石庖丁(82-7、93-2) ガラス小玉(95-5) 炭化米(95-5) イノシシ(90-14)
古墳		竪穴住居(87-20)
		溝(87-23、91-2)
		土壙(87-20)
飛鳥・奈良		掘立柱建物(86-2、90-10-22、91-2、91-8・16、94-1、95-5)
		井戸(91-8、91-18)
		円筒埴輪(82-7、86-2、91-8、94-4) 家形埴輪(94-4) 白玉(91-2、95-5) 初期須恵器(87-23、88-6) ウマ(82-7) 呪符木簡(91-8) 軒瓦(88-21、91-18)
平安		掘立柱建物(91-18)
		井戸(91-18)
鎌倉・室町		井戸(93-2) 轍(83-8)
		旧西除川(86-2)
江戸		環濠(86-3、88-6)
近・現代		防空壕(94-1) 土取り穴(93-2)

田辺東之町遺跡のおもな遺構・遺物

古墳		鰐付円筒埴輪
飛鳥・奈良	掘立柱建物 溝	
平安	火葬墓	藏骨器

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 桑津遺跡の調査	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 これまでの調査成果	4
1)発掘史からみた桑津遺跡	4
2)今回報告する調査	8
i)桑津遺跡の層序	
ii)主要な遺構と遺物	
第Ⅱ章 調査の結果	13
第1節 KW81－1次調査	13
第2節 KW81－2次調査	16
第3節 KW82－7次調査	20
第4節 KW83－8次調査	39
第5節 KW86－2次調査	49
第6節 KW86－3次調査	55
第7節 KW87－20次調査	62
第8節 KW87－23次調査	69
第9節 KW88－6次調査	78
第10節 KW88－21次調査	89
第11節 KW88－36次調査	94
第12節 KW90－10次調査	99
第13節 KW90－14次調査	102
第14節 KW90－22次調査	125

第15節	KW91－2次調査	136
第16節	KW91－8次調査	145
第17節	KW91－16次調査	164
第18節	KW91－18次調査	168
第19節	KW91－26次調査	186
第20節	KW93－2次調査	190
第21節	KW94－1次調査	222
第22節	KW94－4次調査	231
第23節	KW95－5次調査	249
第Ⅲ章 遺構と遺物の検討		255
第1節	弥生時代の桑津遺跡	255
1)	集落の変遷	255
2)	住居・井戸	256
3)	墓	257
4)	東部の墓域	258
5)	遺物	262
6)	周辺遺跡の状況と今後の課題	263
第2節	古墳時代以降の桑津遺跡	265
1)	古墳時代	265
2)	飛鳥・奈良時代	266
付章	田辺東之町遺跡の調査	269
第1節	遺跡の立地と環境	269
第2節	TH89－3次調査	271
第3節	調査成果のまとめ	284
引用・参考文献		285
あとがき・索引		

英文目次・要旨

原色図版目次

1 弥生・飛鳥時代の遺構

- 上：KW93－2次方形周溝墓1
下：KW91－8次飛鳥時代掘立柱建物群

2 弥生時代の遺物

- 上：KW90－14次SE01出土器台
下：KW95－5次出土ガラス小玉と大阪市内出土
の弥生時代のガラス玉

図版目次

1 KW82－7次調査南トレンチ

- 上：調査地から桑津小学校を見る
下：方形周溝墓1南周溝遺物出土状況

2 KW82－7次調査方形周溝墓2・3

- 上：北トレンチ 方形周溝墓2遺物出土状況
下：西第1トレンチ 方形周溝墓3遺物出土状況

3 KW82－7次調査弥生時代の遺構

- 上：南トレンチ SE01・SD01・SK01・SX02
下：南トレンチ SK01弥生土器甕出土状況

4 KW83－8次調査方形周溝墓群

- 上：方形周溝墓群検出状況
下：方形周溝墓群完掘状況

5 KW83－8次調査方形周溝墓2・4

- 上：方形周溝墓2
下：方形周溝墓4南周溝遺物出土状況

6 KW86－2次調査古代～近世の遺構

- 上：調査地東部 SD04、SE01・02
下：調査地西部 拡張区の遺構

7 KW87－20次調査古墳・奈良時代の遺構

- 上：調査地西部 SB01～04、SD02・03、
SK02・03
下：調査地東部 SD01、SK09～11

8 KW87－20次調査古墳時代の遺構

- 上：SB01
下：SK02検出状況

9 KW87－23次調査弥生～室町時代の遺構

- 上：調査地東部SD01・06、ピット群
中：SD01断面
下：SD01内検出土器棺墓

10 KW88－6次調査弥生時代の遺構

- 上：方形周溝墓1全景
中：方形周溝墓1東周溝内壺出土状況
下：土器棺墓

11 KW88－21次調査古代～近世の遺構

- 上：調査地北区の遺構
下：調査地南区の遺構

12 KW88－36次調査奈良・室町時代の遺構

- 上：地山直上検出遺構
下：SD01・02、SP01

13 KW90－10次調査奈良時代の遺構

- 上：調査地全景
下：調査地南部柱穴群

14 KW90－14次調査弥生時代の遺構

- 上：調査地全景
中：SE01上部遺物出土状況
下：SE01完掘状況

15 KW90－22次調査弥生時代の遺構(1)

- 上：調査地全景
中：SD01・方形周溝墓2北西隅
下：SK03

16 KW90－22次調査弥生時代の遺構(2)

- 上：SK02
中：SK04
下：方形周溝墓1

17 KW91－2次調査弥生～飛鳥時代の遺構

- 上：方形周溝墓1・2
下：SB01・02、SD04

18 KW91－8次調査飛鳥時代の遺構(1)

- 上：建物群検出状況
下：建物群全景
- 19 KW91-8次調査飛鳥時代の遺構(2)
上：SB03
下：SB06
- 20 KW91-8次調査飛鳥時代の遺構(3)
上：SB01柱穴
中：SB01柱欠
下：SE01断面
- 21 KW91-16次調査飛鳥時代の遺構
上：調査地全景
下：SK01遺物出土状況
- 22 KW91-18次調査地全景
上・下：調査地全景
- 23 KW91-18次調査平安時代の遺構
上：SP05
中：SE02
下：SB01
- 24 KW91-18次調査飛鳥・江戸時代の遺構
上：SE01
下：SE09
- 25 KW91-26次調査中世以前の遺構
上：調査地全景
下：調査地東部の遺構
- 26 KW93-2次調査I区
上：調査地から桑津小学校を望む
下：中世以降の遺構
- 27 KW93-2次調査弥生時代の遺構
上：I区 検出状況
下：I区 方形周溝墓1
- 28 KW93-2次調査方形周溝墓1B
上：西周溝壺出土状況
下：東・北周溝遺物出土状況
- 29 KW93-2次調査方形周溝墓2・3
上：I区 方形周溝墓2・SD01
下：II区 方形周溝墓3
- 30 KW93-2次調査方形周溝墓3
上：南周溝遺物出土状況
- 下：壺出土状況
- 31 KW93-2次調査弥生時代の溝・土壙墓
上：I区 SD01遺物出土状況
下：I区 土壙墓
- 32 KW94-1次調査検出遺構
上：調査地全景
下：調査地南地区
- 33 KW94-1次調査弥生時代の遺構
上：SB01
下：SK01
- 34 KW94-4次調査完掘状況
上：II区
下：I区・拡張区
- 35 KW94-4次調査飛鳥～平安時代の遺構
上：SD06遺物出土状況
下：SP01鍋出土状況
- 36 KW95-5次調査弥生～江戸時代の遺構
上：調査地中央部～西部
下：SE01
- 37 TH89-3次調査飛鳥・奈良時代の遺構
上：調査区全景
下：SD01・02断面
- 38 TH89-3次調査平安時代の火葬墓
上：検出状況
下：完掘状況
- 39 KW81-2次・KW82-7次調査出土遺物
上：KW81-2次 桑津2層、桑津3層
下：KW82-7次 桑津3層、桑津5層
- 40 KW82-7次調査出土遺物(1)
方形周溝墓1・3、SE01、SK01
- 41 KW82-7次調査出土遺物(2)
上：方形周溝墓2
下：方形周溝墓3、SX01・03
- 42 KW82-7次・KW83-8次調査出土遺物
上：KW82-7次 方形周溝墓3、SD01・02、
SE01、SK01・02
下：KW83-8次 桑津5層、方形周溝墓1・
3・4・7

- 43 KW83-8次・KW86-2次調査出土遺物
 左上：KW83-8次 桑津3層
 右上：KW86-2次 弥生土器、須恵器
 下：KW86-2次 円筒埴輪
- 44 KW86-3次調査出土遺物
 桑津4層、SD01・03
- 45 KW87-20次調査出土遺物(1)
 SB01、SD01・03、SK02
- 46 KW87-20次調査出土遺物(2)
 上：SB01・02・03、SK02・03・09
 下：SD01・03、SK10・11、SP13
- 47 KW87-23次調査SD01出土遺物
 弥生土器
- 48 KW87-23次調査出土遺物(1)
 SD01、SK01、SP01
- 49 KW87-23次調査出土遺物(2)
 上：SD03出土弥生土器
 左下：SD04・06
 右下：SD06出土壺
- 50 KW88-6次調査出土遺物(1)
 方形周溝墓1、SD01出土弥生土器
- 51 KW88-6次調査出土遺物(2)
 桑津2層・3層、SD03・09、桑津2層下面遺構
- 52 KW88-36次調査出土遺物
 SK01出土弥生土器
- 53 KW90-14次調査SE01出土遺物(1)
 弥生土器壺
- 54 KW90-14次調査SE01出土遺物(2)
 弥生土器壺
- 55 KW90-14次調査SE01出土遺物(3)
 弥生土器水差・無頸壺・鉢・高杯
- 56 KW90-14次調査SE01出土遺物(4)
 弥生土器高杯・甕
- 57 KW90-14次調査SE01出土遺物(5)
 弥生土器甕・蓋
- 58 KW90-14次調査SE01出土遺物(6)
 弥生土器高杯・台付鉢・甕
- 59 KW90-14次調査SE01出土遺物(7)
- 弥生土器・土製品・木製品
- 60 KW90-14次調査SE01出土遺物(8)
 上・下：弥生土器壺
- 61 KW90-14次調査SE01出土遺物(9)
 上：弥生土器無頸壺・鉢
 下：弥生土器高杯・器台
- 62 KW90-14次調査SE01出土遺物(10)
 上：弥生土器甕
 下：弥生土器・土製品
- 63 KW90-14次調査SK01出土遺物
 弥生土器
- 64 KW90-22次調査出土遺物(1)
 方形周溝墓1・2、SK01・02
- 65 KW90-22次調査出土遺物(2)
 上：方形周溝墓1
 下：方形周溝墓2
- 66 KW91-2次調査出土遺物
 方形周溝墓1、SD04、SK01
- 67 KW91-2次・KW95-5次調査出土遺物
 上：KW91-2次 SD04、SP02・03、SK01
 下：KW95-5次 弥生土器・須恵器
- 68 KW91-8次調査出土遺物(1)
 上：桑津5層
 下：桑津2・3・5層
- 69 KW91-8次調査出土遺物(2)
 桑津2・5層、SB03、SE01、SX01
- 70 KW91-8次調査出土遺物(3)
 上：SA01、SB01・02・04
 下：SB05・06
- 71 KW91-8次調査出土遺物(4)
 上：SE01
 下：SP01、SX01・02・03
- 72 KW91-8次調査出土呪符木簡
 呪符木簡618
- 73 KW91-16次調査出土遺物
 SB01、SK01
- 74 KW91-18次調査出土遺物(1)
 桑津2・3層

- 75 KW91-18次調査出土遺物(2)
桑津3層、SG01
- 76 KW91-18次調査出土遺物(3)
SE01・05・06、SP05
- 77 KW91-18次調査出土遺物(4)
上：SE01・03・08・10・14
下：SE05・06、SP05・06
- 78 KW91-18次調査出土遺物(5)
上：SE02出土丸瓦
下：SE02出土平瓦
- 79 KW91-18次調査出土遺物(6)
上：SD01
下：SE02・04・08、SK01・02・03
- 80 KW91-18次調査出土遺物(7)
SD01、SK01
- 81 KW88-21次・KW91-26次調査出土遺物
上：KW88-21次 桑津3層、SK01
左下：KW91-26次 桑津3層
右下：KW91-26次 桑津3層、SD01
- 82 KW93-2次調査方形周溝墓出土遺物(1)
方形周溝墓1B・3
- 83 KW93-2次調査方形周溝墓出土遺物(2)
上：桑津2層、方形周溝墓1A・2、土壙墓
下：方形周溝墓1B
- 84 KW93-2次調査方形周溝墓出土遺物(3)
上・下：方形周溝墓3
- 85 KW93-2次調査出土遺物(1)
上・下：SD01
- 86 KW93-2次調査出土遺物(2)
土取り穴群
- 87 KW93-2次調査出土遺物(3)
上・下：土取り穴群
- 88 KW94-1次調査出土遺物
各遺構出土遺物(上段)、SB01、SP03・04・10
・14・19
- 89 KW94-4次調査SD06出土家形埴輪
上：妻部側面
- 左下：妻部天井
右下：棟木・屋根、棟持柱
- 90 KW94-4次調査出土遺物(1)
SD01・03・05・06、SX01・02、SB01
- 91 KW94-4次調査出土遺物(2)
上：SD06須恵器
下：SD06円筒埴輪
- 92 KW94-4次調査出土遺物(3)
上・下：SD06円筒埴輪
- 93 KW94-4次調査出土遺物(4)
上：SD06円筒埴輪、朝顔形埴輪
下：SB01、SD07・09、SK01、SP02、SX06・07
- 94 桑津遺跡出土石器遺物(1)
上：82-7次・83-8次・88-6・36次・
91-18・26次・93-2次
下：88-21次・90-14次・91-8・18次・
94-1次・93-2次
- 95 桑津遺跡出土石器遺物(2)
上：82-7次・83-8次・90-14次・
91-18次・93-2次・94-1次
下：82-7次・90-14次・93-2次
- 96 TH89-3次調査出土遺物(1)
第2層、SD01・02
- 97 TH89-3次調査出土遺物(2)
上：第2層
下：第2層、SD01・02、火葬墓
- 98 TH89-3次調査出土遺物(3)
SD01・02
- 99 TH89-3次調査出土遺物(4)
上・下：SD01・02
- 100 桑津遺跡動植物遺体・田辺東之町遺跡火葬人骨
上：KW90-14次SE01イノシシ下顎骨、KW82
-7次桑津5層ウマ右下顎第2後臼歯、
KW91-18次桑津3層上層ウマ右顎第3前臼歯、
KW95-5次SE01炭化米
下：TH89-3次 火葬墓 人骨

挿 図 目 次

図1 桑津遺跡の位置	1	図35 KW86-2次調査地位置図	49
図2 桑津遺跡周辺の遺跡	3	図36 調査地南壁断面図	50
図3 今回報告する調査地の位置	7	図37 拡張区南壁断面図	50
図4 KW81-1次調査位置および断面模式図	14	図38 弥生土器・埴輪	51
図5 No3地点出土遺物	15	図39 調査地東部中世以前の遺構平面図	52
図6 KW81-2次調査位置および断面図	17	図40 拡張区の古代・中世の遺構平面図	53
図7 桑津2・3層出土遺物	19	図41 SK01・SD01出土遺物	53
図8 東住吉中学校内の調査地位置図	20	図42 調査地東部の江戸時代遺構平面図	54
図9 KW82-7次調査地トレンチ配置図	21	図43 KW86-3次調査地位置図	56
図10 調査地断面図	23	図44 調査地地層柱状図	57
図11 各層出土の遺物	24	図45 A～C・F地点遺構実測図	58
図12 石器遺物	25	図46 D・E地点遺構実測図	59
図13 調査地全体図	27	図47 桑津3層・SD01・03出土遺物	60
図14 方形周溝墓1実測図	28	図48 KW87-20次調査地位置図	62
図15 方形周溝墓1出土遺物	29	図49 調査地北壁断面図	63
図16 方形周溝墓2実測図	29	図50 SB01～03、柱穴出土遺物	63
図17 方形周溝墓2出土遺物(1)	30	図51 調査地全体図	64
図18 方形周溝墓2出土遺物(2)	30	図52 SB01・04実測図	65
図19 方形周溝墓3東周溝実測図	31	図53 SK02・03断面図	66
図20 方形周溝墓3出土遺物	32	図54 SK02～04・09出土遺物	66
図21 SD01・02出土遺物	33	図55 SD01・03出土遺物	67
図22 SE01・SD01・SX02実測図	34	図56 SP13・14、SK10・11出土遺物	68
図23 SE01出土遺物	35	図57 KW87-23次土器棺墓実測図	69
図24 SK01実測図	36	図58 調査地全体図	70
図25 SK01・02出土遺物	37	図59 調査地東半部の遺構平面図	71
図26 SX01・03出土遺物	37	図60 SD01・02・06断面図	72
図27 KW83-8次調査地北壁および西壁断面図	39	図61 SD01出土遺物(1)	73
		図62 SD01出土遺物(2)	74
図28 各層出土の遺物	40	図63 SD01上層出土遺物	75
図29 石器遺物	41	図64 SK01・SP01・02出土遺物	75
図30 調査地全体図	42	図65 SD04・06出土遺物	77
図31 方形周溝墓2・3実測図	44	図66 KW88-6次調査地位置図	78
図32 方形周溝墓2実測図	45	図67 調査地東壁断面図	78
図33 弥生時代の遺構出土の遺物	46	図68 各層出土の遺物	79
図34 桑津3層下面検出遺構平面図	47	図69 弥生時代の遺構平面図	81
		図70 方形周溝墓1・SD01・02出土遺物	82

図71 土器棺墓・SD01出土遺物	83	図109 SE01出土木製品	120
図72 土器棺墓実測図	84	図110 SK01遺物出土状況図	121
図73 SD02出土石鎌	84	図111 SK01出土遺物(1)	122
図74 平安～江戸時代の遺構平面図	85	図112 SK01出土遺物(2)	123
図75 SB01実測図	86	図113 KW90-22次SE03および桑津2層出土遺物	
図76 各遺構出土の遺物(桑津3～5層)	87		125
図77 各遺構出土の遺物(桑津2層)	87	図114 調査地全体図	126
図78 KW88-21次調査地位置図	89	図115 調査地断面図	127
図79 調査地全体図および断面図	90	図116 方形周溝墓1周溝内出土遺物	128
図80 SK01・02、SP01断面図	91	図117 方形周溝墓1実測図	129
図81 桑津3層・SK01出土遺物	92	図118 方形周溝墓1周溝断面図	130
図82 SE01出土石剣	93	図119 遺構内出土石鎌	131
図83 KW88-36次調査地と周辺の調査	94	図120 方形周溝墓2周溝内出土遺物	132
図84 桑津5層出土遺物	94	図121 SD01、SK02～04断面図	133
図85 弥生～室町時代の遺構実測図	95	図122 SK01-03出土遺物	133
図86 SK01出土遺物(1)	96	図123 SB01実測図	134
図87 SK01出土遺物(2)	97	図124 SD01出土遺物	134
図88 SK01出土石鎌	98	図125 KW91-2次調査地全体図	137
図89 KW90-10次調査地位置図	99	図126 方形周溝墓1・2実測図	138
図90 調査地北壁地層柱状図	100	図127 方形周溝墓1西周溝出土遺物	139
図91 桑津3層出土遺物	100	図128 SD04出土遺物	139
図92 奈良時代の遺構平面図	101	図129 SP01出土白玉	140
図93 KW90-14次調査地位置図	102	図130 SK01・SX01出土遺物	140
図94 弥生・平安～室町時代の遺構実測図	103	図131 柱穴出土遺物	141
図95 SE01実測図	104	図132 SB01・02実測図	142
図96 SE01出土石器遺物	105	図133 SP06～08実測図	143
図97 SE01出土土器・土製品(1)	107	図134 SX01実測図	143
図98 SE01出土土器・土製品(2)	108	図135 SX02断面図	144
図99 SE01出土土器・土製品(3)	109	図136 KW91-8次調査地東壁断面図	146
図100 SE01出土土器・土製品(4)	110	図137 調査地全体図	147
図101 SE01出土土器・土製品(5)	111	図138 桑津5層出土石鎌	148
図102 SE01出土土器・土製品(6)	112	図139 各層出土の遺物(1)	149
図103 SE01出土土器・土製品(7)	113	図140 各層出土の遺物(2)	150
図104 SE01出土土器・土製品(8)	114	図141 SB01・02実測図	151
図105 SE01出土土器・土製品(9)	115	図142 SB03実測図	152
図106 SE01出土土器・土製品(10)	116	図143 SB04実測図	153
図107 SE01出土土器・土製品(11)	117	図144 SA01、SB01～04出土遺物	154
図108 SE01出土土器・土製品(12)	118	図145 SB05実測図	156

図146 SB06、SA01実測図	157	図183 方形周溝墓1実測図	198
図147 SB05・06出土遺物	158	図184 方形周溝墓1周溝断面図	199
図148 SE01断面図	159	図185 方形周溝墓1周溝内遺物出土状況	200
図149 SE01出土遺物	160	図186 方形周溝墓1出土遺物(1)	201
図150 SE01出土木簡	161	図187 方形周溝墓1出土遺物(2)	202
図151 SX01~03、SP01・03出土遺物	162	図188 方形周溝墓2出土遺物	203
図152 KW91-16次調査地遺構実測図	165	図189 方形周溝墓2実測図	204
図153 柱穴出土遺物	166	図190 方形周溝墓2・3の推定復元図	205
図154 SK01実測図	166	図191 方形周溝墓3実測図	206
図155 SK01出土遺物	167	図192 方形周溝墓3周溝内遺物出土状況	207
図156 KW91-18次調査地南壁断面図	168	図193 方形周溝墓3出土遺物(1)	208
図157 調査地全体図	169	図194 方形周溝墓3出土遺物(2)	209
図158 各層出土の遺物	171	図195 土壙墓実測図	210
図159 石器遺物	172	図196 土壙墓出土遺物	210
図160 SB01周辺遺構実測図	174	図197 SD01遺物出土状況および断面図	211
図161 SP01・04~06出土遺物	175	図198 SD01出土遺物(1)	212
図162 SD01出土遺物	176	図199 SD01出土遺物(2)	213
図163 SE01~06断面図	177	図200 SB01・SP01実測図	214
図164 SE01・03・08・10・14出土遺物	178	図201 中・近世の遺構断面図	214
図165 SE02・04~06出土遺物	179	図202 SE01出土遺物	215
図166 SE02出土丸瓦・平瓦	180	図203 土取り穴群出土遺物(1)	216
図167 SE02出土平瓦	181	図204 土取り穴群出土遺物(2)	217
図168 SK01~03出土遺物	182	図205 土取り穴群出土遺物(3)	218
図169 SE14・15断面図	183	図206 KW94-1次調査地位置図	222
図170 SG01断面図	184	図207 調査地全体図	223
図171 SG01出土遺物	185	図208 SB01平面図	224
図172 KW91-26次調査地位置図	186	図209 各遺構出土の遺物	225
図173 桑津3層出土有茎尖頭器	186	図210 石器遺物	226
図174 KW91-26次調査地遺構実測図	187	図211 SB02・SA01実測図	227
図175 桑津3層・SD01出土遺物	188	図212 SB02・SA02・03出土遺物	228
図176 SD01・02、SX01~03断面図	189	図213 防空壕略測図	229
図177 KW93-2次調査地全体図 (古代~近代の遺構)	191	図214 KW94-4次調査地位置図	231
図178 調査地断面図	193	図215 調査地断面図	233
図179 桑津2層出土の遺物	194	図216 調査地全体図	234
図180 打製石器	195	図217 溝・落込み断面図	234
図181 磨製石器	196	図218 SD01・03・05、SX01~03出土遺物	235
図182 弥生時代の遺構平面図(I区)	197	図219 SD06遺物出土状況・断面図	237
		図220 SD06出土土器	238

図221 SD06出土家形埴輪	238	図237 田辺東之町遺跡の範囲と既調査地	269
図222 SD06出土円筒埴輪(1)	240	図238 TH89-3次調査地位置図	271
図223 SD06出土円筒埴輪(2)	242	図239 調査地北壁断面図	272
図224 SD06出土円筒埴輪・朝顔形埴輪	243	図240 調査地全体図および西壁断面図	273
図225 SB01実測図およびSP01土器出土状況	245	図241 第2層出土土器	274
図226 その他の遺構出土遺物	246	図242 第2層出土土錐	275
図227 金属製品	247	図243 第2層出土石鎌	275
図228 KW95-5次調査地位置図	249	図244 SB01実測図	276
図229 調査地南壁断面図	250	図245 SD01~03断面図	277
図230 調査地全体図	251	図246 SB01、SP01・02、SD01~03出土遺物	
図231 SE01実測図	252		278
図232 調査地出土遺物	253	図247 円筒埴輪および鰐付円筒埴輪	280
図233 SB01・SK01実測図	254	図248 鰐付円筒埴輪	281
図234 桑津遺跡の弥生時代遺構	256	図249 火葬墓実測図	282
図235 東住吉中学校内の弥生時代遺構	260	図250 火葬墓出土遺物	282
図236 KW90-14次SE01出土土器の組成	263		

表 目 次

表1 今回報告する調査の一覧	6	表4 KW91-18次調査出土の石器遺物	173
表2 桑津遺跡各調査地の地層	10	表5 方形周溝墓一覧	261
表3 KW90-14次調査出土の石器遺物	106	表6 TH89-3次出土の土錐計測値	275

写 真 目 次

写真1 KW81-1次現場作業風景	13	写真8 KW91-8次現地説明会風景	145
写真2 №3地点出土遺物	15	写真9 KW94-4次調査地遠景	231
写真3 KW81-2次II・III区調査風景	16	写真10 SD06埴輪出土状況(1)	236
写真4 II・III区調査風景	17	写真11 SD06埴輪出土状況(2)	236
写真5 KW82-7次現場説明会風景	20	写真12 SD06断面	237
写真6 KW86-3次A・B地点調査風景	55	写真13 TH89-3次第2層出土土錐	275
写真7 KW90-10次桑津3層出土遺物	100	写真14 第2層出土石鎌	275

第Ⅰ章 桑津遺跡の調査

第1節 遺跡の立地

桑津遺跡は大阪市東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺に広がりをもつ。桑津小学校北西隅を中心とする半径400mほどの範囲にあり、遺跡南西部に田辺廃寺という古代寺院址を包括している。地形的には、大阪市を南北に貫く上町台地の中央部から、北北東方向に派生する丘陵上に立地しており、東には広闊な河内平野を控え、遠く生駒山地の山並みを望む地にある(図1)。今の河内平野は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけては河内湖、縄文時代晚期から弥生時代中期は河内潟、縄文時代前期から中期は河内湾とよばれる景観を呈していた[梶山彦太郎・市原実1986]。このように遺跡を取巻く地理的な環境は、時代ごとにさまざまな変遷をとげてきた。

現在、遺跡は、1929年から着工された土地区画整理事業により、市街地化されている。そのため現地形から過去の地形を読み取ることは困難であるが、1885~87年に作成された仮製地形図(註1)やこれまでの調査成果から、微地形のようすをある程度把握することができる。図2に仮製地形図から等高線を抽出し、それに現在の道路現況図・遺跡範囲を重ねて示した。

遺跡の西部は上町台地から分岐する丘陵の付け根にある。その中央部付近がもっとも高く、標高7mである。そこから東に向って緩やかに傾斜し、遺跡東端で標高3mを測る。弥生時代の集落は、この東面する緩傾斜地に存在する。遺跡の南縁から東縁部には、それを巡るように谷地形があ

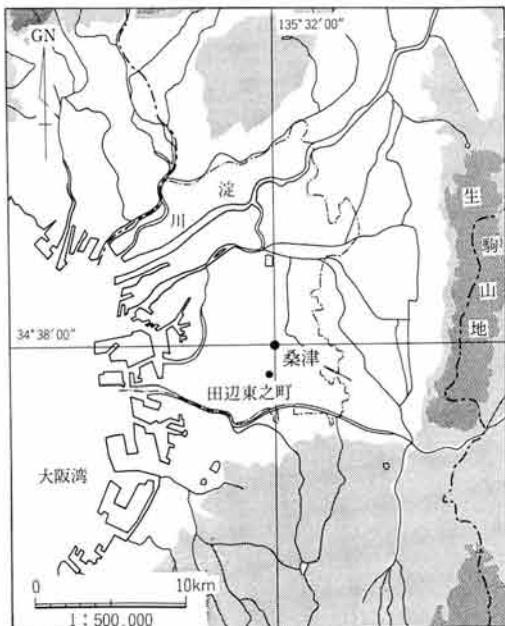


図1 桑津遺跡の位置

り、この谷を挟んで東側に杭全遺跡がある。杭全遺跡では弥生時代前期末の遺構・遺物が見つかっている[田中清美1995]。現在、遺跡東部には駒川・今川の2河川が北流している。このうち今川は、1704(宝永元)年の大和川付替えまでの西除川旧河道にあたる。一方、駒川については前述の谷地形と係わりをもつと思われる。遺跡南西部、田辺廃寺の推定寺域の東半は、その谷部へと続く傾斜面に当っている。発掘調査に基づく地山面の等高線の推移も同様な状況を示しており、この推定寺域については再考の必要がある(註2)。遺跡北西部には北北東方向に延びる谷地形が入込んでおり、桑津遺跡のある丘陵の尾根筋はその谷筋に沿って続いている。その丘陵の先端部、桑津遺跡北端から1.5kmには縄文時代早期～前期初頭の勝山遺跡[松本百合子1991]、古墳時代前期末～中期初頭の御勝山古墳[八木久栄1974]が存在している。

以上述べてきたように、桑津遺跡は丘陵上の安定した場所にあり、東に生産域となる河内平野を控えていた。それが、河内湾・潟・湖という段階には、水上交通路という役割とともに水産資源をもたらしていたと考えてよいだろう。

桑津遺跡は、後期旧石器時代から現在まで続く複合遺跡である。各時代において、ここに居住域がもうけられた背景には、周辺の各遺跡とのさまざまな関係があつてのことと思われる。そして、互いに影響を及ぼし合いながら地域社会を構成していた。たとえば、桑津遺跡を中心として半径4.5～5.0kmの範囲に、森の宮遺跡・亀井遺跡・瓜破遺跡・山之内遺跡といった弥生時代の主要な遺跡が存在する。これら拠点集落のネットワークを通して、人や物の動きがあった。古墳時代中期には、上町台地北端部の法円坂倉庫群[大阪市文化財協会1992]に如実に示されるように、当時の倭政権にとってこの上町台地は政治的・経済的な要衝の地となっていた。その後も、難波宮下層遺跡、前期難波宮、後期難波宮が上町台地上にみられ、少なからぬ影響をこの遺跡の居住者に及ぼしていたと考えられる。こうした巨視的な視点に立って、遺跡立地について見直してみる必要があろう。

(註)

- (1) 仮製地形図は清水靖夫編『明治前期・昭和前期 大阪都市地図』(柏書房1995年発行)に集成されたものを使用した。
- (2) 本書第Ⅲ章の「遺構と遺物の検討」の中で、田辺廃寺の寺域の問題について述べている。

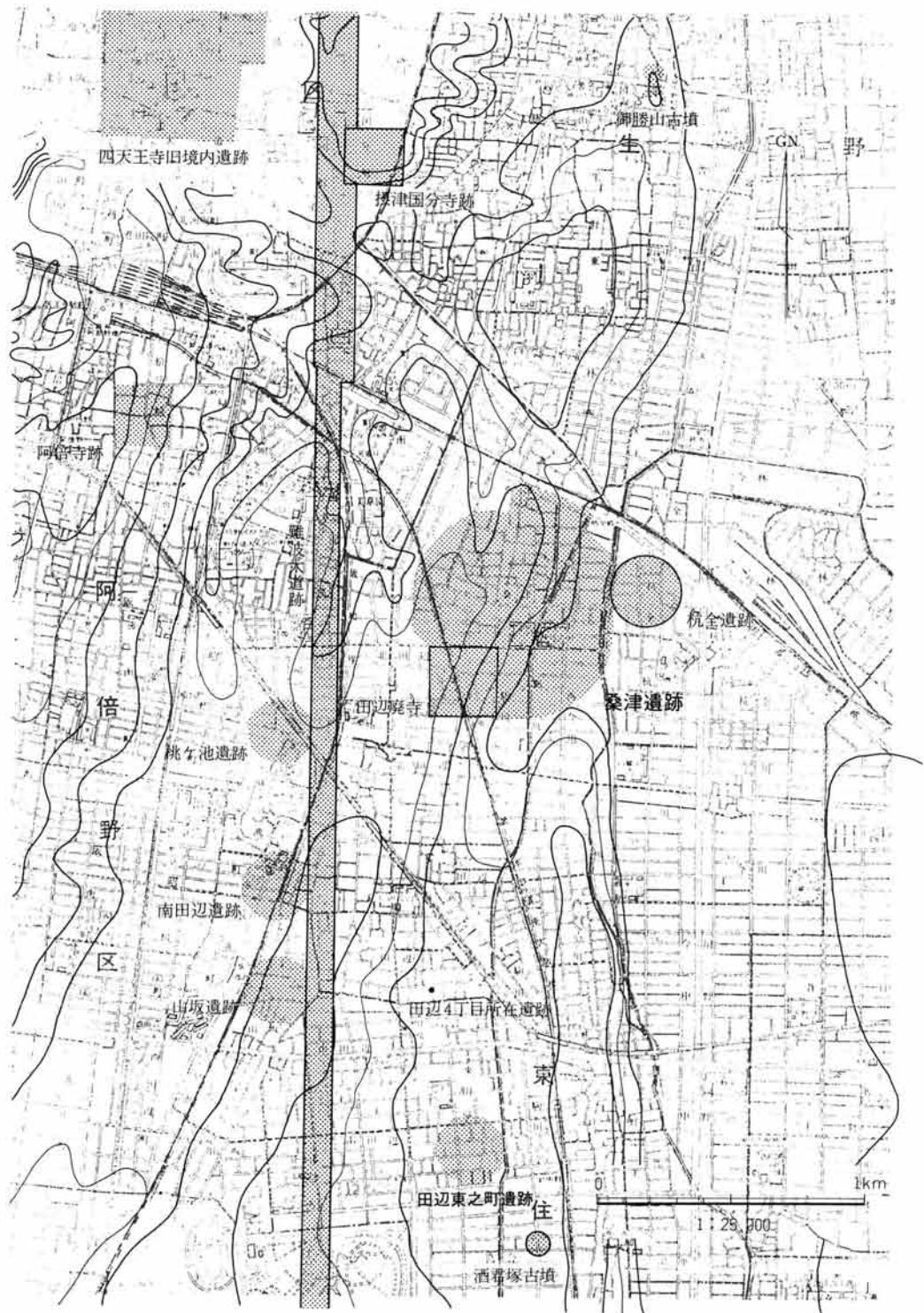


図2 桑津遺跡周辺の遺跡

第2節 これまでの調査成果

1) 発掘史からみた桑津遺跡

この地域に弥生土器・石器・古瓦の散布地のあることは、早くから認識されていた[高橋直一1922]。また、1923年、河陽鉄道(現近鉄南大阪線)が延長された際や、1925年に行われた遺跡内の土取り工事によって多数の古瓦が発見されていた[山本加三1926]。そこに、1929年より天王寺土地区画整理組合による事業が開始され、その工事に伴って多数の遺物が出土した。こうした開発が進められるなか、1933年には、大阪史談会によって桑津遺跡の最初の発掘調査が行われた(北田辺町68番地)。

続いて、1937年には京都帝国大学考古学研究室と大阪府とによって、遺跡内3地点で調査が実施された[小林行雄1942]。これらはA～C地点と呼称され、A地点(北田辺町70番地)では地表下30～50cmに弥生土器および土師器を含む包含層がみられた。B地点(北田辺町69番地)でも厚さ30cm前後の黒褐色包含層が確認され、サヌカイト片が検出された。C地点(桑津町494番地の1)では井戸および堅穴住居と推定される遺構が確認され、畿内第二・三様式を中心とする壺・無頸壺・高杯・甕などのほか、石鎌・石錐・石小刀・石槍・石庖丁・磨製石斧が出土した。この調査によって桑津遺跡は、近畿地方における弥生時代中期の代表的遺跡として学界に広く知られるところとなった。

戦後の調査は、大阪市下水道整備事業に伴って1974～75年に行われた大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会による調査をはじまりとする。この調査では古代の掘立柱建物が確かめられ、この遺跡が弥生時代に限定されるものでないことを遺構の上からも明らかにした[長山雅一1975]。

1979年に財団法人大阪市文化財協会が組織され、以後、今日にいたるまで、大阪市教育委員会と連携して桑津遺跡の調査に当っている。96年度までに約50件の調査が行われており、調査総面積は9,000m²ちかくになる。遺跡内は現在、住宅地となっていることから、民間住宅の立替えに伴う調査も多く、20件ほどを占める。そうした調査のほとんどは1件あたり、100m²以下の小規模なものである。以下これまでの調査成果について概述する。

83年度までの調査では、東住吉中学校内で行われたKW82-7次、KW83-8次調査、民間マンション建設に伴うKW83-14次調査が注目される(以下、遺跡略号KWを略す)。前2者の調査では弥生時代中期の方形周溝墓群が見つかり、現在の駒川を挟んで、西に居

住域、東に墓域が存在するという集落構造の一端が見え始めた。83-14次では飛鳥から奈良時代にかけての掘立柱建物群が見つかり、田辺廃寺の存在と係わって注目された。また、前述の82-7次調査ではチャート製の有茎尖頭器が出土し、この遺跡が縄文時代草創期にまでさかのぼることを明らかにした。

89年度までの調査には、それまでにない特出した成果はないものの、遺跡の具体像を示すさまざまな成果が得られた。弥生時代に関しては、桑津小学校周辺で行った85-11・14次の2調査で、この一帯が居住域であることを再確認している。また、遺跡北西部の88-6次では方形周溝墓・土器棺墓が見つかり、墓域が集落東方のみでないことを明らかにした。古墳時代に関しては、遺跡北東部の86-2次調査で多量の埴輪片が出土している。それらは本来の地層に伴うものではなかったが、古墳の存在を示すものとして注目された。桑津遺跡周辺には、大塚・赤塚・罐子山・墓の前といった古墳の存在をうかがわせる小字名がある。それらはいずれも遺跡西部の近鉄南大阪線沿いにある。しかし、今までのところ古墳は未確認であり、埴輪も遺跡東部の駒川沿いからの出土例が多い。87-23・30次は隣接した敷地で行われた調査で、弧状に巡る一連の溝内から初期須恵器が出土している。遺跡西部にある87-20次では古墳時代中期の竪穴住居が確認された。遺跡中央部の85-14次では土師器甕を用いた土器棺墓が検出された。飛鳥・奈良時代に係わっては、84-7次で掘立柱建物が見つかっているほか、いくつかの調査でこの時期の遺構の検出が報告されている。

91年度までの2年間には注目すべき調査が相次いだ。まず、桑津小学校内で行われた90-14次では弥生時代中期の井戸・土壙が検出され、井戸からはコンテナバット15箱分にも及ぶ土器が出土した。なかには綾杉文で加飾された器台もみられた[田中清美1991a]。遺跡西部の90-22次調査では、それまで桑津遺跡で確認された方形周溝墓の中では最大規模のものが検出された[田中清美1991b]。遺跡北端部の91-2次でも方形周溝墓が見つかり、この方面にも弥生時代の墓域が存在することが確かめられた。91-2次調査地周辺は、この調査までは遺跡指定の範囲外にあったが、この調査ののち、遺跡の範囲は北側に四角く張出すかたちで拡張された。遺跡の北東寄り、駒川に面した91-8次調査地では飛鳥時代の掘立柱建物群や井戸が見つかった。各建物は方向を揃え、整然と配置されていた[高橋工1991a]。井戸からは我が国最古の呪符木簡が出土した[高橋工1991b]。この調査により桑津遺跡は、飛鳥時代の遺跡としても注視すべきものとなった。

96年度までの調査にも新たな知見をもたらす多くの調査があった。まず、95-19

表1 今回報告する調査の一覧

調査次数	調査原因	面積(m ²)	調査個所	担当者	調査期間
81-1次	近鉄南大阪線阿倍野橋 ～針中野間の立体交差化事業	18	東住吉区北田辺 2～4丁目	松尾 信裕	1981年5月13日～ 1981年5月21日
81-2次	大阪瓦斯ガス管入替工事	46	同 桑津3丁目	田中 清美	1981年7月28日～ 1981年8月1日
82-7次	東住吉中学校屋内体育館 建設工事	360	同 桑津5丁目17	田中 清美	1982年11月4日～ 1982年12月8日
83-8次	東住吉中学校校舎建設工事	707	同 桑津5丁目17	森 穀	1983年12月17日～ 1984年1月29日
86-2次	興栄住宅㈱による 共同住宅建設	390	同 桑津4丁目12	櫻井 久之 西畠 佳恵	1986年4月10日～ 1986年5月10日
86-3次	大阪ガス(㈱)による ガス管埋設工事	54	同 桑津3・4丁目	田中 清美	1986年4月16日～ 1986年4月22日
87-20次	米津氏による建設工事	137	同 駒川1丁目5	今津 啓子	1987年10月2日～ 1987年10月12日
87-23次	川北氏による マンション建設	346	同 桑津5丁目3	松尾 信裕	1987年10月14日～ 1987年10月30日
88-6次	京善寺による建設工事	198	同 桑津3丁目21	藤田 幸夫 金村 浩一	1988年5月6日～ 1988年5月31日
88-21次	東氏による建設工事	157	同 北田辺2丁目12	黒田 慶一	1988年8月2日～ 1988年8月8日
88-36次	正光建設㈱による建設工事	26	同 桑津5丁目10	京嶋 覚	1988年10月31日～ 1988年11月5日
90-10次	(株)松本組による建設工事	125	同 桑津3丁目8	西畠 佳恵	1990年8月27日～ 1990年9月3日
90-14次	桑津小学校体育館 建替え工事	150	同 桑津5丁目13	田中 清美	1990年9月22日～ 1990年9月29日
90-22次	(株)緑風興産による建設工事	370	同 桑津3丁目13	田中 清美	1991年2月7日～ 1991年4月2日
91-2次	實業建設㈱による 建設工事	371	同 桑津3丁目28	櫻井 久之	1991年4月12日～ 1991年5月31日
91-8次	ジャパンビルダー(㈱)による 建設工事	720	同 桑津4丁目 4-2～25、76	高橋 工	1991年6月1日～ 1991年8月7日
91-16次	スワロー電気(㈱)による 建設工事	60	同 桑津4丁目1	岡村 勝行	1991年8月17日～ 1991年8月30日
91-18次	西日本旅客鉄道(㈱)による 建設工事	1392	同 駒川1丁目19	岡村 勝行 高橋 工	1991年9月5日～ 1991年12月17日
91-26次	丸岡氏による建設工事	98	同 駒川1丁目 18-32	高橋 工	1991年12月24日～ 1992年1月10日
93-2次	東住吉中学校建設工事	568	同 桑津5丁目17	久保 和士	1993年5月6日～ 1993年6月25日
94-1次	五十鈴建設(㈱)による 建設工事	177	同 桑津3丁目14	南 秀雄	1994年4月18日～ 1994年5月11日
94-4次	(株)セザールによる建設工事	103	同 桑津3丁目30	久保 和士	1994年5月23日～ 1994年6月8日
95-5次	(株)富士エンジニアリング による建設工事	90	同 桑津3丁目10	寺井 誠	1995年6月19日～ 1995年6月29日

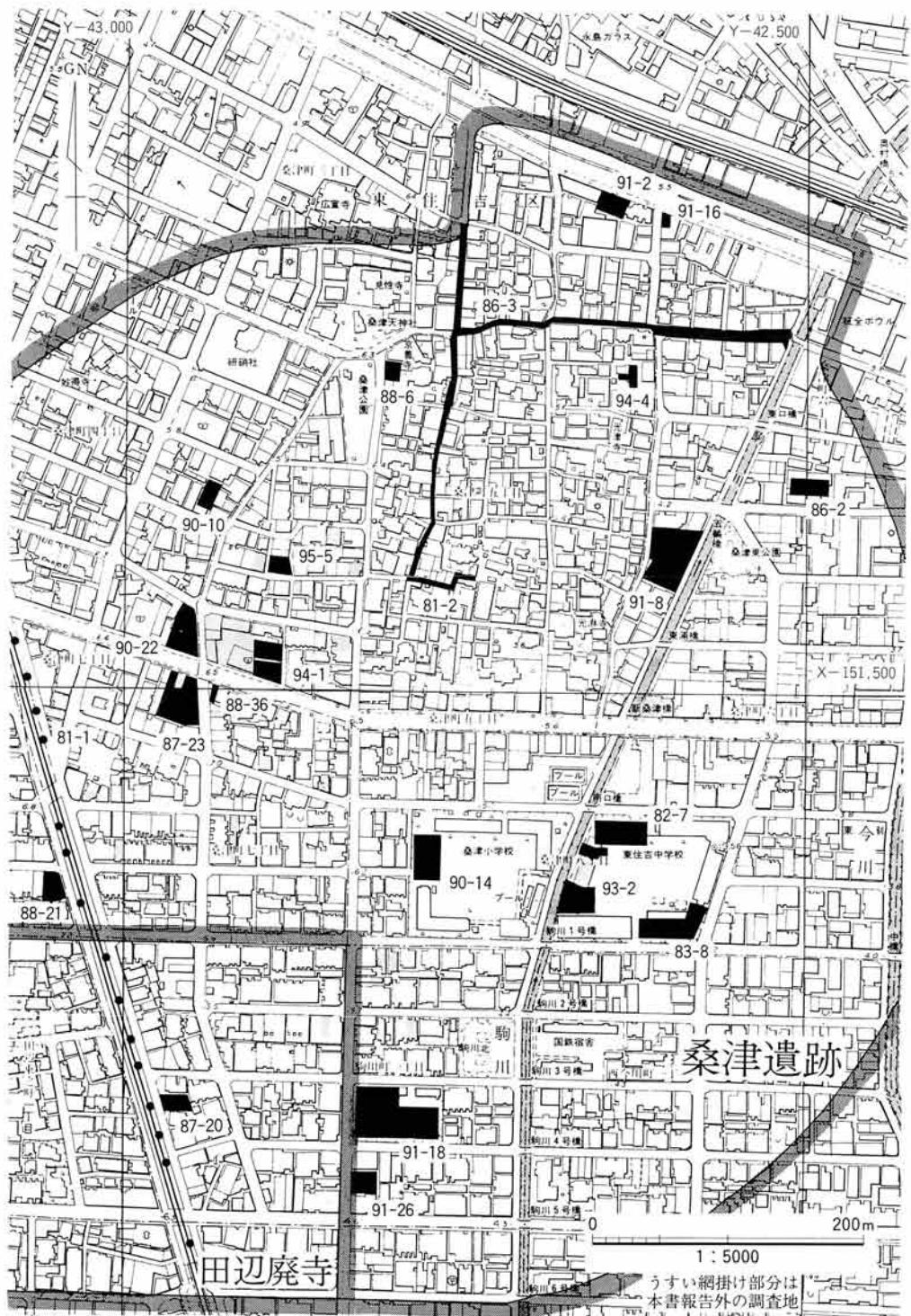


図3 今回報告する調査地の位置(大阪市総合計画局「大阪市地形図」を改変使用)

次、96-13次調査ではナイフ形石器が出土し、遺跡の始まりを後期旧石器時代にまで引き上げた。後者の調査ではプライマリーな地層層準からの出土が確認されており、今後の調査に及ぼす影響も大きい。続く、縄文時代の石鏃は遺跡内の広範囲で出土が確認されている。しかし、この時代の土器は未確認である。

弥生時代に関しては94-16次調査で発見された前期の遺構がある[田中清美1995・1996]。調査地は遺跡の北東端に位置しており、今川の東岸で行った最初の調査である。数基の土壙のほか最大幅4.7mの大溝が検出され、環濠の一部と推定された。この調査に基づき、桑津遺跡の北東縁から瘤状に突出するかたちで杭全遺跡が新たに付加えられることになった。92-14次調査で見つかった大溝も注目される[田中清美1992]。この溝は規模や周辺調査地での遺構の状況から考えて、集落内を区画する機能をもつと思われ、環濠の可能性が推定される。この溝の延長部分に当ると考えられるものが、調査地西方約60mの94-23次でも見つかっている[高橋工1996]。95-15・19次の両調査地は、先の92-14次の大溝より北に位置しており、居住域に当ると考えられる範囲にある。調査の結果はその推定に漏れず、多数のピット・土壙のほか井戸が検出された。95-19次の井戸からはミニチュア土器や土製品に加え口縁部に打ち欠きのある土器が出土し、井戸に係わる祭祀の一端がうかがわれた[久保和士1996a・1997b]。95-15次の井戸については、埋土を水洗したところ、多量の炭化米や動物遺体が採集された[久保和士1996b・1997a]。93-2次・96-13次は東住吉中学校内での調査で、82・83年度の方形周溝墓に加え、さらに数基の周溝墓を確認した。遺跡西部の93-26次調査では弥生時代後期の竪穴住居を2棟、古墳時代後期の竪穴住居を2棟確認した[松本啓子1995]。94-4次調査では飛鳥時代の溝から、家形埴輪を含む多量の埴輪が出土した[久保和士1994]。

過去65年にわたる調査の中で遺跡像のアウトラインは見えてきたものと思われる。しかし、これまでに調査した面積は遺跡全体の2%にも満たない。今後さらなる調査成果の蓄積が必要であることはいうまでもない。

2) 今回報告する調査

本書では81年度から95年度にかけて行われた23件の調査について報告する(表1)。これはこれまで桑津遺跡で行ってきた調査件数の半数に満たないが、面積の上では75%を占める。調査地は遺跡のほぼ全域に散漫に分布しているが、東住吉中学校内で行った3調査のほか、遺跡北西部の4件の調査がやまとまったものとしてある。調査面積にも大小あり、

小規模なものは 18m^2 から、大規模なものは $1,392\text{m}^2$ に及んでいる。

i) 桑津遺跡の層序

桑津遺跡では表土直下が沖積層下部層～低位段丘構成層、いわゆる地山層という調査地点も少なくない。今回報告する調査の中の91-2・16次、94-1次調査地はそうした状況であった。その一方で、何層もの地層が存在する調査地も多い(表2)。このような調査地では各調査ごと層名が与えられ、統一の図られたものではなかった。本書では報告する各調査の層序を整理し、一本化した呼称を用いることにした。これを現時点での桑津遺跡基本層序と呼ぶ(註1)。基本層序は桑津1～7層に区分される。区分にあたっては、層相とともに包含する遺物を重視した。

桑津0層：現代の客土層である。大半は1929年からの土地区画整理事業に伴うものと思われる。

桑津1層：上記の土地区画整理以前の表土および作土である。色調は暗灰色・黄橙色・褐灰色などであり、土質も粘土質シルト・細粒砂・砂礫など変化に富む。

桑津2層：肥前・美濃などの日本製陶磁器を含む近世の包含層である。調査地によっては2、3層に細分されている。桑津1層同様、色調・土質は一定しない。

桑津3層：近世の陶磁器を含まず、瓦器・瓦質土器を確認できる地層である。平安時代の終わりから室町時代の地層に該当する。本層の残る調査地は比較的多い。褐色系のシルト～シルト質粘土の層相を示す。82-7次、86-2次、90-14次の各調査では、同層内に水成層がみられた。

桑津4層：瓦器・瓦質土器出現前の平安時代の遺物包含層である。黄褐色系のシルト～シルト質粘土からなる。今回の報告の中では90-10次調査地でみられた。

桑津5層：飛鳥・奈良時代の包含層である。東住吉中学校内の82-7次、83-8次、93-2次では暗紫黒色～黒褐色を呈しており、土質には粘土・シルト・シルト質中粒砂といった違いがみられる。そのほかの調査地では褐色系のシルト～粘土である。

桑津6層：弥生時代後期から古墳時代にかけての包含層である。東住吉中学校内の3調査地内においても層相にいくらかの違いがある。全般的には暗紫黒色～褐色で、砂質シルト～粘土質シルトからなる。極細粒砂～細粒砂となるところもある。

桑津7層：弥生時代中期の包含層である。今回報告する調査地では遺構の埋土としてみられるだけであった。環濠の一部と思われる大溝の見つかった92-14次では、砂礫を含む黒褐色シルト～粘土の本層が遺存していた。

表2 桑津遺跡各調査地の地層

屢序 \ 次数	81 1 次	81 2 次	82 7 次	83 8 次	86 2 次	86 3 次	87 20 次	87 23 次	88 6 次	88 21 次	88 36 次	90 10 次	90 14 次	90 22 次	91 2 次	91 8 次	91 16 次	91 18 次	93 26 次	94 2 次	94 1 次	95 4 次	95 5 次
屢序																							
桑津1層	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●				●	●	●	●	●	●	●
桑津2層		●		●	●	●			●	●			●		●	●	●	●	●		●	●	
桑津3層		●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●		●		
桑津4層												●											
桑津5層	●		●	●					●	●	●	●	●	●	●				●				
桑津6層			●	●	●	●	●												●				

●印は確認された地層

地山層：沖積層中部層～低位段丘構成層にあたる。今回は仮にこの呼称を用いるが、本層はさらに細分が可能である。隣接調査地で有茎尖頭器・ナイフ形石器の出土している93-2次では、地山層以下が3層に区分されて、上部から灰黄褐色砂質シルト、含砂黄褐色シルト質粘土、淡黄色シルト質砂礫～中粒砂となる。96-13次調査によれば、この灰黄褐色砂質シルト層は沖積層中部層から低位段丘構成層最上部までが風化・土壤化したもので、82-7次の有茎尖頭器の出土層準もこの層に当ると推定されている。

ii) 主要な遺構と遺物

桑津遺跡では後期旧石器時代から人間活動の痕跡をうかがうことができる。今回報告する調査の中では、縄文時代草創期の有茎尖頭器がもっとも時代のさかのほる遺物で、82-7次、91-18次、91-26次の各調査で1点ずつ出土した。82-7次の例はチャート製、91-18次の例はサヌカイト製の完形品であった。縄文土器は未確認であるが、形態から早～晩期のものとみられる石鎌がある。

続く、弥生時代の遺構・遺物が本書の中心である。日常生活に関連する遺構として、竪穴住居が94-1次に、井戸が82-7次、90-14次、95-5次に検出されている。桑津遺跡ではまだ数棟の竪穴住居しか確認されておらず、94-1次の例は注目される。一方、90-14次の井戸からは多量の土器・土製品などのほか、石器・木製品・獸骨が出土した。見つかった土器は、この遺跡における弥生時代中期後半の土器様相を理解する上で重要な

資料といえる。方形周溝墓は6件の調査で確認され、その可能性のあるものも含めて22基以上が報告の対象となっている。その中で、東住吉中学校内の3件の調査地(82-7次、83-8次、93-2次)からは墳丘の拡張過程のわかる例を含む多数の方形周溝墓が検出され、広範囲に広がる墓域の存在がうががえた。一方、90-22次では当遺跡の方形周溝墓の中では規模の大きなグループに属する墓が確認され、周囲の周溝全体がほぼ検出された。これらの方形周溝墓は、みな畿内第Ⅱ様式から第Ⅳ様式に属するものである。埋葬主体は93-2次で土壙墓と推定されるもの、87-23次、88-6次で土器棺墓が確認されているが、現在までのところ木棺墓は未確認である。注目される遺物としては90-14次、93-2次で出土した綾杉文、矢羽根形文のある器台をはじめとする東部瀬戸内系の土器や近江系の土器、95-5次の井戸と推定される遺構内から見つかった弥生時代中期のガラス小玉がある。

古墳時代の遺構については87-20次で見つかった中期の竪穴住居を報告する。桑津遺跡において古墳は未発見であるが、その存在をうかがわせる多量の埴輪がある。86-2次ほか4件の調査で出土した埴輪を本書に掲載する。94-4次では棟木の表現のある家形埴輪の屋根部が見つかっている。87-23次、88-6次では初期須恵器の出土例がある。前者からは有蓋高杯・把手付椀・繩蓆文のある土器が出土している。この有蓋高杯は脚部に菱形の刺突文が施されたものである。韓式系土器(註2)も87-20次、91-18次調査にみられた。

飛鳥・奈良時代に関しては、6件の調査で掘立柱建物が確認されている。なかでも91-8次で検出された6棟の建物群は、整然とした配置をもつ注目すべきものであった。この調査地では飛鳥時代の井戸も1基あり、そこから出土した木簡は、我が国最古の呪符木簡といえるものであった。遺跡南部から南西部に位置する88-21次、91-18次調査地では田辺廃寺の創建瓦と考えられる軒瓦が出土した。そのほか、94-4次の溝から出土した鉱滓・炉壁も当遺跡における生産活動を考える上で重要であろう。

平安時代の遺構には90-22次の掘立柱建物、91-18次の井戸や池状の凹みがある。遺物としては88-6次の「田口」墨書き土器が、「住吉郡田辺郷」との関連で注目されよう。

鎌倉・室町時代の遺構としては83-8次で轍、86-2次では旧西除川の西肩と考えられる深い落込みが検出されている。

江戸時代の遺構には、86-2次、88-6次で桑津環濠集落の濠、86-2次、91-18次の井戸などがある。91-18次調査地では池状の遺構も検出されており、作土層内から丁銀を模した型押しの土製品が出土している。

近・現代に係わるものとして、93-2次の土取り穴、94-1次の防空壕がある。この防

空壕は鉄筋コンクリート造りの頑強で大規模なものである。

以上、今回報告する内容についてあらましを述べた。序文・例言につづく凡例にはおもな遺構・遺物の一覧表、巻末には索引を用意した。これらにより必要な情報を適宜引出して利用いただければ幸いである。

註)

(1) ここでは桑津遺跡の「基本層序」という名称を用いたが、平野区長原遺跡では「標準層序」が使われている。

今回、「標準」という用語を避けたのは、本書での作業がまだ基礎的なものにすぎないこと、特に弥生時代以前の層序に未確定の要素が多いことが理由である。今後の調査により、桑津遺跡においても、長原遺跡の層序と整合的に対比される「標準層序」が確立されていくことになる。

(2) 「韓式系土器」の名称は〔植野浩三1987〕の規定に準じて用いる。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 KW81-1次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査個所は桑津遺跡および田辺廃寺の推定範囲内にあたる。近鉄南大阪線阿倍野橋駅～針中野駅間の立体交差化に伴い、工事予定地内(北田辺2～4丁目)における遺跡の遺存状態を把握するために調査を行った(写真1)。調査は1981年5月13日～21日に実施した。調査では1.0m×1.2mの試掘場を図4に示すように線路敷内の上り東線路側に3箇所、下り車線側に12箇所設定し、先に上り車線路側から調査をはじめた。

2) 調査結果

ほとんどの試掘場において、洪積層の上に直接表土層(桑津1層)が堆積するといった状況で、古代以前にさかのぼる明確な遺構はなく、出土遺物もごく少量であった。線路敷内は道路面よりも50cmほど低く、洪積層の上面は線路敷内では完全に削平されていた。また、道路部分も1929年より始まった土地区画整理事業によって洪積層の上面が削平されていると考えられ、桑津1層の直下に地山である洪積層が確認された。

No.5地点では、西寄りに、近世末から近代にかけての溝状の落込みの東側肩部が検出された。この試掘場では、地山が道路面下92cmで検出された。この上層の堆積層はすべて桑津1層とみられる地層であった。



写真1 KW81-1次現場作業風景

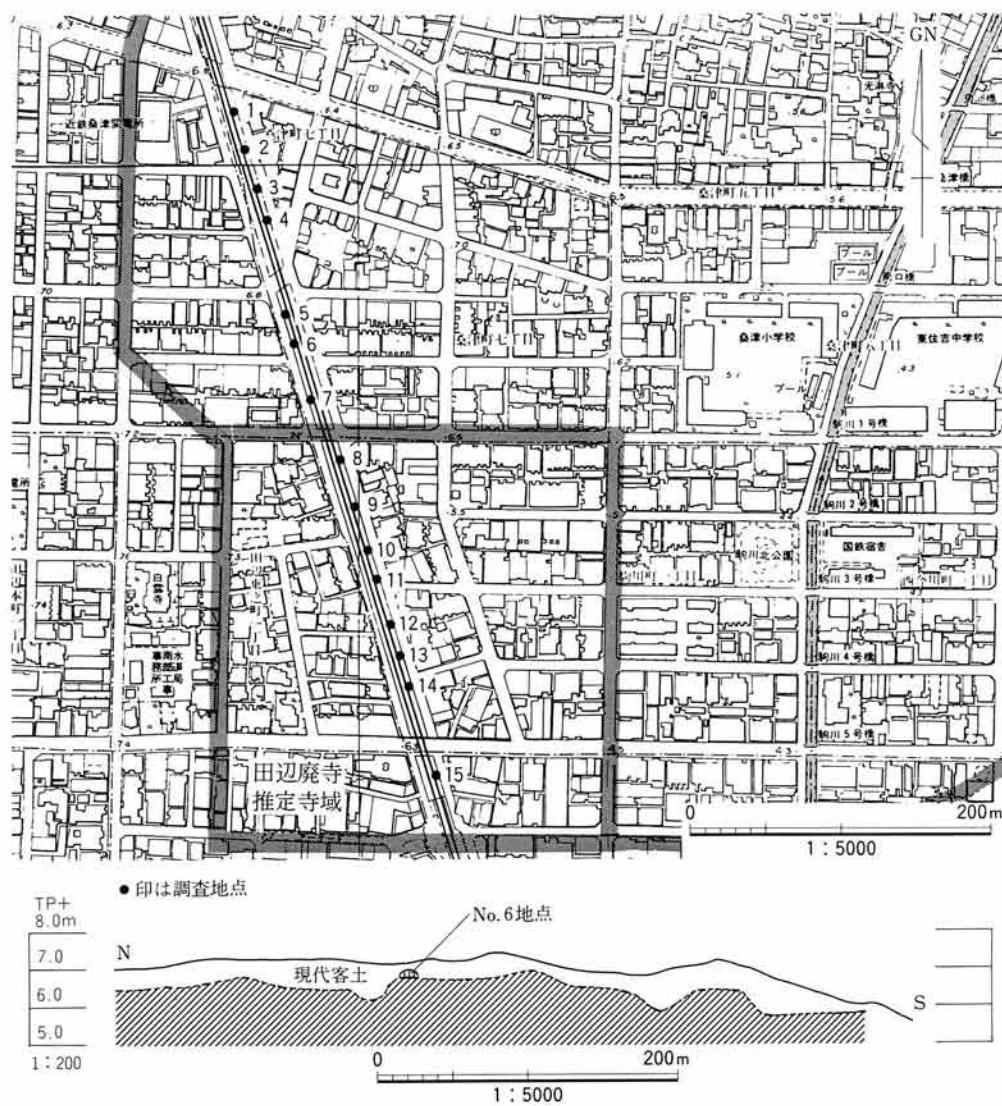


図4 KW81-1 次調査位置および断面模式図

No 6 地点では道路面下約20cmに暗茶褐色粘質土の遺物包含層が遺存していた(図4)。この層は厚さ20cm程度で、土師器と考えられる土器が2片出土したが、小片であるため時期を決定するのは困難であった。層相から桑津5層に相当するものと思われる。

ほかの地点では、道路面下0.2~1.0mまで桑津1層が堆積し、その下に洪積層が堆積していた。No 3 地点で出土した遺物を図5・写真2に示す。1は桑津1層基底面の落込みから出土した丹波焼壺である。2は桑津1層出土の京・信楽焼の壺である。

田辺廃寺は北田辺駅付近と推定されており、調査範囲内に基壇などの遺構が残存しているのではないかと考えられたが、そのような痕跡すら認められなかった。

桑津遺跡の弥生集落の中心部は、今回の調査個所より北東方向に離れた所に推定されている。この付近は集落の縁辺部に当るためか、遺構・遺物は検出されなかった。

3) 小結

以上のようにこの調査では田辺廃寺および弥生時代の集落に関連する遺構・遺物は検出されなかった。それが、寺域あるいは集落域の範囲外に当るためか、それとも上部が削平され消滅したためかは断言できない。

田辺廃寺については、伽藍配置はおろか寺域などについても不明であるが、現在の近鉄南大阪線の工事に際してかなりの古瓦破片が発見されたり、付近の土地区画整理や土取り工事等によっても多数の古瓦が出土している。古瓦が集中して発見された地点は、土取り工事以前には道路よりも1mほど高くなっていたらしく、瓦を包含する層が30cm以上に及ぶ所もみられたという[山本加三1926]。瓦は7世紀後半から12世紀頃までのものがみられ、特に7世紀から8世紀にかけて製作されたものが多い。これら瓦の中に2点だけ重闊文の軒丸瓦が発見されている。この瓦当文様は難波宮址より多く出土するものに類似する。この田辺廃寺については文献史料に記載もなく、実態不明といわざるを得ないが、瓦の出土量などを考えると寺院址の存在は疑いようのないものと推測される。

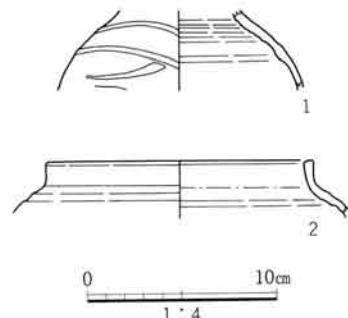


図5 No.3 地点出土遺物

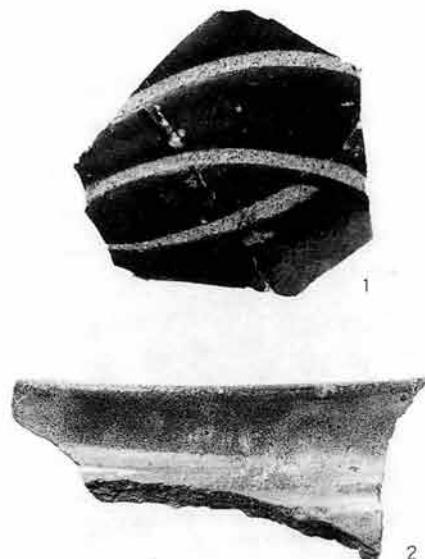


写真2 No.3 地点出土遺物

第2節 KW81-2次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(桑津町3丁目)は桑津小学校の北約250m地点にあり、近世桑津の環濠集落内に位置する。本調査地に北接した個所で、1974~75年にかけ、大阪市下水道整備事業に伴って大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会が調査を実施している。この調査では奈良・平安時代に属する掘立柱建物の柱穴が検出されており、本調査地でも、先の調査と同様の遺物や遺構が検出されることが予想された。

調査はガス管の埋設工事に伴うものである。その配管個所がすべて道路上にあることや民家に接することから、全長62mの工事区間を、I~III区に分割し(図6)、I区の調査から着手することになった(写真3・4)。調査期間は1981年7月28日~8月1日、調査面積は46m²であった。なお、配管工事は全体の調査が終了した後に行われた。

2) 調査結果

この調査では調査範囲が幅0.6m、長さ62mと細長いことから、地層の観察や遺構の検出作業については困難をきわめたが、後述するような遺構や遺物を検出することができた。

以下に、調査地区の基本的な層序と、検出したおもな遺構や出土遺物について説明する。

調査地の層序は図6下部に示す通りである。

桑津0層：アスファルト道路面以下の現代整地層である。

桑津1層：シルト含みの黄橙色砂礫。明治時代から現代にかけての道路面をなす整地層である。

桑津2層：上層はシルトを含んだ暗青灰色砂礫、下層は茶灰色シルトである。

桑津3層：砂を含んだ暗茶褐色粘土である。

桑津3層の直下が地山層と思われるシルト含みの黄橙色砂礫である。以上の各層のうち、桑津3層の暗茶褐色粘土以外には江戸時代の瓦・陶磁器が含まれてい



写真3 KW81-2次II・III区調査風景

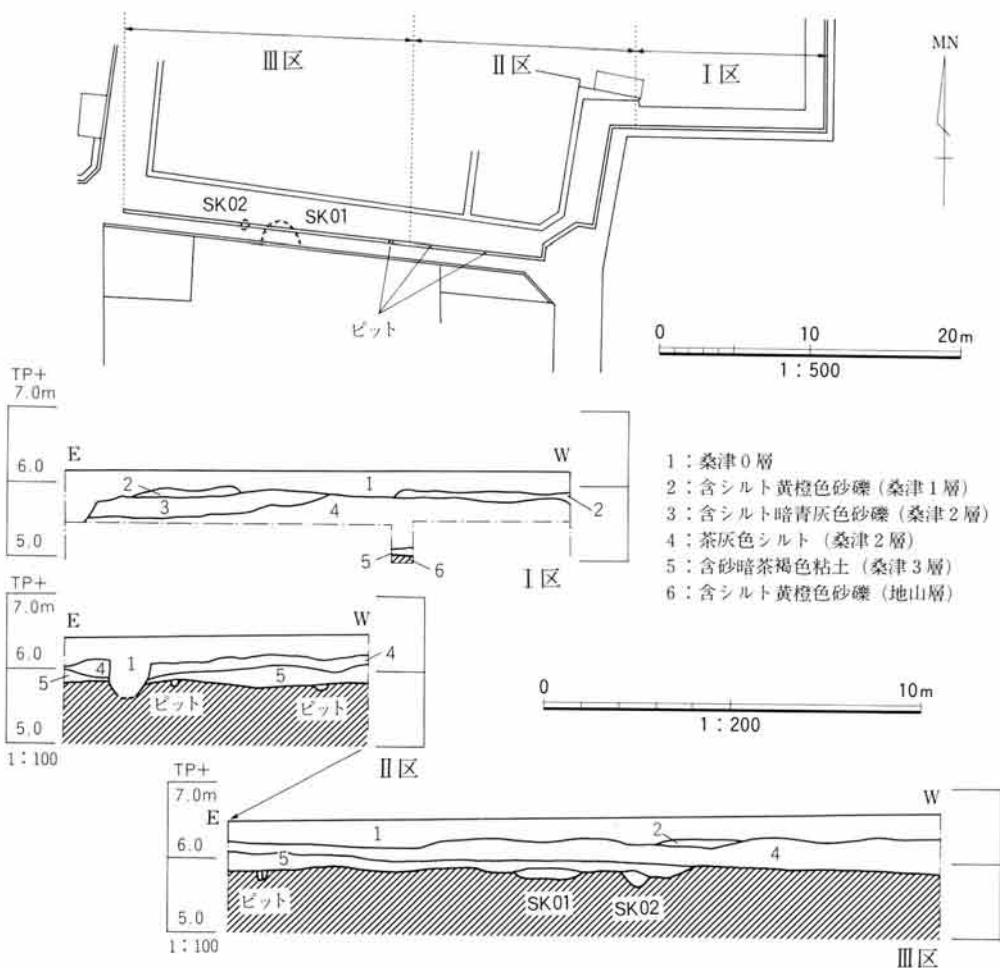


図6 KW81-2次調査位置および断面図

た。桑津3層からは瓦器・瓦質土器・瓦のほか、弥生土器・須恵器・土師器が若干ながら出土した。

次に遺構面と遺構について述べる。この調査では地山層の上面でピット・土壙が検出された。地山層は標高5.5~6.0m前後にあり、シルト含みの砂礫層であることから、低位段丘である上町台地上部の堆積層と



写真4 II・III区調査風景

思われる。この層は調査区の西方から東方に向って徐々に低くなっていた。遺構は地山層の標高がわずかに高くなるⅡ・Ⅲ区にみられた。おもな遺構としては土壙2基(SK01・02)とピット4基があるが、規模や形態については遺構の大半が調査区外のため明確にできなかった。したがって、各遺構の性格や時期についても断定しがたい。遺構面上に堆積した桑津3層の下限が室町時代であることから、遺構の時期は室町時代以前のものといえる。

続いて桑津2・3層出土遺物について述べる(図7)。

桑津2層出土遺物は3~11・14である。3は肥前青磁の蓋、18世紀後半のものであろう。4は瀬戸染付、19世紀代に入る茶碗である。5は肥前染付の皿で、蛇目凹形高台をもち、底部内面を釉剥ぎする。18世紀後半のものである。6は18世紀後半の肥前染付碗で、底部内面にコンニャク印判による五弁花がみられる。7は肥前染付の段重である。8は肥前青磁の鉢または皿であろう。9は京・信楽系の陶器で、19世紀代のものである。10は素焼き製品で、「ふかくさ新口」の彫り込みが側面にある。これは窯元名を示すと思われ、この製品の胎土などからみて五徳の脚部と考えられる(註1)。11は瓦質土器の羽釜で15世紀代のものである。14は[難波洋三1992]による炮烙D類で、把手類別のa2類にあたる。18世紀後半の時期が考えられる。

12・13・15は桑津3層の出土遺物である。12・13は瓦質土器羽釜および擂鉢である。ともに15世紀代のものであろう。15は口縁部の破片にすぎないが、大和型の土釜と思われる。

今回の調査は狭小なトレンチ調査であったため、検出した遺構の規模や性格、時期について明確にすることはできなかった。しかし、桑津遺跡では弥生時代以降、中・近世にいたるまで集落が引き継いで営まれていたことを知る手がかりを得ることができた。本調査では、18・19世紀の遺物を除けば、室町時代の遺物がややまとまって出土した。この調査地は近世環濠集落内に位置しており、その集落の初現が中世にまでさかのほる可能性も考えられよう。

(註)

(1)この土器については、池田萬助氏(さがの人形の家)から、胎土が伏見人形と類似するもので、彫り込まれた文字が窯元を示すことであること、五徳の脚部であることをお教えいただいた。記して深謝いたします。

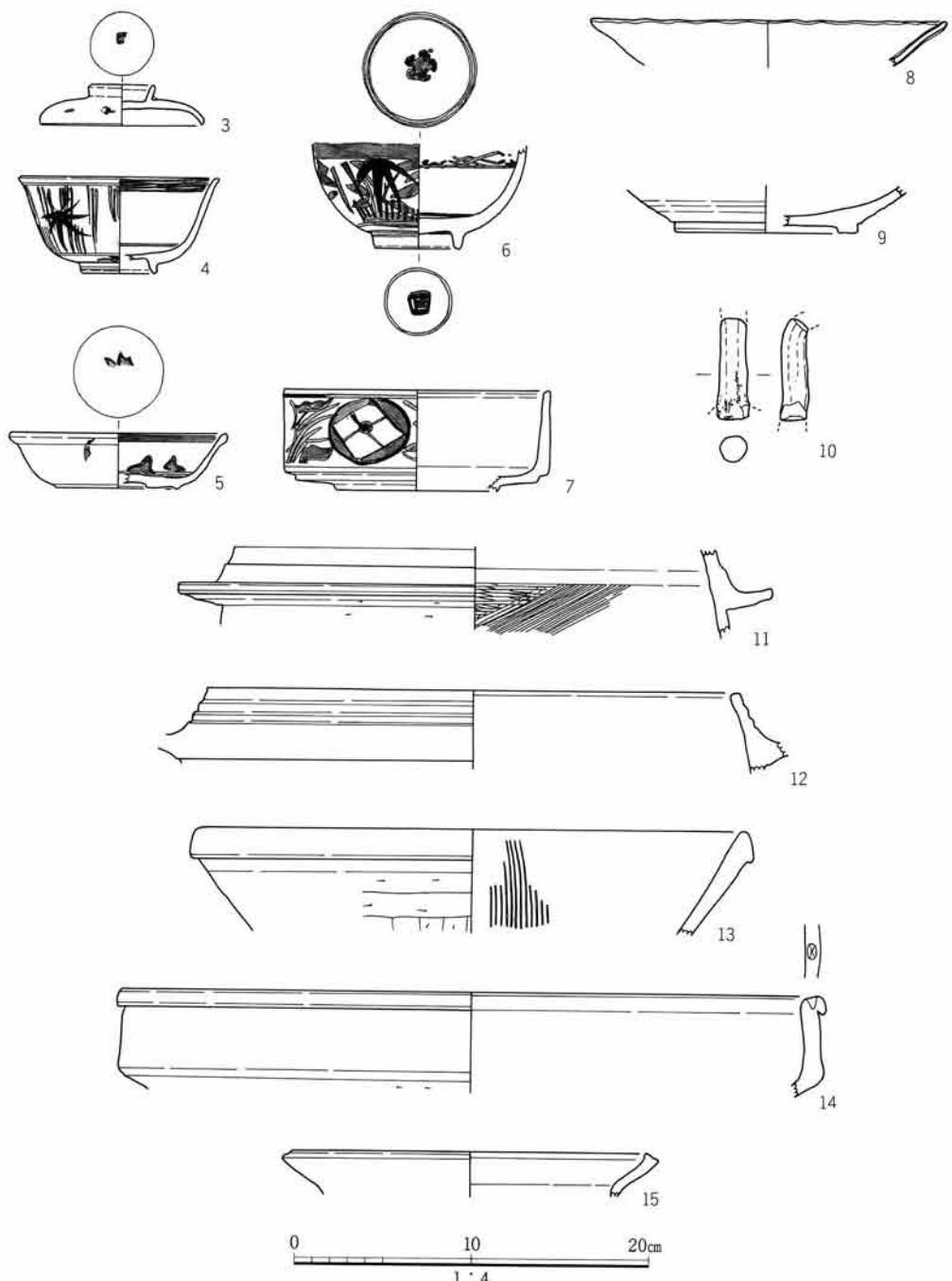


図7 桑津2・3層出土遺物
桑津2層出土遺物(3~11・14)・桑津3層出土遺物(12・13・15)

第3節 KW82-7次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は桑津5丁目17に所在し、遺跡範囲のはば中央に位置する。1937年に大阪府・京都帝国大学考古学研究室が行った調査によって、弥生時代中期の遺構・遺物が検出された地区(現在の桑津小学校々庭)から駒川をはさんだ東側にある。82年に東住吉中学校敷地の北西部(図8)に体育館の建替えが計画されたため、大阪市教育委員会と同施設課が遺跡の調査に関して協議を行った。その結果に基づき、工事の影響が直接遺跡に及ぼない体育館

中央部を除く建物基礎に限って調査を実施した。

調査区には図9に示したような4箇所のトレンチを設定した。

11月8日から重機を用いて各トレンチの表土層の掘削を予定したが、調査範囲内的一部では旧体育館の解体作業が行われていたため、校庭内にあたる南トレンチの調査から着手した。南トレンチは後述するように、桑津3層以下の保存状態がよく、トレンチのほぼ全域において弥生時代中期の遺構を検出することができた。旧体育館の撤去作業が終了した11月16日から北トレンチの調査に移った。トレンチ中央部以東は、旧体育館の位置に当ったため、基礎が地山面下まで達しており、溝が2条検出された以外はさしたる遺構は認められなかった。11月28日以降は西トレンチの調査にも着手し、12月からは弥生時代の遺構が集中して検出され

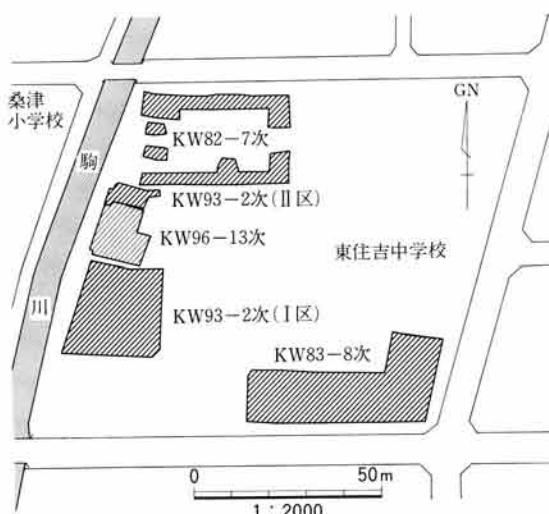


図8 東住吉中学校内の調査位置図



写真5 KW82-7次現場説明会風景

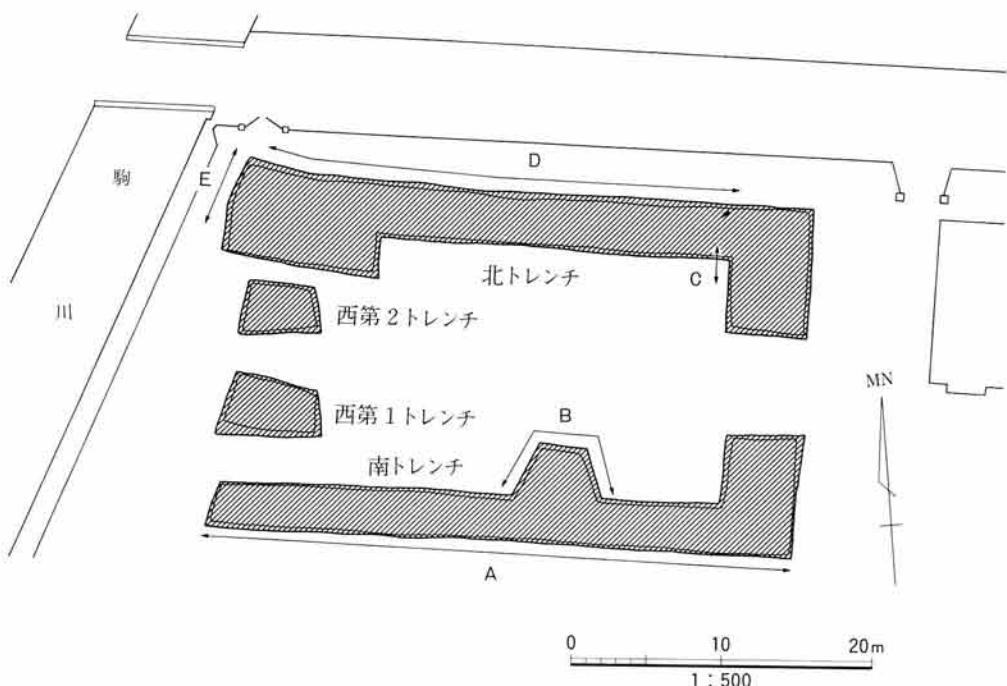


図9 KW82-7次調査地トレンチ配置図

た北トレンチ中央部以西と西第1トレンチの調査に専念した。なお、南トレンチ中央部のSE01、および北トレンチ西部の方形周溝墓2については、遺構の性格や規模を確認するため、先の二者と協議を行い、調査範囲を一部拡張した。校庭での弥生時代の遺構・遺物の発見は学校関係者の注目も集め、教職員・生徒を対象とした説明会を開催した(写真5)。延べ調査面積は360m²となり、12月8日に現場におけるすべての調査を完了した。

なお、本調査で使用した方位は磁北である。

2) 調査結果

i) 層序(図10)

桑津0層：現代客土である。

桑津1層：含砂礫黒色シルトで、東住吉中学校建設以前の表土層と思われる。江戸～明治時代の陶磁器・瓦、戦前の日常雑器やレンガ・コンクリート塊を含む。

桑津3層：2枚の作土層とこれらに挟まれる水成層からなる。上層は淡灰褐色砂混りシルトからなる作土層で、層厚は10～25cmである。調査区内に広く堆積しており、植物遺体を含み、下部が酸化第2鉄で汚染されていることから作土と判断した。本層には弥生時代

中期～室町時代にかけての遺物が含まれており、北トレンチの西部では奈良・平安時代の綠釉陶器・須恵器・平瓦類が集中してみられた。これは、近隣に寺院跡が存在することを予想させ、遺物は水田開発に伴って混ったものと考えられた。中層は茶褐～暗灰色細粒砂および礫からなる水成層で、層厚は3～20cmである。下位層を抉るように堆積した場所もある。下層は含細粒砂明褐色シルトからなる作土層で、層厚は10cmである。本層は調査区の東部に堆積し、酸化第2鉄を多量に含んでいた。9～13世紀代の遺物を含むことから、鎌倉時代の作土層と考えられる。

桑津5層：含細粒砂暗紫黒～黒褐色シルトで、層厚は約15cmである。調査区のほぼ全域に水平に堆積し、有機物や植物遺体を含む。遺物は若干の弥生時代中期の土器、サヌカイト剥片、古墳時代後期以降の須恵器が出土した以外はまったくみられなかった。また、平面では明確にできなかつたが、断面観察の結果、一部に畦畔状の起伏がみられたことから、本層は下位層を耕起した水田の作土の可能性が強い。

桑津6層：含シルト暗紫黒～黒色細粒砂・礫からなる水成層で、最大層厚は10cmである。弥生時代中期の遺構埋土および遺構面の直上に堆積する。地山面上の浅い凹地をはじめ、後世の削平を受けていない南トレンチ中央部の周辺では厚く、ラミナが発達する。

地山層：沖積層下部層から低位段丘構成層にあたり、3層に細分される。上層は黄色～黄白色の均質な粘土で、平均層厚は30cmである。上面の標高は3.8～4.0mで、調査区の西から東へ向って徐々に低くなる。下位層との層理面には凹凸が認められた。また、後述するように本層から有茎尖頭器が1点出土した。本層の堆積年代や生活面の有無を知る上で好資料となった。中層は含粘土明黄白色細粒砂・礫で、層厚は約40cm、下層は含粘土明灰白～明緑灰色中粒砂・礫である。いずれにおいてもラミナが認められた。

ii) 各層出土の遺物(図11・12、図版39・94・95)

桑津3層上層出土遺物 須恵器杯H蓋23、杯B22、綠釉陶器24・25、瓦器椀18、瓦質土器羽釜26、白磁碗19、青磁碗20・21、円筒埴輪28、平瓦31～33、石鍛35などが出土した。28は直径約30cmに復元される円筒埴輪で、黒斑の有無は不明であるが、突出したタガの形態からみて古墳時代中期でも古い時期と思われる。須恵器杯23はTK217型式、22は奈良時代のものであろう。綠釉陶器の椀は貼付け高台で、見込みに圈線が巡らされる。大型の25の高台は磨滅が激しく、もう少し高かったと推測される。釉色は、24が淡緑色、25が濃緑色でさらに濃い色の斑文がある。焼成は軟質である。10世紀頃のものであろう。瓦器椀18は13世紀中頃、26の羽釜は15世紀末頃のものである。輸入磁器では、19は11世紀後半～

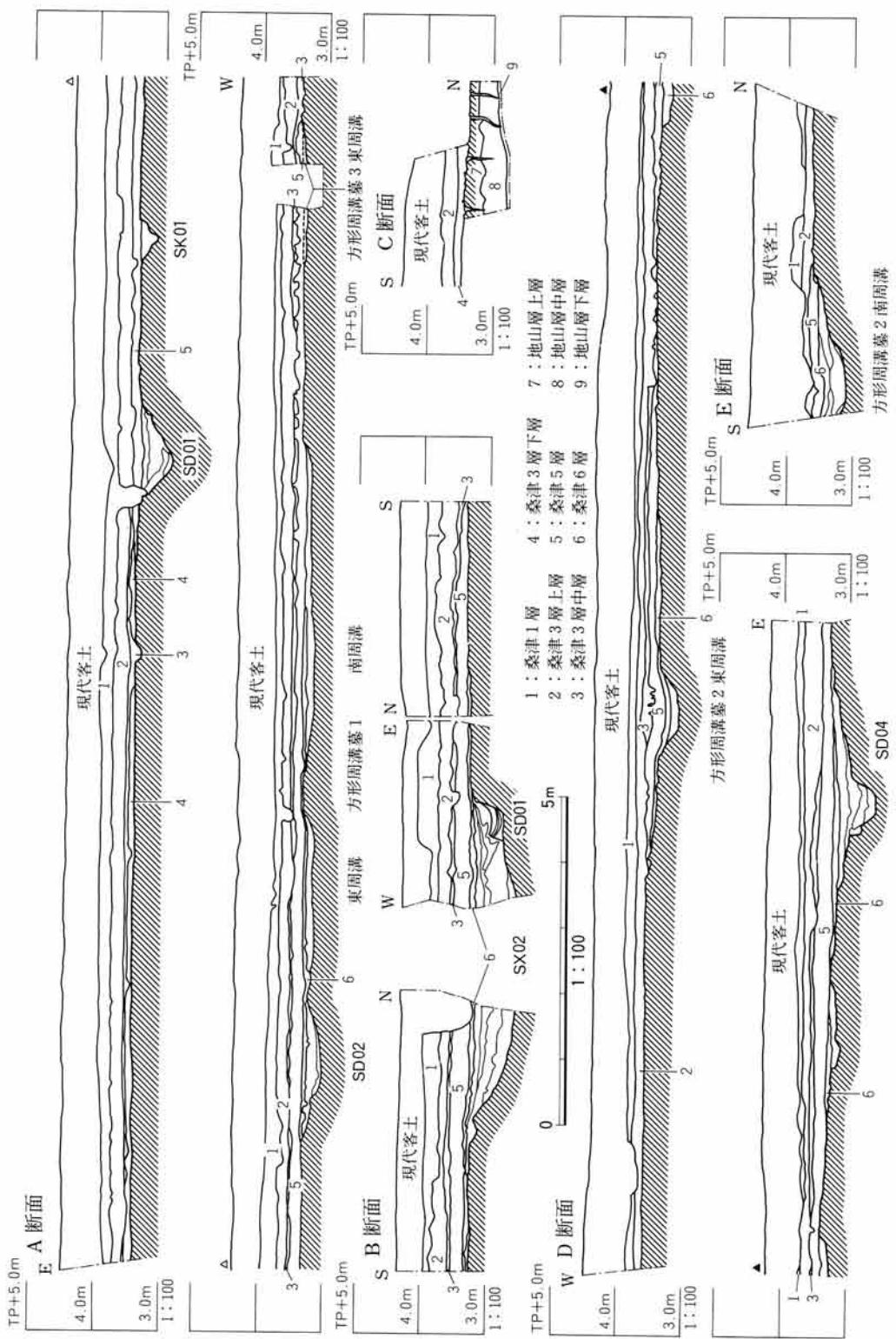


図10 調査地断面図

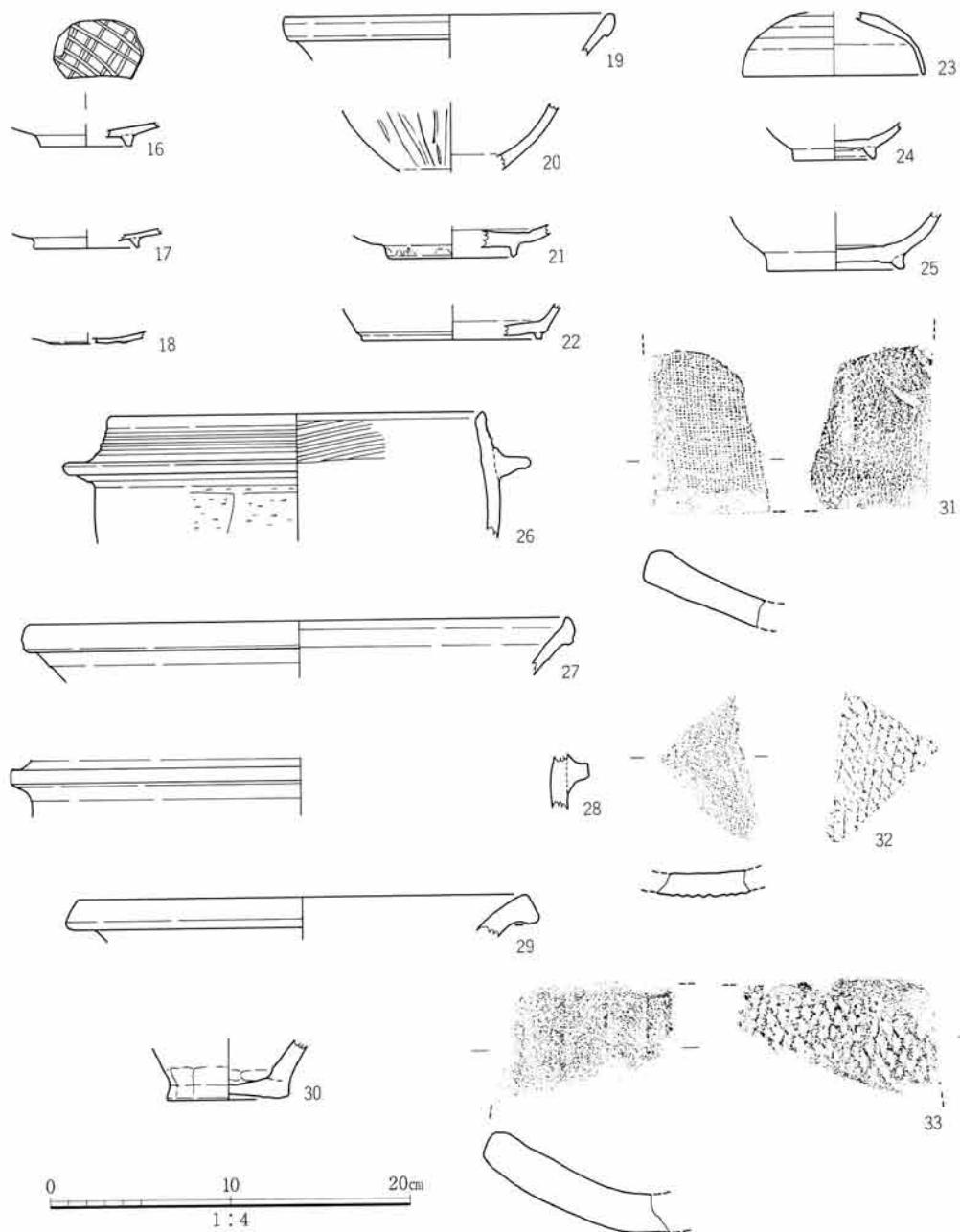


図11 各層出土の遺物

桑津3層上層(18~26・28・31~33)、同下層(16・17・27)、桑津5層(29・30)

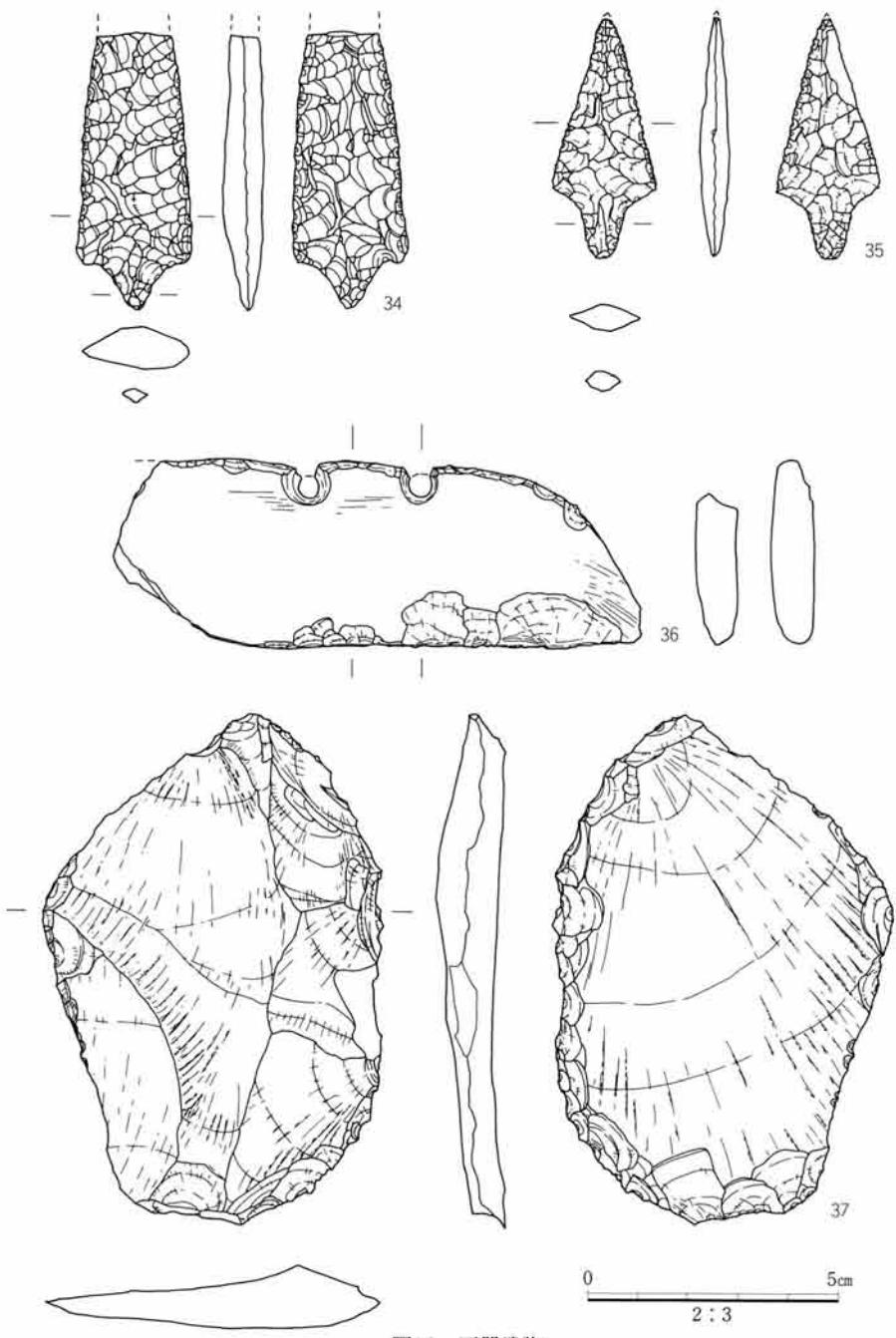


図12 石器遺物

桑津3層上層(35)、桑津5層(36)、地山層(34)、方形周溝墓3(37)

12世紀前半、20は鎧蓮弁文が施されるので13世紀前半頃に比定される。21は淡緑灰色の釉がかかる青磁碗で、高台先端から底面は露胎である。底面には墨書がみられる(図版39)。平瓦の外面のタタキメは斜格子が多いが、31は縄目である。焼成は33が土師質、ほかは須恵質である。35は凸基有茎式石鎌で、作用部の一部を欠損するが全体の形状のわかるものである。体部は縦長の三角形で、舌状に大きく突出する茎をもつ。長さ4.80cm、幅2.05cm、厚さ0.60cm、重量3.8gである。形態から弥生時代中期の石鎌と考えられる。

桑津3層下層出土遺物 瓦器椀16・17、東播系須恵器の片口鉢27が出土した。16・17は12世紀中頃、27は12世紀末～13世紀初めのものである。

桑津5層出土遺物 南トレンチ西部で弥生土器壺29、甕底部30、石庖丁36が出土した。29は畿内第Ⅲ様式古段階に属する。36は緑色片岩製の磨製石庖丁である。一部欠損するものの、直線的な刃部をもつ半月型の石庖丁といえる。背部に沿って2つの紐孔がある。穂摘具として使用された後に叩石として用いられており、刃部・背部ともに多数の敲打痕がみられる。残存長10.55cm、幅3.80cm、厚さ0.88cm、重量58.9gである。ほかに、古墳時代以降の須恵器、動物遺体としてウマ*Equus caballus*の右下顎第2後臼歯(図版100)も出土している。

地山層上層の出土遺物 有茎尖頭器34は黄色～黄白色粘土の上部から出土した。出土位置は北トレンチ東端(図13)で、標高は3.36mである。チャート製で、体部の先端を折れによって欠損する。長い体部をもち、作用部は直線的である。逆三角形の茎部をもつ。逆刺の形態は左右で若干異なり、一方の加工はやや粗い。残存長5.45cm、幅2.19cm、厚さ0.74cm、重量10.0gである。この石器に関して、[田島富慈美1993]に詳細な剥離面の検討がなされている。

iii) 遺構と遺物(図13～26、図版1～3・40～42)

本項では、地山上面で検出された弥生時代中期の遺構・遺物について記載する。遺構は図13に示したように、調査区の西側3分の2の範囲で密度が高い。遺構には、方形周溝墓、溝、井戸、土壙、ピット、落込みがある。

a. 方形周溝墓(図14～20)

方形周溝墓は3基あり、すべて調査区の西半で検出された。

方形周溝墓1(図14・15) 南トレンチ西部で東・南・西周溝を、西第1トレンチで西周溝の一部を検出した。周溝の遺存状態は桑津5層による削平のため全般的に悪い。東周溝は幅1.6m、深さ0.12m、南周溝は幅1.1m以上、深さ0.1mを検出面で測る。西周溝につい

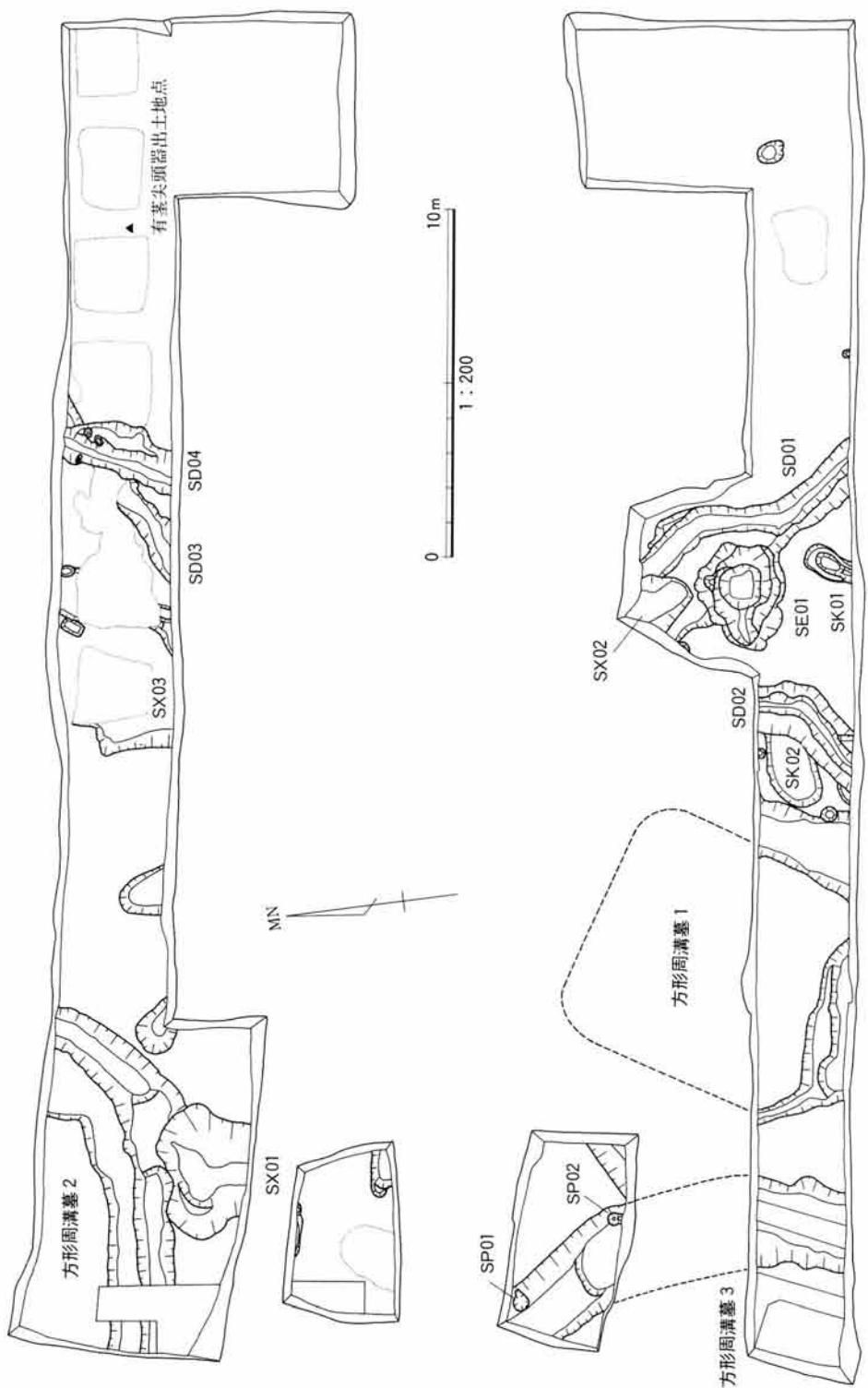


図13 調査地全体図

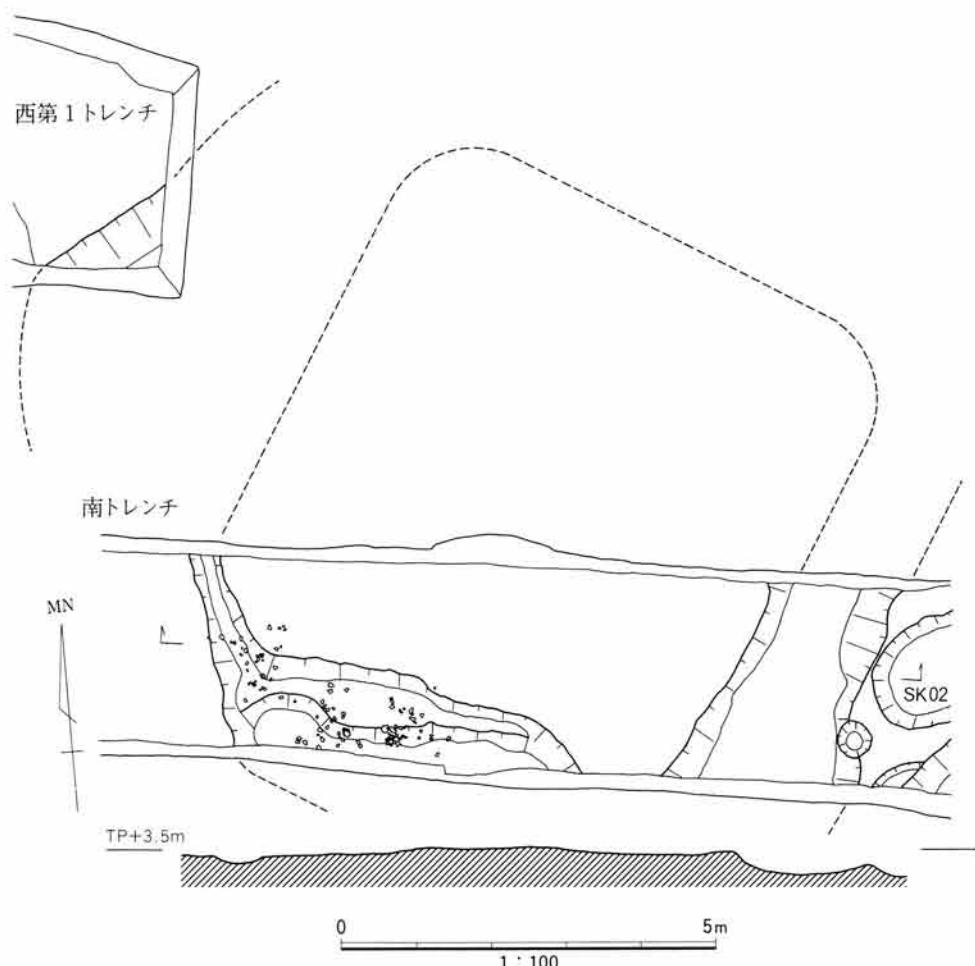


図14 方形周溝墓1実測図

ではわずか5cmの深さを残すのみであった。ただし、西第1トレンチでは幅0.8m以上、深さ0.13m以上であることを確認できた。南周溝中央と東周溝はやや深く掘られている。周溝の埋土は含砂黒褐色シルト～粘土である。また、東南と西南のコーナーの形はややいびつになっており、もとの周溝掘削面での形状を残すものではない。したがって、墳丘の規模や方位の確認も困難で、もっとも残りのよい東周溝の墳丘側ラインを基準にすれば、主軸方位はN35°Eで、東西長は7～8mくらいとなろう。遺物は南周溝から多く出土した。

広口壺38は有段口縁のもので、おもに上方に拡張する口縁部は厚い。口縁部に櫛描文をカーブを描くように施文しており、頸部には櫛描直線文が施される。ほぼ完形に復元できる細頸壺39は、細くしまる頸部から口縁部が直線的に開く。胴部は中央でやや張っている。

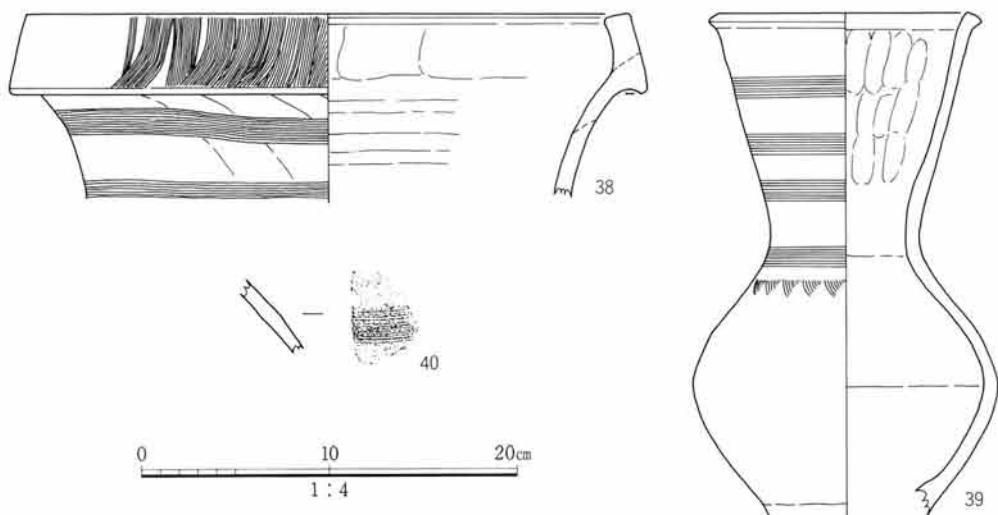


図15 方形周溝墓1出土遺物

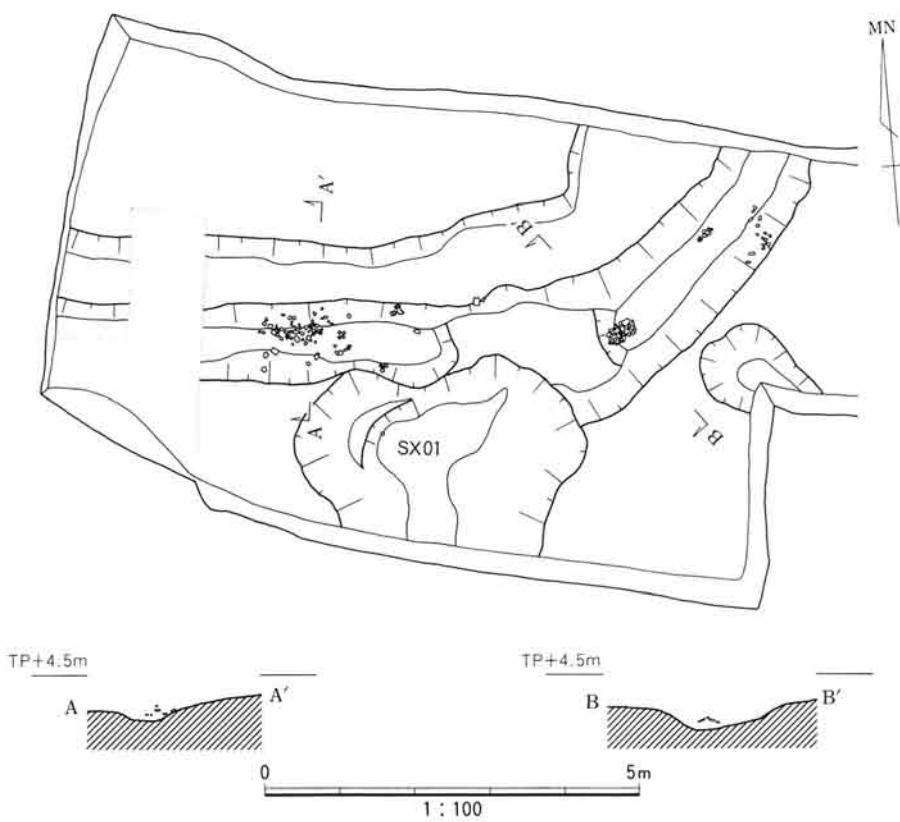


図16 方形周溝墓2実測図

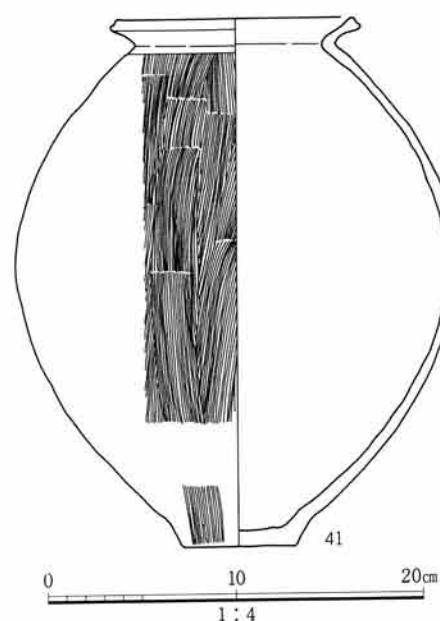


図17 方形周溝墓2出土遺物(1)

口縁端部は外方に弱くつまみ出される。頸部に櫛描直線文、胴上部に扇形文が施される。これらは畿内第Ⅲ様式古段階のものである。40の壺胴部にも櫛描文が施されている。

方形周溝墓2(図16~18) 北トレント西端で東南隅を検出した。周溝は墳丘側が段状に掘削され、その反対側は急に立上がる。断面形は逆台形で、周辺で調査した周溝墓の周溝の形態とやや異なり、また、コーナーが鈍角をなすことから、周溝墓と断定するには疑問点も残る。規模は南周溝が幅1.9m、深さ0.45m、東周溝が幅約3m、深さ0.48mである。東南コーナーの溝の底面はテラス状にやや浅くなっている。この

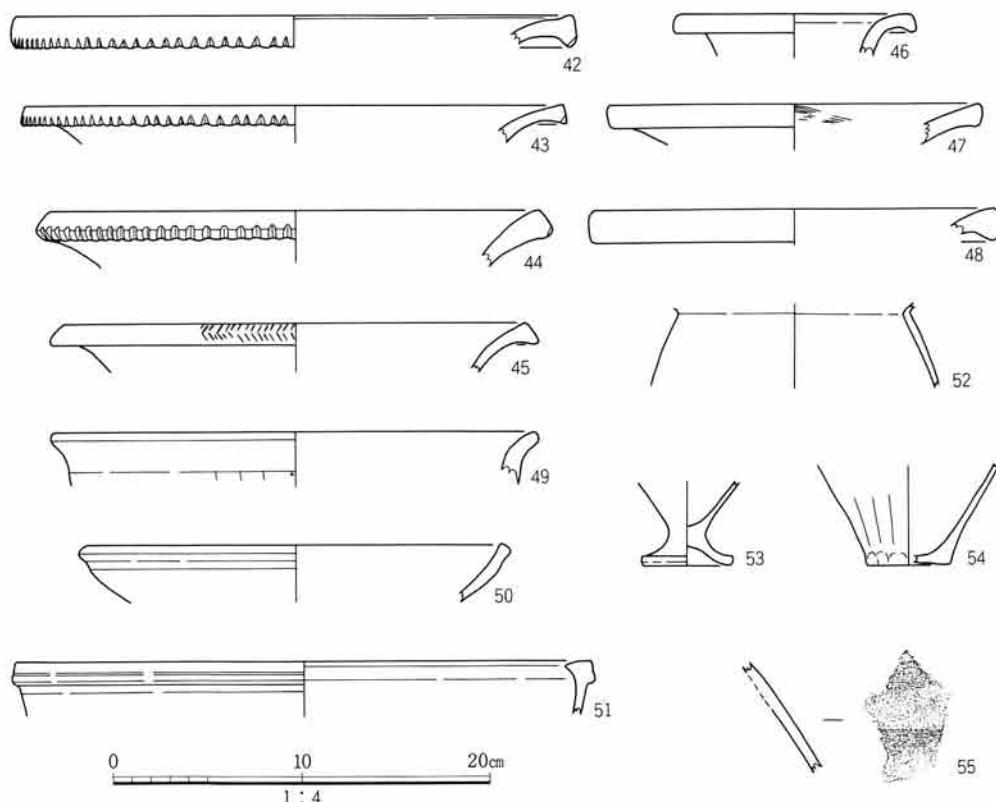


図18 方形周溝墓2出土遺物(2)

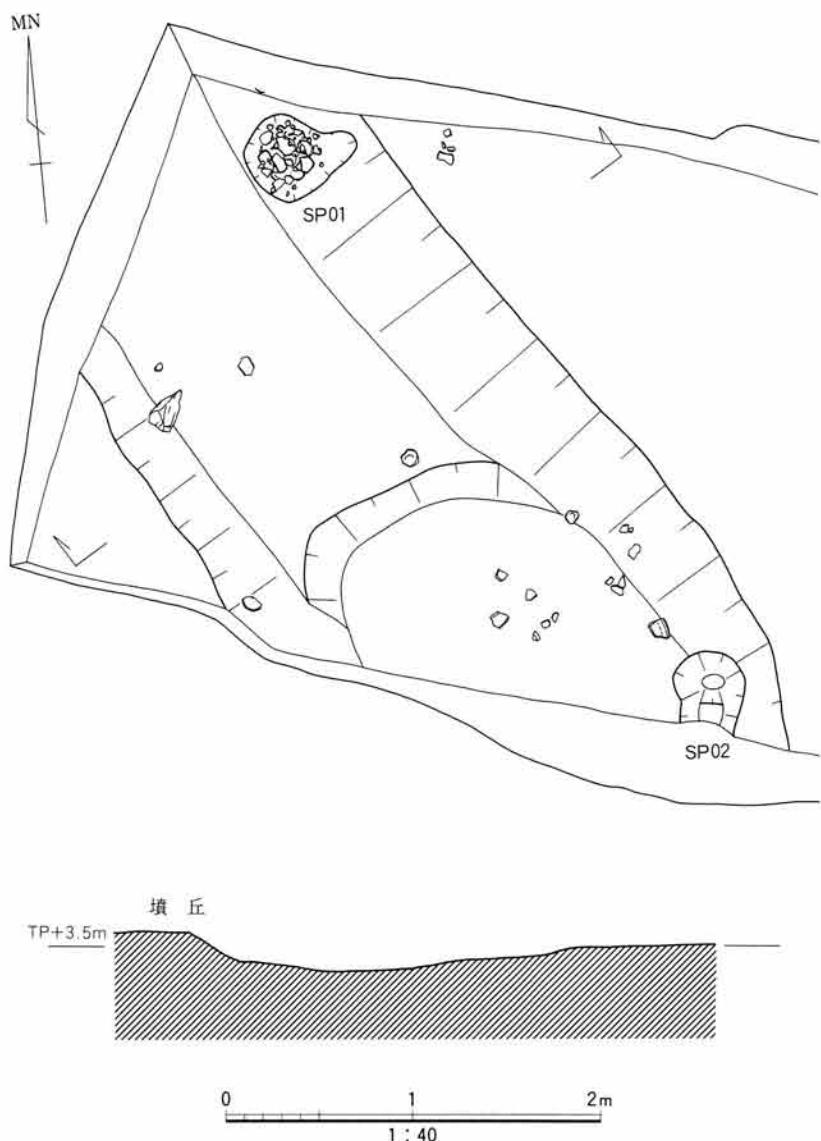


図19 方形周溝墓3 東周溝実測図

両側が深く掘られていた。この点は他の周溝コーナーにみられる特徴に一致する。埋土は桑津5層・6層の下位に黒褐～黒色粘土が堆積する。遺物は東南コーナーを挟む両側で黒色粘土層から多く出土した。特に東側では甕41がつぶれて見つかった。遺物のレベルは溝底面から5cmほど上位にあった。

41は球形の胴部から頸部を絞り短い口縁を外反させる甕である。外面は細かいハケで調

整される。畿内第Ⅲ様式古段階に属するものである。黒色粘土層からは、ほかに広口壺45、鉢51、ミニチュアの台付鉢53が出土した。45はさほど拡張しない口縁端部に矢羽根形文を施す。51は段状口縁の鉢である。周溝内の桑津5・6層からは、広口壺42・44・47・48、細頸壺46、壺破片55、鉢49・50、甕52・54が出土した。44・47の胎土には角閃石が多く含まれ、生駒西麓産の胎土といえる。これらは畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式新段階に相当する。

方形周溝墓3(図12・19・20・190) 南トレンチ西端と西第1トレンチで東周溝の一部を検出した。KW93-2次・KW96-13次で、周溝の続きが良好な状態で確認されている(図190)。しかし、本調査地では周溝の遺存状態はきわめて悪く、深さが5cmに満たない所もあった。検出面での規模は、南トレンチでは幅2.4m、西第1トレンチでは幅2.0mであった。後者では、断面形が浅いU字形でやや墳丘側の傾斜がきつく、南寄りでは段をして深くなる。また、外側斜面にピットSP01・02があり、前者の上部には広口壺59が埋められていた。ピットの深さは約20cmである。その位置から、周溝墓に関連するものであろう。上記の3箇所の調査地の成果を合成すると、両トレンチの周溝がそれぞれ南西と北東のコーナー付近にあたるものと推定される(図190)。墳丘の東西長は裾で11.5m前後で、

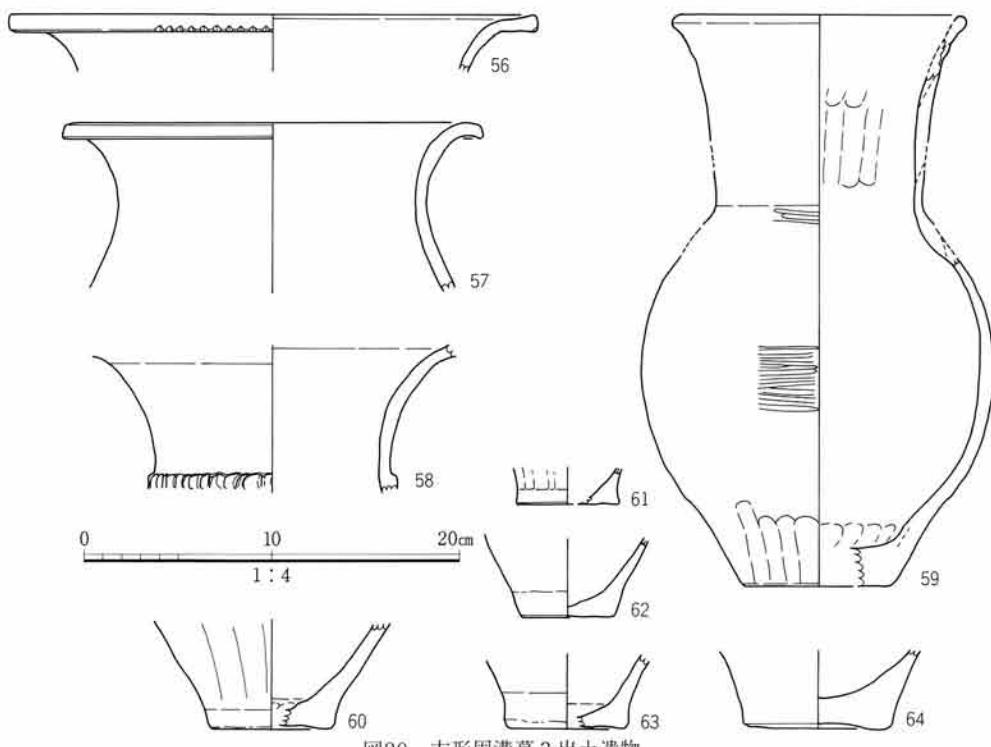


図20 方形周溝墓3出土遺物

主軸の方位は北で7°前後西に振る。遺物の出土状況は、上述した壺59のほかは、破片が散在していた。

出土遺物には広口壺56~59、壺底部60・64、甕底部61~63、スクレイパー37がある。56は口縁部の下端に刻み目を入れる。57は頸部が太い無文の広口壺である。58には指頭圧痕突帯が巡らされる。59は縦長で球形の胴部に太めの頸部が付き、口縁は緩く開く。胴部外面はヘラミガキ調整である。64の壺底部には木葉痕が付く。これらのうち、畿内第Ⅲ様式に属する58以外は、第Ⅱ様式の範疇でとらえられるものである。37(図12)は大型のスクレイパーで、下端から一方の側縁にかけて弧状に刃部を作っている。長さ10.25cm、幅6.80cm、厚さ1.42cm、重量83.5gである。

b. 溝(図21)

SD01(図21・22) 南トレンチ中央やや東寄りで検出した南東から北西方向の溝である。幅1.0m、深さ0.5m前後で、断面形はV字状や逆台形状を呈する。埋土は灰~黒褐色のシルト、細粒砂・礫の互層で水成層である。遺物は各層から土器の細片が多く出土した。SD01はSE01を避けるように掘られていることから、両者が一時的にでも併存したと考えられる。また、SX02より古いことが切合い関係から判明した。

遺物は広口壺66、壺頸部破片68、高杯67がある。66は口縁部を垂下させており、下端に刻み目を入れる。68には粗い櫛描直線文が施されている。67の脚柱部は中実である。これらは畿内第Ⅱ様式~第Ⅲ様式に属するものである。

SD02(図21) 南トレンチ中央で検出した南西から北東方向の溝である。幅1.4m、深さ0.3mで、断面形はV字状である。埋土は水成層で、上部が砂礫・炭化物・灰を含む黒褐色粘土、下部が粘土・炭化物を含む紫黒色~黒褐色細粒砂~中粒砂である。SD02もSE01の手前で向きを変えるので、これと併存した可能性がある。また、切合い関係からみてSK02よりも新しい。遺物は広口壺65が出土した。水平まで外反する口縁部は拡張されていない。畿内第Ⅱ様式のものであろう。

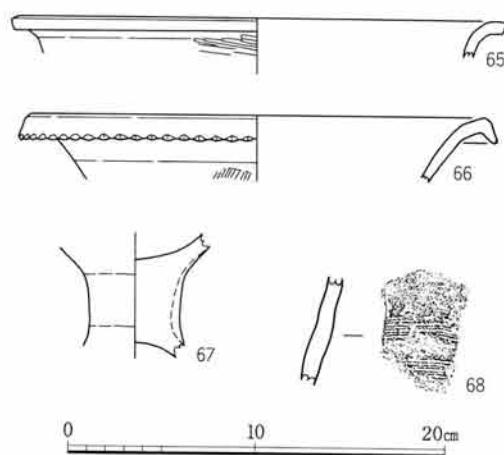


図21 SD01・02出土遺物
SD01(66~68)、SD02(65)

SD03 北トレンチ中央東寄りで検出した南西から北東方向の溝である。幅1.2m、深さ0.6mである。断面形は逆台形状で、埋土は含砂黒褐～暗灰色シルトと細粒砂を主とする砂礫の互層からなる水成層である。

SD04 SD03の西側で検出した西南西から東北東方向の溝である。幅0.8m、深さ0.15mで、断面形は浅いU字形である。トレンチ南寄りで良好に遺存し、中央は攪乱により破壊されているが、北壁際にも続きが認められた。切合の関係からSD03よりも新しい可能性がある。

上記の溝は南北両トレンチにおいて2本ずつ検出され、周囲には流水のもとで堆積したような埋土がみられる遺構はない。また、深い溝と浅い溝からなることも共通している。

そして、溝底の標高は、北トレンチの方が低い。よって、SD02と03、SD01と04は南から北へ流れる同一の溝と推測される。そして、両溝の掘削時にはすでにSE01が存在していたものと思われる。

c. 井戸(図22・23)

SE01 南トレンチ中央で検出した直径2.6～3.0m、深さ1.3mの素掘りの井戸である。掘形は底面に向って大きく2段に掘込まれており、最深部は低位段丘構成層中の透水層に達している。埋土は大きく4層に分かれる。2～4層はラミナが発達した水成層である。遺物は各層から土器片が出土したほか、4層には井戸側の可能性がある木材片、ウリ類やヒヨウタン類の種子なども含まれていた。

壺69・73は4層から出土した。69は外反する口縁端部に櫛描直線文が施された広口壺である。胎土に角閃石が多く含まれることから、生駒西麓産の胎土といえる。73は胴部の破片で、外面はヘラミガキ調整、内

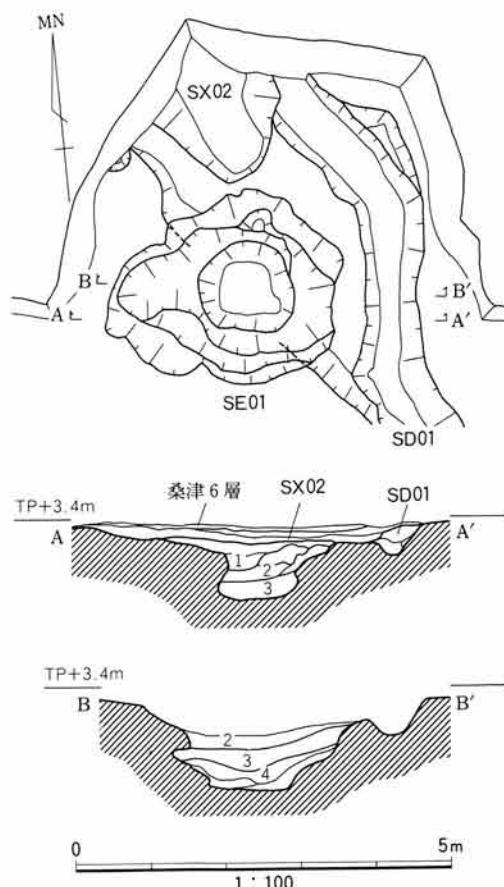


図22 SE01・SD01・SX02実測図

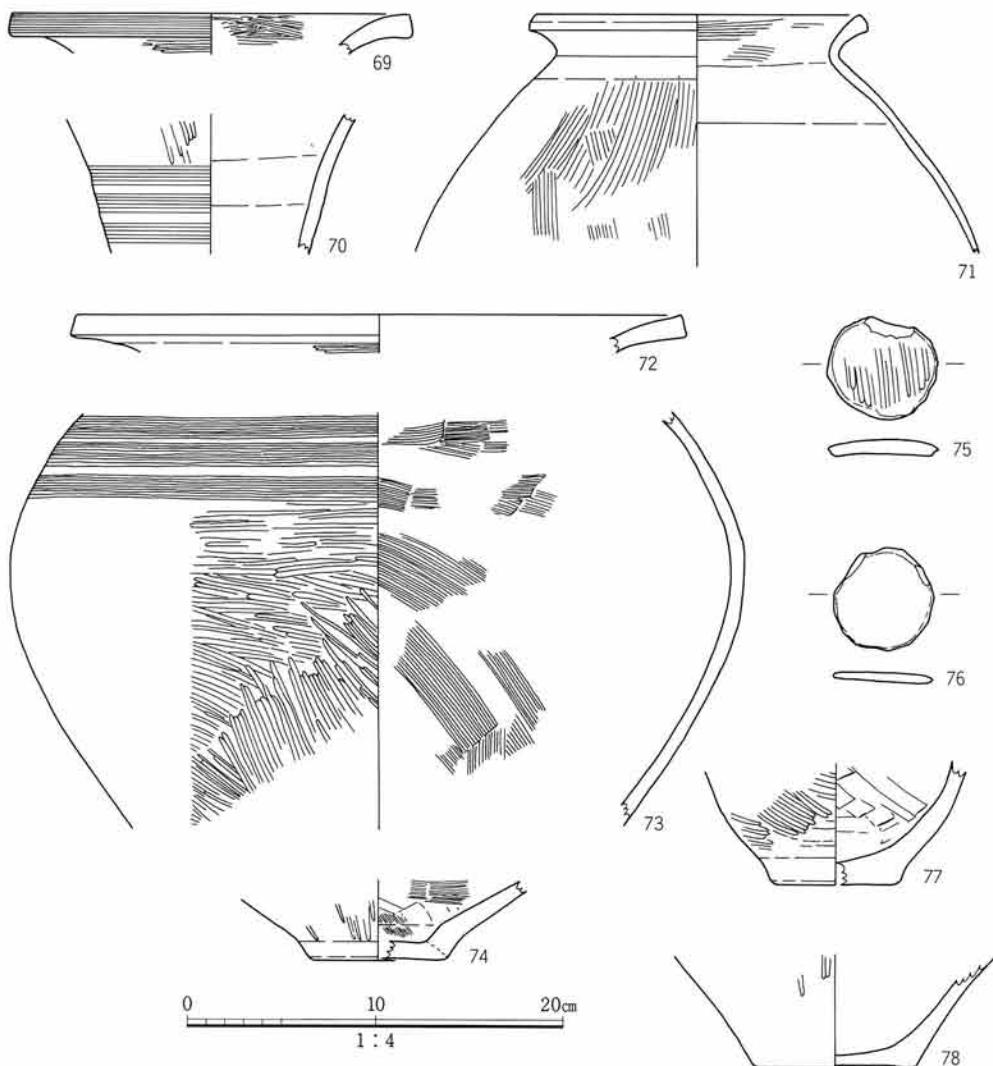


図23 SE01出土遺物

面はハケ調整である。櫛描直線文が施されている。69は畿内第Ⅱ様式、73は第Ⅲ様式古段階に属するものである。

壺70・77、土器片円板75は3層から出土した。70は頸部の破片で、外面にヘラミガキ調整の後、櫛描直線文が施されている。77は外面がヘラミガキ、内面はナデ調整の底部である。两者とも生駒西麓産の胎土である。

ほかの土器は1層から出土したもので、広口壺72、壺底部74・78、甕71、土器片円板76がある。74は外面ヘラミガキ、内面ハケ調整で、底部の粘土紐の接合状態に特徴がある。71は外反する短い口縁部の甕で、球形の胴部から頸部が細く絞られている。口縁部内面は

粗いヨコハケの後、ヨコナデ調整が施される。胴部外面は細かいタテハケ調整で、内面はナデ調整である。これらの土器は、71が畿内第Ⅲ様式古段階に属するもので、72は第Ⅱ様式にさかのほるものと思われる。

d. 土壙(図24・25)

土壙は7基を検出した。主要なものについて記載する。

SK01(図24・25) 南トレンチ中央に位置する。平面形はやや不整形ながら隅丸長方形を呈しており、規模は短辺0.8m、長辺1.5m以上である。掘形は2段に掘込まれており、底は平端な面をなす。埋土は2層に分けられ、上層が地山の偽礫を多く含む明茶褐色シリト、下層が明黒褐色粘土で、上層は埋戻し土である。底面の中央で、底に接して甕がつぶ

れた状態で出土した(図版3)。遺構の性格として土壙墓の可能性も考えられる。

甕は少なくとも2個体が認められた。79はほぼ完形に復元できた個体であり、緩く外反する口縁部をもち、胴部外面はタテハケ調整である。内面はナデ調整と思われる。胴部の最大径は口径より若干大きい。胴部の上半には焼成後の穿孔と思われる痕跡が認められる。80は口縁部のみの破片である。口縁部は79よりも強く屈曲しており、口縁部には強いヨコナデが施されているが、頸部内面には明瞭な稜はない。外面はタテハケ調整である。79よりも若干胴部が張る。これらは畿内第Ⅱ様式に属するもので、80は79よりも新しい特徴を備えている。

SK02(図25) SD02に切られる楕円形の土壙である。規模は長辺2.3m、短辺1.3m以上、深さ0.15mである。埋土は黒褐色粘土で、炭化物が多く含まれる。壺底部81が出土した。

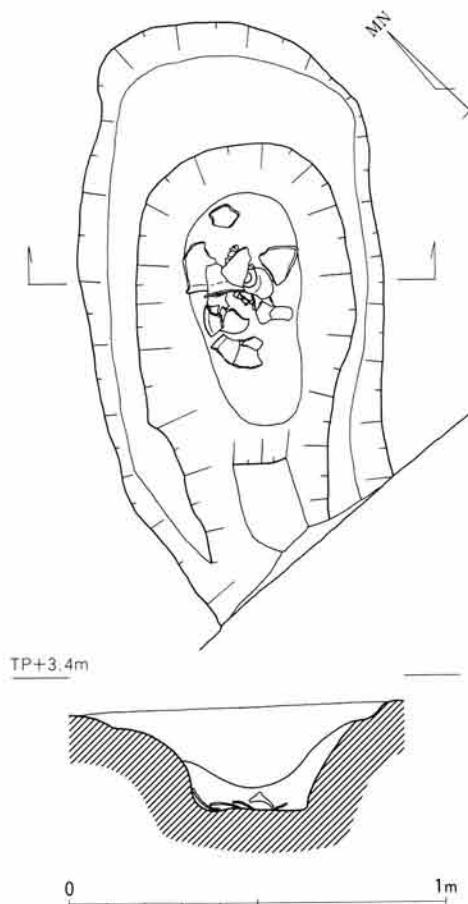


図24 SK01実測図

e. ピット

7基を検出したが、柱穴と判断できたものはない。

SP01・02は先述したように方形周溝墓3との関連性を想定できる。出土遺物は先に記したSP01出土の59のほかは土器の細片のみである。

f. 落込み(図22・26)

SX01(図26) 北トレン

チ西部で検出した平面形が不整形の落込みである。幅約3m、長さ2.6m以上、深さ約0.4mで、ほかの落込みに比して、大きくしっかりと掘られたものである。埋土は含砂黒褐～黒色粘土、含礫暗灰褐色細粒砂である。方形周溝墓2より古いと推定される。畿内第Ⅲ様式の土器が多量に出土したが、器形を示せるものは少ない。82は高杯脚部、84は甕底部の破片と思われる。

SX02(図22) 南トレンチ中央で検出した大型で深い落込みである。切合い関係ではSE01・SD01よりも新しい。平面形は南東から北西方向に細長い形状を呈しており、2段に掘られた各段の間はテラス状になる。規模は上部が幅約3m、長さ4.6m以上、深さ0.25mで、下部が幅1.6m以上、長さ2.0m以上、深さ0.5m以上である。埋土は黒褐色粘土と暗灰色シルト質砂礫の互層で、水成層と思われる。出土遺物は土器の細片のみである。

SX03(図26) 北トレンチ中央やや西寄りで検出した浅い不整形な土壙である。甕底部83が出土した。底部が外側に張り出すもので、畿内第Ⅱ様式に属するものと考えられる。

3) 小結

以上のように、本調査では桑津遺跡の中央部にあたる地域を初めて面的に調査することができ、数々の新知見を含んだ多くの資料が得られた。とりわけ、有茎尖頭器の発見と、弥生時代の墓域や居住域に関する知見は、注目されるものである。それぞれの重要性を以

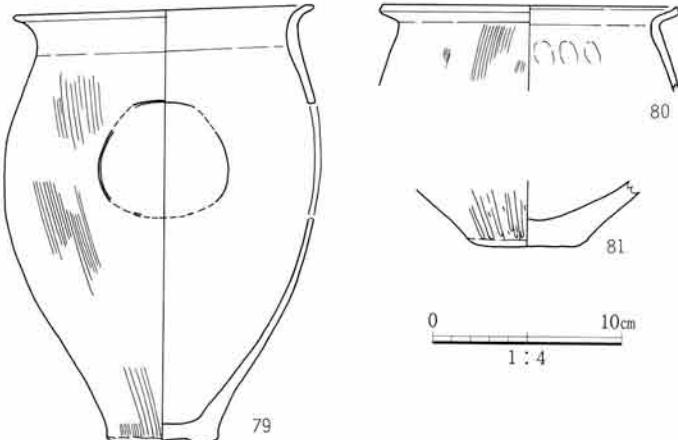


図25 SK01・02出土遺物

SK01(79・80), SK02(81)

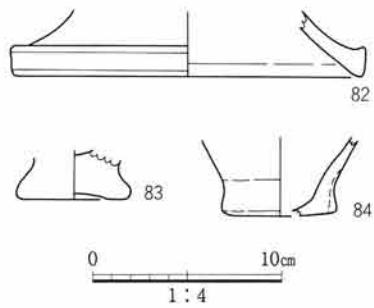


図26 SX01・03出土遺物

下に述べ、まとめとしたい。

今回、桑津遺跡で初めて有舌尖頭器が出土したことによって、桑津遺跡の年代の上限は一気に引き上げられることになった。しかも、遊離資料ではなく、プライマリーな地層中から出土したことは、本遺跡における後期旧石器時代から縄文時代草創期の様相の解明に関して、重要な手がかりとなった。その後、桑津遺跡では有茎尖頭器は新たに2点、95年には国府型ナイフ形石器も遊離資料として得られた。そして、96年には、本調査地に隣接するKW96-13次でナイフ形石器が今回の有茎尖頭器と同層準でとらえられた。このように、弥生時代だけでなく、さらに古い時代の遺跡としても注目を集めるようになったのは、本調査がきっかけとなってのことである。また、これによって上町台地の縁辺部についても縄文時代草創期の遺跡が存在する可能性がきわめて強くなったといえるようにもなった。

弥生時代の遺構に関して、これまでに1937年の調査などで居住域に関する資料が得られてきた。これらに関する地理的共通性は遺構検出面が標高5m前後を示すことである。それに対して、本調査区での標高はやや低い。これに呼応するかのように、本調査では、井戸1基、わずかなピット以外には居住域であることをうかがわせるような遺構がなく、その反面、これまで検出されていなかった方形周溝墓や、土壙墓の可能性のある遺構が複数見つかった。このようなことから、本調査地区は弥生時代中期の居住域の中心部からやや離れた地域にあたり、当時の墓域の一部に相当する可能性が考えられるようになった。また、これは地理的な高所と低所という空間構造の使い分けを示唆するものもある。これに関して、調査区中央部で検出された2条の溝は、ここでは台地斜面に平行するように掘られており、しかも溝の西側において遺構が集中することは明白で、集落あるいは墓域を画する溝の可能性も考えることができよう。このように、弥生時代の桑津遺跡の墓域と集落の構造を解明する点でも、重要な地点であるといえよう。

第4節 KW83-8次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は桑津5丁目17に所在し、遺跡範囲のほぼ中心部に位置する。東住吉中学校の校舎改築が計画されたため、大阪市教育委員会・都市整備局などとの協議の結果、1983年12月17日より約1ヶ月の期間で調査することになった。

新築する校舎は東西棟(28.7m×10.3m)と南北棟(24.0m×12.0m)に分れていたが、調査の方法上、両者を別々に掘削するのは困難であり、東西棟部分を東に延長し、南北棟まで連続して掘削した。調査範囲内の地区割は5m方眼の小区画を設定した。重機掘削は原則として近世の作土層まで行い、以下は人力によった。また南北棟部分の調査については、そのほとんどが旧校舎の基礎によって遺構面が攢乱を受けており、北端部分は遺構面が存在しないことを確認した後、直ちに埋戻した。これに対して、東西棟の校舎部分は、当初

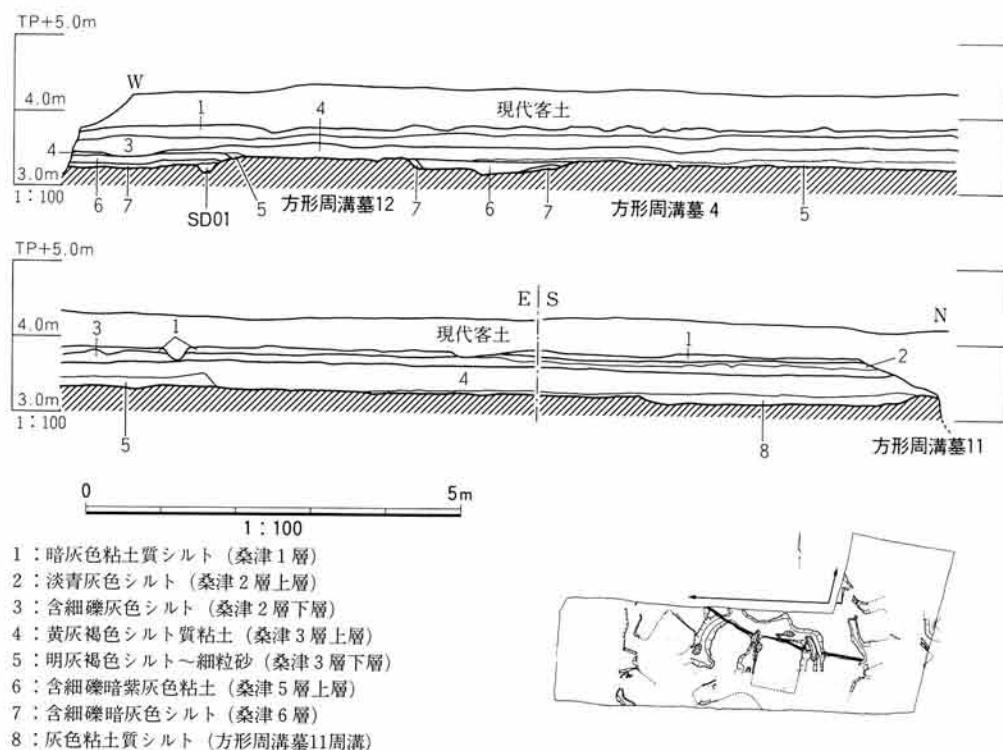


図27 KW83-8次調査地北壁および西壁断面図

の予想に反して、その大半に遺構面が残存していた。また、後述する方形周溝墓群の検出により、遺構の重要性が明らかになったため、再度協議を行い、84年1月29日まで期間を延長することとなった。

現場作業は1月27日まで実施し、同28・29日に調査区の埋戻しを行い、すべての調査を終了した。調査面積は707m²である。

2) 調査結果

i) 層序(図27)

基本的な層序は以下のようである。

桑津0層：現代客土である。

桑津1層：暗灰色粘土質シルトからなる現代作土で、炭化物が含まれる。

桑津2層：近世の作土層で2層に分かれる。上層は淡青灰色シルト層で、調査区の東側3分の1の範囲に分布する。層厚は10cm。下層は含細礫灰色シルトで、全域に分布し、下部に酸化鉄の汚染が著しい。層厚は15cm。近世陶磁器、瓦、瓦器などが含まれる。

桑津3層：中世の作土層で、2層に分かれる。上層は黄灰褐色シルト質粘土層で、全域に分布する。全体にマンガン斑および酸化鉄の汚染が認められる。層厚は調査区の中央より西側では約20cmであるが、東側では約35cmになる。弥生時代から中世の遺物が含まれ、瓦器を主体として中国製磁器も少量みられた。下層は明灰褐色細砂～シルト層である。層厚は調査区中央では10～20cmであるが、そのほかの部分では5cmに満たない。須恵器や瓦

器が含まれている。

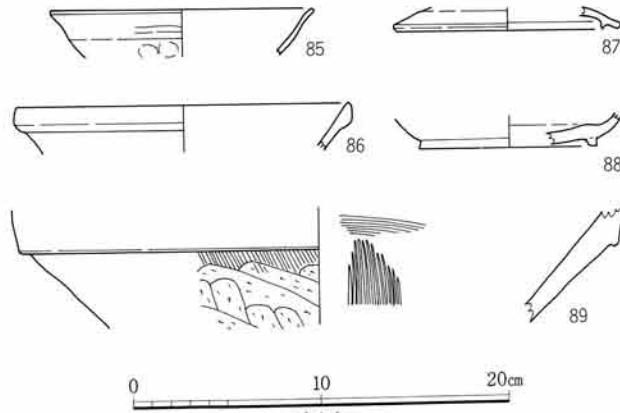


図28 各層出土の遺物

桑津3層上層(85・86・89)、桑津5層上層(88)、同下層(87)

桑津5層：飛鳥時代から奈良時代の堆積物で、2層に分かれる。本層は弥生時代の遺構の上部にのみ検出されたため、当時凹地となっていた部分に堆積したものと理解される。上層は含細礫暗紫灰色粘土層で、奈良時代の須恵器を含む。下層は含細礫暗灰色シルト層で、後述する方形周溝墓の周溝内にのみ分布

するが、ごく少量の飛鳥時代以降の須恵器を含む。

地山層：黄色粘土層で、下位は砂礫を多く含む。

ii) 各層出土の遺物(図28・29、図版42・43・94)

桑津3層上層出土遺物 瓦器椀85、白磁碗86、瓦質土器擂鉢89が出土した。これらは12～15世紀頃のものである。

桑津5層出土遺物 上層から須恵器壺の底部88、石鎌90・91が出土した。88は奈良時代頃のものと思われる。ほかに5・6世紀代の須恵器等もある。90は凹基無茎式石鎌で、作用部の一部を欠損する。全体として縦長の三角形を呈し、作用部はわずかに外湾ぎみになる。逆刺の先端は鋭さを欠き、基部の抉りは浅い。長さ1.95cm、幅1.10cm、厚さ0.20cm、重量0.3gである。縄文時代の石鎌と考えられる。91は凹基無茎式石鎌で、一方の逆刺を欠く。作用部の側縁が緩やかなS字を呈し、凹基部の抉りが深いことから、[菅榮太郎1995]の分類でのD-1類に該当し、長原遺跡における傾向に照らせば、縄文時代早期に顯著な形態といえる。長さ2.95cm、残存幅1.65cm、厚さ0.40cm、重量1.0gである。

下層からは須恵器杯B蓋87が出土した。7世紀後半から8世紀初めのものである。ほかに須恵器甕の破片などがある。

iii) 遺構と遺物(図29～34、図版4・5・42・43・95)

遺構は桑津3層上層下面、同層下層下面、地山上面の計3面で検出した。時代ごとに記載する。

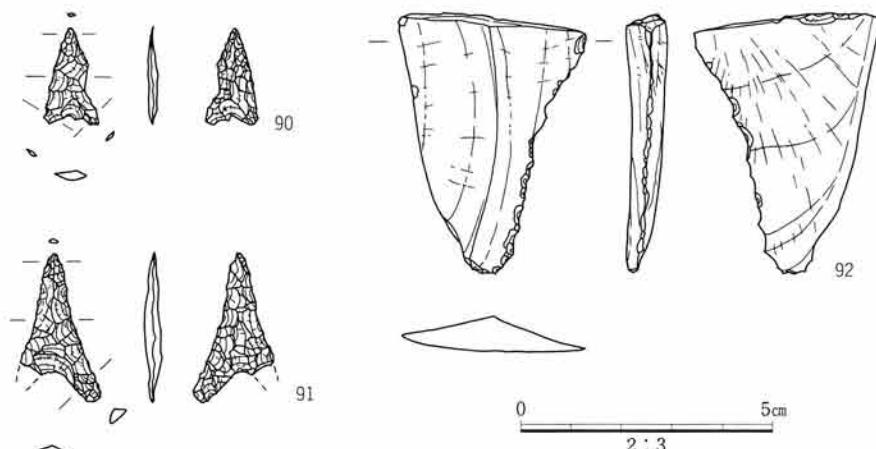


図29 石器遺物
桑津5層上層(90・91)、方形周溝墓2(92)

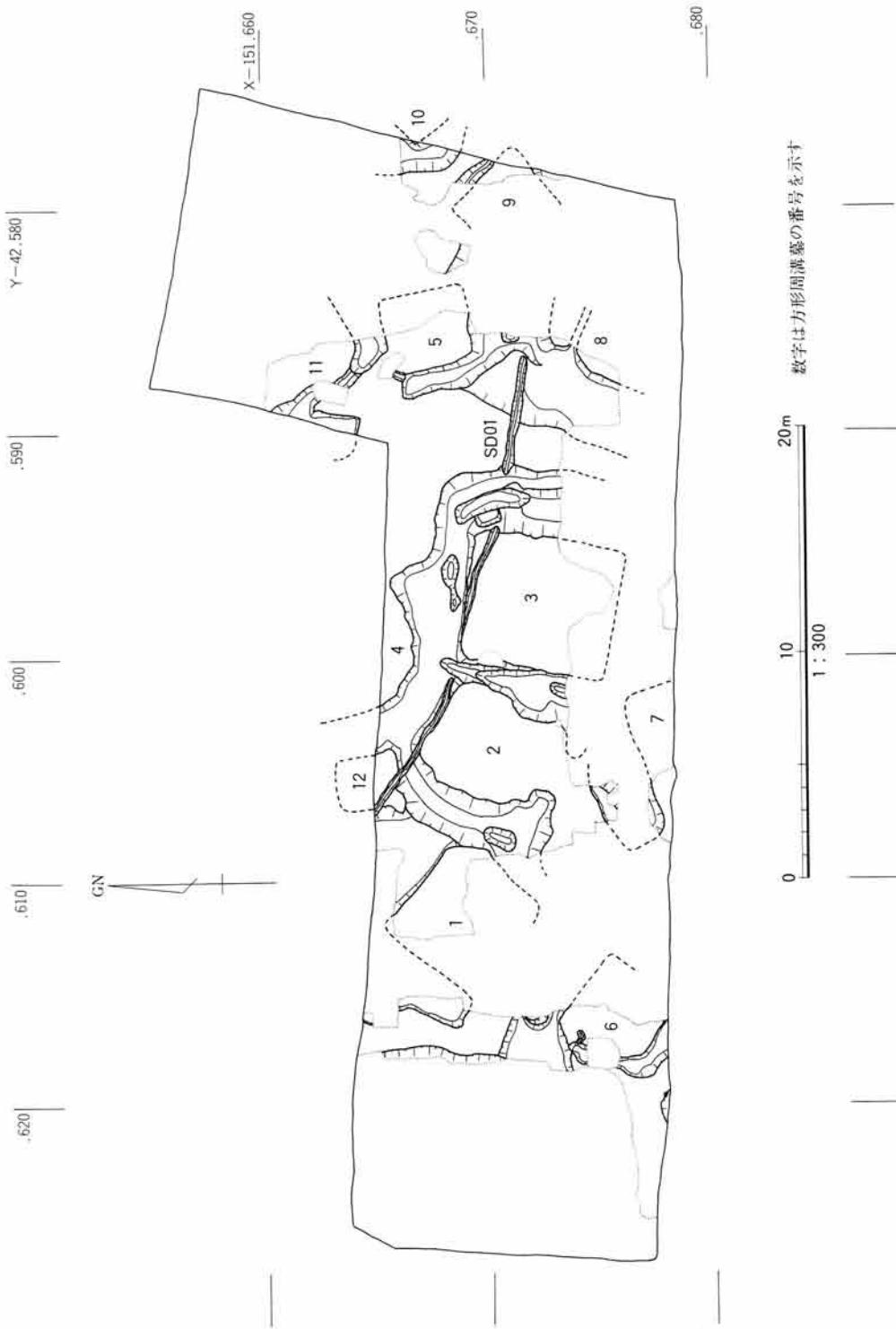


図30 調査地全体図

a. 弥生時代(図29~33)

方形周溝墓群 すべて地山上面で検出した。すでに述べたように、検出の時点では飛鳥時代以降の遺物を含む桑津5層の落込みとして検出された。しかし、その基底には弥生時代の遺物だけを包含する層が大半の落込み内で確認されたことから、これらを弥生時代の溝状遺構と判断した。つまり、弥生時代の遺構が完全に埋りきらずに、凹地としてかなり長期間存在したということになる。当敷地内ではほかに3回の調査を行っており、飛鳥時代まで下らなくとも、弥生時代の遺構がかなり長期間にわたって凹地となっていたことが、すべての地点で確認されている。

そして、これらの溝状遺構は方形周溝墓の周溝と考えるにいたった。その根拠として、明らかに方形に巡るもののが存在すること、攪乱で破壊され一部しか検出できなかったものでも、同様な溝状の遺構と考えられること、後述する埋土の特徴、機能的に異なるような別種の遺構が分布しないことを挙げることができる。

本調査地では、最少で6基、最多で12基の方形周溝墓を検出したといえる。これらのうち、まちがいないと思われるものは、方形周溝墓1~6の6基である。なかでも2・3は墳丘を巡る3方の周溝を検出し、2については陸橋部らしき部分も確認した。このほかに方形周溝墓の可能性があるものとして、方形周溝墓7~12を挙げることができる。

周溝の埋土は大きく2層に分けられる。上層は桑津5層の暗灰色系のシルト~粘土層である。下層は基本的に次の4つの層相に区分できる。A層は黒色~暗褐色粘土~粘土質シルトである。B層はオリーブ灰色シルト質粘土で、水成層と思われる。地山の偽礫が墳丘側から流れ落ちた状況が観察できる。C層は地山の偽礫と細粒砂を含む灰色~黄灰色シルト質粘土で、水成層と思われる。D層は黄褐色砂質シルト~細粒砂を含む黄灰色シルト質粘土で、地山の偽礫を多量に含む。加工時形成層の可能性もある。堆積パターンは、まず、D層が墳丘に沿って埋積した後、C層が周溝底部に堆積し、B層が墳丘からの崩落土をまじえながら堆積する。A層は堆積の休止期と思われ、B層やC層の上面に認められる。上記の埋土は周溝ごとに差があり、特に浅いものでは桑津5層の影響もあり、このような堆積パターンを認めることができなかった。

次に、ほぼ確実に方形周溝墓と考えられる6基について記載する。

方形周溝墓1(図33) 調査区西部に位置する。南半分を攪乱によって失う。方位はN40°Eである。北周溝は方形周溝墓2の西周溝と接する部分が約10cmと浅いが、西に向って深くなっている。西周溝の深さは15cmである。東周溝は周溝墓2と一部共有すると思われる。

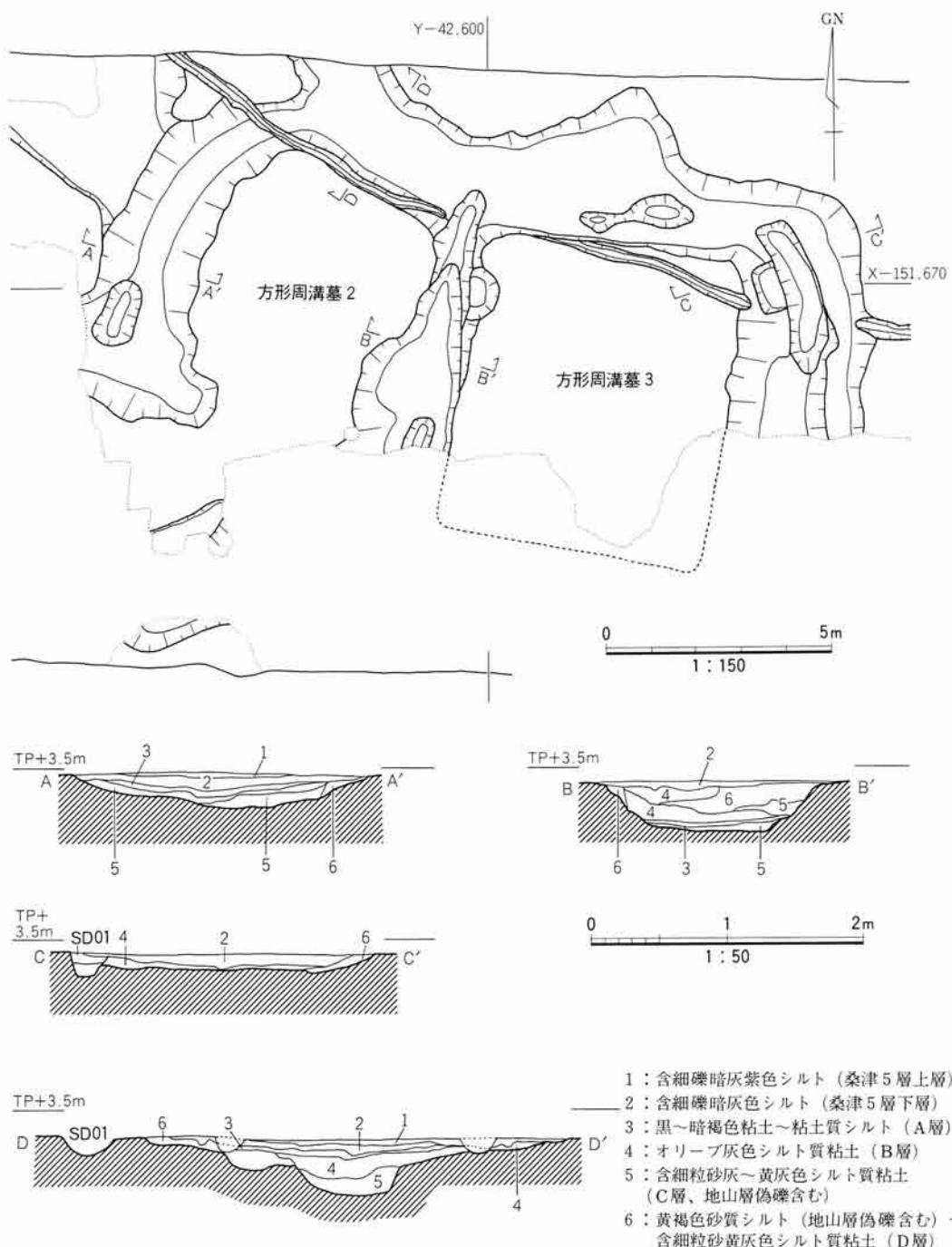


図31 方形周溝墓 2・3 実測図

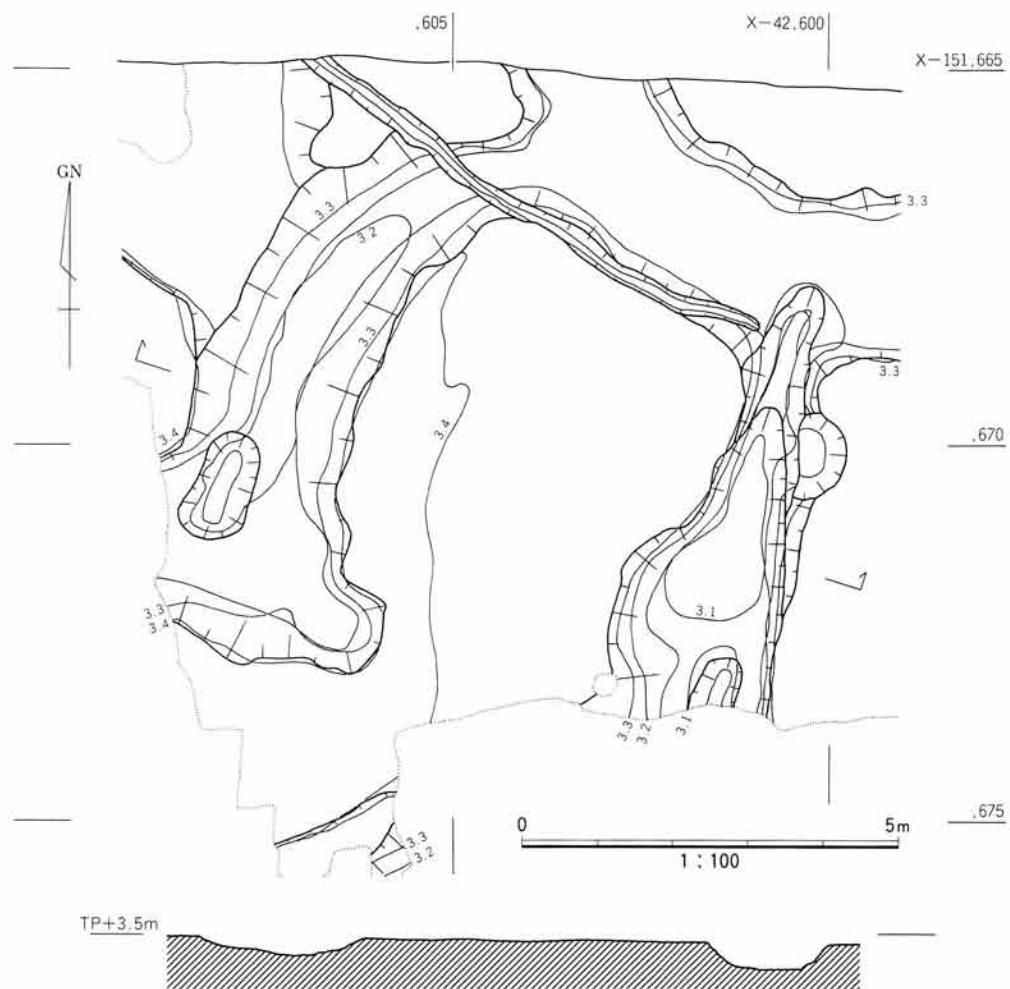


図32 方形周溝墓2実測図

推定される墳丘規模は一辺5.5m程度である。遺物は西周溝から甕底部94が出土した。底部には焼成後の穿孔がある。外方から錐のような工具を使ってあけられている。茶褐色を呈し、角閃石・雲母が多量に含まれ、生駒西麓産の胎土といえる。

方形周溝墓2(図29・31・32) 周溝墓1に東接する周溝墓である。方位はN22°Eである。西周溝は南で東に屈曲するが、東周溝に繋がることなく途切れている。ここを陸橋部と考えることも可能である。西周溝は幅約2.0m、深さ約0.2m、東周溝は幅1.5~2.3m、深さ約0.35m、北周溝は幅2.0m、深さ0.15mである。北周溝が浅く東・西周溝が深い。西周溝底には南北1.5m、東西0.7m、深さ0.15mの楕円形の落込みがあり、埋葬施設である可能性もある。墳丘規模は裾で南北6.2m、東西5.7mを測る。遺物は北周溝からサヌカイト製

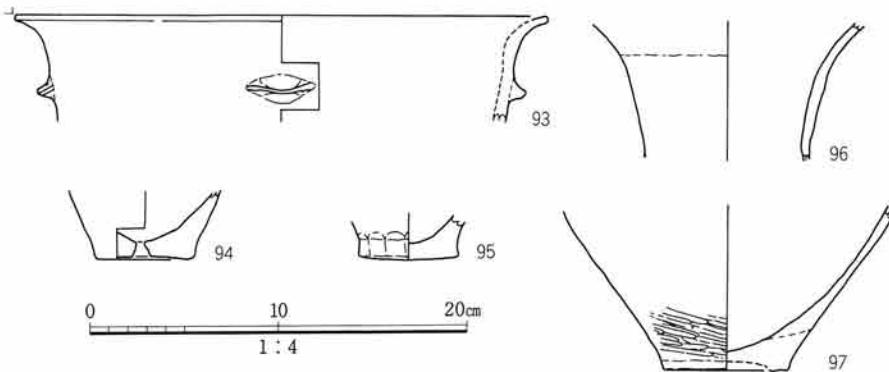


図33 弥生時代の遺構出土の遺物
方形周溝墓1(94)、周溝墓3(93)、周溝墓4(96・97)、周溝墓7(95)

のスクレイパー92(図29)が出土した。縦長の剥片を用いており、下端から一方の側縁にかけて細部調整がみられる。これを刃部とみればスクレイパーといえる。長さ5.15cm、幅3.80cm、厚さ0.80cm、重量12.2gである。

方形周溝墓3(図31・33) 周溝墓2に東接し、西周溝を共有する。方位はN11°Eである。北周溝は幅1.8m～2.0m、深さ約0.2mで浅く、東周溝は幅3.0m、深さ0.36mと深い。さらに、北東隅から南に向って長さ3.0m、深さ0.2mの落込みが認められる。墳丘規模は東西7.0mである。周溝墓2との前後関係は西周溝埋土の観察から、周溝墓3の方が新しい可能性がある。西周溝から、鉢93が出土した。外反する口縁下に瘤状把手を有するもので、胎土に角閃石・雲母を多く含み、生駒西麓産の胎土といえる。瘤状把手の突出度が弱いことや口縁部形態からみて、弥生時代前期末にさかのぼる可能性は残しつつも、畿内第Ⅱ様式の古い段階まで下るものと考えられる。ほかに東周溝からは石鏸も出土している。

方形周溝墓4(図33) 周溝墓2・3の北に位置する。南周溝は両者の北周溝と共有する。方位はN22°Wである。南周溝は東側が途切れている。西周溝は幅約2.0m、深さ0.12mである。南周溝では、墳丘の南西隅よりやや東側の位置で、壺96・97が墳丘側から流れ込んだような状況で検出された(図版5)。推定される墳丘規模は東西約5mである。壺96・97は同一個体の広口長頸壺の破片と思われるが、細片化が著しいため復元が不可能であった。頸部は細長く、外反する口縁部をもつと推定される。器厚は薄く、無文の可能性もある。底部外面はヘラミガキ調整である。畿内第Ⅱ様式に属する可能性が高い。

方形周溝墓5 調査区東部に位置する。東半を攪乱によって失う。方位はN13°Wである。西周溝は幅1.2m、深さ0.18m、北周溝は幅1.4m、深さ0.16mである。西周溝は北側が途切れている。墳丘規模は南北約5.5mである。

方形周溝墓 6 周溝墓 1 の南側に位置する。方位は周溝墓 1 に近似する。南周溝は幅1.0m、深さ0.15m、西周溝は幅0.7m、深さ0.1m、北周溝は幅0.8m、深さ0.15mである。西周溝の底面は北周溝のそれに連続せず、北西コーナーで途切れぎみとなる。墳丘規模は南北約4.5mである。

このほかの方形周溝墓の候補となる遺構はいずれも断片的で、不確かなことしかわからないので記載を省略する。出土遺物も少く、そのうえ遺存状態が不良で明確な時期決定は困難である。図示に耐えうるのは方形周溝墓 7 から出土した甕底部95だけである。

SD01 桑津 5 層基底面で検出された幅30~40cm、深さ15cmの溝である。西北西から東南東方向で、西端と東端との底の比高は約10cmあり、東へ緩やかに下っている。周溝の埋土よりも新しく、墳丘裾付近を通ることから、墳丘の高まりが残っている段階に、墳丘を一部壊して掘削されたものと考えられる。時期は出土遺物がないので、弥生時代中期~飛鳥時代のある時期としかいえない。

b. 中世(図34)

SK01 桑津 3 層下層下面で検出した土壙である。平面形は一辺約1mの隅丸方形で、断面は緩やかに傾斜をもって落ち、底面に楕円形のさらに深い落込みがある。平瓦片がこの落込みの中から出土した。

轍 桑津 3 層下層の下面で検出した、1.55m間隔で平行する 2 条の溝である。各溝は幅5~10cm、深さ5cmである。方位はN39°Wである。轍と考えておきたい。

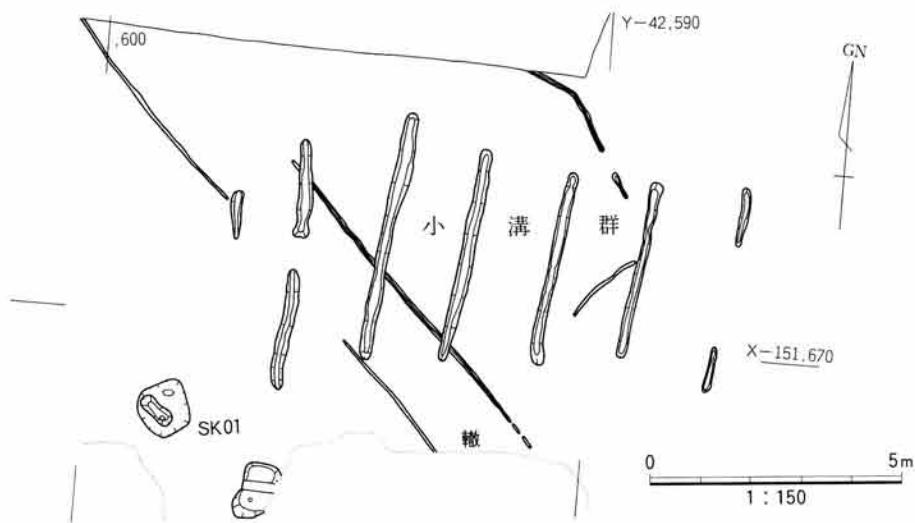


図34 桑津 3 層下面検出遺構平面図

小溝群 桑津3層上層下面で検出した遺構で、本層が厚く堆積する場所にのみ分布する。幅約0.3m、深さ約0.1mで、長さは3.5~5.0mである。各溝の間隔は約1.7mで、ほぼ同じである。耕作に関連するものと考えられる。

3) 小結

今回の調査では多数の方形周溝墓を検出することができた。時期については前期末にさかのぼる可能性もあるが、下限に関しては櫛描文や凹線文のみられる土器がまったくなかったことから、中期でも初期の頃と想定することが可能であろう。これらの特徴として、周溝を共有する群集した分布を示すことが挙げられる。本調査では、幸いにも多くの攪乱から免れ、広い範囲に群集する状況を明らかにすることができた。正確な数は不明であるが、6基以上があったことはまちがいないと考えられた。墓域はさらに東・西・南・北方向に広がり、数十基の方形周溝墓が群集していたと予想される。また、築造には方位をある程度揃えることが意識されていたようにもみえ、造墓の過程を知る手がかりになるかもしれない。そして、KW82-7次調査で提示された、西側の高い場所に居住域が営まれ、東側の低い場所、つまり当敷地を中心に墓域が形成されるという仮説も裏付けられたといえよう。今のところ、この周辺では畿内第Ⅱ様式~第Ⅲ様式を通じて墓域が継続したと考えられる。その後も、墓域が継続するのか、あるいは移動するのかは、今しばらく周辺の調査例の蓄積も必要であるが、弥生時代中期段階に数十基の方形周溝墓群を築造した集団が、中期後葉・後期以降どうなったかは今後検討を要する課題であろう。

第5節 KW86-2次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(桑津4丁目12)は、桑津小学校の北東400mにあり、遺跡縁辺部に近い。1986年3月18日・26日の2度にわたって試掘調査を実施した。その結果、調査地は既設の建造物の基礎や近世の土取り穴によって広範囲に及ぶ攪乱を受けていたが、その攪乱埋土中から多数の円筒埴輪の出土が確認された。試掘の結果を受けて、市教委・施主・設計事務所との間で協議され、本調査を実施することとなった。また、調査範囲内において重要な遺構が検出されたばあい、調査範囲の拡張等を前提として調査を開始した。調査期間は86年4月10日～5月10日、調査面積は390m²であった。

調査の経過を述べると、まず、重機による表土除去と、先に実施された試掘時のトレーニチ部分の掘削を行った。排土置場を確保するため、調査地を東西に2分割し、その東部から調査を開始した。東側部分は既設の建造物のコンクリート基礎によって、広範囲に攪乱を受けていたが、埋土中に土器・埴輪片などがみられたため、掘削は重機と人力を併用して、遺物を採取しながら地山面までの掘削を行った。西側部分の調査では、まず試掘時のトレーニチをさらに西に延長するかたちで3本のトレーニチを設定し、包含層の残る範囲を調

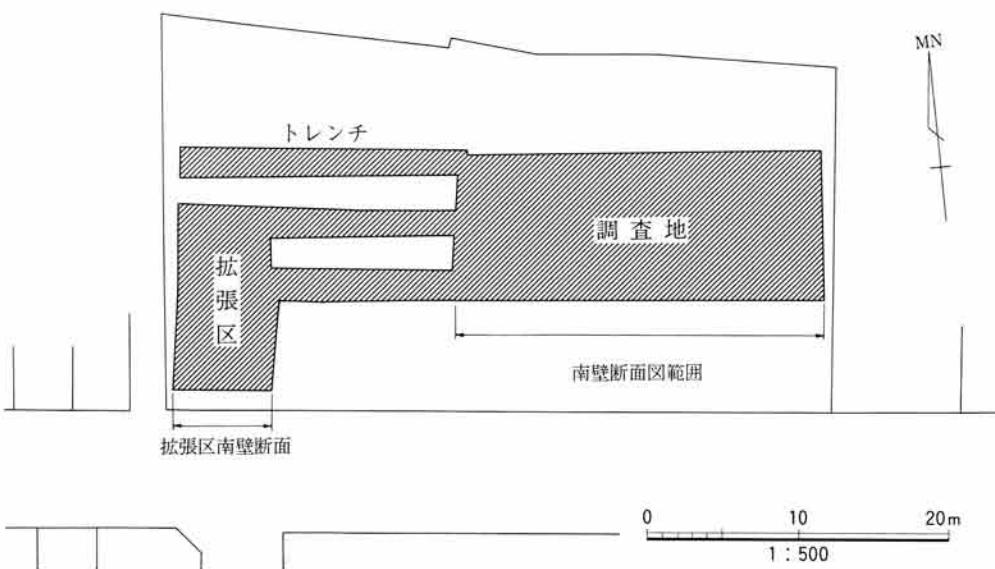
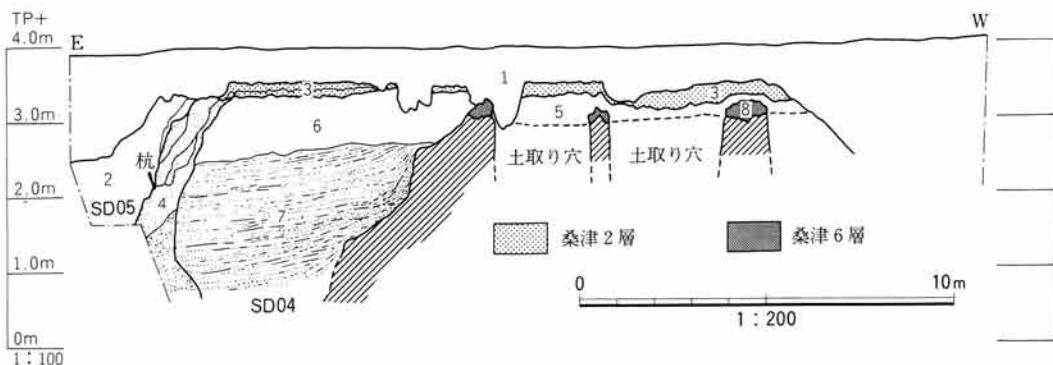


図35 KW86-2次調査位置図



- 1 : 現代客土
 2 : 灰～暗オリーブ灰色シルト質粘土(SD05、桑津2層)
 3 : 含砂礫褐灰色シルト(桑津2層)
 4 : 江戸時代の客土(SD05肩)
 5 : 江戸時代の客土(土取り穴)
 6 : 含砂礫黄橙色シルト(SD04埋土上部、桑津3層)
 7 : 黄橙色粘土～中粒砂(SD04埋土下部、桑津3層)
 8 : 黄橙～明黄褐色粘土質シルト(桑津6層)

図36 調査地南壁断面図

べた(図35)。調査地南側の2本のトレンチの西端で地山層および須恵器・土師器を含む包含層の残存が認められたため、この部分を南に拡張して調査を行った。飛鳥時代の掘立柱建物、旧西除川とみられる河道が確認され、埋戻しを含めて5月10日に調査は終了した。

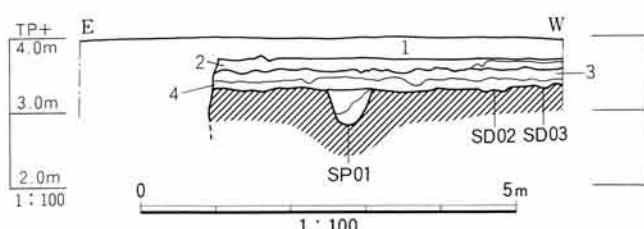
2) 調査結果

i) 層序(図36・37)

前述のように、当調査地では攪乱が広い範囲を占め、調査地東端と西端において包含層がわずかに遺存しているにすぎなかった。

桑津0層：現代の客土である。戦前・戦後のかなり大規模な攪乱場がみられる。

桑津1層：砂礫を含む褐灰色シルト。桑津0層の攪乱が及ぶ以前の作土層である。



- 1 : 現代客土
 2 : 含砂礫褐灰色シルト(桑津2層)
 3 : 含砂礫黄橙色シルト(桑津3層)
 4 : 含砂礫にぶい黄橙色粘土質シルト(桑津3層)

図37 拡張区南壁断面図

桑津2層：SD05の埋土となる灰～暗オリーブ灰色シルト質粘土、および近世作土の含砂礫褐灰色シルトが本層に当る。後者は調査地の比較的広範囲にみられ、層の上部に酸化鉄が集積する。SE01・02は本層の上面で検出された。

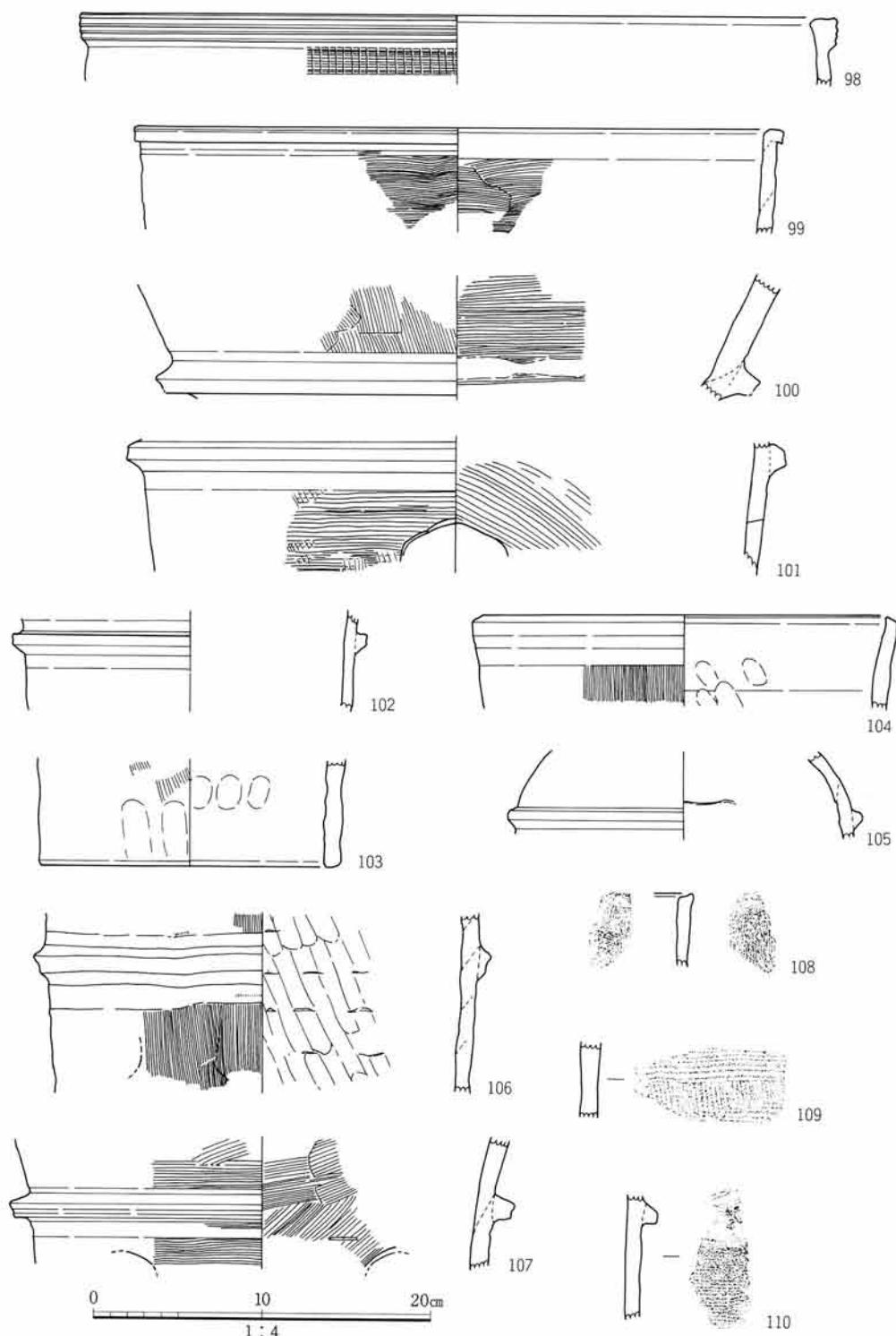


図38 弥生土器・埴輪

桑津3層：本層は3層に大別される。上層は黄橙色シルトで、調査地西半部ではその下層に、砂礫を含んだにぶい黄橙色シルトがみられる。中世の遺物包含層であり、この層の下面に溝、基底面にピット・溝・土壙が検出されている。調査地東端では、前述の黄橙色シルト下にSD04を埋める洪水層である灰白色粘土～細粒砂がみられる。同層の上部にはマンガン粒の集積がみられる。

桑津6層：含砂礫にぶい黄褐色粘土質シルト。SD04の肩部を中心として、桑津3層下にかろうじて残る古墳時代の包含層である。攪乱や土取り穴のない個所においても本層がわずかに遺存しており、もとは付近に広く分布する地層であったと思われる。本層から埴輪・土師器が出土し、攪乱埋土中の埴輪が本来この調査地周辺のものであることを確認できた。

地山層：黄橙～明黄橙褐色粘土質シルト。調査地西部の最高所で、標高3.3mである。

ii) 遺構と遺物(図版6・43)

a. 古墳時代以前

古墳時代の遺構として確認できたものは、桑津6層下面のSX01だけである(図39網掛け部分)。このSX01の全体の形状は明らかでないが、確認された範囲では方形で壇状をなす。SX01周辺の桑津6層内から図38-105～110の円筒埴輪が出土した。そのうちの105は朝顔形埴輪の壺部に当る。須恵質・土師質の埴輪があるが、黒斑はみられない。[川西宏幸1978]における円筒埴輪編年のIV・V期に該当する。攪乱内や近世の遺構からも図38-99～104

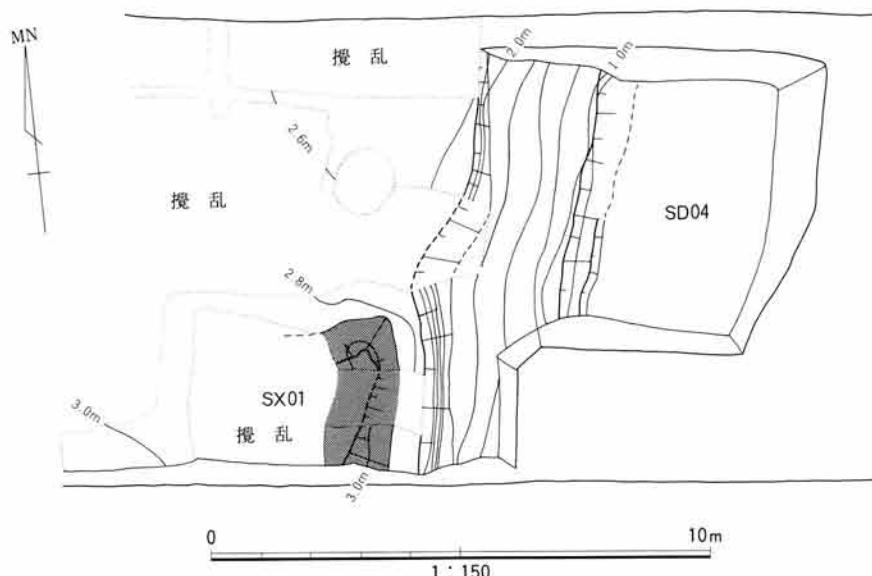


図39 調査地東部中世以前の遺構平面図

の埴輪が出土している。これらも本来は桑津6層に伴っていたと考えられる。その中には口縁部や底部の破片も含まれる。攪乱内からは、98の弥生土器鉢も出土した。

b. 飛鳥時代(図40・41)

SB01 調査地西部に検出された掘立柱建物である。南北6.2m(3間)以上、東西2.2m(1間)以上の建物で、柱間寸法は2.1~2.2mである。柱穴の平面形は方形またはやや歪んだ方形で、一辺0.6~0.7m、深さは約0.6mある。柱痕跡を検出することはできなかった。柱穴の一つから土師器片が出土したが、時期を特定しうるものでない。後述するSD01・SK01とほぼ同時期の遺構と考えられる。この建物に直接関係するものではないが、南壁に接して柱穴SP01がある。

SD01 調査地西端にある長さ1.5m、幅0.2mの小溝で、深さは5cmほどである。ほぼ南北方向をとる。土師器と須恵器の杯身113が出土した。須恵器はTK209型式に該当する。

SK01 調査地西部に検出された土壙である。大部分が攪乱に切られており、全体の形状や規模は不明である。深さは10cm程度である。この遺構はSB01の一柱穴の上部を壊している。遺物は須恵器の杯蓋111、杯身112が出土した。これらはTK217型式に該当する。

c. 鎌倉・室町時代(図39・40)

SD02・03 調査地西部の南西隅で検出した桑津3層下面の溝である。両溝は南北方向に並走する。遺物には土師器がみられたが時期の詳細は不明である。

SD04 調査地東部で検出された大溝である。溝の西肩が確認できたのみであり全体の規模はわからないが、検出面からの深さは2.5m以上になる。溝内出土の遺物としては瓦器がもっとも時

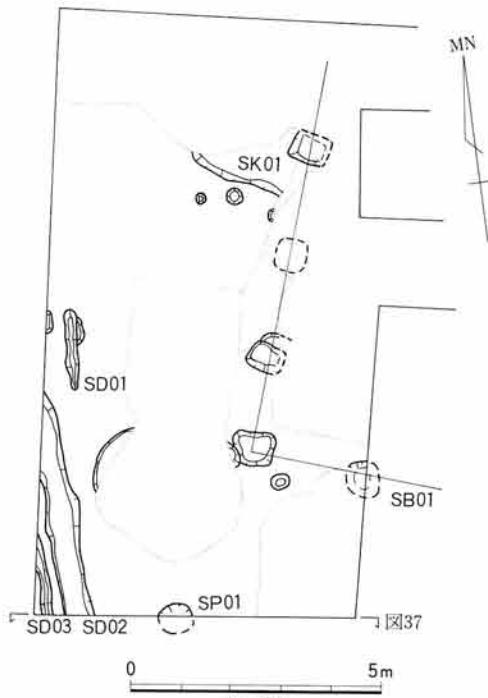


図40 拡張区の古代・中世の遺構平面図

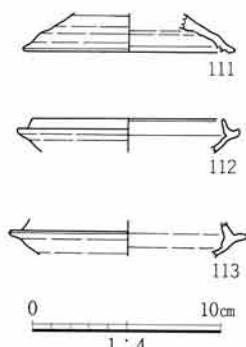


図41 SK01・SD01
出土遺物

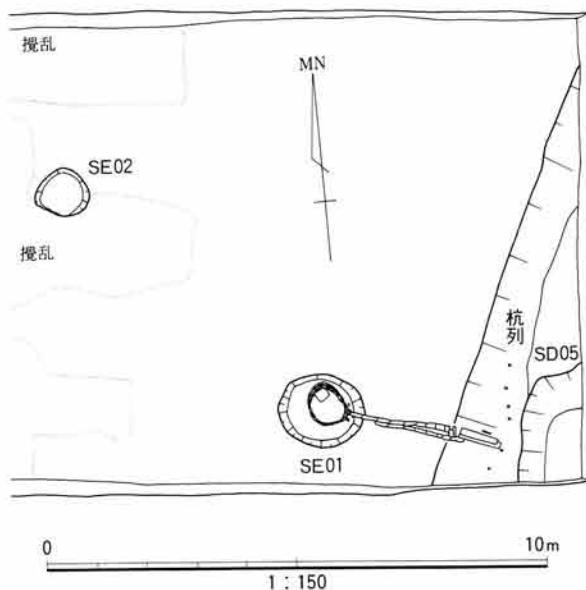


図42 調査地東部の江戸時代遺構平面図

備前焼鉢をはじめ近世の陶磁器が多く出土した。近世の今川と思われる。

SE01・02 SE01はSD05の肩部にある井戸である。直径1.75m、深さは2.8m以上を測る。木桶を2段以上重ねて井戸側とし、上段の木桶からSD05に向って竹管を用いた暗渠を通していった。肥前染付、丹波系の陶器が出土した。SE01の北西6mには素掘りのSE02がある。この井戸はSE01と同様、桑津2層の直上から掘込まれており、両者はほぼ同時期の遺構と考えられる。埴輪や須恵器が数点出土している。

3) 小結

この調査では、飛鳥時代の掘立柱建物・土壙・溝、中世から近世の旧西除川と推定される流路を検出した。また、桑津遺跡の調査において、はじめて多量の埴輪が出土したことは、特筆すべきことである。桑津遺跡の周辺には、地籍図から大塚古墳・赤塚古墳などからなる田辺古墳群の存在が推定されている[上田宏範1981]。『東成郡誌』には、これらの古墳のうち大塚がすでに畑地となり、赤塚が消滅しているという記載がある[東成郡役所1922]。これら以外にも古墳が存在したことは十分に予測され、今回出土した埴輪は、当調査地の近辺に存在した古墳のものと考えられる。

期の下がるものだが、それも小片のため確実な年代はおさえられない。規模や方向から現在の今川の旧流路、すなわち旧西除川に当ると推測される。

d. 江戸時代(図42)

SD05 調査地東端に位置する南西-北東方向の溝である。西肩部のみを検出したにすぎず、溝幅は確認できなかった。検出範囲では深さは2.0m以上ある。肩部から斜面部にかけては盛土がなされており、杭列もみられた。埋土から

第6節 KW86－3次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は桑津遺跡の北半部(桑津3・4丁目)にあって、近世環濠集落の内部に位置する(図3)。当地域にガス管理設工事が予定されたため、1985年5月21日～27日にかけて試掘調査を実施し、南北区および東西区において、それぞれ24個所を試掘した(図43～45)。その結果、8個所において奈良～江戸時代にかけての遺物を含む地層が検出され、また、桑津天神社の東方に位置する地点では環濠址とみられる落込みが確認された。工事予定地は道路上であり、各所に既設管による攪乱が認められたため、遺構や包含層が検出された東西区A・B地点、南北区C～H地点に限って調査を行うことになった(図46・47)。

調査は1区間を幅0.5～0.6m、長さ20m単位に区切って東西区の東部から着手したが、道路上であるため、現場は即日復旧した。また、掘削に際しては、道路敷および現代整地層については重機で、それ以下はすべて人力で掘下げて遺構・遺物の検出に努めた。調査期間は86年4月16日～22日で、調査面積は54m²であった。

2) 調査結果

この調査は、現在の道路部分を調査地としたものであるため、各所に攪乱が認められ、遺物包含層や遺構が検出された範囲はきわめて少かった。以下に調査個所の基本層序とおもな遺構・遺物について述べる。

i) 層序

桑津0層：砂礫混りの黒灰～茶灰色シルトで、江戸時代以降の陶磁器や瓦・レンガを含む道路敷整地層である。

桑津2層：砂礫混りの灰～茶褐色シルトで、室町時代以降の陶磁器・瓦を含む。この地層は南北区の中央部に位置する濠状の落込みSD03内に厚く堆積する。

桑津3層：含砂礫暗黄褐色シルトで、地山層



写真6 KW86-3次A・B地点調査風景

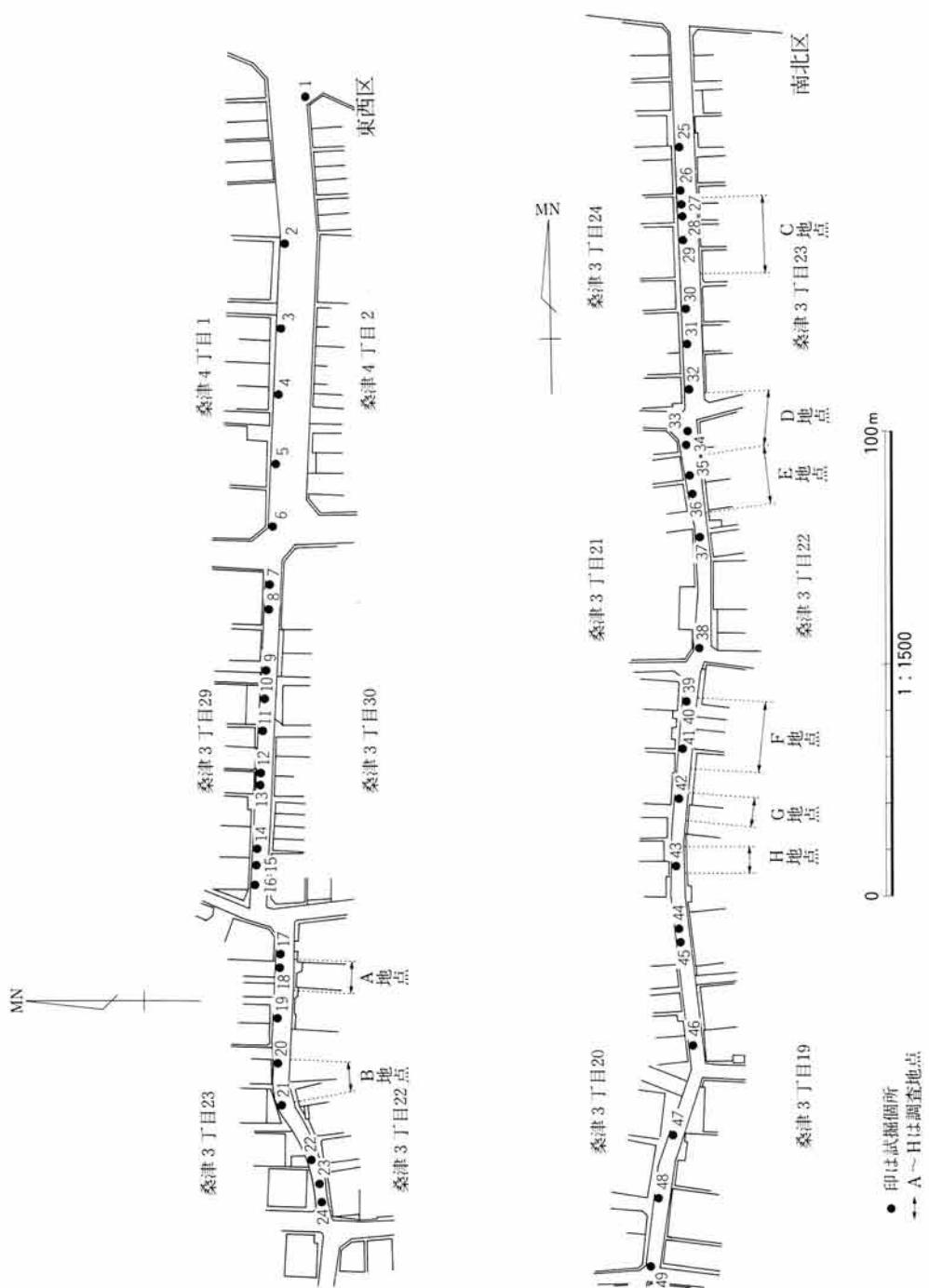
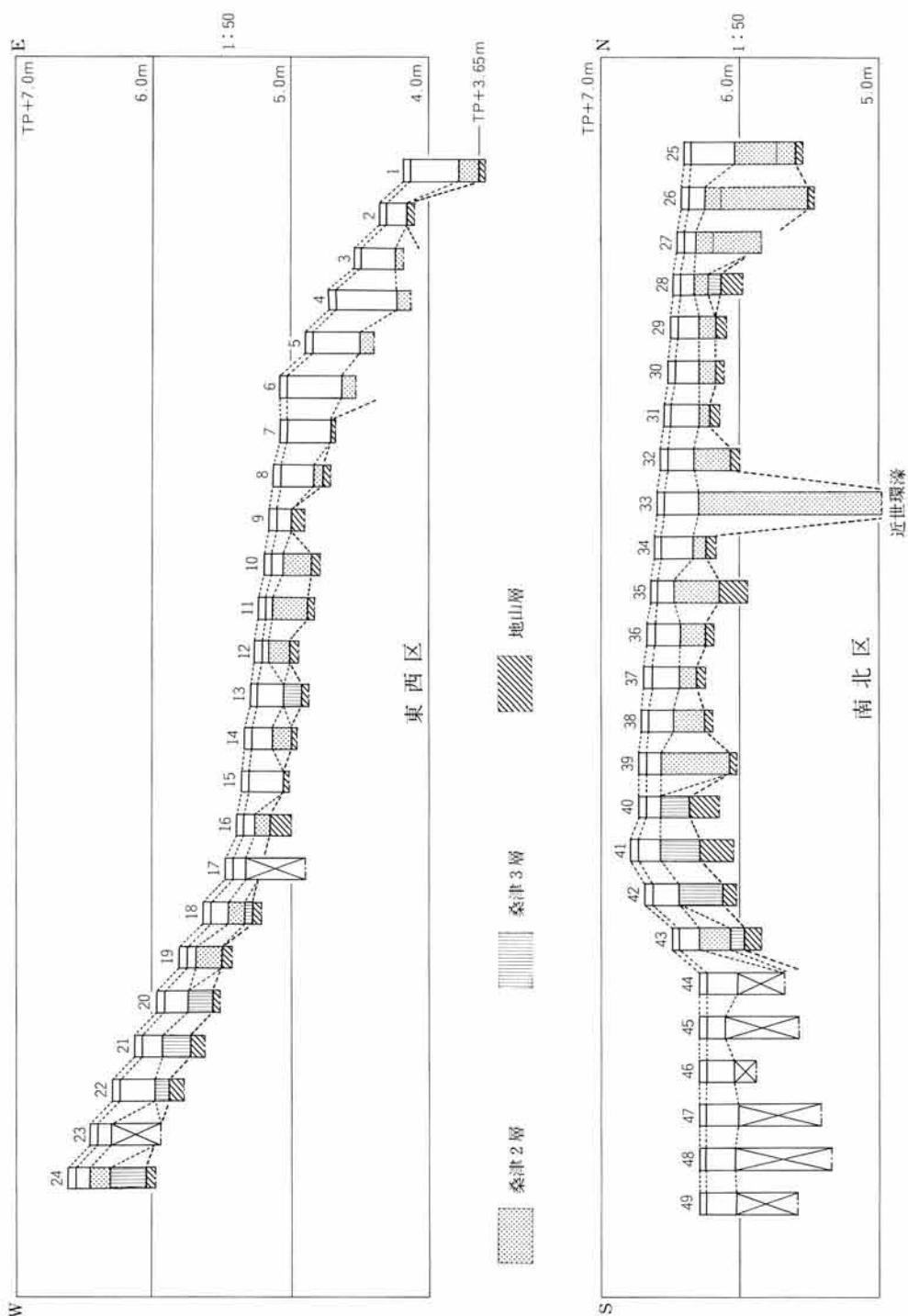


図43 KW86-3 次調査地位置図



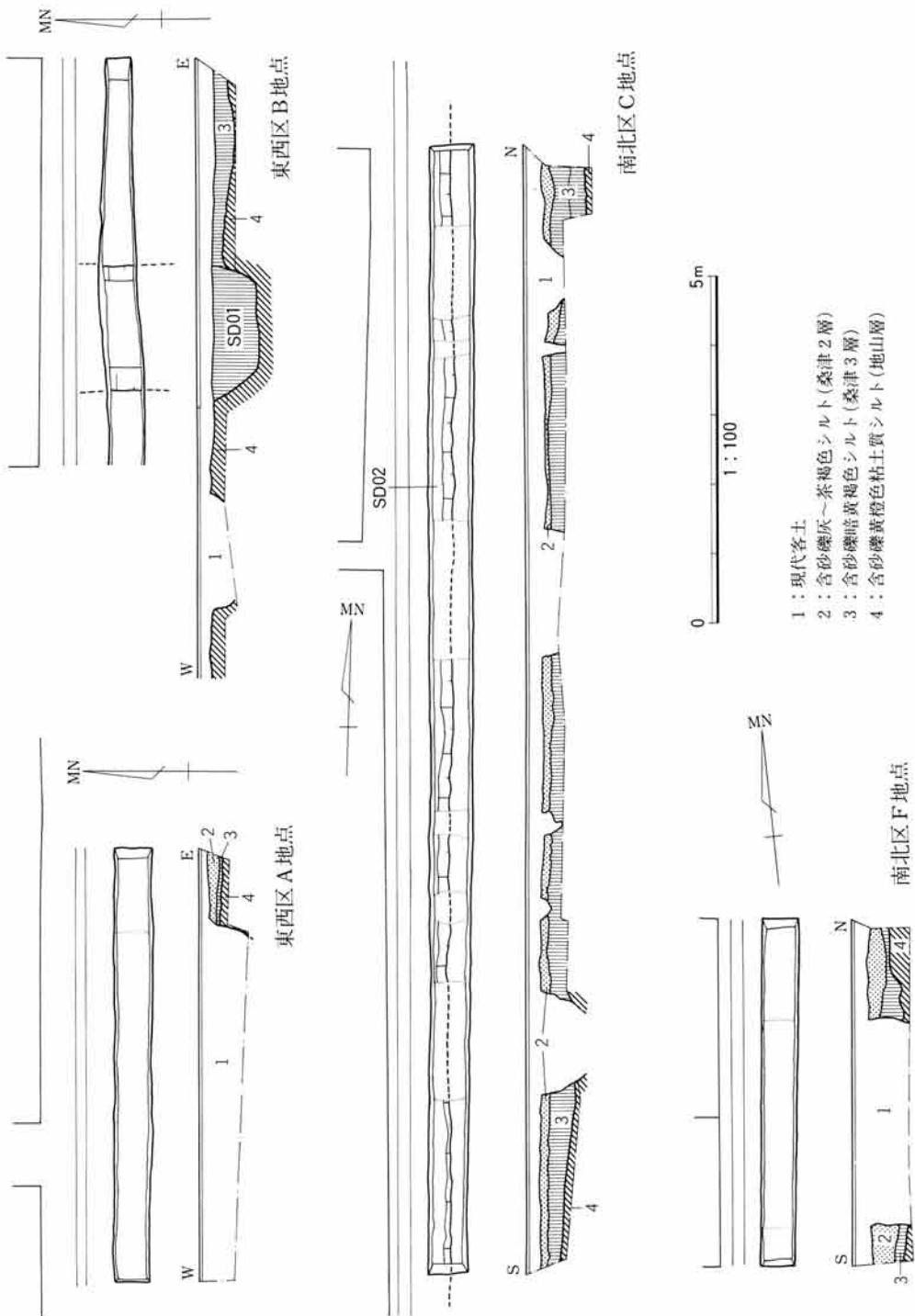


図45 A ~ C + F 地点遺構実測図

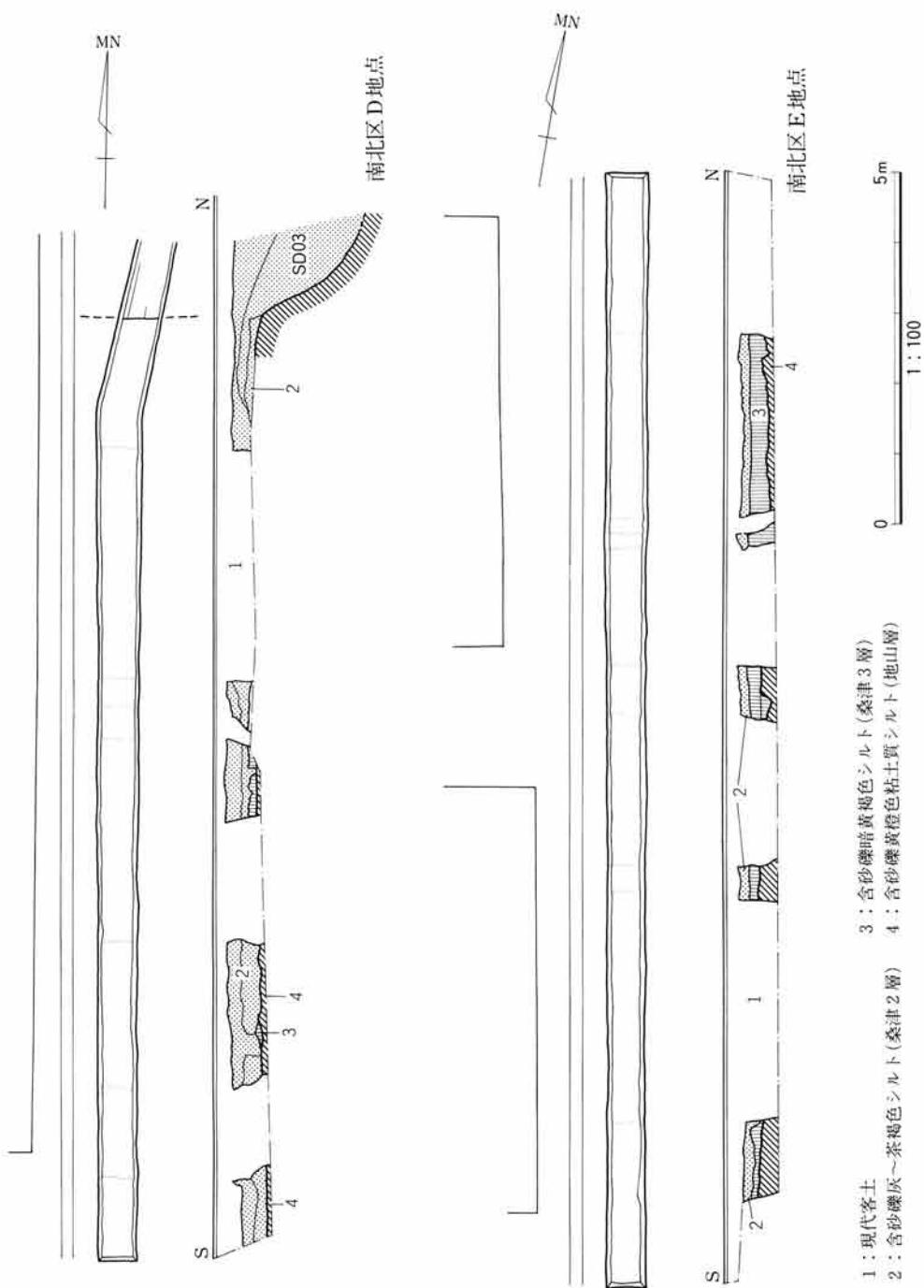


図46 D・E地点遺構実測図

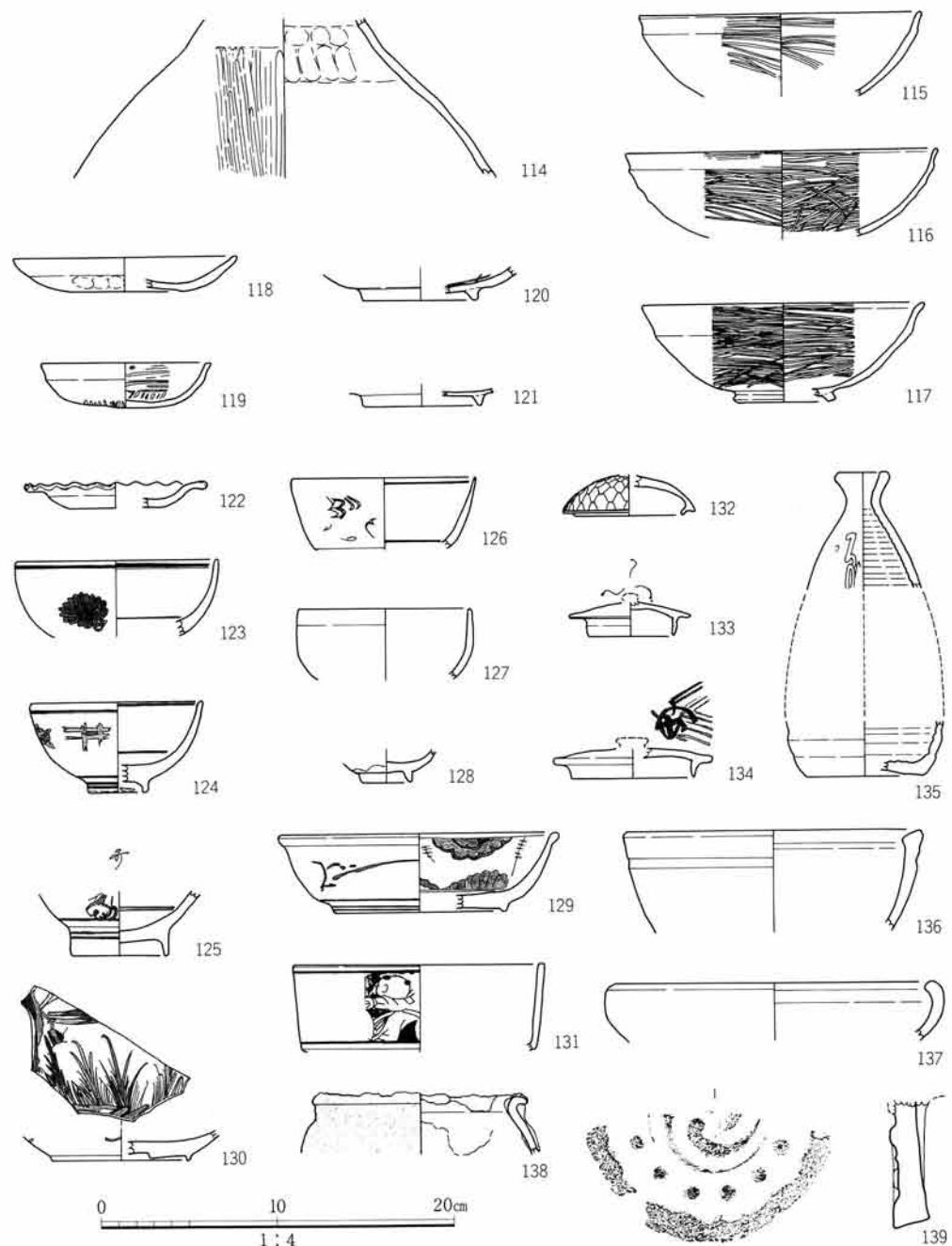


図47 桑津3層・SD01・03出土遺物
桑津3層(114)、SD01(115~121)、SD03(122~139)

の偽礫が混在することから客土層と考えられる。古代の土器類を含み、東西区B地点および南北区C地点では本層を掘込む平安時代後半の溝が検出されている。本層からは図47-114の弥生土器壺の体部も出土している。桑津4層ないし5層である可能性も考えられる。

地山層：含砂礫黄橙色粘土質シルトで、上町台地を形成する上部洪積層と考えられる。この地層は東西区西端部で標高6m前後、東端部で4m程度を測り、東方に向って徐々に下っている。

ii) 遺構と遺物

本調査では、江戸時代および平安時代の遺構が検出された(図45・46)。

SD01 東西区のB地点にある溝である。幅約2.0m、深さ約0.7mで、断面が逆台形を呈する。溝内の下半には砂礫を含む茶褐色粘土質シルトが堆積するが、上半は地山層の偽礫を含んだ含砂暗茶褐色シルトで埋戻されていた。溝の底近くから11世紀末～12世紀前半までの瓦器椀115～117・120・121や瓦器小皿119、土師器皿118が出土した(図47、図版44)。

SD02 南北区C地点で検出された桑津3層内の溝である。トレントとほぼ平行する方向をとり、幅0.3m以上、深さ0.5m以上で、長さ20m以上続く。

SD03 南北区D地点に見つかった、幅4.0m以上、深さ2.0m以上の濠状の遺構である。検出された場所は、宝歴12(1762)年の古地図によれば、集落の北木戸口近くに当っており、この遺構は環濠の一部とみられる。地籍図からみた江戸時代の環濠の復元が[藤田実1983]に行われており、それとの照合からも環濠址と考えてよい。遺構内には茶灰～灰褐色砂礫あるいは含砂礫暗灰色シルトが堆積しており、江戸時代後半の陶磁器・瓦のほか貝殻などが出土した(図47、図版44)。そのうち、122・136・137は瀬戸焼、127・133・134は京・信楽焼、135は丹波焼、123～126・129・130・132は肥前染付、131は肥前色絵である。128・138については産地は不明である。128は透明釉が掛かる小碗、138は二次的に高熱を受けた壺である。以上の出土遺物のほとんどが18世紀後半～19世紀に属するものであり、139の巴文軒丸瓦とも時期的な矛盾はない。

この調査では狭小な調査範囲にもかかわらず、江戸時代の環濠の一部や平安時代の溝が検出され、当地域が平安時代あるいは江戸時代の集落の範囲内に含まれることが明らかとなった。江戸時代の濠址の確認は、桑津環濠集落の実態を究明する上で重要な資料になるであろう。

第7節 KW87-20次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(駒川1丁目5)は桑津小学校の南西300mにある。試掘調査で、飛鳥・奈良時代と思われる遺構と遺物、そして古墳時代の製塩土器が認められた。そこで、建築工事によって遺構が破壊される部分について調査することとなった(図48)。

調査地は田辺廃寺の推定寺域内にあり、かつて白鳳期の瓦がまとまって出土したといわれる地点[山本加三1926]に近く、田辺廃寺に関連する遺構・遺物の出土が予測された。調査では、厚さ20cm程度の表土層を機械で除去し、残りの部分を地山面まで精査した。調査期間は1987年10月2日～12日で、調査面積は137m²であった。

2) 調査結果

i) 層序(図49)

今回の調査地では、部分的に包含層が残っていたが、表土を剥ぐとすぐに地山層に到達した。基本的な層序は以下の通りである。

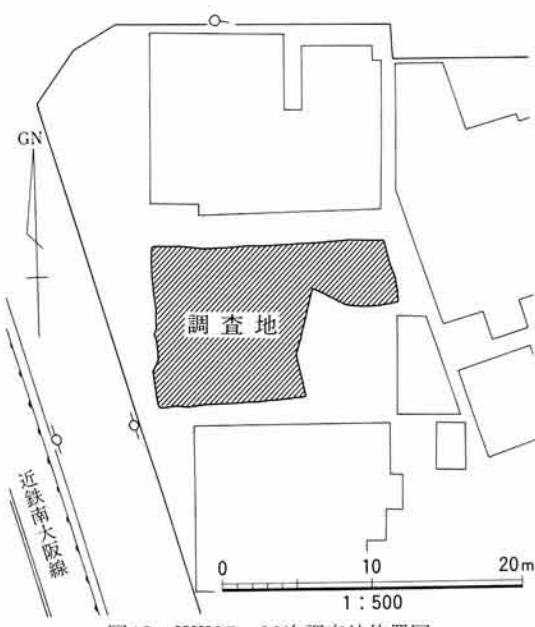


図48 KW87-20次調査地位置図

桑津1層：灰褐色細粒砂で、現代表土である。

桑津6層：暗茶褐色極細粒砂層で、ごく狭い範囲にある。

地山層：細砂を含む暗赤褐色粘土質極細粒砂層である。現地表は西に向って緩やかに傾斜しており、地山層も同様の傾斜をもつ。現地表の標高は4.0～4.3m、地山面で3.9～4.1mである。

ii) 遺構と遺物(図版7・8・45・46)

包含層が部分的にしか残っていなかつたため、各時代の遺構面を分けて捉えることはできなかった。しかし、地山面に遺存する遺構・遺物からみて、大きくは

古墳時代と飛鳥時代以降の2時期に分かれる。

a. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、竪穴住居4棟のほか、溝・土壙・ピットがある(図51)。竪穴住居4棟のうち、SB01以外はすべて周壁溝をもつが、SB01は周壁溝をもたずに床面全体が平坦に掘下げられている。

SB01 南北4.2m、東西4.5mの規模をもつ方形の竪穴住居である(図52)。SP01~03お

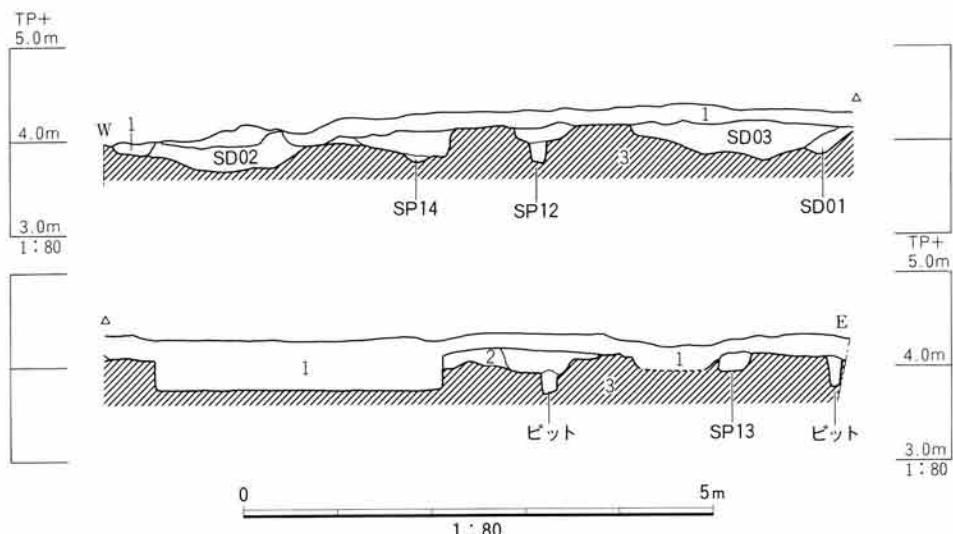


図49 調査地北壁断面図

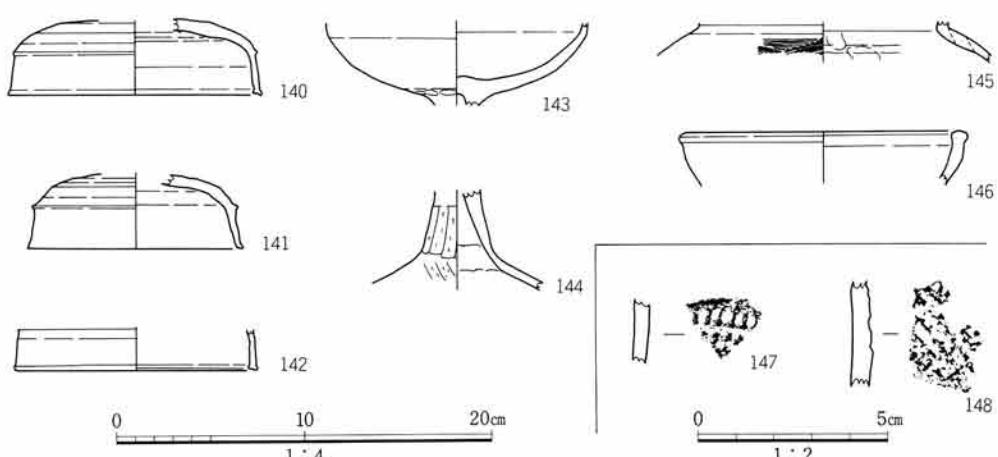


図50 SB01~03、柱穴出土遺物

SB01(140・143)、SB02(145・146)、SB03(141・147・148)、SP10(142)、SP10(144)

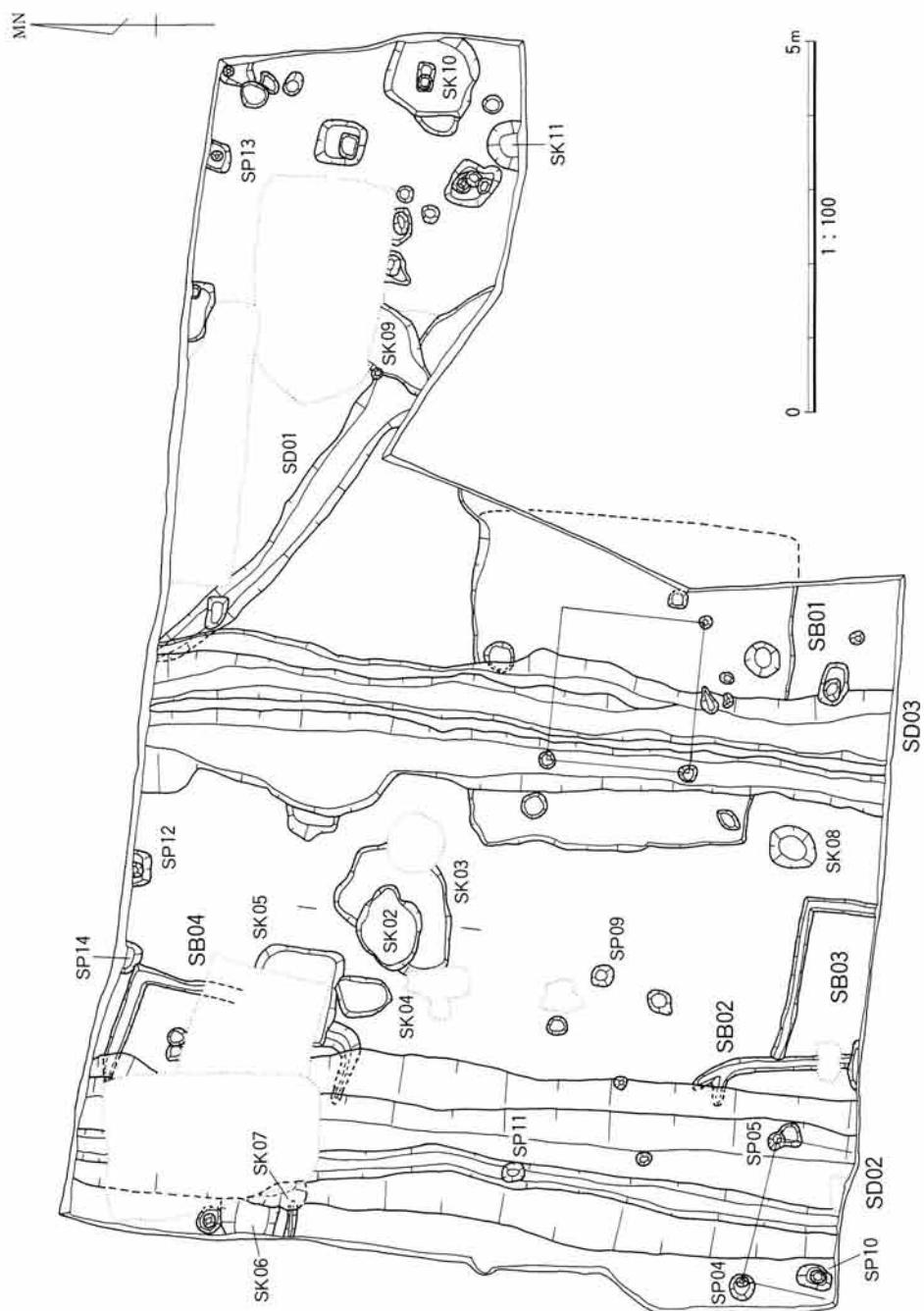


図51 調査地全体図

よりSK01がこの住居に伴うと考えられる。北東隅の主柱穴は未確認である。出土遺物には図50-140・143がある。140は須恵器杯蓋でTK208型式ないしTK23型式に当る。143は土師器高杯の杯部である。床面の直上から出土した。北辺沿い中央部に炭・焼土が集積する部分があり、竈があったと推定される。

SB02 南北2.0m以上、東西3.5m以上の規模をもつ方形の竪穴住居である。SP04・05が主柱穴であった可能性がある。検出面での周壁溝の幅は20cm程度である。SB03の周壁溝を切っている。SP10から図50-145の土師器壺が出土している。埋土や平面形態の似通うSB04と同時期の住居と思われる。周壁溝が一部で2重になるため、同位置での建替えが考えられる。埋土中から弥生土器高杯146も出土している。

SB03 南北1.1m以上、東西2.2m以上の方形状の竪穴住居で、西側をSB02に切られる。周壁溝は幅15cmを測る。床面付近から図50-141・147・148が出土している。141は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境の稜はやや鋭いが、口径が小さく、TK23型式に当ると思われる。147は韓式系土器あるいは焼成不良の須恵器である。外面に平行タタキメがみられ、内面の当て具痕はナデ消されている。148は軟質の韓式系土器

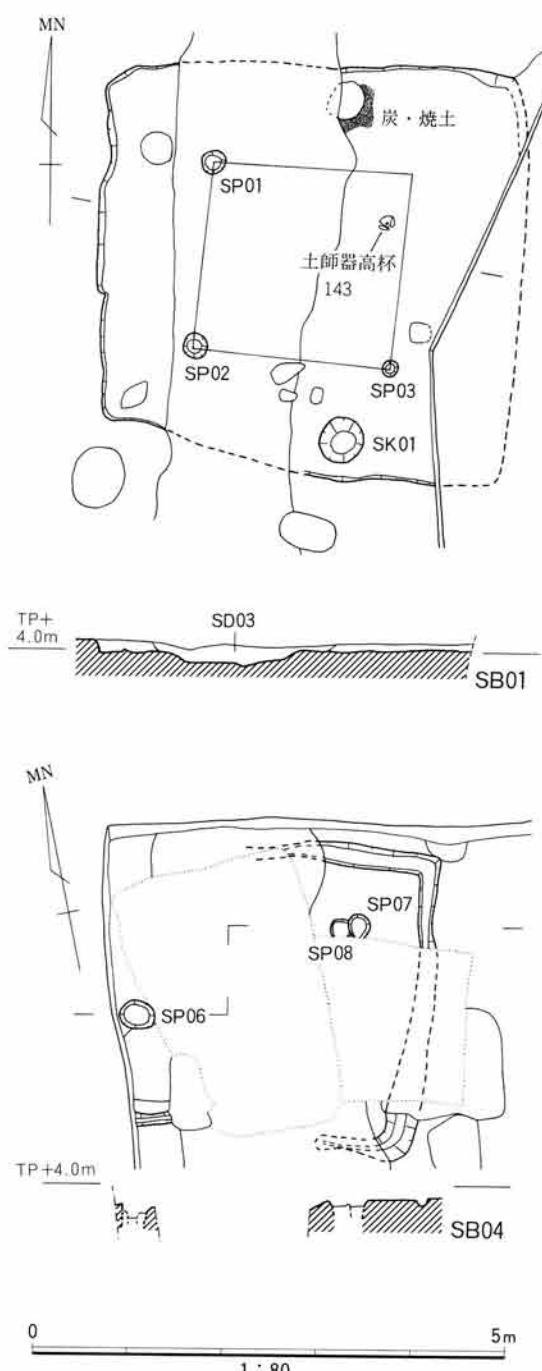
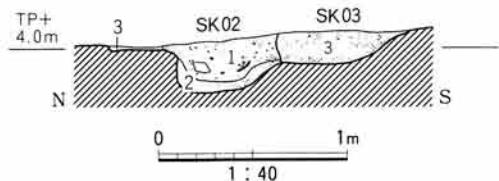


図52 SB01・04実測図



1 : 含極細粒砂暗茶褐色シルト(炭化物・焼土多量に含む)
2 : 暗灰褐色粘土質シルト(炭化物・焼土含む)
3 : 暗灰褐色極細粒砂(炭化物・焼土含む)

図53 SK02 · 03断面図

で、外面に格子状のタタキメがある。

SB04 南北3.3m、東西2.9m以上の規模をもつ方形の竪穴住居である。SP06~08がこの住居に関連する柱穴と思われる。周壁溝は広いところで幅30cmである。

柱穴 SP09はSB03の北2.3mにある柱穴で、直径0.3m、深さ0.2mを測る。TK23型

式と思われる須恵器杯蓋142が出土している(図50)。SP10はSP04の南0.6mにある隅丸長方形の柱穴である。長辺0.5m、短辺0.3m、深さ0.4mあり、土師器高杯144が出土した。

SD01 調査地東半部を北西から南東方向に走る溝で、断面U字形を呈する。幅0.6m、

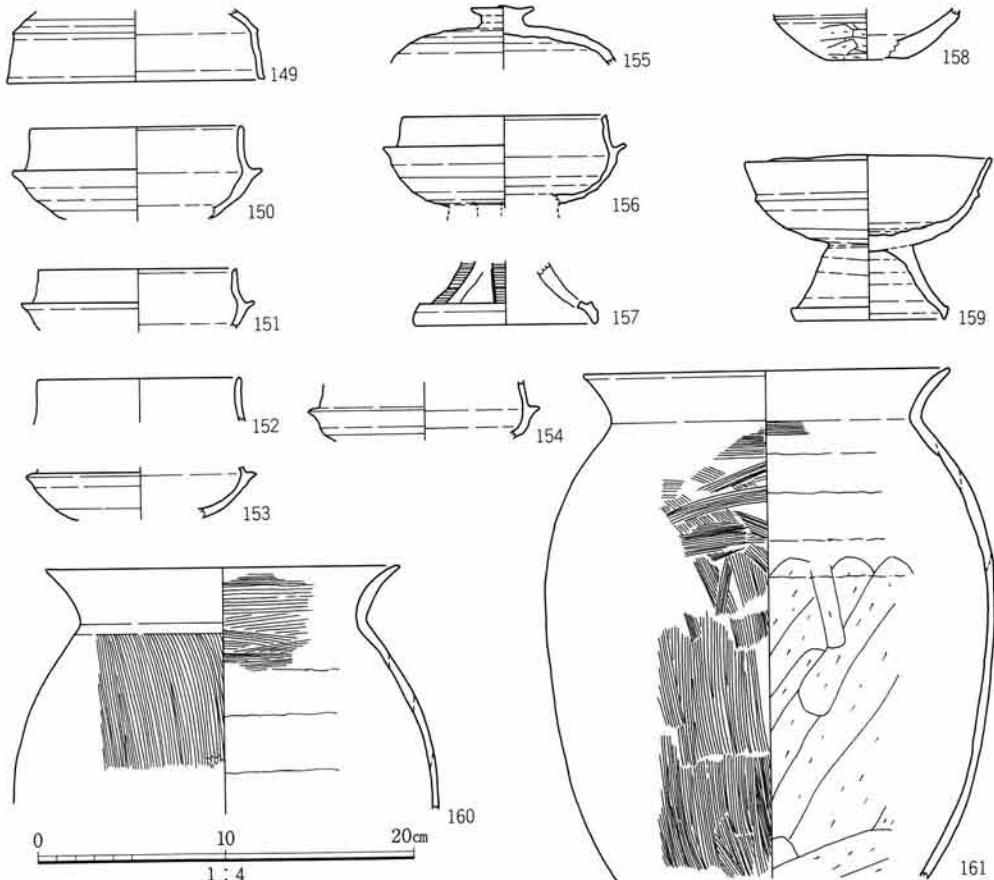


図54 SK02 ~ 04 · 09出土遺物

SK02(149 · 150 · 154~157 · 159 · 160 · 161)、SK03(151)、SK04(152 · 153)、SK09(158)

深さ0.3mである。図55-163の土師器丸底壺、162の弥生土器鉢が出土している。古墳時代中期の遺構といえる。

SK02・03 SB01とSB04の間に掘られた土壙である。SK02はSK03を切り、長径1.1m、短径0.9mの楕円形を呈す。深さは25cmで、底面は平坦である。埋土は上部が極細粒砂を含む暗茶褐色砂質粘土、下部が暗灰褐色粘土質シルトで、いずれにも炭化物や焼土が多く含まれる。図54-149・150・154~157・159の須恵器、160・161の土師器が出土した。そのうち、149は杯蓋、150・154は杯身、155・156は有蓋高杯の蓋と身、159は無蓋高杯、157は高杯脚部である。160・161は長胴甕で、両者はよく似た形態的特徴をもつ。須恵器はTK208型式またはTK23型式のものである。

SK03は長軸長20m、短軸長1.4mで、深さは18cmである。図54-151の須恵器杯身のほか、製塩土器が出土した。須恵器はTK23型式である。

SK04 SK02の北西側に隣接する楕円形の土壙である。長径0.7m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。図54-152・153の須恵器杯身が出土した。TK208型式またはTK23型式に当る。

古墳時代に属するそのほかの土壙には平面方形のSK05のほか、SK06~08がある。また、

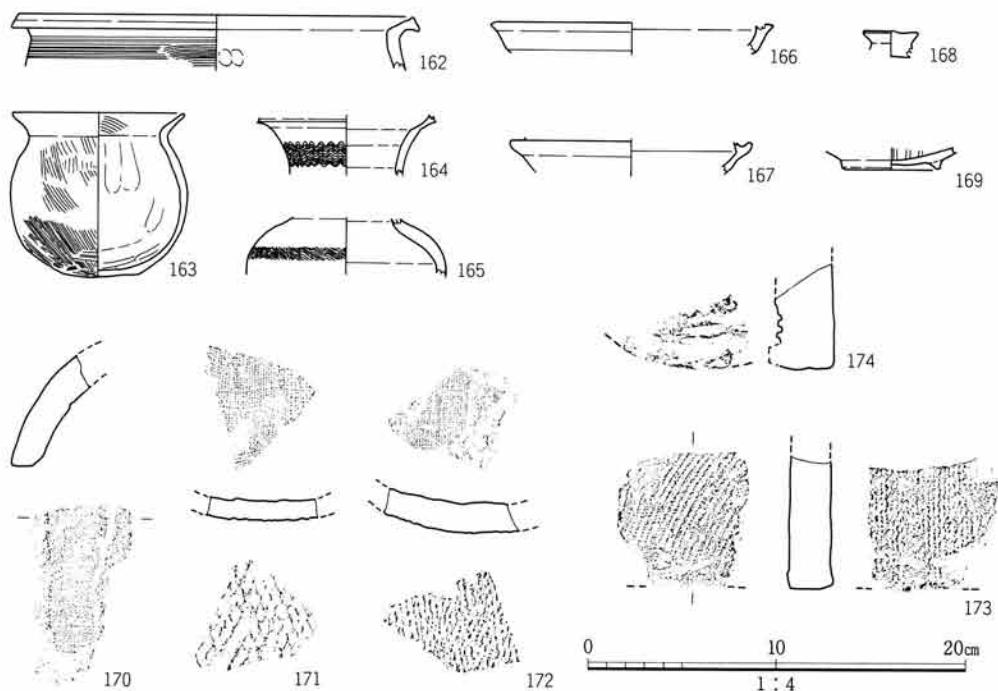


図55 SD01・03出土遺物
SD01(162・163)、SD03(164~174)

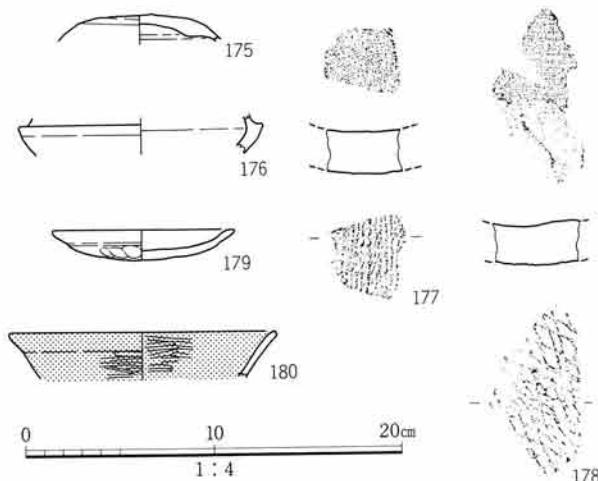


図56 SP13・14、SK10・11出土遺物
SP13(177)、SP14(176)、SK10(175・178)、SK11(179・180)

ものであったと考えられる。この2条の溝がほぼ正南北方向に合致することも考え合わせると、この付近に存在したとされる田辺廃寺に関連する遺構の可能性もある。両溝の埋土は砂礫を含む灰褐色～暗黄褐色粘土質極細砂であった。

SD03からは図55-164～174が出土している。須恵器杯身166・167はTK217型式属する。170～174は田辺廃寺に関係する瓦である。174は複弁蓮華文軒丸瓦、170は丸瓦、171～173は平瓦である。174は[山本加三1926]第3図掲載の瓦と同文と思われる。171は凸面に格子タタキメ、172・173は凸面に縄タタキメが施される。164・165の須恵器壺は古墳時代中期のもの。169の瓦器碗は混入品とみられる。

そのほかにはSK09・10、SP13・14がある。いずれも飛鳥・奈良時代の遺構と思われる。SK09は古墳時代の溝SD01を切っている。須恵器碗158が出土した(図54)。SK10からは須恵器杯蓋175と平瓦178が出土した(図56)。SP13からは平瓦177、SP14からは須恵器杯身176が出土した(図56)。

調査地東端部の土壙SK11からは土師器小皿179、黒色土器B類碗180が出土し(図56)、平安時代前半の遺構であることが判明した。

この調査では、桑津遺跡ではじめて古墳時代中期の住居址を検出することができた。同時期の土壙SK02からは須恵器・土師器がややまとまって出土した。また、飛鳥・奈良時代の2条の大溝SD02・03は、田辺廃寺の寺域を考える上で一つの手がかりとなろう。

ピットにはSP11・12がある。SK07からは製塩土器が出土している。SP12には柱痕跡がみられた。

b. 飛鳥時代以降の遺構と遺物
南北方向の大溝2条のほか土壙・柱穴が検出されている。

SD02・03 南北方向の大溝である。両者の本来の肩は、すでに削平されていると考えられるが、検出面で、SD02が幅2.4m、深さ0.4m、SD03が幅2.0m、深さ0.3mを測り、本来はさらに大規模なものであったと考えられる。

0
10
20cm
1:4

178



177



178



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



177



第8節 KW87-23次調査

この調査地(桑津5丁目3)は桑津小学校の北西230mにある。弥生時代から奈良時代の多くの遺構・遺物が見つかったKW83-14次調査地の南西20m方向に位置し、同様の成果が得られるものと期待された。調査期間は1987年10月14日~30日、調査面積は346m²であった(図58)。期間中20・21日には基準点測量を行った。

1) 調査結果

i) 層序

この調査地は後述する桑津3層以前にその大部分を削平されており、遺構は上部を削平された状況で、地山上面に検出された。遺構には溝のほか多くの柱穴があった。

桑津1層：暗灰色シルト質砂で、現代の作土である。

桑津3層：灰色シルト質砂で、中世の遺物包含層である。

地山層：黄褐色粘土質シルト層である。標高は最高所で6.6mであった。

ii) 遺構と遺物(図57~65、図版9・47~49)

a. 弥生・古墳時代

SD01 調査地東部に検出された弧状の南北溝で、後述するSD06に切られる。南部が約5mと幅広で、北では2mを測る。断面形は北端がV字形であるが、南は逆台形となる。残りのよい部分で深さ0.9mである。この溝の北端で弥生土器甕206と台付鉢201が組合さった状態で出土し(図57)、掘形は不明ながらも土器棺墓と考えられる。SD01の北方への連続部分はKW87-30次調査でも検出されている。

埋土は大きく2層に分けられる。上層からは須恵器が多く出土し、下層からは弥生土器が出土する。上層の最下部には水成層の可能性のある黒褐色シルト質粘土が堆積していた。下層は暗灰褐色砂質シルトであった。このことから弥生時代の溝が古墳時代になって掘直さ

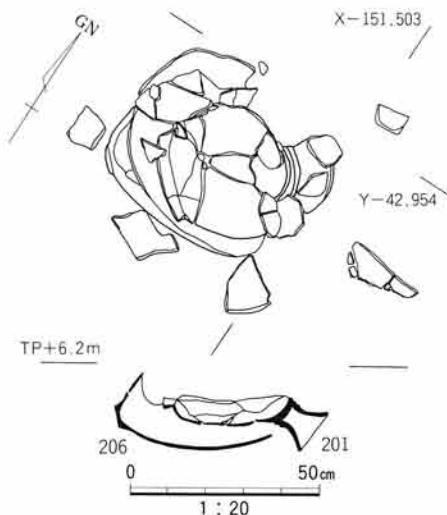


図57 KW87-23次土器棺墓実測図

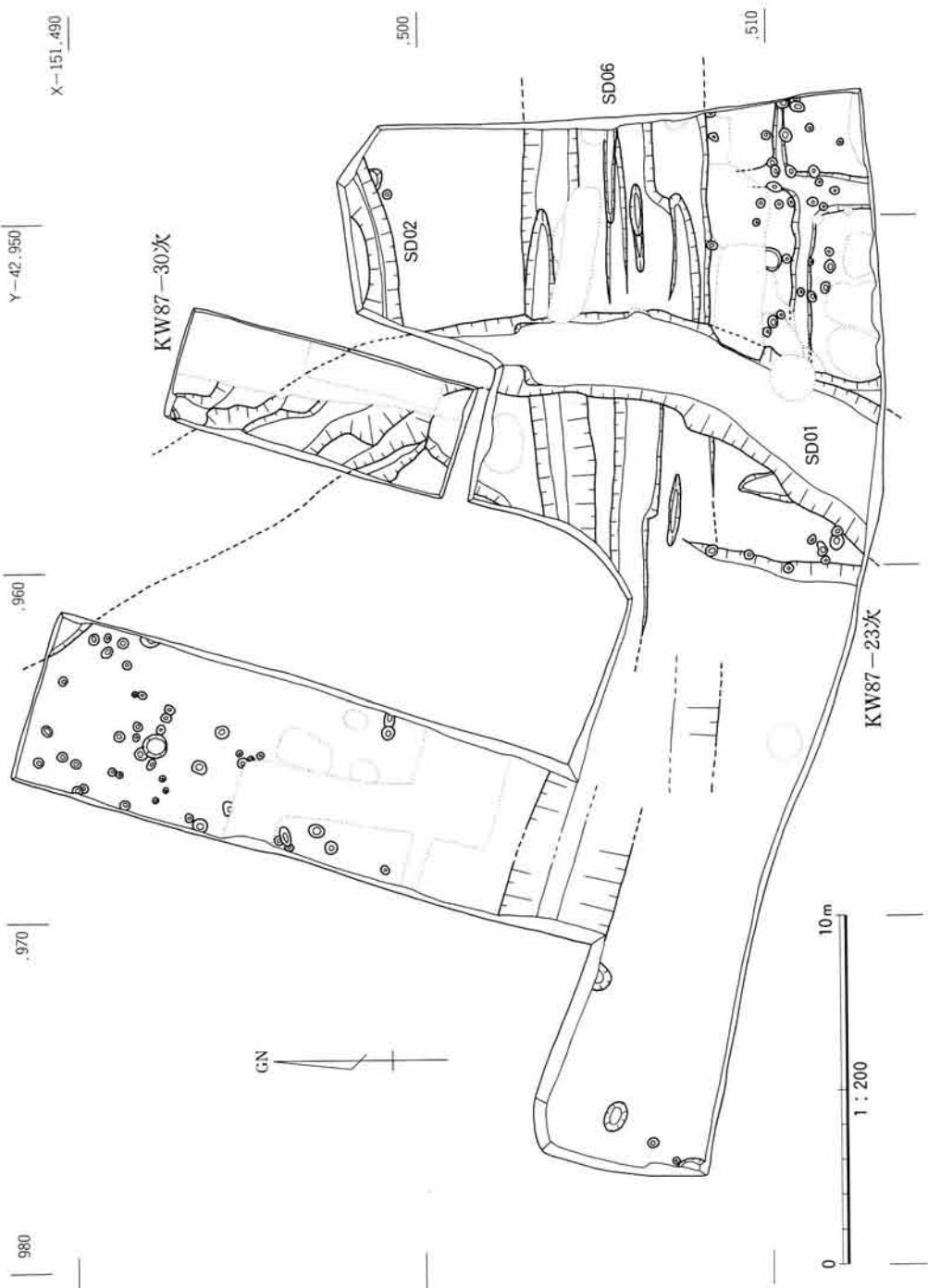


図58 調査地全体図

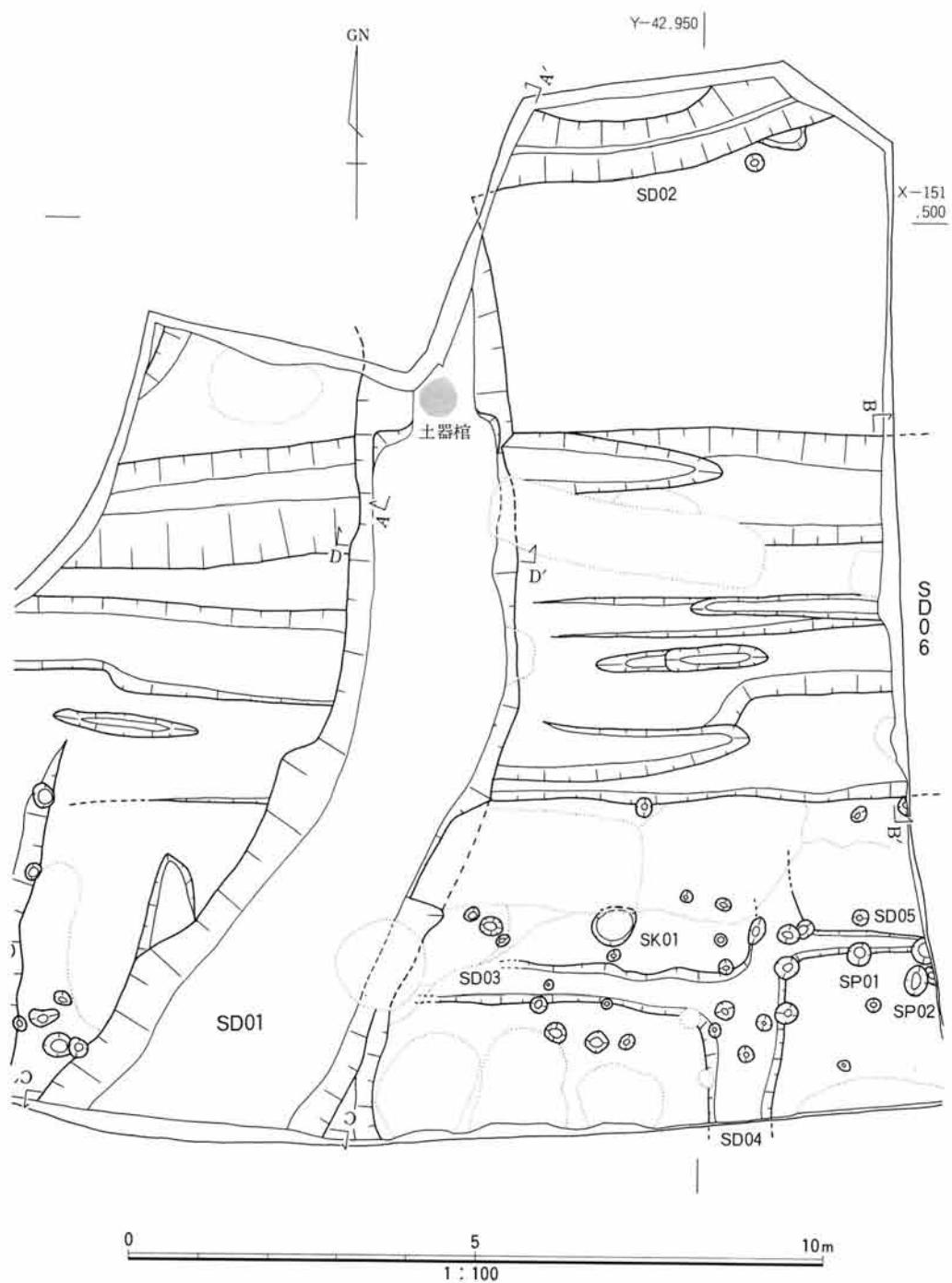


図59 調査地東半部の遺構平面図

れたと考えることもできる。

図61～63に出土遺物を示した。181～195は弥生土器壺である。広口壺には、口頸部を斜め上方に延ばした後に水平方向に屈曲させて終わるもの(186)、その端部を上方につまみ上げるもの(181～183)、口縁端部を斜め下方に垂下するもの(184・186)がある。そのほかには、有段口縁壺187～189、直口壺190もみられる。器面の装飾には櫛描による直線文・簾状文・扇形文・刺突文などがみられる。190の直口壺の体部は無文であるが、口縁部には凹線文を巡らせている。193～195は体部の破片で、器面の櫛描直線文・波状文・斜格子文からみて同一個体である。184～187・192の胎土中には角閃石が含まれ、生駒西麓産の可能性がある。

196・197は鉢、200・201は台付鉢である。また、198・199・202～206は甕である。197は擂鉢形をした鉢で、体部から口縁部が斜め上方に直線的に延びる類例の少ない鉢である。類似するものがKW85-11次でも出土している。200の口縁部には凹線文が巡り、201

の台部には断面三角形の突帯が2条巡る。甕口縁部198、甕底部202は同一個体の可能性がある。この甕と205の甕の胎土中には角閃石が認められる。

以上の遺物は溝内から出土したものであるが、時期的にある程度のまとまりをもっていると思われる。畿内第Ⅳ様式を2段階に区分するならば、その古段階のものであろう。

図63にはSD01上層の遺物を示した。210は弥生時代後期の甕の底部である。207～209は初期須恵器である。207は大型の把手付椀、208は有蓋高杯で、脚柱部に菱形の刺突文が縦に並ぶ。裾部には縦方向の暗文

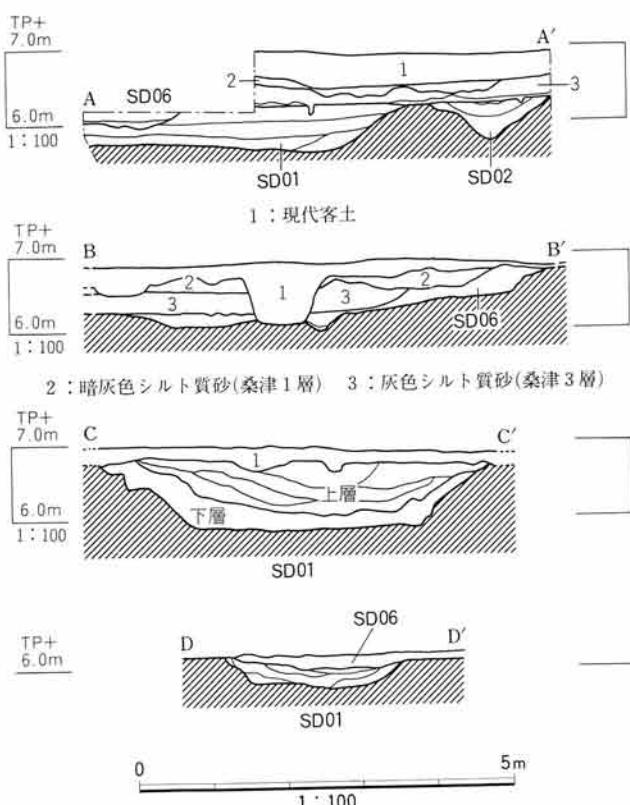


図60 SD01・02・06断面図

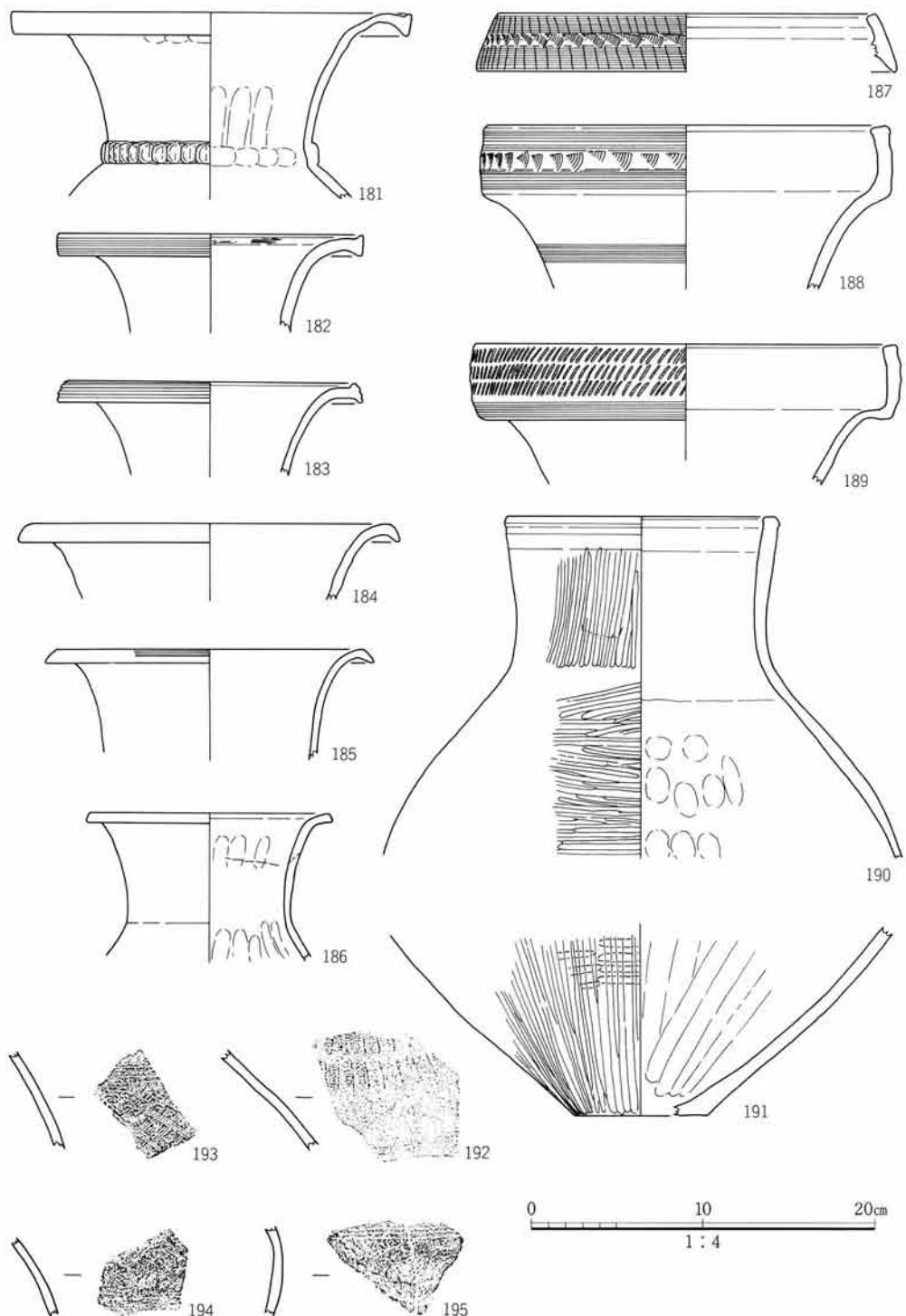


図61 SD01出土遺物(1)

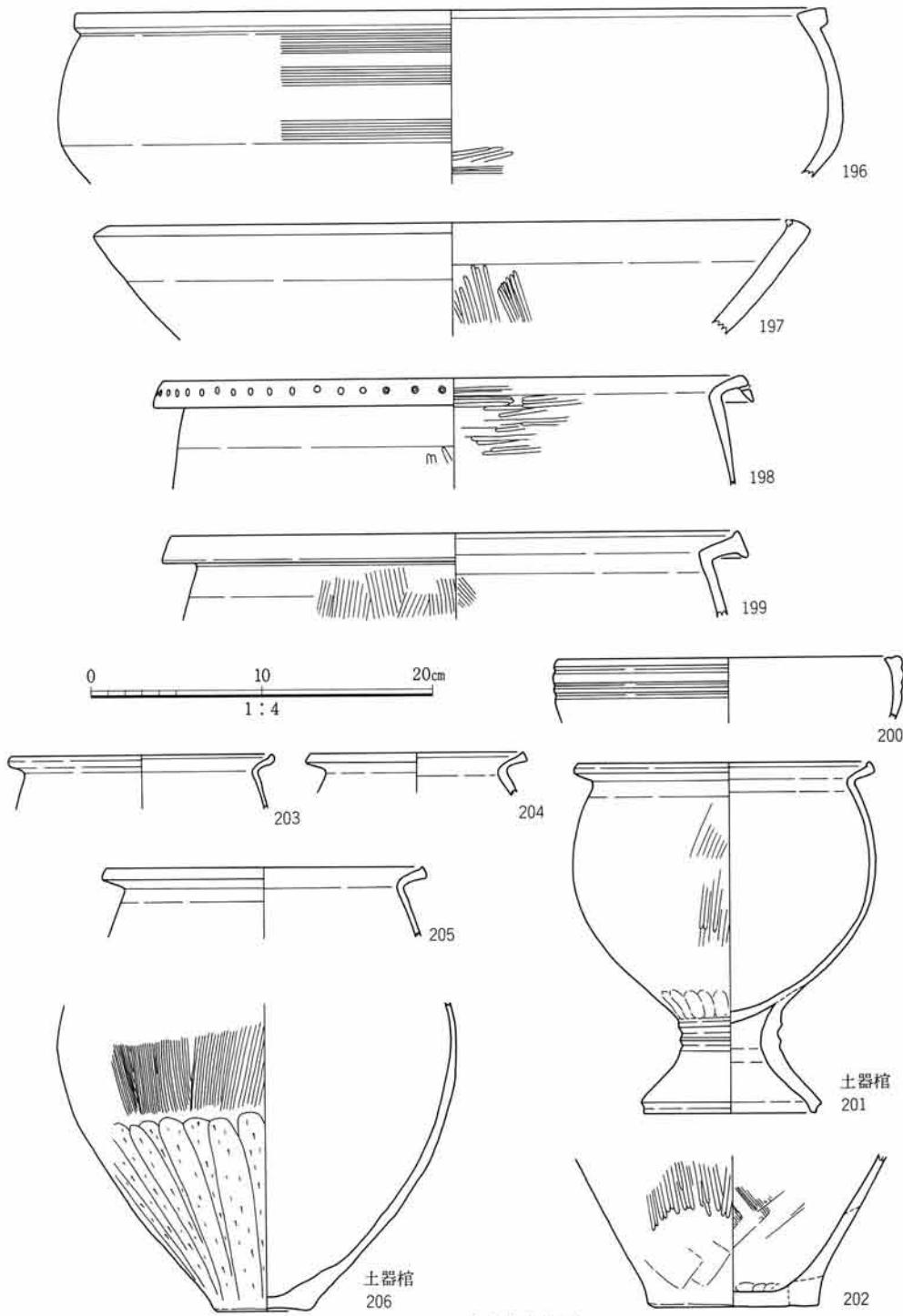


図62 SD01出土遺物(2)

状の条線が認められる。209は外面に縄蓆文タタキメと圈線のみられる壺または甕の体部である。208の有蓋高杯に関しては、[田中清美1990]に検討されており、ON46段階に属するもので、胎土や形態から陶邑産ではないと考察されている。隣接するKW87-30次調査地では、この溝の上層から馬歯が出土している。

SD02 調査地北東部に検出した東西溝で、やや弧状を呈する。幅0.8~1.0m、深さ0.4mの規模である。断面はV字形をしており、埋土は上部が含礫黒褐色シルト質粘土、下部が黒灰色粘土質シルトとなっている。西端でSD01に合流すると考えられる。

SK01 調査地南東部にある円形の土壙で、規模は直径65cm、深さ25cmある。図64-213~215の弥生土器壺が出土した。213は口縁、214は頸部、215は底部であるが、213とそのほか2点は別個体である。214には櫛描直線文がある。これらは畿内第Ⅱ様式に当る。

ピット 調査地南東部および北西部には、直径15~30cmのピットが集中する。各ピットの時期については明らかでないが、SP01から畿内第Ⅱ様式の広口壺211、SP02からは弥生土器高杯212が出土している(図64)。212の脚柱部内面にはシボリメがみられる。

b. 飛鳥時代以降

SD03~05 まず、SD04は調査地の南東部の地山が高く残る部分に検出した南北方向の溝である。この溝は、東西方向の溝SD03・05と十文字に交差する。埋土が共通していることから、これらは同時期の遺構と考えられる。SD04は幅0.6~0.9m、SD03は幅0.6m、SD05は幅0.3

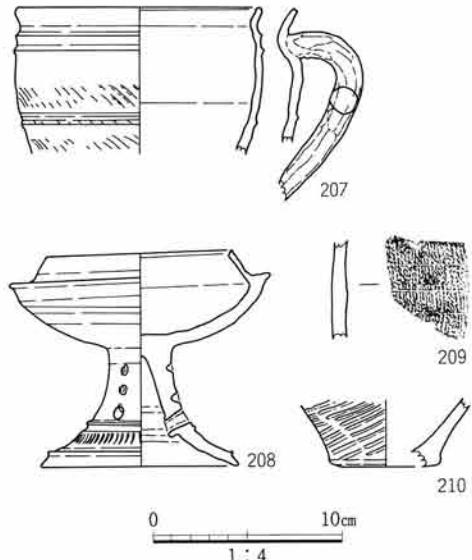


図63 SD01上層出土遺物

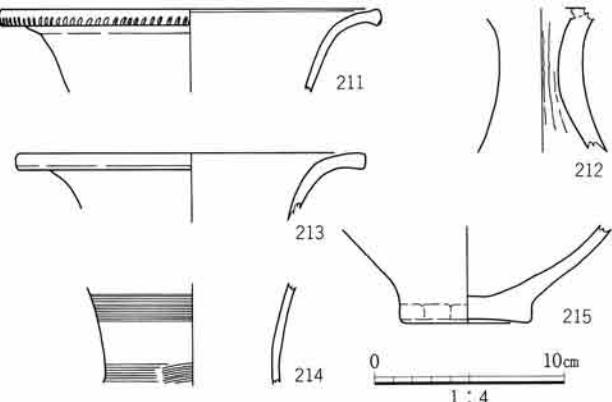


図64 SK01、SP01・02出土遺物
SK01(213~215)、SP01(211)、SP02(212)

mで、深さはいずれも5cm程度である。SD04からは弥生土器のほか、凸面に斜格子のタタキメをもつ平瓦228が出土しており(図65)、飛鳥・奈良時代の遺構と思われる。

SD06 調査地のほぼ中央に検出した東西溝で、最大幅5.4m、深さ0.7mを測る。底面には細い溝状の凹みが数条あり、平坦ではない。調査地の西部では遺存状況が悪く、痕跡を残すのみとなる。今回の調査地の東12mで行ったKW88-36次調査地でも、この溝の続きが確認されている。埋土は上部が小礫を含む暗褐色砂質シルト、下部が暗灰褐色シルト質砂である。弥生土器・土師器・須恵器のほか、瓦質土器の破片が出土しており、室町時代以降に掘られた溝であろう。

図65にSD06の出土遺物を示した。216は土師器高杯の柱状部である。217~220は須恵器で、そのうちの217・218・221は飛鳥・奈良時代の杯蓋・壺・甕である。221の甕は口縁端部に水平方向の広い平坦面をもつ。219・220・222は平安時代以降のものである。220は壺底部、219も同じく壺底部であるが、外面に静止糸切り痕を残す。222は東播系擂鉢、223・224は瓦質土器の擂鉢である。226は移動式竈、225は釣鐘形の飯蛸壺である。227は平瓦で、凸面に斜格子タタキメがみられる。226の竈は部分的な破片のみであるが、焚き口に付く庇が厚手で張出しが大きい。

2) 小結

この調査地は、中世以降に削平を受けており、地山が高く残っていたのは北西部と南東部の2箇所でしかなかった。この箇所では地表から5~10cmで地山が検出されたが、削平を受けた所では地表から60cmで地山が検出された。このような状況のため、浅い遺構はすでに破壊されてしまっていると考えられる。おもな遺構としては、SD01・04・06がある。SD01からは弥生土器と須恵器が出土したが、先に述べたように、埋土が上下2層に分けられ、古墳時代の掘直しが考えられた。また、底からは土器棺墓が検出された。遺物に関しては、SD01下層の弥生時代中期の土器群、KW85-11次に続く2例目の弥生時代後期の土器、菱形刺突文のある有蓋高杯などの初期須恵器の出土が注目される。SD04は飛鳥・奈良時代の遺構と思われ、田辺廃寺との関わりが考えられる。この溝以外からも古瓦が出土しており、瓦片だけでも20点近く出土している。KW83-14次調査地では奈良時代の建物が6棟見つかっており、この周辺には奈良時代の遺構が多く存在していると推測される。SD06は調査地の中央を東西方向に走る溝である。室町時代に掘られたと考えられ、ほぼ正東西の方位をもつことから、条里制に基づく溝の可能性もある。

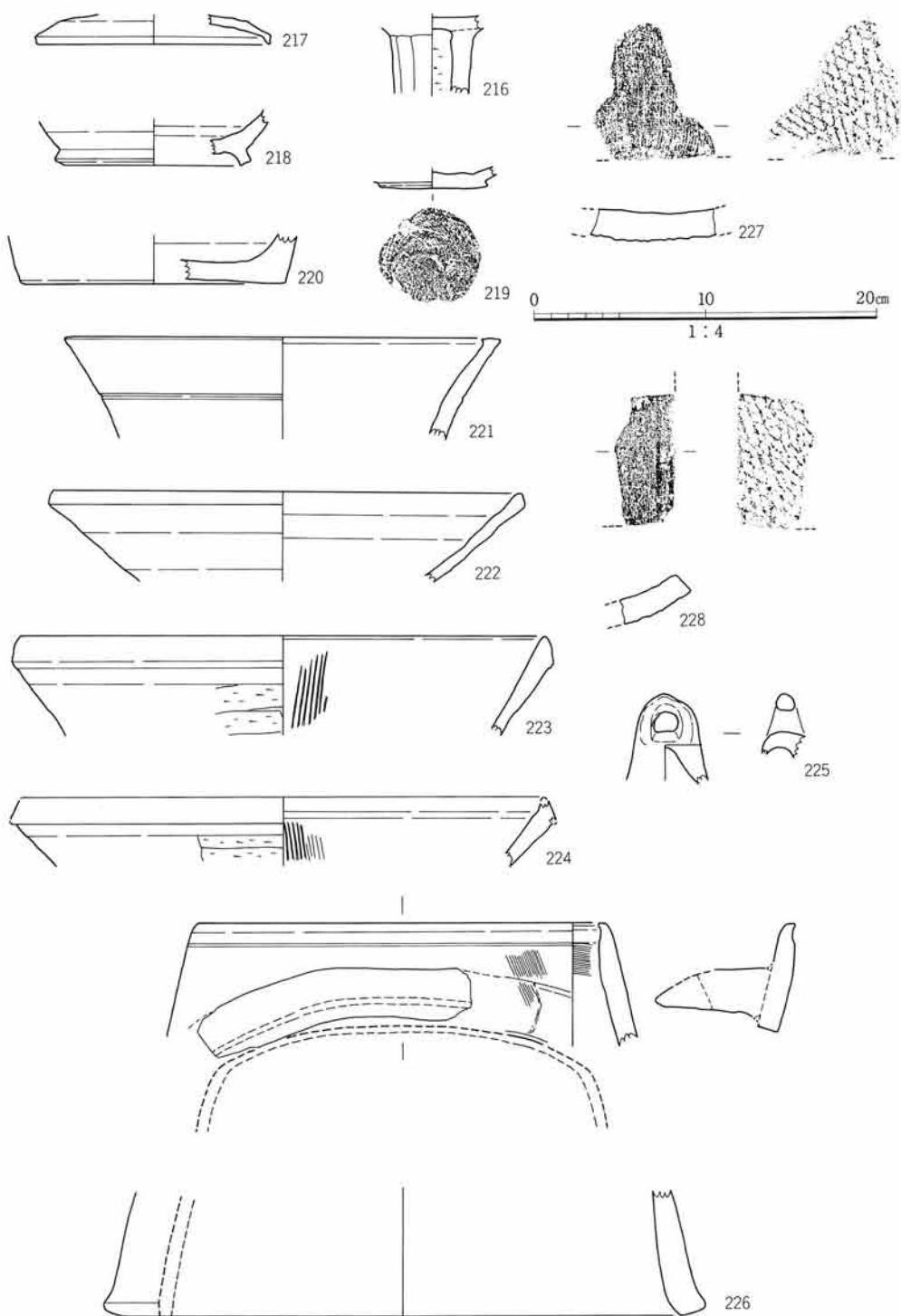


図65 SD04・06出土遺物
SD04(228)、SD06(216~227)

第9節 KW88-6次調査

1) 調査の経緯と経過



この調査地(桑津3丁目21)は京善寺境内にある(図66)。遺跡範囲の北限に近く、遺跡のほぼ中心に位置する桑津小学校の北北西350mにある。近世の環濠集落内の北西隅にも当る。調査地周辺ではKW86-3次調査が行われており、近世の環濠の一部と平安時代の溝が検出されている(第6節参照)。調査地とその西側の道路面とは1mほどの差高があり、調査地側が高い。この

状況から、調査地西の道路に沿って近世の環濠跡が推定されている。

調査地である京善寺は、承応2(1653)年の創建が伝えられる真言宗御室派の寺院で、仁和寺の末寺である。調査以前には寺の庫裏が建っていたことから、環濠集落内の寺院に関する成果が得られるものと期待された。

調査は包含層上面までを重機によって掘削し、包含層上面から地山上面までを人力で掘削した。調査期間は1988年5月6日～31日で、調査面積は198m²であった。

2) 調査結果

i) 層序(図67)

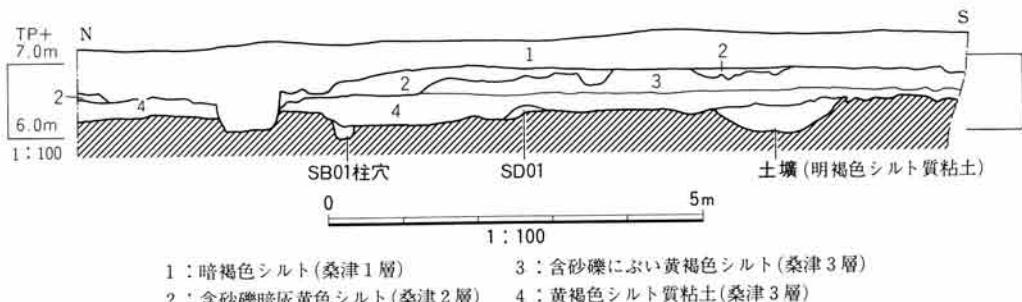


図67 調査地東壁断面図

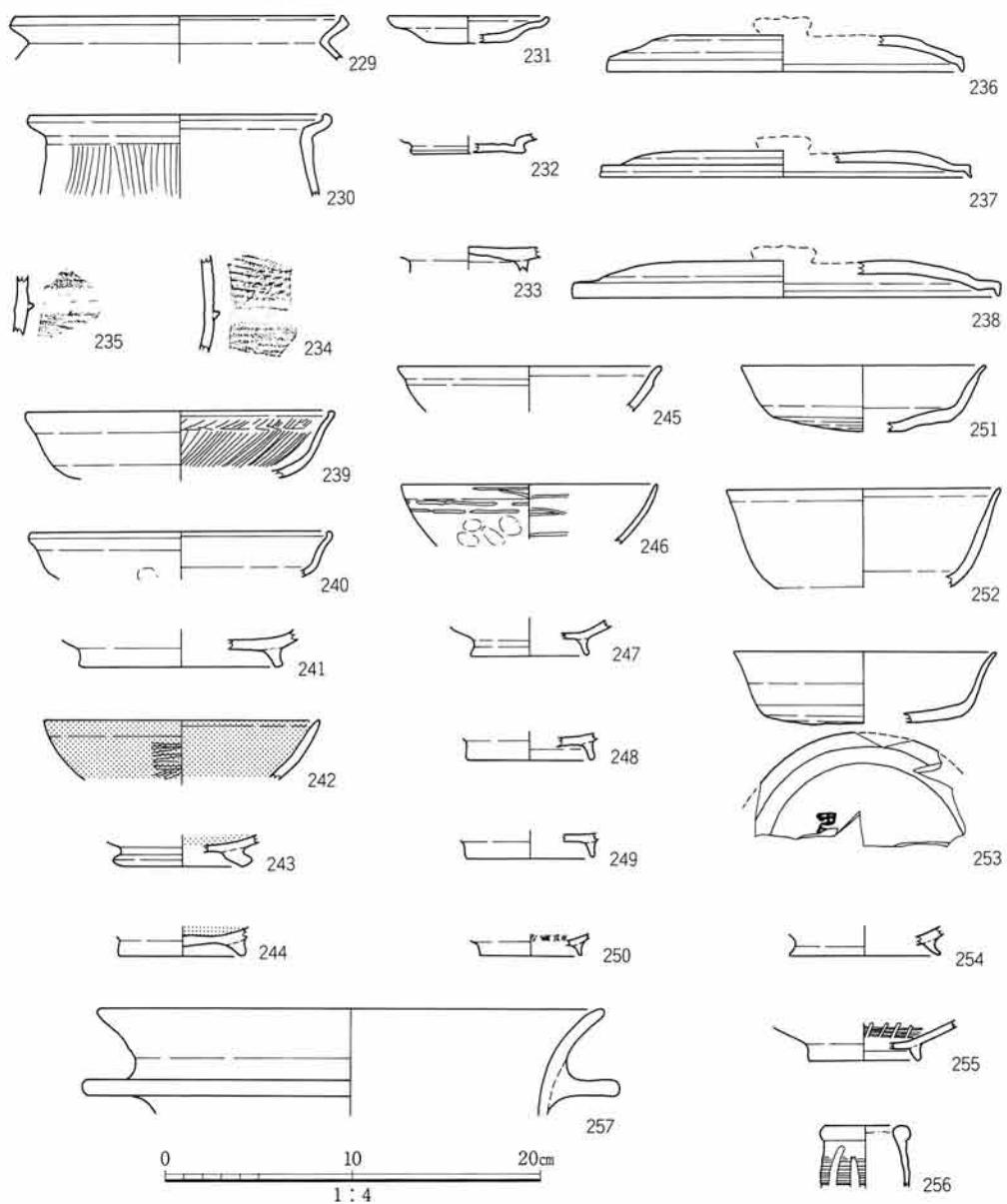


図68 各層出土の遺物

桑津2層(232~234・256)、桑津3層(229~231・235~255・257)

桑津1層：暗褐色シルト。近代から現代の表土層である。層厚は平均40cmほどである。

桑津2層：砂礫を含む暗灰黄色シルトである。本層内および下面の遺構を検出している。本層の遺存しない範囲もある。

桑津3層：この調査地では2層に大別される。上層は砂礫を含むにぶい黄褐色シルト、

下層は黄褐色シルト質粘土である。いずれにも土師器・須恵器・瓦器が含まれる。上層は層厚30cm前後、下層は層厚40cm前後である。本層の下面および基底面で、弥生～鎌倉時代の遺構を検出している。

地山層：明褐色シルト質粘土である。標高6.2～6.5mの範囲にある。

ii) 各層出土の遺物(図68)

桑津2層出土遺物 256は瀬戸焼の火入れで、18世紀後半から19世紀のものである。本層の時期を示すものといえる。232は須恵器の椀で、底部外面に糸切り痕をもつ。233は緑釉陶器の椀である。胎土は一般の緑釉と比べて粗く、暗灰色を呈し、底部には糸切りのうち高台を貼り付ける。以上の2点は平安時代の遺物である。234は初期須恵器と思われるが、あまり類例をみない。体部の破片で、断面三角形の突帯が横方向に付けられており、その上方には平行タタキメが施される。桑津3層からも同じ個体の破片235が出土している。

桑津3層出土遺物 231は土師器小皿、245～250・254・255は瓦器椀である。これら平安時代末期の遺物が本層の時期を示す。239・240は土師器杯、241は土師器椀、242は黒色土器B類椀、243・244は黒色土器A類椀、236～238は須恵器杯蓋、251～253は須恵器杯である。これらは奈良～平安時代前半の遺物である。須恵器杯253の底部外面には「田□」という墨書がみられる。257は飛鳥時代の土師器羽釜で、外反する口縁部の直下に水平方向の鍔を付ける。色調はにぶい赤褐～褐色で、胎土中に角閃石を含む。229・230は弥生時代中期の甕である。230の口縁部は外湾ぎみになり、先端が丸くおさめられる。また、体部には粗いハケメがみられるなど、特異な形態をとる。

iii) 遺構と遺物(図版10・50・51・94)

a. 弥生時代

この時代の遺構は桑津3層の基底面で検出され、方形周溝墓・土器棺・溝・土壙がある。遺構埋土はいずれも明黄褐色シルトで、地山層との区分には困難な部分もあった。

方形周溝墓1 調査地の南部にある弥生時代中期の周溝墓である(図69)。墳丘盛土は完全に削平されており、周溝と考えられる溝のみが検出された。北北西～南南東方向をとる2条の溝が5mほどの間隔をおいて並走しており、これが東西の周溝にあたる。両溝が途切れる北端には北周溝と考えられる溝が確認できる。南周溝は調査地外になる。東周溝は幅0.7～2.0m、深さ0.3mが残る。西周溝は幅1.1～2.0m、深さ0.6m、北周溝は幅1.1m、深さ0.4mである。復元される墳丘規模は東西約5m、南北約10mである。北周溝の中央部には、長さ約1.8m、幅約0.8mの長方形の凹みがある。その部分で周溝の底が約0.2mの深

さで平坦に掘込まれており、埋葬施設であった可能性もある。東周溝の途中から墳丘側に入込む幅0.5m、深さ0.2~0.3mの溝がある。この溝は東周溝から1.7mほど入込んでおり、方形周溝墓が拡張され、最終的に完成される以前の北周溝であったと思われる。東周溝内からは供献された壺が4個体以上出土している。

図70-259・260・262は東周溝の南部にまとまって見つかった。そのうちの259は周溝内に正置された状況で出土した。259は広口壺で、口縁部下端に刻み目、頸部から体部上半にかけては櫛描直線文で飾る。260は直口壺で口縁部に1条の凹線文を巡らすが、そのほかの部分に文様はない。262は器高13.0cmの小型の広口壺で、無文である。258は東周溝の北方への延長部分で出土した。頸部の太い広口壺である。体部の中位付近に櫛描直線文・波状文を施す。これらの土器は畿内第Ⅲ様式の新段階に位置づけられよう。

土器棺墓 前述の方形周溝墓の東周溝から1mほど隔たった場所にあり、調査地のほぼ中央にある。棺の掘形は楕円形を呈し、長径0.8m×短径0.6m、深さ15cmほどが残る(図72)。長軸方向に合わせて大型の壺を横位置に据え、口縁部を北向きとする。口縁部分の閉塞方法は明らかでない。掘形の長軸は隣接する方形周溝墓の長辺と平行しており、両者の関連を推測できる。

棺に転用された土器は器高51.5cmを測る大型の広口壺266である(図71)。頸部下端に指

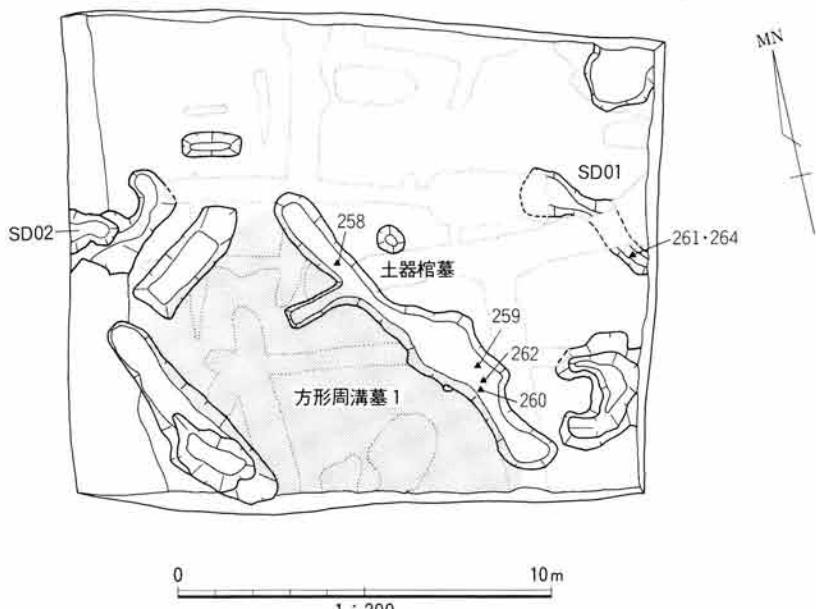


図69 弥生時代の遺構平面図

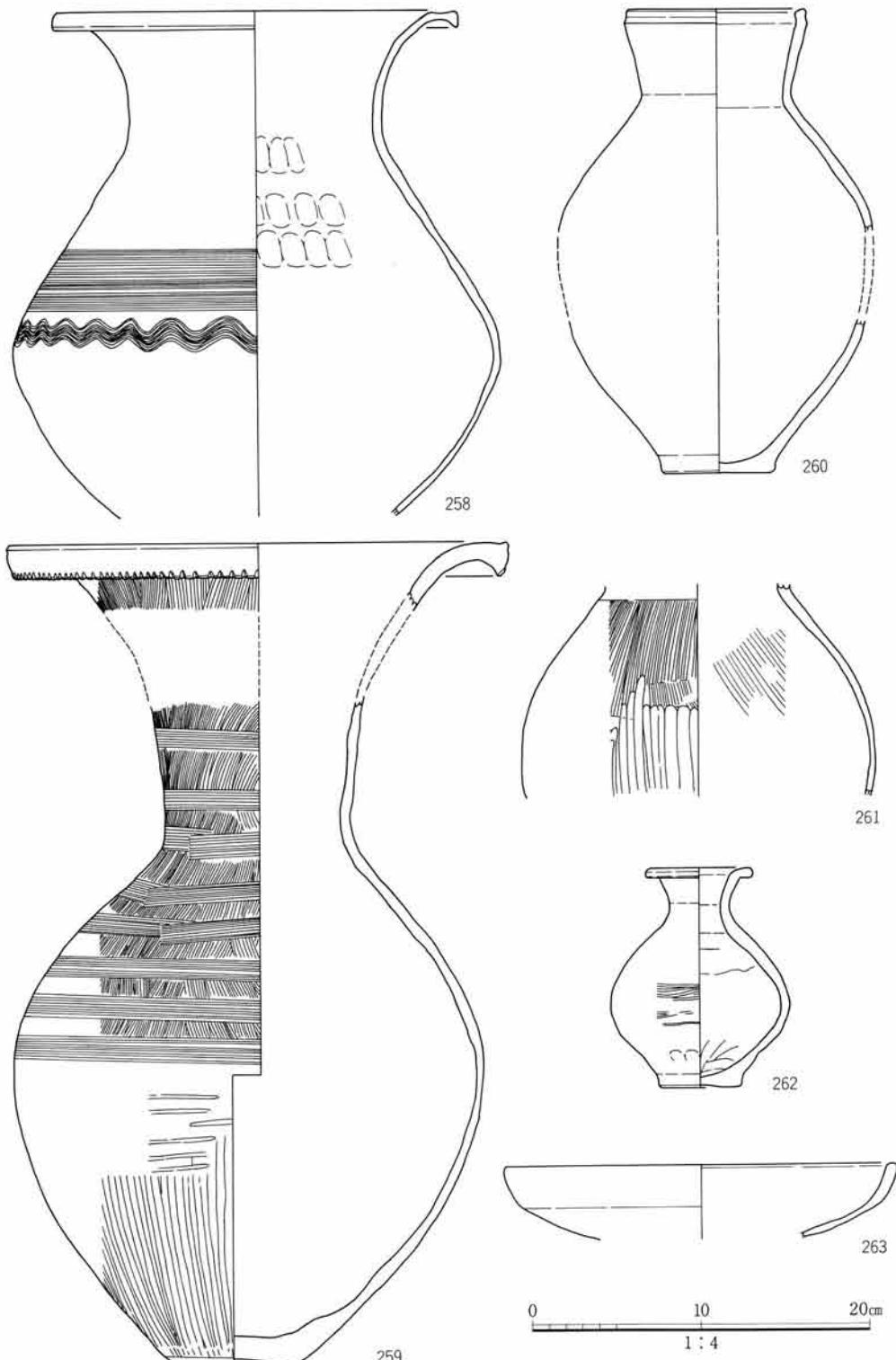


图70 方形周溝墓1·SD01·02出土遺物

方形周溝墓1(258~260·262)、SD01(261)、SD02(263)

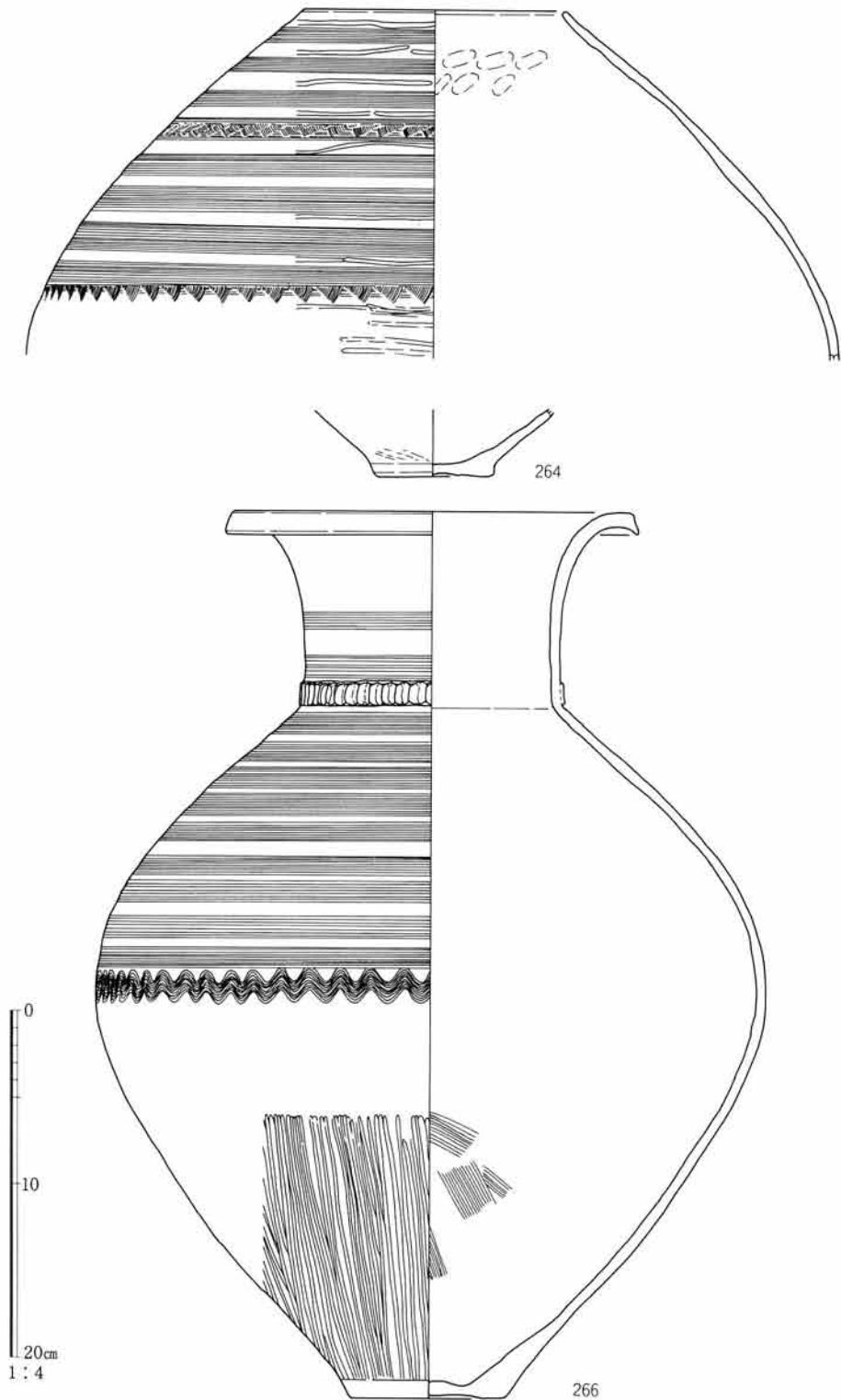


図71 土器棺墓・SD01出土遺物

土器棺墓(266)、SD01(264)

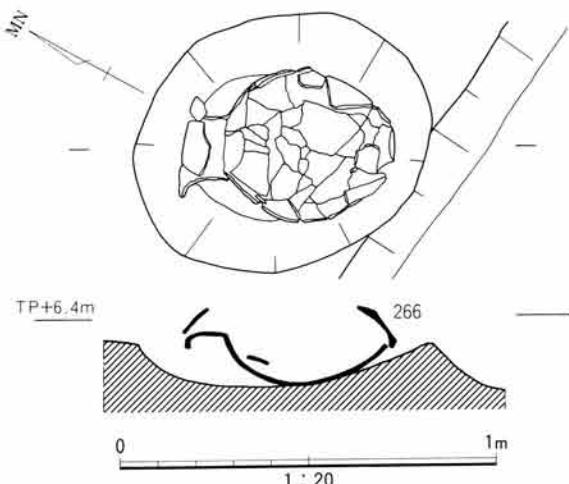


図72 土器棺墓実測図

頭圧痕突帯文を巡らす。体部最大径位置には櫛描波状文を1条施文し、その直上から頸部までを櫛描直線文で埋める。畿内第Ⅲ様式新段階のものと考えられる。

SD01 調査地東部にあり、方形周溝墓の東周溝などとも平行する溝である。幅0.5~0.8m、深さ約0.2mを測る。埋土の状況も周溝と同様であることから、この溝も方形周溝墓の周溝の可能性が考えられる。遺構と調査地東壁とが交差する手前の位

置で、以下に述べる土器が出土した。

図70-261は壺の体部で、外面をハケ調整の後、縦方向にヘラミガキするが、文様は施されていない。図71-264は大型の無頸壺の体部上半部および底部である。体部には櫛描直線文が8段分施文され、その間に、直線文の上に重ねるように2段分の扇形文が入れられる。扇形文の向きは上下段で逆向きとなっている。色調は明褐色で、胎土中に角閃石を含むことから、生駒西麓産と思われる。この2点は畿内第Ⅲ様式に属すとみられる。

SD02 調査地西端に検出された溝の先端部である。高杯の杯部263が出土した(図70)。また、弥生時代中期の凸基有茎式石鎌267も出土している(図73)。石鎌は完形で、外湾ぎみの長い作用部と舌状に突出する茎部をもつ。長さ5.00cm、幅1.60cm、厚さ0.65cm、重量

4.3 gである。

b. 平安・鎌倉時代

この時期の遺構は桑津3層の基底面および下面に検出される。掘立柱建物・溝・土壙・ピットなどの遺構があった(図74上)。

SB01 調査地東半部に確認された掘立柱建物で、全体は検出できていない(図75)。桑津3層基底面の遺構である。東西棟で、桁行3.0m(3間)以上、梁行2.1m(2間)の規模をもつ。柱穴は円形または隅丸方形で、

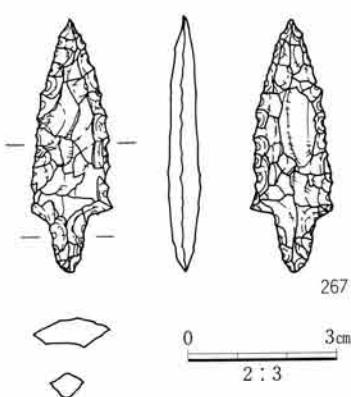
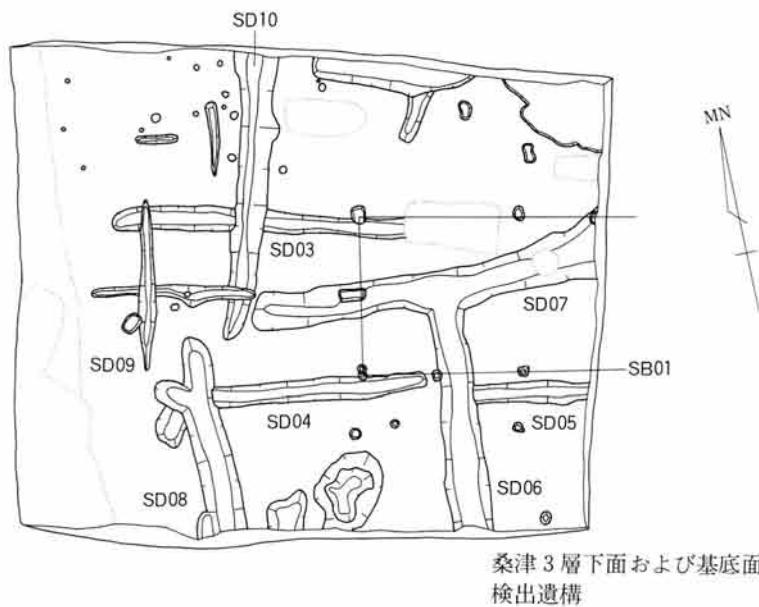
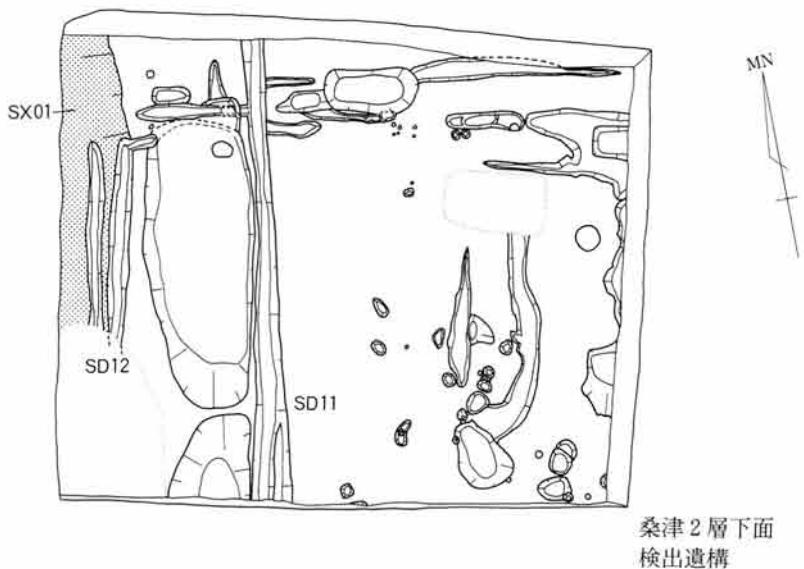


図73 SD02出土石鎌



桑津3層下面および基底面
検出遺構



桑津2層下面
検出遺構

0 10m
1 : 200

図74 平安～江戸時代の遺構平面図

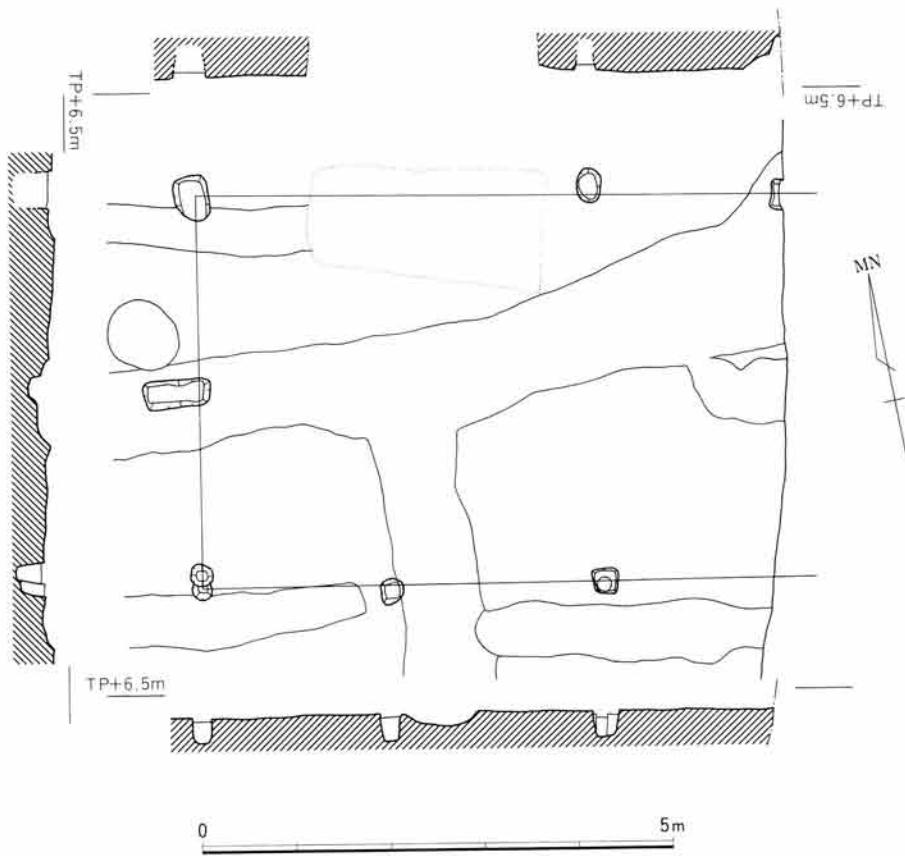


図75 SB01実測図

前者は直径0.2~0.3m、後者は一辺0.3~0.7m、深さはいずれも0.3m前後である。埋土は褐色シルト質粘土であった。柱穴から黒色土器・土師器皿が出土している。SD03・04に切られる関係にあり、平安時代前半の遺構と推定される。

SD03~05 桑津3層基底面の東西方向の溝である。SD03とSD04・05は約4mの間隔をおいて並走する。幅0.4~0.5m、深さは0.1mほどである。SD03から図76-274の須恵器杯B、SD04から269の土師器杯が出土した。これらは平安時代前半の遺物である。

SD06~08 桑津3層下面の溝である。東西または南北方向をとり、何らかの区画を示すものと推測される。幅は1.0m前後、深さは0.2m以下である。SD06からは瓦器椀273、SD07からは土師器小皿270、土師器椀271、瓦器椀272が出土した(図76)。これらは平安時代末期の遺物である。

SD09・10 桑津3層下面の溝である。南北方向をとるが、前述のSD06・08とは若干方

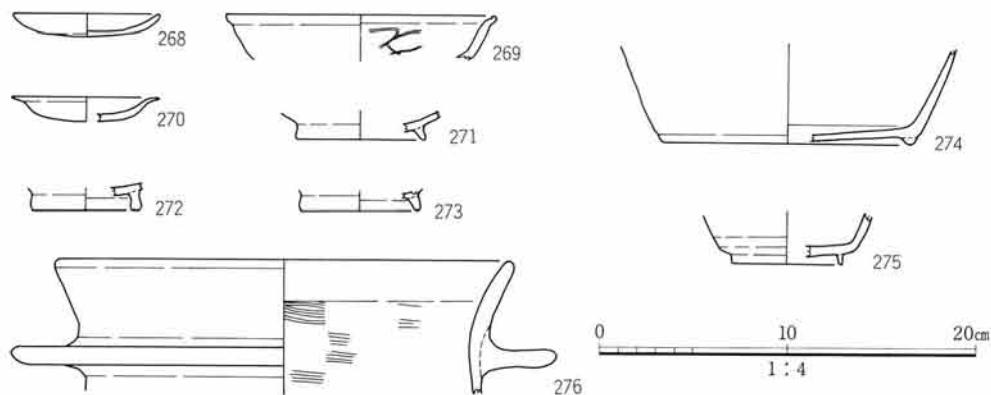


図76 各遺構出土の遺物(桑津3～5層)

SD03(274)、SD04(269)、SD06(273)、SD07(270～272)、SD09(268、276)、SD10(275)

向が異なり、北で東に振っている。SD09からは鎌倉時代の土師器小皿268、土師器羽釜276が出土している(図76)。羽釜は、各層出土の遺物の中で述べた図68-257と同様の生駒西麓産とみられる胎土である。SD10からは須恵器杯B275が出土した。

c. 江戸時代

この時代の遺構としては、桑津2層下面に検出された溝・土壙・ピット・落込みがあった。これらの遺構どうしには切合い関係がみられることから、時期差が認められるものの、環濠の肩と思われる落込みを除き、17世紀代までさかのほる遺構は存在しないと思われる。(図74下)。

SD11・12 どちらも南北方向をとる溝で、SD11は幅0.4～1.1m、深さは約0.3m、SD12は幅0.4～0.5m、深さは約0.2mである。前者から遺物は出土していないが、後者からは肥前陶磁器が出土している。

SX01 調査地西端で検出した落込みである。調査地西側の道路が環濠の痕跡と推定されることから西環濠の東肩部であると考えられる。

調査終了後、調査地の東に素掘りの井戸2基が発見された。江戸時代後期～明治時代にかけてのものと思われる。

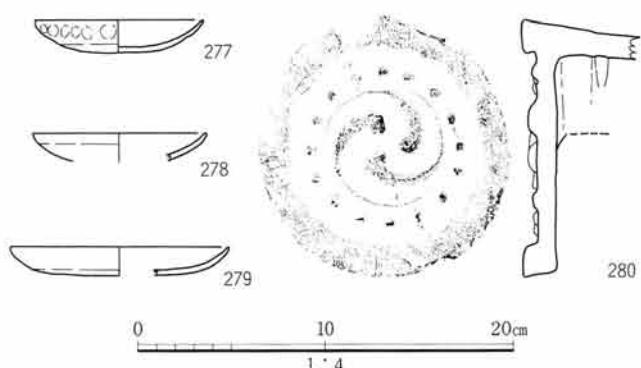


図77 各遺構出土の遺物(桑津2層)

図77に桑津2層下面の各遺構内から出土した遺物を示した。277～279は土師器小皿である。280は巴文軒丸瓦である。16個の珠文を配し、外縁高は低い。

3) 小結

本調査では弥生時代を中心とし、古代～近世の遺構を検出することができた。

この調査が行われるまで、弥生時代の方形周溝墓は、駒川の東に位置する東住吉中学校内でまとまって検出されているだけであった。こうした状況から、駒川を境に標高の高い西部に居住域が存在し、低い東部に墓域が存在するという想定がなされていた。当調査地は東住吉中学校内の調査地と比べると約2m標高が高く、この地点に方形周溝墓が確認できたことは、従来の想定に修正を加える成果であるといえる。

包含層内から出土したものであるが、「田□」墨書土器の出土も注目されよう。「田」に続く文字はごく一部であり判読できないが、この地域に居住した氏族と考えられる「田辺史」[直木孝次郎1988]との関連が推測される。

調査地の京善寺は承応2(1653)年創建と伝えられているが、この調査では17世紀代の目立った遺構・遺物は認められなかった。

第10節 KW88-21次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(北田辺2丁目12)は桑津遺跡の西部に位置し、白鳳期創建の寺院址である田辺廃寺の推定地北辺にある。1988年7月19日、調査に先立ち敷地内南北2個所に試掘場を設けて立会調査を行った。その結果、地山である低位段丘層が地表下0.6~0.8mに、南から北に緩やかに傾斜する状況で検出された。特に、南試掘場の地山層直上では、土師器・須恵器細片を含む包含層が確認された。この試掘結果に基づき、本調査を行うこととなった。

本調査では、排土を敷地外に搬出できないことから調査地を南北に分け、南区をまず調査し、続いて北区を調査することにした。同年8月2日に南区を機械掘削したところ、表土層直下が地山層という状況であった。地山層の直上に遺構が認められなかったことから、写真撮影・平板測量を行い、即日中に埋戻した。北区の調査は8月3日から行い、現代盛土(桑津0層)とシルト含みの灰黄色砂礫層(桑津1層)を機械で除去し、それ以下は人力で掘削した。調査期間は88年8月2日~8日、調査面積は157m²であった(図78)。

2) 調査結果

i) 層序

調査地の北部は、後述する桑津3層段階に田畠などの造成のため地下げされたらしく、調査地の北端から南8~9mの位置に段差が存在する。段差の高低差は0.4m程度あり、低くなる北側では、地山層の直上に桑津3層が堆積している。試掘調査で包含層としたものはこの地層であった。

桑津0層：調査地西半に分布する現代客土で、層厚5~20cmを測る。

桑津1層：近・現代の旧表土層。上部は含シルト灰黄色砂礫で、層厚は10~45cmある。下部は黄白色粗砂からなる地層で、層厚4~30cmある。調査地北端には、本層に属す灰黄

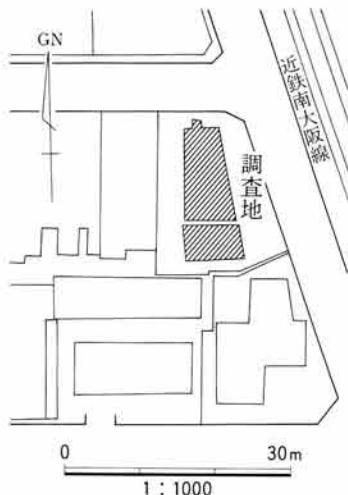


図78 KW88-21次調査位置図

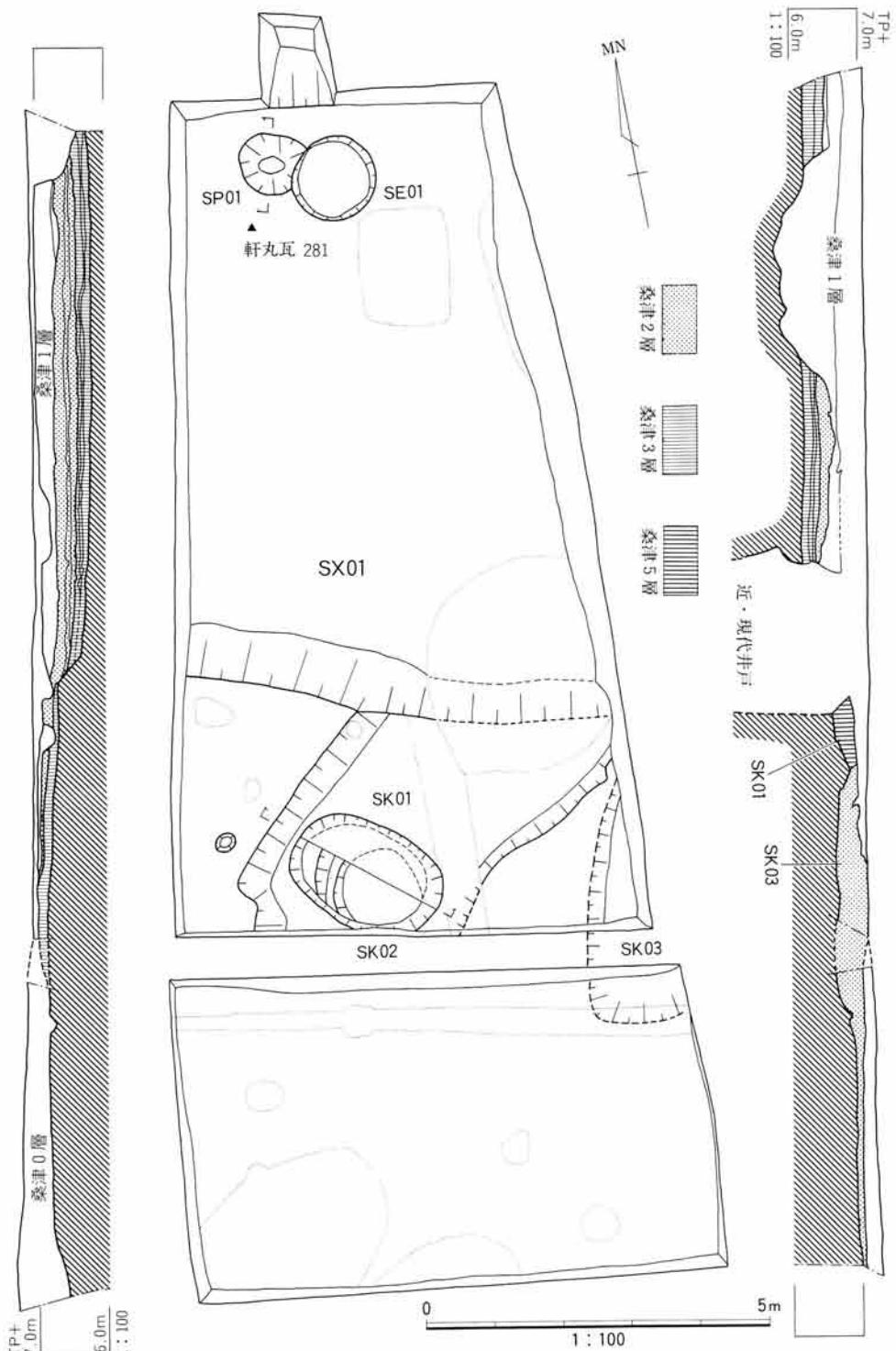


図79 調査地全体図および断面図

色砂が層厚3~10cmで分布する。

桑津2層：上部はシルトを含む暗褐色砂からなる地層で、主として段差より北側に分布し、SK03の埋土ともなる。層厚は5~25cmを測る。下部は赤褐色粘土またはシルト含みの赤灰褐色粘土で、段差より北側の西半部に分布する。層厚は20cm前後である。

桑津3層：主として段差より北側に分布する。上部は粗砂を含む黄褐色シルト、下部はシルトを含む明黄色砂礫で、間に含シルト灰褐色砂礫の薄層を挟む。層厚は20~30cmである。本層中から図81-281の複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している（図79）。この瓦についての記述を[宮本佐知子・佐藤隆1996]より抜粋する。「瓦当は大きな平らな中房に1+6の平らな蓮子を配し、複弁の弁の中央部が高く盛り上がっている。弁端は低くなるが、弁の縁取りのみが反転する。間弁は太く長い。（中略）胎土は細かく、焼成は軟質である。」

桑津5層：粗砂を含む黄褐色粘土層で、段差の南側に部分的に残る。SK01の埋土でもある。SK01の出土遺物から飛鳥・奈良時代の地層と考えられる。

地山層：橙色砂礫からなる地山層である。調査地南区で標高7.0m、北区で6.2mである。

ii) 遺構と遺物（図版11・81・94）

古代の遺構にSK01、中世の遺構に調査地北半部の地下げによる凹地SX01やSP01、近世の遺構にSE01、SK02・03がある（図79）。

SK01 北区南端にある溝状の土壤である。遺構の南端は北区と南区の境界のアゼ内にあり、北端は後述するSX01や近・現代の井戸によって破壊されている。そのため全体の規模は明らかでないが、幅2.5~3.2m、深さ0.4mで、北で東に40°ほど振った方向に長軸をとっている。桑津5層の粗砂を含んだ黄褐色粘土などで埋没している（図80）。図81の須恵器・瓦片が出土した。飛鳥・奈良時代の遺構と考えられる。

282は丸瓦、283・284は平瓦である。282の凸面はタタキメが擦り消

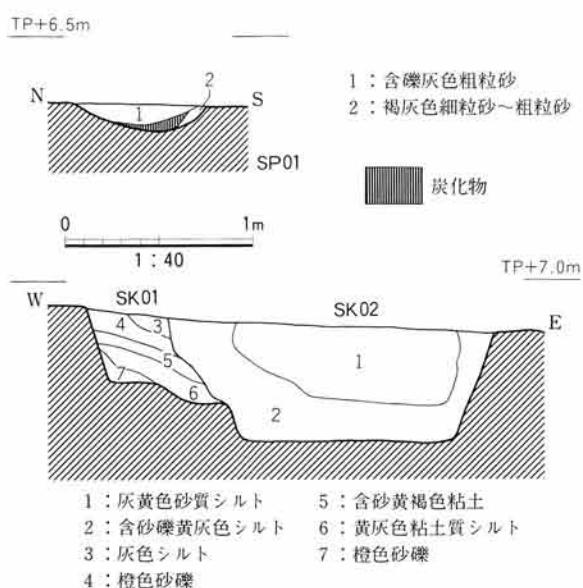


図80 SK01・02、SP01断面図

されている。283の凸面には斜格子タタキメ、284の凸面には縄タタキメがある。285・286は須恵器甕の体部の破片である。285の外面には斜格子状タタキメ、286には平行タタキメがみられ、内面にはどちらも当て具痕を残している。

SX01 調査地北半部の地下げされた範囲をさす。桑津3層段階に形成されたものである。調査地南半部とは0.4mほどの段差をなしている。段差の肩は東西方方向をとり、SK01の北部を切る。東半部は近・現代の井戸によって破壊されている。桑津3層からは須恵器・土師器のほか瓦器椀が出土しており、平安時代末期以降の遺構といえる。田畠などの造成のため地下げされたものであろう。

SP01 調査地の北端部で、桑津3層基底面に検出された。直径1.0m前後、遺存する深さ15cmのピットで、底に厚いところで8cmの炭化物が堆積する(図80上)。上述のSX01が造られた際に、上部が削平されているとみられ、本来は50cm以上の深さがあったと思われる。遺物は出土していない。東側の一部をSE01に切られる。

SK02 北区南端、SK01の直上にある、平面が楕円形の土壙である。桑津2層基底面で検出された。長径2.3m、短径1.6m、深さ0.4~0.7mの規模をもつ。その上部に、上端直径1.7m、下端直径1.1mほどの桶のようなものを据えていたようで、廃絶の際、桶状の容

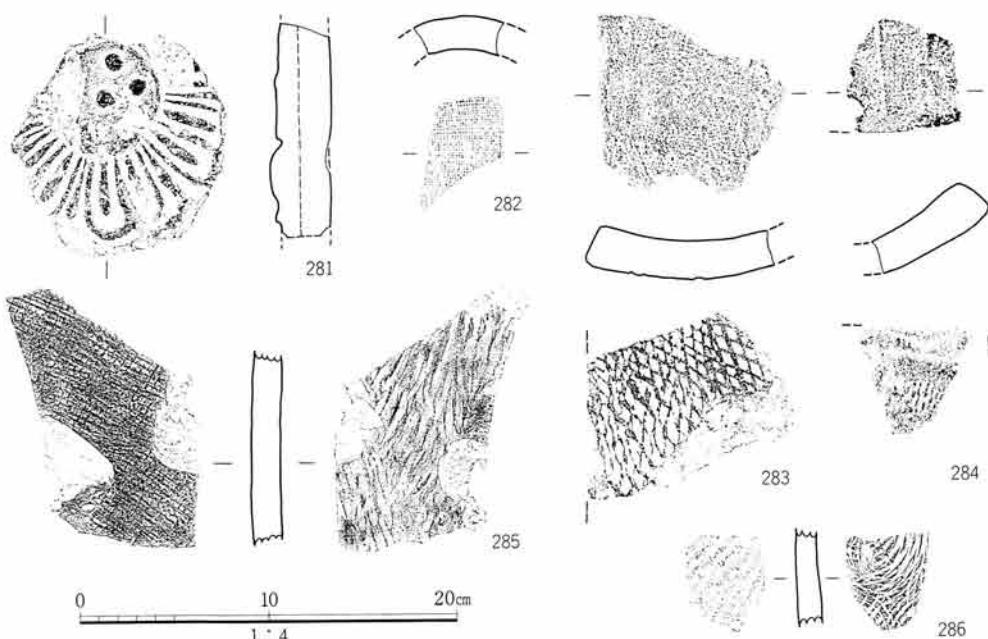


図81 桑津3層・SK01出土遺物
桑津3層(281)、SK01(282~286)

器を抜き取り、シルトを含んだ黄灰色砂で埋戻したものと思われる(図80下)。土師器・須恵器小片が出土した。

SK03 調査区東壁寄りで、北区と南区とにまたがって検出された土壙である。桑津2層下面の遺構である。平面規模は明らかでないが、深さは約0.3mである。

SE01 調査地北端部にある桑津2層内の井戸である。江戸時代中期以降の陶磁器・瓦が出土しているほか、図82-287の打製石劍の先端部が見つかった。石劍片面の鎬の部分には研磨した痕跡が認められる。残存長3.00cm、残存幅2.50cm、厚さ1.00cm、重量5.0gである。

この調査では、古代の土壙SK01の検出と、複弁蓮華文軒丸瓦の出土が注目される。田辺廢寺に関わる瓦が出土したことは、寺域の推定の参考資料となろう。

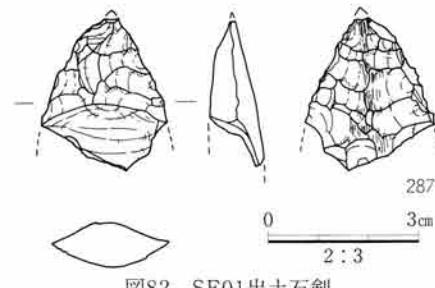


図82 SE01出土石劍

第11節 KW88-36次調査

1) 調査の経緯と経過

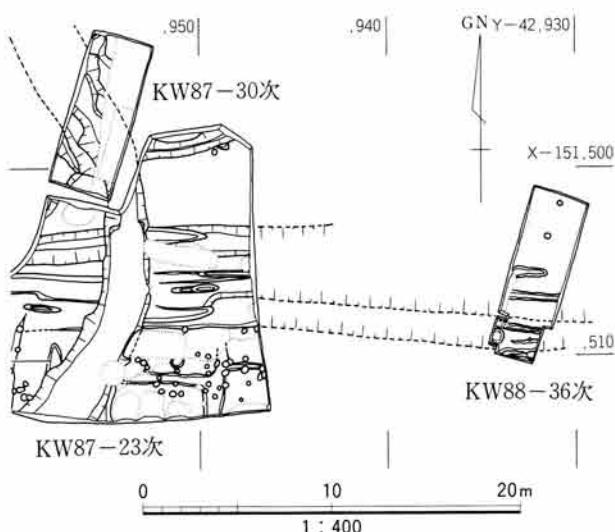


図83 KW88-36次調査地と周辺の調査

立会において、敷地の西半部は現代の攪乱などによって、包含層および遺構面が既に損なわれていると考えられたことから、東半部のみを対象にして調査を実施した。調査期間は1988年10月31日～11月5日、調査面積は26m²であった。

2) 調査結果

i) 層序

調査地の基本層序は図85に示すように、現代の客土下に桑津1・3・5層が確認される。

桑津1層：砂を含むオリーブ灰色シルトで、旧家屋の建築に伴って整地されるまでの旧耕作土である。

桑津3層：砂を含む灰褐色シルトで、敷地の北側4分の3に分布している。層厚は約40cmである。後述する桑津5層や地山層を掘削し、地下げした後に堆積したもので、下面に耕作に係わると思われる溝が認められたことから、室町時代の耕作土と考えら

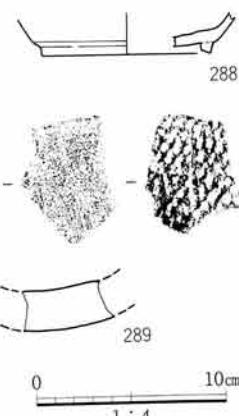


図84 桑津5層出土遺物

調査地(桑津5丁目10)は桑津遺跡の西部に位置する。周辺ではKW83-14次、KW85-13次、KW87-23次、KW87-30次といった調査がすでに実施されており、遺跡内でも調査地の集中している場所の一つである(図83)。これらの調査地では弥生時代から平安時代を中心とする多くの遺構・遺物が見つかっており、本調査地においても同様の資料が得られるものと予想された。しかし、試掘

れる。本層の下面にはSD01・02が検出された。

桑津5層：本層は含砂暗褐色シルトで、弥生時代から奈良時代の遺物が含まれている。この地層は調査地の南側に、層厚20cm程度で分布する。本層下面の遺構としてSD03・04がある。

本層から図84-288・289が出土した。288は奈良時代の須恵器杯Bである。289は凸面に斜格子タタキを施す平瓦片である。

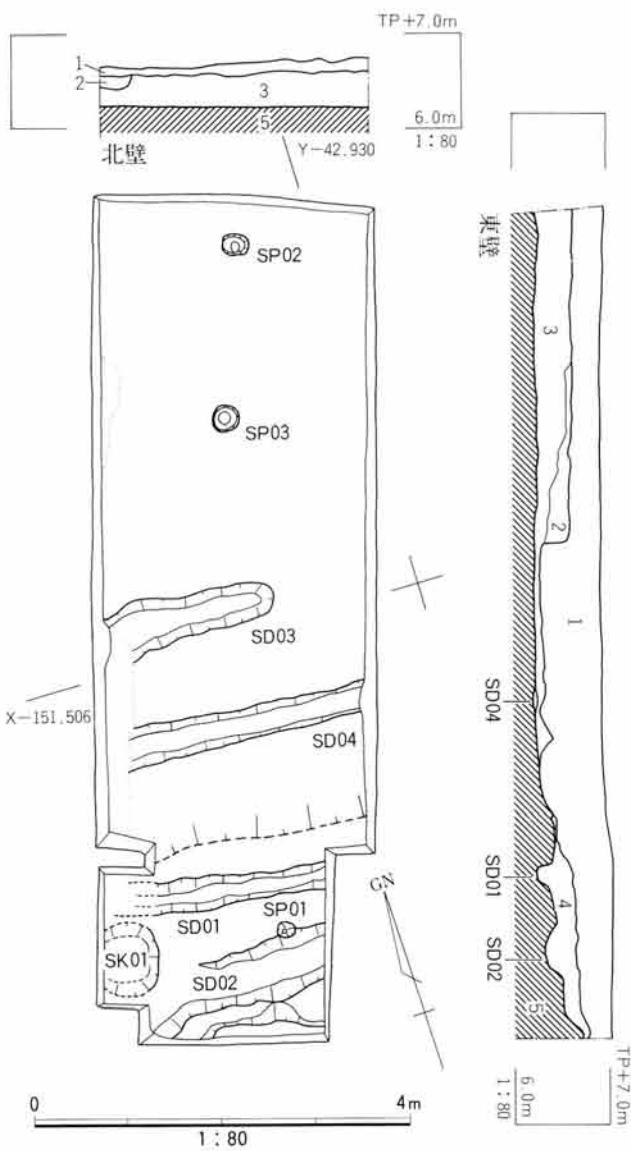
地山層：砂を含んだ黄橙色シルトである。残りのよい調査地南端では標高6.7m、北端部では6.2mで検出された。

ii) 遺構と遺物(図版12・52)

弥生時代の土壙、奈良時代の溝、室町時代の溝といった遺構がある(図85)。

SK01 調査地南西隅にある円形の土壙である。出土遺物の内容から、桑津5層基底面の遺構と考えられる。直径0.8m、深さ0.3mで、黒褐色シルトを埋土とする。以下に述べる弥生土器がまとまって出土した(図86・87)。

また、サヌカイト製石鎌1点(図88)のほか、剥片・チップが数点出土している。



- 1: 現代客土
- 2: 含砂オリーブ灰色シルト(桑津1層)
- 3: 含砂灰褐色シルト(桑津3層)
- 4: 含砂暗褐色シルト(炭化物・黒色シルト偽礫含む。桑津5層)
- 5: 含砂黄橙色シルト～含シルト黄橙色細粒砂(地山層)

図85 弥生～室町時代の遺構実測図

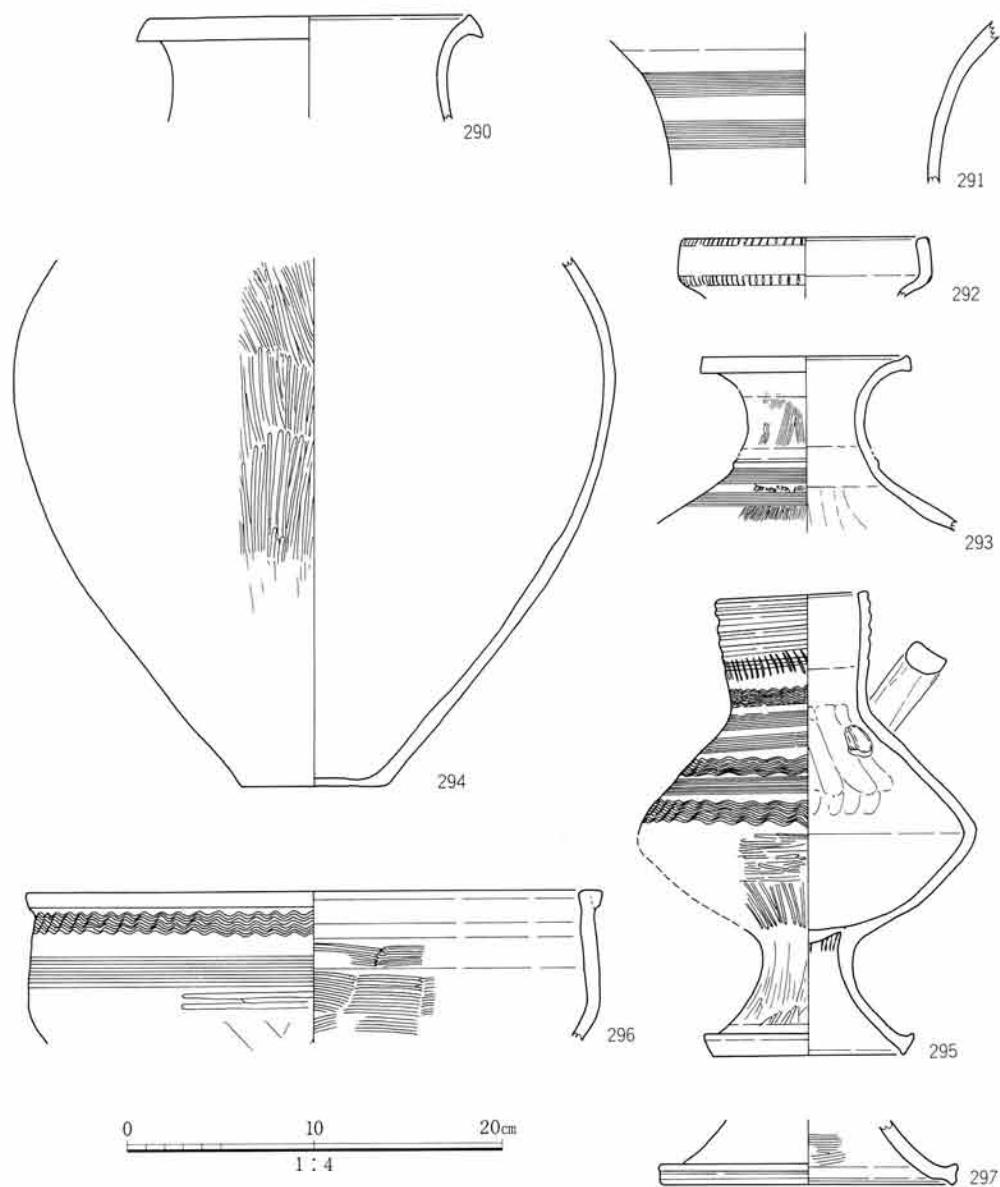


図86 SK01出土遺物(1)

図86の土器から述べる。290は広口壺の口縁部である。端部を斜め下方に垂下させ、また、わずかに上方につまみ上げている。文様はみられない。291は広口壺の頸部で、櫛描直線文が施されている。胎土中に角閃石を含む。292は有段口縁の壺で、口縁端部と段部の角に刻み目を施す。293は細頸の広口壺で、頸部下端に低いながら断面三角形の突帯を巡らせる。また、体部には櫛描直線文が入る。294は壺の胴部から底部である。外面に縦方向のヘ

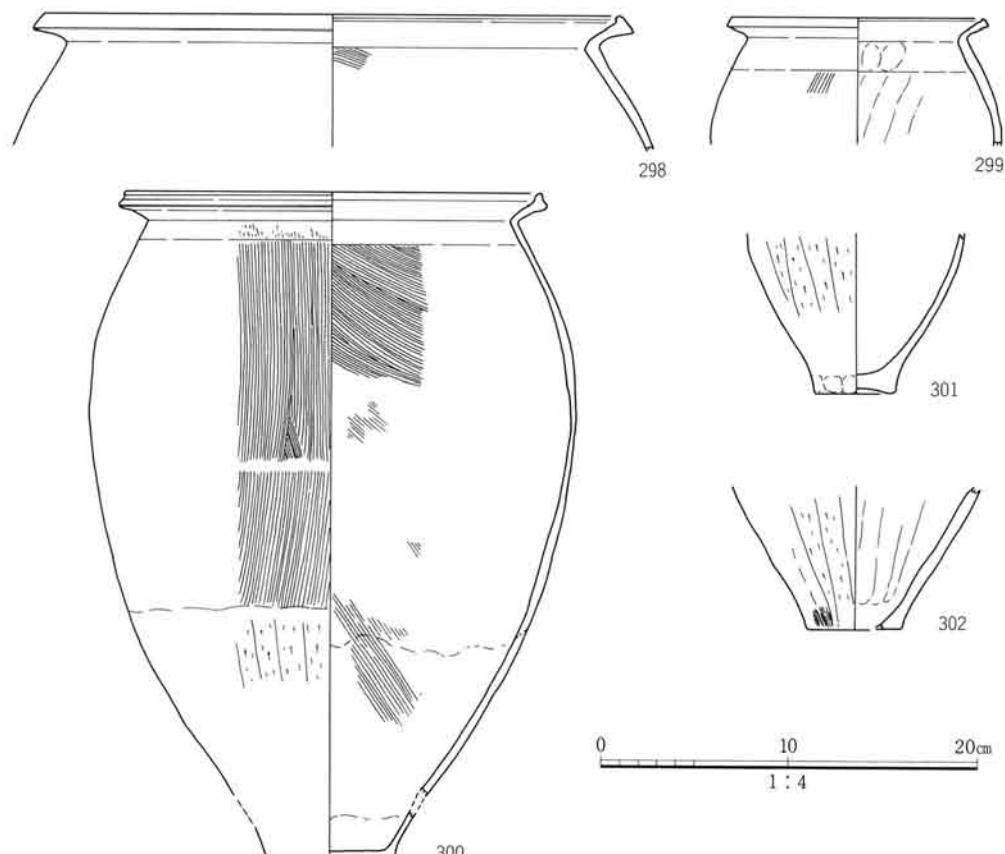


図87 SK01出土遺物(2)

ラミガキが施されているが、無文である。295は台付の水差である。[森田克行1990]に摂津IV-1様式から出現するとされる円盤充填による台部をもつ。口縁上部には5条の凹線文、その下方に櫛描列点文・波状文が施される。体部には櫛描直線文と波状文がみられる。把手は体部の穿孔部にその両端を挿入することによって固定されている。296は口縁部外面に突帯をもつ鉢である。櫛描波状文・直線文が施されている。297は脚台端部に1条の凹線文が入る。

続いて図87の土器を見る。298～302は甕で、300はほぼ全体のわかるもの、298・299は口縁部から体部上部、301・302は底部である。298は大型、300・302は中型、299・301は小型に属す。口縁部の残るものはみな「く」字状に外反する形態をとる。

以上のようにSK01の土器は、高杯を欠くがさまざまな器形を揃えており、甕には大～小型品がみられた。これらの時期は畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式に置くことができよう。

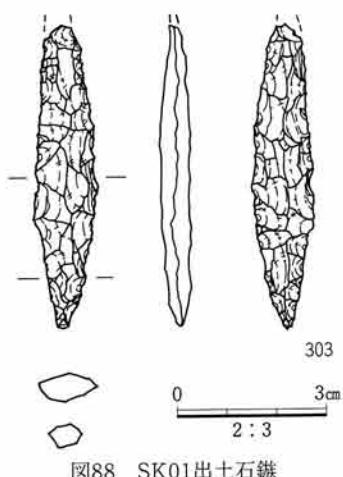


図88 SK01出土石鎌

図88の石鎌303は凸基有茎式石鎌で、作用部が細長く、作用部と茎との境の不明瞭なものである(図版94)。先端部を欠損する。残存長6.00cm、幅1.30cm、厚さ0.60cm、重量4.5gである。

SD01・02 調査地南部にあり、桑津5層を埋土とする溝である。SD01が幅0.4m、深さ0.2m、SD02が幅0.6m、深さ0.2mを測り、ともに東西方向をとっている。SD02からは多くの弥生土器片とともに奈良時代頃のものと思われる須恵器の細片が出土している。

SD03・04 調査地中央付近にある桑津3層下面の溝である。幅0.5~0.6mあるが、深さ5cm程度の浅い溝で、ほぼ東西方向に平行して掘られている。出土遺物はないが、桑津3層中から瓦器楕・青磁などの細片が出土しているため、室町時代以降のものであろう。図83に示したようにKW87-23次調査で検出されたSD06の一部が今回のSD03・04にあたると思われる。

SP01 調査地南部にあるピットで、桑津5層基底面の遺構である。黒色に近いシルトを埋土とする。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SP02・03 調査地北部にある柱穴で、直径0.3m、深さ約0.2mの規模である。桑津3層基底面で検出された。遺物は土師器の細片が少量出土したのみであるため、時期は明らかでない。桑津3層段階に地下げされる以前は、0.5m以上の深さをもっていたと思われる。

この調査地は、桑津遺跡において、弥生時代から平安時代にかけての遺構・遺物が特に密集する地域であった。しかし、調査範囲の多くが室町時代以後に大きく地下げを被っていたため、南端部で若干の当該期の資料を得たにとどまった。調査地南端部の遺構・遺物の中では、SK01出土の弥生土器が当遺跡の土器の様相をうかがう上で重要な資料となろう。

第12節 KW90-10次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(桑津3丁目8)は桑津遺跡の北西部にあたり、遺跡範囲の縁辺部にある。調査地の東隣りではKW87-36次調査が行われている(図89)。この調査では飛鳥時代の土器埋納土壙などが検出された。また、調査地の南100mには、飛鳥・奈良時代の建物群の検出されたKW83-14次調査地がある。

調査では試掘時に確認された地表下0.7m前後に残る遺物包含層の上面までを重機によつて掘削し、それ以下、地山層までを人力によることにした。その結果、調査地北半部で、試掘時に確認された遺物包含層を検出し、その包含層が2層に分かれることを確認した。また、地山層直上において掘立柱建物の柱掘形が検出された。調査期間は1990年8月27日～9月3日、調査面積は125m²である。

2) 調査結果

i) 層序(図90)

桑津0層：現代客土。層厚約70cmである。

桑津4層：含粗粒砂明黄褐色粘土質シルトで、層厚10～15cmである。土師器の細片を含

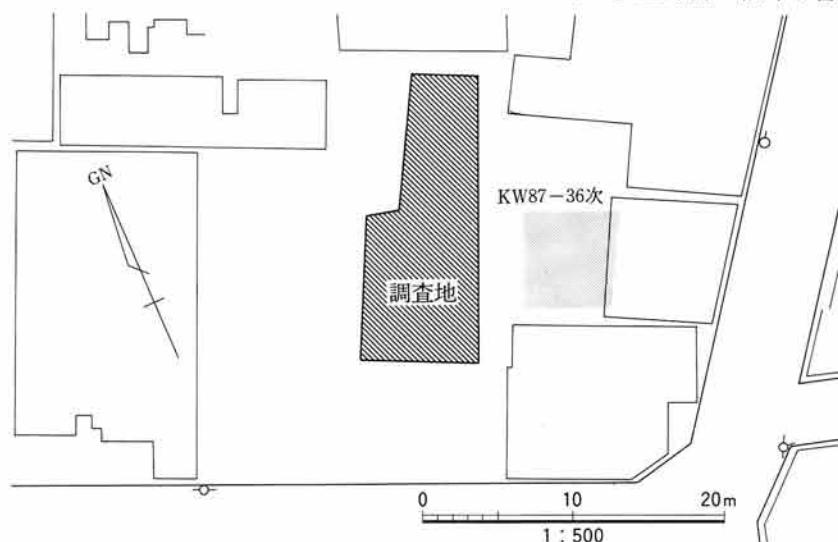
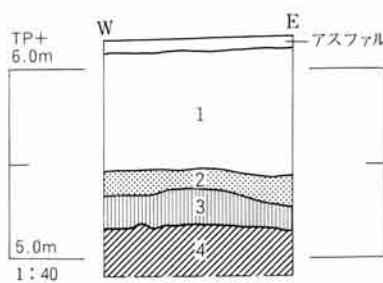


図89 KW90-10次調査地位置図



1 : 現代客土
2 : 含粗粒砂明黄褐色粘土質シルト(桑津2層)
3 : 含粗粒砂明褐色シルト(桑津3層)
4 : 灰白色粘土～粘土質シルト(地山層)

図90 調査地北壁地層柱状図

む。調査地北半部に分布する。

桑津3層：含粗粒砂灰褐色シルトで、層厚10～20cmである。土師器・須恵器を含む。図91および写真7に本層から出土した遺物を示した。304は土師器杯の一部で、内外面ともに暗文はみられない。奈良時代中頃以降のものであろう。305は小型の須恵器甕の口頸部で、全体に短く、大きく外反する。口縁端部は丸みをもつ。古墳時代後期のものであろう。306は須恵器杯身で、TK43型式に属する。

地山層：灰白色粘土～粘土質シルトで、標高5.2m前後にある。

ii) 遺構(図92、図版13)

遺構は地山層の直上で検出したものである。主として桑津5層内の遺構と思われ、奈良時代を中心とするものであろう。

検出された遺構は柱穴とピットがほとんどで、計30基ほどが確認された。調査地の北端部と南端部にまとまる傾向がみられる。柱痕跡が残るものが多く、それらは一辺70～80cmの方形または隅丸方形の柱掘形をもち、直径20～30cmの柱痕跡をもつ。このような特徴をもつ柱穴は、北端部に3基、南端部に9基存在する。調査地の範囲内では、これらの柱穴がどのように組み合うのかを明確にできなかったが、南端部では数棟の建物が重複する場所に営まれていたと思われる。

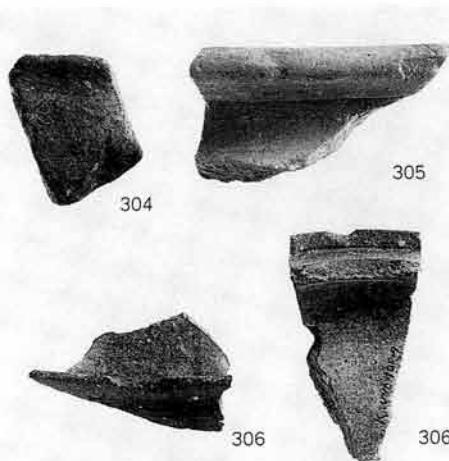


写真7 KW90-10次桑津3層出土遺物

図91 桑津3層出土遺物

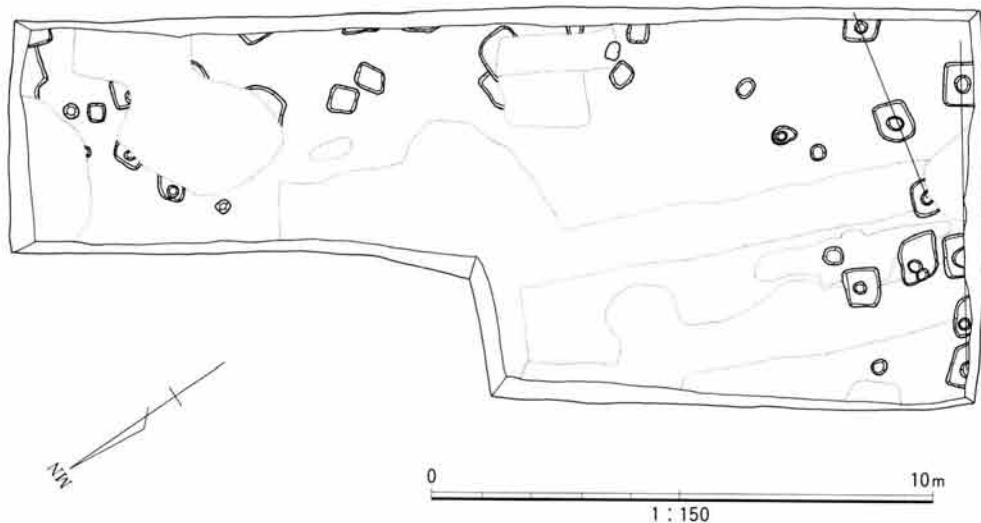


図92 奈良時代の遺構平面図

この調査では、奈良時代に属すと思われる掘立柱建物の一部が確認できた。隣接するKW 87-36次調査地の遺構とも関連するものであろう。調査地の南方100mにあるKW83-14次調査でも、同規模の柱掘形をもつ掘立柱建物が検出されており、桑津遺跡の北西部に奈良時代前後の掘立柱建物がやや集中していたことが考えられる。

第13節 KW90-14次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(桑津5丁目13)は桑津遺跡のほぼ中央部に位置する桑津小学校構内の西部に当る(図93)。桑津小学校の構内では、1937年に大阪府と京都帝国大学考古学研究室による発掘調査が行われている[小林行雄1942]。この時の調査の詳細な位置については残念ながら不明であるが、弥生時代中期の土器や各種の石器をはじめ、隅丸方形の竪穴・井戸・溝などが検出されている。ここに報告する調査地でも、先の調査と同様の遺構や遺物が検出されることが予想されたため、発掘調査を実施した。なお、この調査は講堂の跡地に体育館を建設することに先立ち行われた。

調査では旧講堂の基礎および近・現代の水田耕作土を重機で掘削した後、中世の遺物包含層以下の各層を人力で掘削して、遺構・遺物の検出に努めた。調査地内は図94に示したように、ほぼ全域が旧講堂の基礎で攪乱されていた。しかし、南部を中心に弥生時代中期後半の井戸・土壙・柱穴などが検出されたほか、中世の作土とみられる地層が確認された。調査期間は1990年9月22日~29日、調査面積は150m²であった。

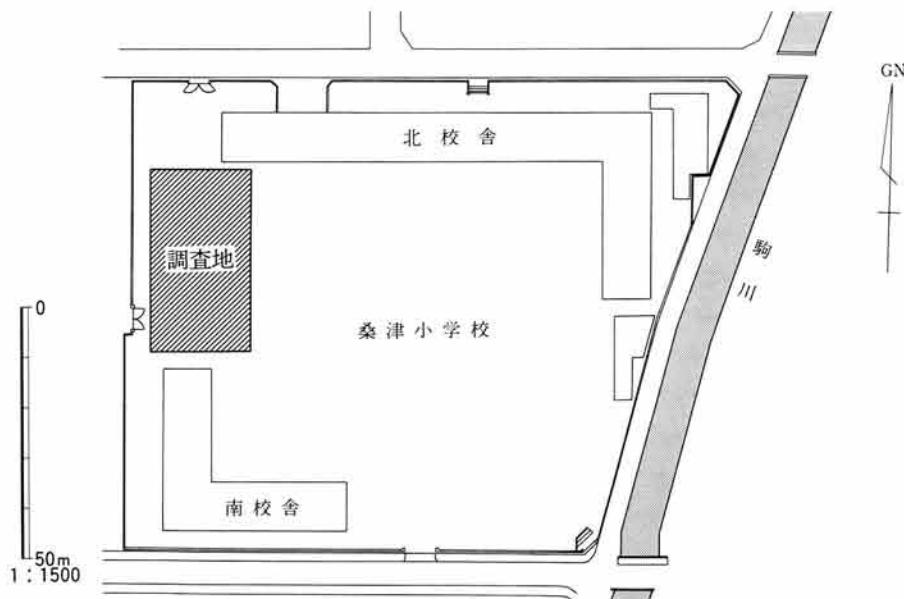


図93 KW90-14次調査地位置図

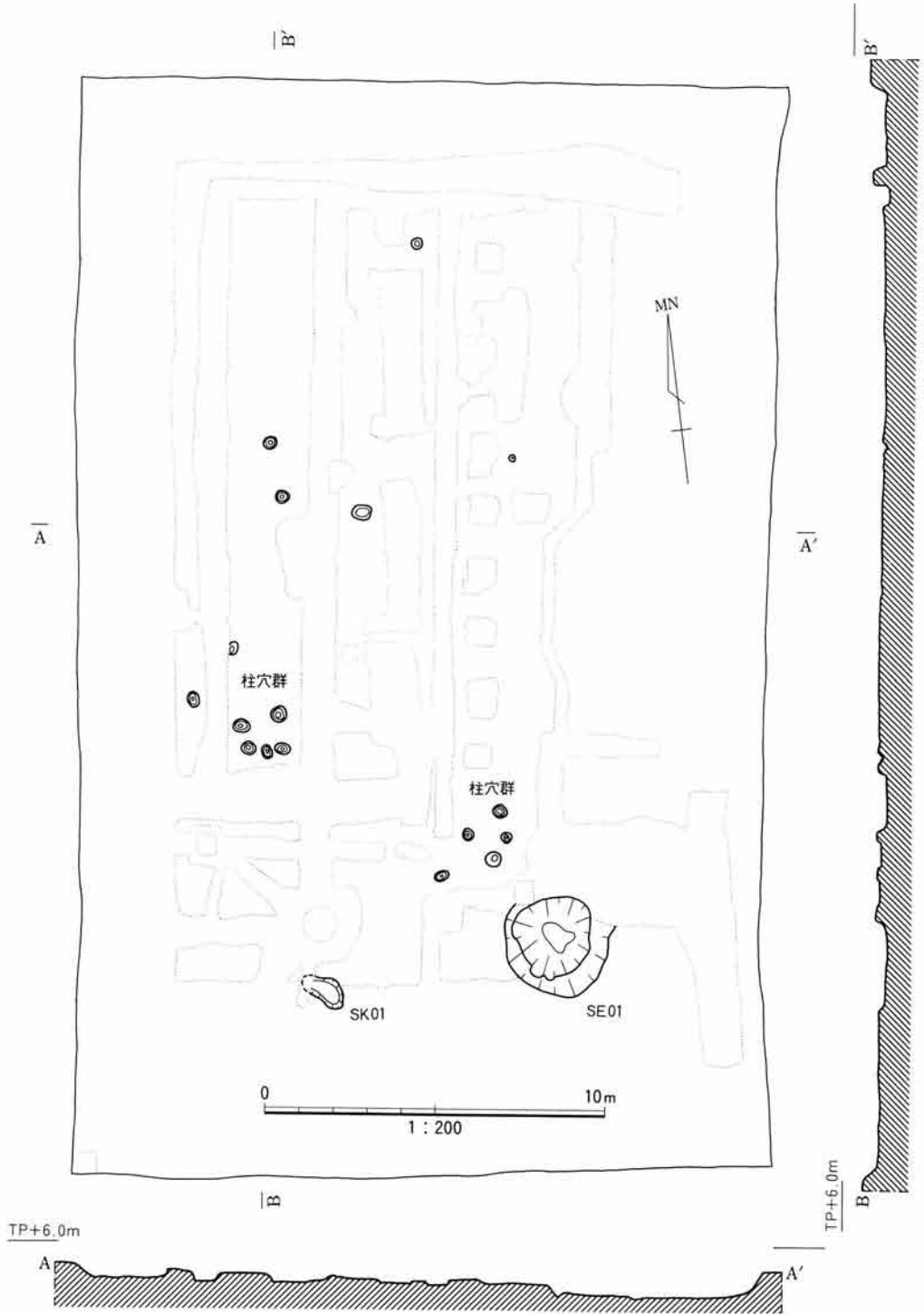


図94 弥生・平安～室町時代の遺構実測図

2) 調査結果

i) 層序

桑津0層：旧講堂の建設時の整地層で、上面の標高は5.5m前後である。

桑津1層：含細粒砂褐色シルトで、層厚は15cm前後あり、近・現代の作土層である。

桑津3層：2層に大別され、上層は調査地の中央部付近にみられ、シルトを含むにぶい黄褐色細粒砂である。層厚は5cm前後あり、水成層とみられる。本層準の水成層は、東住吉中学校内のKW82-7次調査でも確認されているほか、KW86-2次調査の大規模な流路内にも存在する。下層は砂礫を含むにぶい黄褐色シルトで、調査地のほぼ全域に分布している。層厚は15cm前後あり、弥生時代中期から室町時代の土器類を包含する。本層の下面には耕作による踏込みがあり、水田の作土と思われる。[小林行雄1942]によると、昭和初年からの土地区画整理に際し、表土1m前後を掘り取り、後に50cm程度の客土がなされたという。この調査地では中世の包含層が確認されたことから、昭和初年の掘削は本層以下には及んでいない。

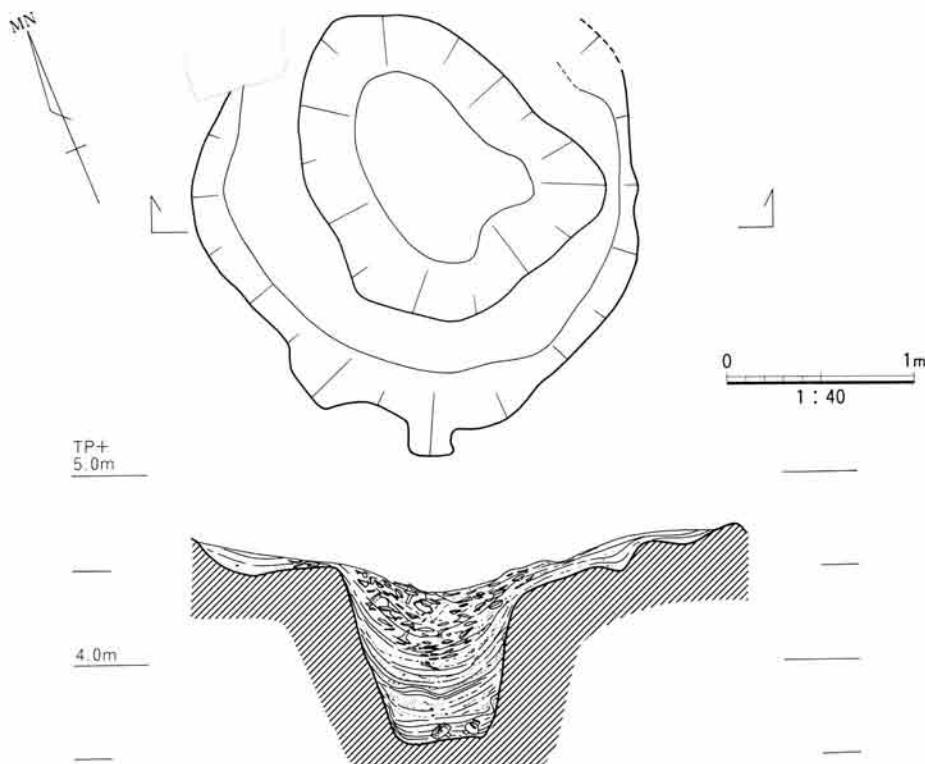


図95 SE01実測図

地山層：細粒砂を含んだ明黄褐色粘土である。本層の標高は残りのよい個所で4.9mで、この層の直上で弥生時代中期後半および平安～室町時代の遺構が検出された。

ii) 遺構と遺物(図版14・53~63・94・95)

弥生時代中期後半の遺構として井戸・土壙・柱穴群があり、平安～室町時代の柱穴が確認されている。

SE01(図95) 調査地の南東部に位置する直径約2.4mの井戸で、その中央部の直径1.6mの範囲がピット状に深く掘込まれている。井戸の深さは約1.0mある。埋土は上層が砂礫を含む黒～黒褐色粘土質シルトで、層厚35cmある。中層は砂礫を含む暗灰色粘土で、下部ほど砂礫が多く含まれ、層厚35cmある。下層は黒～暗灰色粘土で、層厚10～15cmである。各層から畿内第Ⅳ様式に属する弥生土器や石器などが出土した。特に上層では土器片どうしが累積するかのような状況であった。下層内からは、釣瓶として使用されたとみられる水

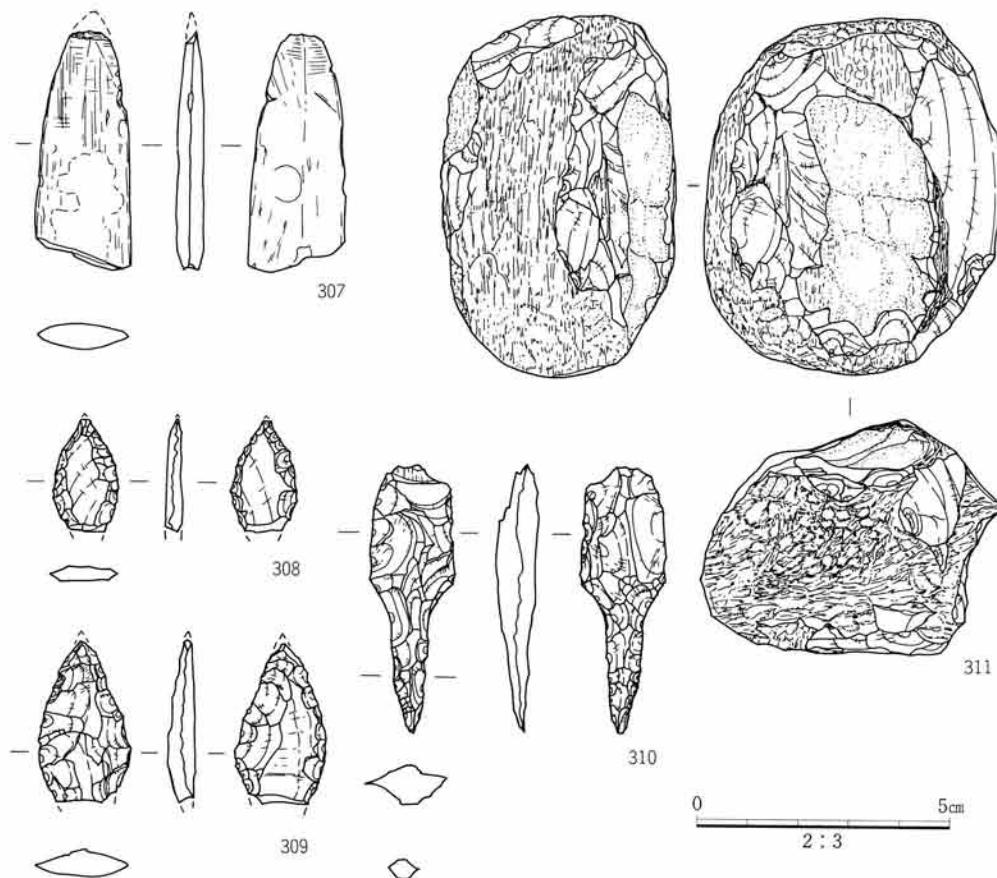


図96 SE01出土石器遺物

表3 KW90-14次調査出土の石器遺物

番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
307	磨製石剣	(4.70)	1.90	0.55	(5.6)
308	石鎌	(2.20)	1.30	0.35	(1.2)
309	石鎌	(3.20)	1.80	0.55	(3.0)
310	石錐	5.30	1.75	0.80	5.1
311	ハンマー	7.15	5.90	4.65	270.1

() 内の数値は残存値

差351、独楽形の木製品が出土した。そのほかには、算盤玉状の土製品・焼けた柱材をはじめ、稻藁・イノシシなどが出土している。また、発掘後に行った埋土の水洗選別でも、土玉・獸骨・魚骨をはじめ多量のサヌカイト製の剥片やチップが採取された。

出土した石器遺物には、磨製石剣・磨製石庖丁・石錐・石鎌・剥片石器があり、磨製石剣を除いてみなサヌカイト製である。そのうちの5点を図96に示した。また法量は表3の通りである。307は磨製石剣の先端部である。軟質の石材であり、実用の剣ではなかろう。先端に近い部分に鋒が磨き出されている。308・309は凸基無茎式石鎌である。どちらも基部側を欠損する。木葉形と表現される石鎌である。310は完形の石錐である。平面形態の上でも頭部と錐部の境が明瞭に作られている。横断面形は頭部・錐部ともに菱形となっている。錐部の先端は鋭く尖る。311はハンマーで、握り拳状を呈する。長軸方向の端面に敲打痕とみられる潰れが密集し、その周囲が磨滅している。

図97~108に出土した土器・土製品を示した。土器類は、壺・無頸壺・水差・鉢・高杯・器台・甕・蜻蛉など構成されており、これらの総量はコンテナバット15箱を数えた。なお、土器に施文された文様の種類としては、櫛描文・凹線文・突帯文・刺突文などがあるが、これらの内、櫛描文と凹線文が占める文様の割合はほぼ同量であった。また、高杯・台付鉢の口縁部および脚部に凹線文が施されたもの、壺・甕に器面をタタキで成形した後、ヘラケズリ調整を加えて薄くしたものが多くみられた。

312~344は口縁部の残る壺である。その中の広口壺についてみると、口縁端部を外反させた後、端面に凹線文を入れるもの(329)、口縁端部を垂下させるもの(312~316・325~328)、口縁端部をつまみ上げるもの(317~324・334~337)がある。また、338~344は有段口縁の壺、330は太頸壺、331~333は細頸壺である。棒状浮文のある316は播磨系、有段口縁の壺のうち344以外は胎土中に角閃石を含み、生駒西麓産の土器とみられる。

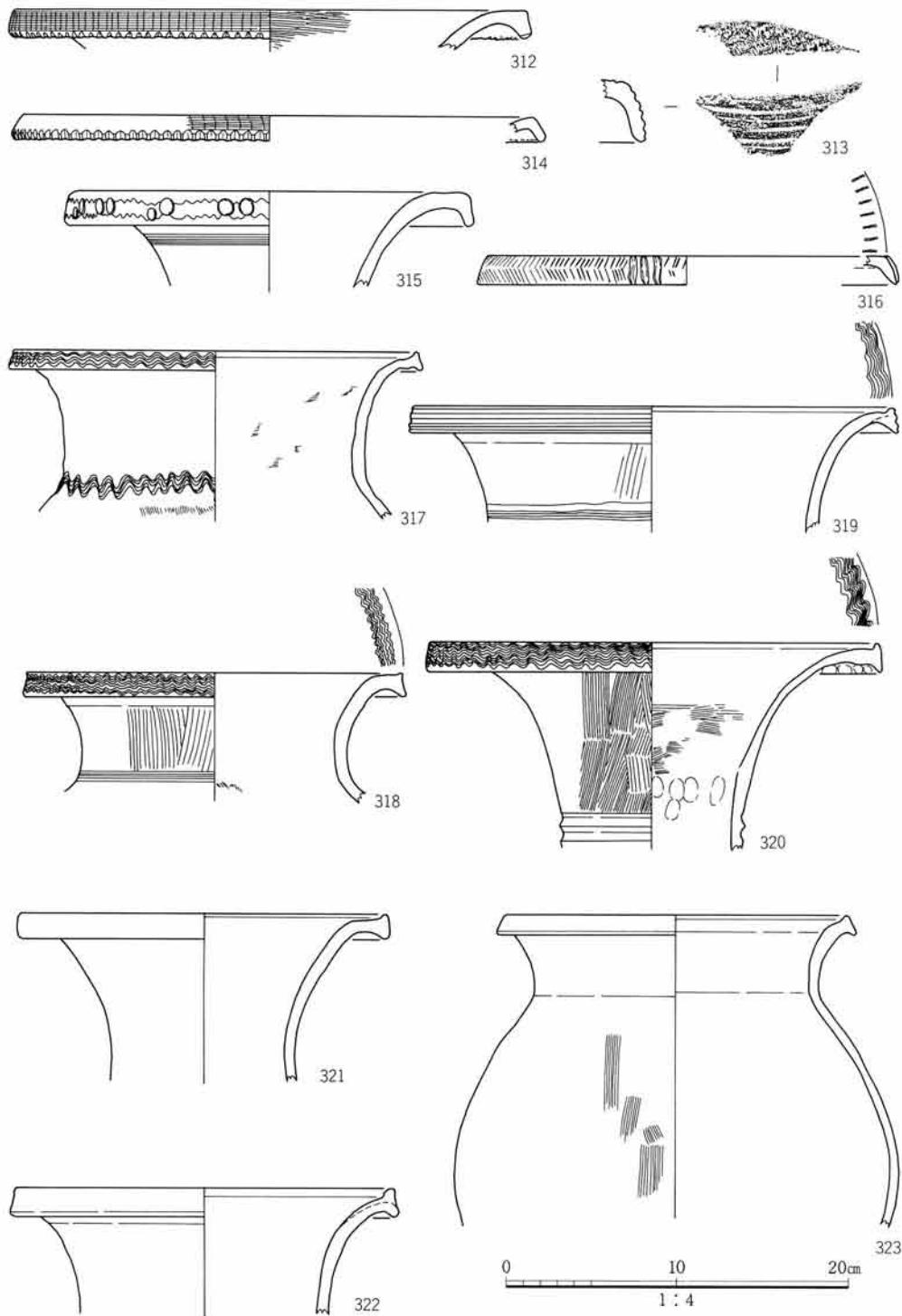


図97 SE01出土土器・土製品(1)

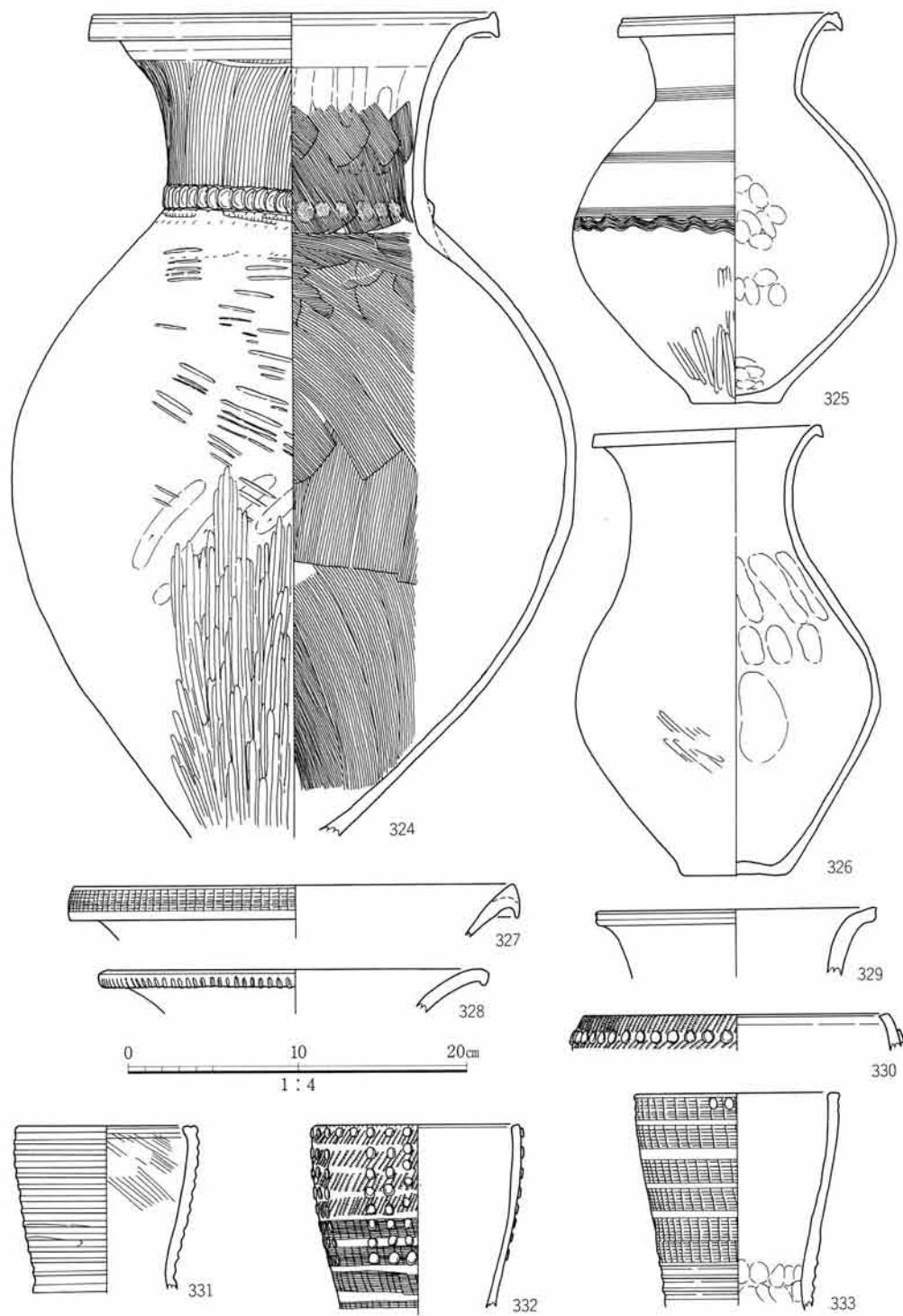


図98 SE01出土土器・土製品(2)

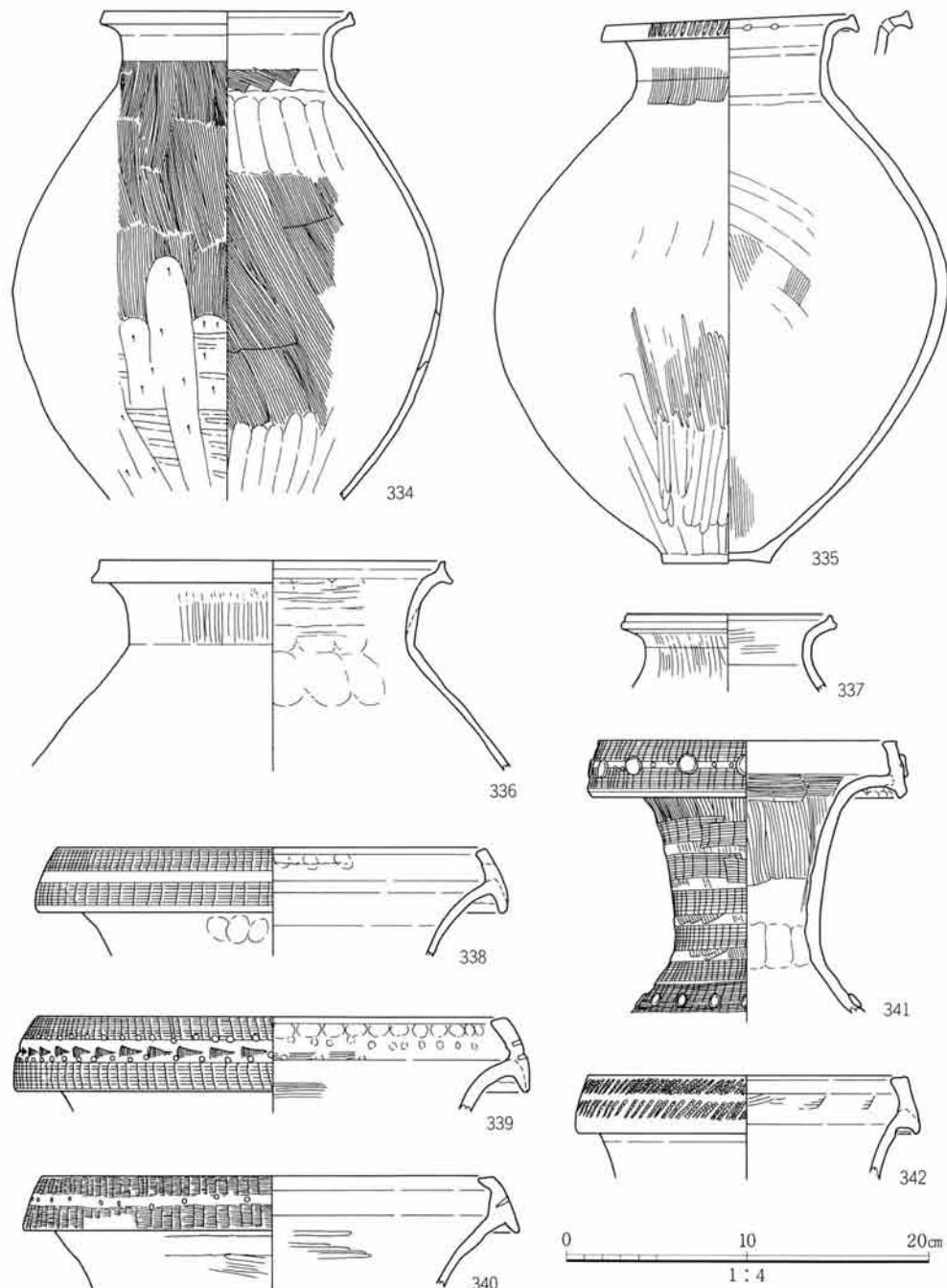


図99 SE01出土土器・土製品(3)

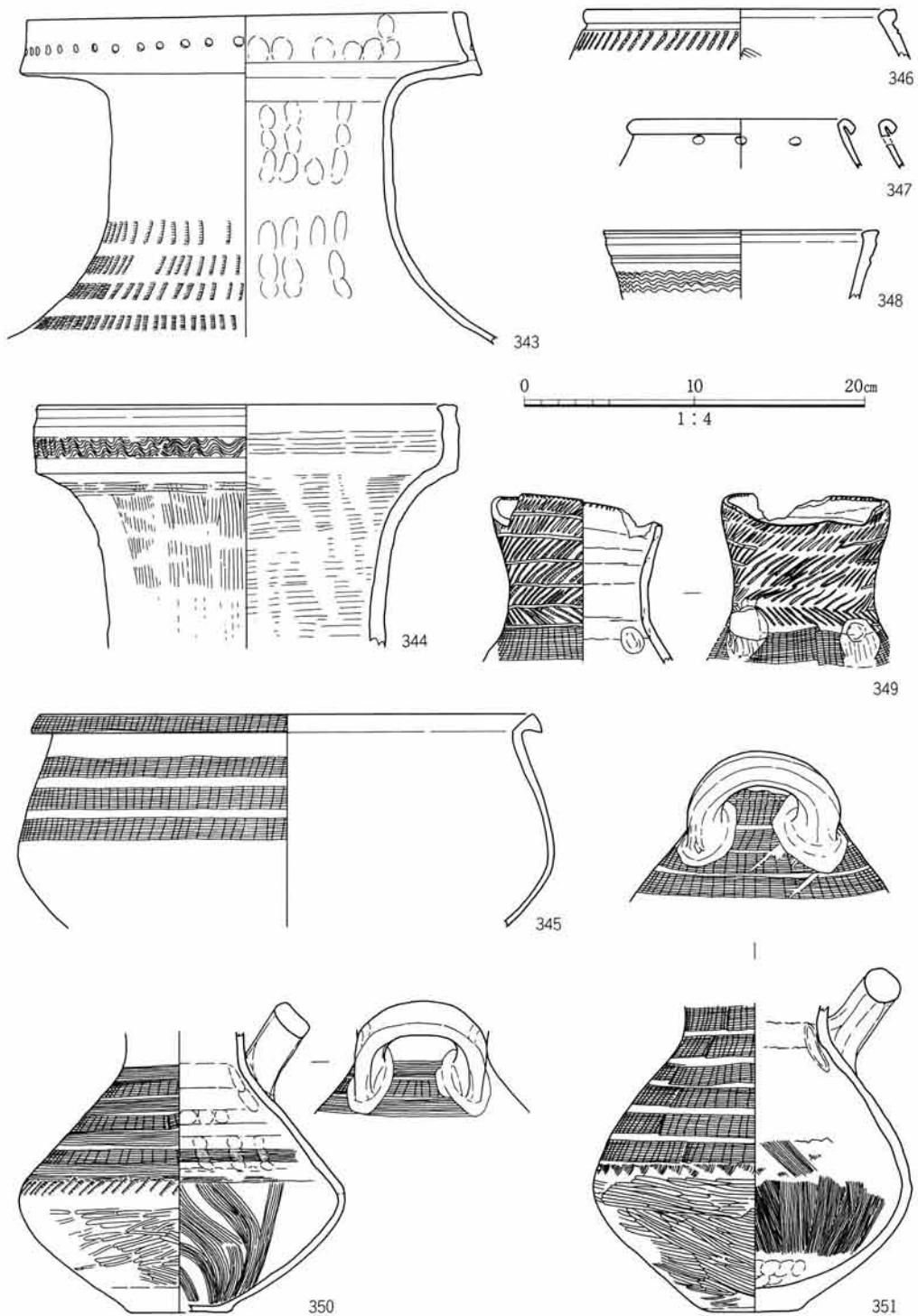


図100 SE01出土土器・土製品(4)

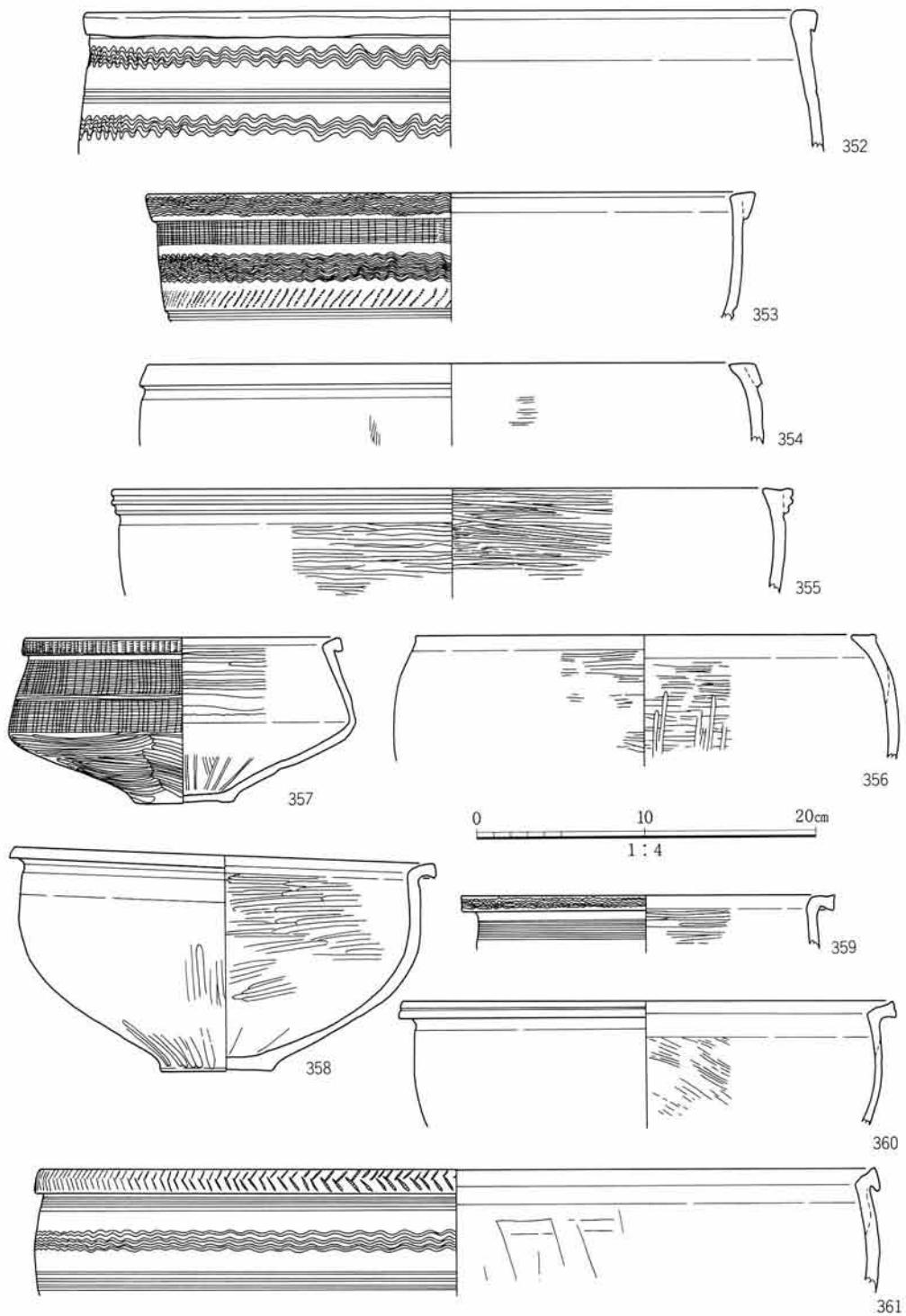


図101 SE01出土土器・土製品(5)

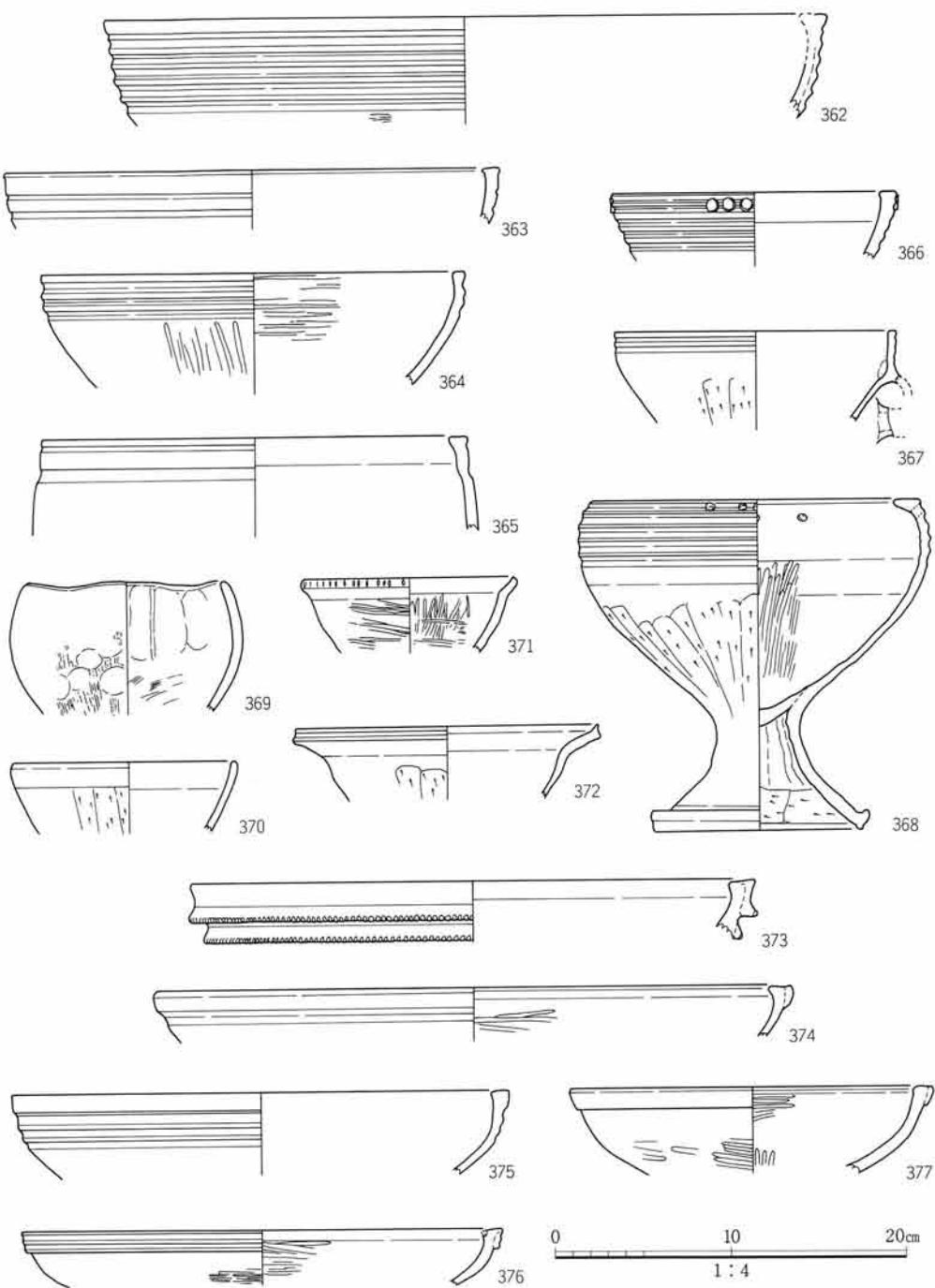


図102 SE01出土土器・土製品(6)

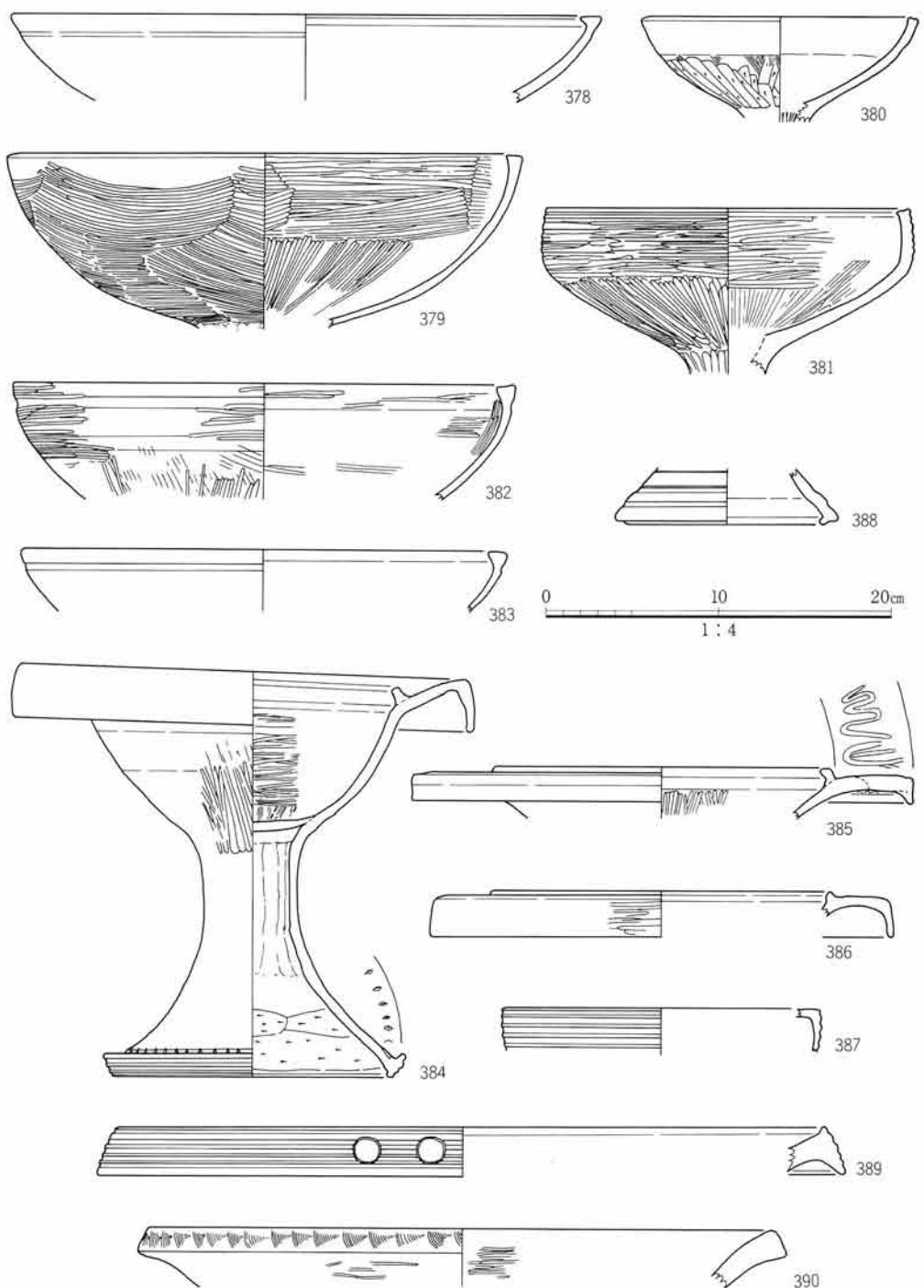


図103 SE01出土土器・土製品(7)

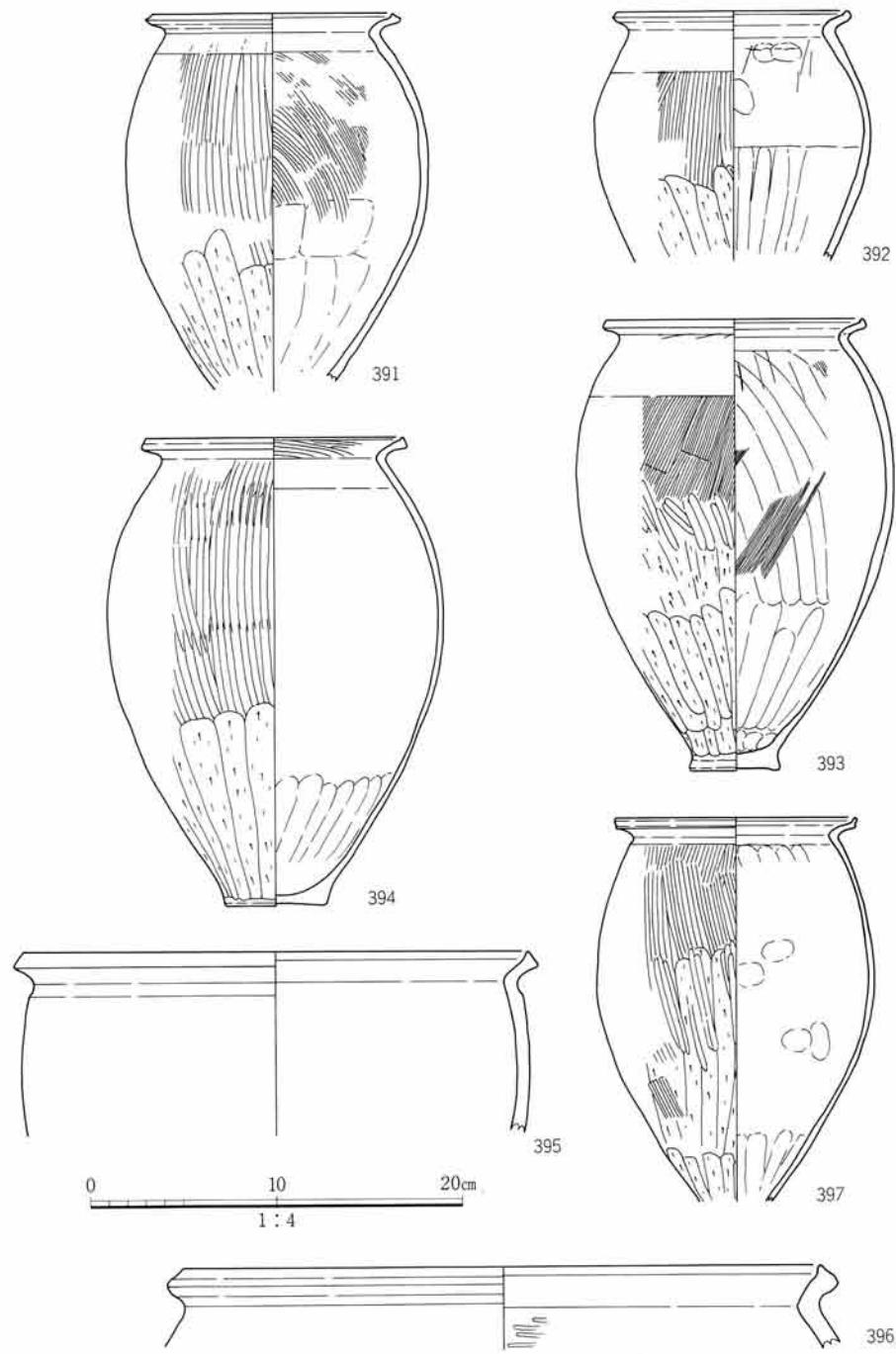


図104 SE01出土土器・土製品(8)

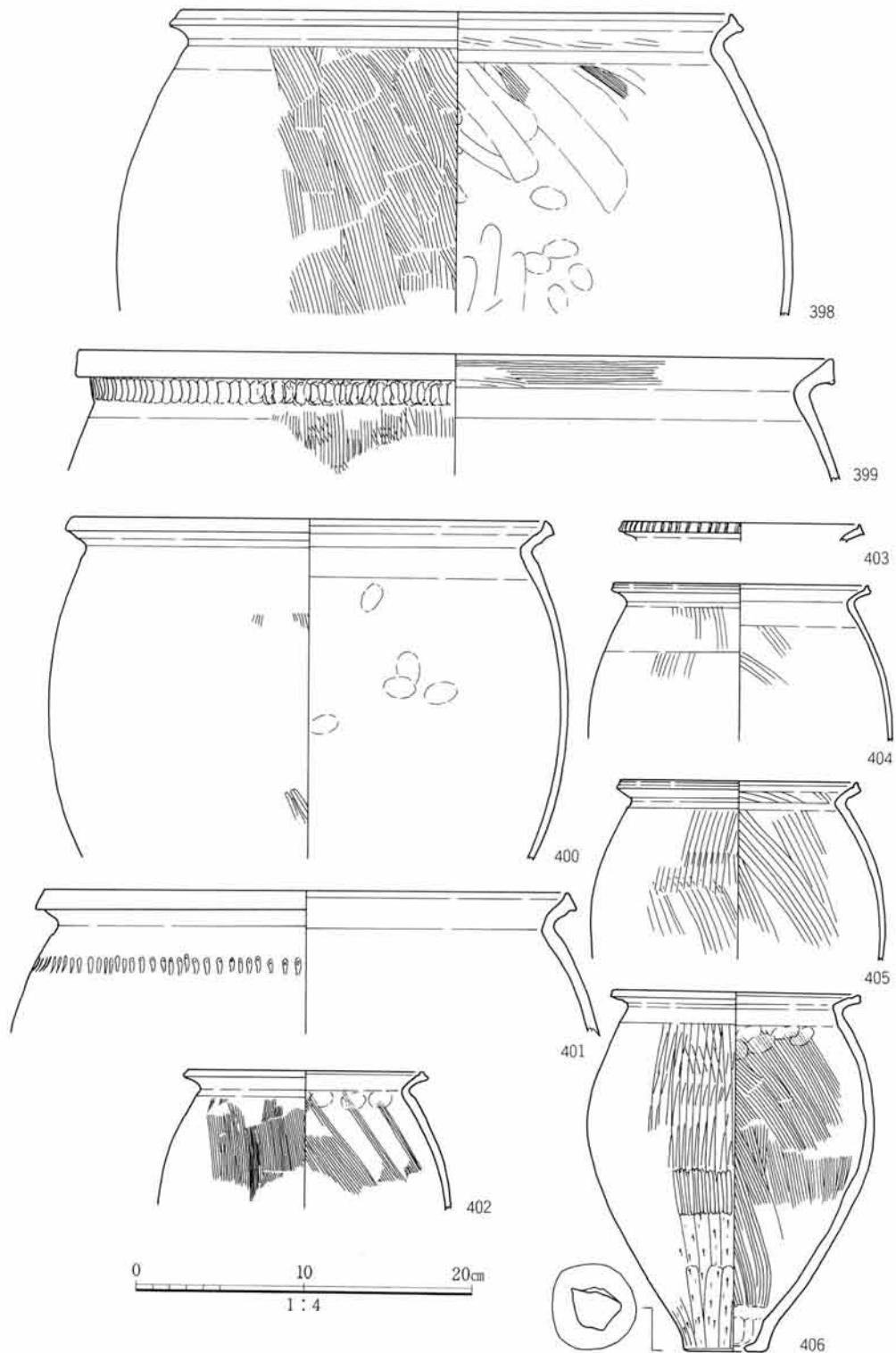


図105 SE01出土土器・土製品(9)

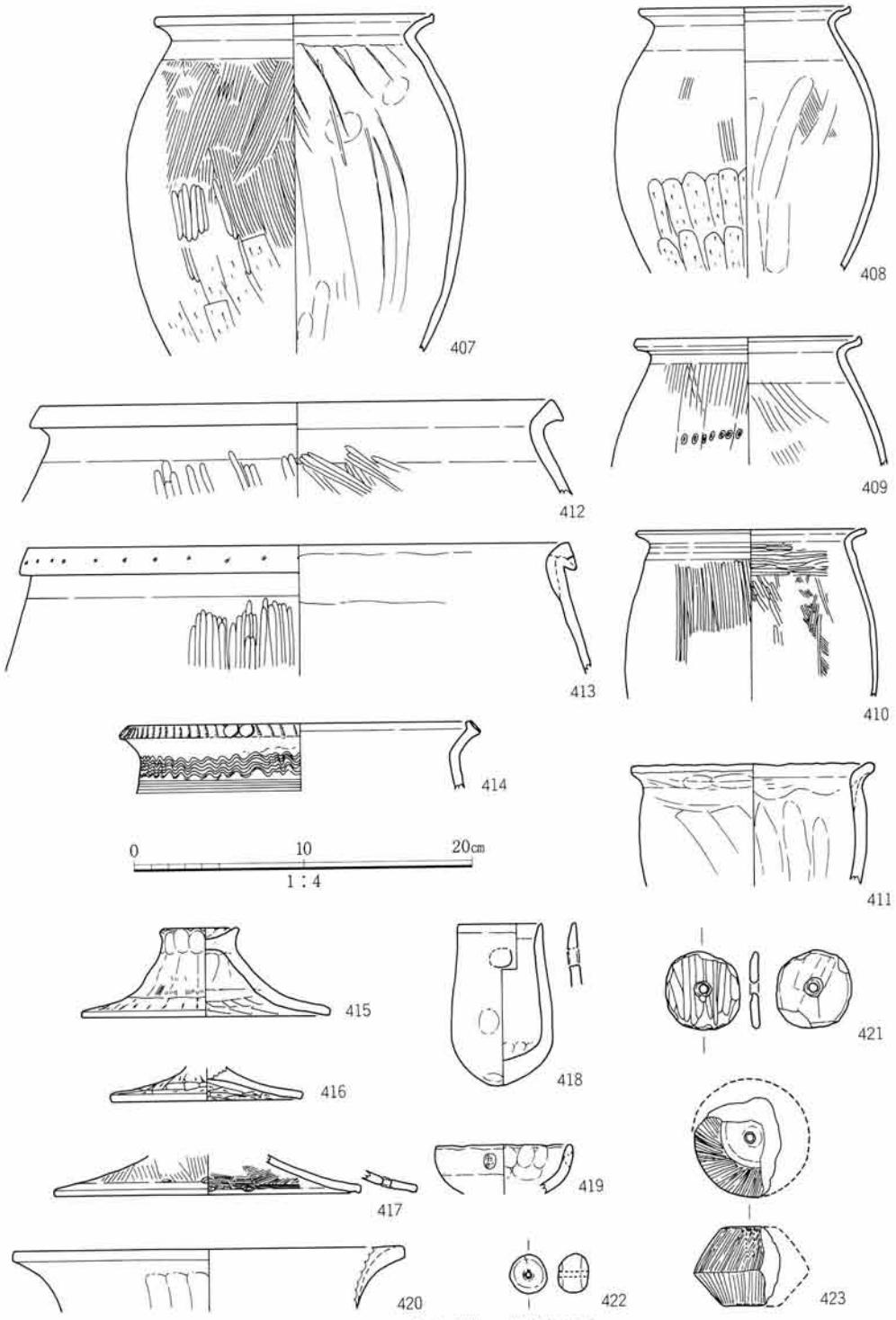


図106 SE01出土土器・土製品(10)

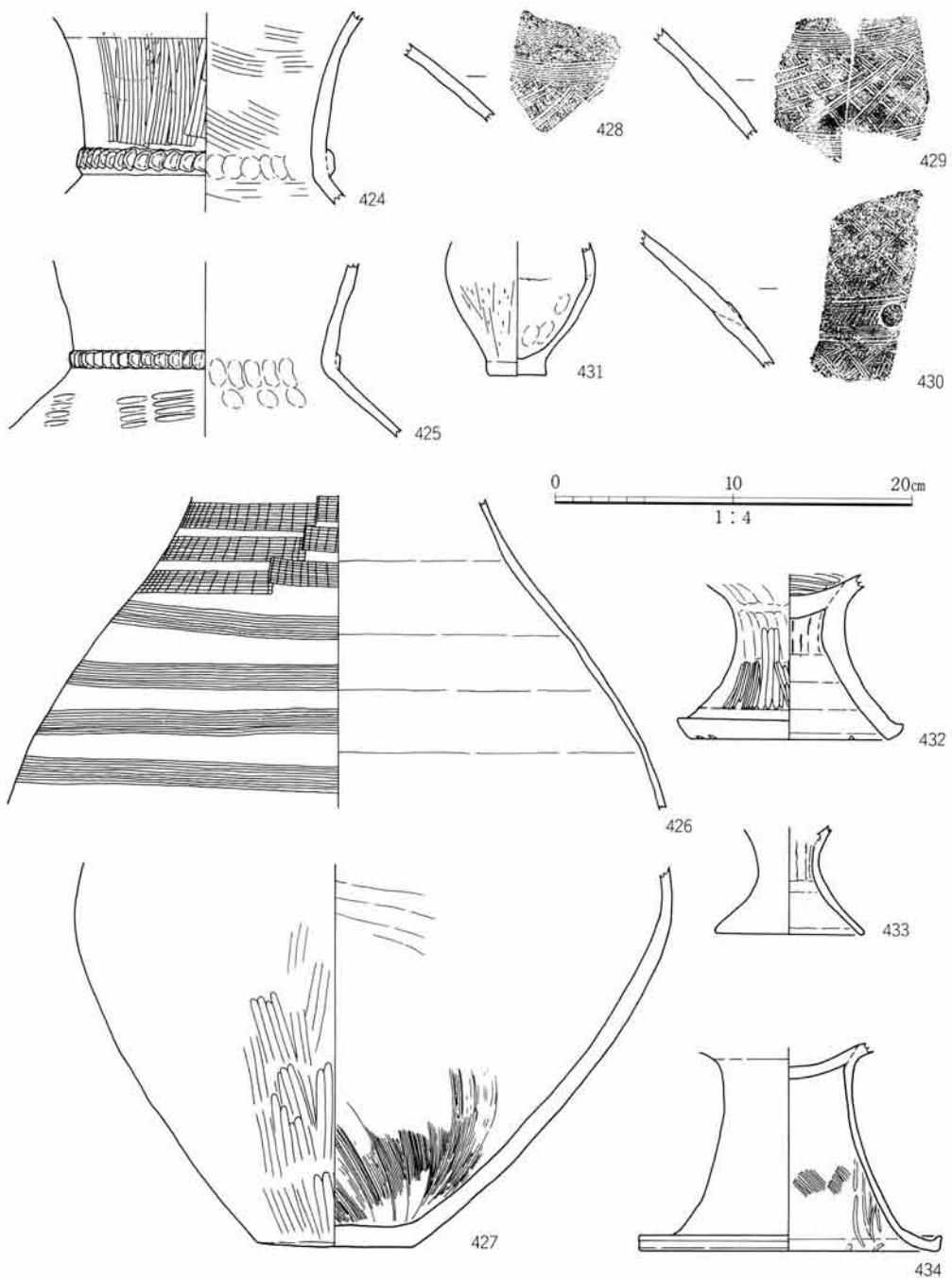


図107 SE01出土土器・土製品(11)

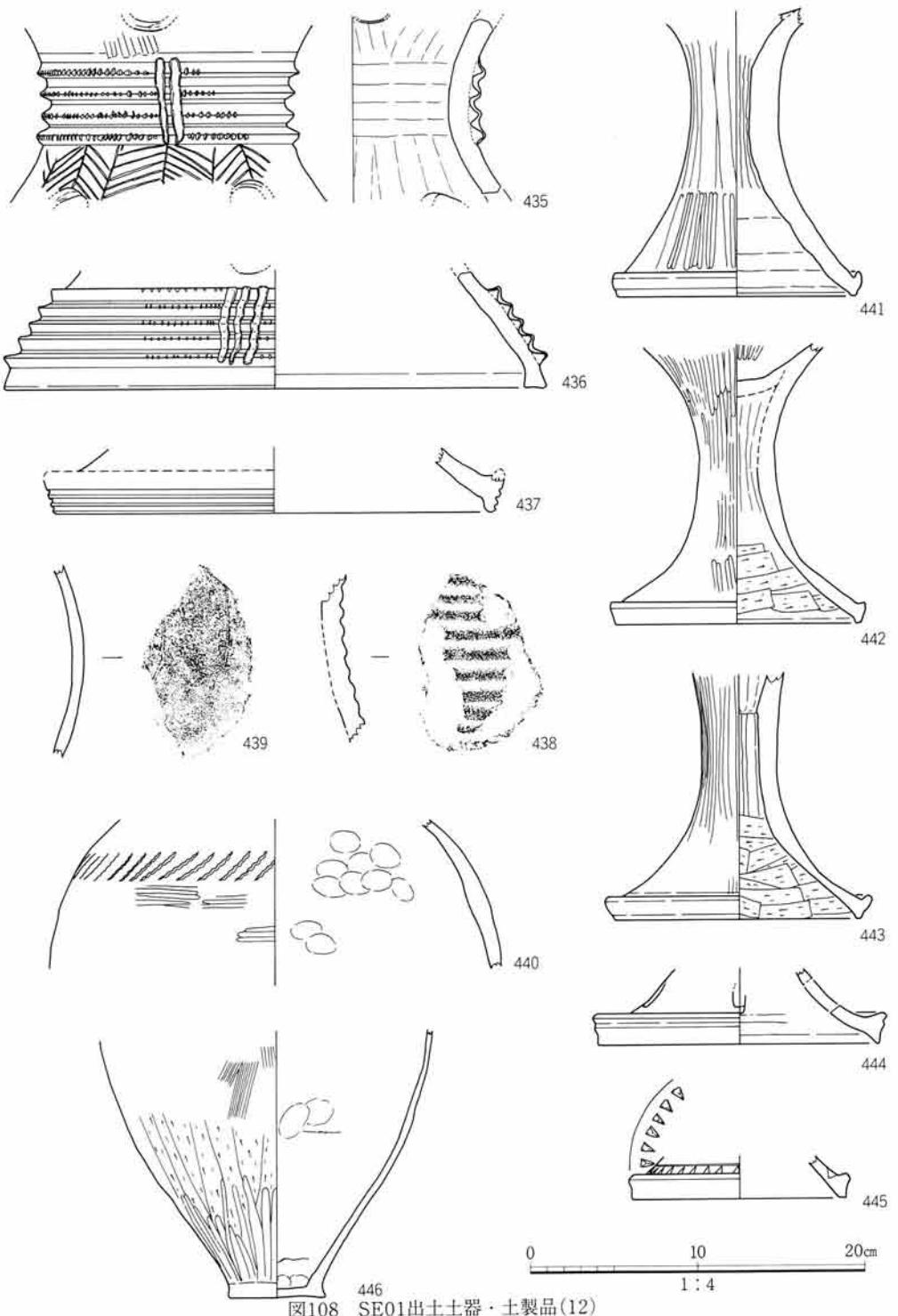


図108 SE01出土土器・土製品(12)

一方、424～431、439・440は口縁部を欠く壺である。424・425は頸部周辺の破片で、頸部下端に指頭圧痕突帯文をもつ。428～430は胴部の破片で、器面の櫛描斜格子文・直線文・波状文からみて同一個体である。431はミニチュアの壺である。426は胴部上半、427は胴部下半である。前者は櫛描簾状文・直線文で飾られ、胎土中に角閃石を含むものである。439の器表には絵画様の線刻がある。焼成前に描かれたものであるが、何が描かれているかについては不明である。440の肩部には二枚貝の貝殻腹縁による刺突文がみられる。

345～347は無頸壺である。345は大型で、口縁部を短く外反させ、その端面に櫛描簾状文が施されている。体部にも簾状文がみられる。角閃石を多量に含む。346・347は小型で、前者の口縁には突帯が付加され、後者の肩部には穿孔がある。

348～351は水差である。348は口縁端面に水平方向の面をもち、その直下に凹線文が施されている。摂津系の水差である。一方、349は口縁端面に刻み目を入れ、口頸部を櫛描列点文で、それ以下を簾状文で装飾する。にぶい褐色を呈する土器で、胎土中に角閃石を含むことから生駒西麓産といえる。350・351は口縁部を欠くが、349に類似する形態であったと推測する。前者の体部上半には櫛描直線文と簾状文が交互に施されており、最下段に列点文がある。後者の体部上半は櫛描簾状文で埋められ、その最下段を扇形文で飾る。この2点に角閃石はほとんど含まれない。

352～373は鉢である。352～355は口縁部に突帯をもつ、中・大型品である。356はその形態から突帯の欠落した形態である。357～361は短く外反する口縁部を有するもので、櫛描文で加飾されるものと、無文のものがある。357と359は胎土中に角閃石が顕著に含まれる。362～368は口縁部に凹線文を巡らせるものである。そのうち367には把手が、368には脚台が付く。368は口縁部の端面が水平方向に広い面をなしており、その直下に円孔を穿っている。369・370は無文の深鉢、371・372は受口状の口縁部をもつ浅鉢で、いずれも小型品である。373は口縁部直下に刻み目のある2条の貼付け突帯を巡らす。灰黄褐色を呈しており、胎土中に角閃石は含まない。

432～434は台付鉢の脚台部と思われる。432・433の内面にはシボリメが観察されるが、434にはそれがない。製作手法の違いが考えられる。

374～387・441～445は高杯である。そのうち384～387は口縁部の外縁に水平方向の張出しをもつものである。384は全体のわかる個体で、脚端部には凹線文と刺突文が施される。脚柱部にはシボリメがみられ、杯部の底は円盤充填によって作られている。385には張出しの上面に蛇行するヘラミガキが施されている。また、胎土中に角閃石を含む。387には垂下

した口縁部に5条以上の凹線文が入る。374～376は口縁端部に突帯をもち、378～380はその突帯を欠くものである。379には角閃石が多量に含まれる。381～383は口縁部に凹線文が入るグループである。382・383では、1条の凹線文によって、あたかも口縁部に突帯が巡るかのような表現をしている。381には7条の凹線文がみられ、施文後に密なヘラミガキが行われている。441～445は高杯の脚部である。444の裾部にはスカシ孔の一部が認められ、その形状は斜辺部に膨らみのある縦長三角形あるいは矢羽根状を呈する。445には三角形の刺突文がみられる。444・445は東部瀬戸内地域からの搬入品と思われる。

388～390・435～438は器台である。389・390は口縁部である。前者は端部を垂下させ、端面を凹線文と円形浮文で飾る。後者は体部側から素直に延びた口縁端部に櫛描扇形文が施されている。435は鼓状の器台の体部である(原色図版2)。筒部の中ほどには棒状浮文を加えた4条の刻み目突帯文が巡り、その下に縦位の綾杉文を描く。綾杉文は先端の鋭いへラ状の施文具で描かれている。436・437は器台の脚端部である。437は壺口縁の可能性も考えられたが、内面の調整がやや粗いこと、裾部が直線的であることから器台とした。436

には435と同様の刻み目突帯文と棒状浮文があり、残存する上端にはスカシ孔の一部が残る。両者は同一個体の可能性がある。438は器台の筒部で、9条以上の凹線文が施されている。388は器台の脚部と思われ、凹線文で加飾されている。直線的に外方に広がる裾部をもち、端部を内側に突出させる。

391～414・446は甕である。そのうち391～409は口縁端部をつまみ上げるものである。さらにその中で特徴的なものを述べると、399は頸部に指頭圧痕突帯が巡り、401には肩部に刺突文、403の口縁部には刻み目がみられる。406の底部には穿孔がある。397・407～409は端部のつまみ上げが垂直方向に延び、受口状の口縁部となっている。409の体部にも刺突文が施される。412・413は口縁端部を垂下させるものである。413は口縁部に刺突文をもち、胎土中に角閃石の認められる個体である。410・411は如意形の口縁をもつ甕で、前者は体部外面をハケ調整するが、後者にハケ調整は用いられない。

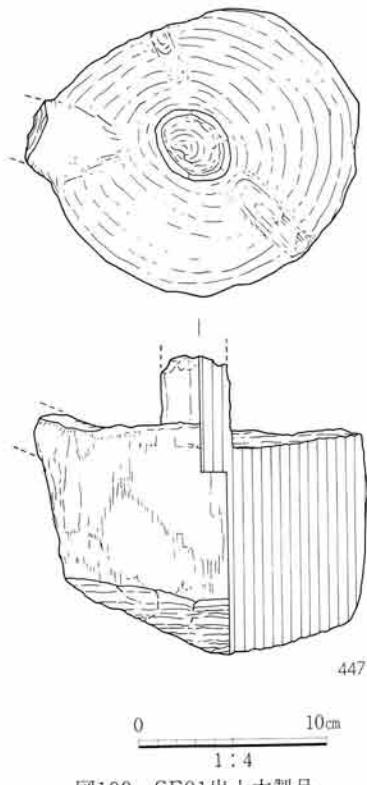


図109 SE01出土木製品

ていない。414は近江系とみられるものである。受口状の口縁部をもち、その端面に櫛描扇形文と円形浮文を付す。色調は灰白～浅黄橙色である。

415～417は蓋である。415は天井部が皿状に凹み、端部を丸くおさめている。裾部の器表には、乾燥時に荷重によってできたものと思われる多数のヒビ割れがみられる。416・417の端部は415とは異なり、平坦な面が作られている。

418は飯蛸壺、419はミニチュアの鉢、420は台形土器である。

土製品には紡錘車421、土玉422、算盤玉状土製品423がある。紡錘車は土器片を転用したもので、直径4.5～4.8cm、中央の孔は直径0.6cmである。重量は15.1gである。土玉は直径2.2cm、厚さ1.7cm、中央に直径0.3cmの孔がある。表面はていねいにナデ調整されている。算盤玉状土製品は復元直径6.6cm、高さ4.6cmで、側面に明瞭な稜がたつ。上部平坦面に直径0.4cmの穿孔部があるが、深さ1.7cmまでで止まっており、貫通していない。表面は細かくヘラミガキされている。

独楽形木製品447は上部に突出する軸部も含め、一木から作られている(図109)。直径14.3～16.3cmで、高さは全体で15.6cmである。軸部は根元で直径3.6～4.7cmあり、4.6cmほどの高さまでが残る。下端が山形に削り落され、上面も中心に向って皿状に凹む。上面には枝の張出しが3個所にみられ、そのうち1本の枝は打払われずに残されていたようである。

建築部材と考えられる木製品(図版59-448)は残存長約22cm、直径約12cmで、木口側の一端が焼け焦げている。

動物遺体としてはイノシシ*Sus scrofa*の下顎骨が

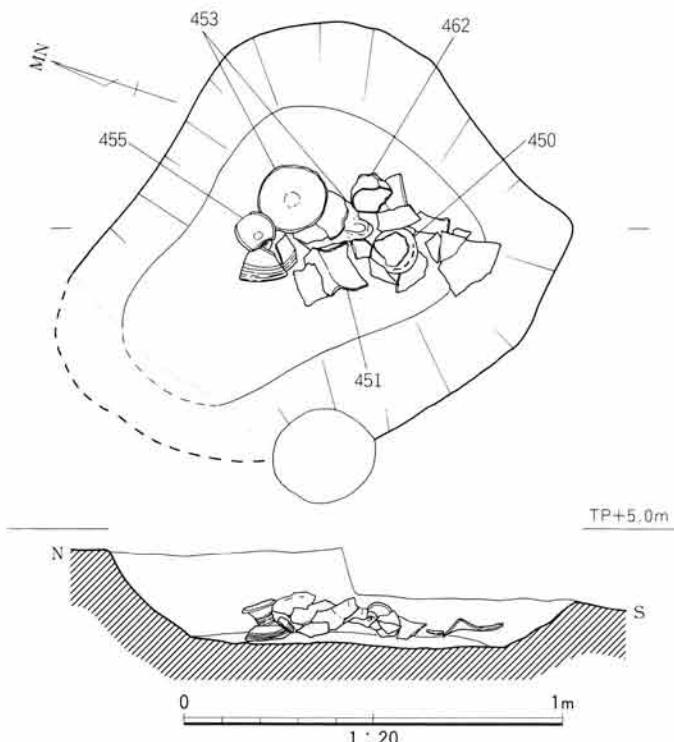


図110 SK01遺物出土状況図

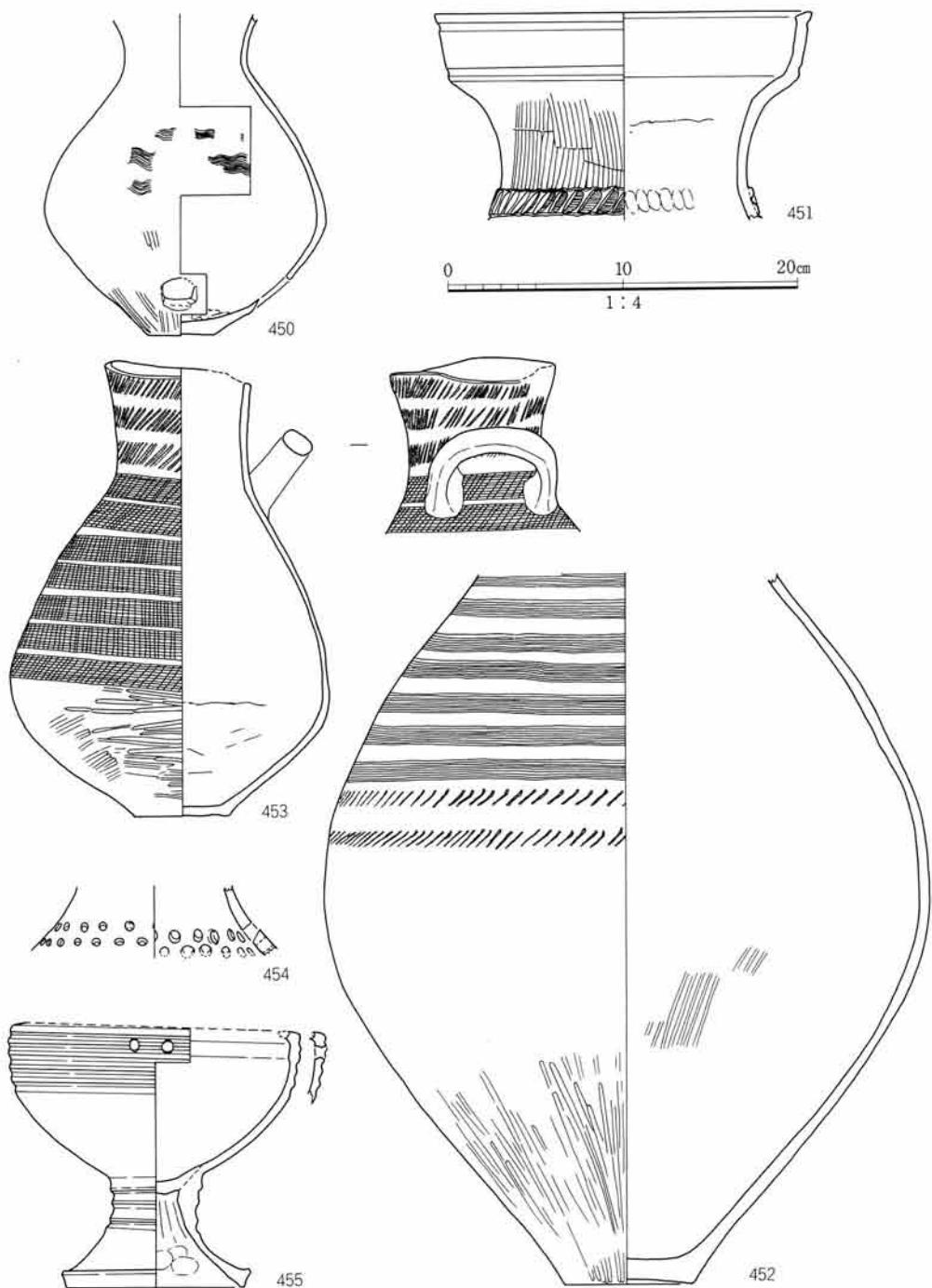


図111 SK01出土遺物(1)

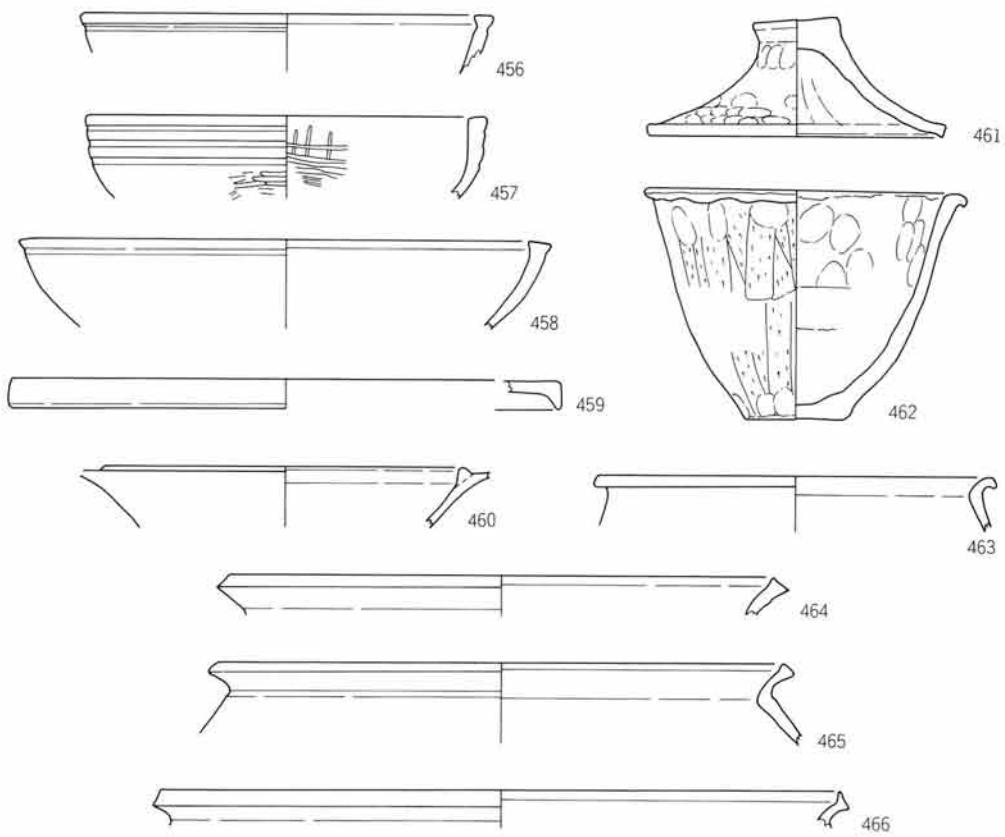


図112 SK01出土遺物(2)

出土した(図版100)。吻部の破片で、左側犬歯から右側第3前臼歯の歯槽が残存する。歯は歯根を部分的に残すのみで、歯冠はすべて欠損している。犬歯の大きさからみて雌のものと考えられる。

SK01 調査個所の南西部に位置する土壌である(図110)。遺構西側の辺が攪乱によって破壊されているが、平面が隅丸方形で、南北1.1m、東西1.1m以上、深さ0.3m前後の規模である。遺構内には砂礫を含んだ黒褐色シルトが堆積していた。土器は土壌の南東部寄りからまとまって出土した。畿内第IV様式に属する壺・高杯・水差などがあり、底面に置かれたかのような状態であった。高杯・水差などの口縁部や底部には打ち欠きや穿孔がみられた。

図111・112に出土土器を示した。450～452は壺で、450は胴部下半に穿孔のある広口壺、

451は頸部下端にヘラ压痕突帯文をもつ有段口縁壺、452は櫛描直線文と列点文の施された壺体部である。453は水差の完形品である。全体にやや胴長の器形で、口頸部に櫛描列点文、体部上半に簾状文が施されている。角閃石を多量に含む。455は台付鉢、454は台付鉢の脚台の部分である。455は口縁部に5条、脚柱部に3条の凹線文が施されている。口縁部にはまた、2孔一対の穿孔が2個所にみられる。454は裾に多数の円孔がある。456～460は高杯で、そのうちの459・460は口縁部外周に張出しの付く器形である。456～458は口縁部外面に凹線文がみられる。462は小型の甕状の鉢で、外側に巻込むような口縁部をもつ。外面をヘラケズリする。[寺沢薰・森井貞雄1989]の河内IV-2様式に類似するものがある。463～466は甕で、464～466は口縁端部をつまみ上げるもの、463は外側に巻込むような口縁部をもつ。461は蓋で、平坦な天井部をもち、裾端部に面をもつ。

柱穴 井戸の北西部に2群に分かれて確認されたが、建物として組み合ったものはない。柱穴の多くは直径・深さともに20cm前後で、中には直径約10cmの柱痕跡が認められたものもある。また、掘形内の埋土は砂礫を含む黒褐色粘土質シルトと褐灰色シルトに三分され、出土遺物などから前者が弥生時代の遺構で、後者は平安～室町時代の遺構と考えられた。

3) 小結

この調査では、旧講堂の基礎による搅乱を受けていたにもかかわらず、調査当初に予想された弥生時代中期後半の井戸・土壙・柱穴といった遺構を検出することができた。これらの遺構は調査個所がこの時期の集落の範囲内にあたることを示すものといえるが、竪穴住居や掘立柱建物などについて明らかにできなかったのは残念である。

一方、SE01から出土した土器群は、これまで明らかでなかった当遺跡の弥生時代中期後半の土器についてだけでなく、上町台地上に点在する森の宮遺跡や山之内遺跡などの土器圏を究明する上で重要な資料となるものであった。また、土器の中には穿孔や打ち欠きがみられ、従来、葬送儀礼に用いたとされるこれらの土器が、井戸から出土したことの意味もあらためて考えてみる必要があろう。さらに、綾杉文の施文された器台は桑津遺跡で初例であり、大阪府下でも、弥生時代後期前半に属するものが、八尾市、豊中市と和泉市で出土しているにすぎない[田中清美1991]。

第14節 KW90-22次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(桑津3丁目13)は桑津遺跡の北西部にあり、弥生時代中期の集落の中心部と推定される桑津小学校から北西約300mの地点に位置している。調査地の周辺では、これまでにも個人住宅やマンション建設に伴った調査が実施されており、遺跡内でも調査地の集中する地域である。なかでもこの調査地の東側にあるKW83-14次調査地では、縄文時代前期の石鏃をはじめ弥生時代中期から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されており、注目される。

この調査に先立って行われた試掘調査では、現地表の直下に弥生土器や石器を包含する地層が確認された。この結果を受けて、建設予定の建物基礎の範囲内に限って発掘調査を実施することになった。発掘調査ではまず、重機を用いて現代盛土と旧耕土を除去し、それ以深はすべて人力による掘削を行った。調査期間は1991年2月7日～4月2日で、後述のように弥生時代中期に築造された方形周溝墓が発見されたため、3月9日に現地説明会を実施した。調査面積は370m²であった(図114)。

2) 調査結果

i) 層序(図115)

桑津0層：1929年以降に当地域で実施された土地区画整理事業による整地層である。層厚は0.2～1.2mで、調査地の南東部から北西部にかけて厚く盛土されている。弥生時代中期の遺物包含層のブロックを多量に含んでいる。直上の標高は6.5～6.7mである。

桑津1層：砂礫の含まれる黒灰色シルトで、土地区画整理以前の作土である。調査地の北西部では、本層中に砂礫を含む黄褐色シルトの整地層が介在し、本層が二分される。こ

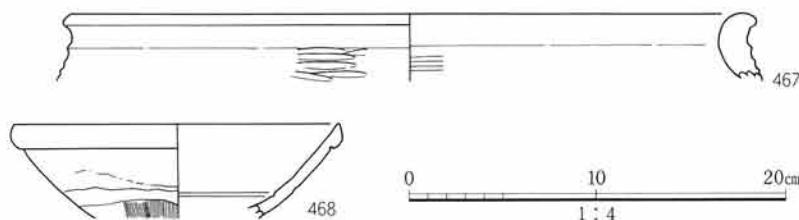


図113 KW90-22次SE03および桑津2層出土遺物

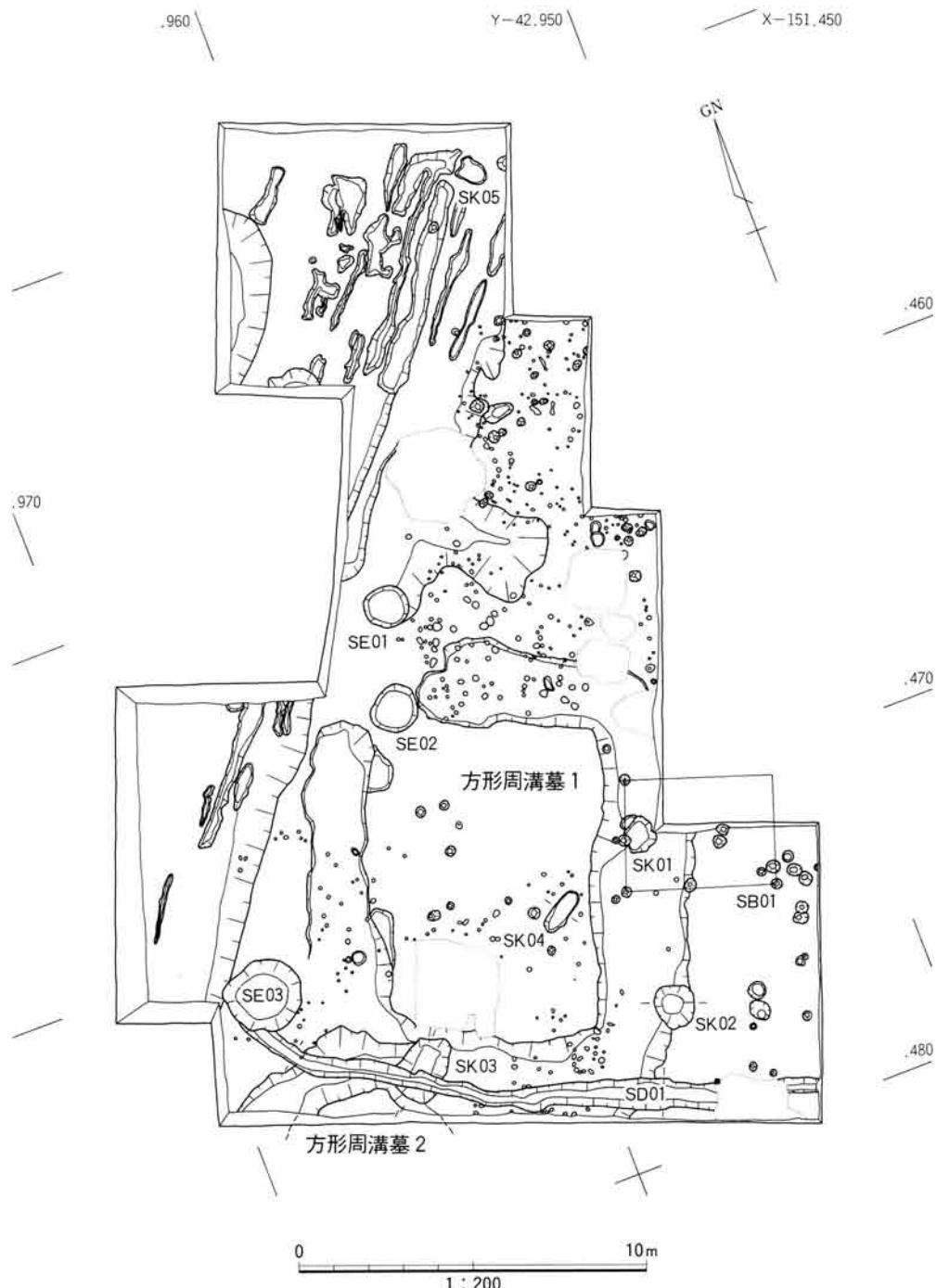


図114 調査地全体図

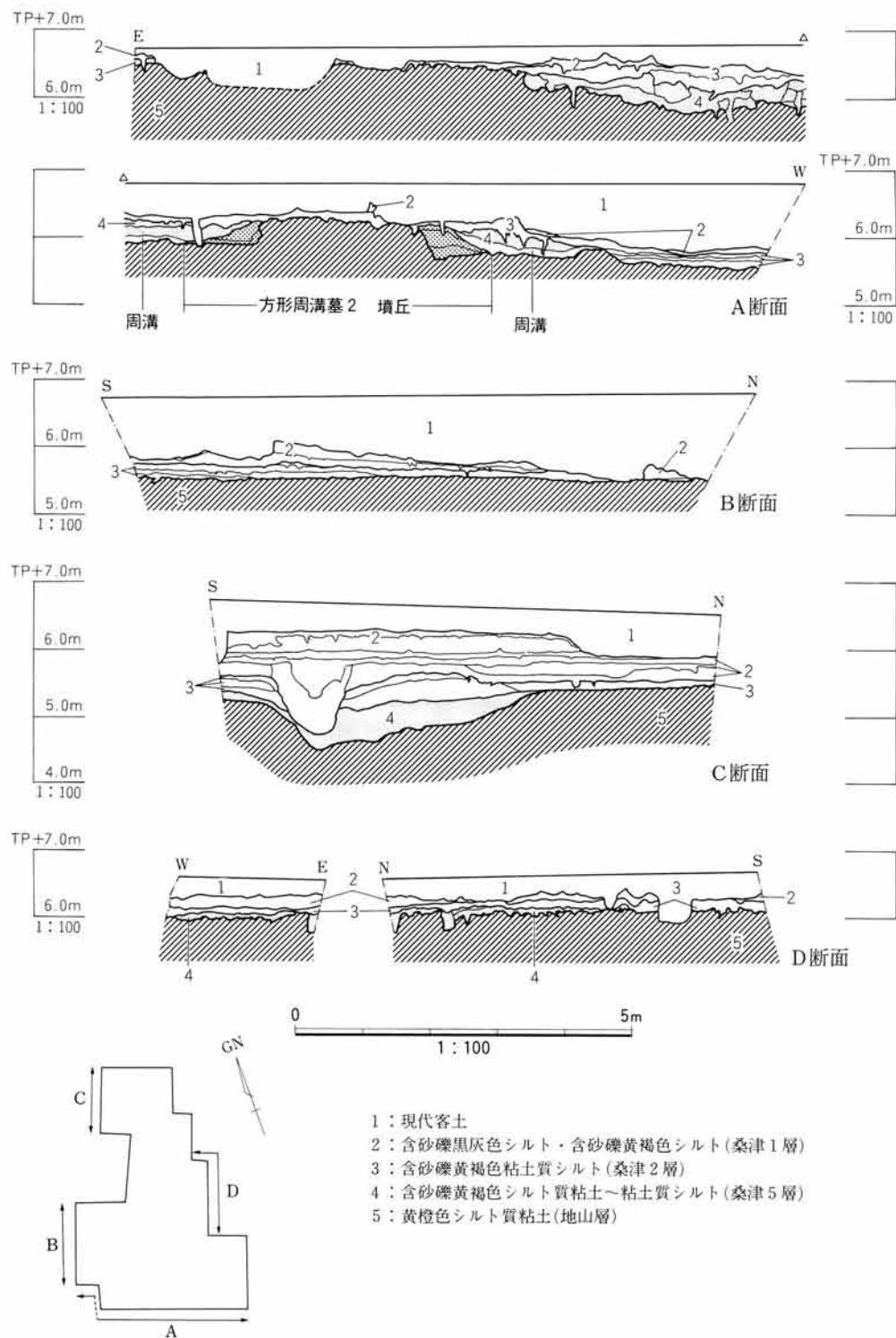


図115 調査地断面図

の層準で井戸3基(SE01~03)が確認されている。SE03からは室町時代の瓦質土器甕467が出土している(図113)。

桑津2層：砂礫を含む黄褐色粘土質シルトで、近世の作土層である。調査地のほぼ全域に分布し、層厚は約25cmである。3層に細分でき、最上層の上面で畝状の高まり、最下層の下面で北東から南西方向の犁溝群が検出された。鎌倉～江戸時代の土器が出土している。図113～468は本層出土の中国製白磁碗である。

本層下面の遺構として、調査地北端にSK05があり、そこから縄文時代の凹基無茎式石鏃481が見つかっている(図119)。

桑津5層：砂礫を含む黄褐色シルト質粘土～粘土質シルトで、奈良時代の遺物包含層である。弥生時代の方形周溝墓の南および東周溝上に厚く堆積し、地山層のブロックを多量に含む。本層の直上で奈良時代後半のものと考えられる掘立柱建物・溝が検出された。

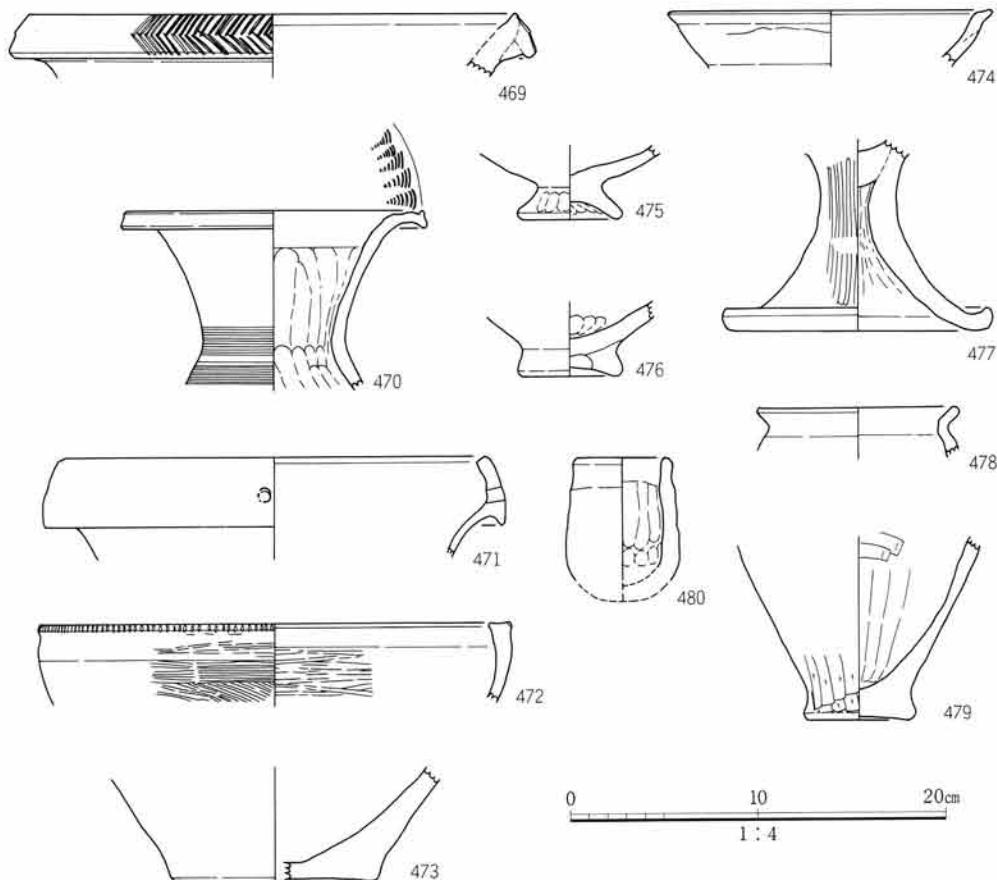


図116 方形周溝墓1周溝内出土遺物

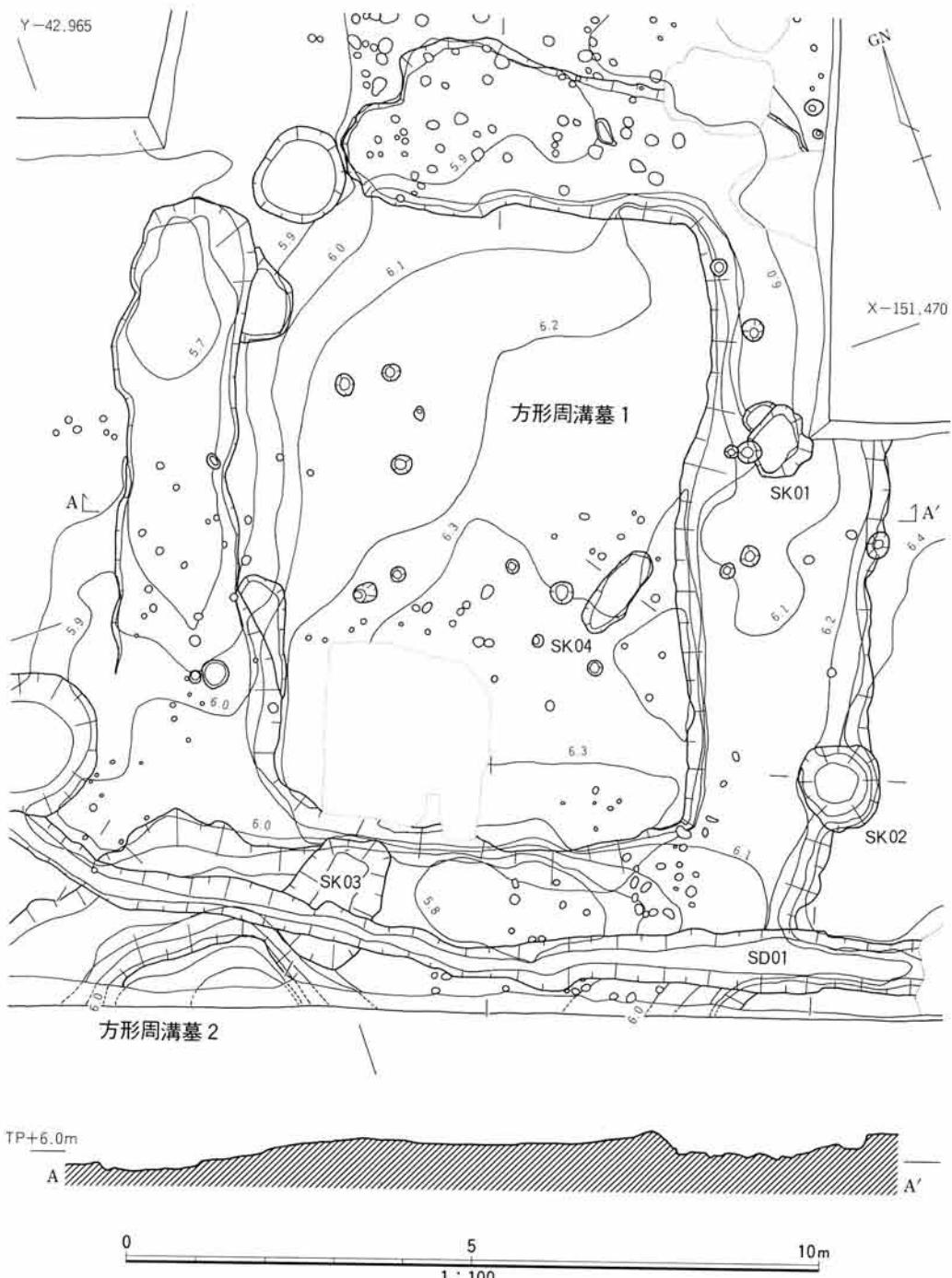


図117 方形周溝墓1実測図

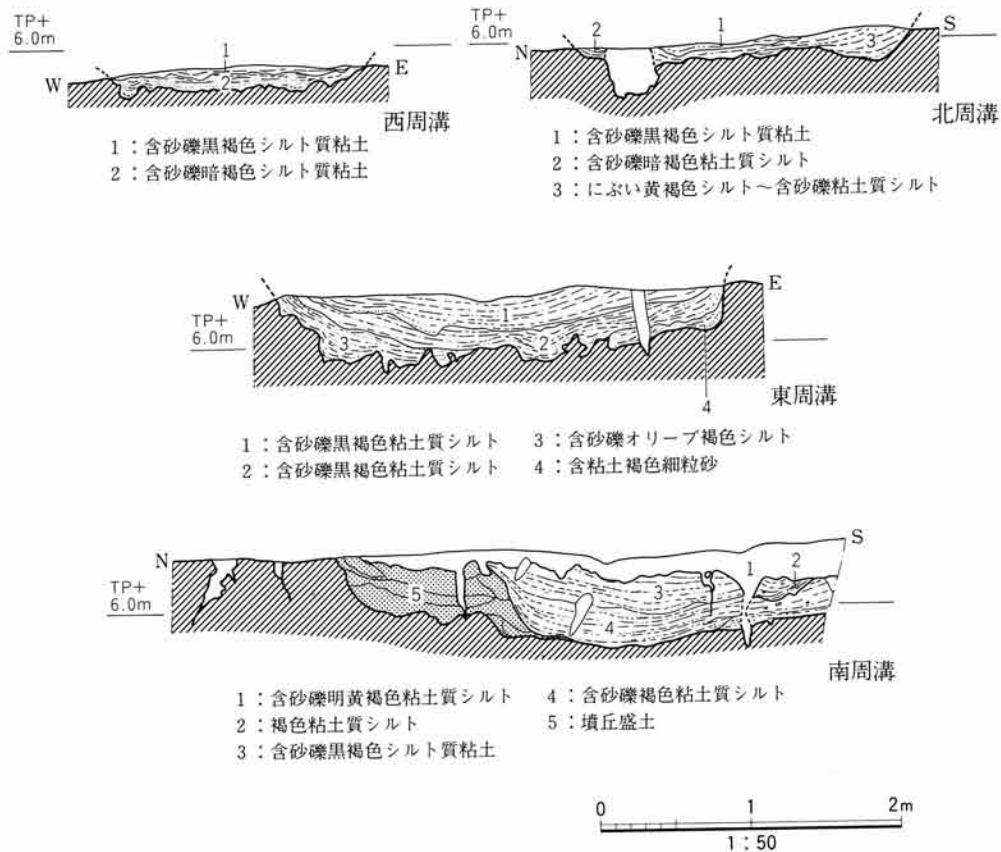


図118 方形周溝墓1周溝断面図

地山層：黄橙色シルト質粘土で、ところによっては砂礫を含んだ黄色粘土～細粒砂となる。本層の標高は調査地の東南部が6.5m前後でもっとも高く、調査地北西部が5.3m前後となり、もっとも低くなる。調査地の北西部では本層上部が暗色化しており、多数の樹木の根跡が確認された。

ii) 遺構と遺物(図版15・16・64・65)

主要な遺構として、弥生時代の方形周溝墓1・2、SK01～03、奈良時代のSB01、SD01、SK04がある。

a. 弥生時代

方形周溝墓1 調査地の中央部から以南に検出されたもので、墳丘の平面プランは長辺約9.5m、短辺約7.0mの長方形を呈する(図117)。また、周溝の外側までを含めた規模は南北14.0m、東西11.0mである。これまで桑津遺跡で発見された方形周溝墓の中では規模の

大きいグループに属する。

墳丘の盛土は、南辺裾部にわずかに残っていた以外は後世に削平されていた。盛土は地山層や弥生時代の旧地表とみられる砂礫を含んだ褐色シルトまたはシルト質粘土を用いており、全体に堅く締まっていた(図118下段)。墳丘内の埋葬施設については、墳丘の大半が削平されていたこともある、その痕跡すら確認できなかった。

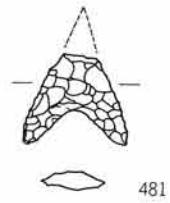
周溝は、陸橋状に溝が途切れる墳丘北西部コーナーを除いて、幅2~3m、深さ0.2~0.3mで墳丘の周りを巡る。南周溝は一部を方形周溝墓2と共有している。周溝内には砂礫含みの暗褐色粘土質シルトや黒色シルト質粘土が堆積しており、地山層のブロックも多量に含まれていた(図118)。南および東周溝の中央部、西周溝の南端部で供献土器とみられる畿内第Ⅲ様式古段階の壺・甕・高杯や飯蛸壺などが出土した。

図116に出土土器を示した。469~471は壺の口縁部、473は壺底部である。469・473は西周溝、470は南周溝、471は東周溝から出土したものである。469は口縁部外面に矢羽根状のヘラ描文、470は口縁部内面に扇形文、体部に直線文が施されている。471は有段口縁の壺で、胎土中に角閃石を多量に含む。また、補修孔とみられる円孔がある。472・474は鉢の口縁部で、どちらも南周溝から出土した。472の口縁部には刻み目が入れられる。474は浅い鉢で、口縁端部を水平方向につまみ出している。477は高杯の脚部で、西周溝から出土した。脚柱部内面にはシボリメ、杯部の底には厚めの円盤充填がみられる。480は飯蛸壺で、西周溝から出土した。475・476は甕の底部と思われ、低い台部をもつ。478は甕の口縁、479は甕の底部である。475は東周溝、476・479は西周溝、478は南周溝から出土した。

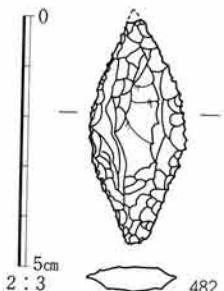
東周溝の南部からは凸基無茎式石鎌482も1点出土している(図119)。ほぼ完形で、作用部が鋸歯縁となっている。長さ4.55cm、幅1.90cm、厚さ0.45cmである。

方形周溝墓2 方形周溝墓1の南にあり、周溝を共有している。遺構の大半が調査範囲外となるため、全体の形状や規模は明らかでない。墳丘東西の裾部には盛土が残っていた(図115)。墳丘の北西コーナー付近の周溝内から供献土器とみられる畿内第Ⅲ様式古段階の壺・甕が出土した。

図120に出土遺物を示した。483~486は広口壺の口縁部、487は壺体部、491・492は壺底部である。483・487・491・492は墳丘の北西コーナー付近の周溝内から出土した。483・



481



482
図119 遺構内出土石鎌

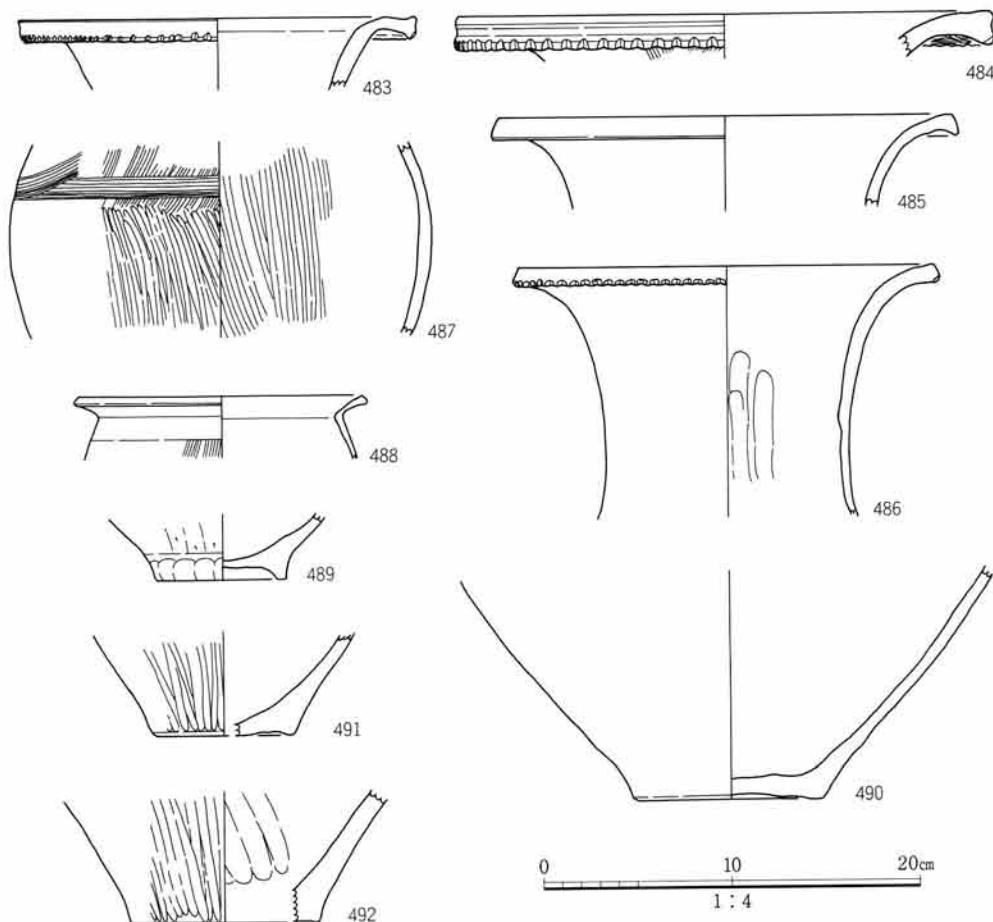


図120 方形周溝墓2周溝内出土遺物

484の口縁端部下端には刻み目があり、484の端面には凹線状の凹みがある。487には櫛描直線文がみられる。488は甕の口縁部、489・490は甕底部である。488は小型の甕で、「く」字状の口縁部をもつ。489は上げ底になっている。

SK01 方形周溝墓1の東周溝内中央部で検出された、一辺1.0m前後の方形の土壙で、深さは15cm程度である。砂礫を含む暗褐色粘土質シルトを埋土とする。畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階に属す広口壺493が出土している(図122)。493は口縁端部を斜め下方に屈曲させ、その端面に櫛描直線文を入れ、下端に刻み目を施している。

SK02 調査地南東部にあり、方形周溝墓1の東周溝の一部を切る土壙である。平面形は直径約1.2mの円形である。深さは約0.4mあり、埋土は砂礫を含む黒褐色シルトであった(図121)。畿内第Ⅳ様式に属する土器(図122-494・495・498)やサヌカイト剥片などが出

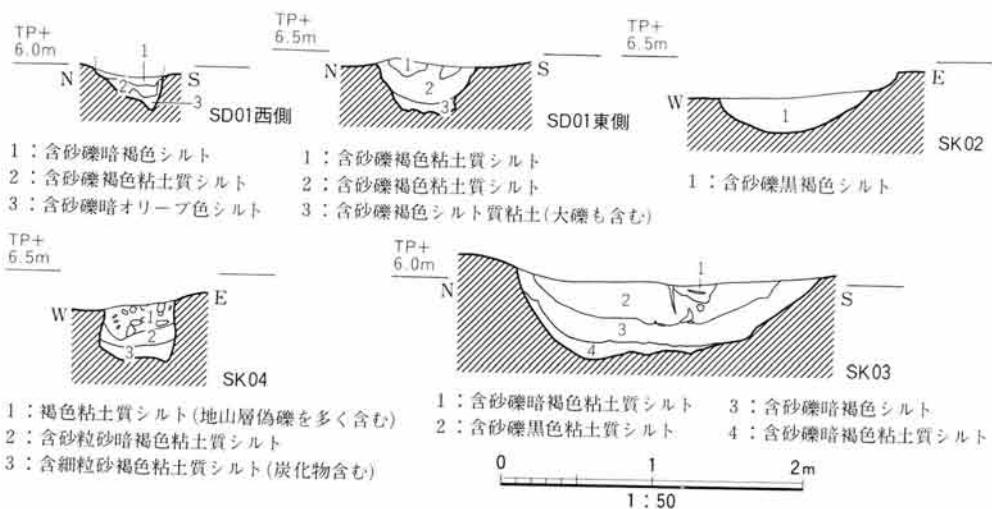


図121 SD01、SK02~04断面図

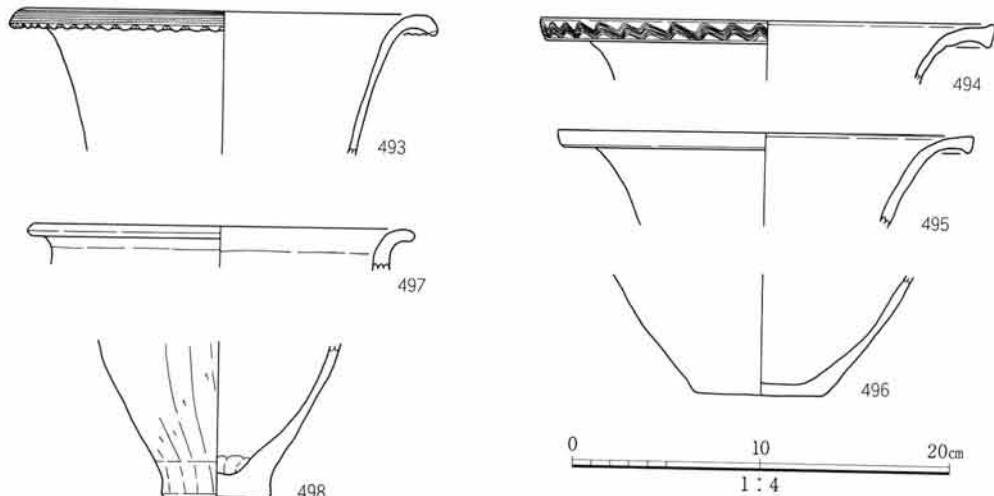


図122 SK01~03出土遺物
SK01(493)、SK02(494・495・498)、SK03(496・497)

土した。494・495は広口壺の口縁部で、494の口縁端面には櫛描波状文が施されている。498は甕の胴部下半である。

SK03 調査地南端にあり、方形周溝墓1の南周溝内に掘られた土壙である。平面形はやや不整形な隅丸長方形を呈し、長辺約2.0m、短辺0.9m、深さ0.6m前後である。埋土は上層から含砂礫黑色粘土質シルト、含砂礫黒褐色粘土質シルト、含シルト暗褐色砂礫となっている(図121)。上層から畿内第Ⅲ様式の土器が出土した。土壙は、位置や形状から周溝

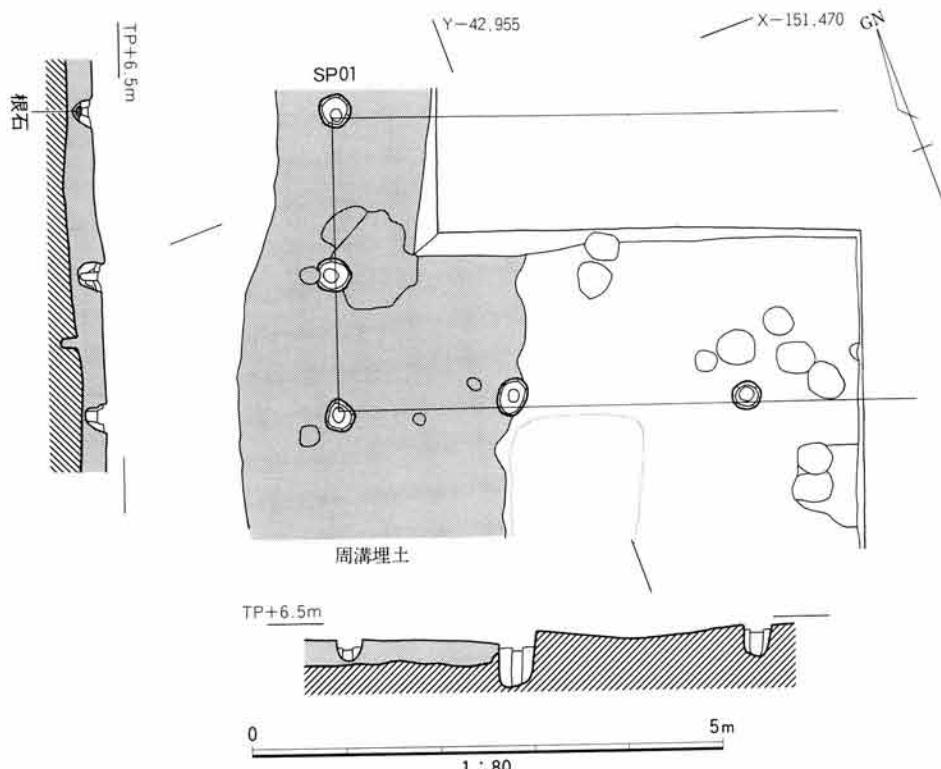


図123 SB01実測図

内埋葬かとも思われたが、主体部であることを示す遺物や形跡は確認できなかった。図122-496・497がこの遺構の出土遺物である。496は壺の底部である。497は甕で短く外反する口縁部をもつ。

b. 奈良時代

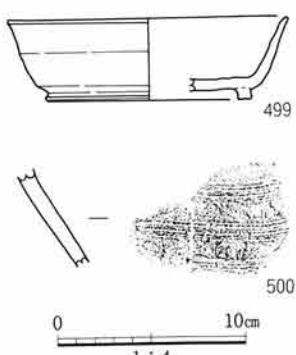


図124 SD01出土遺物

SB01(図123) 調査地の東部、方形周溝墓1の東周溝上からその東側にかけて検出された、梁行2間(3.2m)、桁行2間(5.6m)以上の掘立柱建物である。柱間寸法は南北方向の柱筋で1.5mおよび1.7m、東西方向では1.8mおよび2.1mとなっており、不揃いである。掘形は直径30cm前後あり、直径約10cmの柱痕跡が確認された。SP01では柱穴の底に凝灰岩の根石が置かれていた。柱穴からは土師器の細片が出土しているにすぎないが、後述するSD01とほぼ同時期の奈良時代後半の遺構と考えられる。

SD01 調査地の南部に位置する東西方向の溝で、幅0.7m前後、深さ0.3~0.4mである。溝内には地山層のブロックを含んだ含砂礫褐色シルト、含砂礫褐色シルト質粘土が堆積しており(図121)、須恵器杯B499が出土した(図124)。法量は口径14.7cm、器高4.3cmで、平城宮Ⅲとするのが妥当と思われる。溝は調査地の東部から西部に向って深く掘られていることから、調査地の東側に広がる奈良時代の建物群の区画を兼ねた排水路と思われる。弥生時代中期の土器片(図124-500)も出土している。

SK04 調査地の南部に位置する隅丸長方形の土壙である。規模は長辺約1.4m、短辺約0.4m、深さ約0.4mである。埋土は細粒砂を含んだ褐色~暗褐色の粘土質シルトで、全体に地山層のブロックを多量に含む(図121)。土壙の底はほぼ平坦に整えられている。埋土が人為的に埋戻されたものであること、最下層の褐色粘土質シルトに多量の有機物が含まれていたことなどから墓である可能性が考えられる。遺構の時期は埋土の状況などから奈良時代以降と推定される。

3) 小結

この調査では弥生時代中期の方形周溝墓のほぼ全体が確認されたほか、奈良時代の掘立柱建物・溝・土壙、中・近世の水田や畑に関係した遺構も検出されるなど、当地域の歴史的な変遷過程を明らかにする上での基礎的な資料がえられた。

これまで桑津遺跡の方形周溝墓は、東住吉中学校内の各調査で畿内第Ⅱ~Ⅳ様式の例、KW88-6次で畿内第Ⅲ様式新段階の例が確認され、そのいずれもが集落の外縁部に位置していた。本調査では畿内第Ⅲ様式古段階の例が確認されたが、居住域とかなり近接した場所に営まれていたことは注意される。また、墓域の時期的な変遷として、居住域東方の低地部には中期初頭から墓域が形成されていたが、中期中葉以降になって居住域より標高の高い、西方の地域にも墓域を設けることになったのではないかと考えられる。

第15節 KW91－2次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(桑津3丁目28)は桑津遺跡の北端部にある。現在の『大阪市文化財地図』(1995年6月)をみると、当遺跡のこの部分は北側に張出した形となっている。これは、ここに報告する調査において弥生時代や飛鳥時代の遺構が確認され、遺跡範囲を広げて捉えるべきことが明らかになったためである。

KW90－6次として試掘立会を行ったところ、地表下約20cmに地山層があり、須恵器・土師器を中心とする遺物、そして遺構の存在が確かめられた。その結果を受けて、この調査を実施することになった。調査後に建設の予定されている建物は平面六角形であったが、調査の都合上、同一面積で長方形(14.0m×26.5m)の調査区を設けることとした。表土掘削には重機を用いたが、ほぼ全域で、表土直下に地山層あるいは遺構の埋土がみられた。表土は薄い部分では約5cmの厚さしかなく、そのため攪乱が多く、遺構は後世の削平をかなり被っていた。しかし、弥生時代の方形周溝墓、飛鳥時代の掘立柱建物が見つかるなど、予想以上の成果があり、5月18日には現地説明会を開催した。調査期間は1991年4月12日～5月31日で、調査面積は371m²であった。

2) 調査結果

この調査地では、表土直下が明黄褐色砂質シルトの地山層であった。地山の標高は西端でもっとも高く5.7m前後で、東に向ってやや低くなる傾向がみられた。以下、検出された遺構と遺物について述べる(図125、図版17・66・67)。

a. 弥生時代

方形周溝墓1・2(図126) 調査区の西半部に、可能性にとどまるものも含め2基の方形周溝墓がある。墳丘部分はほとんど削平されており、周溝だけが部分的に残っていた。そのうちの方形周溝墓1は、東・西および南周溝が確認されたが、北周溝が推測される部分には攪乱があり、それを検出することはできなかった。しかし、西周溝の北端に近いところで東に向って周溝が拡幅されており、これが北周溝につながっていくものと思われる。推定される規模は東西約7.0m、南北約5.5mで、残存する周溝の深さは10cm前後である。埋土は主として、砂礫を含んだにぶい黄橙色シルト質粘土であった。遺物は土器のみで、

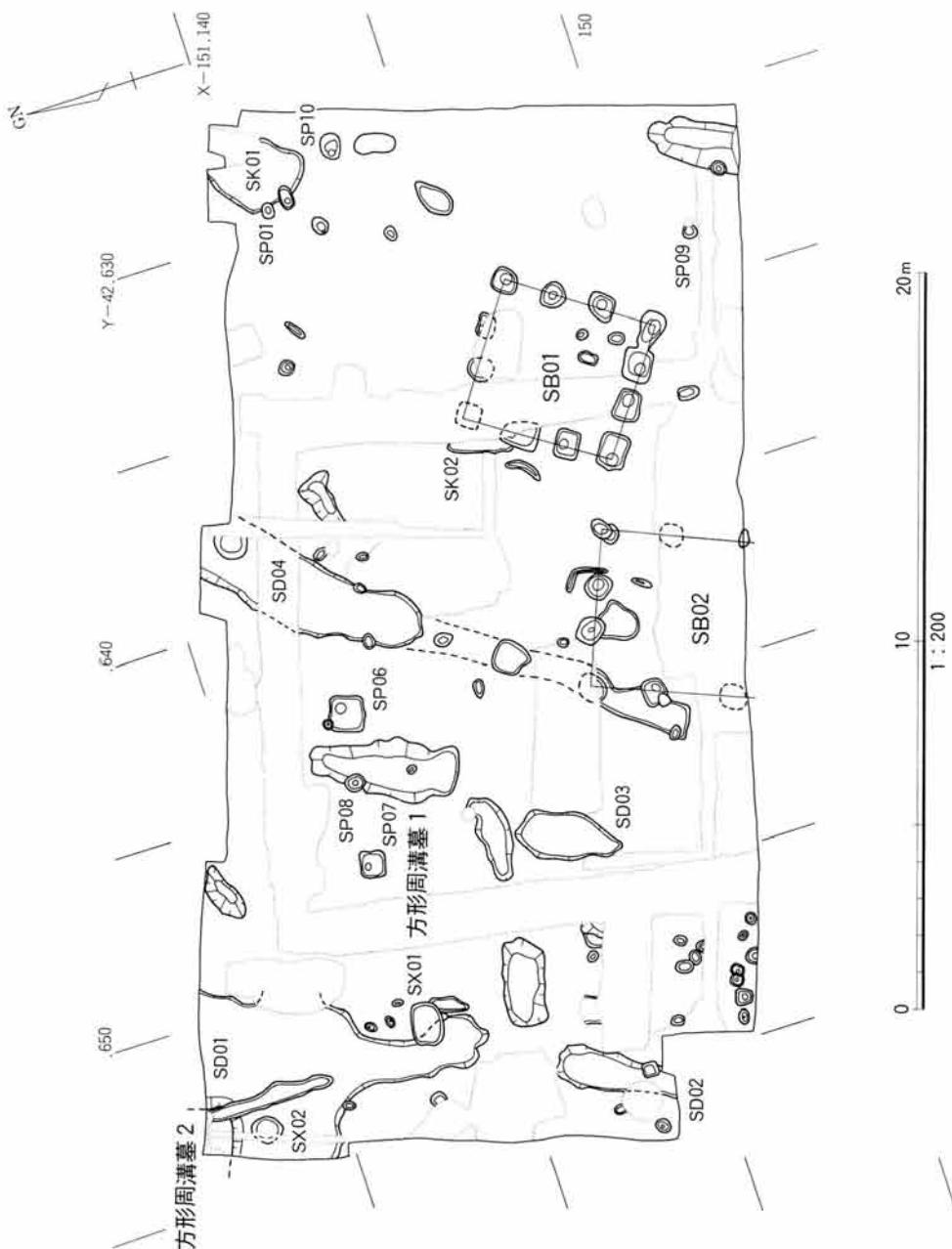


図125 KW91-2次調査地全体図

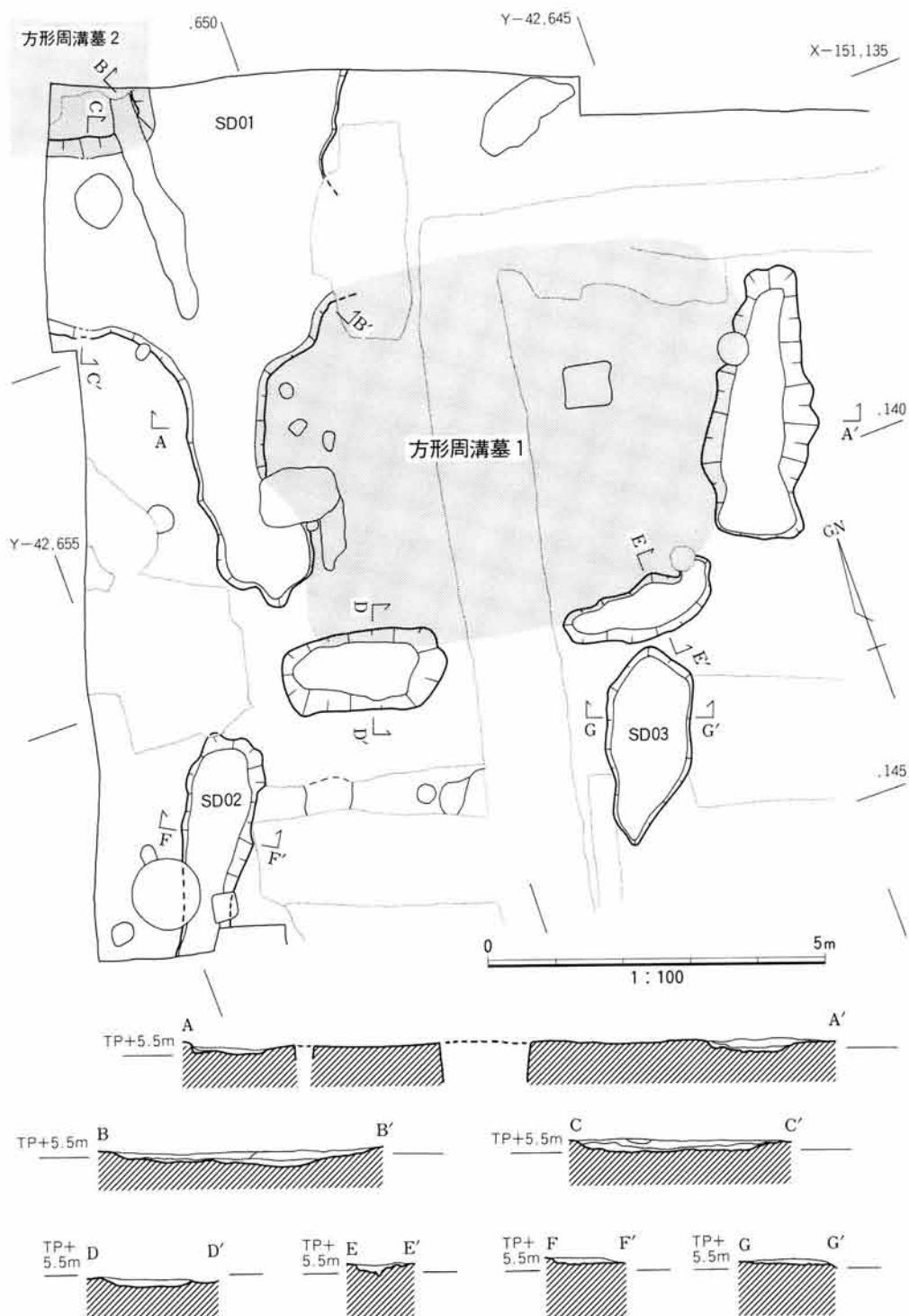


図126 方形周溝墓1・2実測図

西周溝から出土している。全体の形のわかるものはないが、各部分の特徴から畿内第Ⅳ様式新段階のものと考えられる。図127に出土遺物を示した。501・502は広口壺の口縁部で、どちらも端部を垂下させている。残存する範囲では文様は認められない。502には角閃石が含まれている。503・505は甕で、503は底部、505は口縁部の破片である。504は高杯の脚部である。

前述した西周溝の北端でこれと交わるSD01がある。SD01は幅約3m、深さ0.2mで、L字形に屈曲する。この溝を周溝の南東隅部とする方形周溝墓2の存在が推測される。また、南周溝の東西の端には、それとほぼ直角をなすSD02・03が南に向って延びている。SD02からは凸基無茎式石鎌が1点出土した。

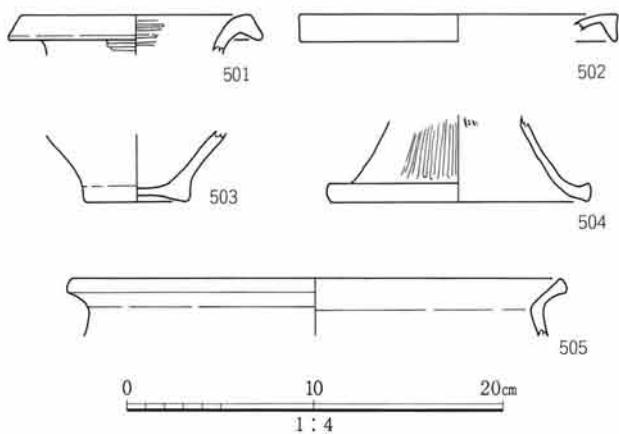


図127 方形周溝墓1 西周溝出土遺物

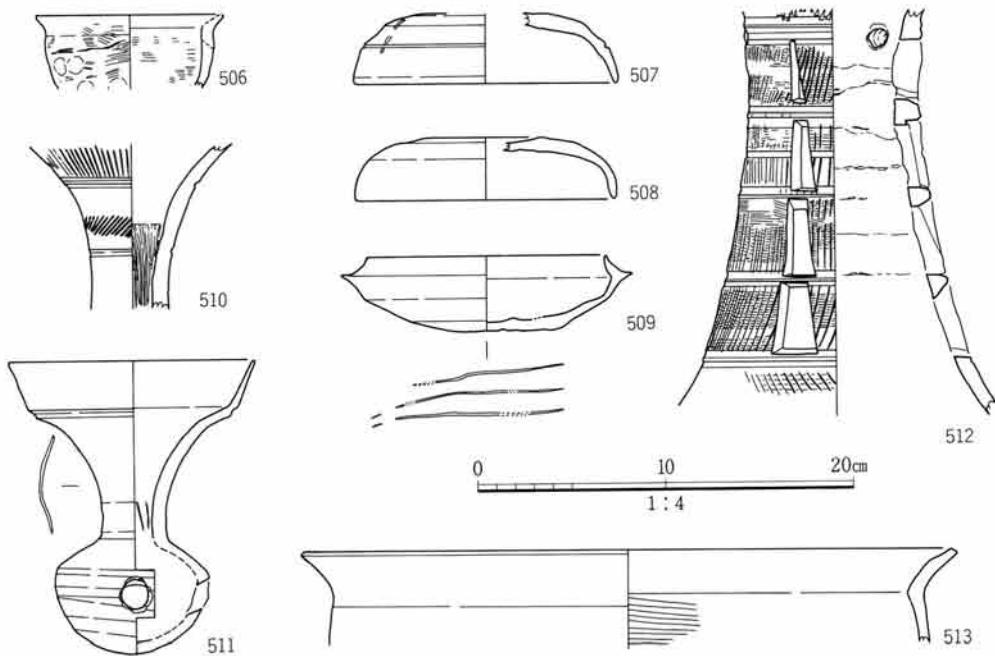


図128 SD04出土遺物

b. 古墳時代

SD04 調査地中央部にあり、南西から北東方向をとる溝である。幅0.8~1.8mあり、北東方向へ向け少しづつ深さを増し、もっとも深いところで12cmを測る。一部には後世の削平のため途切れる部分もある。溝の北端は調査地北壁と交差し、その手前的位置で土器類がまとまって出土している。その種類はさまざままで、杯身・杯蓋・甕・器台・魂などがあるが、完形に復元できるものは少ない。須恵器はTK43型式またはTK209型式のものである。この溝はなんらかの区画を示すものと思われるが、その方向が飛鳥時代の掘立柱建物SB01の棟方位と近いことが注意される。

図128に出土遺物を示した。506は土師器杯で、口縁部を短く屈曲させる。体部は内外面ともハケ調整されている。513は大型の土師器甕の口縁部で、端部をわずかにつまみ上げている。507・508は須恵器杯蓋で、口径14cm弱あり、端部は丸くおさめられている。509は須恵器杯身である。口径12.8cmあり、口縁端部や受部端はやや鋭い。底部外面に3条の線刻からなるヘラ記号がある。510・511は須恵器魂で、510は頸部、511は完形である。510は凹線で区切られたスペースに、縦方向のヘラ描文や列点文が施されている。頸部内面にはシボリメが明瞭に残る。511はラッパ状に大きく開く口縁部をもち、頸部は細くすぼまっている。体部は小ぶりで肩が張り、下半部が半球形になる。体部中央に直径1.4cmの円孔があり、それと反対側の頸部に縦一字のヘラ記号がある。512は器台の脚部である。外面全体にカキメ調整が行われ、その後、縦方向のヘラ描文・凹線の施文、スカシ孔の穿孔が行われている。スカシ孔は3方向に開けられ、その最上段に直径1.2cmの円孔がある。

図129 SP01出土白玉 SK01 調査地北東隅にある土壙で、規模は南北3.0m以上、東西

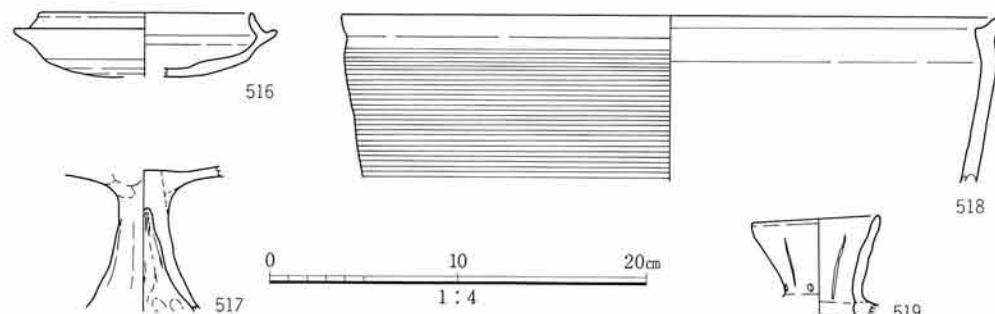


図130 SK01・SX01出土遺物
SK01(516・517・519)、SX01(518)

2.0m、深さ0.1mである。北側はさらに延びて溝状の遺構になる可能性もある。仮に溝であるならば、上述のSD04と並走するものであったことも考えられる。須恵器や土師器の破片が出土している(図130)。517は土師器高杯の杯底部から脚柱部である。器表が磨滅しており、調整はよくわからない。516は須恵器杯身で、口径11.2cmある。口縁部の立上がりからみても、TK209型式であろう。519は小型の平瓶の口頸部である。頸部の内外面に、縦一文字のヘラ記号がある。

この土壙を切るSP01からは滑石製白玉が2点出土している(図129)。515は直径7.2mm、孔径2.3mm、厚さ4.0mmで、側辺に稜をもたない。514も側辺は直線的で、直径5.2mm、孔径2.0mm、厚さ4.5mmである。

c. 飛鳥時代

SB01・02、SX01・02のほか、いくつかの土壙・ピットがある。

SB01 調査地東部にあり、平面が正方形に近い3間×3間の掘立柱建物である(図132)。床東にあたる部分の柱穴は不明であるが、総柱であった可能性もある。建物の北西辺と南東辺の柱間がほぼ揃っているのに対して、北東辺・南西辺では中央の柱間が両脇のそれよりも狭くなっている。そのため北東辺・南西辺が梁間になるものと思われる。ならば、棟方向はN35°E、桁行4.2m、梁間3.7mの建物ということができる。また、建物の南隅にあるSP04・05は、検出した時点での輪郭が一続きになっており、掘形の掘削に際し、布掘りを行った可能性がある。掘形の平面形には方形または隅丸方形があり、後者は南東側に限られる。掘形は一辺0.6~1.0m、深さ0.4~0.6m、柱痕跡の直径は0.2m強である。北西辺の柱穴の一つは土壙SK02を切っていた。

掘形内から520~522が出土している(図131)。520はSP03出土の須恵器杯身で、口径10.0

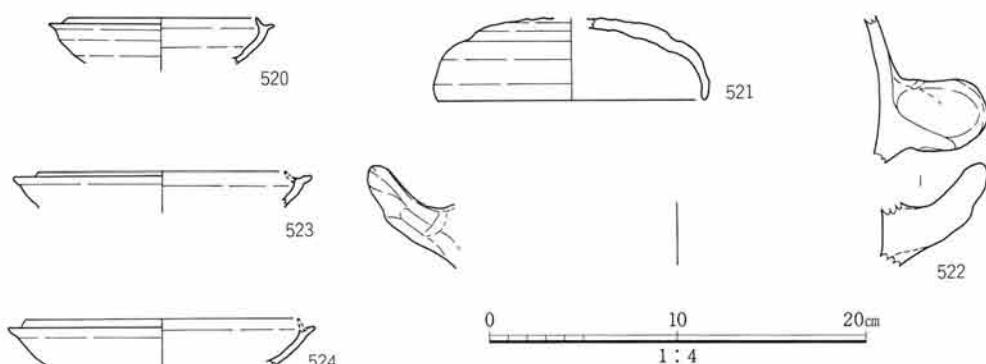


図131 柱穴出土遺物
SP02(521)、SP03(520)、SP04(522)、SP09(523)、SP10(524)

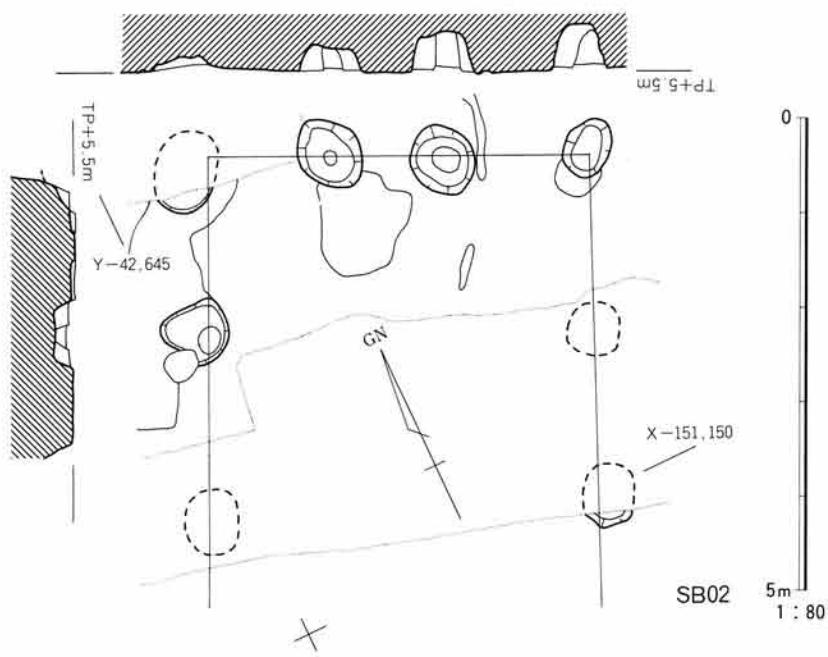
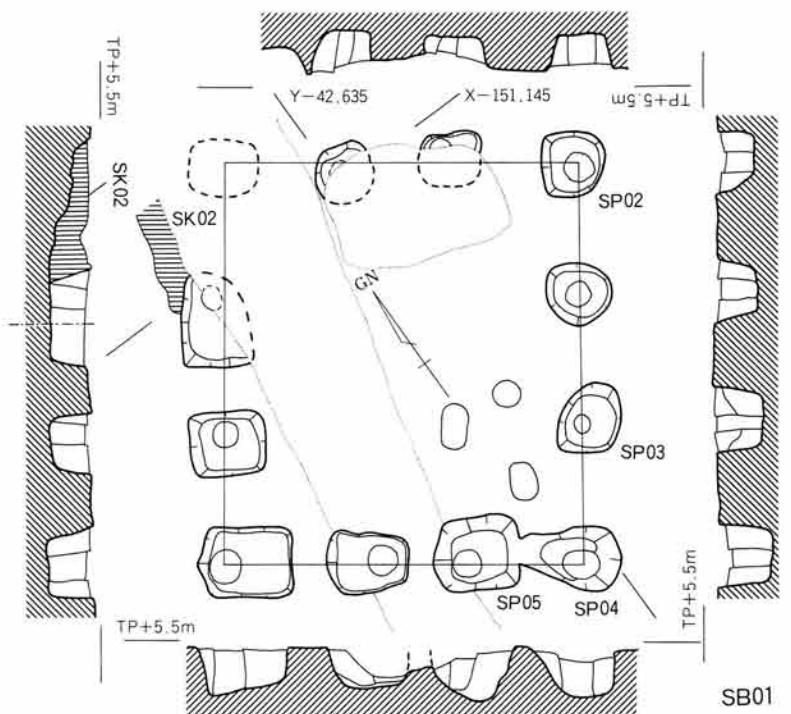


図132 SB01・02実測図

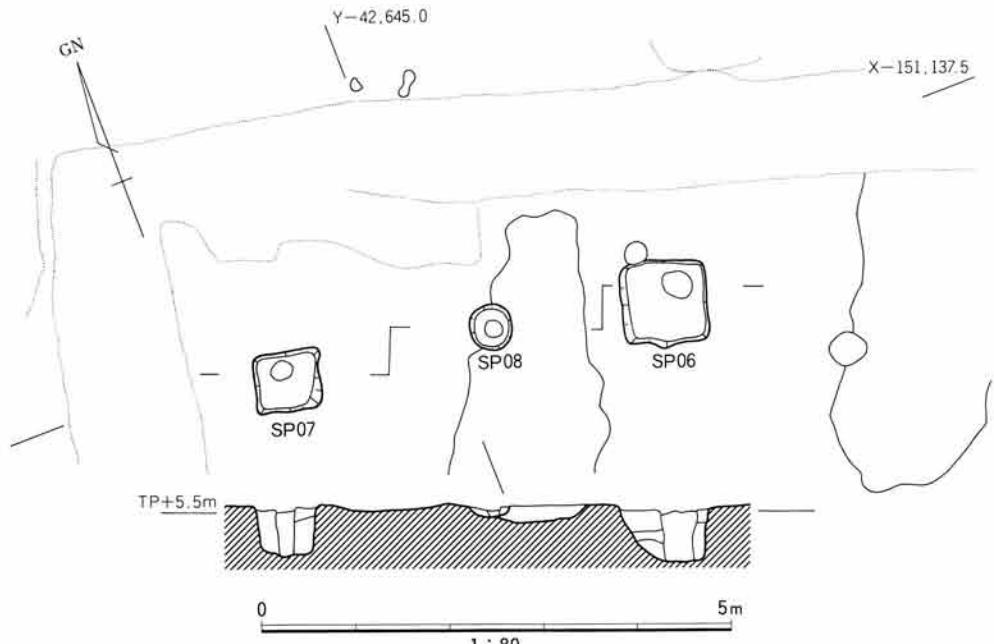


図133 SP06~08実測図

cmである。TK217型式に当る。521はSP02から出土した須恵器杯蓋で、口径が14.3cmあり、TK209型式と考えられる。522はSP04から出土した土師器鍋で、斜め上方に延びる扁平な把手が付く。

SB02 SB01の南西側で見つかった3.5m(2間)以上×4.2m(3間)の掘立柱建物で、棟方向はN25°Eを指す。攪乱によっていくつかの柱穴が消滅しているため定かではないが、梁間よりも桁行の柱間寸法が広いようである。掘形の平面は円形で、直径約0.6m、深さ0.3~0.5m、柱痕跡の直径は約0.2mである。SB01とはわずかに棟方位が異なるが、SB01と同様に梁間中央の2柱穴の間がやや狭くなる構造となっており、この2棟の建物は近接した時期のものと思われる。西側柱はSD04の一部を切っている。

SX01・02 ともに焼土を埋土に含む土壤で、調査地の西部にある。SX01は平面1.2m

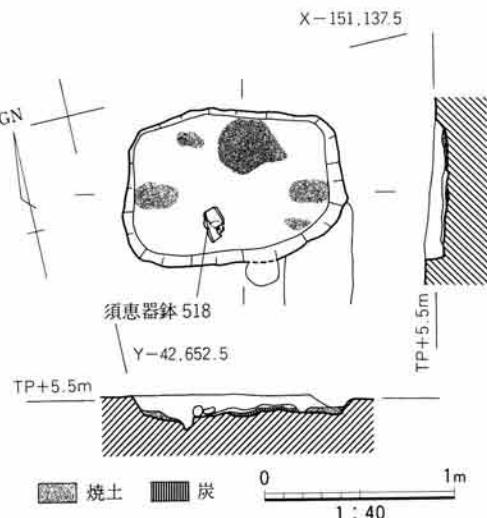
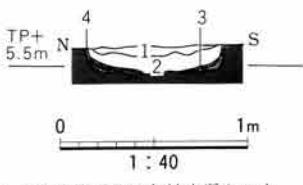


図134 SX01実測図

×0.8mの隅丸方形をしており、深さ約0.1mある(図134)。底面および壁面には火を受けた痕跡が明瞭に残る。埋土の最下部には炭化物の層が数cmの厚さで堆積していた。SX02は直径0.8mの円形で、深さ0.2mである(図135)。SX01と同じように底と壁に火を受けた跡がある。



- 1 : 含砂礫灰黄褐色粘土質シルト
- 2 : 含砂礫灰黄褐色粘土質シルト
(炭・焼土含む)
- 3 : 炭
- 4 : 橙～褐灰色シルト(焼土)

図135 SX02断面図

しかし、SX02ではその部分全面に、厚さ1cm強の橙～褐灰色シルトを貼付けていた点がSX01とは異なる。

SX01からは須恵器鉢(図130-518)が出土しているが、SX02からは時期を確定しうる遺物は見つかっていない。鉢518は口径35.0cmある大ぶりの土器で、口縁部の内側を受口状につくる。体部外面にはカキメが施されている。類似した形態の土器がKW91-8次調査で井戸内から出土している。

そこで共伴している須恵器杯類から、TK217型式のものと思われる。

ピット SB01・02関係するもの以外に、合計44基が見つかっている。そのうち調査地北半部にあるSP06・07は掘形も大きく、柱痕跡も明瞭に残っていたが、組み合うピットがなく、建物として捉えることができない(図133)。また、掘形各辺の向きがSB01とは異なつており、時期差があるとみられる。調査地の南西部にも直径30cm前後のピットが集中する部分があり、調査地の南西方向にもさらに建物が存在すると考えられる。

図131-523・524はそれぞれSP09・10から出土した須恵器杯身である。小片のため口径の復元値をそのまま受け取ることはできないが、立上がりがかなり矮小化しており、TK217型式に属すると思われる。

3) 小結

この調査が行われるまで、遺跡北端部での調査例は少なく、周辺の状況についてはよくわかっていないかった。最寄りの調査地として、この現場の南東50mにKW88-26次調査地があったが、中世以降の削平により古代以前の遺構は確認されていなかった。

この調査では弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代後期の溝、飛鳥時代の掘立柱建物などが検出された。特にこの地域で方形周溝墓が見つかったことは、当時の墓域が集落の北側にまで広がっていたことを明らかにした点で意味があった。また、飛鳥時代の掘立柱建物が確認されたことも、まだ不明な点の多いこの時代の集落像を考えていく上で重要なものである。

第16節 KW91-8次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(桑津4丁目4)は桑津遺跡の東部に位置し、現在の駒川の西岸にある。調査は集合住宅の建設に先立つもので、1990年12月11日に試掘調査を行った。その結果、現地表下45~70cmで地山層が検出され、遺構の存在も確認された。それを受け、91年6月1日より建物が建設される部分についての調査に着手した。表土から中世の包含層までを重機によって掘削し、そのほかは人力で掘削した。調査の過程で飛鳥時代の掘立柱建物群が検出され、その広がりを追及する必要が生じたため大阪市教育委員会と協議の上、約110m²の拡張を行った。また、この成果を一般公開するため、7月20日に現地説明会を実施した(写真8)。その後、出土遺物の整理中に飛鳥時代の呪符木簡が確認された。調査は8月7日に終了し、調査面積は全体で720m²であった。

2) 調査結果

i) 層序(図136)

桑津0層：現代客土で、この調査地内では平均40cmの層厚である。

桑津2層：近世の作土層で2層に細分される。上層はオリーブ褐色粘土質シルトで、層厚は最大10cmある。下層は粗粒砂を含むにぶい黄灰色細粒砂で、層厚は20cmである。どちらの層にも陶磁器・瓦が包含される。

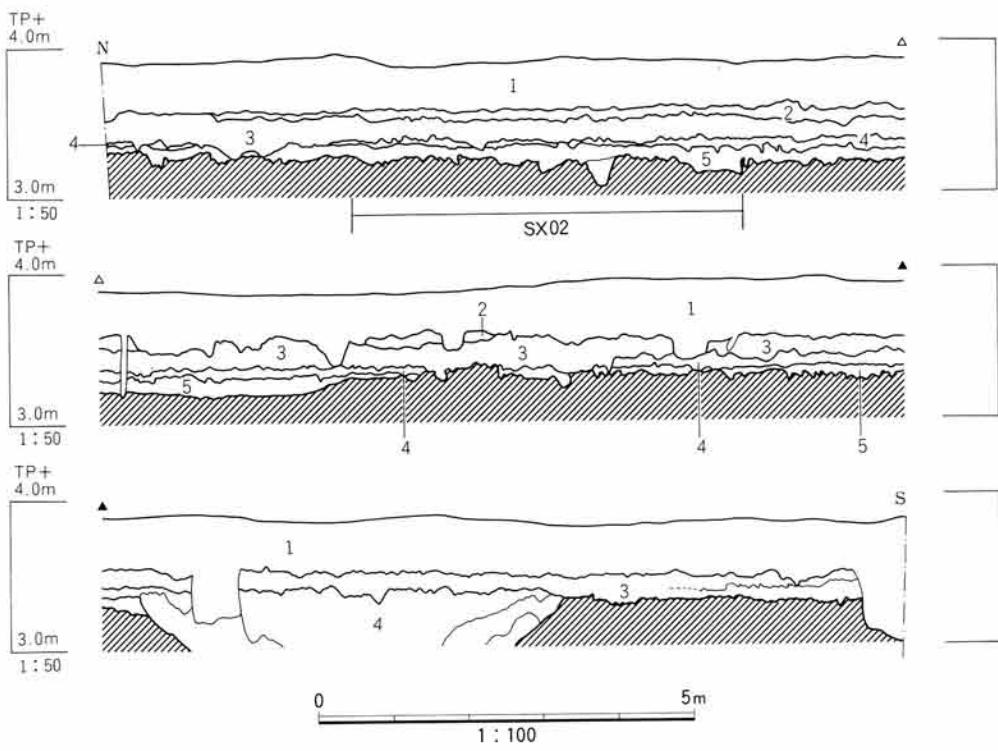
桑津3層：褐色中粒砂で、層厚は最大10cm。瓦器片を包含し、中世以降の耕作土である。

桑津5層：粗粒砂を含むにぶい黄褐色粘土質シルトで、層厚は最大15cmある。土師器・須恵器を包含し、奈良時代以降の作土層である。桑津4層の可能性もある。本層下面で耕作痕跡が、基底面で掘立柱建物が検出された。

地山層：にぶい黄橙色粗粒砂～粘土質シルト。標高は3.4~3.7mであり、西から東に向けて低くなる。



写真8 KW91-8次現地説明会風景



1 : 現代客土
 2 : オリーブ褐色粘土質シルト(桑津 2 層)
 3 : 含粗粒砂にぶい黄褐色細粒砂(桑津 2 層)
 4 : 褐色中粒砂(桑津 3 層)
 5 : 含粗粒砂にぶい黄褐色粘土質シルト(桑津 5 層)

図136 KW91-8次調査地東壁断面図

ii) 各層出土の遺物(図139・140、図版68・69)

桑津 2・3・5 層から出土したおもな遺物について述べる。526~545・547~551・557~559は桑津 5 層、552~554は桑津 3 層、546・555・556・560は桑津 2 層から出土した。

桑津 5 層出土遺物 526は弥生時代中期の高杯の杯部で、口縁部外面に凹線文をもつ。527・528はV期の円筒埴輪で、ともに須恵質である。529・530は土師器高杯の脚柱部である。形態や製作技法が両者で異なる。531は土師器の把手で、舌状を呈し、大きく屈曲している。532~545・547~551は須恵器である。532はTK23型式の杯身で、前述の埴輪と関連するものと考えられる。533・537~541は杯蓋で、533は古墳時代からの流れを汲むもの、それ以外は、口縁部の内側にかえりをもっており、宝珠つまみをもつTK217型式以降のものである。534~536は杯身で、矮小化した立上がりをもつ。TK209型式ないしTK217型式に属する。542・543は杯Bで、口径約15cm、器高約 4 cmである。高台が底部の外縁寄

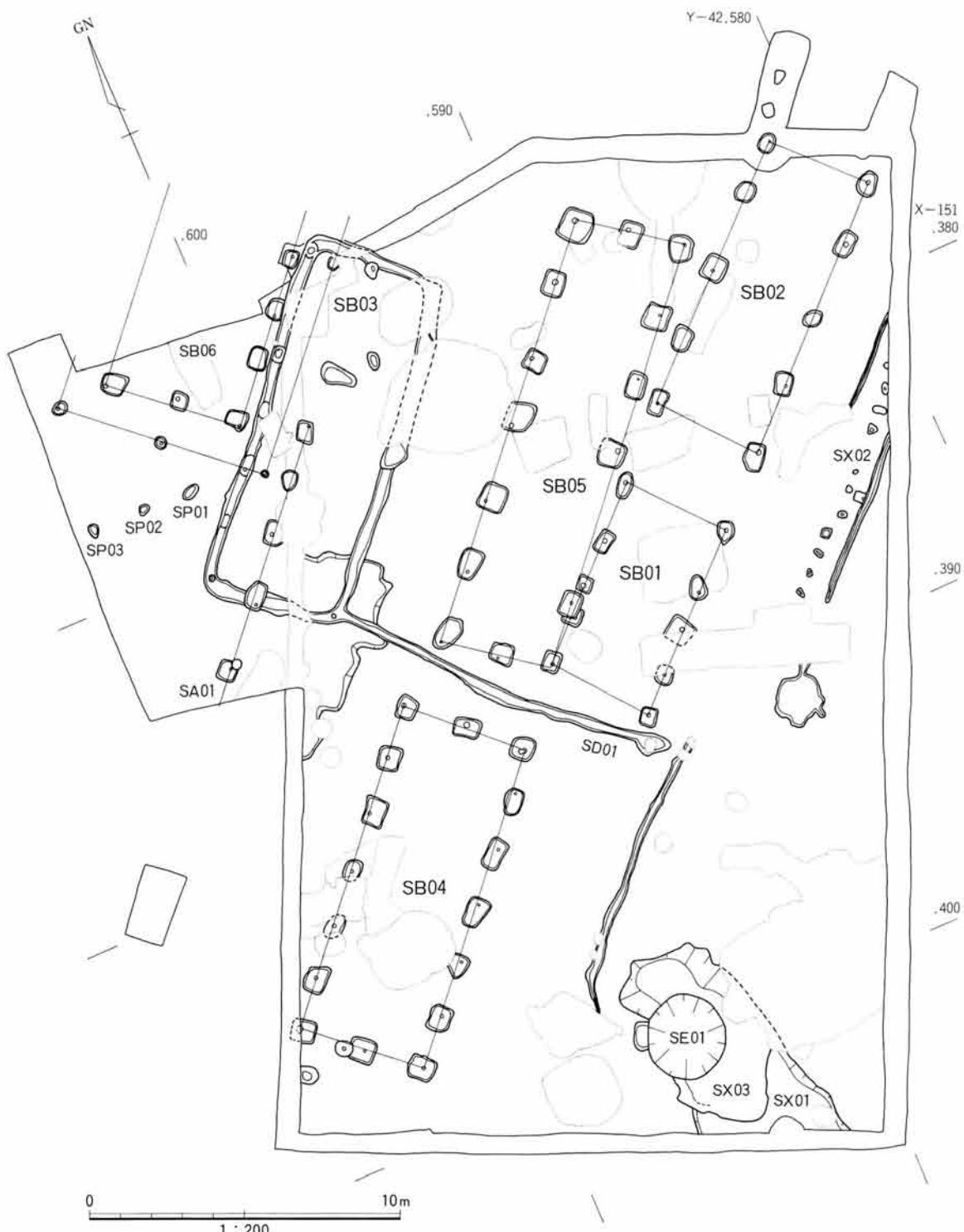


図137 調査地全体図

りにあり、その高さが5mm前後であることから、平城宮Ⅲのものと思われる。当調査地の桑津5層中の遺物として、もっとも新しい時期を示すものである。545は残存範囲に円孔はみられないが、古墳時代後期の鰐と考えられる。544は壺の体部で、もっとも張出した部分にヘラ描の斜線が入れられている。鰐545と同時期のものであろう。547～551は甕で、そのうち547・548は外反する短い口頸部をもつもの、549は緩やかに外反する長い口頸部をもつものである。550・551は体部の破片で、550には外面にヘラ記号と思われる線刻があり、551の内面には車輪文当て具の痕がみられる。547・548についてはTK209型式に属すると思われ、549についてはMT21型式中に類似する形態がある。557～559は瓦類である。558・559は平瓦で、凸面に縄タタキメ、凹面に布目があり、559では側面にも布目がおよぶ。557は道具瓦と思われ、凸面は磨滅しており調整不明であるが、凹面にはハケメが施される。

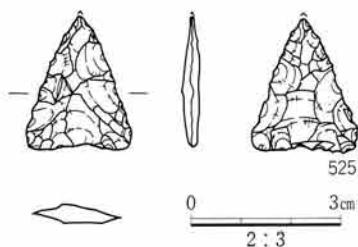


図138 桑津5層出土石鎌

このように本層内の遺物をみると、古墳時代中期末葉、古墳時代後期末～飛鳥時代前半、そして奈良時代中葉のものがある程度のまとまりをもっていた。

遊離資料ではあるが、本層から平基無茎式石鎌525が出土している(図138、図版94)。完形で、長さ2.65cm、幅2.10cm、厚さ0.35cm、重量1.6gである。

桑津3層出土遺物 552は青白磁の碗で、同安窯系とみられる。553は瓦器椀の底部で平安時代末のものである。554は瓦質の擂鉢で、口縁部の断面が三角形をなしており、15世紀代のものであろう。

桑津2層出土遺物 546は須恵器壺などの脚台部で、奈良時代以前のものである。555・556は肥前染付の碗で、555は筒茶碗、556は側面にコンニヤク印判のある茶碗である。いずれも18世紀後半ごろのものである。560は連珠文をもつ軒平瓦で、連珠文の上下に圈線をもつことから、平安時代末～鎌倉時代のものと思われる[市本芳三1995]。

iii) 遺構と遺物(原色図版1、図版18～20・69～72)

桑津5層の基底面で飛鳥時代の掘立柱建物を中心とする遺構群を検出した(図137)。

SB01(図141) 調査地の中央やや東寄りで検出された掘立柱建物で、桁行6.75m(4間)、梁行3.51m(推定2間)である。柱間寸法にはばらつきがあり、平均値で、桁行が1.69m、梁行が1.75mである。妻柱は削平されている可能性が高い。西側柱には根石を据えているものが2基ある。また、別の1基はSB05の柱穴に一部を切られ、南西の隅柱はSB05の南東

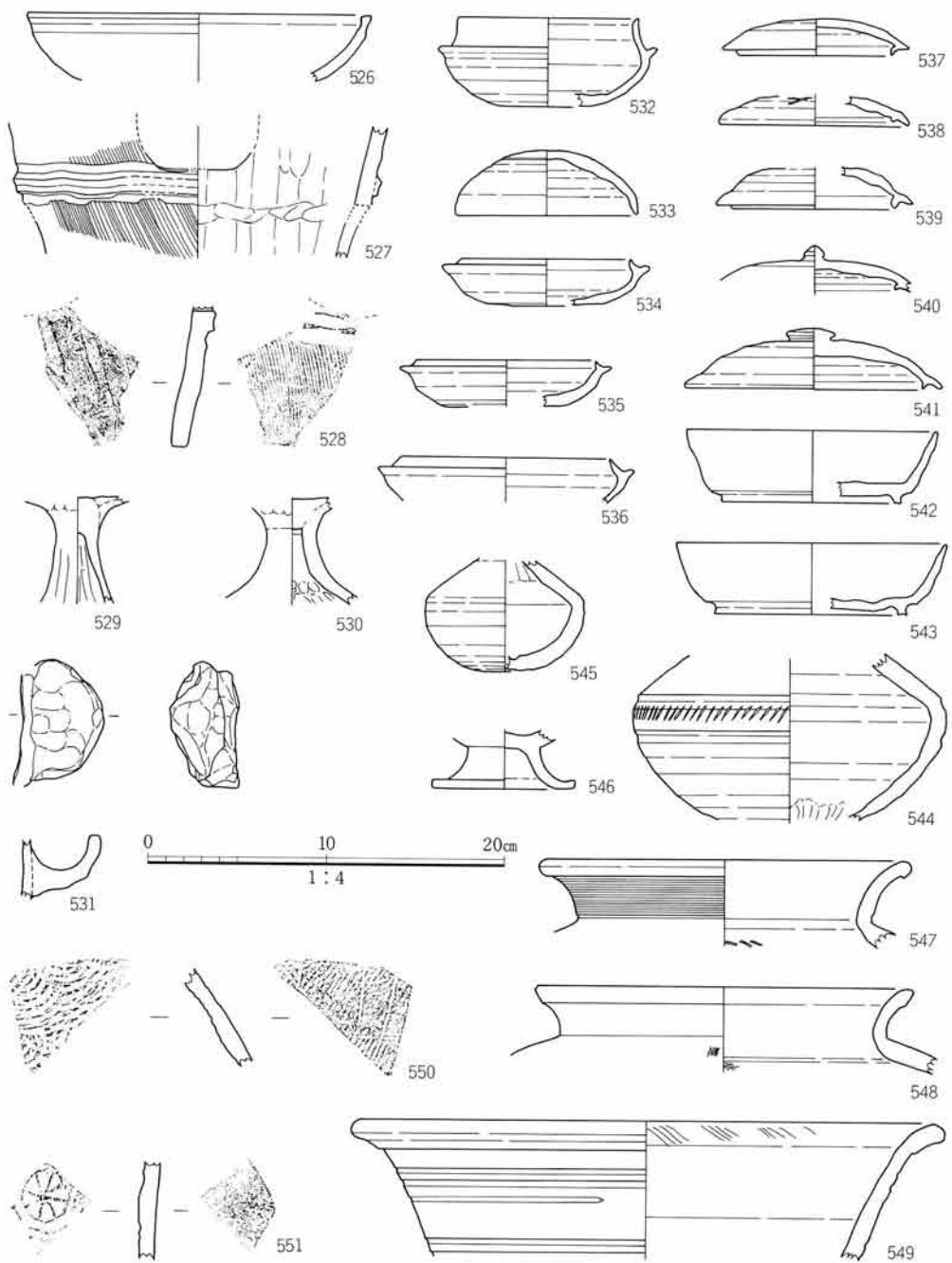


図139 各層出土の遺物(1)
桑津2層(546)、桑津5層(526~545・547~551)

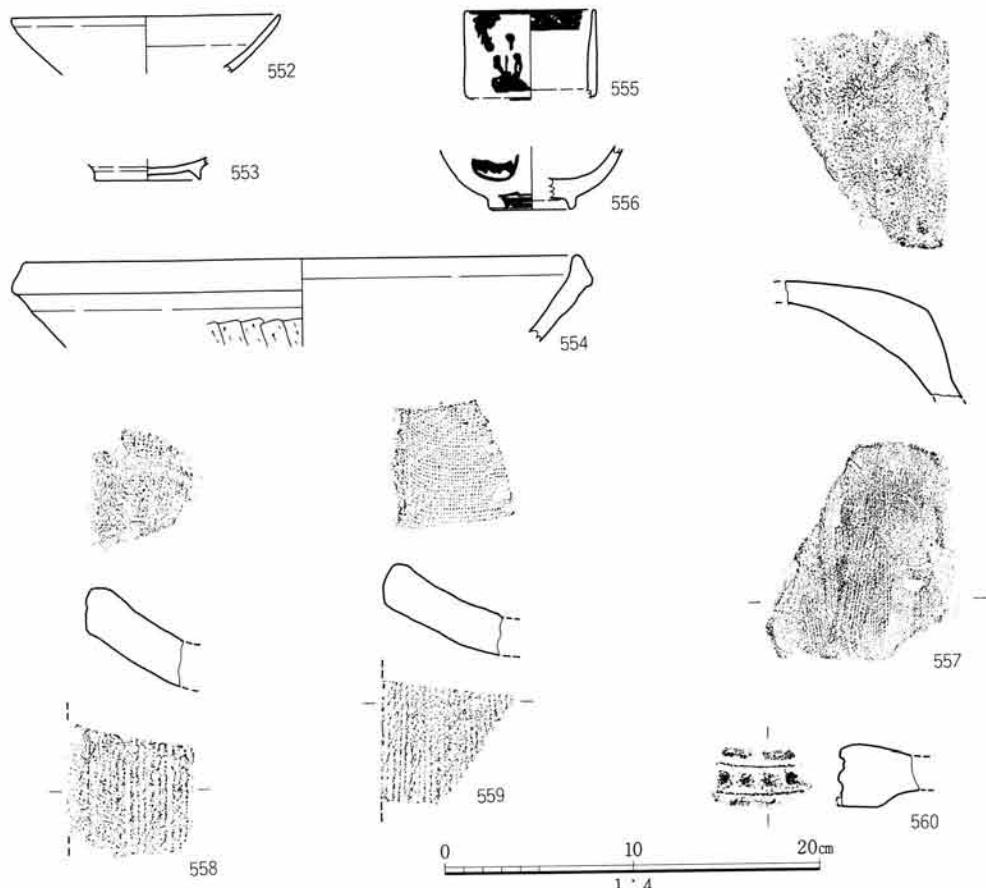


図140 各層出土の遺物(2)

桑津2層(555・556・560)、桑津3層(552～554)、桑津5層(557～559)

の隅柱と完全に重なっていた。同柱穴の断面観察によって、SB01の柱痕跡を確認している。方位はN47°Eである。

北西隅の柱掘形から、図144-561・563が出土した。561は土師器杯である。全周の1／6ほどの破片であり、磨滅のため調整も不明であることから、時期をうかがうことには困難である。563は須恵器杯蓋で、天井部下端に浅い凹線がみられることから、TK43型式の可能性がある。

SB02(図141) SB01の北東にあり、両者は方位をほぼ揃えている。桁行9.16m(4間)、梁行3.41m(推定2間)の掘立柱建物で、SB01同様に妻柱が削平されていると考えられる。柱間寸法にはばらつきがあり、平均値で、桁行が2.29m、梁行が1.70mである。西側柱には根石を据えているものがある。SB01と分離した理由は、柱穴がSB01のそれと比べてや

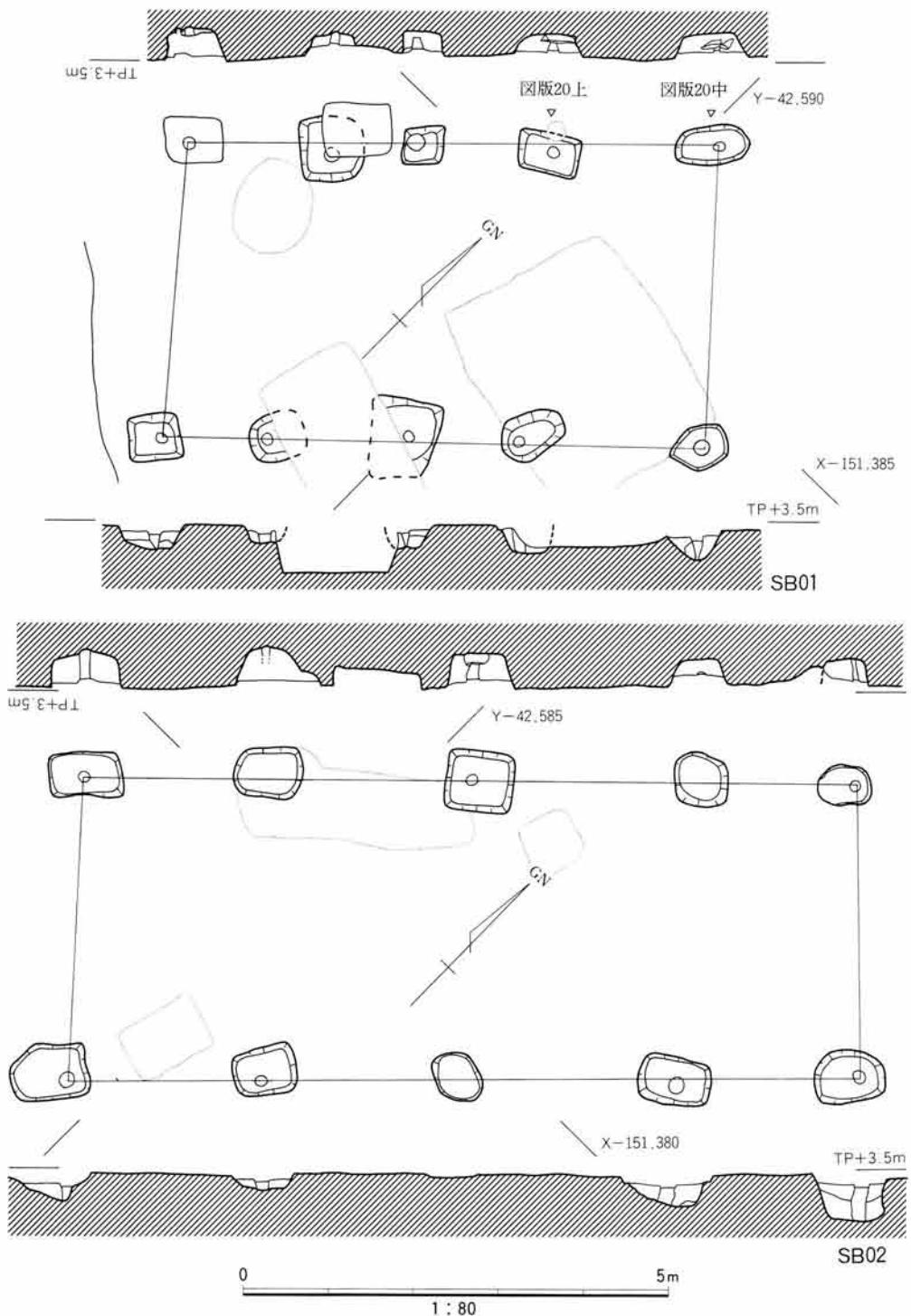


図141 SB01・02実測図

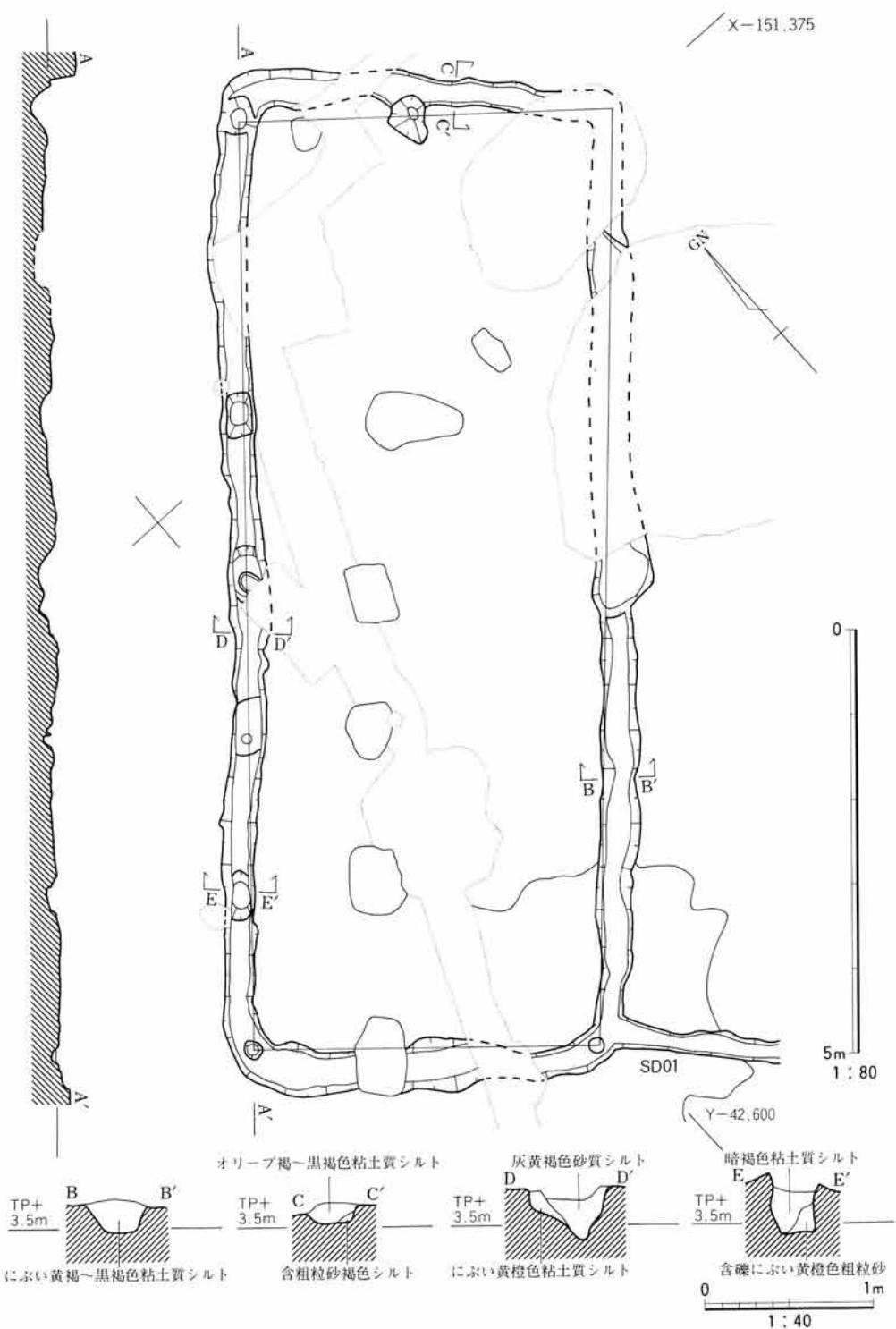


図142 SB03実測図

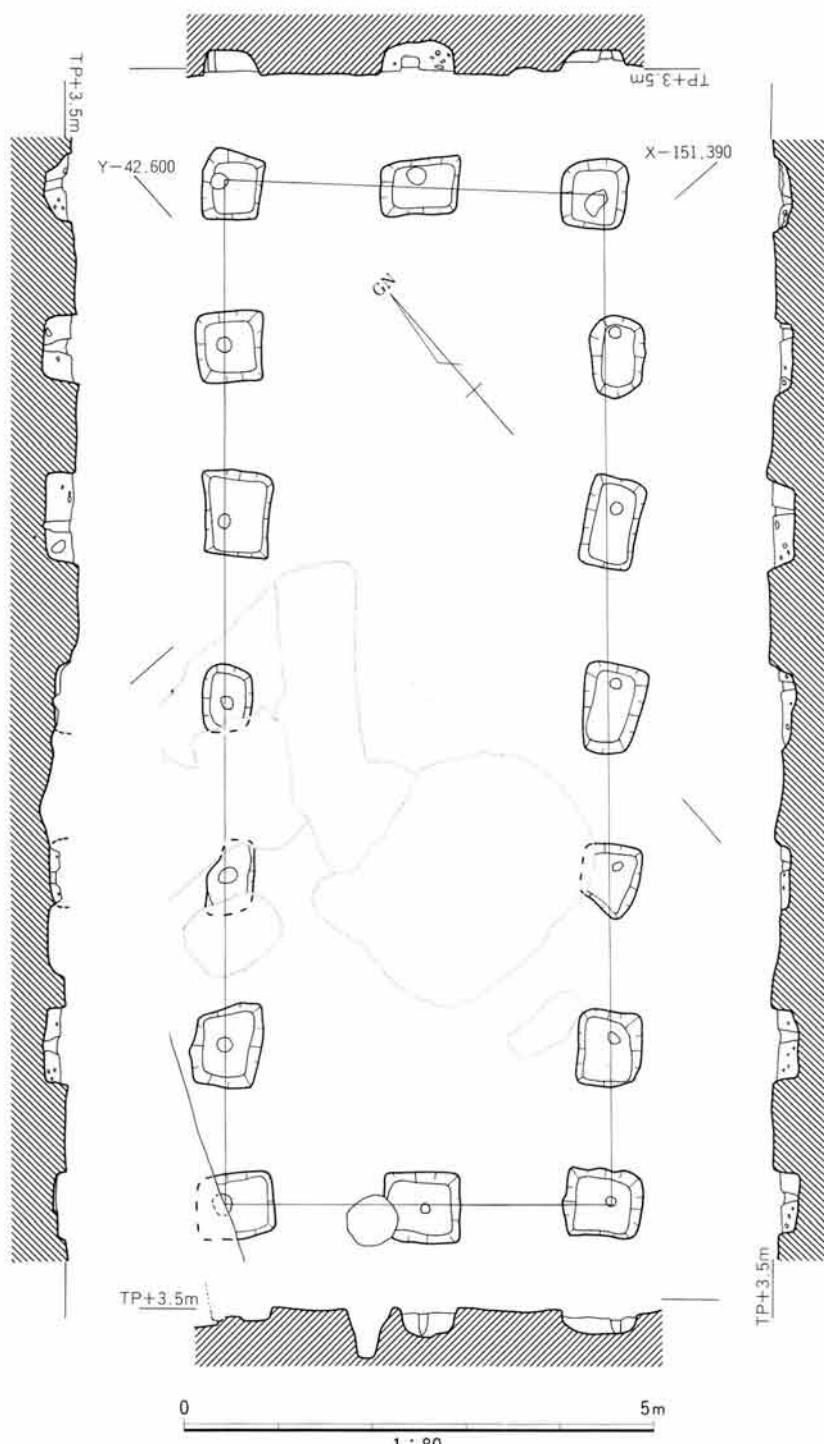


図143 SB04実測図

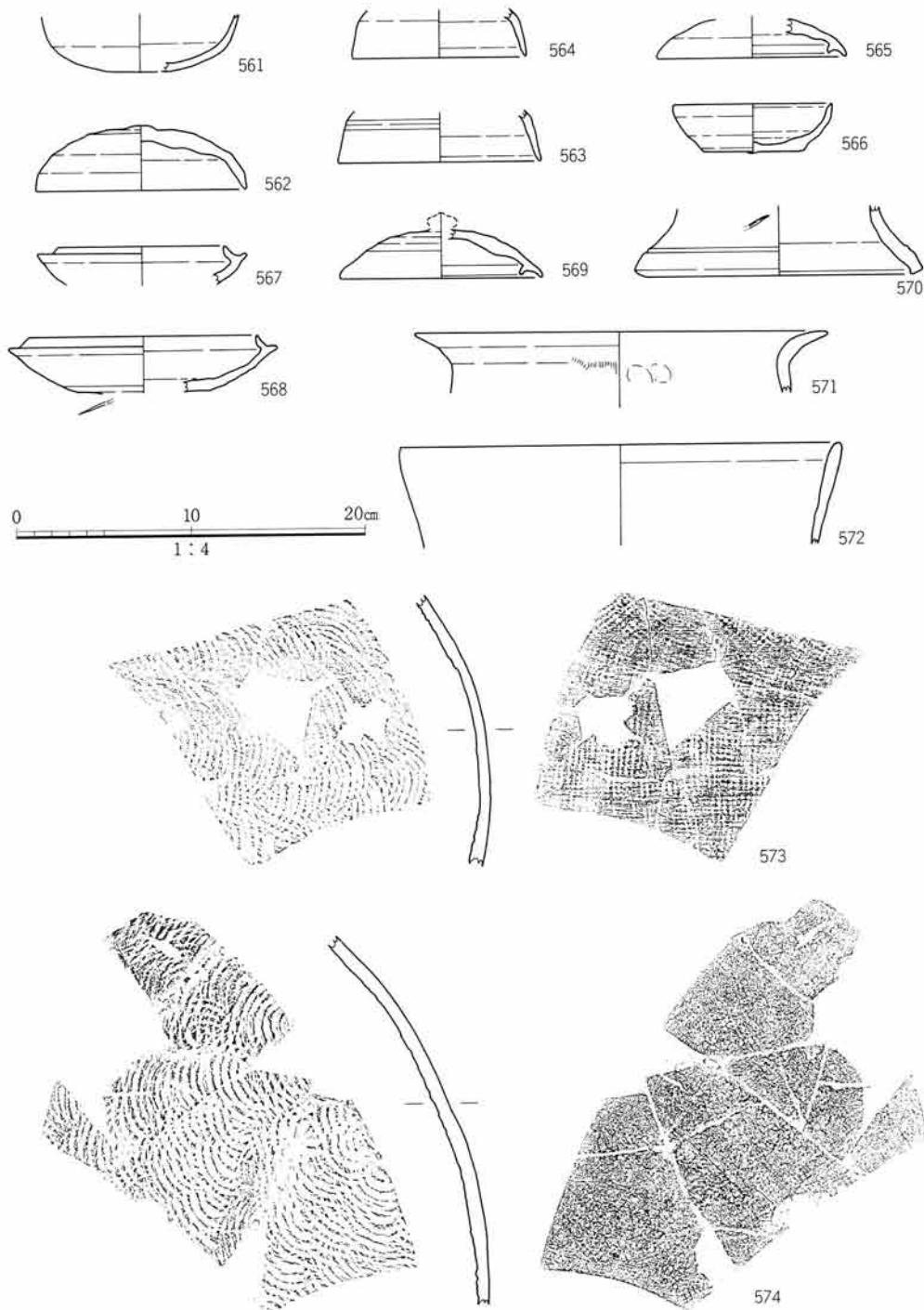


図144 SA01、SB01~04出土遺物

SA01(564~567・572)、SB01(561・563)、SB02(571・573・574)、SB03(562・569)、SB04(568・570)

や大型であることがある。方位はN45°Eである。

西側柱列中の柱掘形から図144-571の土師器甕、573・574の須恵器大甕が出土している。571は口頸部の破片で、頸部の屈曲はややなだらかである。573・574は体部の破片で、外面はタタキ成形の後、カキメ調整が施されている。

SB03(図142) SB05の西にあり、桁行11.50m(6間)、梁行4.11m(2間)で、布掘りの掘形をもつ掘立柱建物である。掘形の底部は一定の間隔でさらに掘り凹めてあり、その中に直径10~20cmの柱痕跡とみられるものがあった。柱間寸法は、平均で、桁行が1.92m、梁行が2.05mである。南隅部から溝SD01が南東方向に約11.5m伸びている。この溝とSB03の掘形に切合い関係はない。溝には柱痕跡はなかったが、同時に掘削されて埋戻されたと考えられる。SB03の方位はN41°Eである。

布掘りの溝中から、図144-562・569の須恵器杯蓋が出土した。562は古墳時代からの系譜をひくもの、569は内面にかえりをもつものである。ともにTK217型式と考えられる。

SB04(図143) 調査地の南西隅付近にあり、桁行10.65m(6間)、梁行4.07m(2間)の掘立柱建物である。柱間寸法にはややばらつきがみられ、平均で、桁行1.78m、梁行2.04mである。方位はN41°Eである。掘形の平面形態は隅丸方形のものが多い。この建物と上述のSB03とは平面形がほとんど同じである。

北東隅の柱掘形から図144-568の須恵器杯身、西側柱列の柱掘形から570の須恵器壺の脚台部と思われるものが出土している。ヘラ記号の一部が残る。568は口径13.2cmを測り、TK209型式とみられる。底部にヘラ記号が一部確認できる。

SB05(図145) SB04の北東にあり、SB04の東側柱と柱筋を揃えている。桁行14.13m(6間)、梁行3.60m(2間)の掘立柱建物である。柱間寸法にはややばらつきがみられ、平均で、桁行1.92m、梁行2.24mである。東側柱の一つは失われている。掘形の平面形態は隅丸方形である。方位はN41°Eである。

図147-575~584・589~593が出土している。そのうち583・590は柱痕跡内から、そのほかは掘形から出土した。575は土師器杯で、内外面に暗文はない。576~581は内面にかえりのない須恵器杯蓋、583・584はかえりのあるものである。582は短頸壺の蓋と思われ、口縁端部が水平方向につまみ出されている。589・590は須恵器杯身で、590にはヘラ記号の一部がみられる。591は須恵器の高杯脚部、592は椀などの器形の台部である。これらの須恵器はTK209型式・TK217型式のもので、柱痕跡から出土した2点についてはTK217型式新段階の範疇で捉えられる。593の円筒埴輪も掘形埋土から出土している。

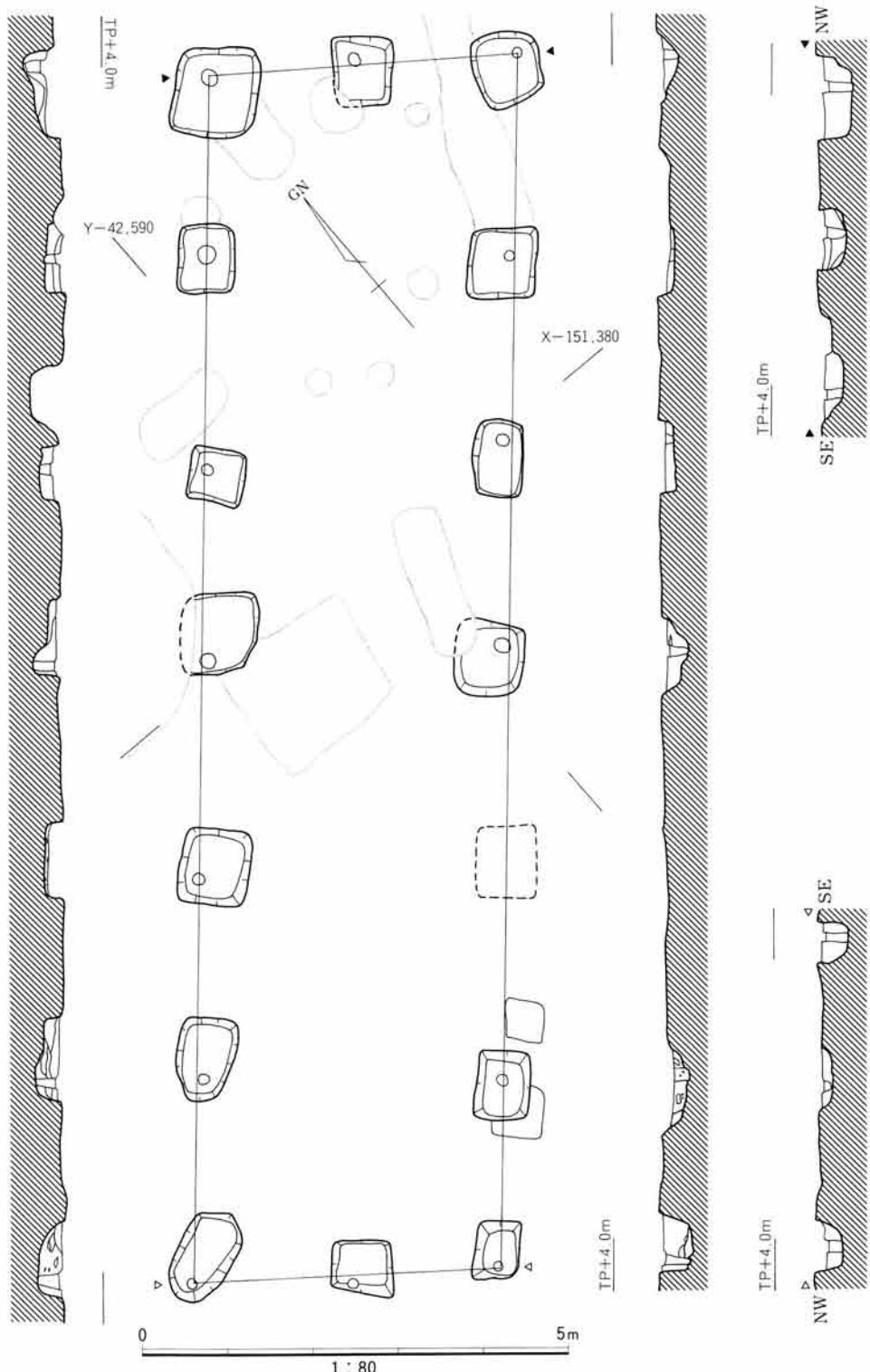


図145 SB05実測図

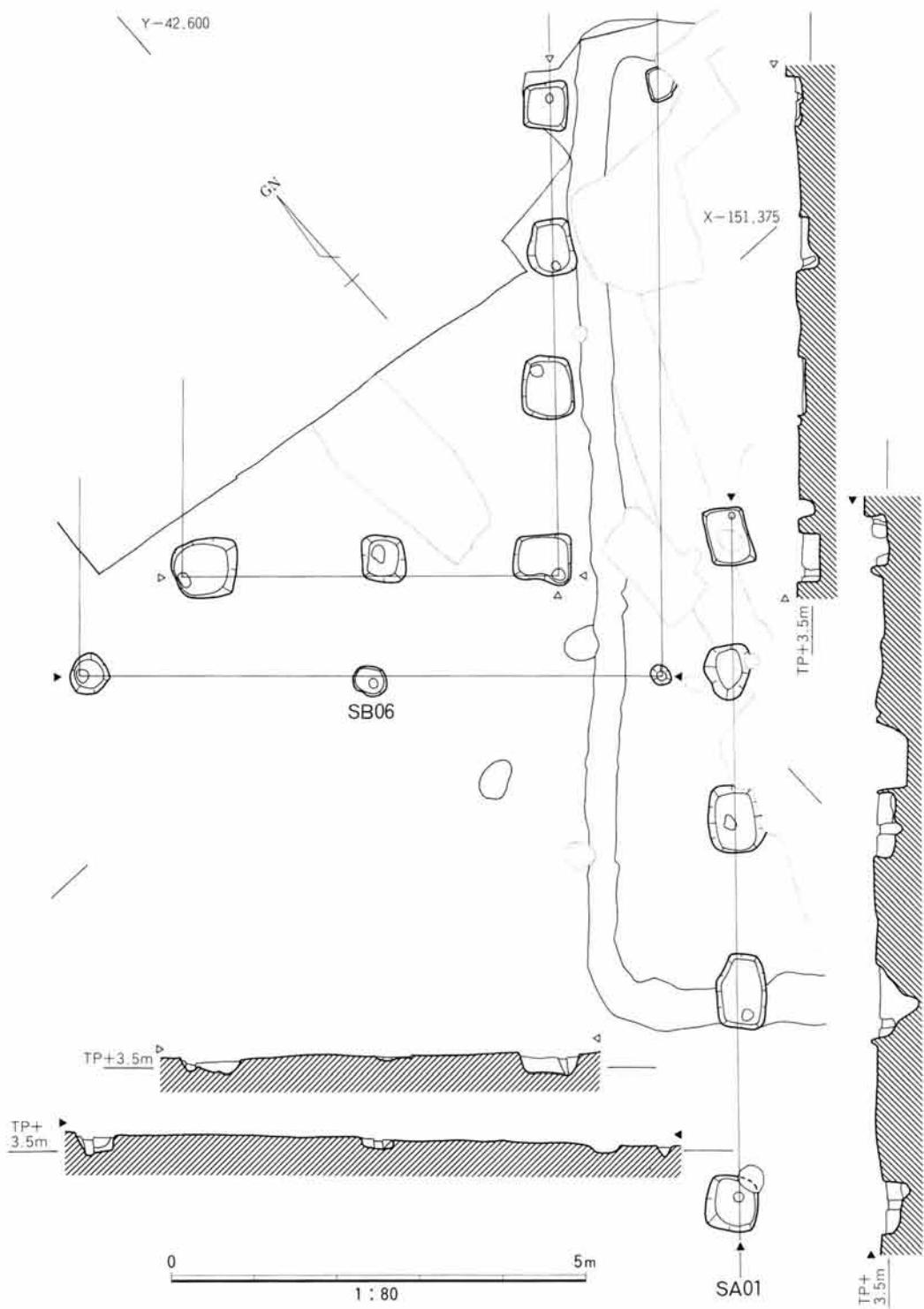


図146 SB06、SA01実測図

SB06(図146) 調査地の北西にかかる庇付きの掘立柱建物で、身舎の規模は桁行5.75m(3間)以上、梁行4.48m(2間)である。庇の張出しあは1.2mほどで、桁行7.15m(2間)以上、梁行6.97m(2間)である。柱間寸法の平均は、桁行が1.92m、梁行が2.24mである。掘形の平面形態は隅丸方形が多く、隅柱に比べて妻柱はやや浅く掘られているようである。庇の掘形は身舎のそれに比べて、ひとまわり小さく、円形である。方位はN41°Eである。

掘形の埋土から、図147-585~588の須恵器が出土した。585は内面にかえりのある杯蓋、586はそれとセットになる杯身である。587は受部をもつ杯身、588は甕の口縁部である。これらもTK209型式・TK217型式としてよいであろう。

SA01(図146) SB06の南西に延びる一本柱列で、柵と考えられる。北東はSB06の庇で終わっており、南西へは4間分が確認されたが、SA01の延長方向で行ったトレンチ調査では攪乱のために連続状況を確認できなかった。柱間寸法は、平均で、2.45mである。北から2つ目の柱穴の位置がSB06の南面する庇のラインに一致し、方位もSB06と揃っている。

掘形の埋土から図144-564~567・572が出土した。572は土師器甕と思われるもので、そのほかはみな須恵器である。564は口径9.8cmと小ぶりであるが、直立ぎみの口縁部をもつ

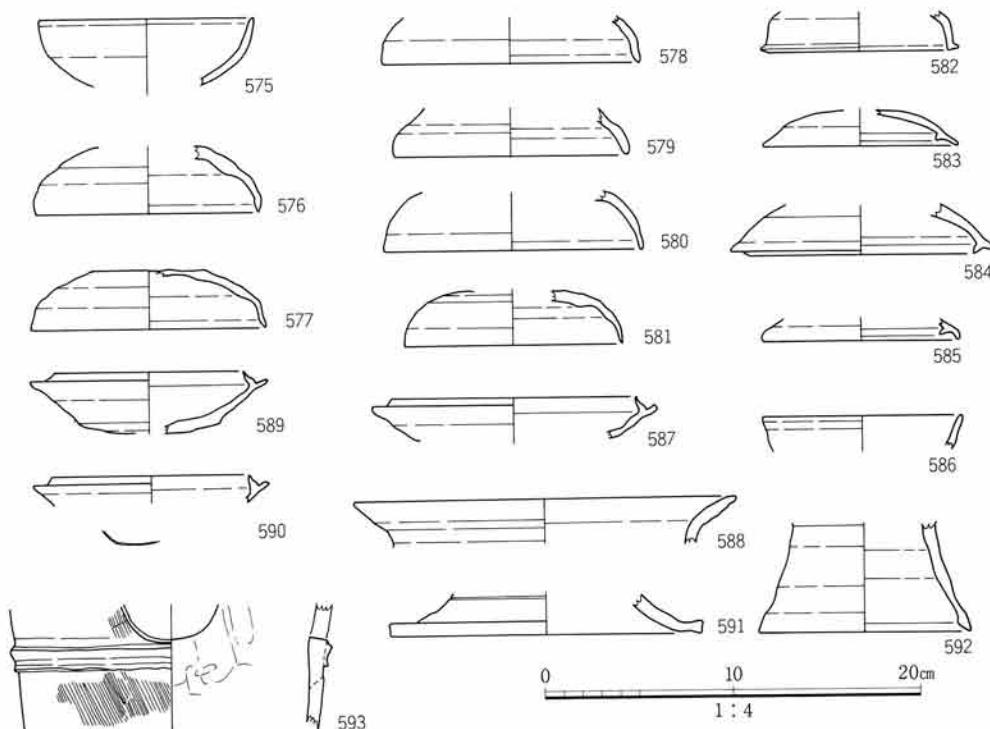


図147 SB05・06出土遺物
SB05(575~584・589~593)、SB06(585~588)

ており、短頸壺の蓋と思われる。565は内面にかえりの付く杯蓋、566は杯身で、底部をへラ起こしののち、未調整のままとする。567は口径9.4cmの小ぶりの杯身である。これらの須恵器はTK217型式に属すると考えられる。

SD01 SB03の南隅から南東へ延びる溝で、幅20~50cm、深さ5~15cmである。黒色粘土と地山のブロックで埋戻した形跡があるが、柱痕跡や底部の掘り凹みはみられず、柵の掘形であるかは不明である。SB03の掘形と切合はないなく、同時期に掘削されたと考えられる。埋土から須恵器杯蓋の破片が出土している。

SE01(図148) 調査地の南隅付近にあり、規模は直径1.3m、深さ2.8mある。井戸側は確認できなかったが、掘形の北側は成層的に埋戻した形跡が認められ、裏込めの可能性が考えられる。一方、南側は一気に埋められたようで、図に示すように両者の境界を縦方向に追うことができる。廃絶の際に掘形内を掘削し、井戸側を抜取ったのちに、埋戻したものと考えられる。埋戻し土から、須恵器・土師器・木簡・建築部材が出土した。底付近からは砥石が出土した。

図149に出土遺物を示した。594~596は土師器杯で、内面に暗文がみられるが、放射状暗文のような整ったものではない。597~599は土師器甕の口縁部である。頸部の屈曲は比

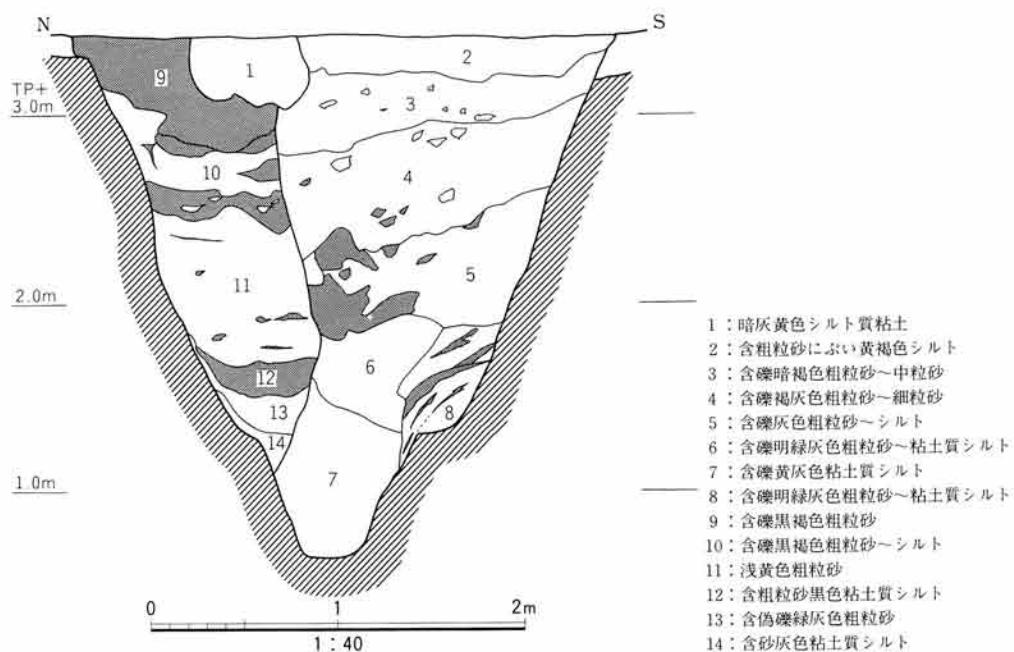


図148 SE01断面図

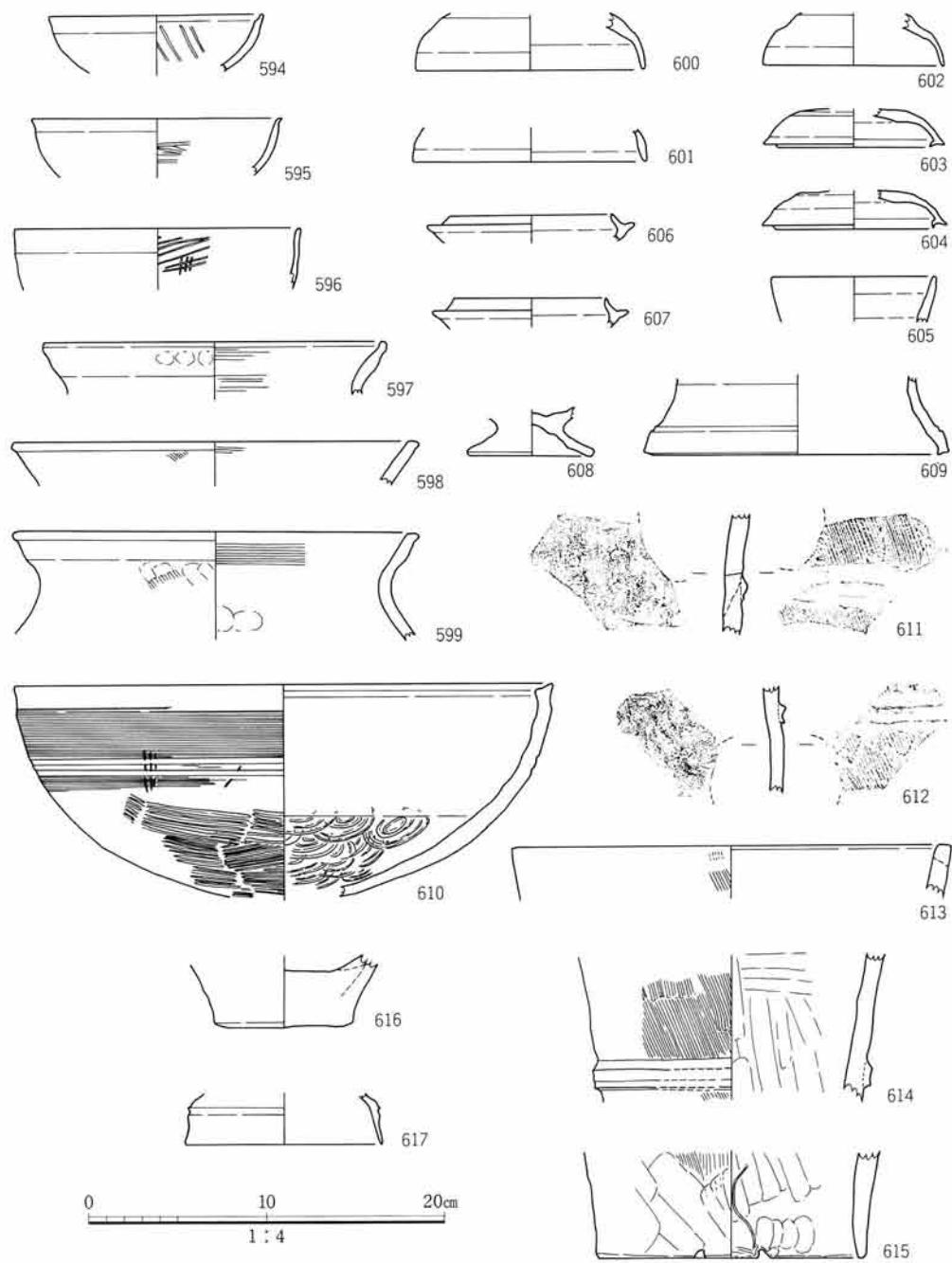


図149 SE01出土遺物

較的なめらかである。600～604は須恵器杯蓋で、そのうち603・604は内面にかえりをもつ。605～607は須恵器杯身で、後二者は受部をもつもので、口径約9cmである。605も口径9cmほどで、小ぶりである。608・609は椀などの脚台と思われる。610は須恵器鉢で、口縁端部を受部状に作っている。体部下半はタタキ成形の痕を残すが、上半部はカキメ調整され、圈線が巡らされる。これらの須恵器のうち蓋杯をみると、小ぶりのものがややめだち、TK217型式の中でも後出的な要素がうかがえる。611～615はV期の円筒埴輪で、613は口縁部、615は底部である。611・612には円形スカシ孔の一部が残る。617はTK23型式の須恵器杯蓋で、上記の埴輪と関連するものであろう。616は弥生土器壺の底部である。

木簡618は桧材で、長さ21.6cm、幅約4cmである(図150)。釈文は以下のとおりである(註1)。

「
 (符籙) 寡之乎
 文(次)田里 道意白加之
 「各家客等之」

符籙があることなどから、呪符と考えられる。

[王育成1993]にはこの木簡についての詳細な検討がなされている。それによれば、この呪文の大意は、「災いや厄運に対して、天道の義理に従い、白石の神によって制せよ。授かった寿命まで、在家の俗人に対して犯すことなけれ。」とされ、道教に關係するものであると考察されている。

SX01 調査地の南隅付近で検出された溝状の凹みである。幅約2.0m、深さ約0.2mで、飛鳥時代の井戸SE01や攪乱によってほとんどが破壊されている。褐灰色中粒砂を埋土とし、土師器・須恵器・埴輪が出土した。

図151-621～627・633が出土遺物である。621は土師器高杯の杯底部から脚部、622は土師器鍋などの把手である。把手は舌状を呈し、大きく湾曲する。623・624は須恵器杯蓋

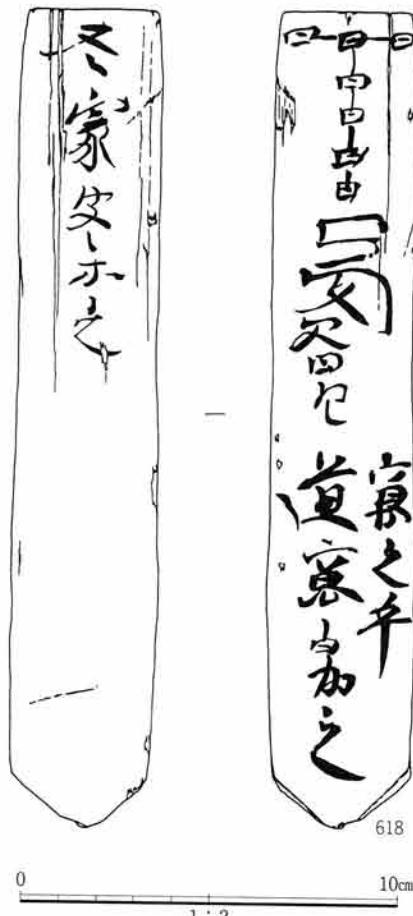


図150 SE01出土木簡

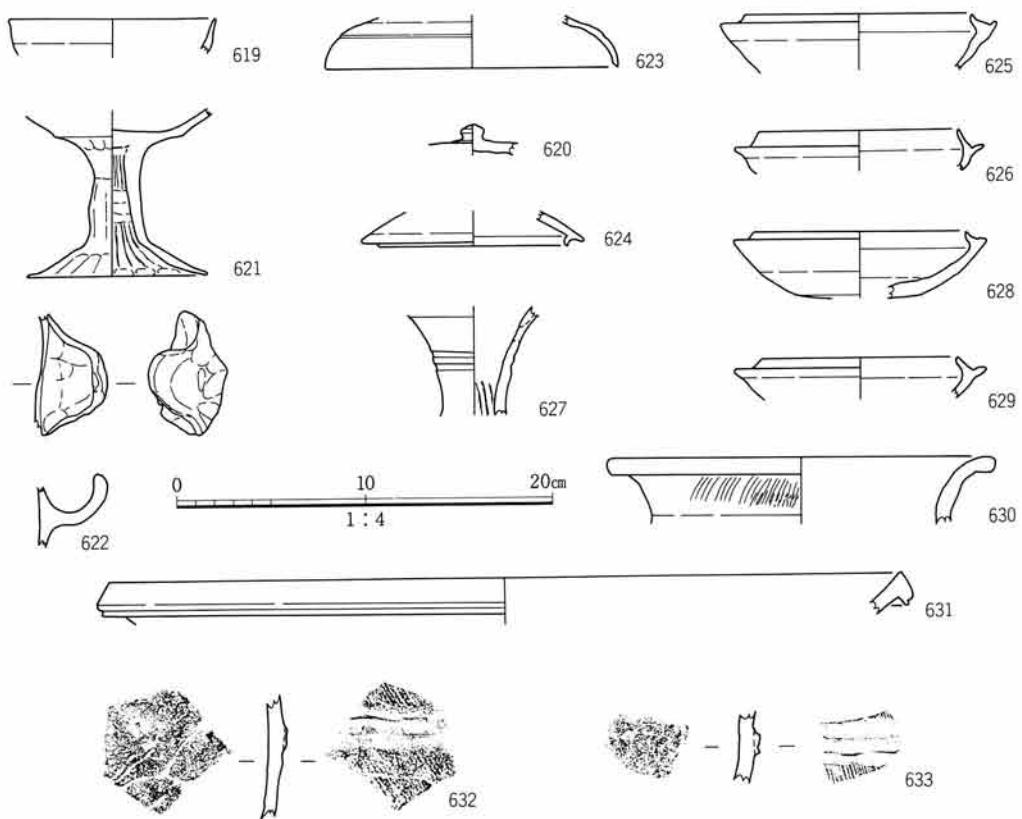


図151 SX01~03、SP01・03出土遺物

SX01(621~627・633)、SX02(630・631)、SX03(620・629・632)、SP01(628)、SP03(619)

で、後者は内面にかえりのあるものである。623の口径は15.6cmと大きく、天井部下端にかすかながら稜を残す。これからTK43型式に属すると考える。624は内面のかえりが受部端よりも下方に突出しており、TK209型式の可能性がある。625・626は受部をもつ須恵器杯身である。625は口径がやや大きく、626の立上がりもまだ長い。このことからTK209型式と考える。627は憩の頸部であろう。内面にはシボリメがみられる。633はV期の円筒埴輪である。低いM字形のタガが付く。

SX02 調査地東部にあり、2条の直線的な溝とそれに挟まれた浅いピット群からなる。溝やピット群の方向は上記の建物群とほぼ同じである。図151-630・631の須恵器甕の口縁部が出土している。630の頸部にはカキメが斜方向に施される。631は口縁端部を垂下させ、その先端に突帯を作り出している。

SX03 前述したSE01の周囲にある不整形な凹みである。SX01を切っており、図151-620・629・632といった須恵器や埴輪が出土している。620は須恵器杯蓋で小型の宝珠つま

みがある。629はTK209型式の須恵器杯身である。632は川西編年V期の円筒埴輪である。

SP01～03 調査地西部にあり、東西方向に並ぶピットである。SP01から628の須恵器杯身が出土した。立上がりが矮小化しており、TK217型式に当ると思われる。SP03からは619の土師器杯が見つかっている。内外面に暗文はみられない。

3) 小結

この調査で検出した遺構群は、複数の時期に分けて考えることができる。

まず、SB03とSB06・SA01、SB01とSB05には重複関係があり、同時に存在しえない。SB03とSA01は柱穴に切合いがあり、SA01が後に造られたことが明らかである。同様にSB05はSB01に後出する。次に方位から、SB05はSB03・SB04・SB06・SA01と同じ方位(N41°E)をもつ。しかし、SB03はSB06・SA01とは同時に存在しえないため、SB04・SB05・SB06・SA01が並存する(Ⅱ期)と考えられる。SA01に切られるSB03は、SB05に切られるSB01・SB02と同時に存在する(Ⅰ期)と考えられる。

I期とした建物群のうち、SB01からはTK43型式と思われる杯蓋が出土し、SB03からはTK217型式の土器が出土していた。Ⅱ期とした建物群では、SB04にTK209型式杯身があつたが、SB05・06にはTK217型式までの須恵器が含まれていた。このことから、I期の建物群についてはTK43型式からTK217型式までの中間に置くことができる。Ⅱ期の建物群はTK217型式段階のもので、SB05の柱痕跡から出土した口径の著しく小さい杯身が示すように、同型式の新段階に放棄されたと考えられる。この傾向をもつ土器はSE01廃絶時の埋土からも出土しており、井戸の廃絶と建物群の放棄は同時期であったといえる。

両期の建物群の構成をみると、いくつかの共通点がある。I期のSB01・02とⅡ期のSB04・05は、それぞれ側柱のラインを揃えて2棟を配置しようとしたものと推測される。そして、南棟よりも北棟の桁行きを大きいものとすること、両棟の間隔を約2.5m開けることといった共通点がある。さらに、この南北両棟の西側、すなわち地山層の標高の高くなる側に、一回り規模の大きい建物を配置する点も両期に共通する。2時期にわたって、共通する建物配置がみられることから、この建物群の構成には高い計画性がうかがえる。

(註)

(1)この訳文は国際仏教大学名誉教授 藤沢一夫先生、奈良大学学長 水野正好先生、大阪大学教授 東野治之先生のご教示による。また、本簡の樹種同定は奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏に依頼した。記して感謝する次第である。

第17節 KW91-16次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(桑津4丁目1)は遺跡の北端に位置している。周辺ではKW88-26次、KW91-2次調査が実施されており、後者では弥生時代中期の方形周溝墓、飛鳥時代の掘立柱建物などが見つかっている。

約20cmの表土を重機で掘削したところ、調査地全域で表土直下が地山層であることを確認した。時期の明らかにできた遺構・遺物はすべて飛鳥時代のものであり、KW91-2次調査地に見つかった弥生時代に係わるものは、まったくみられなかった。掘立柱建物、柵、土壙などが検出された。調査期間は1991年8月17日~30日で、調査面積は60m²であった。

2) 調査結果

地山の標高は4.9m前後にあり、土質は明黄褐色粗砂質シルトである。以下、遺構・遺物について述べる(図152~155、図版21・73)。

SB01 柁行6.2m以上(3間以上)、梁行4.0m(2間)の掘立柱建物である。棟方位はN40°Eである。柱掘形の規模は一辺70cm前後、深さ50~70cmであるものが多い。掘形の埋土はおもに褐~黄褐色砂質シルトで、成層的に埋戻された状況が観察された。SP01から634・639、SP02から635、SP03から638、SP04から636が出土した(図153)。634~636は須恵器杯蓋で、そのうち634は内面にかえりをもつものである。634・635は口径14cm弱、636は口縁端部を欠くがやや大ぶりである。これらはTK209型式と考えられる。638・639は須恵器杯身である。これらもTK209型式に属する。

SA01 SB01の南にあり、柱筋の方向をSB01の棟方向と直交方向にとる柵である。5間分(約8m)が検出された。掘形の規模はSB01に比べ小ぶりで、柱間寸法にもばらつきがある。

柱穴 上記の建物・柵の柱穴以外にも、11基の柱穴が検出されている。掘形は一辺50~70cmの隅丸方形をなし、直径10~22cm柱痕跡がみられる。そのうちのSP05からは須恵器杯身637が出土した。口径12.4cmと小ぶりであるが、受部の張出しに比べ、立上がりの高さがまさっており、TK209型式に属するものであろう。

遺物の出土していないそのほかの柱穴についても、周囲の状況から考えれば、TK43型式の段階から飛鳥Ⅱの段階に属するものと思われる。

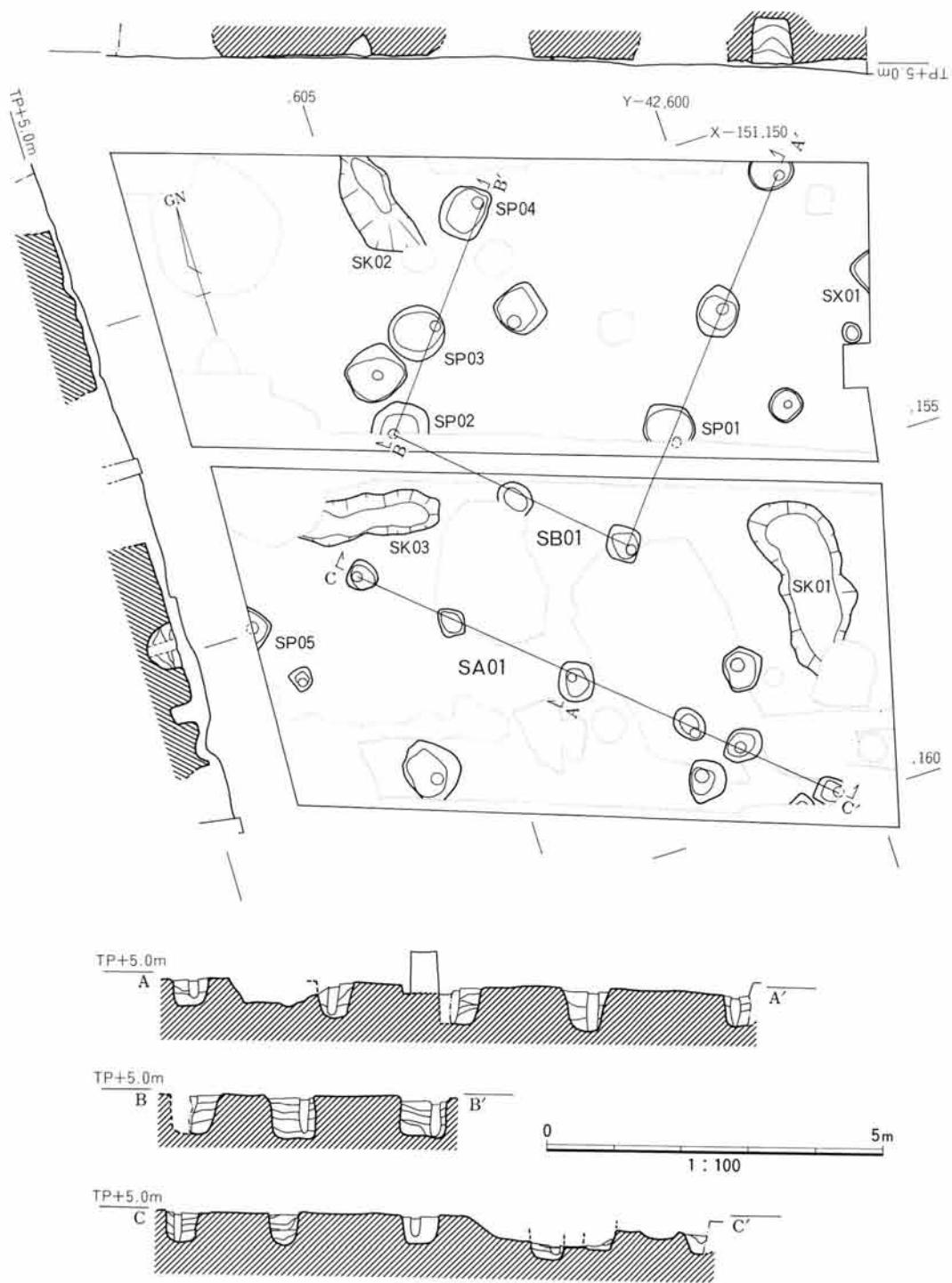


図152 KW91-16次調査地遺構実測図

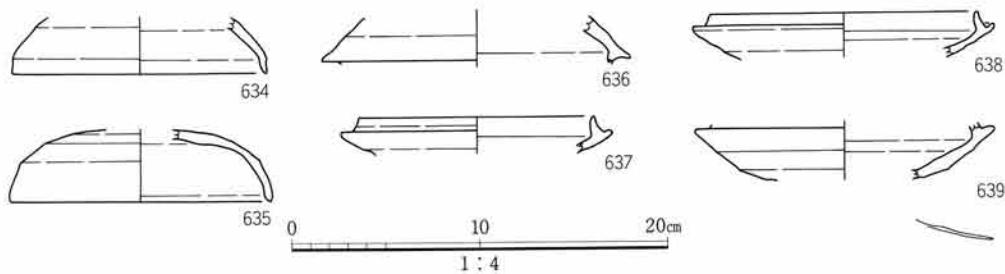


図153 柱穴出土遺物

SK01 多数の土器が廃棄されていた土壙である。長さ2.6m、幅1.0m、深さ0.2mで、細長く不定形なものである。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、所々に炭化物を含んでいた。

図155の土師器杯・甕、須恵器蓋杯・平瓶などが出土した。640の土師器杯は口縁端部をわずかに外反させるもので、内外面に暗文がみられる。内面には底部に三重に巡る螺旋状暗文、側面に二段放射状の暗文を施している。飛鳥IIに属すと思われる。641の土師器杯には暗文はない。色調・胎土とも640とは異なる。642は土師器甕、643は土師器の移動式竈の上端部と思われる。643の外面には粗いハケ調整が施されている。644～647は須恵器蓋杯で、644・645は古墳時代的なもの、646・647は内面にかえりをもつものである。648は須恵器蓋杯身で、口縁端部を欠損するが、12cm強の口径をもつと推測される。649・650は須恵

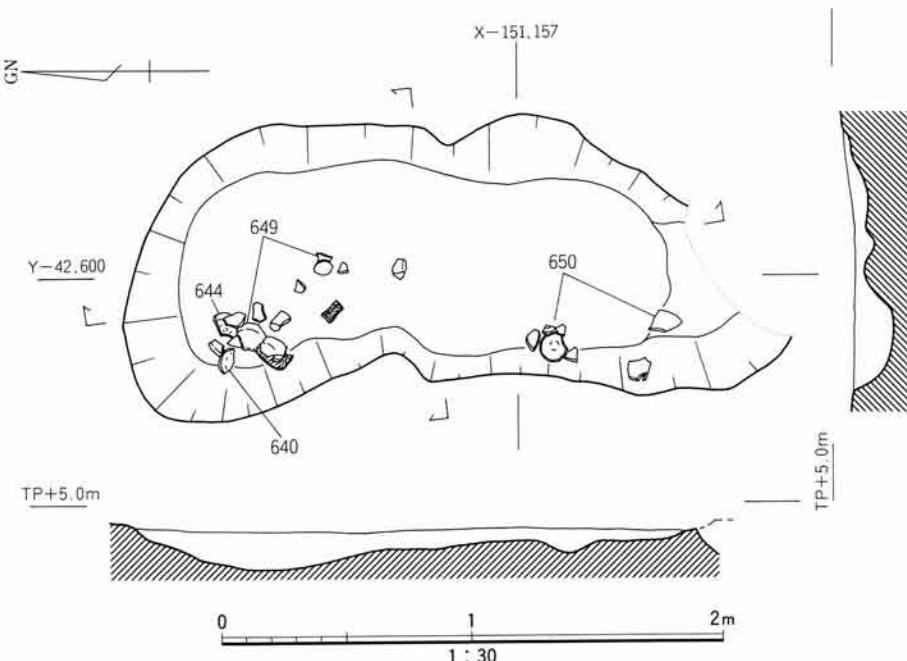


図154 SK01実測図

器平瓶である。どちらも大型品で、前者は体部の最大径が17.4cm、後者は16.7cmである。650は口頸部を欠くが、649には口径8.8cmの口頸部があり、その中位に凹線が入れられている。以上の須恵器については、TK209型式・TK217型式に属するであろう。

SX01 調査地東壁沿いにある、底面の焼けた土壙である。一部分を検出したのみであるが、KW91-2次調査地でも同様なものが2基発見されている。深さは約6cmであったが、底や側面には火を受けた痕跡が明瞭に残っていた。埋土には炭化物も多く含まれていた。

このほかに細長い土壙SK02・03がKW91-2次調査地と同様に見つかっている。遺物をまったく含まず、掘形の境界も不明瞭であり、人の手にかかるものとは考えがたい。

3) 小結

この調査で飛鳥時代の集落が桑津遺跡北端部でかなりの面積をもって広がっていることが判明した。また、本調査で見つかったSB01は棟方位をN40°Eとする掘立柱建物であった。その方位は、南230mにあるKW91-8次調査の建物群と近似しており、注目される。飛鳥IIの土器を廃棄した土壙の存在も屋敷地の動向を考えるうえで関心がもたれる。

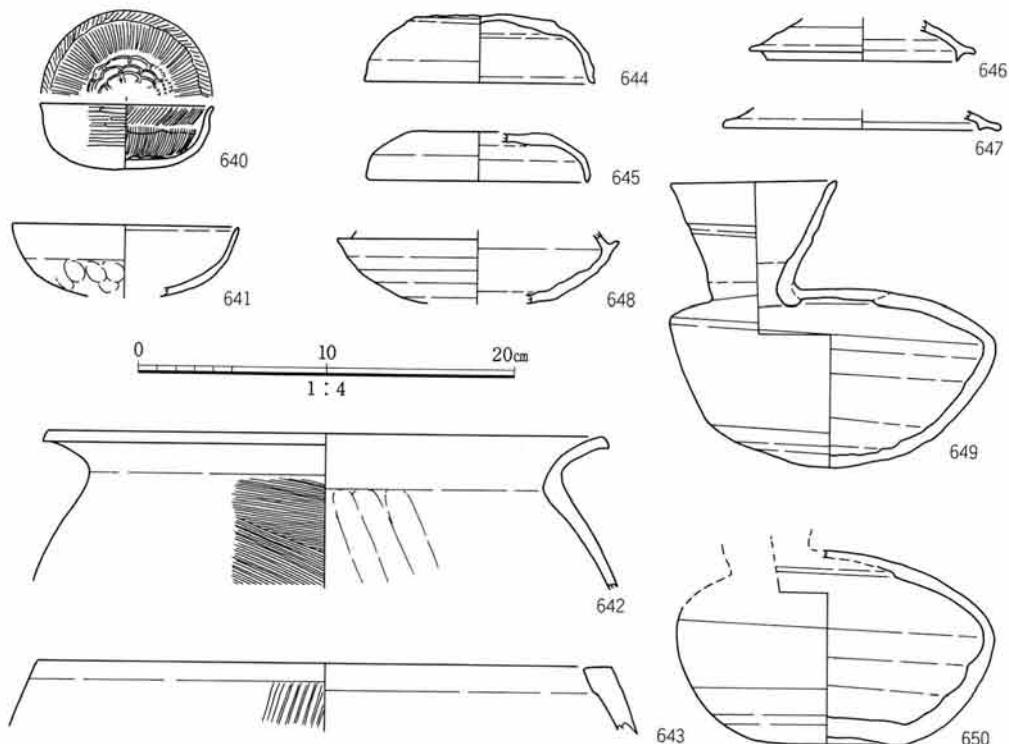


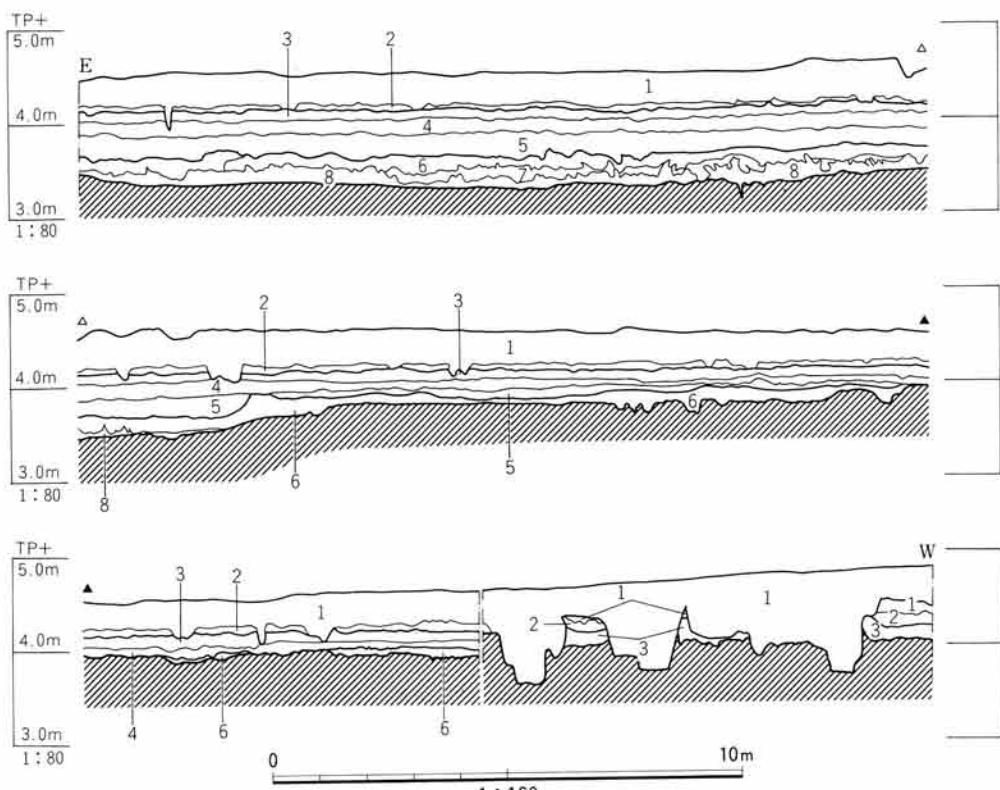
図155 SK01出土遺物

第18節 KW91-18次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(駒川1丁目19)は桑津遺跡の南部にあり、田辺廃寺推定地の東方に位置する。近隣では120m西方でKW87-20次調査、90m北方でKW85-14次調査が実施されている。前者では古墳時代中期や奈良時代、後者では弥生時代中期、古墳時代中期、鎌倉・室町時代の遺構が検出されており、この調査でも同様の傾向が予測された。

調査では現代客土・作土を重機で取り払い、あとは人力によって掘削した。調査の結果、平安・鎌倉時代の遺構・遺物を中心にして、縄文時代草創期～江戸時代にかけての資料が



- | | | |
|-----------------------|---------------------|----------------------|
| 1:現代作土(桑津1層) | 4:褐色中粒砂質シルト(桑津2層) | 7:オリーブ黒色細砂質シルト(桑津3層) |
| 2:暗褐色中粒砂(桑津1層) | 5:褐色細砂質シルト(桑津2層) | 8:黒褐色粘土質シルト(桑津3層) |
| 3:にぶい黄褐色細粒砂質シルト(桑津2層) | 6:オリーブ褐色粗砂質粘土(桑津3層) | |

図156 KW91-18次調査地南壁断面図

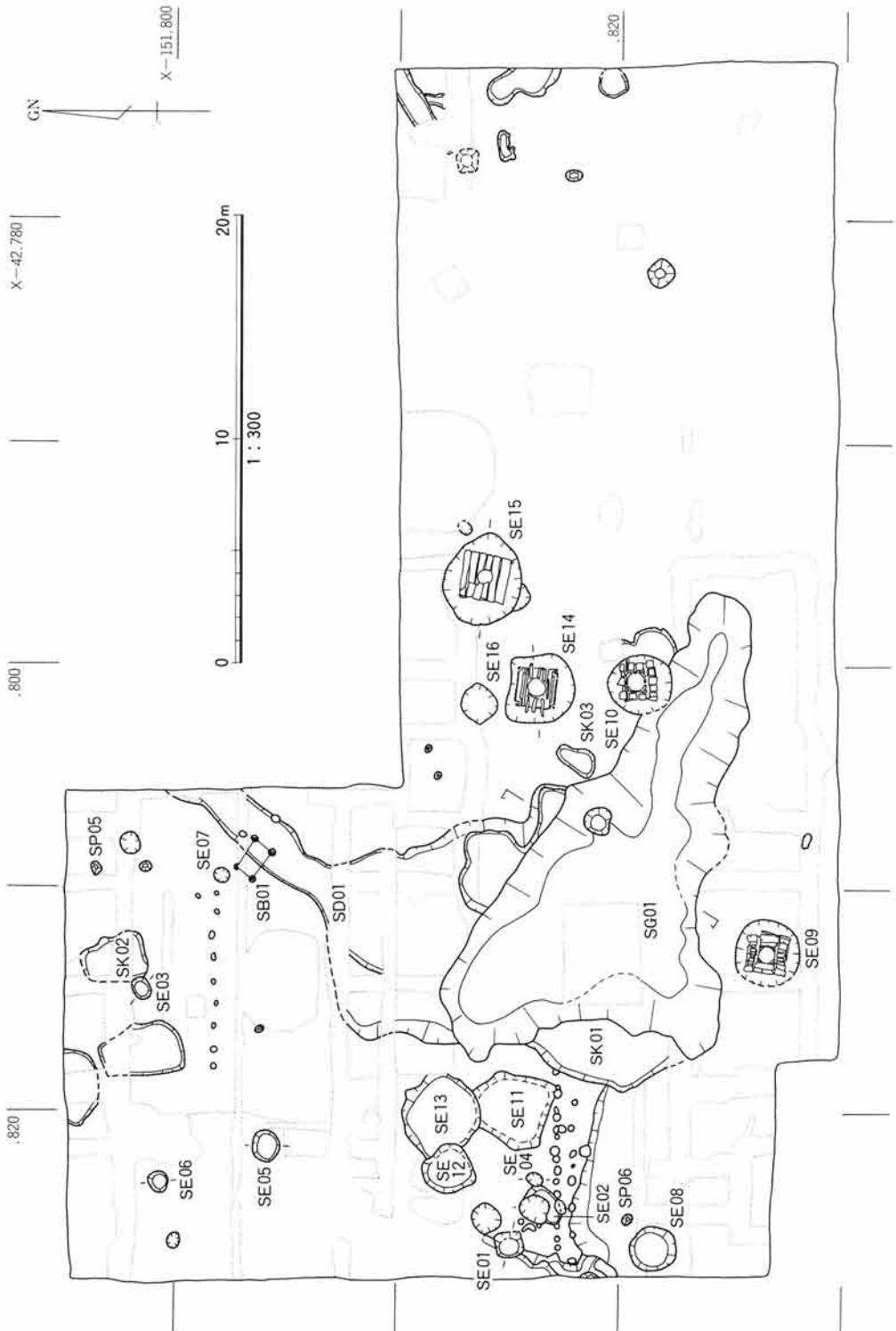


図157 調査地全体図

得られた。その成果を市民に公開するため、12月7日に現地説明会を行った。調査期間は1991年9月5日～12月17日であり、調査面積は1,392m²であった。

2) 調査結果

i) 層序(図156)

地山層の標高は3.4～4.4mで、北西から南東へと傾斜している。遺物包含層は東方に向って層厚を増し、西方では上位の作土層によって削平される。調査地の層序は次の通りである。

桑津1層：層厚約40cmの現代作土。下部に層厚5～10cmで暗褐色中粒砂の床土がある。

桑津2層：近世の作土層である。調査地の西半部では2層に分かれて、層厚20cmほどある。東半部ではその下部にさらに1層加わり、層厚約50cmとなる。層相は上から、にぶい黃褐色細粒砂質シルト、褐色中粒砂質シルト、褐色細砂質シルトである。

桑津3層：鎌倉・室町時代の遺物包含層である。本層も3層に細分され、上層のオリーブ褐色粗砂質粘土は作土層とみられる。中層はオリーブ黒色細砂質シルト、下層は黒褐色粘土質シルトである。中・下層は地山層の低くなる調査地東半部にある。調査地西端には上層も分布しない。調査地東半部で層厚30cm、西半部では層厚10cm以下である。

地山層：浅黄色極粗粒砂～極細粒砂である。

ii) 各層出土の遺物

図158・159、図版74・75に当調査地の包含層内出土遺物を示した。ほとんどが桑津3層中のものであるため、種類ごとに記す。

土器・陶磁器 651・652は土師器小皿で、652は口縁端部を内側に丸め込む小皿C[佐藤隆1992]である。653は口径15.4cmの土師器皿、654は土師器皿などに付く台部である。655～657は瓦器小皿内面に細かな暗文が施されている。658・659は瓦器椀で、内面には緻密な暗文がみられ、外面にも暗文が施されている。660～663は中国製の白磁碗で、663は底部、そのほかには玉縁状の口縁部が残る。このうち662は桑津1層から出土したが、本来は桑津3層に伴うものであろう。以上の土師器・瓦器・白磁は、平安時代末頃におさまるもので、この調査地の桑津3層中・下層の時期を示すものと考える。

664は奈良時代前半の須恵器壺の蓋、665はTK23型式の須恵器杯蓋である。666は畿内第IV様式の広口壺の口縁部である。これら664～666は桑津3層下層から出土した。

土製品 667は江戸時代の貨幣である丁銀を模した素焼き製品で、桑津2層中から出土した。型押しされた文様や文字から文政丁銀(1820年製造)の模倣と推測される。長さ4.0cm、

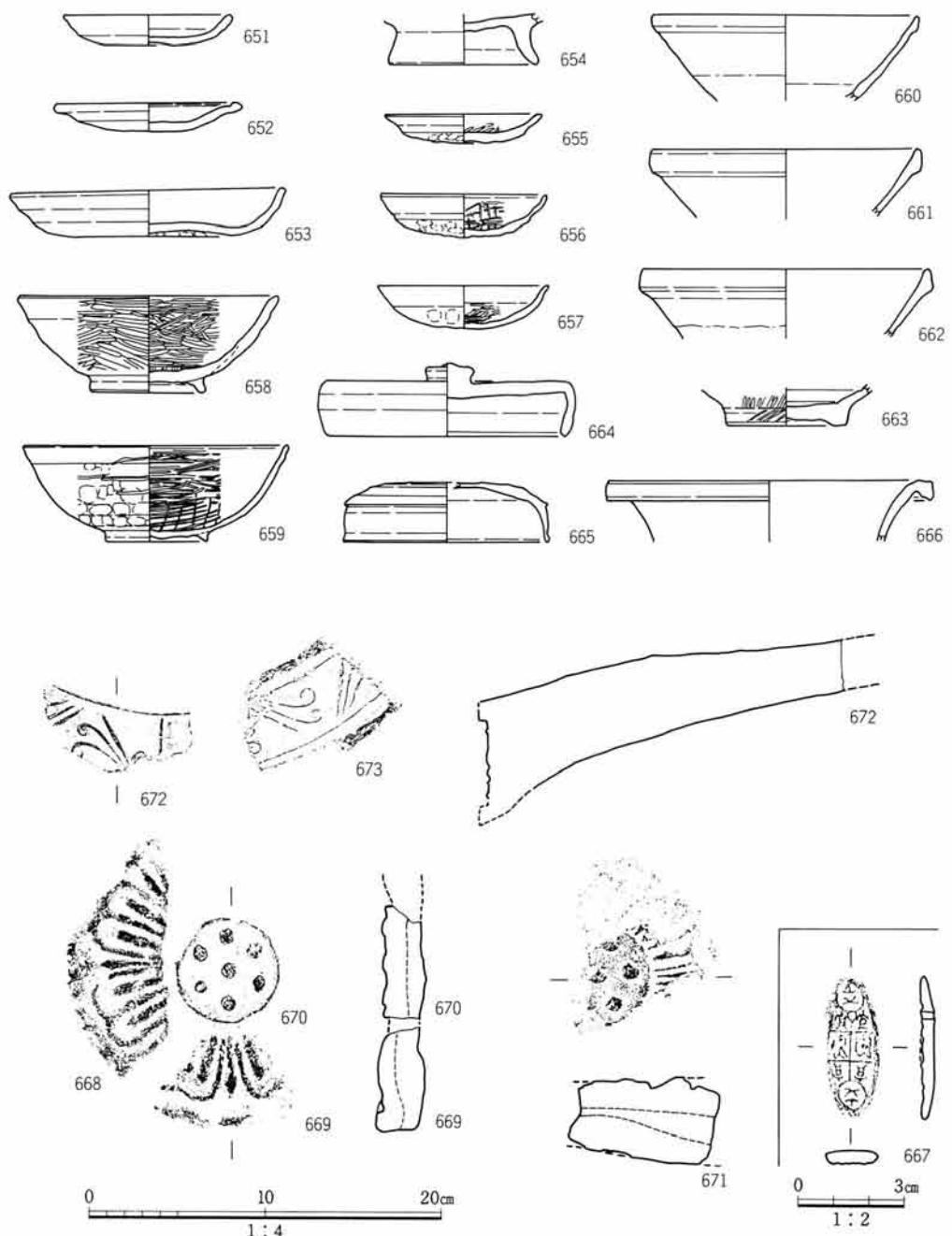


図158 各層出土の遺物

桑津1層(662)、桑津2層(667)、桑津3層(651~661・663~666・668~673)

幅1.4cm、厚さ0.4cmである。大坂城跡の発掘調査(OS91-16次)でも同様な土製品が出土しているが、大坂城跡の例はほぼ実大である。

瓦類 668~671は複弁八葉蓮華文軒丸瓦の各部分である。672・673は均整唐草文軒平瓦である。以上の瓦について[宮本佐知子・佐藤隆1996]に詳しい報告があり、これらの軒丸瓦は田辺廃寺の創建瓦の可能性が高いとされている。

石器(表4、図版94・95) 674はサスカイト製の有茎尖頭器である。作用部全体が外湾するように作られ、逆三角形を呈する短い茎部を作っている。逆刺は下方に突出しない。675~677は石鎌である。675は凹基無茎式で、輪郭が正三角形に近い。脚部の先端は尖り、左右が非対称形となっている。676は凸基有茎式石鎌、677は凸基無茎式石鎌である。677は完形であるが、676は茎の先端を欠損する。ともに弥生時代中期の石鎌である。678は石錐で、平面形態の上でも頭部と錐部の境が明瞭に作られている。横断面形も頭部が扁平なのに対し、錐部は菱形となっている。679は横型の石匙で、刃部とみられる下端は緩やかに

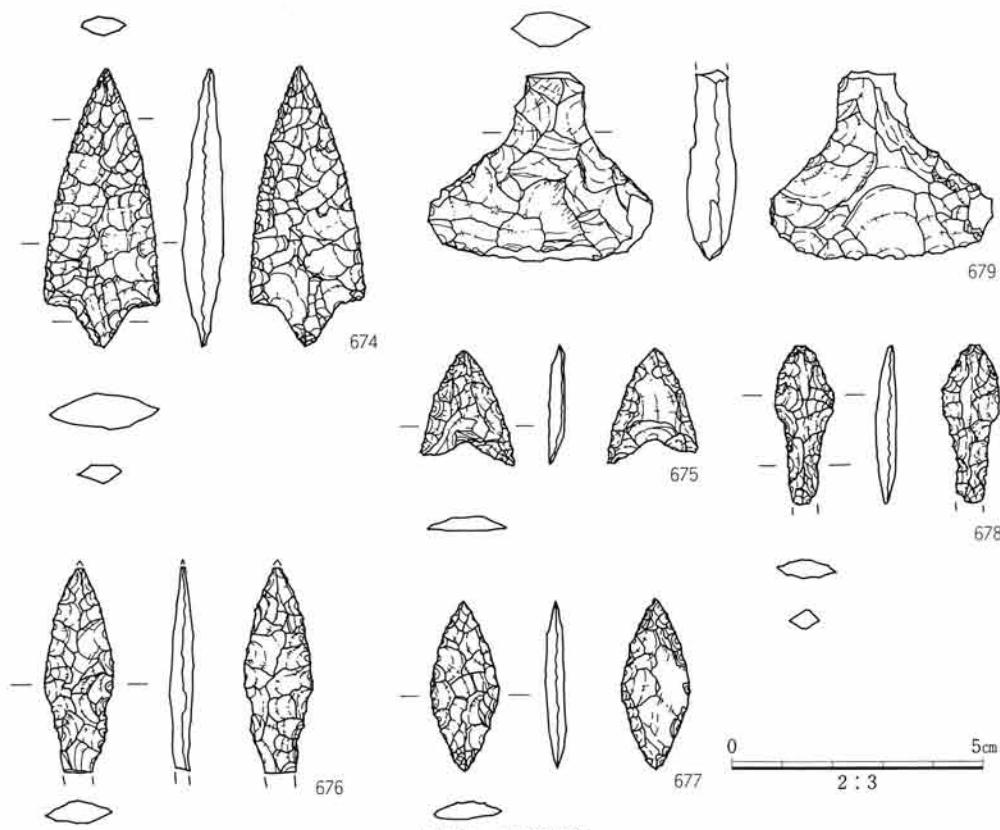


図159 石器遺物

桑津1層(676)、桑津3層(674・675・677~679)

表4 KW91-18次調査出土の石器遺物

番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
674	有茎尖頭器	5.55	2.30	0.75	7.4
675	石鎌	2.25	1.80	0.30	1.0
676	石鎌	(4.05)	1.35	0.45	(2.5)
677	石鎌	3.35	1.30	0.40	1.6
678	石錐	(3.15)	1.15	0.45	(1.5)
679	石匙	(3.70)	(4.45)	1.05	(14.1)

() 内の数値は残存値

湾曲している。上部にやや幅広のつまみが付く。

動物遺体 桑津3層の上層よりウマ *Equus caballus* の右下顎第3前臼歯が出土した。咬耗状態からみて年齢は8才前後と推定される(図版100)。

iii) 遺構と遺物(図157、図版22~24・75~80)

調査の当初に予想された弥生時代の資料は少なく、飛鳥時代以降の資料が大半を占める。また、その範囲も調査地西半部に限定されている。

a. 飛鳥・奈良時代

SE01 調査地西端の飛鳥時代の井戸である(図163)。一辺1.2mの隅丸方形で、深さ0.9mある。底から0.2mの高さまでの範囲で壁面が大きく抉れていたが、これは溜まった水により侵食されたためと思われる。飛鳥IVから平城宮Iに属する土師器杯・甌、須恵器杯蓋・壺などが出土している。

図164-726~733が出土している。726~729は土師器杯、733は土師器甌で、そのうち726・729は埋土最下層から出土した。726は口縁端部を内側に巻込み、広く平坦な底部をもつことから杯Aの形態に類似するが、内外面に暗文はない。底面はヘラケズリ調整されている。727は杯C、728は杯Aである。729は断面三角形の高台が付加されており、杯Bに当る。内面には螺旋文と二段放射文の暗文がある。甌733は舌状をした把手をもち、外面と口縁部内面をハケ調整する。730は須恵器短頸壺の蓋、731は須恵器杯蓋、732は須恵器壺の頸部である。杯蓋731は内面にまだかえりを残しており、732には3条の凹線が巡らされている。

b. 平安時代

SB01 調査地北部にあり、1間×1間の掘立柱建物と思われる(図160)。北西および南

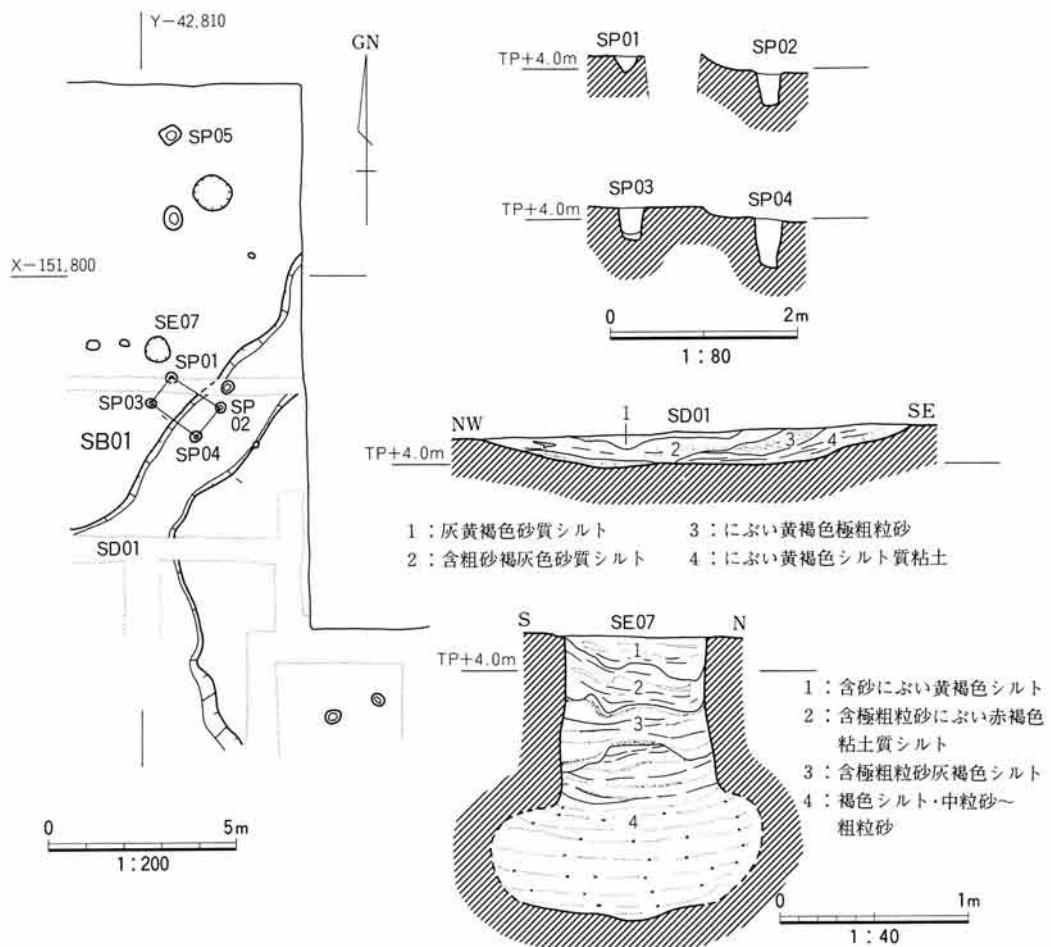


図160 SB01周辺遺構実測図

東に面した辺の柱間は約0.95m、北東および南西に面した辺は約1.50mである。掘形はみな直径0.3m前後の円形を呈するが、西側妻部にあたる2柱穴(SP01・03)は、東側妻部の2柱穴(SP02・04)に比べかなり浅い。SP01から図161-680の土師器小皿Cが出土した。平安時代IV期のものであろう。SP04からは図161-686の土師器椀が出土している。

SP05 調査地北端部に検出された平安時代初頭のピットである。平面は隅丸方形で、長辺47cm、短辺35cm、深さ25cmの規模をもつ。平安時代I期の土師器皿・杯・椀が出土した。

図161-682~685がこの遺構の出土遺物である。685は皿で、底部外面にユビオサエ痕がみられる。683と684はともに土師器杯であるが、後者は内外面ともていねいにナデ調整されているが、前者は底部外面にユビオサエ痕を残す。682は椀A[佐藤隆1992]に当るが、胎土中に砂粒をやや多く含んでいる。

SD01 調査地中央部付近にある平安時代末の溝である。溝の北部は北東から南西方向に延び、幅2m前後であるが、南部では10m程度にまで拡幅している。深さは南部の深いところで約50cmあるが、北部では20cmほどである(図160)。恐らく南部の池状の部分に水を集め構造となっていたと考えられる。溝北部の肩に重複して検出されたSB01は、このSD01と関連する遺構であろう。平安時代IV期の土師器小皿・皿・甕、瓦器小皿・椀、中国製磁器碗、軒丸瓦が出土している。

図162にこの遺構の出土遺物を示した。687~694は土師器小皿で、そのうち692~694は口縁部を一旦、水平方向に折り曲げる小皿Cである。695~702は土師器皿で、口縁部周辺をヨコナデし、体部外面にユビオサエを残す。その中で699~702は口径に比べて器高があり、椀形態に近い。703は土師器皿の底部と思われるが、底部外面に回転糸切り痕がみられる。704は土師器皿の台部で、器表には瓦器に似た炭素の吸着が部分的にみられる。705は土師器の甕で、「く」字状の口頸部は器壁が厚く、内外面がハケ調整されている。706は土師器羽釜であり、直立する口縁部と水平方向に延びる鍔をもつ。707・708は瓦器小皿で、ともに内面に緻密な暗文が施されている。709~715は瓦器椀で、見込みの暗文には斜格子暗文、平行暗文がみられる。716・717は中国製白磁碗で、716には玉縁状の口縁、717には花弁の表現と思われる線刻がある。718は軒丸瓦で、磨滅のため文様は不鮮明であるが、複弁蓮華文であるとみられる。主文の外に珠文帯があり、その内外に圈線が巡る。背面側は瓦当と丸瓦との接合部で剥離している。珠文外側の圈線内縁での直径は約10.0cmである。後述する788とは同文と思われる。

SE02 調査地西端部にある平安時代末の井戸で、田辺廃寺に関連すると思われる瓦類が多数、埋土内から出土した。規模は直径1.7mの円形で、深さ2.2m以上である。瓦類は埋土の上部からまとまって見つかった。

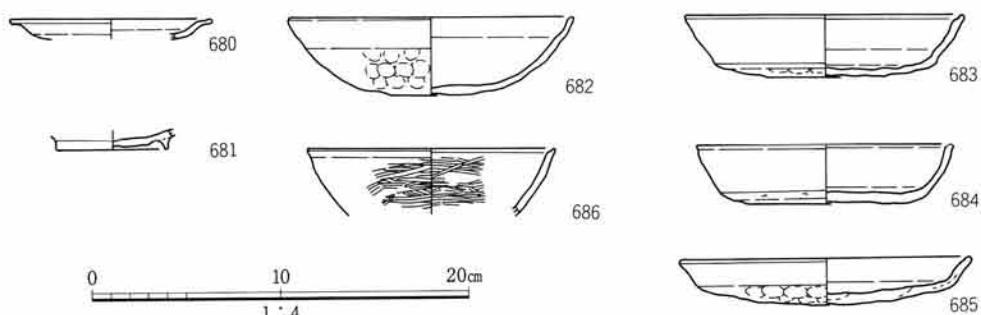


図161 SP01・04~06出土遺物
SP01(680)、SP04(686)、SP05(682~685)、SP06(681)

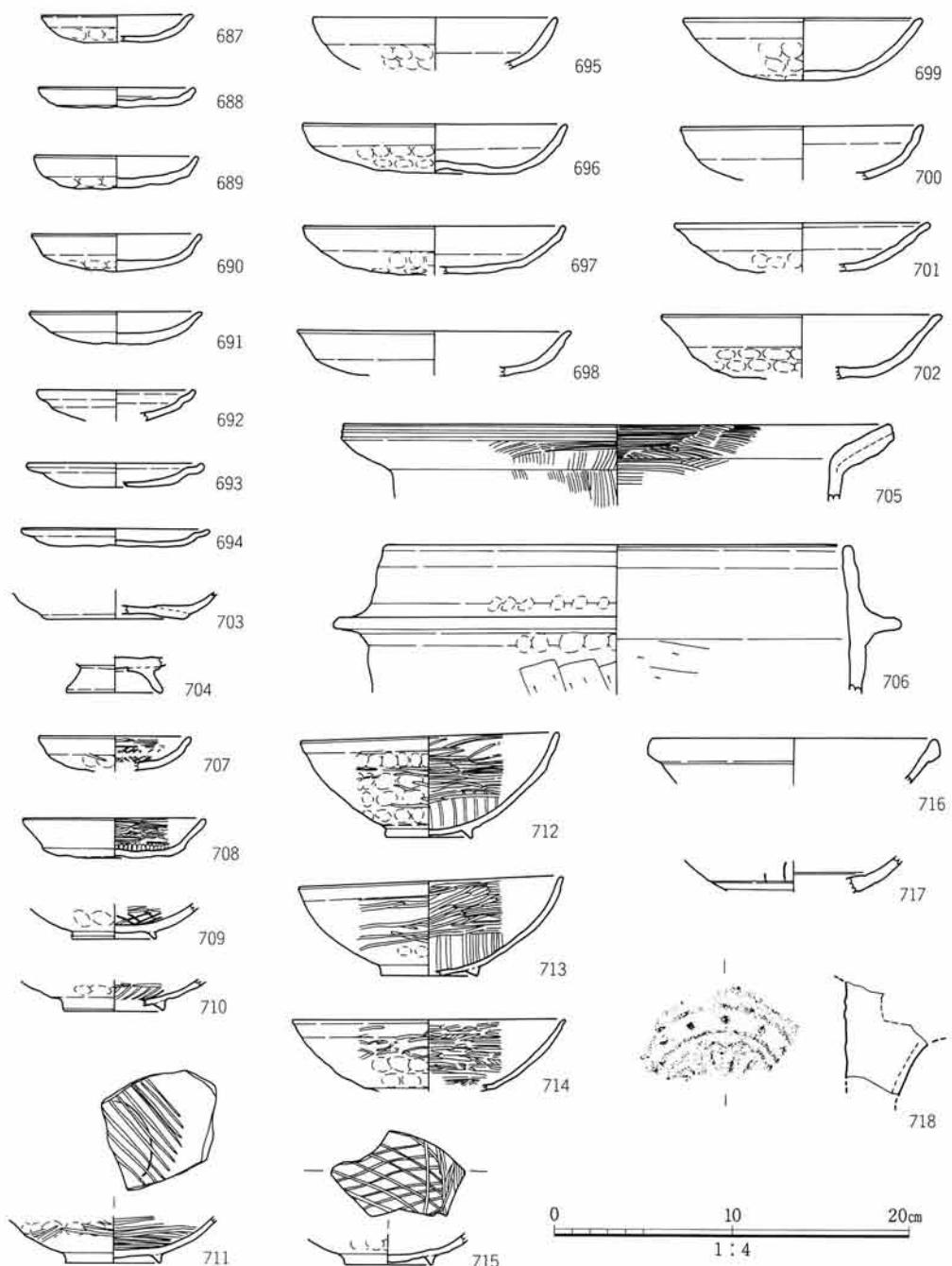


図162 SD01出土遺物

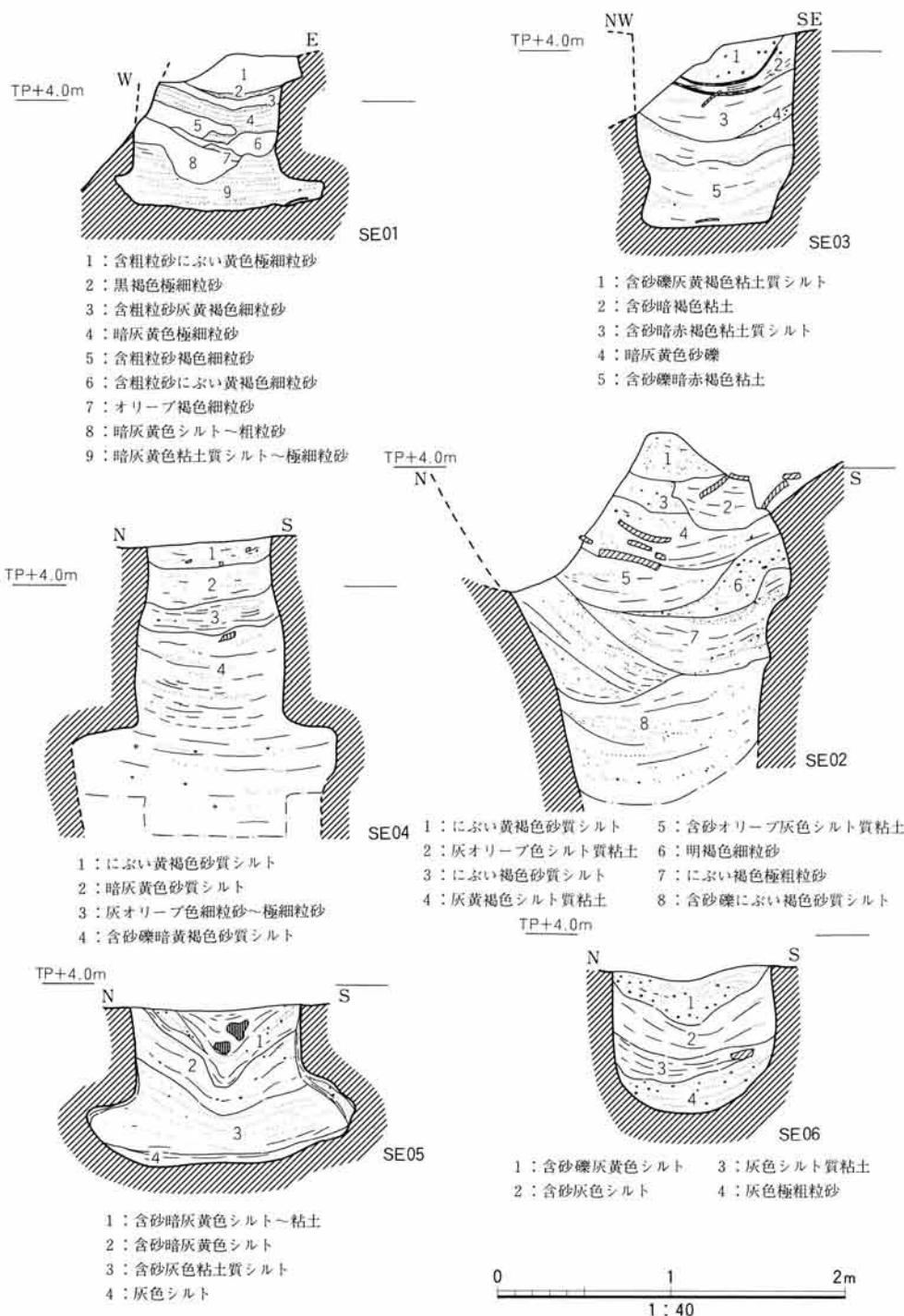


図163 SE01～06断面図

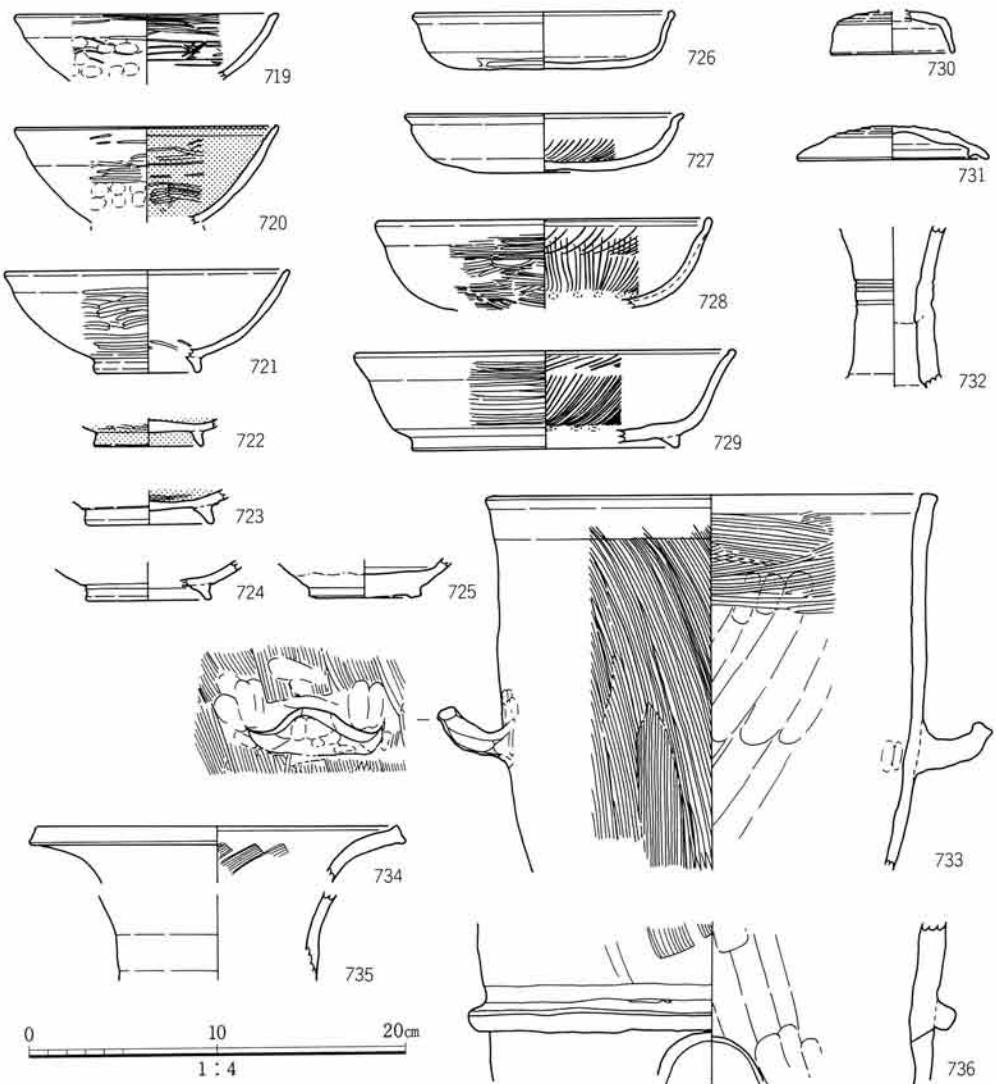


図164 SE01・03・08・10・14出土遺物

SE01(726~733)、SE03(720~723・734・735)、SE08(724・736)、SE10(719)、SE14(725)

図166・167が出土した瓦類で、図165~760が出土した唯一の土器である。瓦類は前述の通り、田辺廃寺に係わると考えられるもので、これらのみであれば遺構の時期を古代にさかのぼらせるところであるが、760が平安時代IV期の羽釜の口縁部であることから、平安時代末の遺構と判断した。瓦類は761~764が丸瓦、765~770が平瓦である。丸瓦はみな凹面に布目を残し、凸面をスリ消している。763の凸面には縄タタキメが残っている。側縁の面取りには1回のもの(761)、2回以上となるもの(762~764)がある。玉縁の残る761・763

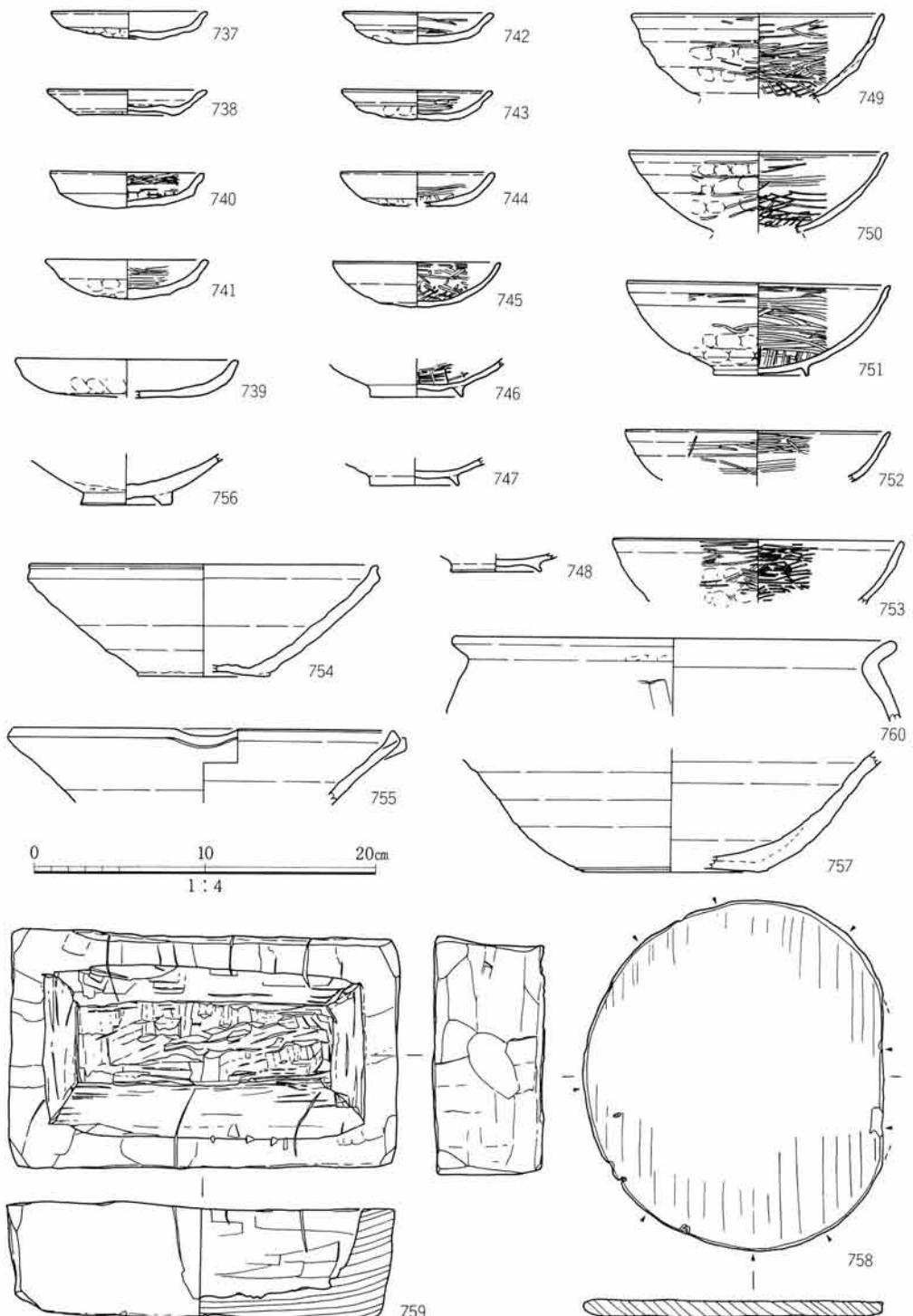


図165 SE02・04・06出土遺物

SE02(760)、SE04(745)、SE05(738~744・747~751・755~758)、SE06(737・746・752~754・759)

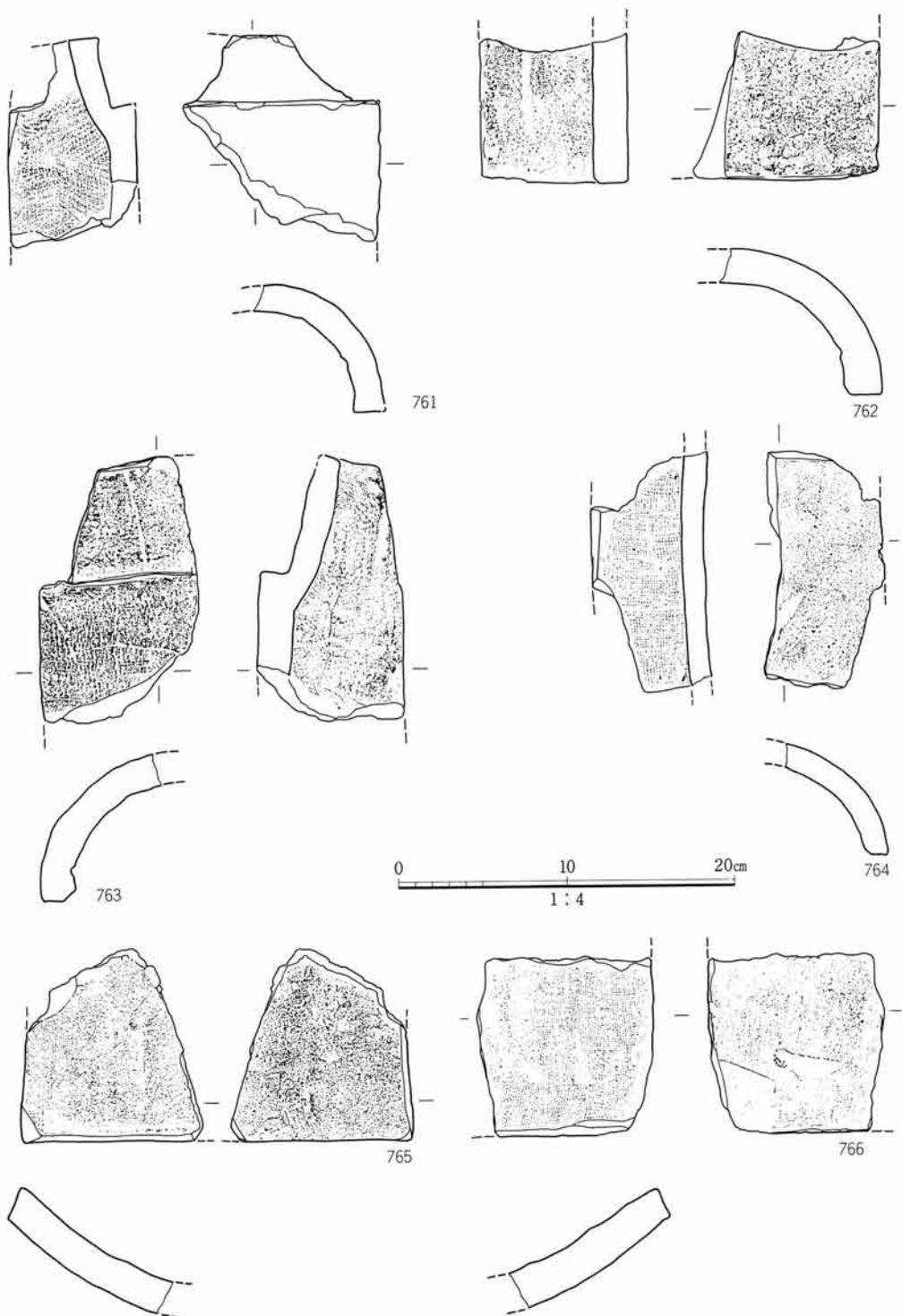


図166 SE02出土丸瓦・平瓦

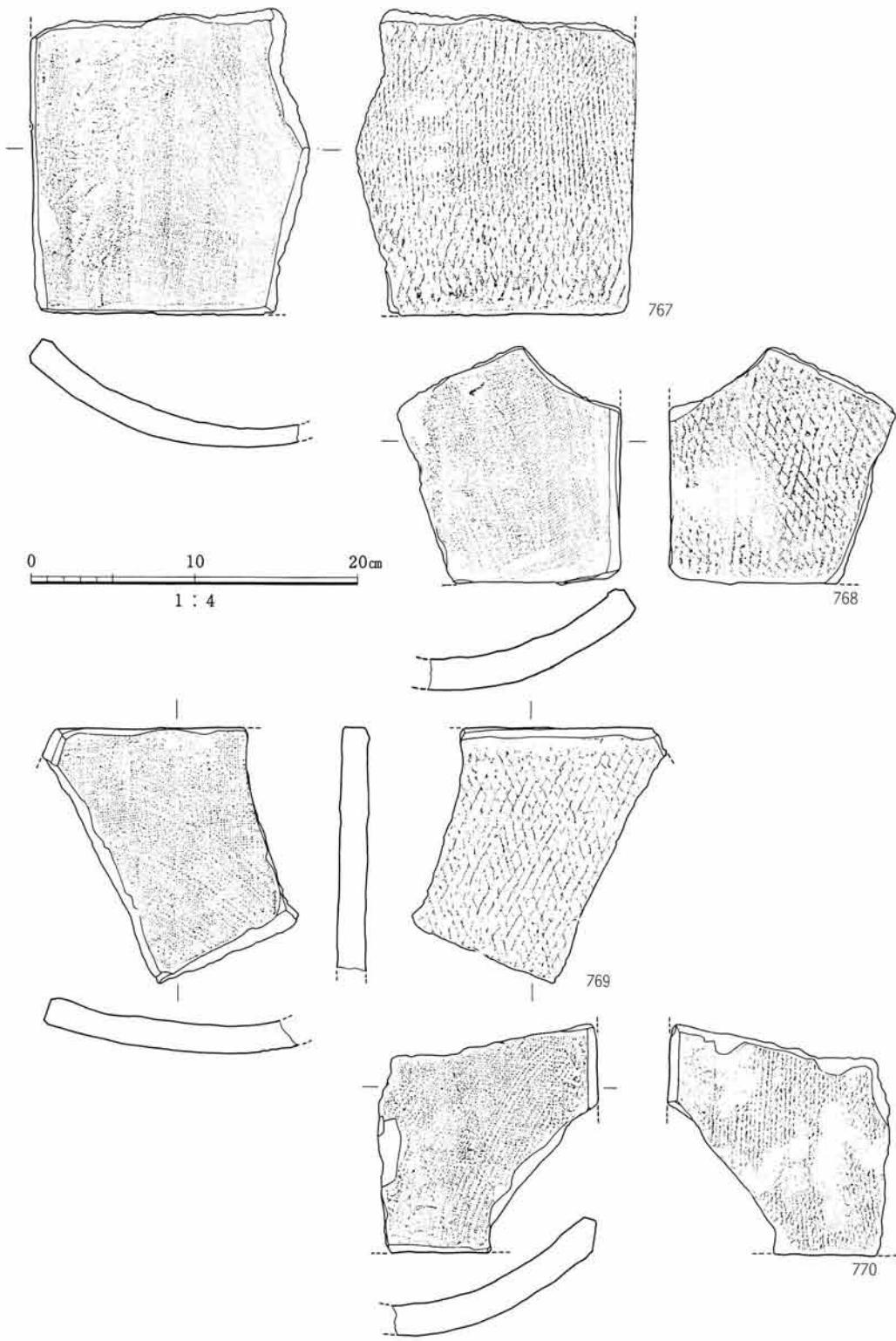


图167 SE02出土平瓦

では、前者の玉縁が長さ3.9cm、後者が7.3cmである。平瓦もみな凹面には布目を残す。766ではその布目が端部にも及んでいる。767では一部に布目を消すナデ調整がみられる。767・769・770には布目痕に先行する糸切り痕が確認できる。765・766の凸面は全面にナデ調整が施されているが、766では繩タタキメの痕がかすかに残る。767～769の凸面は格子タタキメで、767ではさらにその上を繩タタキメが覆っている。770の凸面は繩タタキメで、部分的に指頭圧痕がみられる。側縁の面取りには1回のもの(765・766)、2回以上となるもの(767～770)がある。769では一隅を斜めに切り落としている。

SE03 調査地北部に位置し、平安時代Ⅲ期の遺物を出土した井戸である。長径1.0m、短径0.8mの楕円形の平面プランをもち、深さは1.1mである。図164-720～723・734・735の遺物が出土した。721は土師器椀、720・723は黒色土器椀A、722は黒色土器椀Bである。いずれも内外面に緻密な暗文をもつ。734・735は緑釉陶器壺で、同一個体と思われる。

SE04 SE02の東隣にあり、その一部を切る遺構である。平面は直径0.7mの円形で、深さは1.7m以上ある。検出面から深さ1.1mのところで、壁面が大きく抉れており、溜まつた水による侵食を受けている。図165-745の瓦器小皿が出土した。小皿の内面には緻密な暗文がみられ、見込みは斜格子暗文となっている。平安時代Ⅳ期のものである。

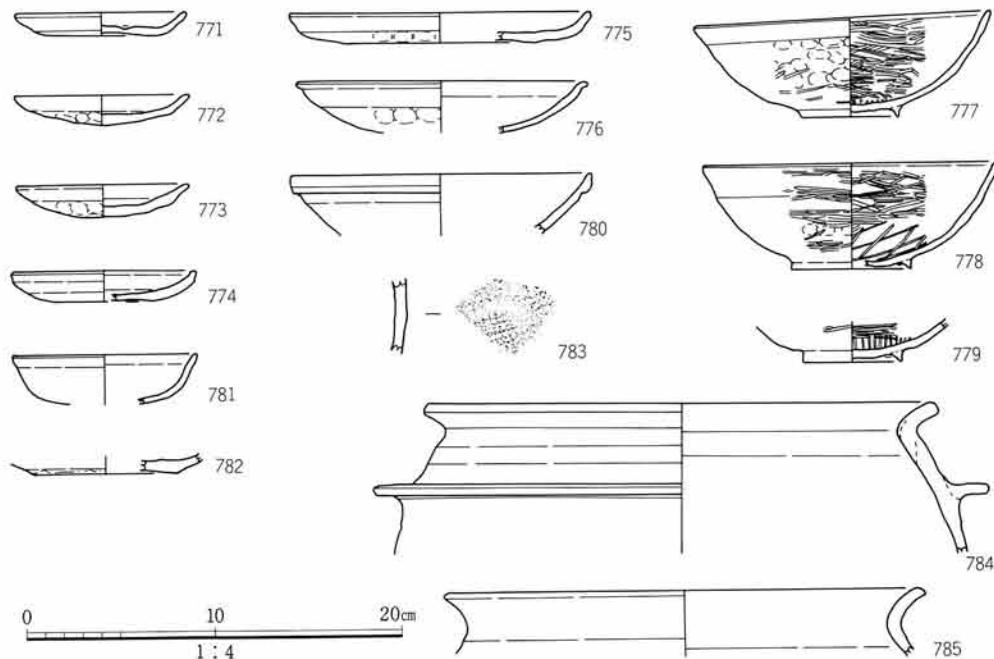


図168 SK01～03出土遺物
SK01(771～780・782・784・785)、SK02(781)、SK03(783)

SE05・06ともに調査地の北西部にある円形の井戸である(図163)。SE05は長径1.2m、短径0.9m、SE06は直径0.9mである。深さは前者が0.9m、後者が0.8mであり、規模も近似している。しかし、SE05は底から高さ0.5mまでの範囲の壁面が大きく抉れ、袋状になっている。出土遺物は共通しており、平安時代IV期の土師器・瓦器・須恵器などがある。

SE05の遺物には738の土師器小皿、739の土師器皿、740~744の瓦器小皿、747~751の瓦器椀、755・757の須恵器擂鉢、756の白磁碗がある(図165)。このうちいくつかの瓦器小皿や椀は完形品である。また、758の曲物底板が出土している。側縁の全周中9個所に、側面方向から打込まれた木釘またはその痕跡が確認できる。

SE06の遺物には737の土師器小皿、746・752・753の瓦器椀・754の須恵器擂鉢がある(図165)。また、759の木製容器が完形で出土している。平面長方形を呈する升形の製品で、全体を手斧あるいは鑿のような工具で粗く加工している。

SE07 SB01の北側に位置する直径0.8mの円形の井戸である。深さ1.5mあり、底から0.6mの高さまでの壁面が大きく抉れ、袋状となる。

SK01 後述するSG01の西隣にあり、それによって遺構の大半を破壊される。残存する遺構西肩の北への延長部分が、SD01の西肩に連続する可能性が考えられ、SK01とSD01は本来一連の遺構と思われる。出土遺物もその推定と矛盾なく平安時代IV期のものである。

SK01の遺物には771~774の土師器小皿、775・776・782の土師器皿、777~779の瓦器椀、780の中国製白磁碗、784の土師質羽釜、785の土師器甕がある(図168)。土師器皿782は底部に糸切り痕を残す。土師器皿776は底面が狭く、椀形に近い。

c. 江戸時代

SE08~16 調査地西半部にあり、SG01の周囲に3群に分かれて存在する。東群のSE10・14・15は木桶、井戸瓦による井戸側をもち、その下部に方形の木枠が組まれている

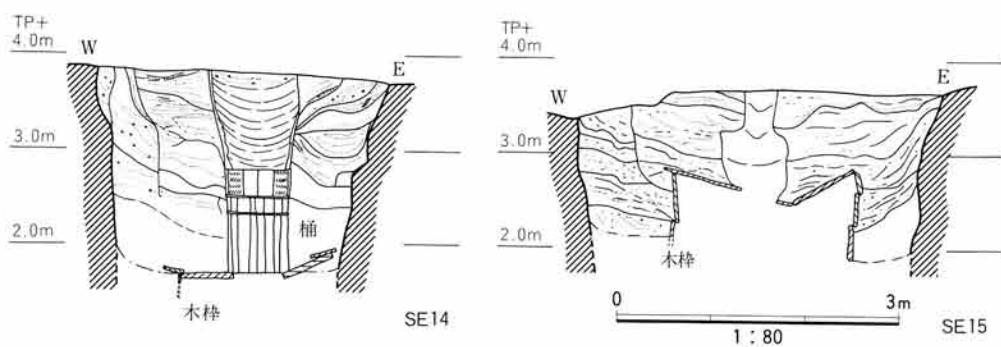
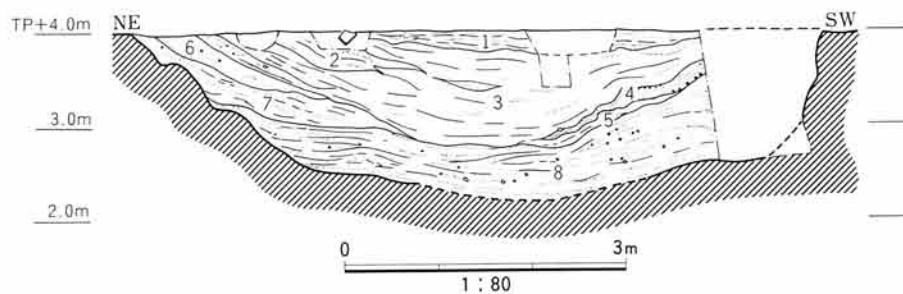


図169 SE14・15断面図

(図169)。調査地南端にあるSE09にもこうした木枠がある。西群のSE08・11~13には井戸側を確認できなかった。木枠は平面正方形で、その上面中央に木桶の直径分に相当する円孔を開けている。SE09・10・14では木枠の一辺が1.7mほどであるが、SE15では一辺2.1mと一回り大きい。SE08から土師器椀724、円筒埴輪736、SE10から瓦器椀719、SE14から白磁碗725が出土した。

SG01 調査地南西部にある池状の遺構である。平面形は、東西方向を底辺とし、西辺を高さとする直角三角形を呈する。規模は東西約20m、南北約13mで、深さは1.8mである。遺構の断面形は図170のように浅いU字形で、底に0.5mほどの層厚をもつ水成のにぶい黄色シルト～極細粒砂が堆積する。江戸時代中期以降の遺構である。

図171にこの遺構からの出土遺物を示した。786は肥前染付皿で、見込みに蛇目釉ハギがみられる。18世紀代のものである。787は行基瓦で、凸面のタタキメが完全にスリ消されている。788は表面の磨滅が著しいが、複弁蓮華文軒丸瓦と思われる。主文の外側に珠文帯をもつ。789は唐草文軒平瓦、790は均整唐草文軒平瓦である。これらの瓦類は田辺廃寺と関連するものである。[宮本佐知子・佐藤隆1996]に詳しい記述があり、そこから抜粋して特徴を述べる。788では珠文帯の内外に界線が巡り、小さい珠文が配される。丸瓦との接合位置は低い。789は細い界線の中に2回転以上の唐草を配し、外区の珠文は小さく突出している。段顎である。胎土は非常に細かく、焼成は軟質である。790は3回転の唐草を配するものと思われ、おののの唐草は主葉と第1子葉は巻込んでいるが、第2子葉は伸びたままとなっている。瓦当上の凹面には横方向のケズリが施され、以下は布目を残している。凸面には縦方向のケズリがみられ、瓦当面から約10cm内側に赤色顔料が付着する。直線顎である。胎土は粗いが礫は含まない。焼成は硬質である。



1:オリーブ褐色砂質シルト 3:含砂礫オリーブ黒色シルト～粘土質シルト 5:黄灰色シルト 7:含砂礫黄褐色シルト
2:浅黄色砂質シルト 4:オリーブ黄色粗粒砂～礫 6:黄褐色極細粒砂～礫 8:にぶい黄色シルト～極細粒砂・砂礫

図170 SG01断面図

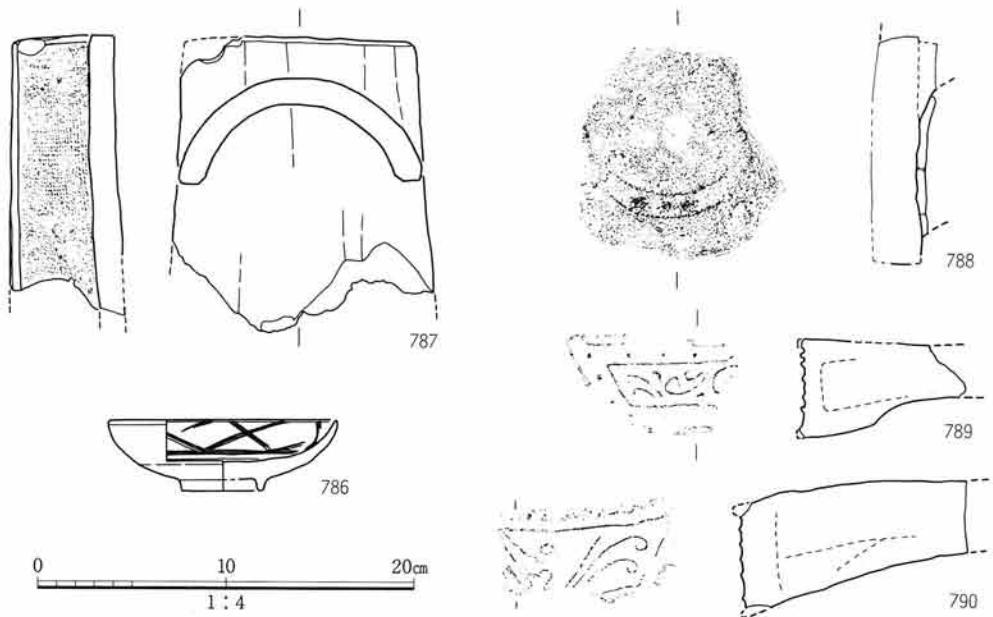


図171 SG01出土遺物

SK02 調査地北端部にある近世の土壙である。平面が3m×2mほどの隅丸方形で、深さ約0.5mある。図168-781の奈良時代の土師器杯が出土した。

SK03・SP06 いずれも時期不確定の遺構である。SP06は調査地南西部に、SK03は調査地中央部にある。前者は直径0.5mの円形のピットで、深さ0.2m、図161-681の瓦器椀底部が出土した。後者は長径1.9m、短径1.1mの楕円形で、深さ約25cm、図168-783の韓式系土器の破片が出土した。783は外面に格子タタキメがみられる軟質の土器である。

3) 小結

本調査地からは縄文～江戸時代の遺物が出土した。縄文時代の有茎尖頭器は完形品であり、桑津遺跡では2例目となる。この時代の集落は、まだ発見されていないが、1万年前にさかのぼるこの地域の狩猟活動の一端を示す貴重な資料である。弥生・古墳時代は遺物のみで、遺構はみられなかった。この時代の集落は北方に広がっており、この調査地はその外側にあることを示している。飛鳥・奈良時代に関しては井戸が検出されたほか、田辺廃寺に関連する瓦を21点報告した。平安時代末の遺構・遺物がこの調査の中心であり、建物と思われる遺構のほか、井戸、溝が検出された。江戸時代には池状の遺構が築かれ、その後に多くの井戸が掘られた。桑津2層の作土中から出土した丁銀を模した素焼き製品が示すように、19世紀代には耕作地化されていたものと考えられる。

第19節 KW91-26次調査

1) 調査の経緯と経過

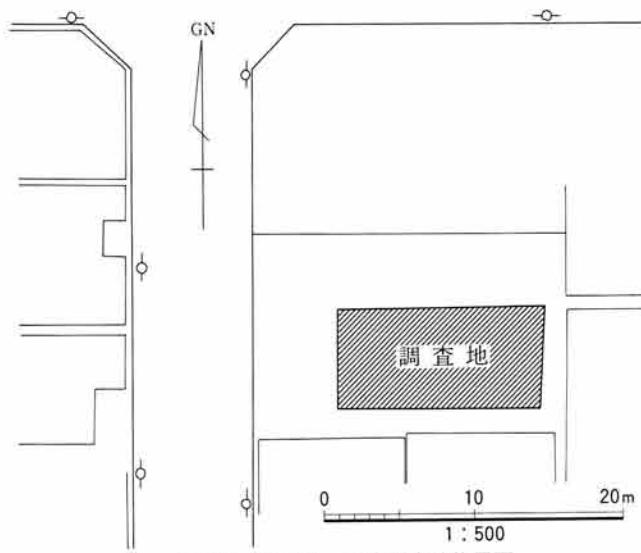


図172 KW91-26次調査位置図

本調査地(駒川1丁目18-32)は桑津遺跡の南端部付近にある。建設工事に先立ち、1991年11月7日に試掘調査を行った。その結果、現地表下約0.6mで地山が検出され、土壌状の遺構があることが判明した。それを受け本調査を実施することとなり、同年12月22日に資材を搬入、24日より調査に着手した。層序を確認するために、調査地西北隅を人力で掘削し、それ以外の表土から後述する桑津3層中層までを重機によって掘削し

た。12月28日から翌年1月4日までは作業を止め、1月10日に調査を終了、1月11日に器材などの撤収を行った。調査面積は98m²であった(図172)。

2) 調査結果

i) 層序(図174)

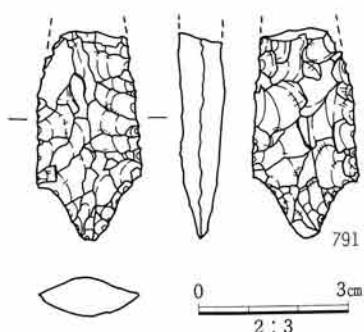


図173 桑津3層出土有茎尖頭器

調査地は、桑津遺跡の南方にある谷状地形に向って地山層が低くなる地点に位置する。以下に述べる中世から近世の包含層がみられた。

桑津0層：現代の客土。層厚は約20cm前後である。

桑津2層：上下2層に分かれる。上層は中粒砂を含んだ灰オリーブ色粘土質シルトで、層厚約12cmある。陶磁器を含み、近世以降の作土である。下層は粗粒砂を含んだにぶい黄褐色極細粒砂で、層厚約6cmある。

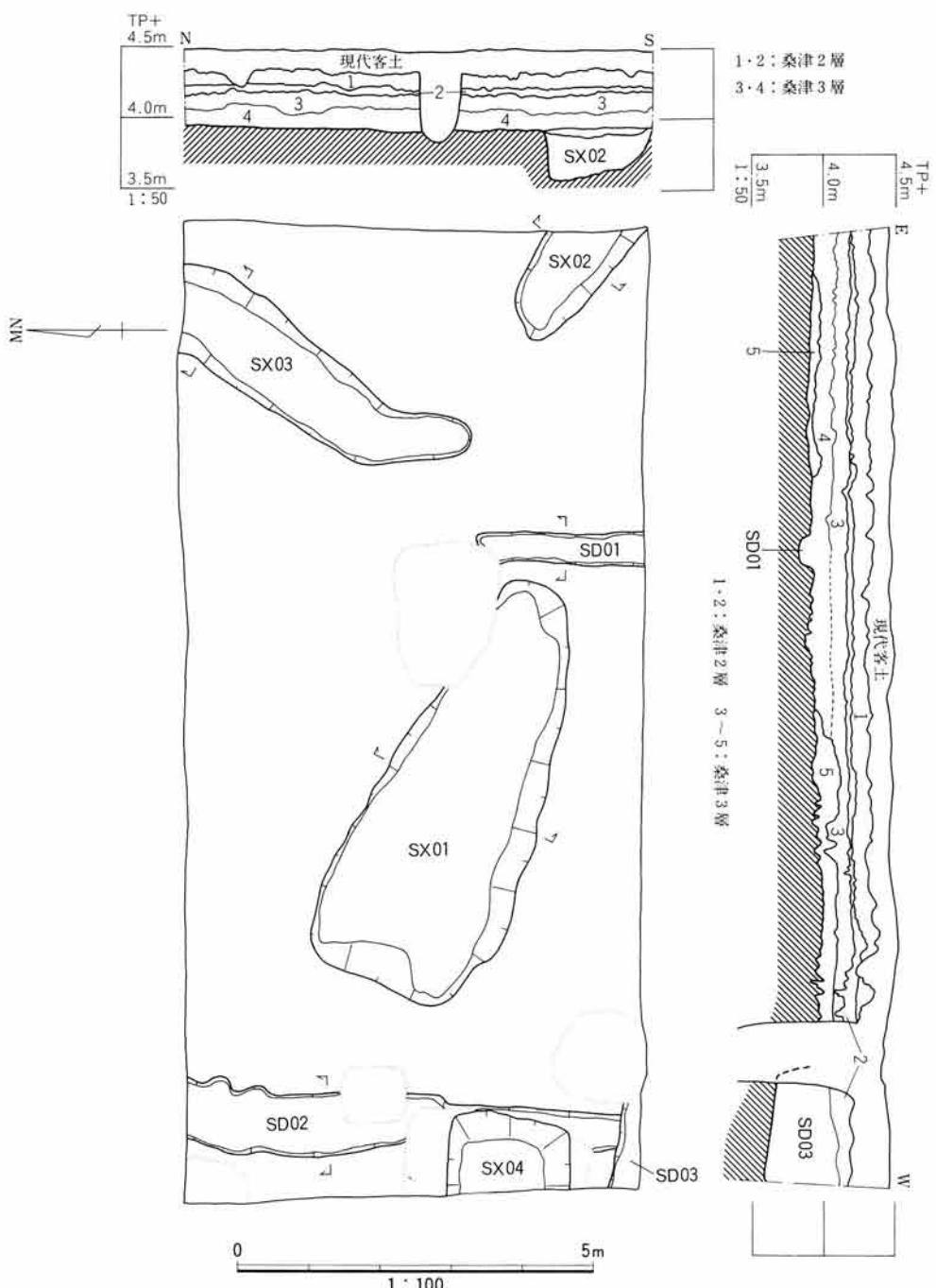


図174 KW91-26次調査地遺構実測図

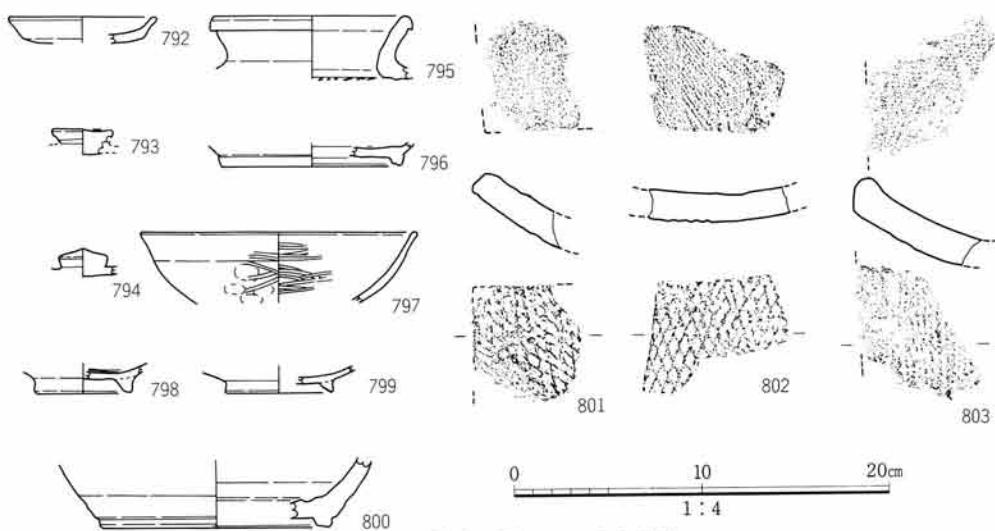


図175 桑津3層・SD01出土遺物
桑津3層(792~802)、SD01(803)

桑津3層：3層に大別される。上層は中粒砂を含んだ黄褐色粘土質シルトで、層厚約12cmある。瓦器片が出土しており、中世以降の作土とみられる。中層は粗砂含みの黄褐色シルト質粘土で、層厚約18cmある。瓦器片を含み、中世以降の作土である。以上の上・中層はKW91-18次調査の桑津3層上層に対比される。下層は灰オリーブ色細粒砂～中粒砂で、層厚は最大でも3cmほどである。本層にも瓦器片を含み、中世以降の作土とみられる。

地山層：にぶい黄橙色極細粒砂～中粒砂である。標高は3.9m前後にある。

ii) 桑津3層の遺物(図版81・94)

図173-791は桑津3層中層から出土したサヌカイト製の有茎尖頭器である。作用部を先端から3分の1ほど欠損する。作用部は直線的で、逆三角形の短い茎部を作っている。逆刺は下方に突出しない。法量は残存長4.15cm、幅2.10cm、厚さ0.90cm、重量8.1gである。

図175-792~802は桑津3層下層から出土した。792は土師器小皿、793・794は須恵器杯蓋、796は須恵器杯Bである。793・794はやや扁平なつまみをもち、796の高台は底部の外縁に付けられている。奈良時代後半から平安時代のものであろう。795は小型の須恵器甕の口縁部、800は壺の底部である。800には低い高台が付く。797~799は瓦器椀で、暗文や高台の状況からみて平安時代末から鎌倉時代初めのものである。801・802は平瓦で凸面に格子タタキメ、凹面に布目が残る。

iii) 遺構と遺物(図174~176、図版25)

SD01・02 SD01は桑津3層中層下面の溝で、南北方向をとる。その西7.5mほどの位

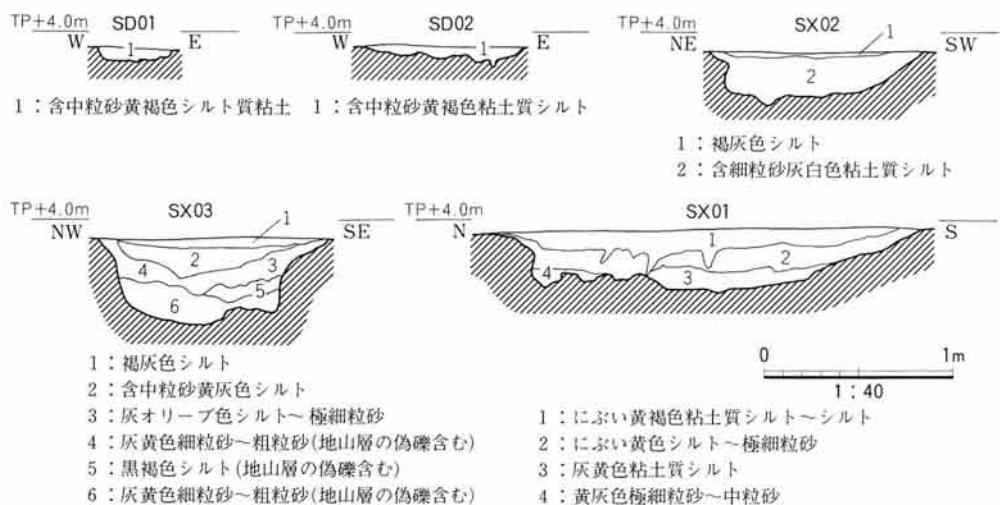


図176 SD01・02、SX01～03断面図

置に並走するSD02も同層準の溝と思われる。規模は幅0.4～0.9m、深さ0.1mほどである。SD01からは瓦の細片(図175-803)が出土した。中世の灌漑に係わる溝と考えられる。平瓦803は凸面に繩タタキメ、凹面に布目が残るもので、田辺廃寺に係わる瓦であろう。

SX01 桑津3層下層の基底面で検出された遺構である。長軸長6.1m、短軸長2.6m、深さ0.4mを測る不整形の土壙である。横断面は浅いU字形を呈する。埋土はおおむね3層に分れるが、人為的に埋戻された形跡ではなく、自然堆積したものである。埋土中層からサヌカイト剥片が1点出土した以外はまったく遺物は出土しなかった。

SX02・03 これらの遺構もSX01と同様、桑津3層下層基底面の遺構である。断面形や埋土の状況、遺物が出土しないという点でも共通した特徴をもっており、時期・性格はともに不明といわざるをえない。

SD03・SX04 これらは調査地の西南隅にあり、桑津1層下層の基底面で検出された。近世以降の遺構である。

本調査で検出されたSX01～03は、前述のように時期・性格が不明である。また、中世の遺構として平行する2条の南北溝が確認できたことは、この地域の地割を検討する上で注目されよう。遊離資料ではあるが、桑津遺跡で3例目の有茎尖頭器が出土したことも特筆される。

第20節 KW93-2次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は桑津5丁目17ほかに所在し、遺跡範囲のほぼ中央部、東住吉中学校敷地内に位置する。本地点では、ほかにKW82-7次・KW83-8次・KW96-13次調査が行われており、いずれでも弥生時代の方形周溝墓が検出されている。本調査は校舎建設に伴うもので、1992年10月15日に試掘調査(KW92-25次)を行った結果、弥生時代の遺構が確認された。これを受け、市教育委員会・市都市整備局と大阪市文化財協会で協議した結果、93年5月6日から約2ヶ月間の予定で調査を行うことになった。

調査区は、南に位置する校舎予定地のⅠ区とその北側の受水槽予定地のⅡ区からなる(図8・177)。調査は、まずⅠ区から着手し、重機を用いて現代客土から中・近世の作土層までを掘削し、それ以下の掘削は人力によった。まもなく、東半分は明治時代の土取りでそれ以前の地層・遺構が完全に破壊されていること、西半分は旧校舎建設時の攪乱を受けていたにもかかわらず、弥生時代の遺構が比較的良好に残存していることが判明した。以後、西半分に重点をおいて調査を進め、方形周溝墓や溝が明らかになった。Ⅰ区の調査に並行して、6月3日からⅡ区の調査を開始し、弥生時代の溝状遺構を発見した。その性格をはつきりさせるため、再び先の三者で協議を行い、範囲を若干拡張した結果、方形周溝墓と推定するにいたった。このような弥生時代の方形周溝墓をはじめとする遺構・遺物が良好な状態で発見され、しかもそれが学校内であったため、東住吉中学校と桑津小学校の生徒および教職員を対象に見学会を6月16・17日に開催し、約800名が参加した。最終的な調査面積は568m²となり、現場作業は6月25日に終了した。

2) 調査結果

i) 層序(図178)

桑津0層：1950年に東住吉中学校が建設されて以降の現代客土層である。平均層厚50cm。

桑津1層：近・現代の地層を一括する。2層に大別され、上層は細礫と炭を含むにぶい黄褐色砂質シルト層で、中学校建設以前の表土と考えられる。平均層厚10cm。下層は含細礫にぶい黄褐色砂質シルト層からなる作土層である。平均層厚8cm。下面には偶蹄類の足跡が顕著に認められる。Ⅰ区東半の本層基底面で明治時代の土取り穴群が検出されたこと

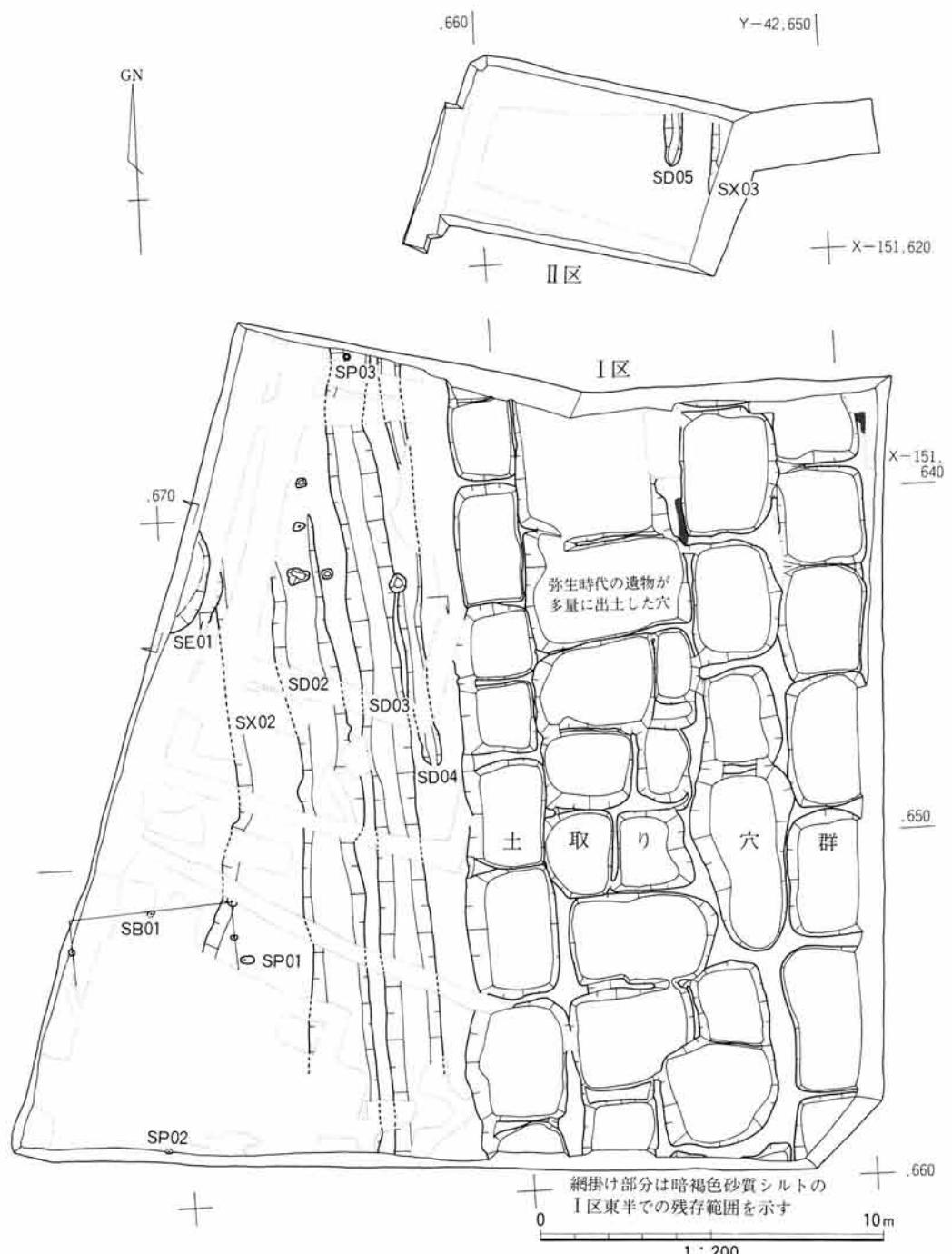


図177 KW93-2次調査地全体図(古代～近代の遺構)

から、本層はそれ以降の作土層である。ガラス片・陶磁器片が含まれる。なお、本層下面のレベルはⅠ区中央を境にして東側が20cm低く、Ⅱ区においても東部では15cm低い。

桑津2層：含細礫黃褐色砂質シルト層からなる中世から近世の作土層である。Ⅰ区西半とⅡ区に分布する。平均層厚5~10cm。陶磁器・瓦器・須恵器・土師器・瓦片を含む。下面には踏込み痕やいわゆる犁溝が顯著に認められるとともに、南北方向の溝や段が検出された。本層下面のレベルも段を境に東側が20cm低くなる。Ⅱ区の低所では層厚も15cmに増し、上位から、灰黄色砂質シルト、含砂灰黄褐色粘土質シルト、含細礫黒褐色シルト質中粒砂の3層に分層される。最下位の層準には土器の細片しか出土しなかったため、年代がさかのばる可能性もある。

桑津4層：褐色シルト質中粒砂~細粒砂で、Ⅱ区西~中部にのみ薄く分布する。層厚は5cm。出土遺物は純粹な状態で採集できなかったが、KW96-13次調査では平安時代の遺物を含むことが判明している。

桑津5層：含細礫暗灰褐~暗灰黄色砂質シルトで、局所的にしか分布しない。平均層厚は5cm。Ⅱ区では方形周溝墓3の周溝上部の凹みに堆積している。須恵器片が含まれる。Ⅰ区南部のSB01・SP01は本層下面の検出遺構と考えられる。

地山層：沖積層中部層から低位段丘構成層に相当する。上面の標高は3.7mである。3層に大別できる。上層は灰黄褐色砂質シルトで、平均層厚5cm。沖積層中部層から低位段丘構成層最上部までが風化・土壤化を受けたものと考えられている。KW82-7次で有茎尖頭器、KW96-13次で小型ナイフ型石器が出土した層準は本層に対比される。中層は含砂黄褐色シルト質粘土で、層厚15cm。低位段丘構成層上部に相当する可能性がある。下層は淡黄色シルト質砂礫~中砂で、層厚1.2m以上に達する。低位段丘構成層下部に相当する可能性がある。本調査では上・中層のトレンチ調査を行ったが、遺物は出土しなかった。

ii) 各層出土の遺物(図179~181、図版82・94・95)

桑津2層出土遺物 804は内折する口縁の細頸壺で、山城・近江地域の系統の土器と思われる。805は広口壺で、口縁内面に竹管文、端部に刻み目が施されている。806は胎土に結晶片岩粒が多く含まれる紀伊形甕で、紀伊Ⅱ様式[土井孝之1989]と思われる。これらは畿内第Ⅱ様式~第Ⅲ様式に属する。813は石錐の完形品である。頭部と錐部の比率はほぼ1:1であるが、両者の境界は明確でない。錐部の先端は鋭さを欠き、磨滅している部分もみられる。長さ6.15cm、幅2.00cm、厚さ0.95cm、重量8.5gである。これらは後述するSD01周辺で出土したもので、本来これに含まれていた可能性が高い。

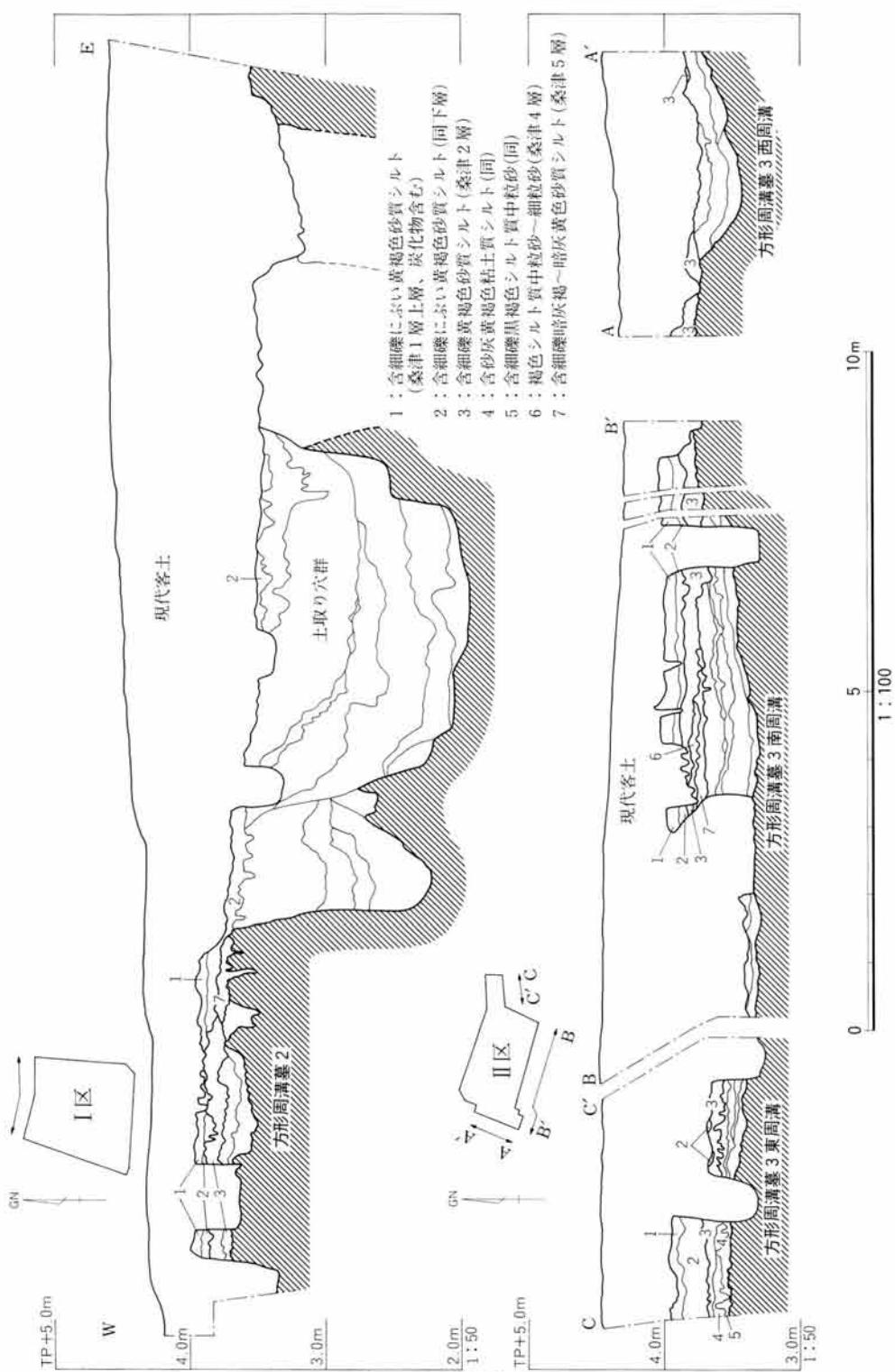


図178 調査地断面図

820はⅡ区から出土した大型蛤刃石斧で、刃部と一方の側縁を残す。図示した平面図では刃部に左上がりの使用痕がみられ、この面が[佐原眞1985]の左主面に当ることがわかる。破断面がこの使用痕と平行していることから、使用時に破損したものと思われる。残存長9.01m、残存幅3.60cm、厚さ3.80cm、重量146.2gである。

桑津 5層出土遺物 良好的な石器遺物が多く、810はⅠ区、807・808・818・819はⅡ区から出土したものである。

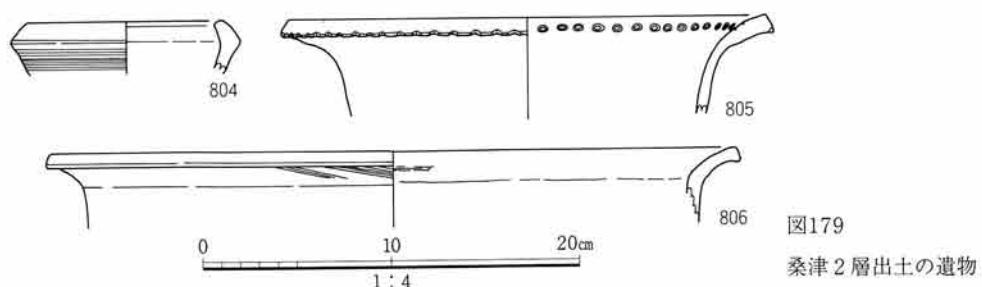
807は凹基無茎式石鎌で、平面が正三角形に近いものである。作用部は切先ですばり、逆刺の先端は尖っている。抉りはやや浅い。長さ1.70cm、幅1.40cm、厚さ0.30cm、重量0.6gである。808は凹基無茎式石鎌で、平面が五角形を呈する。作用部側縁の基部寄りに明瞭な稜を作り出している。逆刺は丸みをもっており、それに続く抉りはやや深い。残存長2.55cm、幅1.40cm、厚さ0.30cm、重量0.6gである。807・808は縄文時代早期から中期のものと形態から推測される。810は凸基無茎式石鎌で、紡錘形の輪郭をもつ。切先側だけでなく、基部端も鋭く尖っている。先行剥離面を広く残す面は平坦に近いが、反対側の面は中央が大きく盛り上がっている。長さ4.55cm、幅1.65cm、厚さ0.70cm、重量4.4gである。

818は砂岩製の石庖丁である。左右両端を大きく欠損しており、背部の一部と刃部のごく一部を残すにすぎない。背部に沿って3つの紐孔があるが、中央の1孔は孔径が狭く、穿孔方向も斜めになっている。残存長5.25cm、幅5.75cm、厚さ0.97cm、重量33.7gである。819は緑色片岩製の石庖丁である。左右両端を欠損する。直線的な刃部をもつ半月形のタイプである。背部寄りに穿孔部が1孔だけ残る。残存長6.85cm、幅3.85cm、厚さ0.57cm、重量24.0gである。

iii) 遺構と遺物(図180・182~205、原色図版1、図版26~31・82~87・94・95)

a. 弥生時代

方形周溝墓3基・土壙墓1基、溝1条のほか、性格不明の落込みがある。なお、Ⅰ区東半では前述したように遺構面がまったく残っていなかったが、弥生時代の遺構埋土と近似



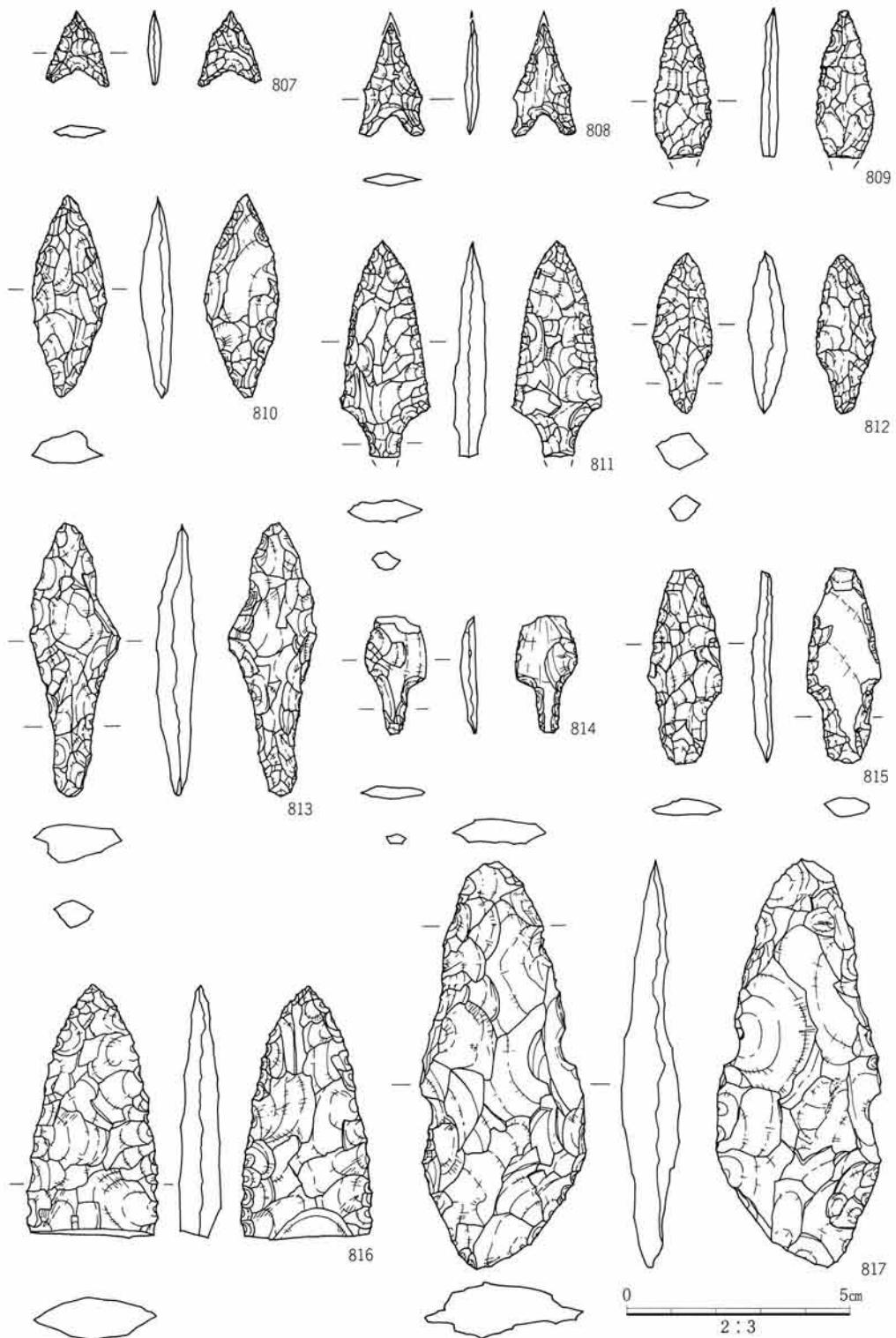


図180 打製石器

桑津2層(813)、桑津5層(807・808・810)、方形周溝墓1B(811・815・817)、
方形周溝墓2(812)、方形周溝墓3(809・814)、土取り穴群(816)

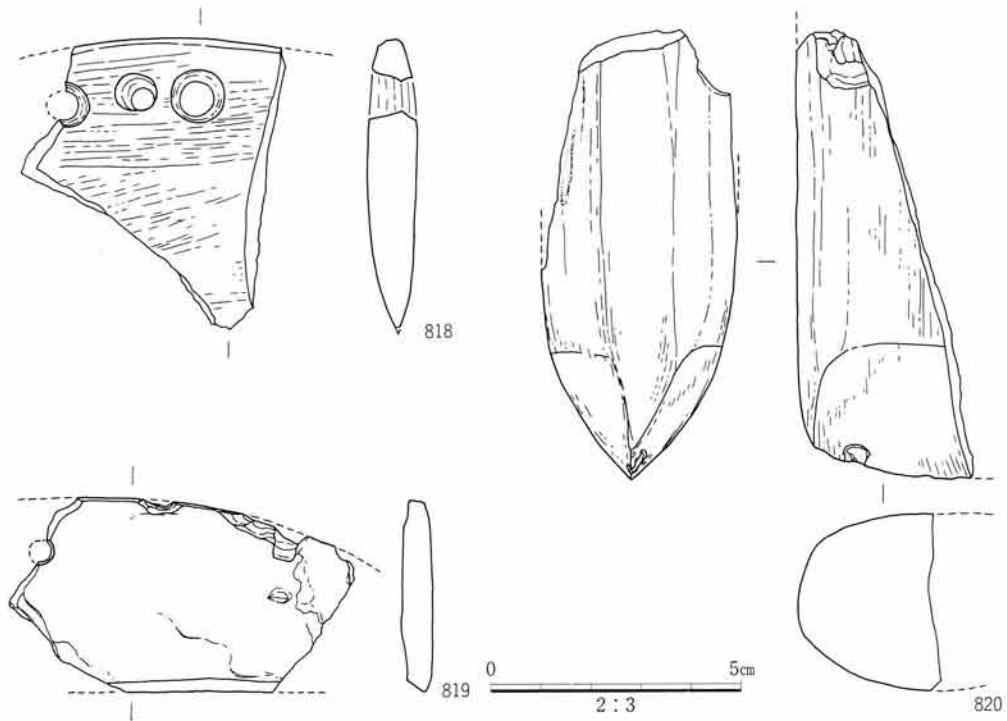


図181 磨製石器
桑津2層(820)、桑津5層(818・819)

する暗褐色砂質シルトが堆積する凹みが2個所認められた(図177の網掛け部分)。いずれもきわめて狭い範囲であったので、詳細は不明であるが、遺構の残欠と思われる。

方形周溝墓1(図180・183~187) I区南西部に位置する。墳丘盛土や主体部は削平されて残存しないが、溝の形状・埋土・遺物の出土状況の諸特徴から、方形周溝墓と判断した。当時の地表面は削平され、また南半の大部分を破壊されている。周溝は2重に巡るような位置関係で検出され、内側のものは外側に比べて規模が小さい。前者を内側周溝、これが伴う墓を周溝墓1A、後者を外側周溝、これが伴う墓を周溝墓1Bと呼称し、記載を進める。結論的には、まず周溝墓1Aが造られ、その後、これを拡張して周溝墓1Bにする際に外側周溝が掘削されたと推定する。

周溝墓1A 周溝は断面形が浅いU字形で、墳丘側の立上がりは反対側に比べて傾斜がきつい。規模は東周溝が幅0.7m、深さ0.2m、北周溝が幅0.4m、深さ0.2m、西周溝が幅1.0m、深さ0.25mで、東・西周溝に比べて北周溝がやや小さい。掘削深度はほぼ一様である。

埋土は6層に細分される(図184)。このうち2・5・6層は水成層である。また、3層

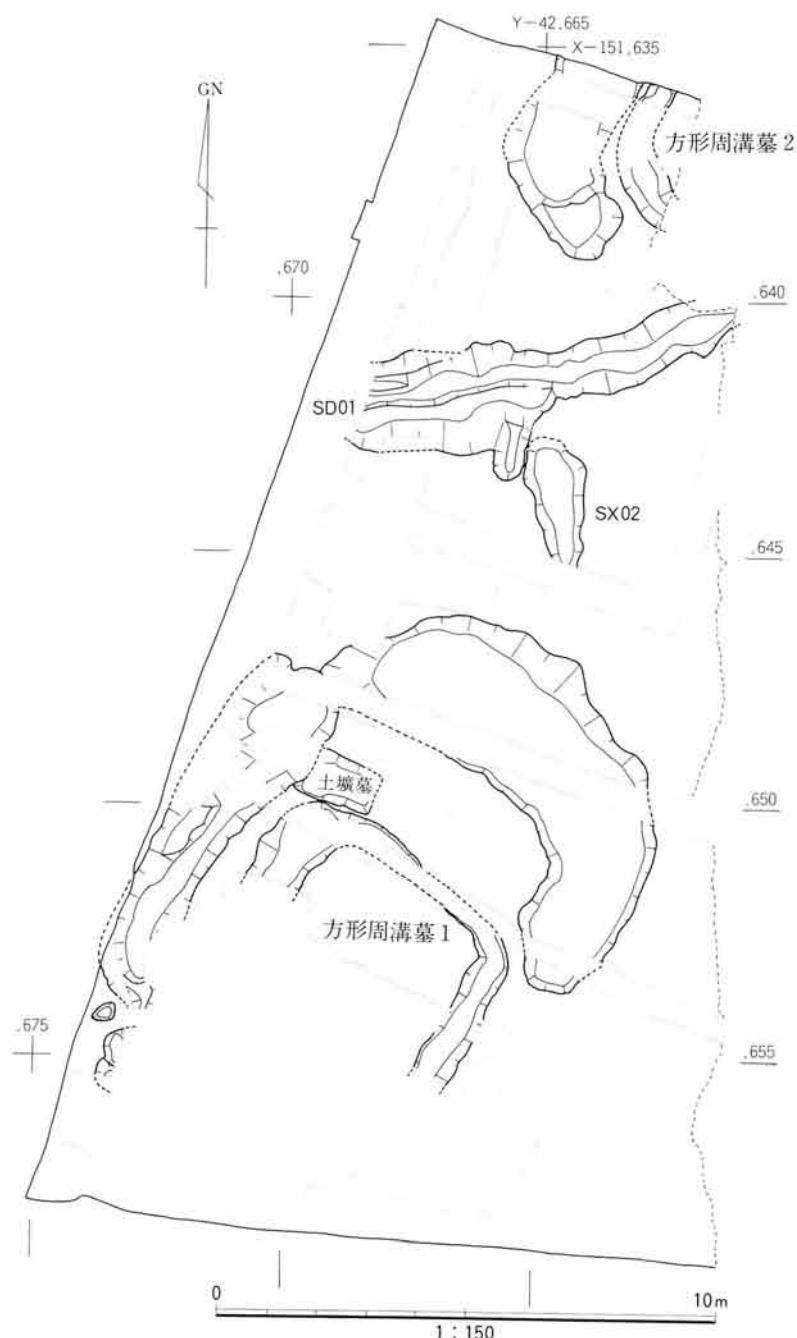


図182 弥生時代の遺構平面図(I 区)

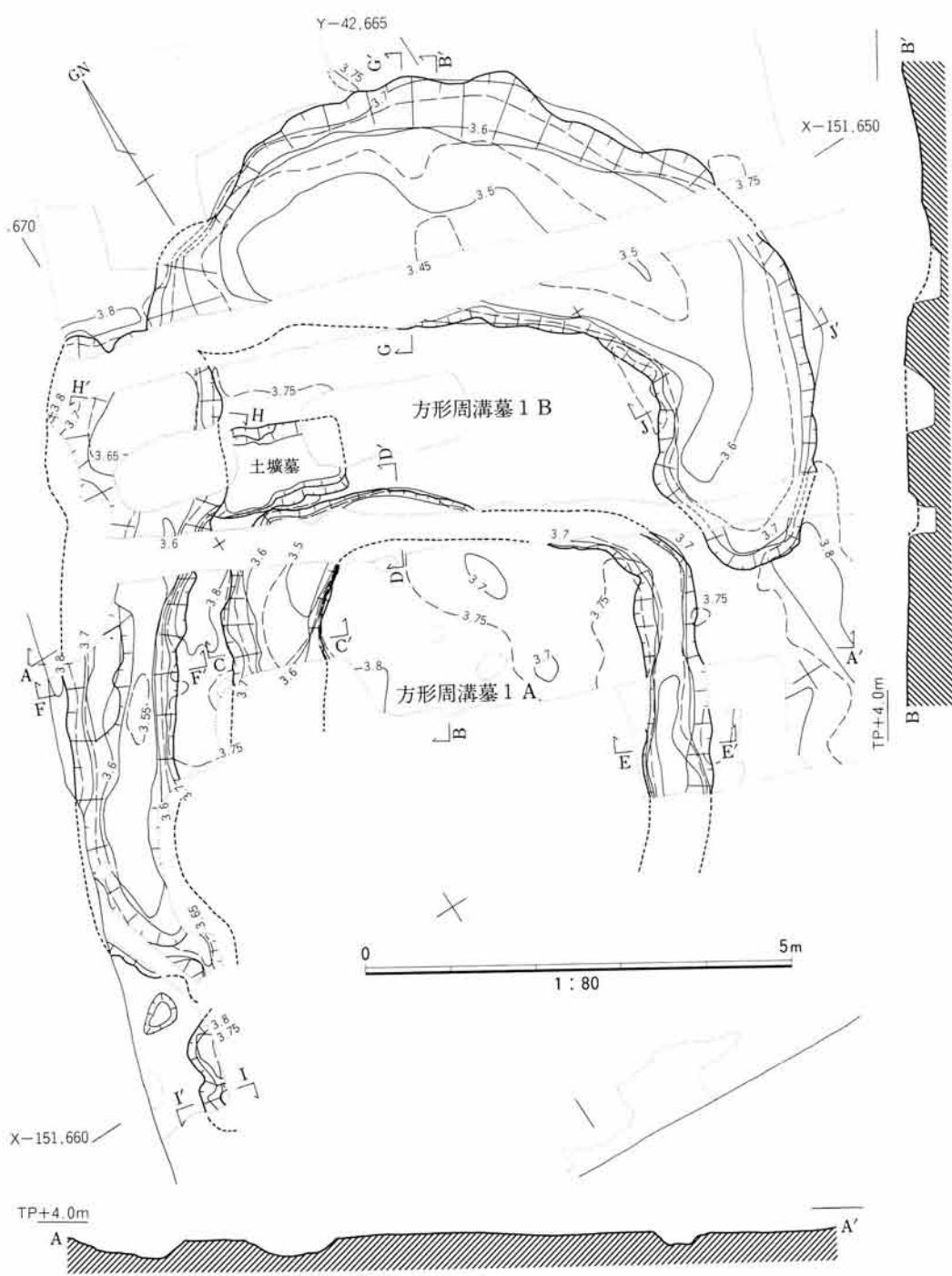


図183 方形周溝墓1実測図

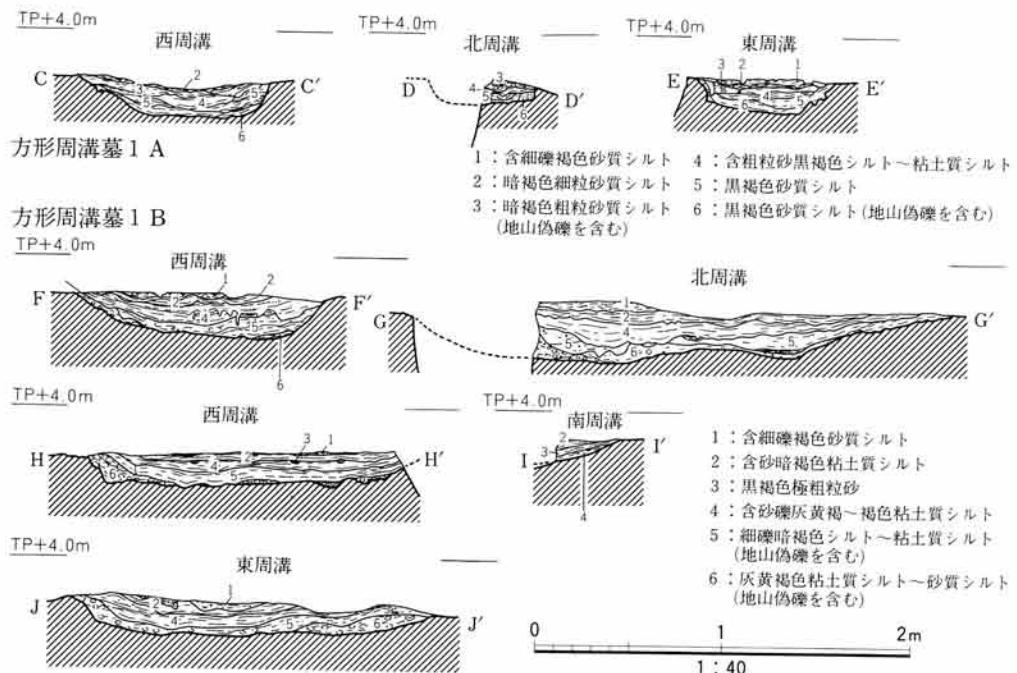


図184 方形周溝墓 1周溝断面図

以下には、墳丘側から多量の地山の偽礫が流れ落ちた状況が認められた。さらに、最上部に比較的大きな地山の偽礫が散在する状況が認められた。

周溝墓1Aの墳丘の規模(裾で計測)は、東西4.1m、南北3m以上である。後述する周溝墓1Bの南周溝より南側には延びないと考えられるので、墳丘の平面形はほぼ正方形と推定される。主軸は北で約35°東に振っている。

遺物はすべて小破片で、散漫に出土したにすぎない。壺底部824、甕821～823があり、畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階に属する。出土状況から墓に伴うものとはいいがたいが、周溝の埋没年代推定の参考としうる。

周溝墓1B 北周溝から連続する東周溝が約2mで途切れ、その南側は2.5m以上にわたって周溝がない。南周溝も調査区の南壁際の地山の残存状況からみて、東側へは回り込んでいなかつたと考えられる。北西と南西のコーナーは途切れるように見えるが、遺構面の削平を考慮すれば周溝は連続し、底が浅くなっていた程度である。周溝の断面形は内側周溝と同様である。規模は、東周溝が幅1.8m、深さ0.2m、北周溝が幅2.9m、深さ0.35m、西周溝が幅1.5m、深さ0.25m、南周溝が幅1m以上、深さ0.15m以上である。北周溝が特に大きい。掘削深度は墳丘の各辺中央に相対する場所が深く、特に北周溝で顕著である。ま

た、先述したようにコーナー部分は浅い。内側周溝との間隔は、北辺で2.0m、西辺で0.4mで、東辺・南辺ではこれらよりも近接すると思われる。

埋土は6層に細分され(図184)、4層以下が周溝の機能時堆積層である。6層には墳丘側から多量の地山の偽礫が流れ落ちた状況が認められた。また、6層の最下部には地山の偽礫がかなり多い部分があり、加工時形成層に当るかもしれない。2層が水成の暗色帶であることや遺物の出土状況から考えて、1～3層は周溝の埋没がかなり進んだ後に時間をかけて堆積したものと推測される。後述する方形周溝墓3や隣接調査地では、周溝内に堆積した最上部から須恵器が出土することが明らかで、かなり後の時代まで周溝が凹地として残っていたと考えられる。なお、内側周溝とは堆積パターンは共通するものの、地山の偽礫の含まれ方や暗色帶の層位などにおいて相違点があり、併存していなかったと考えら

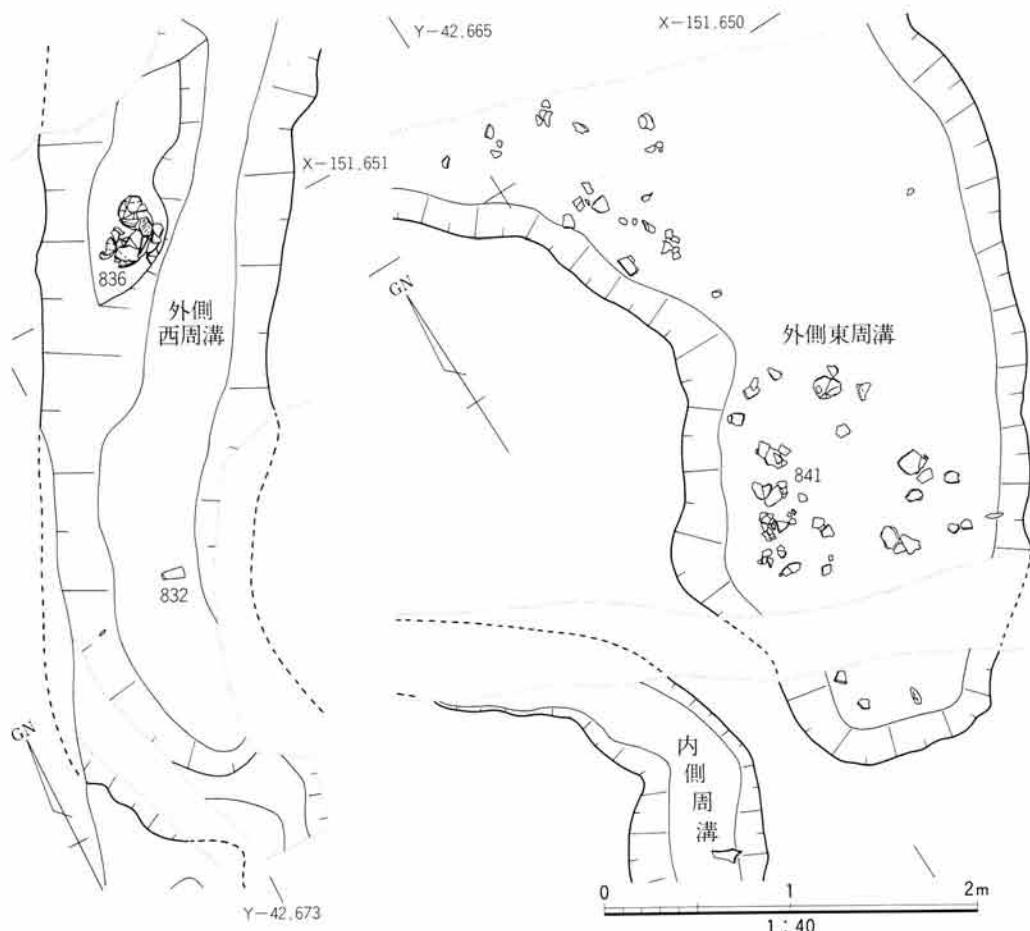


図185 方形周溝墓1周溝内遺物出土状況

れる。

周溝墓1Bの推定される墳丘の規模と形態は、東西6.0m、南北8.0mの長方形である。主軸は北で約35°東に振っており、周溝墓1Aと一致する。

遺物は5層と6層の境界付近から多く出土した(図185、図版28)。墓に伴うと考えられるものには、西周溝5層上面で出土した広口壺836と鉢832と、北東コーナーにおいて墳丘側から転落したような状況で4層上面から出土した広口壺841がある。836・841は無文の壺で、短く立上がる頸部から外反する口縁部をもつ。畿内第Ⅲ様式新段階に属する。832は口径6.8cm、器高11.3cmのコップ状の器形で、鉢と仮に呼んでおく。これらは胎土・焼成・色調が近似している。また、836の胴下部・832の底部は焼成後に外面から穿孔されている。

このほかの遺物は、北周溝では広口壺825～827、鉢828、蓋829、甕830・831、石鎌811が出土した。層位は828が1層、811・829～831が2層、827が2～4層、825・826が4層

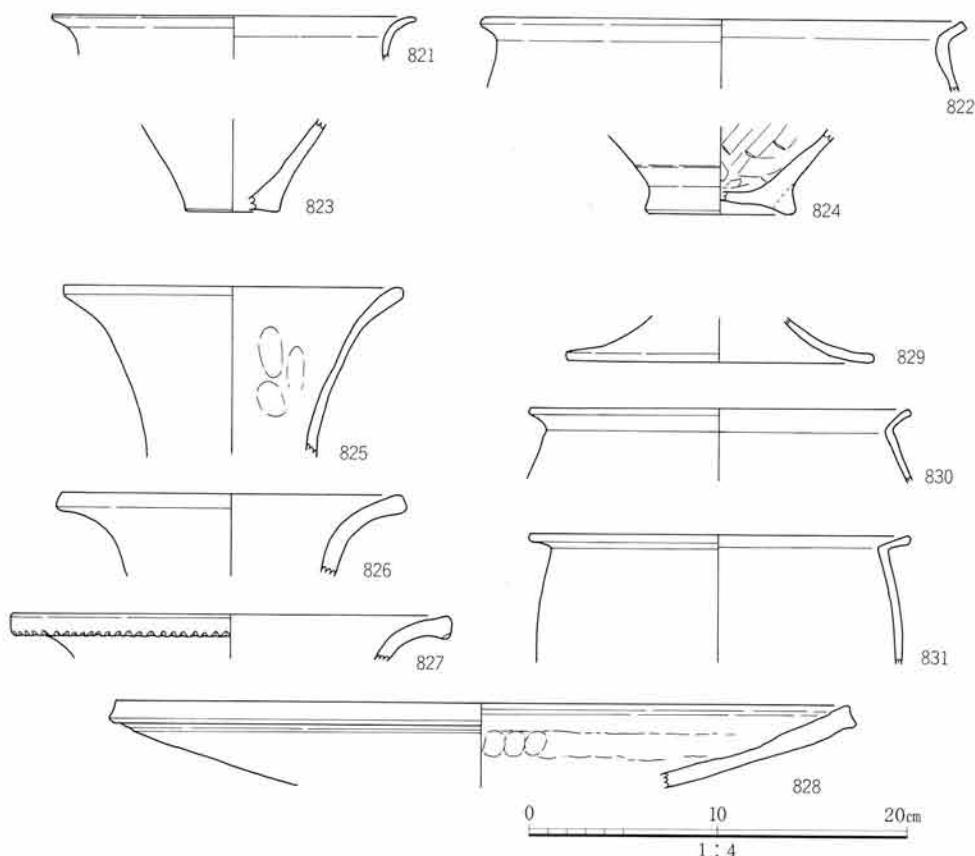


図186 方形周溝墓1出土遺物(1)
周溝墓1A(821～824)、周溝墓1B北周溝(825～831)

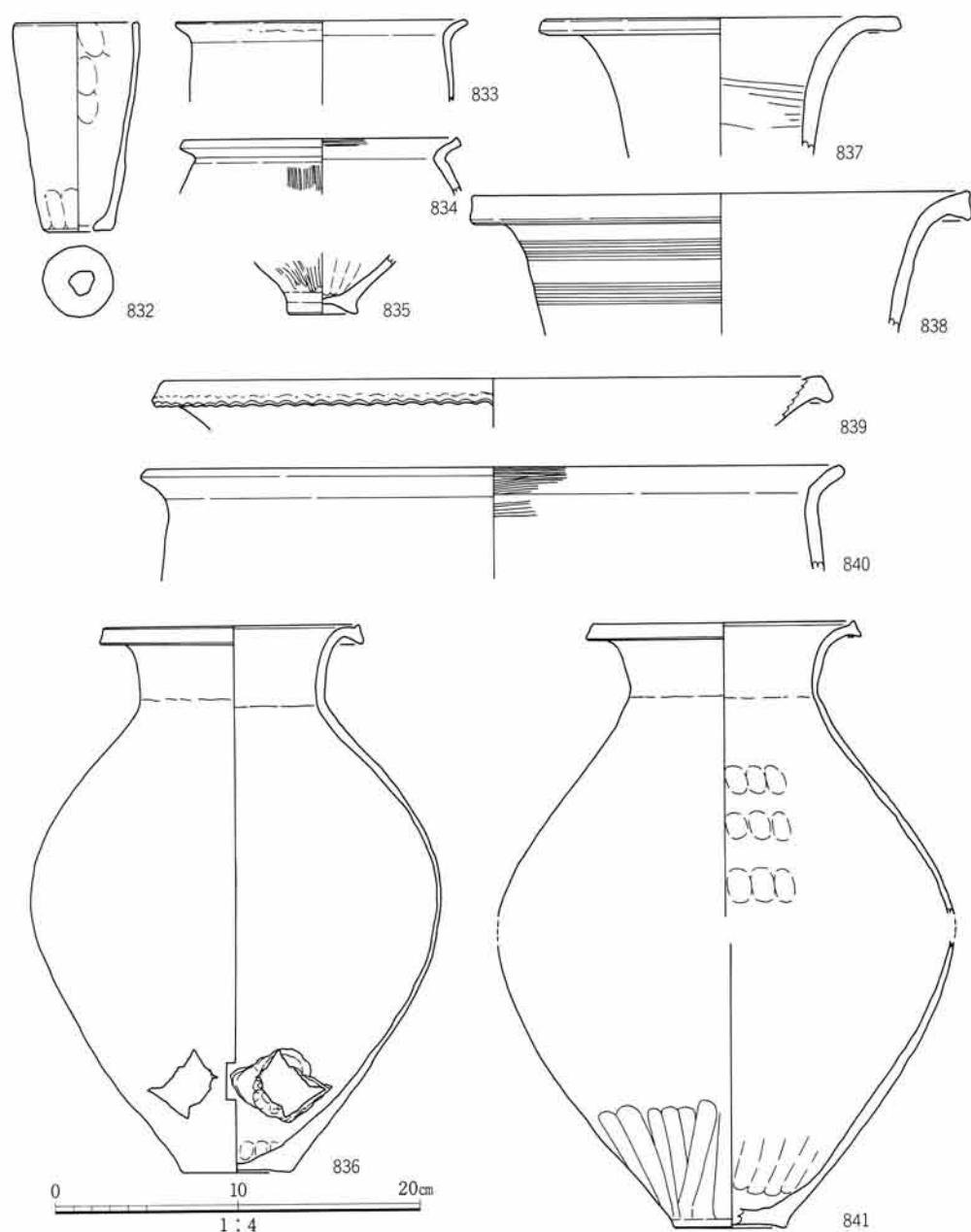


图187 方形周沟墓1出土遗物(2)
周沟墓1B西周沟(832~836)、同东周沟(837~841)

上面である。西周溝では壺底部835、甕833・834、石錐815が出土した。833が2層、815が5層上面から出土したほかは、層位は特定できない。東周溝では広口壺837～839、甕840、石槍817が出土した。層位は817・839・840が4層上面、837が5層上面、838は特定できない。これらの土器はおおむね畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階に属する。

石器遺物は811は凸基有茎式石鎌で、茎の先端を欠損する。縦長の体部をもち、作用部の側縁は外湾ぎみである。作用部は鋸歯縁となる。茎部は、残存する部分で直線的に伸びる傾向を示しており、その点で有茎尖頭器とは形態的に異なる。残存長4.85cm、幅2.00cm、厚さ0.70cm、重量5.9gである。815は頭部と錐部の長さの比率は2：1で、平面形態上の両者の境界は明確である。錐部は幅広で、その先端が丸みをもつ。長さ4.40cm、幅1.65cm、厚さ0.45cm、重量3.1gである。817は切先部分が丸みをもっており、未完成品の可能性がある。基部は凸基式であるが、左右で整った対称形にはなっていない。側縁左右の中央部付近に比較的大きな剥離面を見ることができ、その部分で側縁がわずかに抉れている。長さ9.15cm、幅3.70cm、厚さ1.25cm、重量33.7gである。

方形周溝墓2(図180・188～190) I区北西部に位置する。2条の溝が周溝墓1と類似した位置関係で検出され、北では調査範囲外に延び、南では東に折れ曲っていた。東半は攪乱によって壊されていたが、北隣で行われたKW96-13次調査で溝の延長部分が確認され、方形に巡ることが推定できるようになったので、方形周溝墓と判断した。よって、今回調査したのは西南コーナー付近にあたる。東側を内側周溝、西側を外側周溝と呼称し記載する。

内側周溝は幅0.6m、深さ0.2mである。断面形は浅いU字形で、やや墳丘側の傾斜が急である。底のレベルはほぼ一定で、東側に屈曲した先へも延びる気配がある。埋土は4層に細分され、最下部には地山の偽礫が多く含まれる。弥生土器細片と石鎌812が出土したが、土器には時期を確定できるものがない。812は凸基有茎式石鎌の完形品である。全体として紡錘形をしており、厚手である。体部と茎部の境界は不明確で、両者の断面形もともに菱形である。弥生時代中期の石鎌とみられる。長さ3.60cm、幅1.30cm、厚さ0.85cm、重量3.4gである。

外側周溝は幅1.8m、深さ0.25mで、内側周溝に比べて規模が大きい。断面形状は類似する。また、底のレベルは北壁際

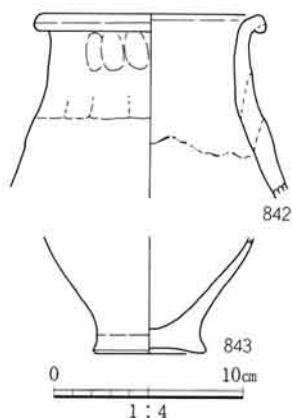


図188 方形周溝墓2出土遺物

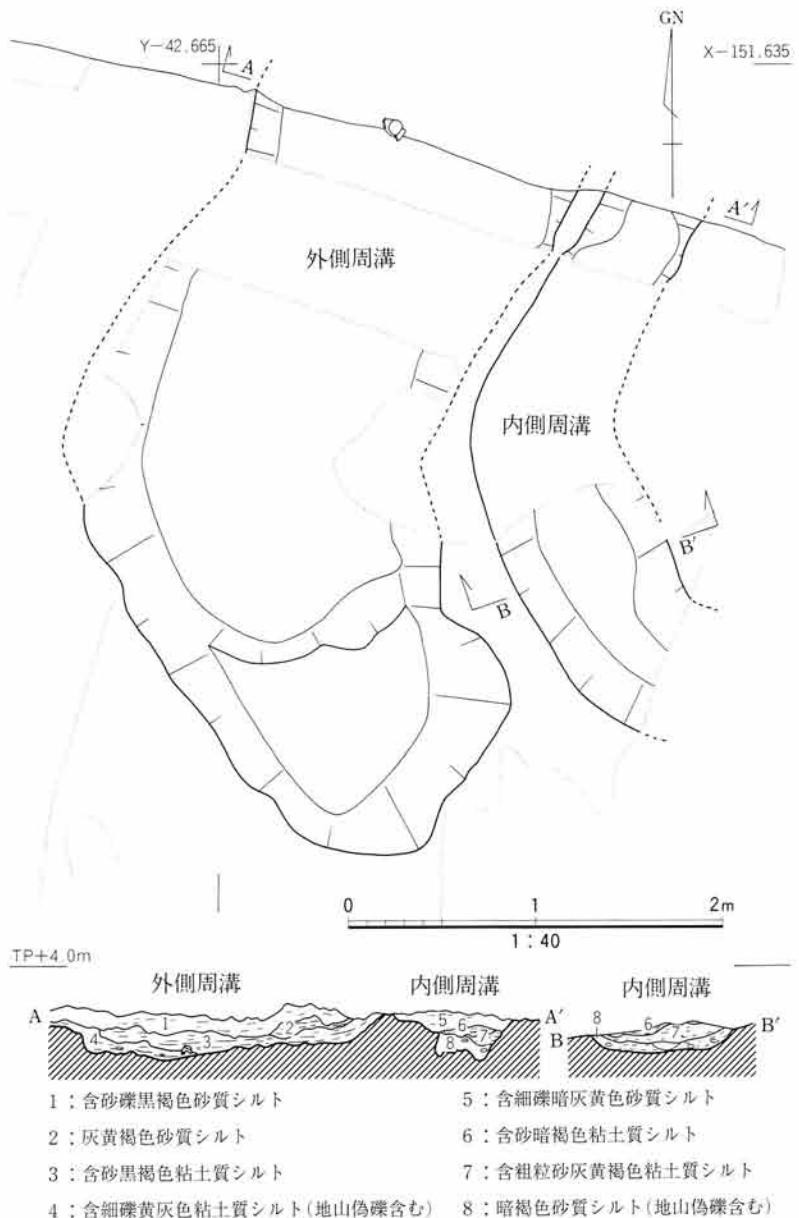


図189 方形周溝墓2実測図

がもっとも深く、南側では浅くなり、少し東側に屈曲したあたりで途切れる。埋土は4層に細分され、最下部には地山の偽礫が含まれる。遺物は3・4層から、壺842・甕底部843が出土した。842は畿内第Ⅱ様式の特徴を備えている。

周溝墓2の復元と検討は小結で行う。

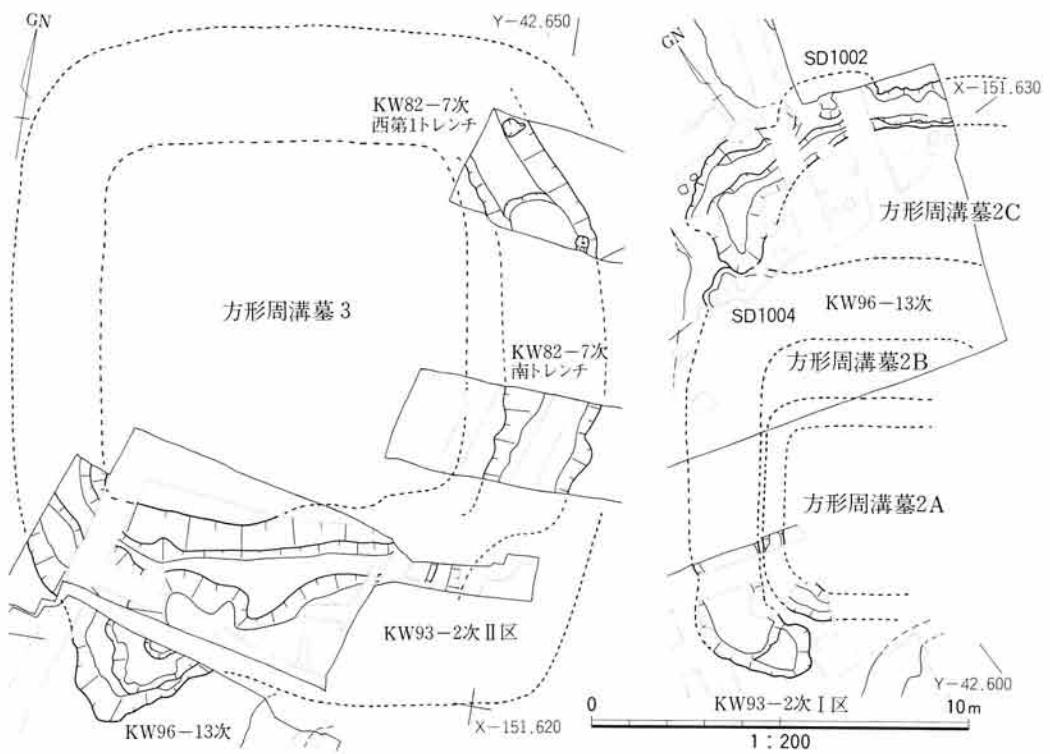


図190 方形周溝墓2・3の推定復元図

方形周溝墓3(図180・190~194) II区に位置する。当初、東西方向の大きな溝の一部と考えたが、東西の拡張によっていずれも北側に曲ることがわかり、方形周溝墓と判断した。大半が調査範囲外であったが、KW82-7次・KW96-13次調査において、この連続部分と考えられる遺構が確認され、これらの成果をもとに復元したのが図190(左)である。復元にあたって基準としたのは、本調査で確認した墳丘の南裾のラインである。南東コーナー付近がややいびつなのは、後世の削平によって周溝が底部わずかだけしか遺存していなかったことによる。これによれば、墳丘の東西長は裾で11.5m前後となる。主軸の方位は北で7°前後西に振る。周溝の規模は、南周溝が幅5.2m、深さ0.45m、東周溝が幅2.0m以上、深さ0.4m、西周溝が幅2.4m以上、深さ0.3mである。削平を考慮すれば、東周溝はあと2mくらい広かったと考えられる。底のレベルは南・東周溝では中央部が段差をもつて深くなっている。

周溝内の埋土は7層に細分される(図191)。2層・4層が暗色帶で、後者の下面で直径0.8m、深さ0.15mの落込みSX01が検出された。最下位の7層は加工時形成層と思われ、ラミナが認められず、地山の偽礫を特に墳丘裾に多く含む。遺物は6層上面に特に多く、

/ Y-42, 650

/ .655

/ .660

GN

+ X-151, 615

TP+3.8m N
0 1 : 80 5m

- 1 : 含細繖暗灰黃色砂質シルト(桑津5層)
2 : 含粗粒砂オリーブ黑色砂質シルト(同溝理土1層)
3 : 黒褐色粘土質シルト(同2層)
4 : 含細繖暗オリーブ褐色砂質シルト(同3層)
5 : オリーブ黑色粘土質シルト(同4層)
6 : 含粗粒砂暗オリーブ色粘土質シルト(同5層)
7 : 含粗粒砂灰黃色粘土質シルト(同6層)
8 : 細繖砂質シルト質粗粒砂(同7層)

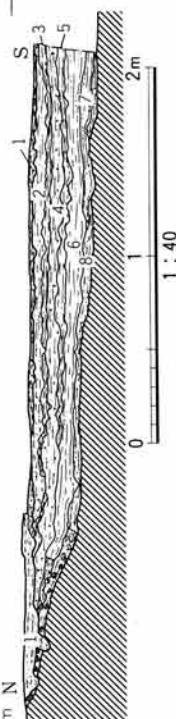


図191 方形周溝墓3実測図

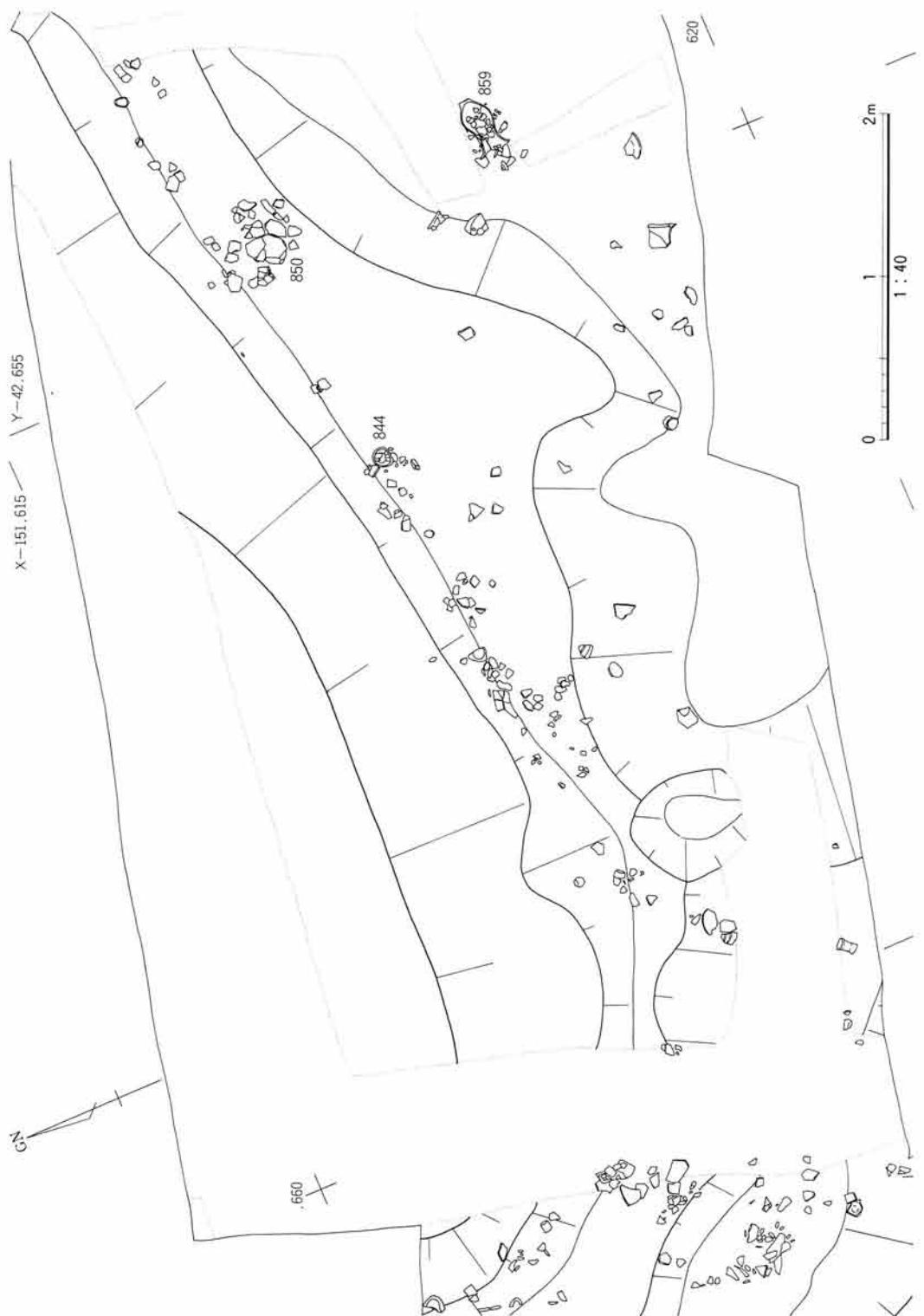


図192 方形周溝墓3周溝内遺物出土状況

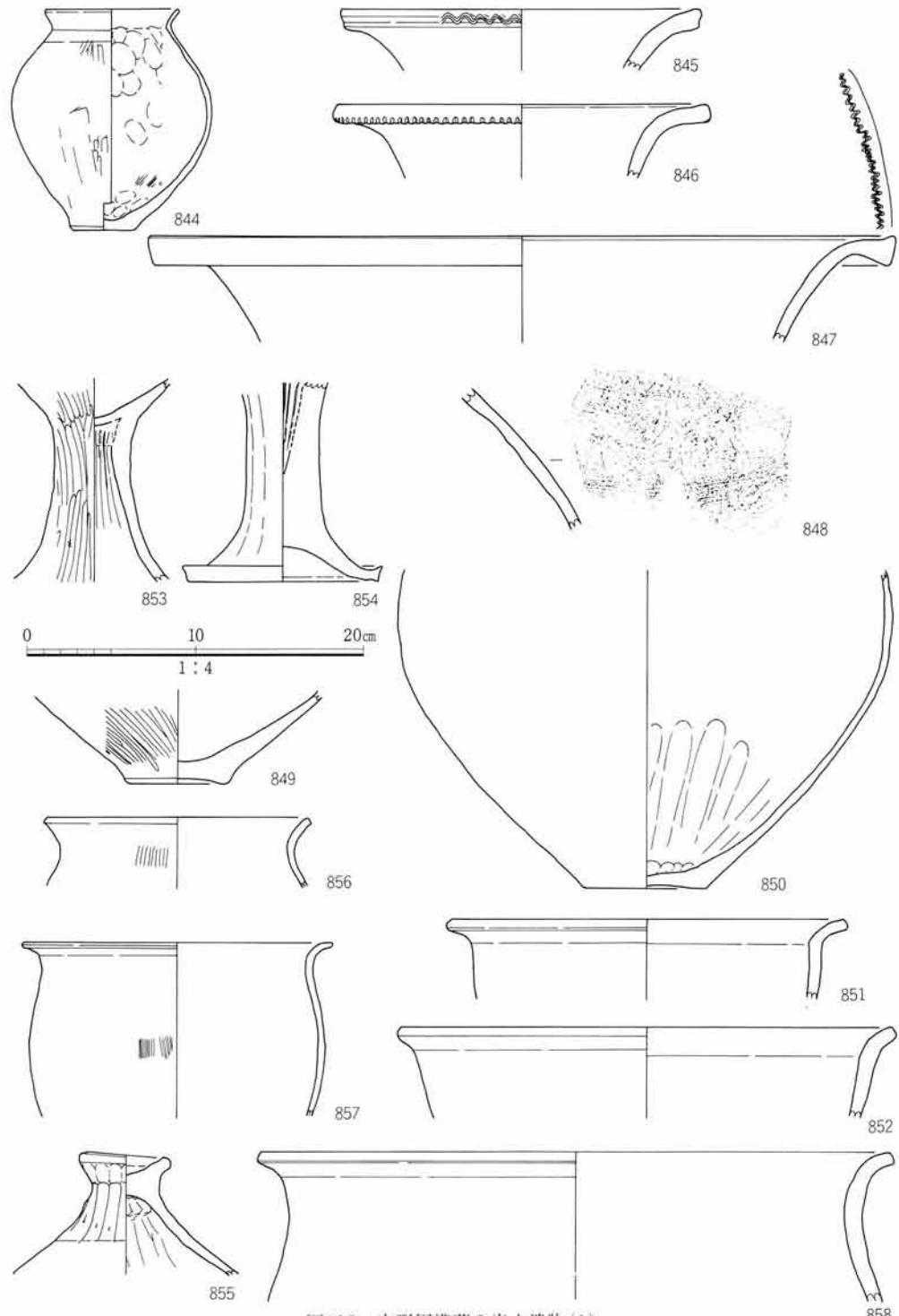


図193 方形周溝墓3出土遺物(1)

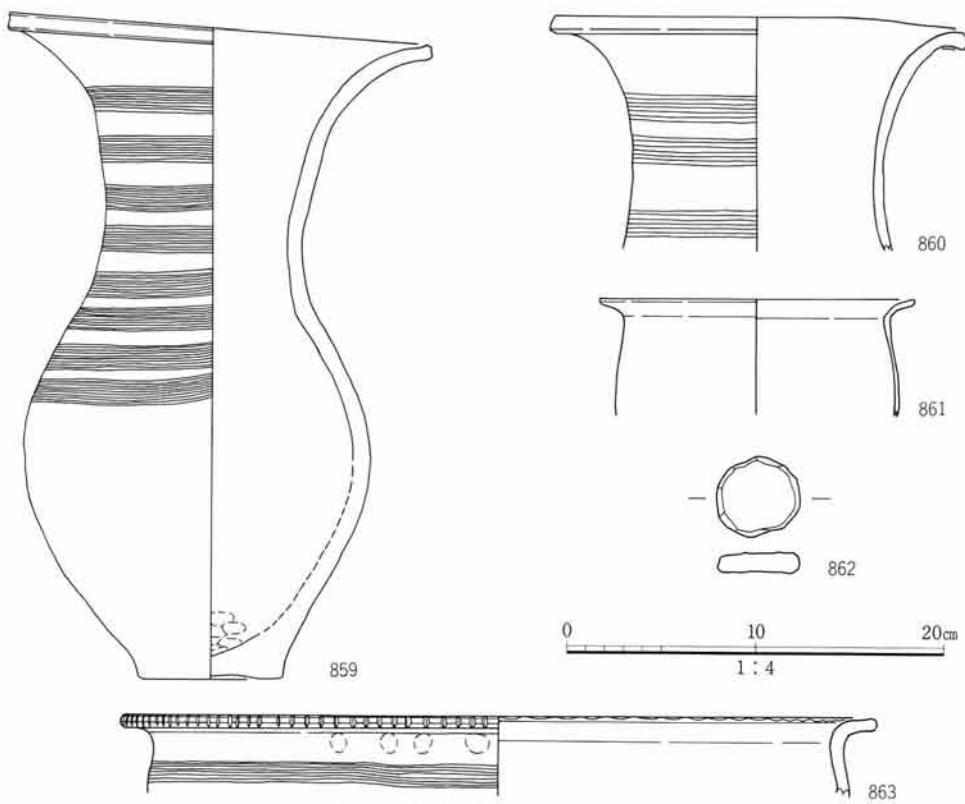


図194 方形周溝墓3出土遺物(2)

墳丘から転落したような状況が墳丘裾に沿ってみられた(図192)。また、7層上面では広口壺859が横転した状態で南周溝中央から出土した(図版30)。

遺物は、広口壺844～847・859・860、壺胴部848、壺底部849・850、鉢851・852、高杯853・854、蓋855、甕856～858・861・863、土器片円板862、石鎌809、石錐814がある。出土層位は851・853が2～5層、859が7層上面、860～862が7層、863が8層上面で、ほかはすべて6層上面である。844は縦長で球形の胴部に短く外反する口縁部をもつ無文の小型広口壺である。外面調整は胴部上半がヘラミガキ、下半がヘラケズリあるいはヘラミガキ、内面は下半がタテハケ、上半がユビオサエである。頸部から口縁部にかけては強いヨコナデが施され、頸部がやや鋭く屈曲する。長頸の広口壺の口縁端部は拡張されるものが少ない。859・860は広口長頸壺で、頸部から胴部上半に櫛描直線文が施される。頸部径が胴部最大径・口径に比して太いのが特徴である。鉢851・852は口縁が屈曲し外反する形態のものである。高杯854は脚柱部上半にシボリメが観察されるので、杯底は854と同様に円盤充填によるものと考えられるが、下半は中実状である。脚柱部は円筒状で通常の

高杯とは異なるので、台付鉢の脚かもしれない。甕は口径が胴部最大径を若干上回るものが多く、口縁部も屈曲せず緩く外反するものがめだつ。858は大型の甕で、口縁部は太い頸部からやや屈曲して外反し、その端部には面をもつ。863は層位的にもっとも古い大型の甕である。口縁部がほぼ水平に折れ曲り、その端部に刻み目、頸部に櫛描直線文が施される。色調は褐色で、胎土に雲母と角閃石が多く含まれる。形態・施文には播磨地域の影響がみられるが、生駒西麓産の胎土で製作された甕である。第Ⅱ様式でも古い段階のものと思われる。土器片円板は厚さ1.1cmの土器破片を円形に打ち欠いて作られたものである。重量は24.2g。周囲が研磨されているかどうか明らかではない。以上の土器の時期は、6層より上位は畿内第Ⅱ様式を主体とし、第Ⅲ様式を少量含む。高杯や小型広口壺が新しい要素

であろう。これに対し、6層以下は第Ⅱ様式に限定され、863が年代の上限を示すものといえる。

石器遺物は809は基部側を欠損しているが、やや細身の凸基無茎式石鏸と思われる。作用部は鋸歯縁となっている。残存長3.30cm、幅1.25cm、厚さ0.35cm、重量1.4gである。弥生時代中期のものと形態から推測される。814は石錐で頭部の上端を欠損している。平面形態上、頭部と錐部は明確に区分されており、断面形態も頭部側が扁平なのに対して、錐部では五角形になっている。残存長2.70cm、幅1.40cm、厚さ0.30cm、重量1.0gである。

土壤墓(図195・196) I区南西部、方形周溝墓1の北部内・外両周溝に挟まれた位置にある。北西隅と北東隅を攪乱によって壊されているが、平面形は長辺1.6m、短辺1.0mの

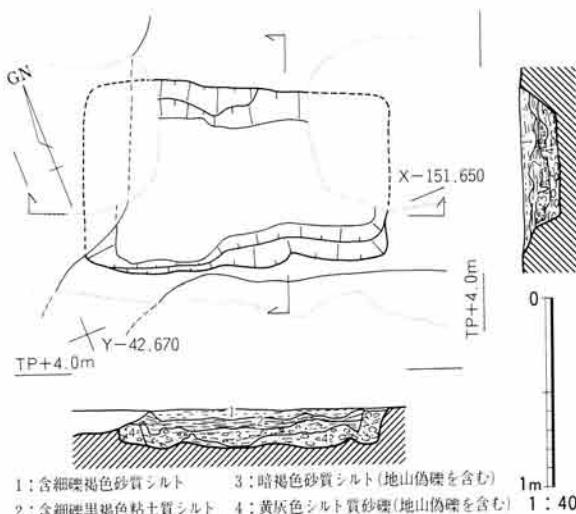


図195 土壌墓実測図

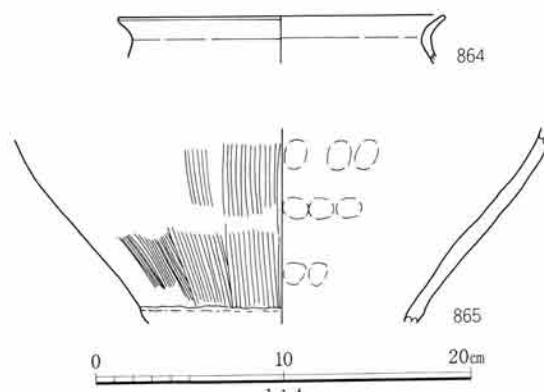


図196 土壌墓出土遺物

長方形で、深さは0.2mであった。壁の立上がりは急で、底面は平坦である。埋土は4層に分けられる。各層には地山と掘削時の表土層と考えられる暗褐色砂質シルトの偽礫が多少なりとも含まれ、特に4層で顕著で、これらは人為的に埋められたものと考えられる。以上の特徴から、土壙墓と考えられた。また、3層には壁から10cm位のところで立上がっていいる状況がみられ、木棺が納められていた可能性もある。ほかの遺構との前後関係は、周溝墓1の外側西周溝が本遺構を切っていることから、これよりも古い。内側周溝との関係は削平を受けていて不明である。しかし、本遺構と方形周溝墓1の主軸方向は近似するので、両者には関連があるものと考えられる。遺物は破片のみで、甕の口縁部864と底部865がある。864は畿内第II様式的な技法で作られている。865は粗いタテハケが施されている。

SD01(図197～199) I区北西部、周溝墓1と2の間に位置する。東で若干北に湾曲する東西方向の溝である。最大幅約2.0m、深さ0.3mである。西半分の幅が広く、東半の幅は約半分になる。その境には南側から浅い落込みが取付く。底面は西から東へ緩く下降する。埋土は5層に細分され、2層と5層はラミナが認められる粗粒な水成層である。全体的に砂礫を多く含むことがほかの遺構埋土と異なる。遺物は3層上面および層中に多く含まれ、すべて破片の状態であった。

遺物は広口壺873・875・878～881・888・889、細頸壺870、直口壺882、無頸壺866、壺胴部867・890、壺底部886、甕868・869・871・872・874・876・877・883～885、甕底部887・891、紡錘車892がある。出土層位は、866～869が1層、871・872が1～2層、

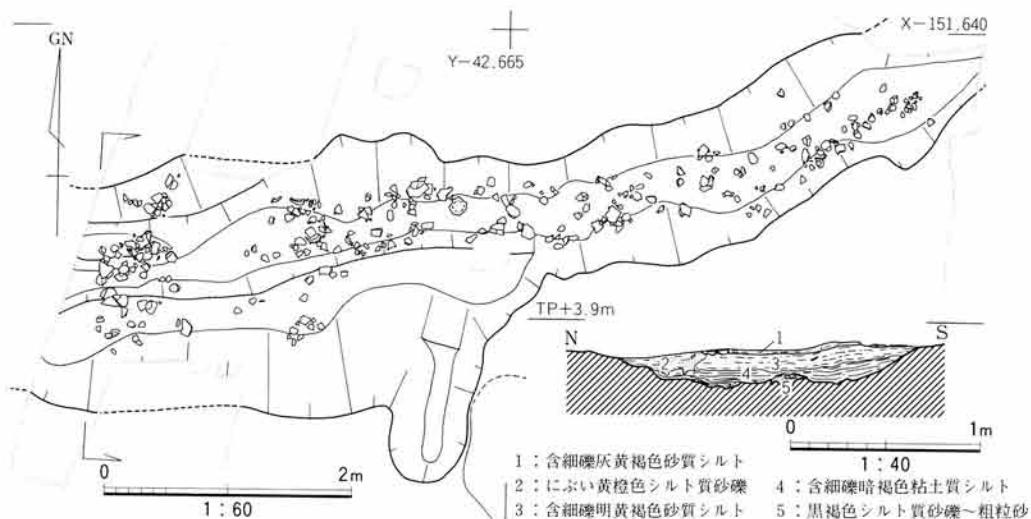


図197 SD01遺物出土状況および断面図

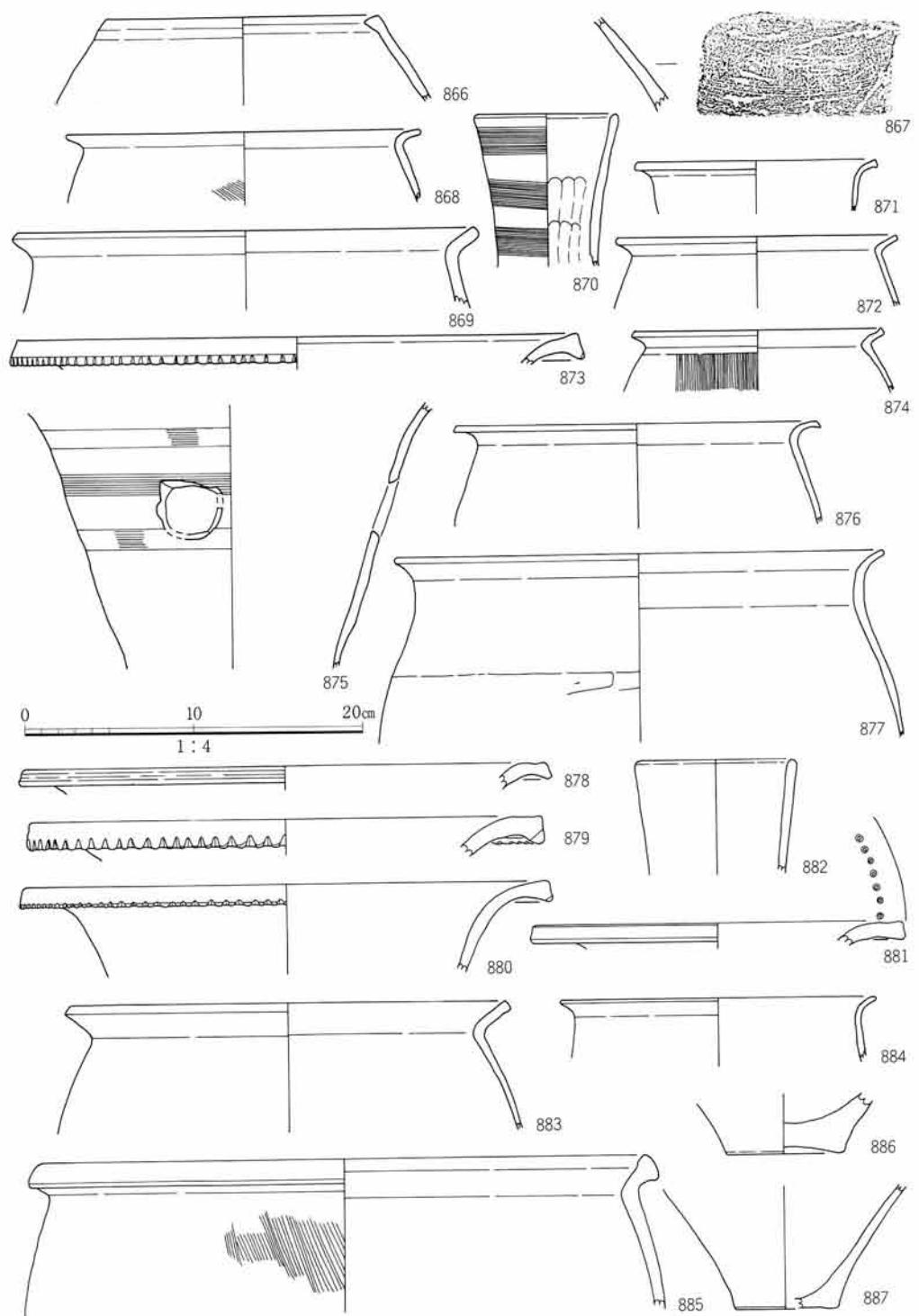


図198 SD01出土遺物(1)

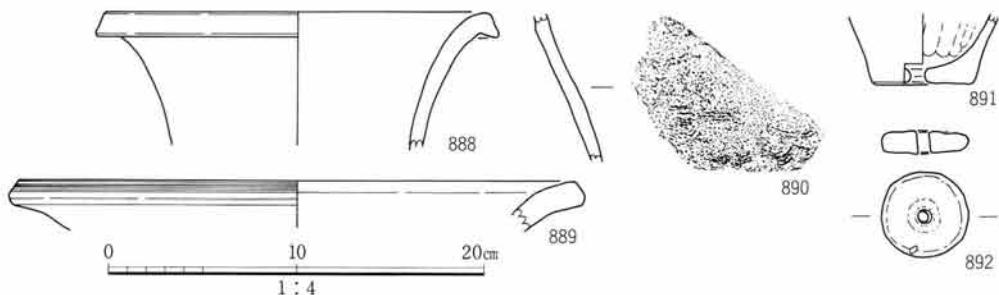


図199 SD01出土遺物(2)

870・873～877が3層上面、878～887が3層、888～892が4層である。広口壺は口縁端部を下方に拡張して面をもつものが多く、873・879・880の端部下端には刻み目が、881の口縁内面には竹管文が、889の端部には櫛描直線文が施されている。889と壺底部886の胎土には角閃石が含まれ、生駒西麓産の胎土といえる。875の頸部には内側からの焼成後の穿孔が認められた。無頸壺は内傾する口縁の端部がやや肥厚する。直口壺882の胎土には結晶片岩粒が多く含まれることから、紀伊産の胎土と考えられる。これらの壺に施文された櫛描文は直線文・波状文があり、870の直線文は浅く直線的である。甕は口縁が「く」の字状に折り曲げられるもの872・874・883・885、緩く折り曲げられるもの868・869・876、緩く外反するもの871・877・884がある。前二者では口径より胴部最大径が上回る。「く」の字状の口縁の甕は口縁部がヨコナデ調整で、胴部外面には874・885でタテハケが認められた。877には結晶片岩が多く含まれ、胴部の調整が横方向のヘラケズリである紀伊形甕である。[土井孝之1989]の紀伊Ⅱ-2様式と考えられる。また、大型の885の口縁端部は上下に拡張される。紡錘車892は直径4.6cm、厚さ1.2cm、重さ31.3gで、土器破片を転用したものではない。角閃石が多く含まれるので、生駒西麓産の胎土といえる。これらの土器は畿内第Ⅱ様式の新しい段階から第Ⅲ様式古段階に位置づけられる。870・872～874・883などが新しい要素で、上層ほど多くなる傾向が認められる。

SX02 SD01の南側に位置する落込みである。長径2.5m、短径1.2m、深さ0.05mである。埋土は暗褐色砂質シルトで、弥生土器の細片がわずかに含まれる。遺構の性格は不明である。

b. 古代(図177・200)

掘立柱建物1棟と柱穴3基が桑津5層下面で検出された。本層の分布範囲外にあった柱穴についてもよく似た埋土のものは同一と見なした。遺物は土師器細片のみなので、これらの遺構の詳しい時期は不明である。

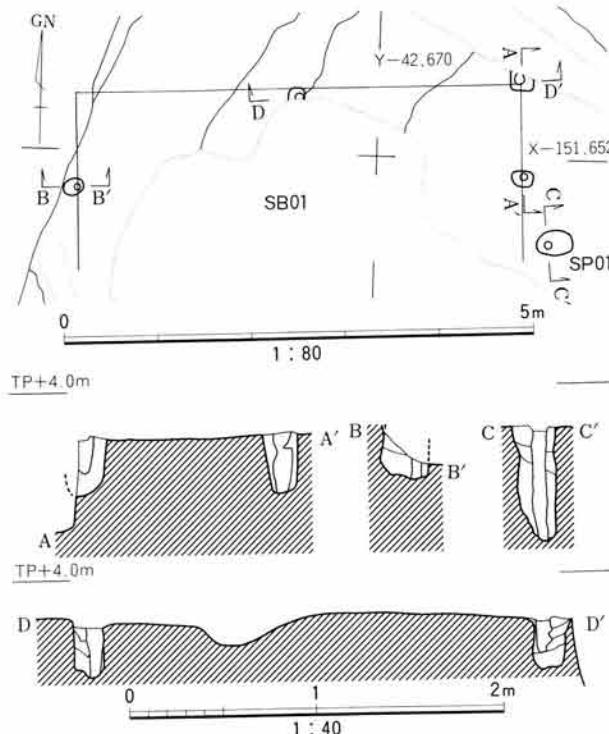


図200 SB01・SP01実測図

SB01 I区西南部に位置する。4基の柱穴から復元した、桁行4.8m(2間)、梁行1.05m(1間)以上の掘立柱建物である。棟方位はW3°Sにとっている。掘形の平面形は直径15~20cmの円形で、深さ30cmで、底の標高はほぼ揃っている。柱痕跡の直径は7~10cmある。

SP01~03 SP01・02はI区西南で、SP03はI区北西で検出した。このうちSP01はSB01に近接し、掘形の平面形や規模は類似するが、深さが約60cmあった。

c. 中・近世(図177・201・202、図版26)

井戸1基を桑津2層基底面で、溝状遺構4条、耕作による段を2個所、性格不明のピット群などを桑津2層下面で検出した。

SE01(図201・202) I区西端で検出したが、大半は調査区外に延びる。直径2.4m以上、深さ1m以上である。埋土には地山の偽礫が多く含まれていた。井戸側の有無は不明である。瓦質土器羽釜893が出土した。15世紀代のものと考えられる。

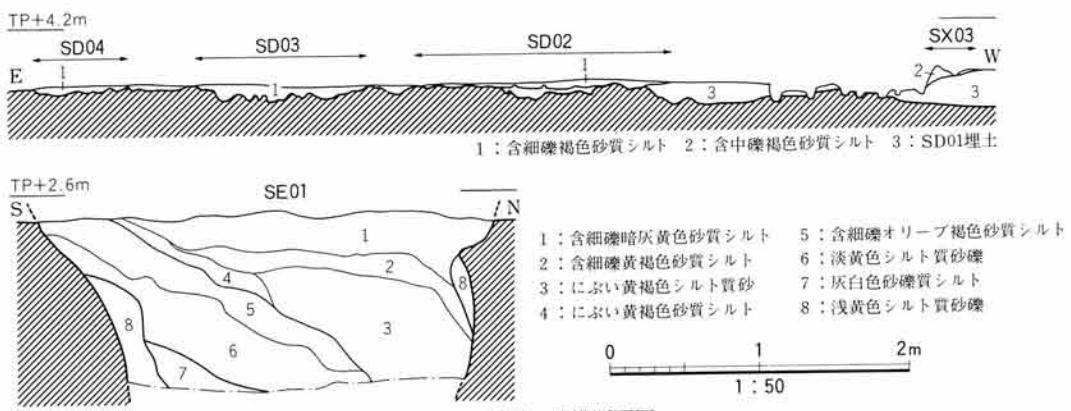


図201 中・近世の遺構断面図

SD02~05(図177・201)

SD05のみがⅡ区に位置する。桑津2層を埋土とする南北方向の溝状の遺構である。幅0.6~1.8m、

深さ0.1m前後である。幅が広いSD02・03の底面には、幅15cmの犁溝群や踏込み痕が顕著にみられたので、耕作に関連するものと考えられる。近世陶磁器・瓦器などが出土した。

SX03・04 溝状遺構に並行する西から東へ約10cm下る段である。前者はⅠ区、後者はⅡ区に位置する。やはり耕作に伴うものであろう。

ピット群 Ⅰ区北部に位置する。柱痕跡を有するのは1基のみであった。

d. 近代(図177・203~205、図版26・86・87)

土取り穴群 Ⅰ区東半の桑津1層基底面で検出した。採土範囲を条里方向に沿って設定し、東西を短冊状に5等分して、その単位を基本として採土作業を繰返したものと推定できる。地山層下層の淡黄色シルト質砂礫~中砂が採取の目的となったと考えられる。地元の古老によると、大正時代頃までこの辺りには「白土屋」という土砂採掘販売業者がいて、水田や畑で白い土を採掘して売っていたそうである。

遺物は明治時代の陶磁器や釘・石炭のほかに、弥生土器や石器が大量に採集された。大半が一つの穴から見つかったこと、器表面の状態が良好なことから推測すると、これらは、その付近にかつて存在した弥生時代の井戸のような遺構に由来するのではないかと思われる。以下、おもな遺物について紹介する。

広口壺は口縁端部を折り曲げて垂下させるもの894、口縁端部を上下に若干拡張させるもの895、有段口縁のもの896がある。894の胎土には角閃石が多く含まれ、生駒西麓産の胎土といえる。897・898は頸部下端に指頭圧痕突帯文をもつ。また、897は胴部にタタキメがみられる。899はあらいタテハケ調整の後、櫛描直線文を7帯以上施す。

無頸壺900は縦長の胴部をもつものと思われ、口縁端部に沈線が施される。

鉢には口縁が直口のもの901・902、段状口縁のもの903~906、短く外反するもの907がある。直口するものの口縁部には901では凹線文、902では刻み目が入る貼付け突帯が施される。段状口縁のものでは、903は口縁部・胴部とも簾状文、904は胴部に斜格子沈線、905は口縁端部に刻み目、胴部に櫛描列点文が施される。

高杯は直口口縁のもの908・909と水平口縁のもの910・911がある。大型の908には口縁部に凹線文が施される。912~916は脚部の破片で、杯底は円盤充填法により作られている。

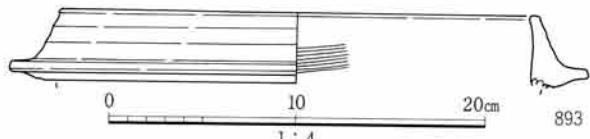


図202 SE01出土遺物

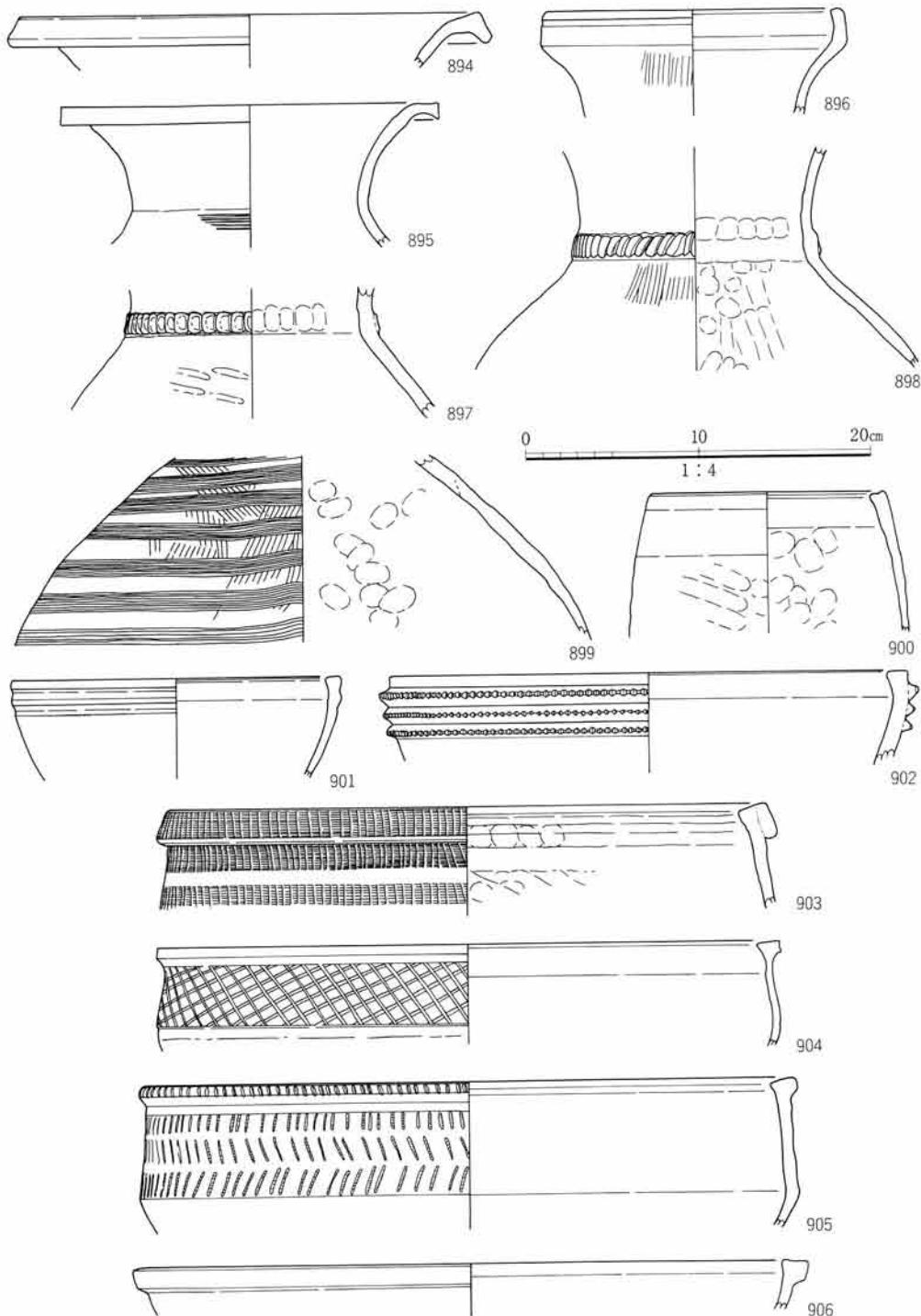


図203 土取り穴群出土遺物(1)

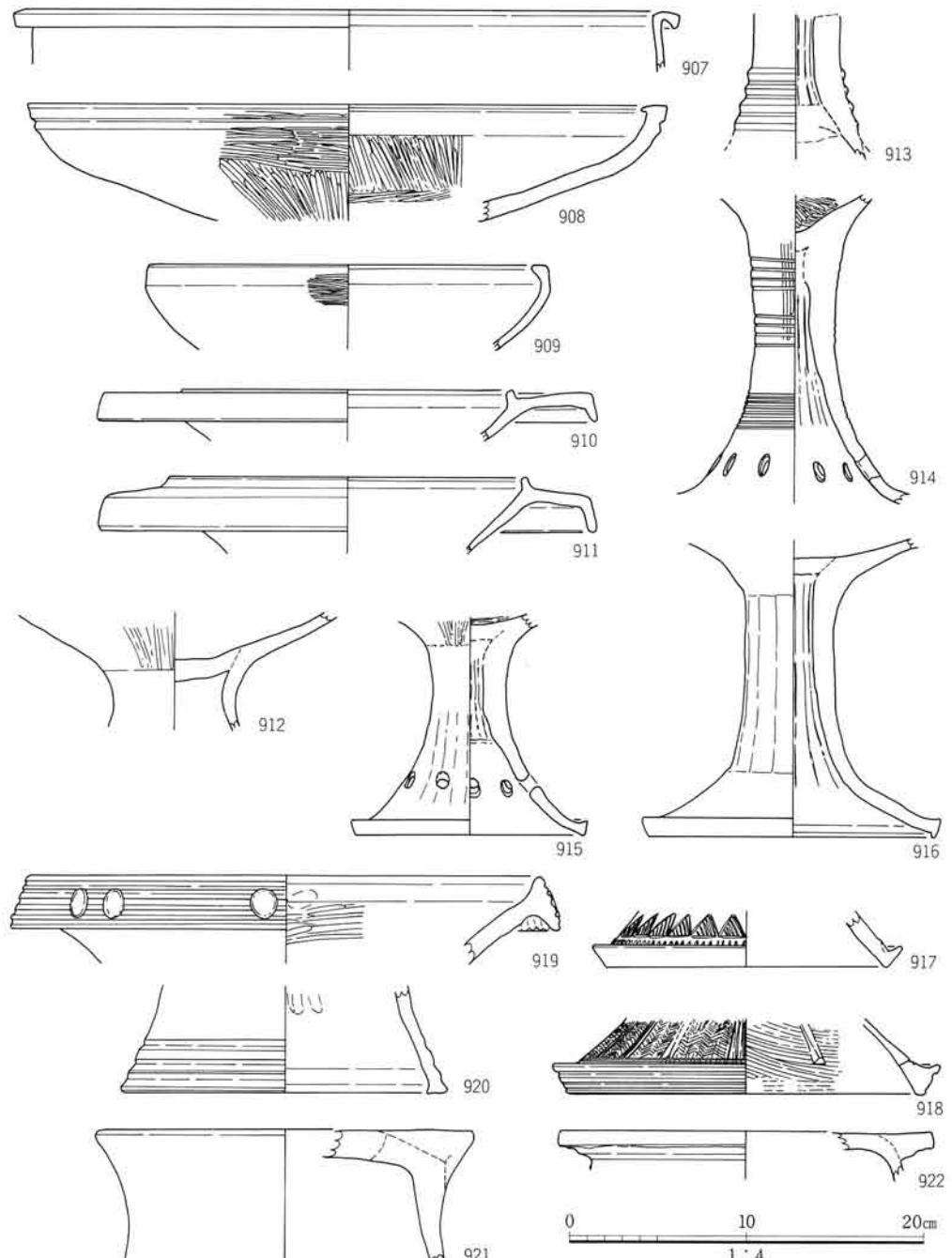


図204 土取り穴群出土遺物(2)

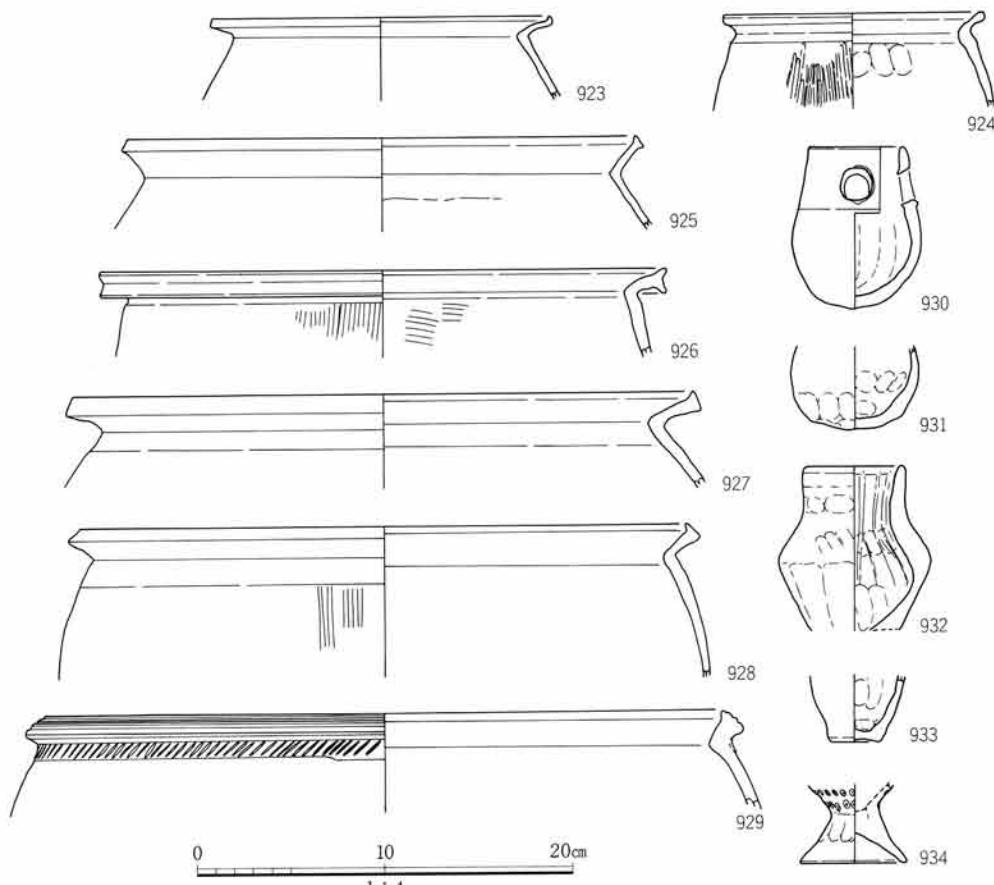


図205 土取り穴群出土遺物(3)

913は脚部と杯部の境に貼付け突帯文が4条以上巡らされている。淀川以北の地域の影響を受けたものと思われる。914は脚部が細長く、4~7本からなる多条沈線文帯が3帯、脚下部に縦位の杏仁形のスカシ孔が施される。杯部内面には分割したヘラミガキ調整が施され、脚部内面にはシボリメ、外面には縦方向のヘラミガキが認められる。形態的には播磨地域の影響を受けた土器と推定されるが、胎土には2mm以下の角閃石が多量に含まれ、生駒西麓産の胎土で作られたものといえる(註1)。917は脚端部の破片で、鋸歯文と刺突文が施される。

器台は大型の919・920と、小型の918がある。919は口縁を上下に大きく拡張し、端部は凹線文・円形浮文で加飾される。918は矢羽根形文で飾られる器台の脚部である。直線的に開く脚は、外面は縦方向のていねいなヘラミガキ、内面は粗い板ナデ調整である。脚端部には2条の凹線文が巡らされる。文様の施文順序は、まず3本の沈線からなる沈線文帯を

縦方向に18区画に分割するように施文する。次に各区画に細かな矢羽根形文を施す。2対が基本と思われるが、1対半や2対半もみられる。そして、脚端部側に水平方向に2本沈線を巡らす。最後に、18個所の沈線文帯のうち6個所にスカシ孔を開ける。スカシ孔の上半は不明だが、下端が水平方向の沈線で画されるので、縦長の三角形のスカシ孔と推測される。これらの施文は非常に鋭い工具で行われており、金属器ではないかと推測される。色調は明赤褐色で、長石・チャートの細粒砂を含む精良な胎土である。東部瀬戸内地域の影響を受けた土器と思われる。

台形土器921・922は上端部が外側に突出している。

甕は口縁端部が上方につまみ上げられるもの923・925～928がめだつ。929は上下に拡張された口縁端部に凹線文、頸部には退化した突帯に刺突文が施される。924は「く」の字状に外反する口縁部をもつ小型甕で、胴部外面はヘラミガキ調整である。

飯蛸壺930・931はコップ形を呈し、口縁部に直径1.1cmの枝縄を通す孔が開けられている。ミニチュア土器には壺932・933、台付鉢934がある。934の胴部には竹管文が施されている。

これらの土器はおおむね畿内第IV様式に相当するものである。二次的な遊離資料であるが、他地域の影響を受けた土器が複数含まれることは注目されよう。

816(図180)は打製石剣の体部で、側縁がほぼ最大幅に達する辺りで折れている。作用部側縁は緩やかな曲線を描く。横断面は整った紡錘形を呈する。残存長5.70cm、幅2.90cm、厚さ0.95cm、重量15.9gである。

3) 小結

今回の調査では、方形周溝墓をはじめとする弥生時代中期の遺構のほか、中世の溝・近代の土取り穴などを発見し、当地域の歴史的な変遷を考える上で基礎的な資料を得ることができた。そのうち、弥生時代中期の遺構について検討し、まとめとしたい。

i) 方形周溝墓1と土壙墓について

まず、方形周溝墓1Aと1Bについて検討する。土器は内側周溝から出土したものは非常に断片的であるが、外側周溝より新しい要素はなく、内側周溝のほうが古いと考えられる。そして、外側周溝は周溝墓1Aを取囲むように、かつ主軸方向を一致させて掘られていること、外側東周溝の途切れる部分が周溝墓1Aの東北コーナーに一致することから、外側周溝は周溝墓1Aを意識して掘られたものと推定される。また、周溝墓1Aと1Bの墳丘裾の間隔

は北側が2.5m、西側が1.7m、東側は0.1m、南側は不明であるが、西側と同等か若干短いと思われる。これによると、もっとも大きなスペースは北側にあり、次いで、西側、南側で、これらに対して東側にはほとんどない。そして、このスペースの面積と、これに相応する外側周溝の規模、つまりそこから得られた土量はほぼ対応すると思われる。以上から、外側周溝掘削の主目的はこのスペースへの盛土、すなわち周溝墓1Aから周溝墓1Bへの拡張にあったと考えたい。拡張は2ないし3方向へ向って行われ、特に北側に重点が置かれている。東側の状況は、外側東周溝と内側東周溝の墳丘側の検出ラインがほぼ一直線上にあること、外側南周溝は東辺へ及ばないと考えられることから、周溝墓1Aの東側法面を修正する程度で済ませたと推測される。埋積が進んでいた内側東周溝は埋められたのかもしれない。いずれにせよ、周溝墓1Bの東辺中央には幅広い周溝がなかったと思われる。

また、土壙墓と方形周溝墓1との新旧については、土壙墓が周溝墓1Bより古いことが切合の関係から判明したのみである。周溝墓1Aとの新旧関係に関する証拠はないが、周溝墓1Aのほうが先に造られたと推測される。つまり、土壙墓は周溝墓1Aに伴う周溝外の埋葬施設と推測する。両者は検出面でさえごくわずかしか離れていないので、当時は周溝の外側法面を切るような位置であったと考えられる。両者の被葬者間に階層的な格差を想定することができるのかもしれない。このような周溝外の土壙墓は、北隣するKW96-13次調査でも1基検出されている。

ii) 方形周溝墓2について

方形周溝墓2はKW96-13次の調査結果を合成すると、図190(右)のようになる。KW96-13次では外側周溝に連続すると考えられるSD1004と、この埋土を切って東側に曲るSD1002が見つかった。よって、内側周溝を加えると、周溝墓2には3つの周溝が検出されたことになる。これらの方位はN38°E前後か、この直交方向で一致する。時期はSD1002から畿内第Ⅱ様式を主体に第Ⅲ様式までの遺物が出土している。外側周溝では第Ⅱ様式と考えられる破片が出土しているが、確定的な資料ではない。内側周溝の時期はまったく不明である。しかしながら、周辺における造墓活動は第Ⅱ様式～第Ⅲ様式の期間に集中するので、三者は比較的近接した期間内におさまると考えうる。

そこで、内側周溝・外側周溝(SD1004)・SD1002は、関連性のある方形周溝墓に伴うものと考えることができよう。周溝墓は3つの姿を想定でき、内側周溝が伴う周溝墓2A、外側周溝(SD1004)が伴う周溝墓2B、SD1002が伴う周溝墓2Cである。それぞれの裾における南北長は以下のように推測される。2Aでは攪乱のため不明だが、方形周溝墓1の内側周

溝と規模が近似するので、墳丘の規模も4m前後と推測する。2Bでは周溝幅を一定と仮定すれば8m前後であろう。2Cは相対する南周溝が不明であるが、2Bの南裾との距離は13.6mである。また、それぞれの墳丘規模に応じて溝の最大幅も大きくなっているといえる。以上の諸点と方形周溝墓1の解釈から、方形周溝墓2は2A→2B→2Cの順序で、墳丘が2回にわたって拡張されたものと推測する。拡張の方法は基本的に北方へ平面的に広げるという傾向がある。2A→2Bの際には、少なくとも西側へも0.7mくらい広くなるが、方形周溝墓1に比べると、より北側に重点が置かれたと推測される。むしろ外側西周溝の掘削は必要な土量の確保に主目的があったと思われる。

このように、本調査では2基の方形周溝墓において拡張されたことが推測された。類例として、茨木市東奈良遺跡の第1号方形周溝墓(畿内第Ⅲ～第Ⅳ様式)[田代克己他編1979]、加美遺跡で近年調査された2基(第Ⅲ様式)[大庭重信・寺井誠1997]などが挙げられる。これらは古い段階の周溝墓を一方向にのみ拡張する共通性を有し、前者では約1m、後者では約2mの拡張が行われていた。今回の例も基本的には一方向に重点が置かれ、この共通性の範疇でとらえることができよう。

iii) SD01について

SD01は東北方ではKW82－7次のSD02・03(第3節参照)に繋がる可能性がある。シルト主体の堆積物を埋土とする遺構が多いなかで、各溝の埋土に共通して砂礫が卓越するからである。一方、西方では桑津小学校など居住域に関する遺構が多数検出されている範囲へ向う。溝が掘られた頃には、溝の南北両側で墓が造られたり、以前に造られたものでも墳丘の形状をまだ十分に止めていたと考えられる。また、西側の居住域においても同じ頃の活動が認められる。よって、この溝の機能は、居住域の排水を行うとともに、墓群や墓域そのものを画することであったと考えられるのではないだろうか。

以上のように、本調査は桑津遺跡の弥生時代の造墓活動や墓域の形成に関して、重要な知見をもたらしたといえる。

註)

(1)この土器について、財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 大久保徹也、寝屋川市教育委員会 濱田延充、財團法人大阪府文化財調査研究センター 三好孝一の諸氏にご教示を賜った。記して深謝の意を表する次第である。

第21節 KW94-1次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地(桑津3丁目14)は桑津遺跡の北西部に位置し、隣接するKW83-14次調査では、弥生時代の住居址に伴うと推定される数多くのピットと土壙、飛鳥時代の掘立柱建物1棟、奈良時代以降の建物6棟と溝、鎌倉時代頃と推定される南北方向の溝などが検出されている(図206)。その西のKW90-22次調査地では畿内第Ⅲ様式古段階の方形周溝墓が2基見つかっており、その成果は本書第14節に報告している。本調査地でも試掘調査の結果、当該期の遺構が存在する可能性が高いと考えられ、既設建物の基礎等の除去後、1994年4月18日より本調査に着手した。

調査区は3mの間隔をおいて北区と南区に分かれるが、両区とも現地表下約20cmで地山(標高6.6m前後)に達し、遺物包含層は残存していなかった。また、北区では調査区の約5分の4を第2次大戦時の防空壕とその掘形が占め、南区も既設建物の地下室や基礎によって調査区の3分の1程度の遺構が既に失われていた。調査ではまず表土等を除去した後、



図206 KW94-1次調査地位置図

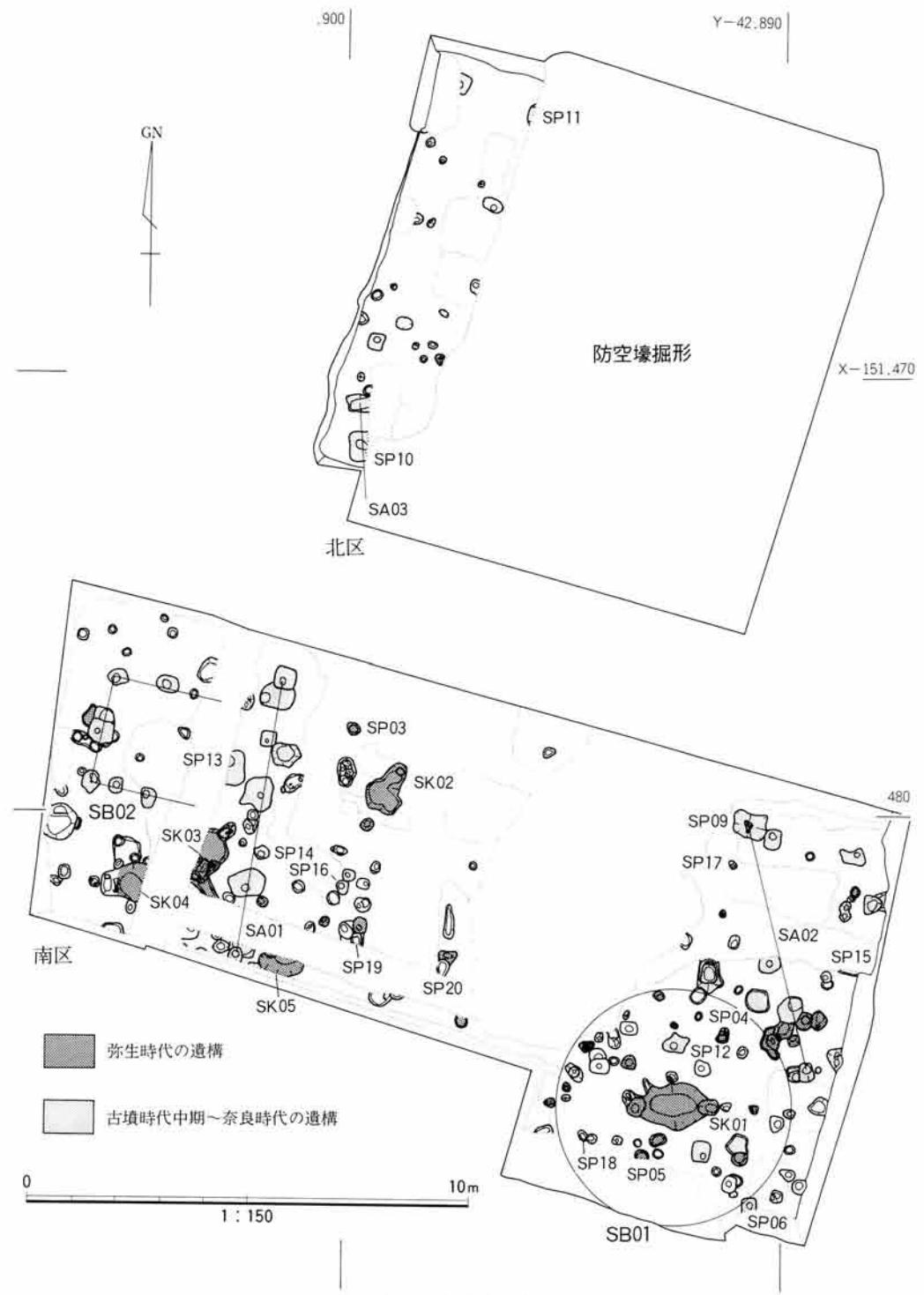


図207 調査地全体図

20日より遺構の掘削と実測にかかり、5月10日までに現場調査を終えた。調査面積は全体で177m²であった。

2) 調査結果(図版32・33・88・94・95)

i) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構と推定されるものには、竪穴住居1棟のほか多くの柱穴と土壙があり、北区に希薄で南区により集中していた(図207)。本調査の出土遺物はコンテナバット2箱分であった。個々の遺構から出土した土器は細片であるが、弥生土器は畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式のものが多い。またサヌカイト製の打製石鎌8点・石槍4点・石錐3点・クサビや剥片などのほか石庖丁の破片が出土した。

SB01 南区南東部にある竪穴住居である。周壁溝は遺存せず、正確な規模は不明であるが、円弧状に巡る柱穴をたどると直径5.5m以上の規模であったと推測される(図208)。中央に長円形の土壙SK01があり、その長軸方向の両端に2基のピットSP01・02がある。SK01の規模は長さ1.70m、幅1.05m、深さ0.35mである。

SK01からは図209-935の高杯、図210-959の石槍が出土した。高杯は杯部の破片で、口縁部にのみ櫛描直線文が施されている。石槍は作用部の先端を欠損するが、全体の形は

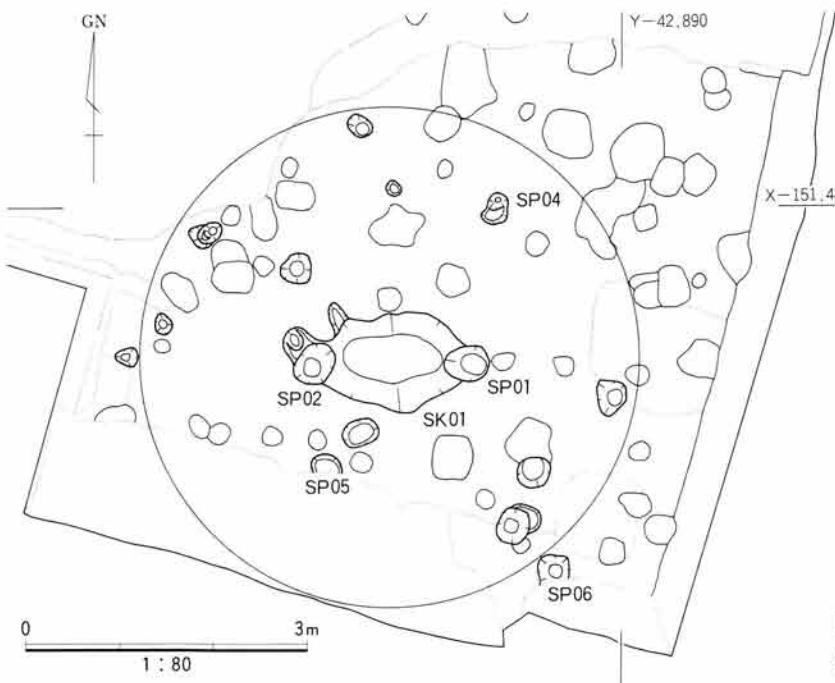


図208
SB01平面図

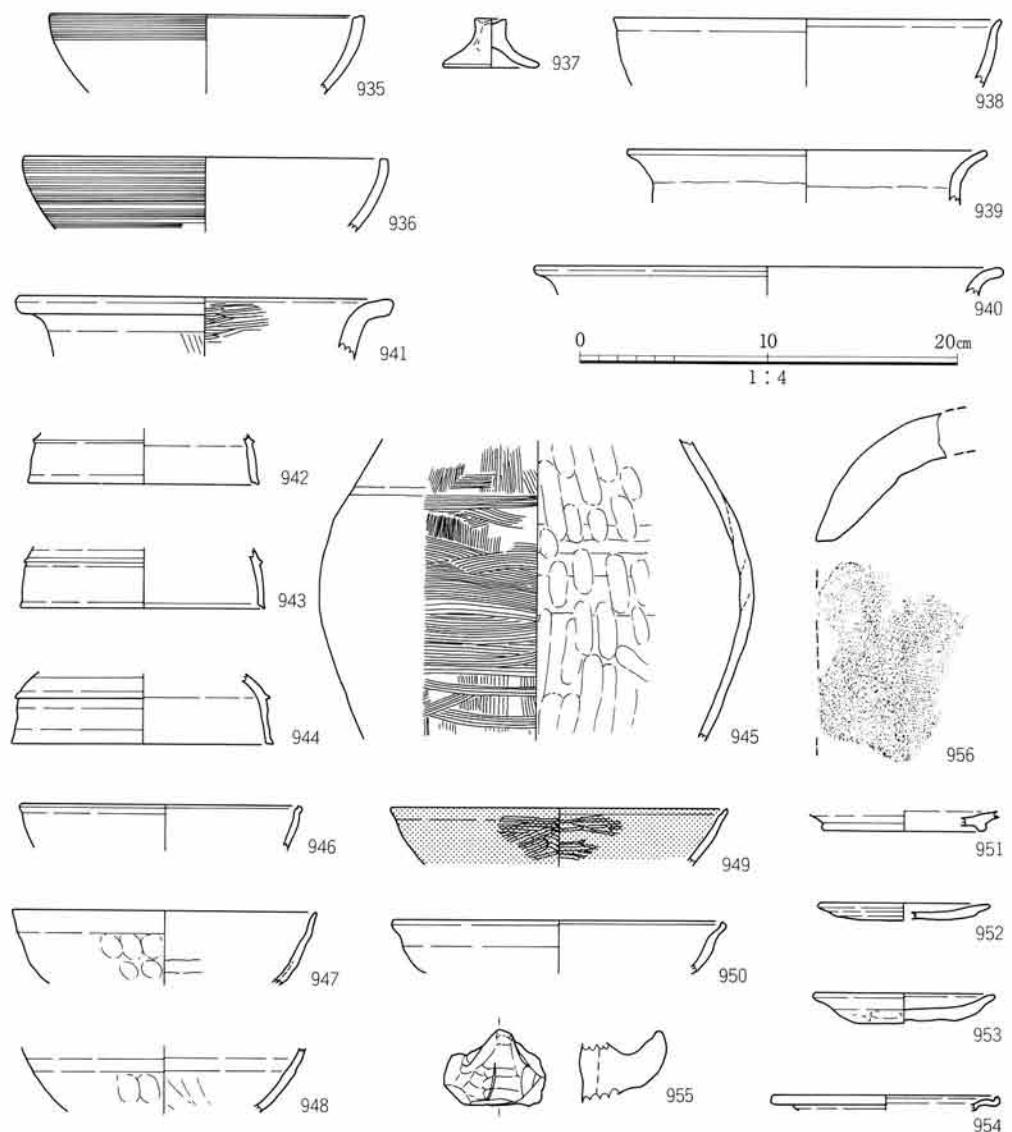


図209 各遺構出土の遺物

杏仁形を呈するものであったと思われる。基部の先端には一部に自然面が残り、未完成品であった可能性もある。残存長6.00cm、幅3.10cm、厚さ0.75cm、重量15.5gである。SP01からは甕940が出土した(図209)。口縁部は短く外反し、その先端が丸くおさめられている。SK01の高杯とともに、畿内第Ⅱ様式に属するものと思われる。

柱穴 柱穴の多くは円形で、直径25~35cmあり、深さは検出面から60~70cmに達するものもあった。柱痕跡が確認されたものでは、直径10~15cmであった。これらは削平された

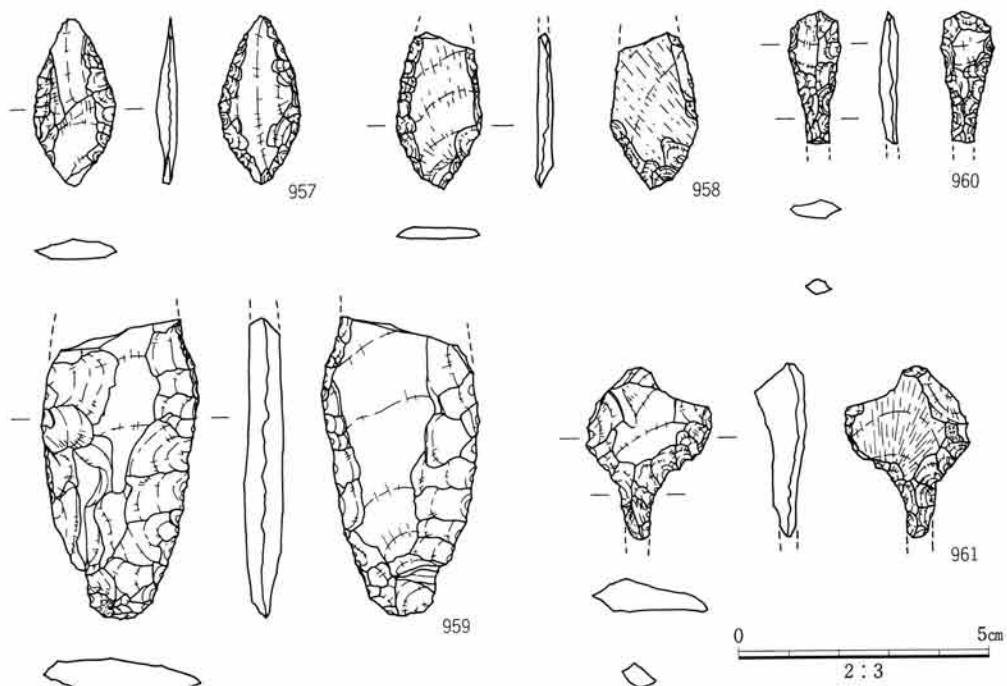


図210 石器遺物
SK01(959)、SK04(957・960)、SP08(961)、SP14(958)

竪穴住居の柱穴などと推測される。

図209-936~939が柱穴の遺物である。SP03からミニチュアの蓋937、SP04から高杯936、SP05から鉢938、SP06からは甕939が出土した。937のミニチュア蓋は一部を欠損するものの、全体の形態をうかがうことができる。細部まで実用品と同様の作りである。高杯936には体部から口縁部にかけ、櫛描直線文が隙間なく施されている。

SK02~04 南区で検出された土壙である。SK04は直径0.9m、深さ0.4mで、ほかの2基の土壙はいずれも浅いものであった。

SK04からは図210-957の石鎌、同図960の石錐が出土した。石鎌は凸基無茎式で、わずかに基部の先端を欠く。両面ともに先行剥離面を広く残している。長さ3.30cm、幅1.60cm、厚さ0.40cm、重量1.9gである。石錐は平面形態上、頭部と錐部の境が不明瞭であるが、横断面形は頭部が扁平なのに対し、錐部は菱形となっている。錐部の先端を欠損している。残存長2.60cm、幅1.00cm、厚さ0.40cm、重量1.1gである。

SK05 南区の南壁沿いにある土壙で、既設建物の基礎で一部を破壊されている。長径1.05m、短径0.45mの楕円形プランをもつと推定される。深さは22cmである。図209-941の甕口縁部が出土した。甕は緩やかに外反する頸部をもち、やや厚手である。内外面がへ

ラミガキ調整されている。

ii) 古墳～平安時代の遺構と遺物

古墳時代に関するものでは5世紀後半代の須恵器が少量出土しており、柱穴のなかにはこの時期のものも含まれると推測されるが、確実に古墳時代と特定できる遺構はなかった。

SB02 南区西部にある掘立柱建物で、2間×2間程度(南北長2.4m)の小規模な建物と推定される(図211)。掘形は長さ45～55cmの楕円形や隅丸方形で、柱痕跡は直径17～25cmあり、方向はN13°Eである。7・8世紀代の遺構と推定される。柱穴SP07から図212-962の土師器甕の口縁部が出土し、SP08からは図210-961の石錐が1点出土している。石錐は幅広の頭部と細い錐部に特徴がある。錐部の先端を欠き、残存長は3.45cm、幅2.45cm、厚さ1.05cm、重量4.7gである。

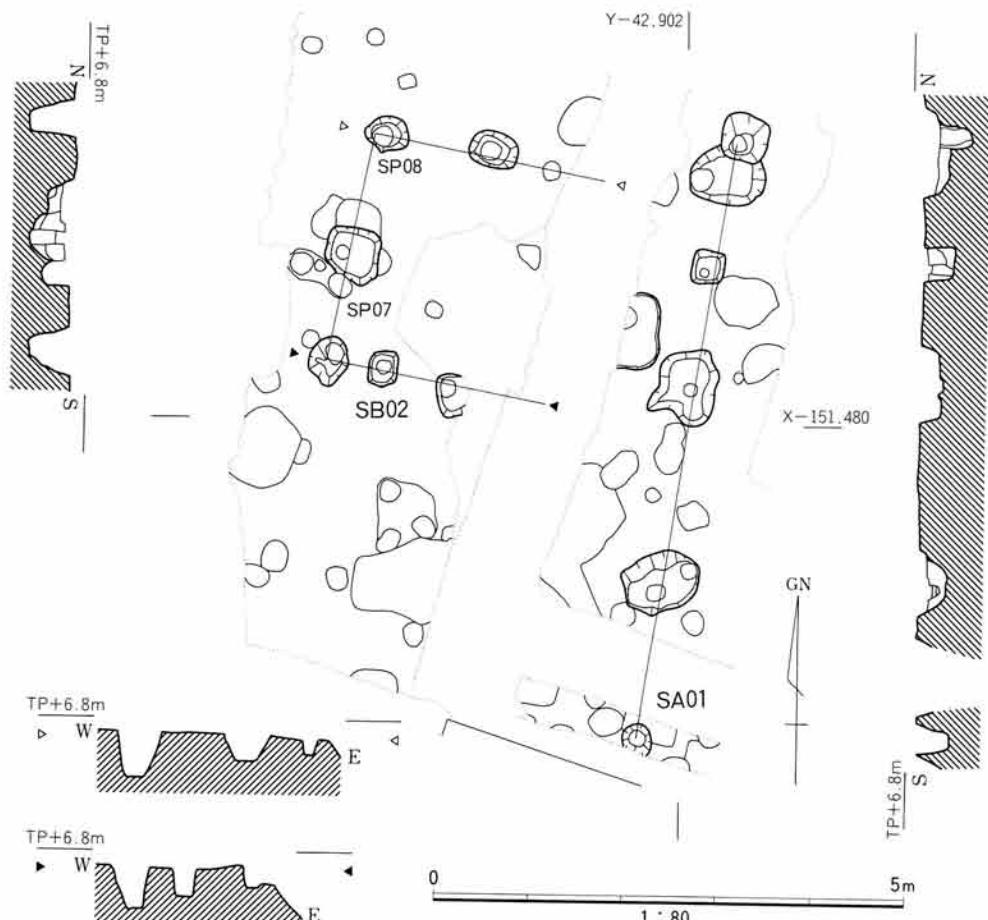


図211 SB02・SA01実測図

SA01 SB02の東には4間分(約6.0m)の柱穴が並んでおり、柵または東へ広がる建物の可能性が考えられる(図211)。柱穴は小型のもので一辺35cm、大型のもので一辺80cmあり、柱痕跡は直径13~20cmある。方向はN10°Eである。7・8世紀代の遺構と推定される。

SA02 南区の東辺には4間分(約5.8m)の柱穴が並んでおり、柵または調査区外の東へ広がる建物である可能性がある。柱列の方向はN14°Wである。8世紀代の遺構と思われる。

柱穴の一つ、SP09から図212-964・965が出土した。964は奈良時代の須恵器杯Bの底部、965は古墳時代の須恵器高杯の脚部である。高杯脚の外面にはカキメが施されている。

SA03 北区の南辺にも方形の柱穴が南北に並んでおり、柵または建物の一部と考えられる。方向はN2°Wである。出土遺物から、8世紀代の遺構と推定される。位置や方向から、東接するKW83-14次調査地で検出されているSB03の一部の可能性も考えられる。

柱穴の一つであるSP10から図212-963・966・967が出土した。966は土師器盤で、体部は浅い椀状を呈し、斜め上方に大きく開く口頸部をもつ。967は平瓦で凸面に縄タタキメがみられる。963は弥生土器の小型甕である。

柱穴 古墳時代の遺物が出土している柱穴としてSP11~14がある。SP11・12からは図209-942・943のTK47型式に属する須恵器杯蓋が出土した。須恵器杯蓋944も遺構精査中に見つかっている。SP13からは土師器の把手955が出土した。肉厚で舌状の形態をとり、背面側に1条の沈線を入れる。SP14からは土師器甕945の体部が出土しているほか、図210-958の凸基無茎式石鎌も見つかっている。石鎌は薄手で、両面に先行剥離面を広く残す。

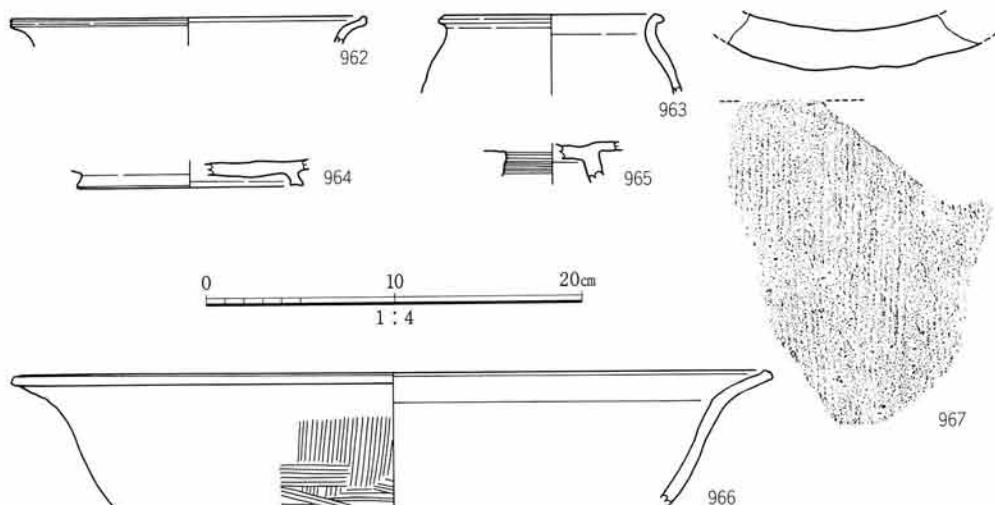


図212 SB02、SA02・03出土遺物
SB02(962)、SA02(964・965)、SA03(963・966・967)

残存長3.05cm、幅1.65cm、厚さ0.30cm、重量1.7gである。

飛鳥・奈良時代の遺物の出土した柱穴にはSP15・16がある。SP15からは土師器杯946、SP16からは凹面に布目を残す丸瓦956が出土した。図209-950の土師器杯も遺構面精査中に見つかっている。

平安時代の遺物を出土した柱穴にはSP17~20がある。SP17からは土師器椀948、土師器小皿952、黒色土器B類椀949が出土した。SP18からは須恵器杯B951、SP19からは土師器小皿953、SP20からは土師器小皿954が出土している。土師器小皿952・953は器壁が厚く、他地域産と考えられる。遺構面の精査中には図209-947の土師器椀も見つかっている。

iii) 戦跡遺構

北区では、頑強に造られた大規模な防空壕が見つかった(図213)。防空壕の通路は北でL字形に曲ってさらに続いているようであるが、その奥の構造は土砂で埋っているために不明である。通路より南側部分は内法で長さ12.2m、幅4.7m、天井の高さ2.8mの蒲鉾形で、外壁は厚さ40~50cmの鉄筋コンクリート造りとなっている。内部は廊下と4つの部屋に分かれ、これにトイレと貯水槽と考えられる円形の施設がある小部屋が附属する。また南には出入り口、北には奥へ至る通路がある。部屋には造り付けの長椅子とテーブル、電灯が備わり、通気孔が各所に配されていた[ロバート・コンデン1995]。

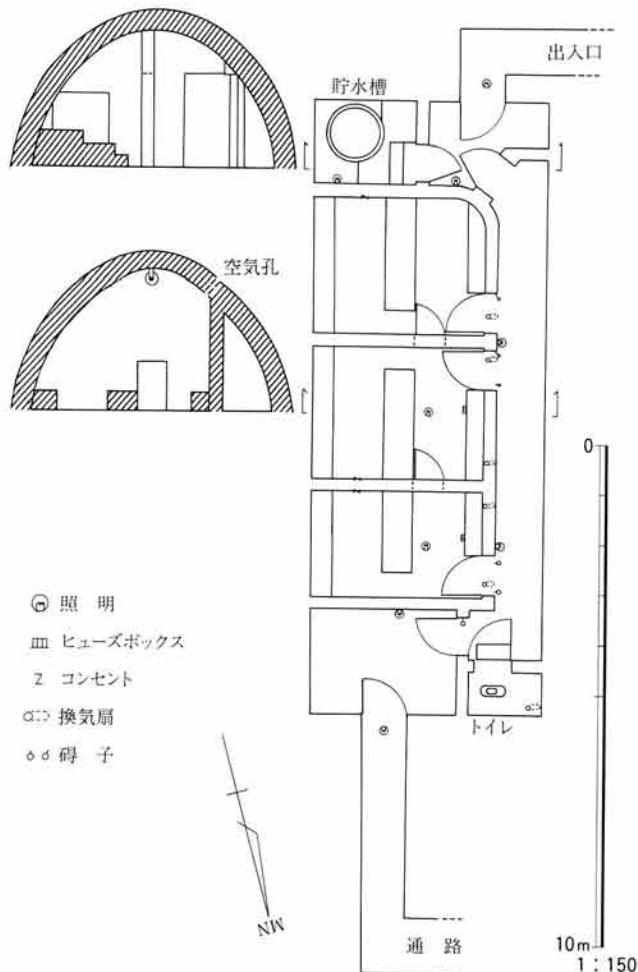


図213 防空壕略測図

3) 小結

本調査地では遺構のまとまりを十分に把握することができなかつたが、弥生時代の竪穴住居や7・8世紀の建物跡などが検出され、出土遺物から5世紀後半頃や中世の遺構の存在も想定された。このような状況は西隣のKW83-14次調査地の様相とほとんどかわらない。弥生時代に関しては、さらに西へ行ったKW90-22次調査地で方形周溝墓が存在するのに対し、KW83-14次調査地と本調査地で墓は確認されず、密集していたピットなどから居住域であったことが推定される。また7・8世紀の建物については、この付近ではほぼ北を向くものとやや東へ振るものが主体を占め、それら建物の規模はさほど大きくはない。KW83-14次調査地の知見からすると、これらは奈良時代とされ、田辺廃寺との関連が考えられる。またKW83-14次調査地には飛鳥時代のものと推定された6間×3間の規模の大きな建物SB01があり、遺跡東部のKW91-8次調査地(第16節)で見つかっている7世紀代の大型の建物群との関連が注目されるが、この調査地ではSB01と類似する方向の建物や柱列は確認できなかつた。

第22節 KW94-4次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は桑津3丁目30に所在し、遺跡範囲の北方に位置する。調査地の東側にある道路は近世の桑津集落の環濠にあたる。このためか、道路面と調査地地表面の比高は約1.5mもあり、旧地形が西から東へ下る緩斜面であった名残りとも考えられる。建設計画に先立ち、1994年3月10日に試掘調査(KW93-40次)を行った結果、埴輪片を多く包含する中世の溝が確認された。それをうけて、市教育委員会・原因者との協議の結果、5月23日から10日間の予定で調査を行うこととなった。

調査は地山の上面まで重機掘削し、それ以下は人力で掘削した。その結果、家形埴輪を含む埴輪片が多数含まれる飛鳥時代の溝が見つかり、



写真9 KW94-4次調査地遠景

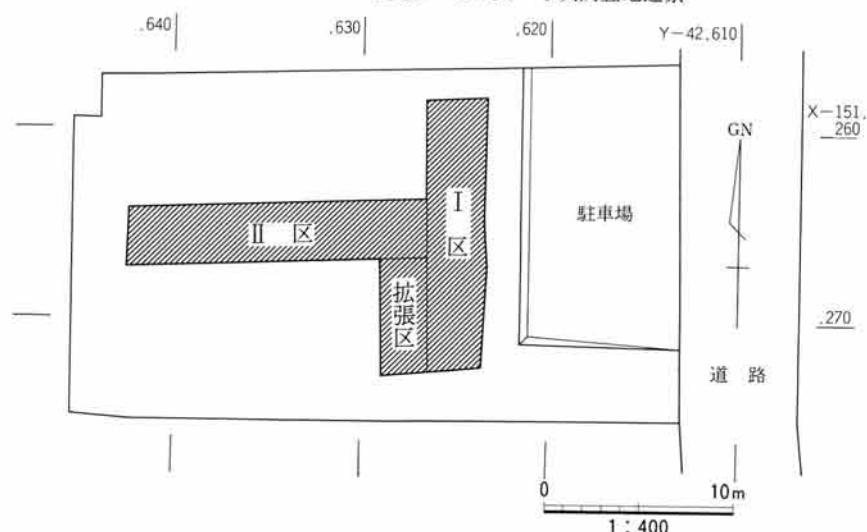


図214 KW94-4次調査地位置図

その性格と広がりを追求する重要性に鑑み、先の二者と協議の上、約12m²の拡張を行った。総調査面積は103m²となり、6月8日に現場作業を終了した。調査区は南北方向のⅠ区と、これにとりつく東西方向のⅡ区、そして拡張区からなる(図214)。

2) 調査結果

i) 層序(図215)

桑津0層：現代客土で、瓦礫を多く含む。平均層厚40cm。

桑津1層：含細礫黃褐色粗粒砂からなる旧表土である。陶磁器片・瓦片を含む。平均層厚は12cm。

桑津2層：近世の遺物包含層で、2層に細分される。上層は含細礫褐色シルト質粗粒砂で、平均層厚は10cm。調査区全域に分布する。下層は含細礫にぶい黃褐色粗粒砂質シルトで、平均層厚は15cm。Ⅰトレーニング北部にのみ分布する。陶磁器片を含む。

桑津3層：中世の遺物包含層で、2層に細分される。上層は含細礫黃褐色シルト質中粒砂で平均層厚17cm、下層は含細礫黃褐色砂質シルトで、平均層厚は15cmである。瓦器・土師器・埴輪片を含む。

地山層：砂を含む明黄褐色シルト質粘土である。上面の標高は西部で5.2m、東部で5.1mで、緩やかに東へ傾斜している。

ii) 遺構と遺物(図216～227、図版34・35・89～93)

遺構はすべて桑津3層基底面で検出したが、埋土の特徴や壁面の観察によって桑津1層基底面および桑津2層基底面で本来検出されるべきものを分離することができる。図216ではこのような遺構面および時期の異なるものを一括しているので、時期を区別した図を付した。ここでは、時期の古いものから順に記載する。

a. 古墳時代後期～飛鳥時代

SD01・02(図217・218) Ⅱ区西端で検出した幅1.7m以上、深さ0.3mの溝と思われる。方位は北でやや東に振る。埋土は黄褐色～にぶい黃褐色砂質シルトで、炭化材や地山の偽礫が含まれる。東側に位置するSD02の埋土も近似し、両者は繋がっていた可能性が高い。須恵器杯蓋968・969、杯身970、器台などの脚971が出土した。969は天井部と体部の境に凹線が巡らされ、TK43型式に属する。968・970・971はTK209型式のものである。ほかに鉱滓・炉壁の破片なども出土している。

SD03・04(図217・218) SD03はⅡ区で検出した幅1.5m、深さ0.3mの南北方向の溝で

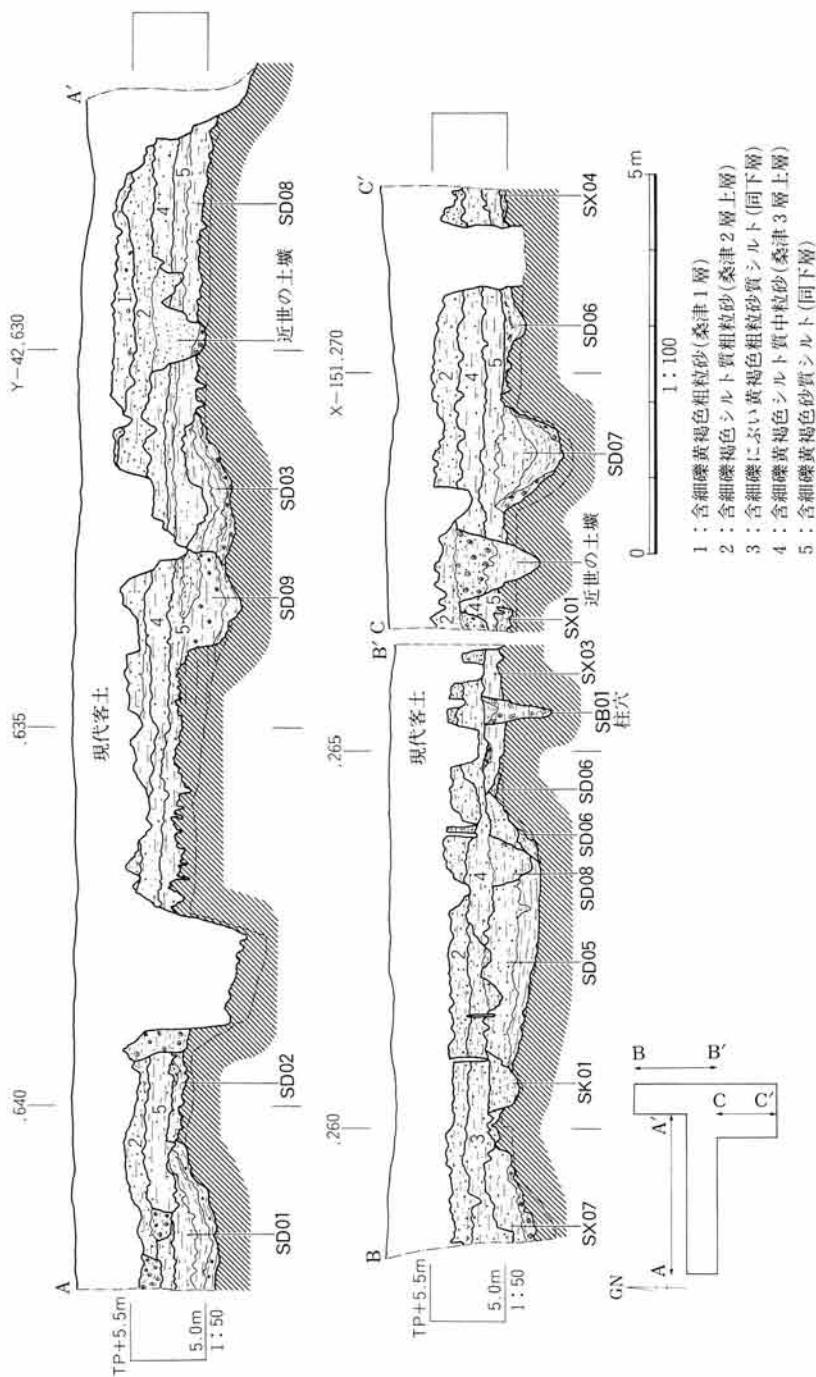


図215 調査地断面図

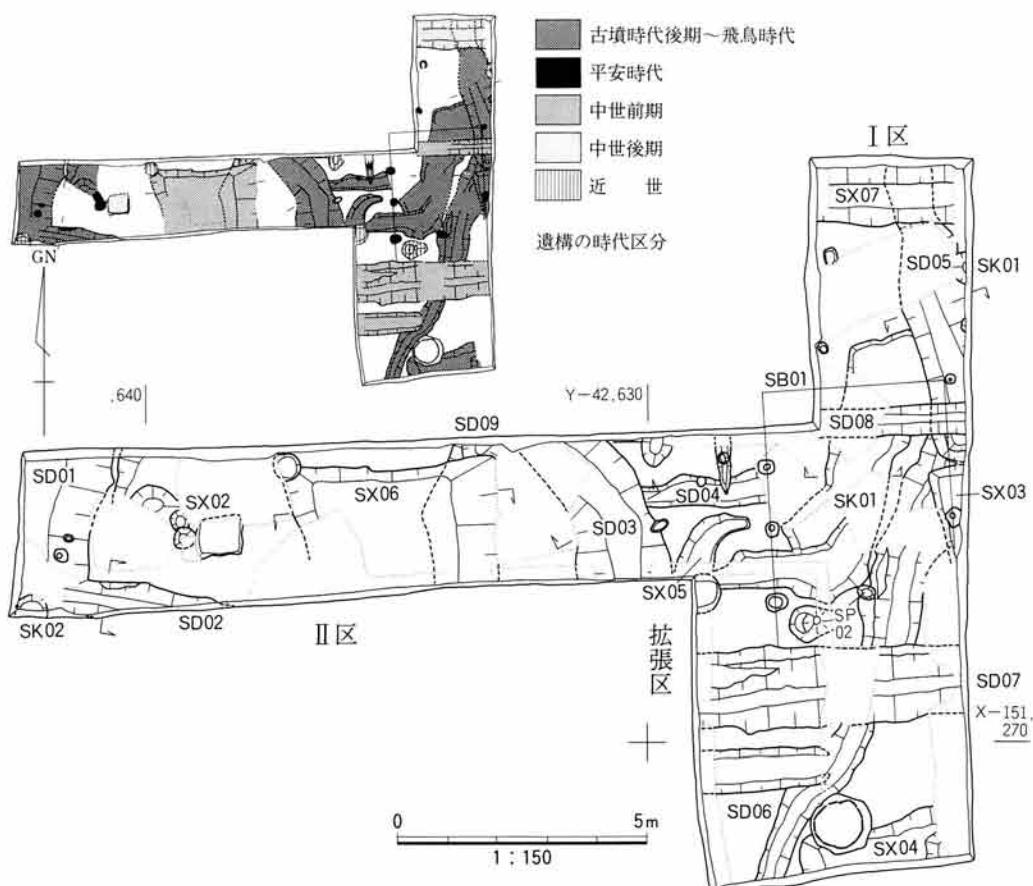


図216 調査地全体図

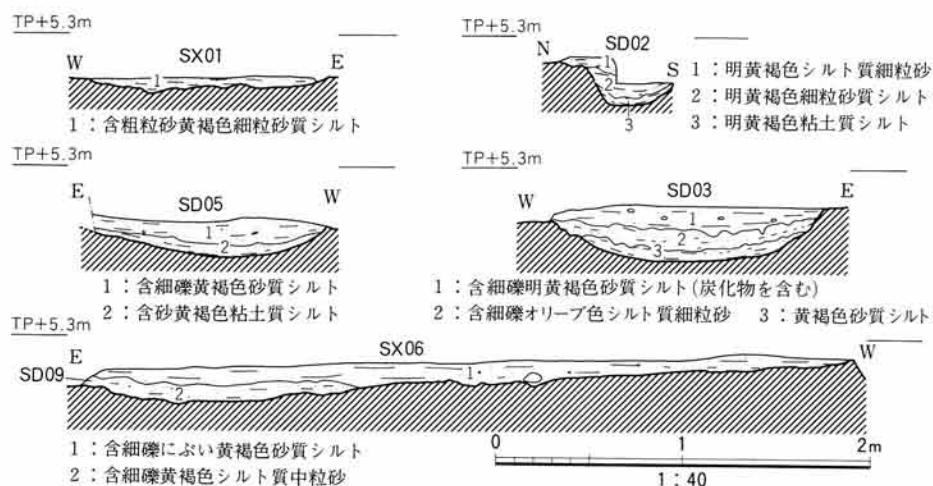


図217 溝・落込み断面図

ある。北側で西に曲っている。埋土は図217の通りである。東側に位置するSD04とは遺物の接合関係もみられ、共存した可能性がある。須恵器杯蓋972、椀などの脚973、弥生土器甕の底部974が出土した。972は口径13.6cmで、天井部はヘラケズリ調整が広い範囲に施される。これらはTK209型式と考えられる。974の胎土には角閃石が多く含まれ、生駒西麓産の胎土といえる。

SD05(図217・218・227) I区北半で検出した幅約1.0m、深さ0.2mの南北方向の溝である。方位は北で15°西に振っている。南側は調査区内で途切れていた。底のレベルはほぼ一定である。埋土は2層に分かれ、底付近から遺物がまとまって出土した。

遺物には土師器杯975、甕976、須恵器杯蓋977・978・982、杯身979~981、鉄製品1043のほか、若干の鉱滓がある。975は口径10.4cm、器高2.7cmで、内面には底部に螺旋状暗文、その上位に放射状暗文が細かく施される。飛鳥Ⅲに比定される。976は大型の甕で、内面はハケ調整がなされ、胎土は精良で長石・石英・チャートが含まれる。須恵器は978~981はTK209型式、977・982はTK217型式の新しい段階のものである。遺構の年代は975・977・982が示す飛鳥ⅡないしⅢの段階と思われる。1043は細長い板状の鍛造品で、片方の側縁

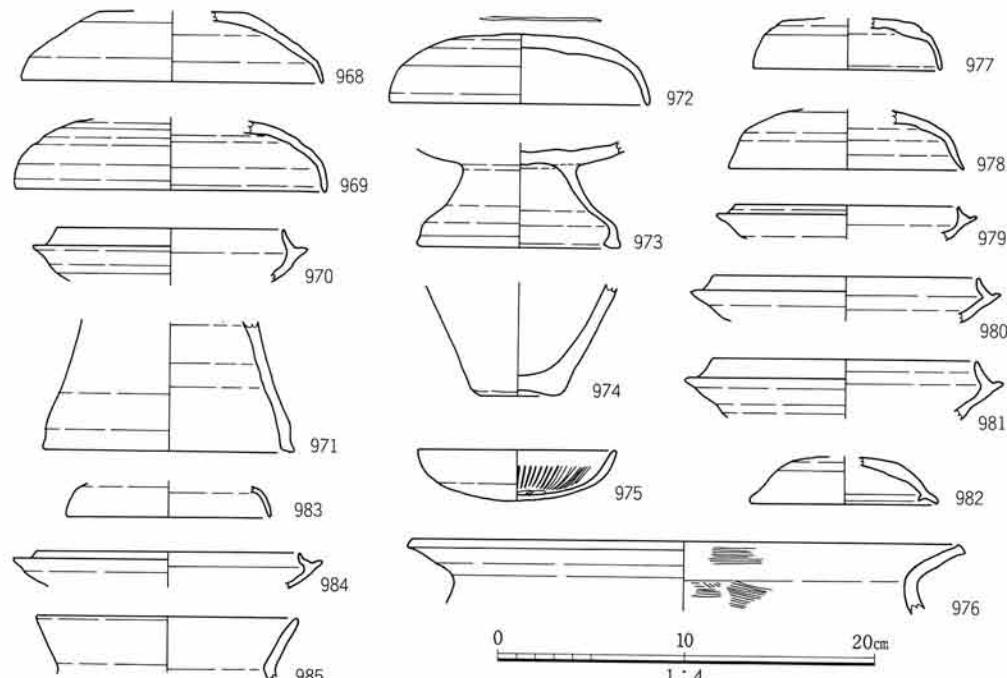


図218 SD01・03・05、SX01~03出土遺物

SD01(968~971)、SD03(972~974)、SD05(975~982)、SX01(983)、SX02(985)、SX03(984)

に刀子の区のような段がみられる。この段を境に断面形が相違し、幅の広い方が角の取れた長方形、狭い方が縦長の三角形である。長さは7.2cm以上、幅1.7cm、厚さ0.25cm、重量12.1gである。用途は不明である。

SD06(図219～224) SD05に切られる幅約1m、深さ20cmの南北方向の溝である。方位は北で22°東に振っている。溝は直線的でなくやや蛇行し、底は南から北に向って下っている。埋土は3層に細分でき、1層は人為的な埋戻し土、2・3層が自然堆積で、2層はやや暗色化していた。遺物は埴輪が大量に(コンテナバット約10箱分)2層中から出土した。その平面分布には、数個所にまとまりがみられる(写真10・11)。しかし、離れたまとまり間でも接合関係が認められた。また、埴輪は完形に復元できるものはまったくなく、すべて破片の状態である。そして、それらとともに、飛鳥時代の須恵器や強く被熱した礫が出土している。したがって、この溝は古墳の周溝ではなく、溝の廃絶時に埴輪片を捨てて埋めた飛鳥時代の溝と考えられる。

須恵器には杯蓋986・988・989、杯身987・990、器台991、椀などの脚992、横瓶993、



写真10 SD06埴輪出土状況(1)

壺994、甕995がある。991は高杯形器台でTK208型式に属し、後述する埴輪に共伴していたものではないかと考えられる。986・987がTK209型式、そのほかはTK217型式の古い段階に比定される。

埴輪は円筒埴輪が大半を占めるが、家形埴輪が2個体みられた(図221)。

996は入母屋造家である。屋根の破片で、縦方向と横方向の押縁が線刻で表現され、破風板の痕跡がわずかに残っている。色調は橙色で、胎土に長石・石英・黄白色粘土粒が含まれる。997は大型の切妻造家である。997aは棟木から破風付近の破片、997bは屋根から妻側の壁にかけ



写真11 SD06埴輪出土状況(2)

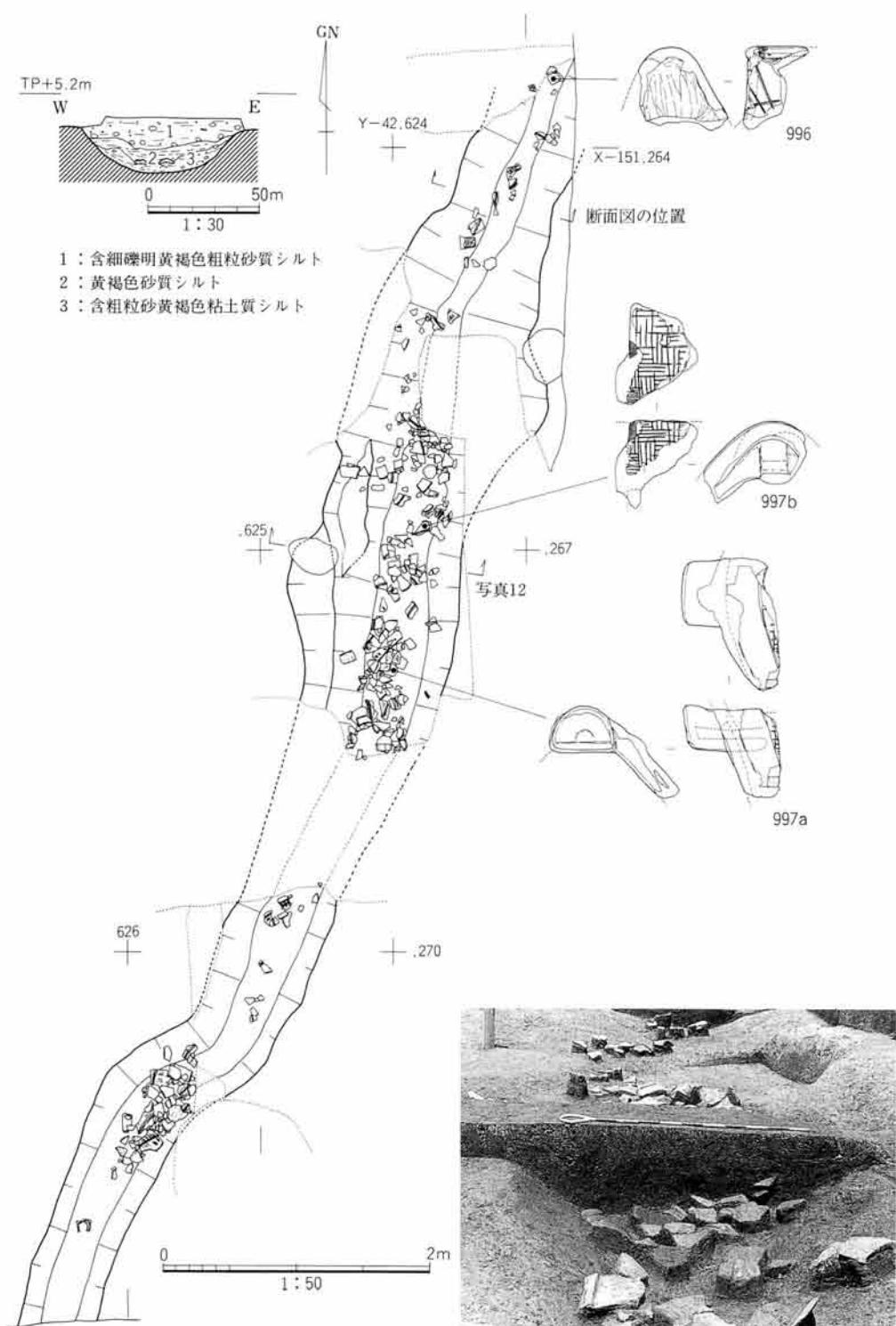


図219 SD06遺物出土状況・断面図

写真12 SD06断面(南から)

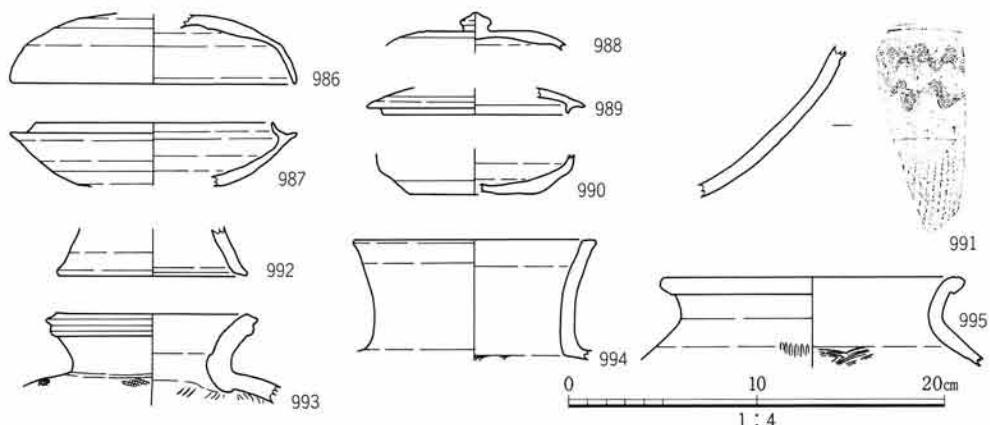


図220 SD06出土土器

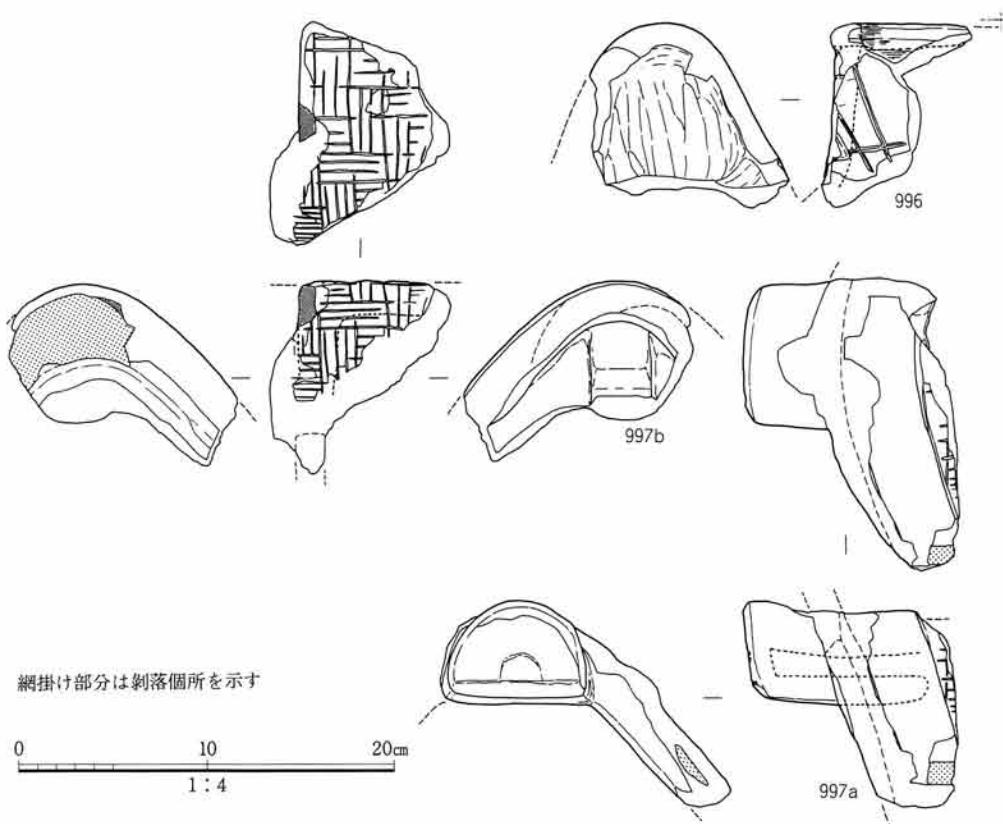


図221 SD06出土家形埴輪

ての破片で、両者は同一個体である。妻側の壁から棟木の先端までの長さが約15cm、壁や屋根の厚さが1.5cmである。棟木は幅7.3cm、高さ5.1cmで、半円形で中空に作られており、端面に直径2.2cmの浅い削込みがみられる。また、その下には水平方向の線刻と面取りがされている。屋根には網代が線刻で、縦方向の押縁が幅3.5cmの突帯で表現されている。また、棟から7.8cm下の位置に、横方向の押縁のものと思われる粘土の剥離痕がある。破風板の大半は欠損している。妻側の壁には棟持柱が幅3.0cm、厚さ0.3cmの突帯で表現される。棟に近い上部は段をなして肥厚し、斗束を表そうとしたものかもしれない。胎土には2mm大の長石・石英・チャートが含まれ、色調は赤橙色である。

円筒埴輪には、直径が15cm前後の小型品998～1012、22cm前後の中型品1021・1022、30～40cmの大型品1013～1020がある(図222～224)。

小型品には外面調整が一次調整のタテハケのみのものと、二次調整としてヨコハケを施すものがある。スカシ孔はすべて円形である。998～1002は二次調整のヨコハケを施すものである。998は口縁部の破片で、口径は19.2cmである。外面のタテハケは10条/cm、口縁外面と内面に10条/cmのヨコハケを施した後、端部をヨコナデしている。999は底径12.2cmで、タガの断面形が台形である。外面のタテハケは6条/cm、ヨコハケは5条/cmで波状をなす。内面は縦方向のスリナデ調整である。これらは器厚が0.7cmで薄い。胎土は精良で長石・石英・シャモットの細粒が含まれ、色調は橙色、焼成は須恵質で良好である。1000～1002は類似した個体で、1002の底径は15.6cmである。タガは低く幅が広い。ヨコハケは7条/cmである。内面はスリナデ調整である。器厚は1.0～1.5cmで厚い。胎土には長石・石英・雲母・黄白色粘土粒・シャモットが含まれ、色調は橙色、焼成は良好である。

1003・1005～1007は内外面とも一次調整のタテハケを施すものである。内面にはハケメの後でヨコナデが一部に施される。底径は12.6～14.4cmである。タテハケは6～7条/cmを基本とし、1006の内面にはこれと11条/cmの2種類のハケ原体が使われている。1003・1007では、断面台形のタガを巡らせた後で施されたタテハケも認められるが、部分的なものにすぎない。胎土には長石・石英・シャモット・黄白色粘土粒が含まれる。1003と1007は胎土と灰色の色調が近似している。ほかの色調は橙色で、焼成は硬質で良好である。1004・1008は外面のみがタテハケ調整、内面はスリナデ調整のもので、外面の風化が著しい1009～1012も同様と思われる。底径は10.6～13.6cmで、タガは低い。底部が押潰れた個体がめだつが、底部調整は施されていない。胎土には長石・石英・シャモット・黄白色粘土粒が含まれ、すべて近似する。色調は橙色、焼成は良好である。

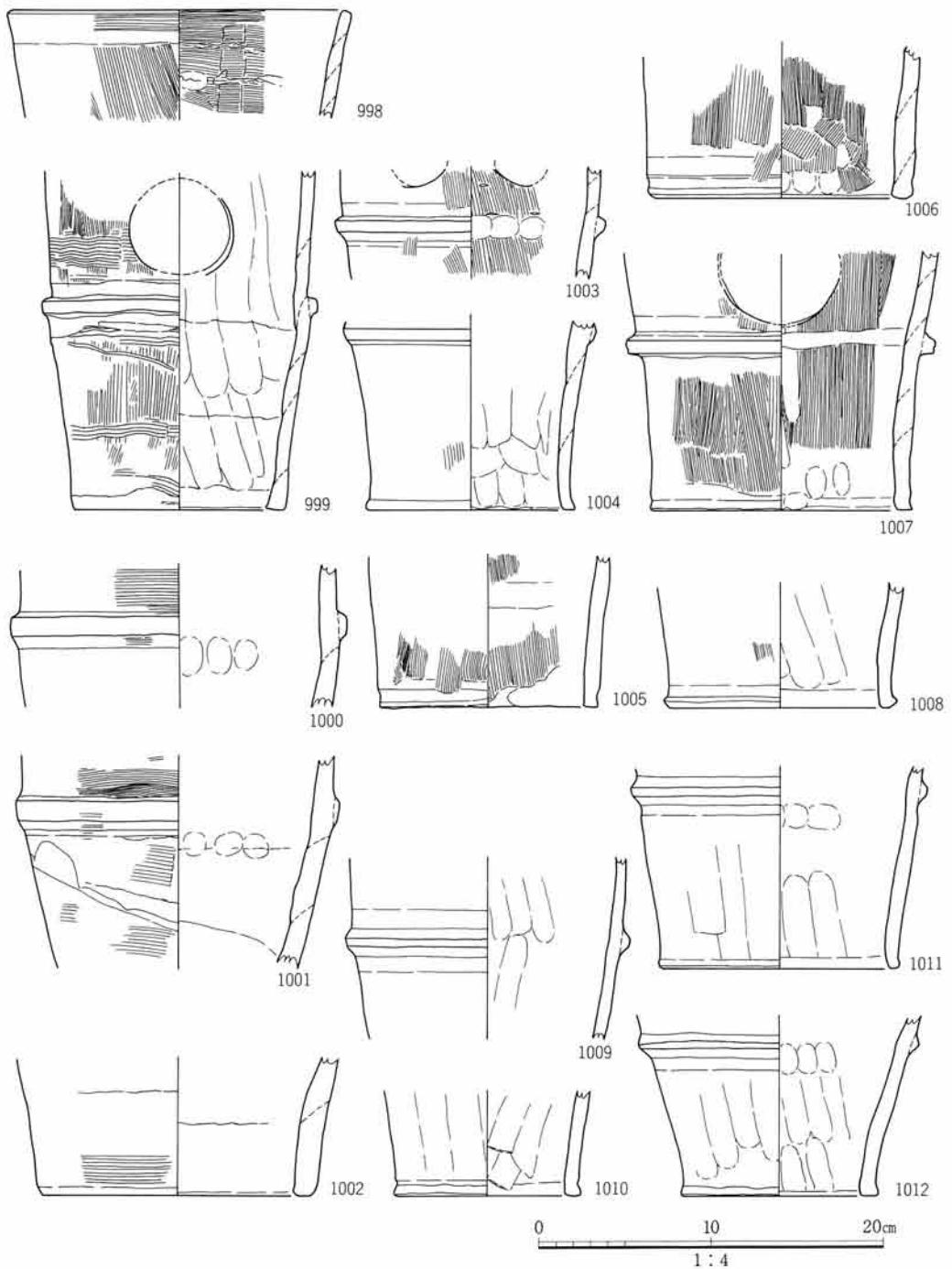


図222 SD06出土円筒埴輪(1)

中型品1021・1022は外面調整に二次調整としてヨコハケが施される。ハケは5条/cmである。内面はスリナデ調整である。タガは断面形が台形でしっかりしたものである。スカシ孔は円形である。色調は1021が明褐色、1022が灰褐色である。胎土には長石・石英が含まれ、1022はこれにチャート・黄白色粘土粒が加わる。焼成は良好である。

大型品には色調が橙色～淡黄色で土師質焼成の1013～1018と、褐灰色で須恵質焼成の1019・1020がある。スカシ孔はすべて円形である。前者にはすべて二次調整のヨコハケが施される。黒斑をもつ破片は一点も認められない。1013は口縁部で、端部は強いヨコナデによって凹線を巡らせたようになる。7条/cmのヨコハケが内外面に施される。最上段のタガは口端部から5cm下の位置にあり、通常の円筒埴輪に比べて上位に偏る。それに関連してか、色調・胎土も以下に記すものと異なり、淡黄色で長石・石英・シャモットが含まれる。1014～1017は胴部の破片である。タガは突出度の強いしっかりしたものである。外面はタテハケの後、ヨコハケ調整がなされ、1014はB種ヨコハケである。内面調整は1014・1016でタテハケの後、ヨコナデが一部に施され、風化の激しいほかの破片も同様と類推される。ハケメには精粗があり、1014が10条/cmで細かく、ほかは5～6条/cmで粗い。色調は橙色で、胎土には長石・石英・チャート・雲母・シャモットの細粒に加え、黄白色粘土粒が多く含まれる。1018は底部片で、底径27.0cmである。内面はスリナデ調整である。色調は橙色で、胎土は胴部片と類似するが、黄白色粘土粒は少ない。図化したもののほかに、赤彩が施されたB種ヨコハケ調整の破片も出土している。

須恵質焼成の1019・1020は径が若干異なるが、形態・製作技法は酷似する。外面は一次調整のタテハケのみで、突出度の強いタガを巡らせた際のヨコナデ調整に伴って、部分的に擦り消されたようになる。内面はヨコハケの後、ヨコナデを施し、大半のハケメを擦り消している。ハケメは15条/cmで、スカシ孔は円形である。胎土には石英・長石・黒色粒が含まれる。SD07出土の口縁部1034(図226)はこれらに適合する大きさ・製作技法であるが、ハケメが粗く同一個体とはいえない。

朝顔形埴輪は口縁部の破片が2個体分出土した。外面はナナメハケの後、二次調整のヨコハケが施される。二次調整は1023では突帯を境にして上半が12条/cmのヨコハケ、下半がヨコナデであるのに対し、1024では上半が部分的なヨコナデ、下半が7条/cmのヨコハケである。内面はナナメハケの後、ヨコナデ調整が施され、1023では二次調整と異なる6条/cmの原体を用いる。また、1024の上半の内面にはハケ調整がなされない。断面の観察によると、口縁部下半の端部を外反させ擬口縁としている。1023にはヘラ記号が線刻され

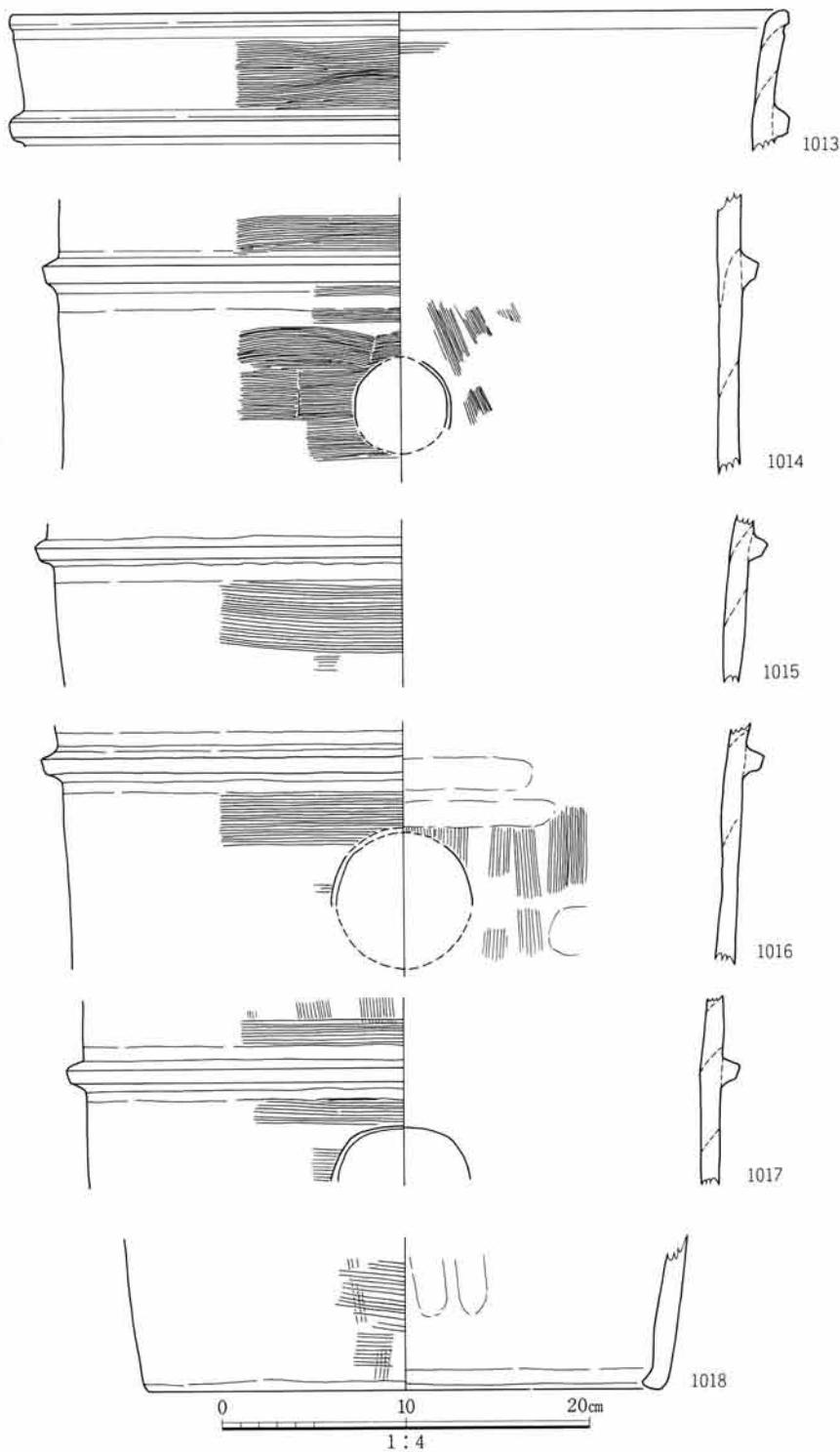
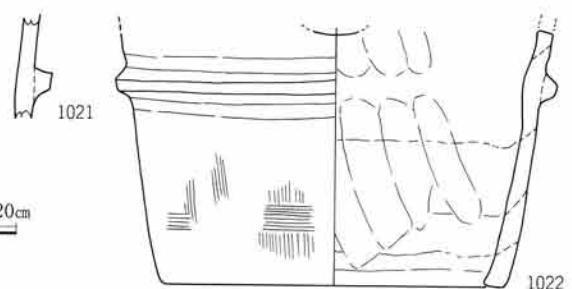
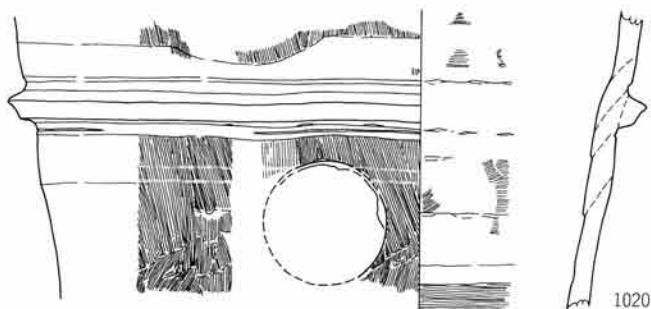
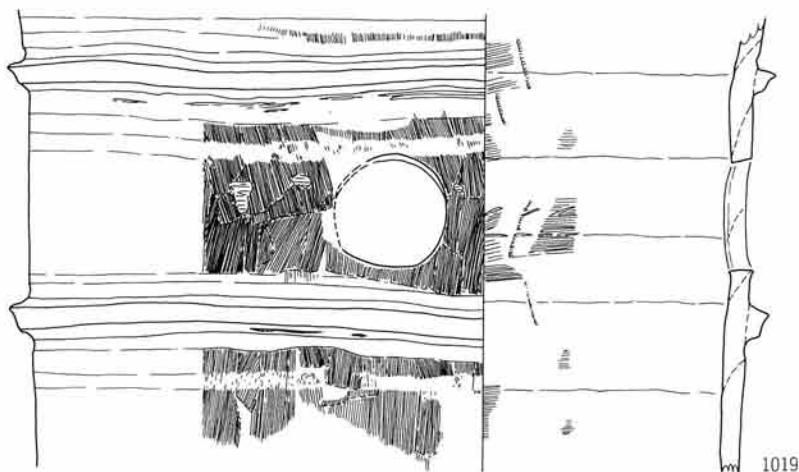


図223 SD06出土円筒埴輪(2)



0 10 20cm
1 : 4

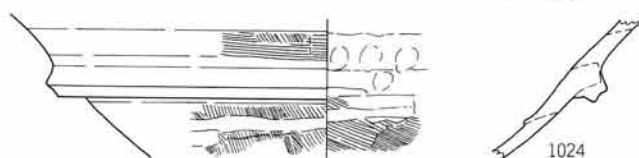
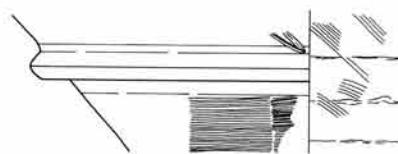


図224 SD06出土円筒埴輪・朝顔形埴輪

ている。色調は橙色、胎土には長石・石英・チャートが含まれ、焼成は須恵質である。

以上の円筒埴輪は、大きさ・タガの形態・調整・胎土・焼成の特徴が異なるものが混りあっている。しかし、無黒斑であること、二次調整にヨコハケが認められること、底部調整がなされないこと、タガの断面形が台形に近いことなどから、Ⅳ期に属するといえる。

SX01(図217・218) I区で検出した浅い落込みである。幅1.2m前後、深さ約7cmで、西から北へカーブを描いている。埋土は含粗粒砂黄褐色細粒砂質シルトである(図217)。SD05よりも古い。須恵器杯蓋983が出土した。TK217型式に相当する。

SX02(図218) SD01の東側で検出した落込みである。土師器甕985が出土した。口縁部は直線的に外方へ開き、胎土は精良で長石・石英の細粒が含まれる。

SX03 SD05の南側で検出した浅い落込みである。SD06よりも新しい。須恵器杯身984が出土した。TK209型式に属すると考えられる。

なお、I区のSX04、II区のSX05も埋土の特徴やわずかな出土遺物からみて、上記の遺構と同様な時期のものと考えられる。

b. 奈良・平安時代

SB01(図225・226) I区中央からII区にかけて検出した掘立柱建物である。桁行3間分を確認した。SP02が南妻側の柱穴かとも考えられたが、埋土と深さが若干異なっていたので、南妻側の柱列は中世のSD07で壊されていると考えた。よって、もとは桁行約5.4m(4間)、梁行約3.6m(2間)と思われる。方位はN4°Wである。掘形の平面形は円形で、直径約30cm、柱痕跡の径は10cmである。深さは15~30cmである。SP01では、柱が抜き取られた痕があり、そこに土師器鍋1027の破片が詰め込まれたような状態で見つかった。また、これと同一個体の細片が1間北側の柱穴からも出土した。

1027は丸底になると思われ、半球形の胴部からやや外反ぎみに開く口縁部をもつ鍋である。胴部外面は部分的にタテハケがみられるが、スリナデ調整がなされ、頸部はユビオサエが顕著で、口縁部はヨコナデ調整がなされる。胎土は精良で、長石の細粒をわずかに含む。大阪市域では類例が乏しく、時期や産地は今のところ不明である。ほかに土師器の杯あるいは皿と思われる口縁部の破片1026が出土した。1026は口縁端部を外反させてから若干つまみ上げたような形で、奈良時代から平安時代前期に類例が求められる。

このほかにも8基のピットを検出した。いずれも飛鳥時代の遺構を切っていた。SP02からは土師器碗1025が出土した。高台付きの碗で、平安時代後期のものと思われる。ほかのピットの年代もおおむね平安時代と類推される。

c. 中世

まず、桑津3層下面で検出された遺構を記載する。これらは中世前期の遺構である。

SD07(図226) I区と拡張区で検出した幅1.4m、深さ0.5mの東西方向の溝である。方位は西で6°南に振っている。埋土は下半が黄褐色シルト質中粒砂からなる水成層、上半が黄褐色砂質シルト層で遺物を多く含む。最下層には、溝の両側から地山の偽礫が多く流れ込んでいるのが認められた。

遺物は土師器皿1028、瓦器椀1030・1031、小皿1032、白磁碗1029、須恵器平瓶1033、円筒埴輪1034や、釘状の鉄製品・鉱滓なども出土した。1029は玉縁口縁の碗で胴部はやや丸みが強い。1028～1032は12世紀前半のものと考えられる。1034は須恵質焼成の口縁部で、口縁部は水平近くまで外反する。外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整で、ハケ密度は6本/cmである。1033・1034はSD06に由来する遺物と思われる。

SD08 SD07に平行する溝で、幅0.7m、深さ0.2mである。埋土は含粗粒砂褐色砂質シルトで、炭化材が多く含まれる。瓦器・土師器・釘状の鉄製品などが出土し、時期はSD07とほぼ同じである。

SD09(図217・226) II区中央で検出した南北方向の溝である。北端でやや東に曲り、

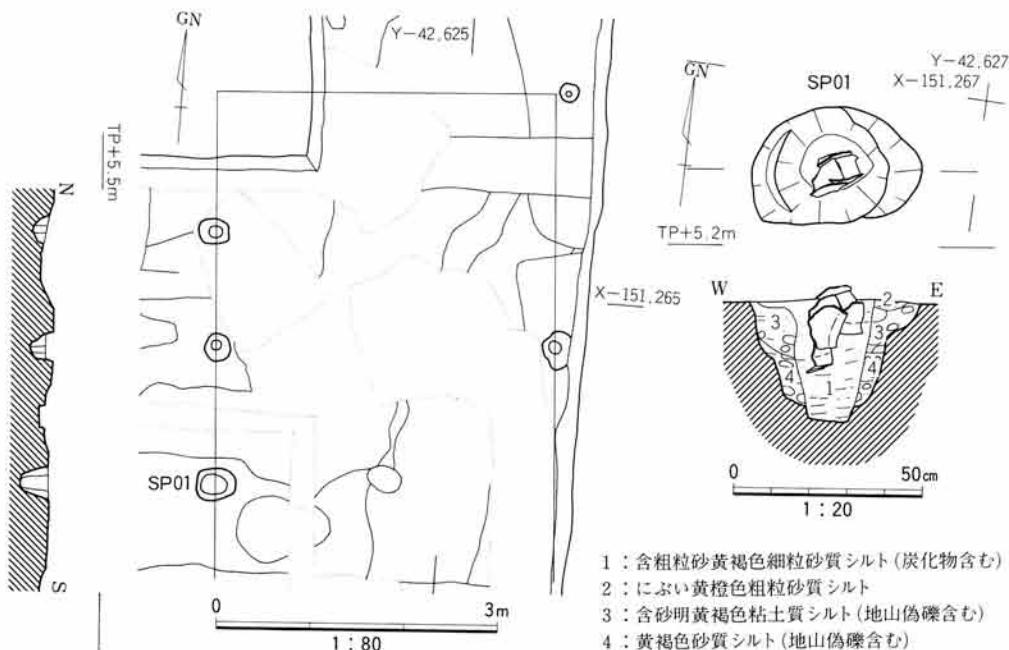


図225 SB01実測図およびSP01土器出土状況

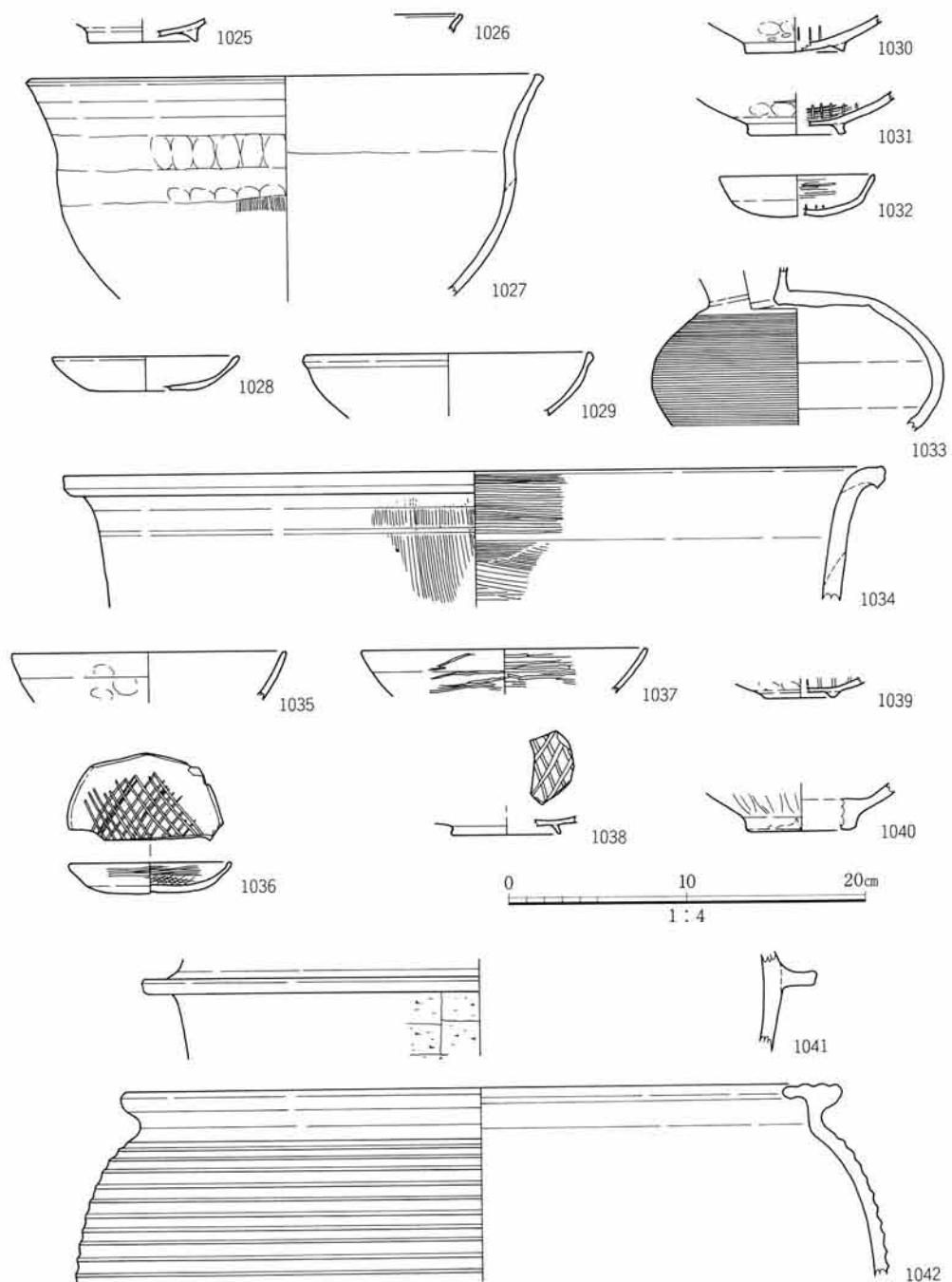
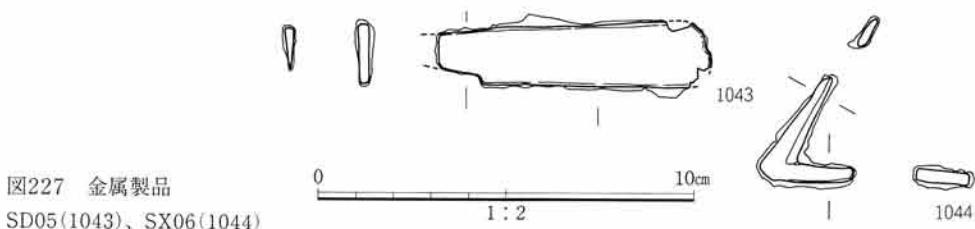


図226 その他の遺構出土遺物

SB01(1026・1027)、SP02(1025)、SD07(1028~1034)、SD09(1035・1036)、
SK01(1041)、SK02(1042)、SX06(1037・1038)、SX07(1039・1040)



深くなっている。幅1.2m、深さ0.15mで、埋土は含細礫にぶい黄褐色砂質シルトである。切合い関係ではSX06より古い。瓦器椀1035、小皿1036や土師器・黒色土器の細片が出土した。瓦器は12世紀後半頃のものである。

SX06(図217・226) II区中央で検出した東西約4m、深さ0.1mの方形の落込みである。埋土は含細礫黄褐色砂質シルトである(図217)。瓦器椀1037・1038、鉄製品1044が出土した。瓦器は12世紀後半頃のものである。1044は最大幅1.4cm、厚さ0.3cmの鉄板をV字状に折り曲げたもので、片方の端部は細くなっている。重量は8.9g、用途は不明である。

次に桑津2層基底面で本来検出される遺構を記す。中世後期に相当すると考えられる。

SX07(図226) I区北端で検出した落込みである。南から北に向って下っている。埋土は含細礫明黄褐色砂質シルトで、下部に地山の偽礫を多く含む。前述した桑津2層下層の分布はSX07に関連するのかもしれない。瓦器椀1039や龍泉窯系の青磁碗1040が出土している。1040は14世紀～15世紀前半にかけてのものである。

このほかにも多くの遺構が検出されたが、個別の記載は省略する。SK01から16世紀代の瓦質土器羽釜1041が出土している。

d. 近世の遺構と遺物

SK02(図226) II区西端において桑津1層基底面で検出した。直径0.6m、深さ0.4mの土壙である。丹波焼甕1042が出土した。18世紀前半頃のものである。

3) 小結

今回の調査では、古墳時代後期～江戸時代にわたる遺構・遺物を検出することができた。なかでも特筆すべきことは、多量の埴輪が捨てられた飛鳥時代の溝の発見であろう。この発見は次の2点で重要である。

一つは、桑津遺跡の未発見の古墳について新たな材料を得ることができたことである。これまで地籍図の検討から、遺跡西側の大塚町に「大塚」・「赤塚」・「罐子塚」と呼ばれる古墳が想定されていた[上田宏範1981]。一方、これまでの発掘調査で埴輪がまとまって見

つかった場所は、今回の調査地に加えて、KW86－2次(第5節参照、IV・V期)・KW87－18次(本調査地の南隣での立会調査、IV期)・KW91－8次(第16節参照、V期)など、遺跡の北東部に集中している。この部分は丘陵が東側に緩く張出す場所に当り、古墳を築くには適地であり、この辺りに古墳が存在した可能性が高い。これらの埴輪は5世紀代のものであるが、ここで報告した資料のように大きさ・製作技法・胎土などに違いがみられることから、複数の古墳の存在が想定でき、また、大型の家形埴輪や円筒埴輪の存在から、規模の大きな古墳も含まれていた可能性が指摘できよう。古墳は未発見ながら、その手がかりを追加したと評価できる。

もう一つは、埴輪が多量に捨てられた背景には、古墳の破壊があったと考えられることがある。本調査地では遺物が継続的に認められるようになるのはTK43型式期以降であるが、埴輪は飛鳥時代の遺構のみから出土する。古墳の破壊が飛鳥時代に行われていたと考えられることは、本地域の土地開発史上きわめて重要な事実である。ほぼ同じ時期には、近辺で一般の集落とは考えがたい大型建物群が存在したことが明らかとなっている(KW91－8次など)。おそらく、飛鳥時代になって本地域の開発が活発化し、その過程で古墳の破壊が行われたと考えができるのではなかろうか。

第23節 KW95-5次調査

1) 調査の経緯と経過

この調査地(桑津3丁目10)は桑津遺跡の北西部に位置しており、西隣のKW84-7次調査地では弥生時代中期の溝や奈良時代の掘立柱建物が、南東10mにあるKW87-21次調査地では飛鳥時代の掘立柱建物が見つかっている。

1995年3月16日に敷地の南北2箇所を試掘したところ(KW94-28次)、南側の試掘場で柱穴状の土壌と弥生時代の包含層が存在することが確認された。大阪市教育委員会の判断により、敷地の南側170m²を発掘調査することになり、同年6月19日から、アスファルトと現代盛土部分の重機掘削を開始した。しかし、調査予定範囲の北側3分の1程度が旧建物の基礎によって破壊されていることが明らかとなり、それより南の約90m²を調査対象とした(図228)。重機掘削後は人力で掘削し、遺構の精査につとめた。その結果、東側4分の3以上は近世以降の地下げを被っていたが、西側で弥生時代の遺構や隣接調査地に続く掘立柱建物などが検出された(図230)。6月29日には埋戻しを完了し、調査は終了した。

2) 調査結果

i) 層序

調査地南壁で断面図を作成し、図229にそれを示した。なお、弥生時代中期の井戸SE01のある南壁西端部の状況は図231に示している。

桑津0層：現代客土層である。層厚は最大50cmで、調査区西側においては平均10cm程度の層厚であった。

桑津1層：上下2層に分かれる。上層は暗灰黄色シルト質細粒砂層で、層厚10

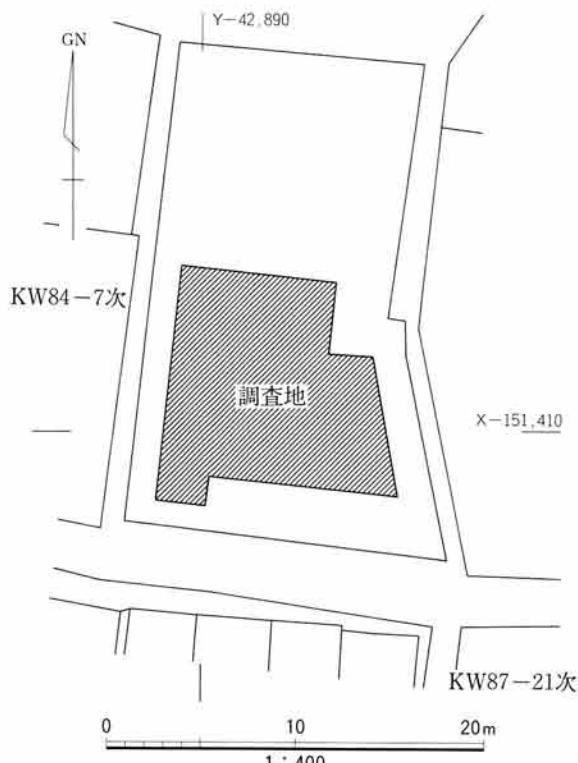


図228 KW95-5次調査地位置図

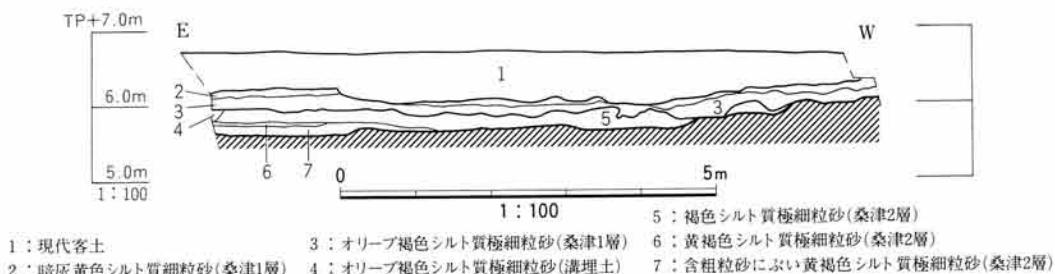


図229 調査地南壁断面図

cm程度である。下層はオリーブ褐色シルト質極細粒砂層で、層厚は平均10cm、最大厚25cmである。明治時代の陶磁器が出土している。

桑津2層：3層に分かれる。上層は褐色シルト質極細粒砂の作土層で、層厚は平均20cmである。当層の直上で溝および偶蹄類の足跡が検出されている。中層は黄褐色シルト質極細粒砂層で、層厚は5cm未満である。地山層の偽礫を中心とする客土層であり、床土として利用されたものと思われる。下層は粗粒砂を含むにぶい黄褐色シルト質極細粒砂層で、平均層厚10cm程度である。調査地東側にのみ分布する。

地山層：明黄褐色細粒砂で、調査地西側では、標高6.4m前後に検出される。

ii) 遺構と遺物(図版36・67)

a. 弥生時代中期

SE01 調査地南西部にある遺構で、全体を検出できたわけではないが、形状や埋土から井戸と思われる(図231)。時期は出土土器から畿内第Ⅲ様式古段階のものである(図232)。遺構の形状は擂鉢状を呈しており、その最深部が調査地南壁と接する位置にある。検出範囲内での深さは0.7mあるが、調査地外ではさらに深くなると推定される。遺構埋土は以下のように7層に分かれる。

- ①層：暗褐色細粒砂質シルト層で、弥生土器・須恵器を含む。
- ②層：褐色極細粒砂質シルト層で、弥生土器・須恵器を含む。
- ③層：黒褐色極細粒砂質シルト層で、上面に乾痕が多数みられる。出土遺物には弥生土器、サヌカイト製の打製石剣・剥片、ガラス小玉があり、水洗選別の結果、魚類骨片、炭化米(ジャボニカ種、図版100)、サヌカイトチップなどが採集された。
- ④層：褐色極細粒砂質シルト層で、③層よりやや砂粒を多く含む。出土遺物には弥生土器、サヌカイト製のスクレイパー・剥片があり、土壤水洗によってサヌカイトチップや多量の炭化物が見つかった。
- ⑤層：明褐色シルト質細粒砂層である。地山層の偽礫からなり、調査地外から崩れ落ち

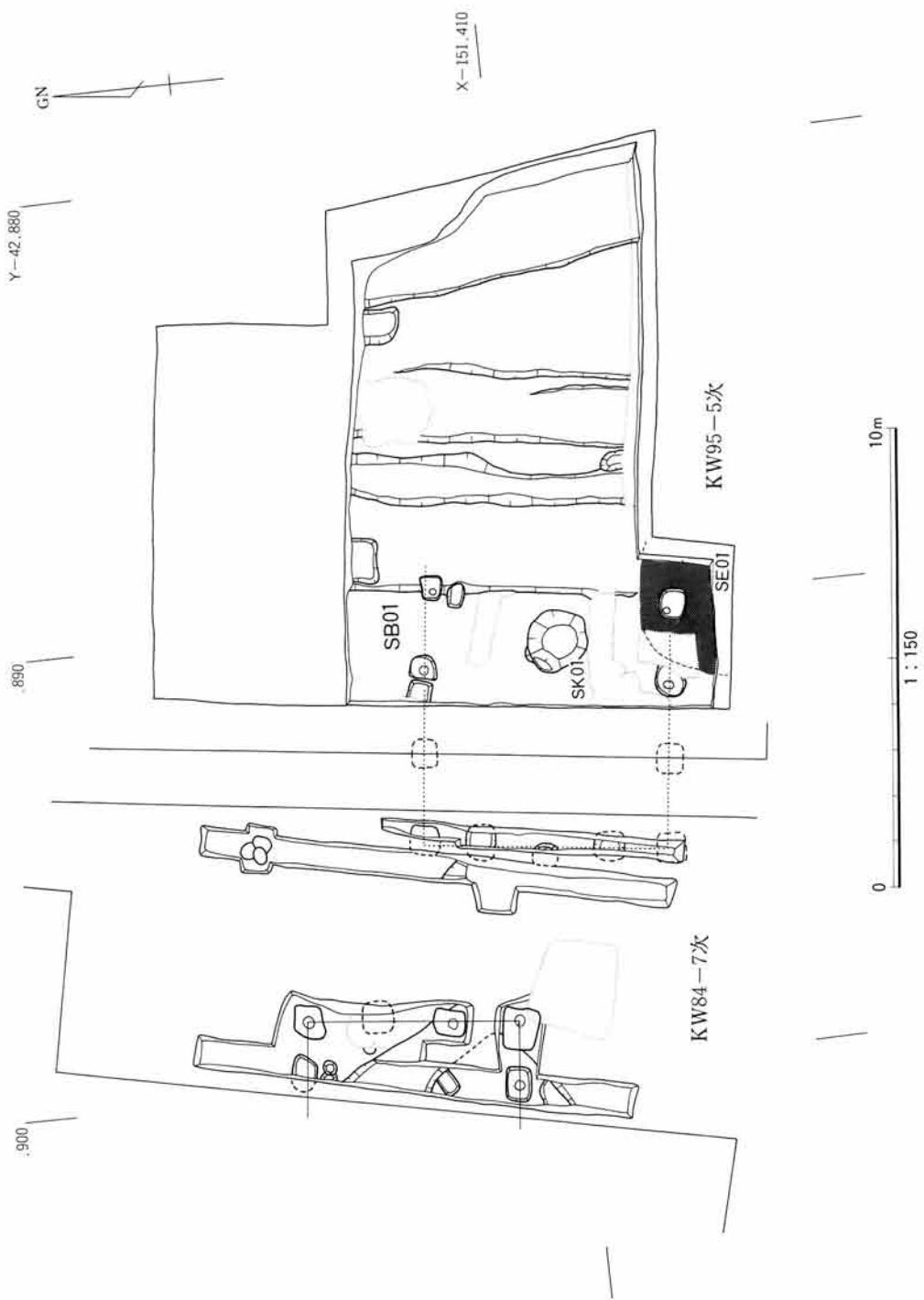
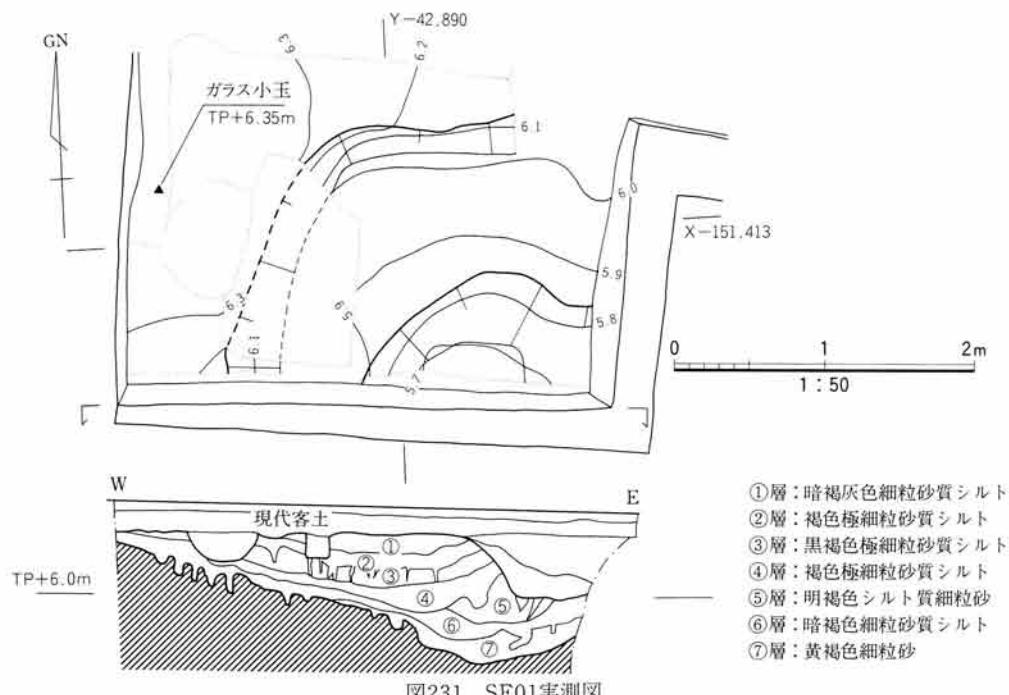


図230 調査地全体図

たような堆積状況がみられた。

⑥層：暗褐色細粒砂質シルト層で、弥生土器を含む。
 ⑦層：黄褐色細粒砂層で、最深部に向けて厚く堆積する。地山層の偽礫で構成される。
 ③層以下の出土土器は畿内第Ⅲ様式古段階のもので占められているため、当遺構はこの時期のものと判断される。埋土内からではあるが、ガラス小玉のような特殊な遺物が出土していることも注目される。ガラス小玉の出土、そして推定される墓域に近いことから、この遺構が方形周溝墓の一部である可能性も完全には否定できない。しかし、周溝と考えたばあいに、コーナー部分が最深部に当ることになり、周溝の一般的な形状とは異なることになる。また、KW90-14次の例(第13節参照)にみられるように井戸の上部は漏斗状に広がる形状をもつこと、埋土がKW95-15・19次の井戸[久保和士1997a・1997b]での状況と類似するものであることを考へるならば、この遺構は井戸と考えるのが妥当であろう。

図232-1045～1053がこの遺構の遺物である。1045・1046は広口壺の口縁部で、ともに③層から出土した。1045の口縁端部は斜め下方に拡張され、その下端に刻み目、端面に斜方向のヘラ描沈線文を施している。1046の口縁端部はわずかに膨らみをもち、下端に刻み目が施されている。1045の胎土中には角閃石が含まれている。1048・1047は壺の底部で、



1048は②層、1047は③層から出土した。1048の胎土には角閃石が含まれる。1050・1051は甕の底部で、1050は②層、1051は③層から出土した。1049の体部はハケ調整され、底部外面はヘラミガキされている。1053はガラス小玉で、遺構外縁部に近い位置の③層中から見つかった。水色を呈し、表面に網状の白い筋がみられる。直径4.2mm、厚さ2.3mmで、孔径は1.4~2.0mmである。以上までは弥生時代中期の遺物であるが、1052は①層から出土した飛鳥時代の須恵器杯身である。口径が小さく、7世紀の第2四半期のものであろう。

遺構から出土したものではないが、弥生時代中期の遺物として、重機掘削中に見つかった図232-1049の壺がある。頸部の破片で、原体幅0.7cmの櫛描直線文が5条みられる。内面の口縁部に近い側には棒状工具の当りが残っている。

b. 飛鳥・奈良時代(図233)

SB01 地下げされなかった調査地西側でSP01~04が見つかった。掘形はいずれも平面方形で一辺45~60cm、深さ45~50cm、柱痕跡は直径10cm程度であった。柱穴の位置から判断して西隣の調査地(KW84-7次)で検出されたSB02と同一の建物の可能性が考えられる。仮に一連のものとするならば、図230のような桁行6.0m以上(3間以上)、梁行5.5m(4間)の掘立柱建物を想定できる。KW84-7次のSB02では、北から3番目の柱穴がやや西側に外れていたが、今回の調査と総合すればこの柱穴は主軸上に位置することになり、棟持柱の柱穴と理解することができる。時期については先の調査で奈良時代とされている。この建物に伴うものではないと思われるが、SP05・06といった柱穴も検出されている。

SK01 調査地南西部の中央で検出された、直径1.4m、深さ0.4mの平面円形の土壙であ

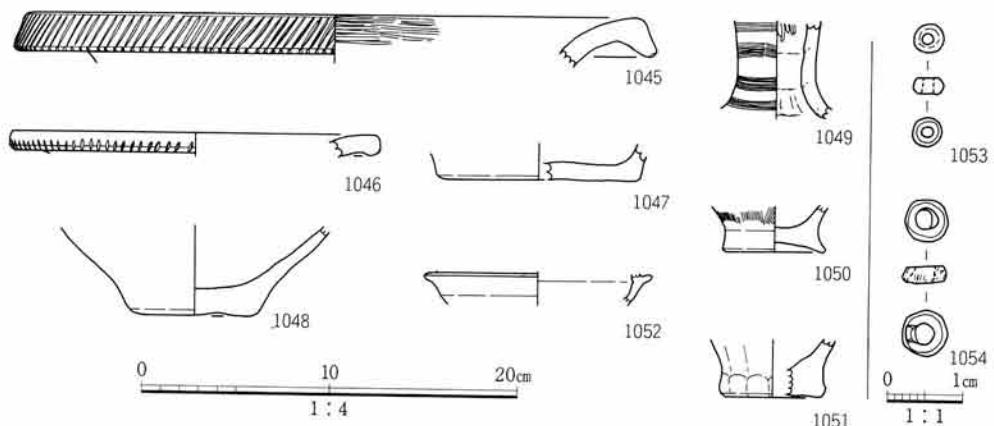


図232 調査地出土遺物

SE01③層(1045~1047・1051・1053)、SE01②層(1048・1050)、
SE01①層(1052)、重機掘削中(1049)、攪乱埋土(1054)

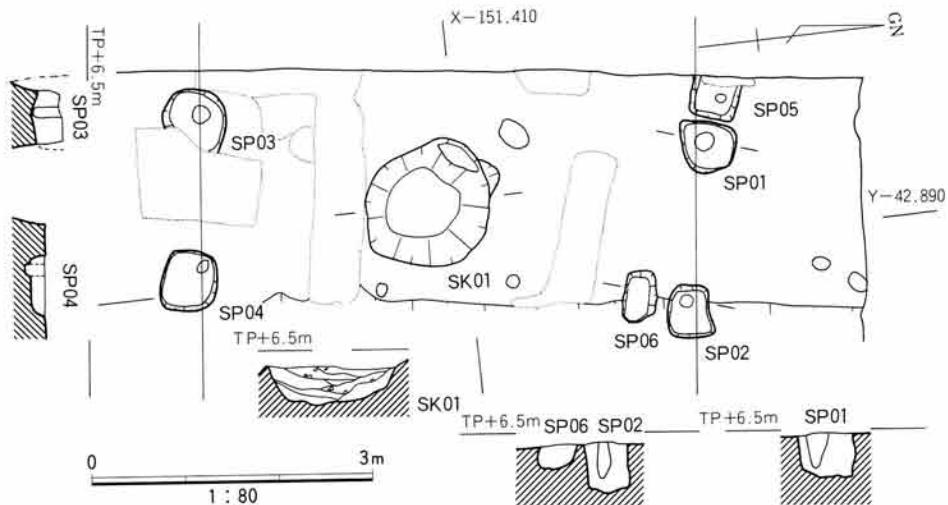


図233 SB01・SK01実測図

る。SB01の主軸線上の位置にある。遺物は上層から出土した須恵器以外はすべて弥生土器であったが、埋土には地山層の偽礫や、上述のSE01の①・②層に類似した包含層の偽礫が含まれることから、飛鳥時代以降に埋戻されたと思われる。

攪乱の埋土中から出土したものであるが、滑石製白玉1054が見つかっている(図232)。扁平な白玉で、輪郭はやや歪んだ円形である。孔形もややいびつな円形となっている。側面中央にわずかなふくらみをもつものの、はっきりとした稜はない。穿孔方向も垂直ではなく、斜めになっている。直径5.7~6.1mm、厚さ1.9mm、穿孔部径は2.8~3.0mmである。

c. 江戸時代以降

調査地の東側4分の3は地下げされていた。その範囲では、4つの段差があり、東側ほど低くなっていた。東側のもっとも低い部分と西側の地山面直上との高低差は最大0.8mであった。本調査地南東のKW87-21次調査地では弥生から古墳時代の包含層が残っていたことから、この地下げは広範囲に及ぶものではなく、この敷地内に留まると思われる。地下げされた範囲には作土層が確認されており、桑津2層の直上では畝や現代の地割に平行する溝が検出された。地下げの時期は江戸時代後半以降と思われる。

調査地の広範囲を江戸時代に地下げされていたため、遺構の全体像のわかるものは少なかった。しかし、KW84-7次調査の掘立柱建物の続きとみられる柱穴が見つかったこと、弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式古段階)の井戸と思われる遺構が検出され、その埋土からガラス小玉が見つかったことは重要な成果であった。

第Ⅲ章 遺構と遺物の検討

近年の調査により、桑津遺跡は後期旧石器時代から人間活動の痕跡のうかがえる遺跡であることが明らかになった。縄文時代の遺構については明確なものが無いが、弥生時代を経て近・現代にいたる複合遺跡であることは、全章の中で述べてきたところである。ここでは弥生、古墳、飛鳥・奈良時代における桑津遺跡の状況について取り上げ、森の宮遺跡や難波宮跡をはじめとする周辺諸遺跡の動態を通してその歴史的な意義について考え、調査成果のまとめとしたい。

第1節 弥生時代の桑津遺跡

1)集落の変遷

畿内第Ⅰ様式段階の集落は桑津遺跡の東方に隣接する杭全遺跡にある(図234)。KW94-16次調査(以下、遺跡略号KWは省く)で確認されたこの遺跡では、環濠と推測される大溝が検出されている。この段階の集落は沖積地に立地しており、続く第Ⅱ様式段階に、西側の低位段丘上に集落を移すと考えられる。両時期の集落域の中間部で行った調査(90-7次、91-3次)では、弥生時代の遺構はみられなかった。このことから、第Ⅰ様式段階から第Ⅱ様式段階への集落域の変化は、集落が徐々に西方に拡大していった結果ではなく、計画的に移転されたものと思われる。92-14次、94-23次で確認された段丘上の大溝は、埋土最下層から第Ⅱ様式の土器が出土しており、この時期に掘削されたと考えられている。この大溝は規模などから環濠と推定されており、段丘上の集落は新たな環濠の掘削という大規模な土木作業を伴って出現したものなのである。この点からも、沖積地から段丘上への居住域の移転は、何らかの意図に基づく計画的なものであったと推測される。第Ⅱ様式段階以降の集落は段丘上に継続的に営まれ、第Ⅳ様式の終末に一旦途絶える。しかし、第V様式の後葉に、遺跡西部を中心に再び居住域が営まれる。



図234 桑津遺跡の弥生時代遺構

2) 住居・井戸

今回の報告では、94-1次に竪穴住居が1棟あるのみであった。しかし、90-14次、91-2次などの調査で多数検出されている柱穴についても住居址の一部である可能性が高い。本書に報告する調査以外では、93-26次に周壁溝や主柱穴が確認された住居址がある[松本啓子1995]。直径10mを測る大型の竪穴住居で、時期は後期後葉と考えられている。また、85-11・13次調査に、中央穴と考えられる長円形の土壙の両脇にピットがあり、それを取巻く

ように柱穴が存在する例が報告されている。これらは中期の住居址であろうと思われる。

京大調査地の隅丸方形遺構[小林行雄1942]について、坪井清足氏は「井戸状の穴が先に掘られ、これを埋めたのち、同じ場所に竪穴をいとなんだものか」と述べ[坪井清足1962]、竪穴住居の可能性を考えられているようである。しかし、これについては90-14次の井戸に明瞭にうかがえるような、井戸上部のテラス状の部分と考えられ、重複する2つの遺構ではなく、1基の井戸とみてよいであろう。

住居址について整理すれば、可能性に留まるものも含め中期の例が3棟(85-11・13次、94-1次)、後期の例が2棟(93-26次)ということになる。後期の例はほぼ同一箇所での建替えが行われている。これらの調査地は遺跡の西半部に位置しているが、中期の柱穴や井戸については遺跡内の広範囲にみられることから、住居が遺跡西半部に偏って営まれていたことにはならない。後世の削平が遺跡東半部により顕著であったことを示すものであろう。

井戸については、畿内第Ⅱ様式または第Ⅲ様式段階のものが2基(95-15・19次)、第Ⅳ様式段階のものが2基(82-7次、95-5次)、第Ⅴ様式段階のものが2基(85-11次、90-14次)確認されている。また、京大調査地の井戸状の遺構(第Ⅲ様式か)を加えるならば、

合計7基になる。井戸は住居址の検出状況とは異なり、遺跡内の広範囲に確認されている。82-7次の例は、第Ⅱ様式段階からの墓域に隣接している。弥生時代中期の各段階の事例が確認できる井戸は、この集落の存続期間を示すものであり、その分布が墓域付近にまで及んでいることは、第Ⅲ様式段階における居住域の拡大を意味していると思われる。

92-14次、94-23次で見つかっている環濠とみられる大溝は、第Ⅱ様式段階に掘削され、第Ⅳ様式段階に埋没する。この点、現在確認されている井戸の時期と大溝の存続期間は一致している。上述のように、第Ⅴ様式後葉の竪穴住居が存在することから、第Ⅳ様式段階をもってこの集落が完全に終焉するわけではないが、第Ⅳ様式の終末に明確な転換期が存在することは確かである。

3) 墓

本書中では、82-7次で3基、83-8次で12基、88-6次で1基以上、90-22次で2基、91-2次で2基、93-2次で新たに2基、合計22基以上の方形周溝墓を報告した。今回報告するもの以外では96-13次で新規に検出された2基がある。ここでは、各方形周溝墓を表5の番号を用いて呼称することにする。

これらの調査のうち、東住吉中学校内で行ったものだけで19基にのぼる方形周溝墓を検出しておらず、この地点が主要な墓域であったことを示している。さらに周辺には数十基からなる方形周溝墓群が存在したと推定される。また、方形周溝墓の時期については、畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式新段階に位置づけられ、段丘上に居住域を移した時期からの墓域であったと考えられる。この地点を以下、東部の墓域と呼ぶ。

一方、88-6次、90-22次、91-2次の各調査地は、桑津遺跡の北部から北西部の広い範囲に点在しており、東住吉中学校内にみられるような集中度では墓域が捉えられていない。しかし、各調査地の方形周溝墓が孤立した存在であったとはいはず、今後この地域の調査が進めば、複数の墓域群として捉えられる状況が明らかになってくるものと思われる。時期については畿内第Ⅲ様式古段階から第Ⅳ様式新段階に属するものがみられ、東部の墓域の状況と比べれば、造墓の開始期、終焉の時期がやや新しくなる。

このように桑津遺跡では多数の方形周溝墓が検出されているが、墳丘内の埋葬施設については確認されていない。21・22号墓では墳丘裾に盛土が遺存していたが、そのほかの調査では墳丘の盛土すら残っていないというのが現状である。このような状況で墳丘規模の比較を行えば誤差が含まれることになるが、おおまかな傾向として、長辺4m前後、長辺

7m前後、長辺10m前後のものが存在するといえそうである。長辺10m前後の規模の方形周溝墓は、2・3・17C・20B・21号墓であり、そのうち17C・20B号墓は、既存の墳丘に拡張を行った結果、この規模に達している。21・22号墓は居住域に隣接した場所に立地していることが注意される。

埋葬主体については、87-23次、88-6次に土器棺墓、82-7次、93-2次に土壙墓と思われる遺構が検出されている。また、5・20B号墓では周溝内埋葬の可能性のある土壙がみられた。

桑津遺跡の墓域の特徴として、居住域の外周に墓域が設定されているが、両区域は非常に近接しており、90-22次調査地周辺においては両区域を分ける溝などの施設も存在しなかった可能性がある。また、82-7次では墓域に近接して併行期の井戸があった。居住域に接し、それを取巻くようにいくつかの墓群があり、その墓群内にあってはかなり高い密度で方形周溝墓が造営されている、といった状況を考えることができる。

4) 東部の墓域

前述したように、東住吉中学校敷地内では比較的広い範囲が調査され、大半の墓がここで見つかっている。はじめに、過去4次にわたって行った調査成果をまとめてみたい。

検出された墓は、方形周溝墓19基(表5)、土壙墓と思われる遺構4基である。前者のうち、2・10~15号墓は攪乱による破壊や調査範囲の制約により、推測に拠るところが大きい。後者も発見順に1~4号土壙墓と呼称するが、このうち1号土壙墓(82-7次SK01)は土器の出土状況からみて、墓と比定するには問題がないわけではない。墓のほかには溝3条(溝1~3)、井戸1基、少數のピットなどが見つかっている(図235)。

遺構の分布を見ると、敷地西部(82-7次、93-2次、96-13次)では、北部に1~3号墓がある。1号墓と3号墓は近接し、周溝の一部が重複した位置関係にある。1・2号墓の東側には周溝墓が分布せず、溝1を隔てて1号土壙墓や井戸が位置する。そして、3号墓の南側に17~19号墓が分布する。各周溝は近接するものの、別々に掘ることが意識されている。この3基に挟まれるような位置に、4号土壙墓がある。さらに南側には16号墓がみられるが、17号墓との間のスペースに溝1が通る。溝1は17・1号墓の東側を台地の等高線に沿って北流する。16号墓の東側にはスペースが存在したようである。一方、敷地東南部(83-8次)では、周溝を共有するものが多く、密集して分布する。そのうち6号墓と11号墓の間に若干のスペースが認められる。溝3は周溝が埋まってから、西から東へ流れ

るようすに墳丘を避けて掘削されたと思われるが、墓域との関連性はよくわからない。

以上から、敷地の西部と東南部の墓の分布状況には明瞭な違いが認められ、両者は別々の墓群と推測される。その間の様相は攪乱が著しいため現段階では明らかでないが、溝1の東側には方形周溝墓が分布しないことや、その延長線上に位置する16号墓東側のスペースに着目すれば、調査区域には西部の墓群の東縁が現れていると思われる。

次に、規模を見てみよう。墳丘裾での長さが判明しているものを便宜的に3段階に区分してみると、以下のようなになる。

10m以上：3・17C号墓

6～10m：1・2・5・6・16B・17B号墓

6m以下：4・7・8・9・15・18・16A・17A・19号墓

規模が大きなものは西部に多く、東南部は全体的に規模が小さいといえる。

続いて、各遺構の築造時期は以下のように推測される。

畿内第Ⅱ様式段階：3・6・7・17A・17B号墓

畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階：16A・17C号墓、1号土壙墓、溝1・2、井戸

畿内第Ⅲ様式古段階：1・2号墓、3号土壙墓

畿内第Ⅲ様式新段階：16B号墓

畿内第Ⅲ様式段階：18・19号墓

96～13次調査で検出した17C・18・19号墓に関しては、整理が済んでいないため大まかにしかわからない。畿内第Ⅱ様式段階のもののうち、土器に前期的な特徴が認められた6号墓は、ほかより古い可能性がある。また、畿内第Ⅳ様式段階の墓は認められず、本地点の墓域は畿内第Ⅱ様式から第Ⅲ様式新段階にわたって営まれたといえる。

以上が現段階での本墓域に関する概要である。墳丘内の埋葬主体はまったく不明で、墳墓の検討には断片的な情報であることは否めない。しかし、集落全体の動態の解明には本墓域の検討も必要であるので、以下では、墓域の構造について若干の検討を試みる。

まず、敷地南東部の墓群に関して、時期を推定できた2基は、西部の造墓開始期と同じ頃か、あるいはこれよりも前に造られたと考えられる。これ以外の時期は明らかでないが、規模や分布に類似性をうかがうことができるので、南東部の墓群は西部よりも古い時期に形成された可能性がある。もう少し分布を細かくみれば、隣接する2基の方位が近似する傾向がある。すなわち、4・9号墓、5・6号墓、7・15号墓、8・14号墓、12・13号墓が方位を一致させたように見え、何らかの造墓原理が現れているのかもしれない。さらに、

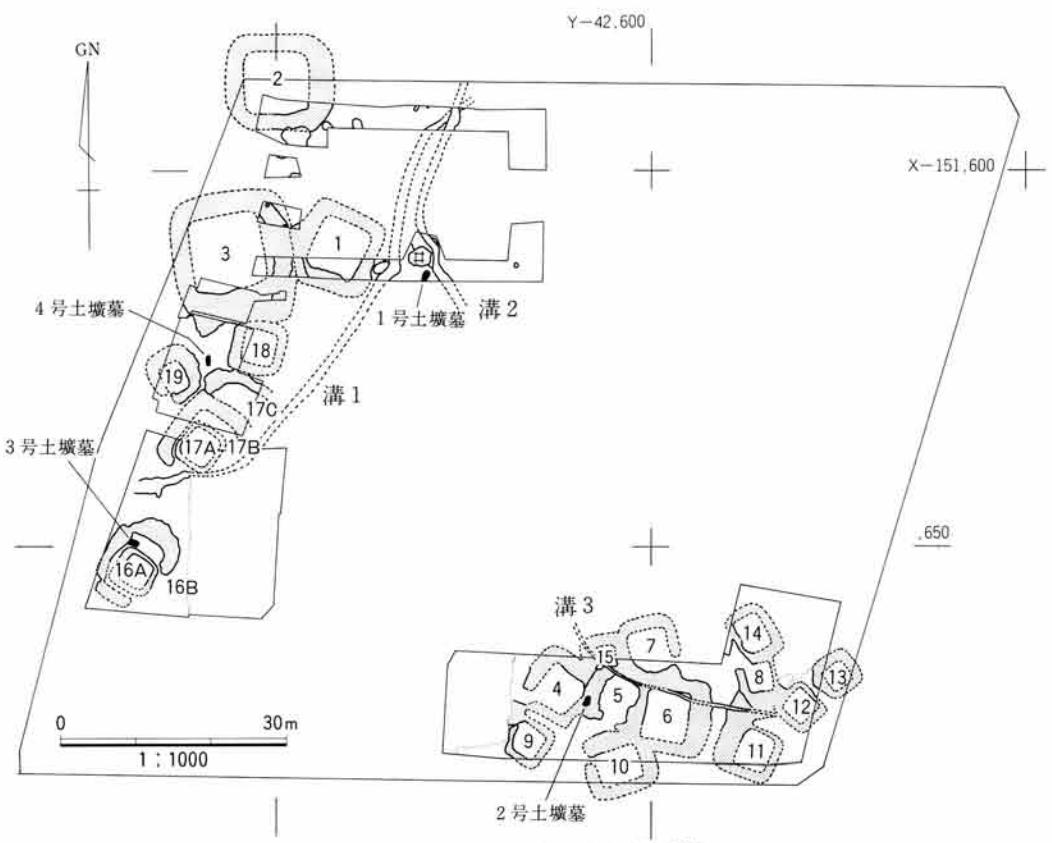


図235 東住吉中学校内の弥生時代遺構

6号墓と11号墓の間を境にして、大きな単位にまとめることができるものかもしれない。しかし、全体としては似たような規模の墓が密集して分布することが特徴といえる。

次に、敷地西部での展開を考えると、はじめに造られるのは3・17A号墓と思われる。3号墓の規模に比して、17A号墓は小さいので、後出した可能性がある。両者の間隔は約13mで、空間が広く利用されている。続いて、17A号墓は2段階にわたって拡張され17C号墓になり、3号墓を凌ぐ大きさとなる。次に築造されたのは、16A号墓と考えられる。16A号墓は17A号墓と方位が近似し、また、この2基の間隔も約13mであり、規格性がうかがわれる。また、井戸・溝1・溝2もこの頃に掘削されたと思われるが、16A号墓との前後関係は明らかでない。溝1の意図には、単に居住域の排水だけでなく、墓域の東側の区画と、16A号墓よりも先行するならば既に存在する墓域の南側の区画、後出するならば16号墓と17号墓が属する墓群の区画が想定される。次に、3号墓の周辺にこれより若干小さめの1・2号墓が造られる。2号墓の方位は3号墓に類似する。一方、1号墓は3号墓

表5 方形周溝墓一覧

番号	調査次数	遺構名	墳丘長	出土遺物	土器様式	備考	掲載頁
1	82-7	方形周溝墓1	一辺7~8m	弥生土器	第Ⅲ様式古段階		26
2	82-7	方形周溝墓2	一辺9m以上	弥生土器	第Ⅱ~第Ⅲ様式新段階		30
3	82-7	方形周溝墓3	12.0m×11.5m(推定)	弥生土器・石器	第Ⅱ~第Ⅲ様式古段階	周溝内に土器埋納ビット。	32
	93-2	方形周溝墓3		・土製品			205
	96-13	SD1005					—
4	83-8	方形周溝墓1	一辺約5.5m	弥生土器			43
5	83-8	方形周溝墓2	6.2m×5.7m	石器		周溝内埋葬と推定される遺構あり。7号墓と周溝を共有。	45
6	83-8	方形周溝墓3	一辺7.0m	弥生土器	第Ⅱ様式古段階	8号墓と周溝を共有。	46
7	83-8	方形周溝墓4	一辺約5m(推定)	弥生土器	第Ⅱ様式	8・9号墓と周溝を共有。	46
8	83-8	方形周溝墓5	一辺5.5m				46
9	83-8	方形周溝墓6	一辺4.5m				46
10	83-8	方形周溝墓7	不明				43
11	83-8	方形周溝墓8	不明				43
12	83-8	方形周溝墓9	不明				43
13	83-8	方形周溝墓10	不明				43
14	83-8	方形周溝墓11	不明				43
15	83-8	方形周溝墓12	一辺3.3m				43
16A	93-2	方形周溝墓1A	4.1m×3.1m以上	弥生土器	第Ⅱ~第Ⅲ様式古段階		196
16B	93-2	方形周溝墓1B	8.0m×6.0m	弥生土器・石器	第Ⅲ様式新段階	16A号墓の拡張。	199
17A	93-2	方形周溝墓2A	一辺約4m(推定)	弥生土器・石器			203
17B	93-2	方形周溝墓2B	一辺約8m(推定)	弥生土器	第Ⅱ様式	17A号墓の拡張。	203
	96-13	SD1004					—
17C	96-13	SD1002	一辺13.6m	弥生土器・石器	第Ⅱ~第Ⅲ様式	17B号墓の拡張。	—
18	96-13	SD1001	一辺約4.5m(推定)	弥生土器・石器	第Ⅱ~第Ⅲ様式		—
19	96-13	SD1003	3.4m×3.5m(推定)	弥生土器・石器	第Ⅱ~第Ⅲ様式		—
20A	88-6	方形周溝墓1	7.5m×5.0m(推定)	弥生土器	第Ⅲ様式新段階		80
20B	88-6	方形周溝墓1	10.0m×5.0m(推定)	弥生土器	第Ⅲ様式新段階	20A号墓の拡張。	80
21	90-22	方形周溝墓1	9.5m×7.0m	弥生土器・石器	第Ⅲ様式古段階		130
22	90-22	方形周溝墓2	不明	弥生土器	第Ⅲ様式古段階	21号墓と周溝を共有。	131
23	91-2	方形周溝墓1	7.0m×5.5m	弥生土器	第Ⅳ様式新段階		136
24	91-2	方形周溝墓2	不明				136

に近接するが、方位が17号墓や16号墓に近似することや、これらがほぼ等間隔で造られることから、西部の墓域の東縁が意識されていたと思われる。また、土器の出土状態からみて、3号墓ではこの段階に、何らかの葬送に関する儀礼が行われた可能性がある。次に、3号墓と17C号墓の間の空間を埋めるように、西部ではもっとも小規模な18号や19号が造られたと思われる。また、溝1の南側では16A号墓が16B号墓に拡張される。

以上から、西部で検出した墓群は、1~3号墓、17~19号墓、16号墓の3グループに分

けることができるようと思われる。第一のグループは比較的大きな墓が多く、さらに西方へ連続すると思われる空間を、地形に制約されずに比較的広く使った状況が見受けられるので、優位な集団のものと考えられる。しかし、2号墓は若干離れているので、別の墓群に属していた可能性も否定できない。第二のグループでは、初期には小規模であった17号墓が2度の拡張を経て本遺跡で最大規模となる。後続する18・19号墓が小さいのは割り当てられていた空間が狭くなっていたことによるのかもしれない。第三のグループは若干後出し、溝1を挟んで前二者と隔てられる。現状では単独であるが、西・南方へ拡がる墓群の可能性がある。第二・第三のグループは方位や、墓の拡張を行ったことなどにおいて、共通性が見受けられる。

そして、西部と東南部の墓群を比べるならば、1基ごとの規模が大きいこと、各グループに当初割り当てられた空間が比較的広いと思われること、拡張した例が複数みられること、グループ間の格差が認められることが西部の特徴といえる。また、周溝の外側に位置する土壙墓がみられることも注意される。

では、西部と東南部での様相の違いは何に起因するのであろうか。両者が並行して営まれた墓群なのか、時期差がある墓域なのか、現状では資料的な制約が多く決しがたいが、東南部が畿内第Ⅱ様式でも古い段階までの墓域で、それ以後に設けられたのが西部の墓域と考えれば、墓域の構造の時期的な変化を考えることができる。その変化には周溝墓1基への多人数埋葬が計画されたことが多くなったこと、集団内の格差が顕在化してきたことが現れていると考えられ、この背景には畿内第Ⅱ様式段階に桑津遺跡の集団が成長を遂げるような状況があったのではないか、と推測される(註1)。

5) 遺物

畿内第Ⅳ様式古段階に属するKW90-14次調査SE01の土器について、口縁部の残存するものを抽出し、個体数を調べた。その結果、全個体数は299点で、その内訳は壺84点、鉢55点、高杯67点、甕73点、その他20点であった(図236)。その他の器形には無頸壺、蓋、水差、器台、飯蛸壺、台形土器、ミニチュア土器がある。胎土中に角閃石を含むものを調べたところ、34点あり、全体の11%を占めていた。これを各器形ごとみると、壺において角閃石を含むものの割合が高いことがわかる。また、水差は5個体中、2個体が角閃石を含有するものであった。壺の中でも有段口縁のものや、口径30cmを越える広口壺に角閃石を含むものが多くみられた。甕についてみると、口縁端部を垂下するもの、如意形の口縁

をもつものに角閃石を含むものがあるが、口縁端部をつまみ上げる甕には該当するものはなかった。

このSE01からは綾杉文のある器台、貝殻腹縁による刺突文の施された壺といった東部瀬戸内系の土器が見つかっている。また、近江系の甕も1点出土した。石器遺物の中では磨製石剣の出土が注目される(註2)。

そのほかの調査の遺物では、93-2次に、矢羽根形文のある器台、杏仁形スカシ孔のある高杯が東部瀬戸内地域の影響のみられるものとして上げられる。また、胎土中に結晶片岩が多量に含まれ、紀伊地域からの搬入品と思われる土器もあった。報告外では95-15次に山城地域のものとみられる甕が出土している[久保和士1997a]。87-23次、93-2次では、浅い擂鉢形をした土器(197・828)が出土していた。これと類似するものは85-11次でも見つかっている。桑津遺跡以外では類例のみられないこのような器形の存在は注意しておく必要があろう。

95-5次ではガラス小玉が1点出土した。大阪市内の弥生時代のガラス製品として、中期の例が加美遺跡に3点、後期の例が長原遺跡に9点ある(原色図版2)。

6)周辺遺跡の状況と今後の課題

[酒井龍一1984]では、桑津遺跡周辺における拠点集落の可能性のある遺跡として、森の宮・瓜生堂・亀井・瓜破・山之内の各遺跡が挙げられている。これらの遺跡は桑津遺跡から4.5~7.0kmの範囲にあり、桑津遺跡はその扇の要の位置にある。

森の宮遺跡では前期の居住域が段丘上にあり、中期になってから東側の低地部に居住域が移ると考えられている[平田洋司1995b]。これは桑津遺跡とは逆方向の動きであり、その背景については今後さらに検討される必要がある。後期に入ると遺物量が減少するといわれ[平田洋司1996]、桑津遺跡と同様な傾向がある。

桑津遺跡とよく似た遺構・遺物の内容をもつ複合遺跡として、長原・瓜破遺跡がある。

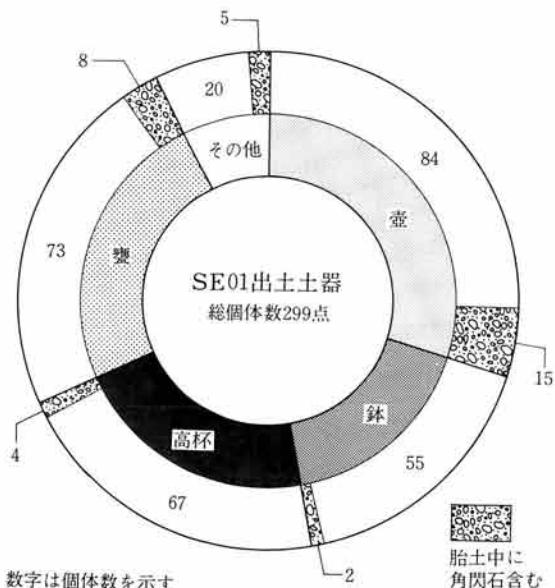


図236 KW90-14次SE01出土土器の組成

長原遺跡には、桑津遺跡でまだ解明されていない縄文時代晚期や弥生時代後期といった時期の遺構・遺物が顕著に認められるといった特色がある。しかし、ともに河内平野を望む台地の縁辺部に形成された遺跡であり、変遷過程にみられる類似点は遺跡立地の共通性との関係で注目されよう。瓜破遺跡ではUR96-12次調査で、畿内第Ⅱ様式段階の居住域が確認された[久保和士・宮本康治1997]。竪穴住居のほかに、桑津遺跡ではまだ確認されていない掘立柱建物が10棟検出されている。桑津遺跡における掘立柱建物については今後の追求課題であるといえる。

自然堤防上に立地する瓜生堂遺跡や亀井遺跡では、墓や環濠の状況が明らかにされている。亀井遺跡では環濠帯とも呼ばれる、幾重にも巡る大溝が見つかっている。これらの大溝群が可視的な外縁施設としての役割をはたしていたとされる[酒井龍一1982]。桑津遺跡においても環濠と推定される大溝が検出されている。大溝の機能を明らかにするために、その周囲の状況については注意を払う必要がある。亀井遺跡は前期から後期後半まで、集落の位置を変えながら、連綿と営まれ続けた[高島徹1983]。「後期1」の直後、集落は一時期途絶えた[広瀬和雄1986]、ともいわれるが、河内平野において中核的存在であったと思われ、桑津遺跡を評価していく上でも注視すべき遺跡である。

山之内遺跡に関するはじめての包括的な報告である[大阪市文化財協会1998]では、弥生時代前期から中期の竪穴住居35棟、方形周溝墓26基について述べられている。桑津遺跡の消長と類似する点を多くもっており、両遺跡間には密接なつながりがあったものと推測される。山之内遺跡で最大規模の方形周溝墓は居住域内に単独で築造されていた。このことは90-22次で見つかった21号墓が、大型に属し、居住域に隣接していたことと共通するあり方を考えることができる。

以上から、居住域・墓域の構造の解明がまず当面の課題であるといえよう。桑津遺跡においては、特に北部や北西部の墓域、居住域の広がりに不明な点が多い。また、桑津遺跡周辺の各遺跡にもいえることであるが、各集落の生産域がまだ明確ではない。各集落の実態を解明しつつ、相互の比較検討を行う中で、河内平野の弥生時代社会が具体的な姿で描けるようになろう。

(註)

(1)墓域の構造の検討に際しては、[都出比呂志1986]を参考にした。

(2)磨製石剣については、KW92-4次調査[櫻井久之1993]、森小路遺跡MS93-35次調査[平田洋司1995a]で銅劍形石剣が出土している。

第2節 古墳時代以降の桑津遺跡

1) 古墳時代

桑津遺跡において古墳時代の遺構・遺物が顕著になるのは中期以降である。しかし、桑津遺跡の北北東1.5kmには御勝山古墳、南1.5kmには有黒斑の鰐付円筒埴輪の出土したTH89-3次調査地があり、前期末ごろから古墳の造営が開始されている地域であるといえる。桑津遺跡の西方1.4kmの阿倍野筋遺跡では前期の住居址が3棟確認されており[佐藤隆・前田勝己1990]、桑津遺跡においてもこの時期の遺構・遺物が存在する可能性は高い。

中期の遺構として、今回、87-20次の竪穴住居、87-23次の初期須恵器を出土した溝などを報告した。報告外の92-14次調査では土壙墓と考えられる遺構があり、口縁部に打ち欠きのある須恵器の憩・直口壺・杯身が出土している。これらの須恵器はTK208型式に属するものである。また、85-14次では土師器甕を正置した状態で用いた土器棺が検出されている。さらに、82-1次ではTK216型式の杯身が出土した土壙があった。現在、明らかになっている中期の遺構はこの程度で、この時期の状況を十分に把握できていないのが現状である。遺物としては86-2次、94-4次で出土した多量の埴輪が注目される。第Ⅱ章の報文中でも述べる通り、これは付近に古墳が存在したことを示すものである。埴輪の出土している調査地はこのほかにも6件あり(註1)、埴輪は遺跡東半部の段丘縁辺部から出土する傾向がある。一方、地籍図などから推定されている古墳は遺跡の西部にまとまっており、少なくとも2群からなる古墳の分布が考えられる。

後期の遺構としては6世紀後半以降のものがみられる。須恵器型式のMT15、TK10といった段階の遺構・遺物については現在のところ明らかでなく、中期の遺構・遺物との間に断絶期間があることも考えられる。今回報告した中で、後期の遺構の確認された91-2次、91-8次では飛鳥時代にまで継続的に遺構がみられる。報告外の調査では、93-26次で竪穴住居が2棟検出されている[松本啓子1995]。桑津遺跡の周辺においても、この時期の遺構がやや唐突に出現している可能性がある。桑津遺跡の南西1.1kmの山坂遺跡では掘立柱建物が確認されており[積山洋1996]、山坂遺跡の東450mにある田辺4丁目所在遺跡(註2)では須恵器の憩・提瓶・甕が出土した土壙が検出されている。桑津遺跡の古墳時代中期末、そして後期中葉はひとつの転換点となるものと推測される。

2) 飛鳥・奈良時代

飛鳥時代の掘立柱建物が91-2・8・16次で検出された。91-2次のSB01はTK209型式段階のものと考えられ、同調査地にはSB01の棟方位と平行するTK43型式段階の溝SD01もあった。91-8次の建物群は2時期に分かれ、I期の建物群についてはTK43型式からTK217型式までのうちに、II期の建物群はTK217型式段階のものと推定された。II期に属するSB05の柱痕跡より出土した土器から、TK217型式の中でも新しい傾向の現われるところ、この建物群は放棄されたと考えられる。この傾向をもつ土器は同調査地のSE01廃絶時の埋土からも出土しており、井戸と建物群は同時期に放棄されたとみられる。91-2次調査地の東に位置する91-16次では、91-8次の建物群とほぼ同じ棟方位をとる建物があった。また、土器を廃棄した土壙SX25が見つかり、出土遺物にTK209型式・TK217型式の須恵器、それに飛鳥IIの土師器があった。

以上に述べた3調査地が桑津遺跡の北部から北東部に位置することは注意される。この地域ではTK43型式の段階から人の手による造作が加えられ、TK217型式の新段階、飛鳥IIのころに建物群が放棄されている。報告外では83-14次にTK217型式段階の建物がある。この建物は6間×2間の掘立柱建物で、91-8次のSB04と規模・構造が類似している。87-36次では、飛鳥IあるいはIIの土師器杯を埋納する土壙が検出されている。報告外の2調査地は遺跡の北西部にあり、飛鳥時代の遺構が北部や北東部に限定されるものでないことがわかる。なお、上述の83-14次では土師器甕を使った土器棺墓も見つかっている。

飛鳥IIIの時期以降、遺跡南西部には田辺廃寺が建立された。田辺廃寺に関連する軒瓦は今回報告した88-21次、91-18次で出土している。前者は推定寺域の北辺、後者は東辺にある。一方、87-20次調査地は推定寺域のほぼ中央に位置する。この調査では正南北方向をとる奈良時代の大溝が2条検出された。現在の推定寺域の範囲では、その東半部が谷地形の斜面部に当っており、範囲の指定に疑問点を含んでいるといえる。87-20次の大溝が寺域東限に關係するものといえるならば、地形的な特徴とも整合してくる。現在の寺域の推定範囲は、1925年に多量の屋瓦が出土した近鉄南大阪線北田辺駅北方約150m地点[山本加三1926]をその中心としている。上述の大溝を寺域東限とすれば、この地点は寺域の東縁部となってくる。田辺廃寺の寺域については、現在の推定範囲のさらに西側を含めて検討していく必要があろう。

飛鳥III以降の建物は、90-10・22次、94-1次、95-5次にあり、今回の報告以外では83-14次、84-7次に掘立柱建物が検出されている。本書に報告した91-18次では飛

鳥Ⅳあるいは平城宮Ⅰの時期の井戸があり、報告外の92-32次では飛鳥ⅢないしⅣの時期と思われる井戸が見つかっている。これら飛鳥Ⅲ以降の遺構は桑津遺跡の西半部に集まる傾向が認められる。

飛鳥Ⅲの時期、上町台地上では前期難波宮の造営に伴って難波宮下層遺跡が廃絶し[南秀雄1992]、宮域の南に位置する天王寺区清水谷町では前期難波宮に関連するとみられる造成によって取り壊された建物が確認されている[松本啓子1993]。また、同じ清水谷町で行った別の調査では、6世紀末～7世紀前半の建物群が7世紀中頃には方位を意識した建物群になると報告されている[大阪市文化財協会1991]。この時期、桑津においては遺跡北部・北東部の屋敷地を廃し、遺跡西半部に居を構え、氏族寺院を建立した。また、94-4次ではTK217型式段階の溝SD06から多量の埴輪が出土し、付近に存在した古墳をこの時期に破壊しているのではないかと推測された。こうした動きも前期難波宮の造営という国家事業に起因するものと考えてよいのではなかろうか。それまでは西除川の水利の得やすい遺跡北部・北東部が遺跡のいわば正面玄関であったが、この時期から遺跡西側が正面と意識されるようになったのであろう。このことは、遺跡西部に推定されている「難波大道」に関する『日本書紀』白雉4(653)年の記事、「脩治處處大道」[黒板勝美1986]に関連するものと思われ、土器の年代観に変更が生じなければ、『書紀』の記述を間接ながら裏付けるものとなろう。

(註)

- (1) 塩輪が出土したそのほかの調査には、82-1次、82-7次、87-18次、91-8・18次、92-14次がある。
- (2) 田辺4丁目所在遺跡は、TQ95-1次調査で新規に発見された遺跡である。この遺跡の西方にある山坂遺跡とは一連の遺跡であることも考えられる。

付章 田辺東之町遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と環境

田辺東之町遺跡は東住吉区東田辺3丁目に所在する遺跡である。上町台地と、旧西除川によって形成された自然堤防に挟まれた扇状地性低地[原秀徳1982]に立地する(図2)。

周辺の遺跡に目を向けると、まず東南300mの鷹合町に酒君塚古墳が所在する。後円部のみが遺存する前方後円墳と考えられているが、規模・時期などは明らかでない[上田宏範1988]。北500mには田辺4丁目所在遺跡、北西850mには山坂遺跡[積山洋1996]が位置し、双方で古墳時代後期の集落跡が調査されている。後者の山坂神社付近には大型の前方後円墳があったと推測されている[上田宏範1988]。北方1.7kmには本書で報告した桑津

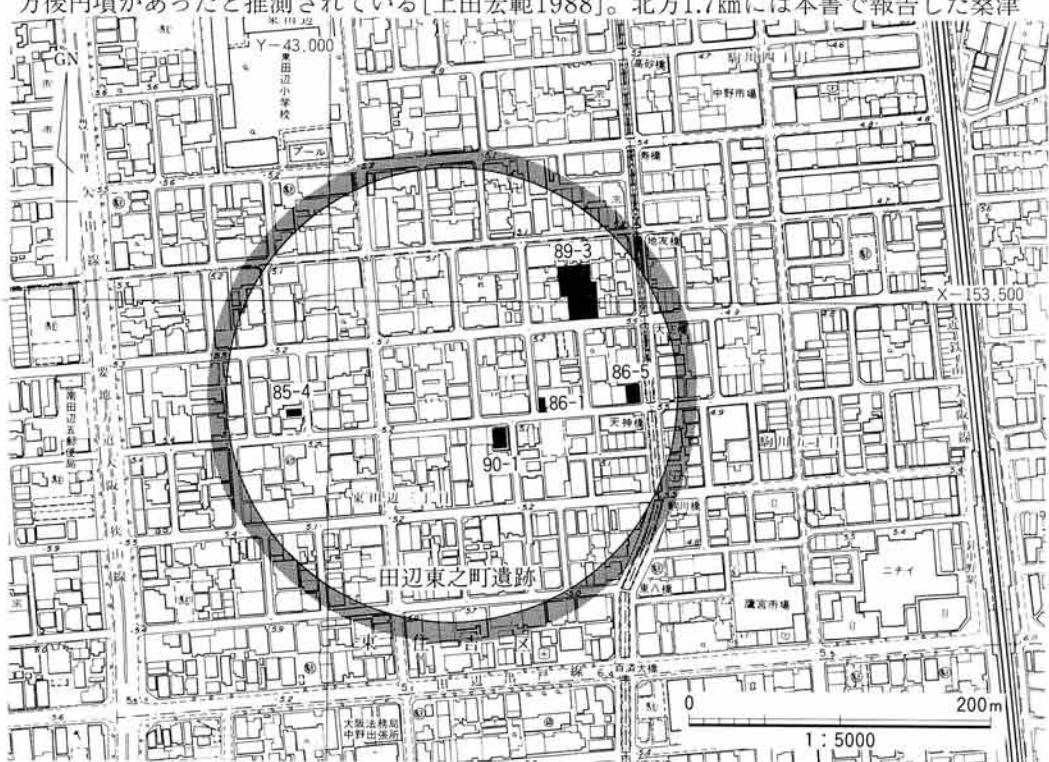


図237 田辺東之町遺跡の範囲と既調査地

遺跡・田辺廃寺がある。この遺跡の西部には地籍図に「塚」地名があり、いずれも古墳と考えられている。このような上町台地の東斜面に立地する古墳は田辺古墳群と総称されているが、現段階ではこの地域において、削平され埋没している古墳が発掘調査で明らかになつた例はない。しかし、桑津遺跡で多量の埴輪が見つかる地点があることから、地点によつてはその蓋然性は高いといえる。さらに、北方4kmには御勝山古墳がある。御勝山古墳はⅡ期の埴輪をもつ前方後円墳で、墳丘長約110mと推定されている。埴輪に本遺跡との共通点が多いことで注目される。南方に眼を転じると、約1km離れて矢田部・照ヶ丘矢田の両遺跡がある。ここでは弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構・遺物が見つかっている。

このように、周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多くみられる。さらに、飛鳥・奈良時代以降も、田辺廃寺や難波大道跡、そして狭山池を水源とする旧西除川に近接する環境にあり、本遺跡を考えるうえでの重要な要素であろう。

さて、本遺跡が学界に知られるようになったのは、1959年4～5月に谷彰一氏が遺物を採集したことに端を発する。谷氏は当時、遺跡中央部を東西に横断するような形で行われていた下水道の工事現場から遺物を採集したと思われ、地層のようすもていねいに記録・紹介した[谷彰一1959]。それによれば、駒川橋の西側200mにわたって「沼沢性の砂質層と有機質を多分に有する暗ウスズミ色粘土層」からなる遺物包含層が存在し、土師器・須恵器・木製品などが出土したらしい。木製品や「植物の半化石の小片」の記載からみても、低湿な堆積物の存在がうかがわれ、先に述べた後背湿地的な立地に関連する可能性もある。

これが契機となり、田辺東之町遺跡の名で埋蔵文化財包蔵地として登録されるにいたつたのである。そして、現在までに5回の発掘調査が当協会によって行われてきた(図237)。TH85-4次調査は初めての発掘調査で、古墳時代の竪穴住居址と多数のⅣ期の埴輪片が見つかった[京嶋覚1987]。続いて行われたTH86-1・5次では奈良時代の井戸や溝が検出された[富山直人1988a・b]。TH90-1次でも奈良時代の遺構が検出され、ほかにⅡ～Ⅳ期に属する埴輪が見つかっている[金村浩一1991](註1)。過去5回に及ぶ調査のうち3回で、古墳に伴わない状態で埴輪が見つかっていることが本遺跡の特徴の一つといえる。

本章では残る一件のTH89-3次調査について報告する。なお、本調査で出土した埴輪については、すでに[西畠佳恵1990]などで紹介されている。

(註)

(1) TH90-1次調査で出土した埴輪の一部は、[積山洋1992]・[伊藤純1994]で紹介されており、前者ではⅣ期に属する可能性のある口縁部破片、後者ではⅡ期の鰐付円筒埴輪の好資料が掲載されている。

第2節 TH89-3次調査

1) 調査調査の経緯と経過

今回報告するTH89-3次調査(註1)は東田辺3丁目6で行ったものである(図238)。ここに住宅建設が計画されたため、1989年4月18日に試掘調査を行った結果、多くの土師器片を含む遺物包含層が確認された。これをうけて、建物予定範囲の本調査を6月7日から行うことになった。

調査は包含層上面まで重機による掘削を行い、それ以下は地山面まで人力による掘削を行いながら作業を進めた。包含層は調査区全面に認められ、調査区北東部では0.5mの厚さを残していた。遺物の大半は飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器であったが、調査区南部ではこれらの遺物に混って埴輪片が出土した。調査を進めると、埴輪片は幅4.5mの溝から多く出土することが確認された。このため溝の性格を明らかにする必要性から、調査区の南方向への拡張が望まれた。そこで教育委員会と原因者の間で協議が行われた結果、拡張調査が認められ、6月22日まで調査を行った。総調査面積は255m²となった。

なお、本調査で使用した方位は磁北である。

2) 調査結果

i) 層序(図239)

第1層：現代客土である。層厚約30cm。

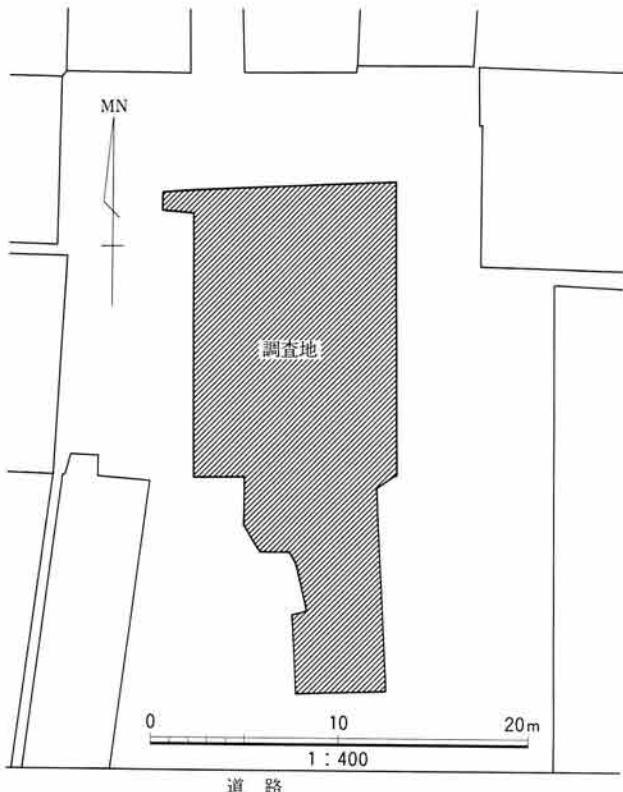


図238 TH89-3次調査地位置図

第2層：飛鳥・奈良時代の遺物包含層である。上下に細分でき、上部は粗粒砂を含む褐色シルトで、層厚は10~20cm。下部は砂を含む暗褐色粘土質シルトで、最大層厚は50cm。調査区の北東部にみられた包含層で、遺物の時期は上部と大差はない。

第3層：含砂礫にぶい黄色粘土質シルトで、地山に相当する。上面の標高は4.8m。

ii) 第2層出土の遺物(図241~243、写真13・14、図版96・97)

土師器1055~1064、須恵器1065~1080、土師質の瀬戸内型土錐1081~1087、石鎌1088・1089が出土した。

土師器 1055~1059は杯である。1056・1057は飛鳥II、1055は飛鳥III、1058・1059は平城宮II~IIIに比定される。1060~1062・1064はIIIである。1064には低い高台が付き、内面には2段の放射状暗文と底面に螺旋状暗文が施されている。1062は飛鳥時代、ほかは平城宮IIIに属する。1063は甕である。外反する口縁部の端部が若干つまみ上げられ、胴部外面はタテハケ、内面は縦方向のナデ調整である。奈良時代のものと思われる。これらの土師器の胎土はおおむね精良であるが、1062には砂粒が若干多く含まれる。

須恵器 杯にはさまざまな形態がみられ、1065~1068は杯H蓋、1069~1072が杯H、1073・1074が杯G蓋、1075が杯B蓋、1077が杯B、1076が杯Aである。1065は口端部の形態から古墳時代のものと思われる。1066~1074はTK217型式に属する。1075~1077は平城宮IIIに比定されると思われる。1078は短頸壺の蓋、1079は長頸壺、1080は甕である。1078は天井部の内外面にヘラ記号が施されている。

土錐(図242・写真13) 1081は唯一完形の瀬戸内型土錐で、長さ7.1cm、幅1.3cm、重さ16.2gである。ほかの破片も大きさはほぼ同じと思われる(表6)。端部は入念に成形され、穿孔面の片方は平坦である。また、端部側面の一方は整形時の痕跡をよく残すのに対して、他方は丸みを帯びる。前者の面に沈子綱があたっていたと考えられる。これらの土錐の胎土は容器と同様に精良であるが、長石の微細粒が若干多く含まれている。

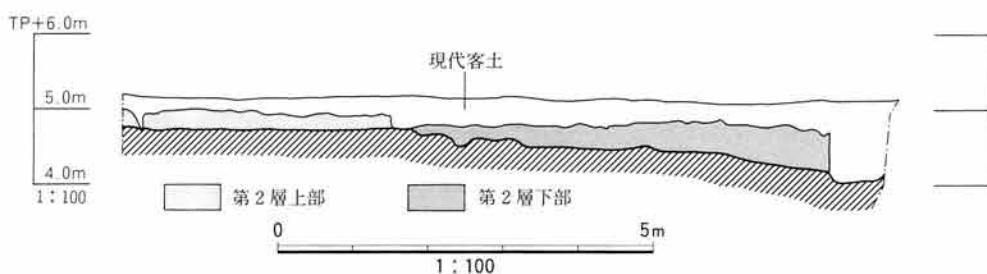


図239 調査地北壁断面図

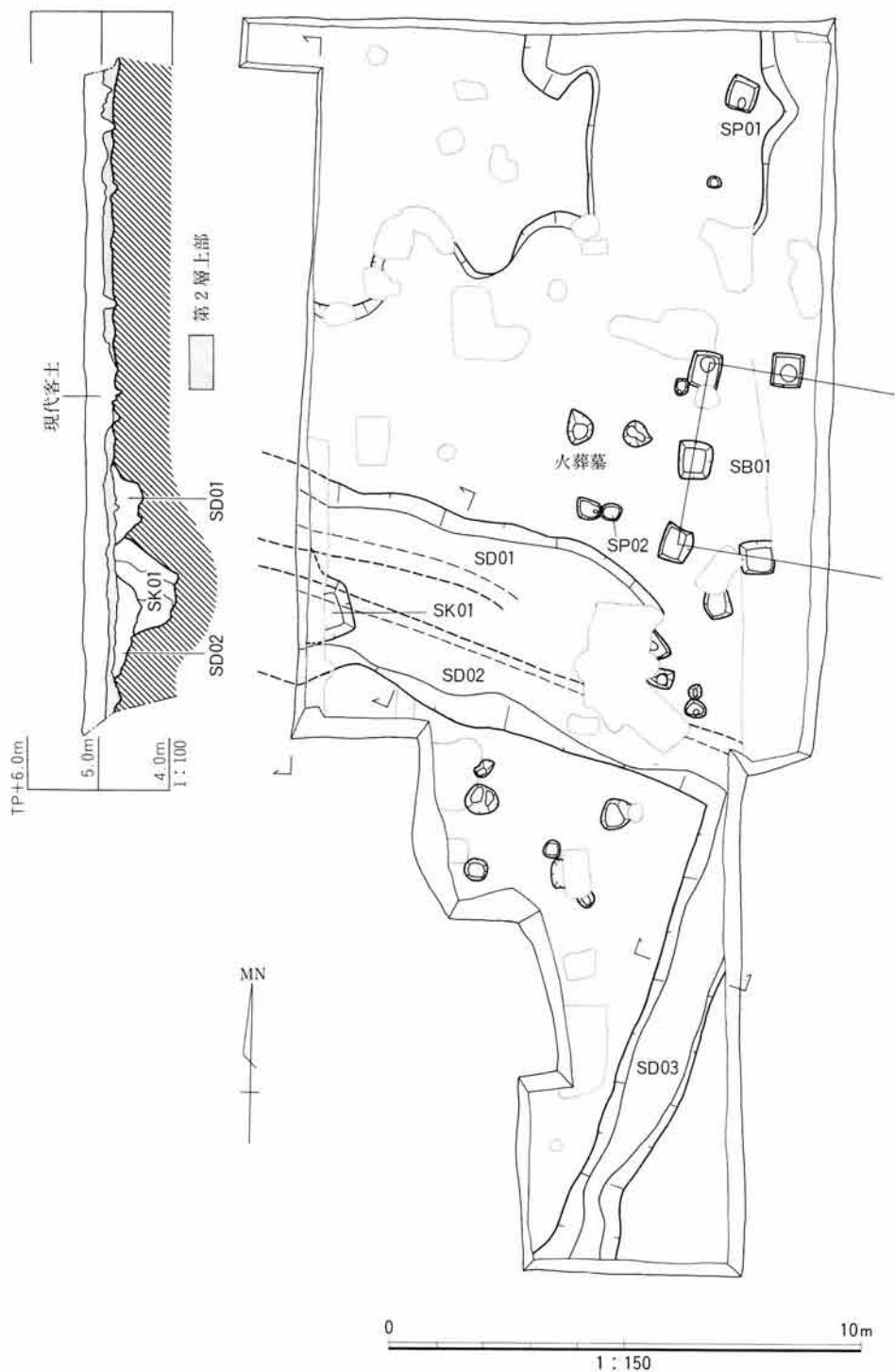


図240 調査地全体図および西壁断面図

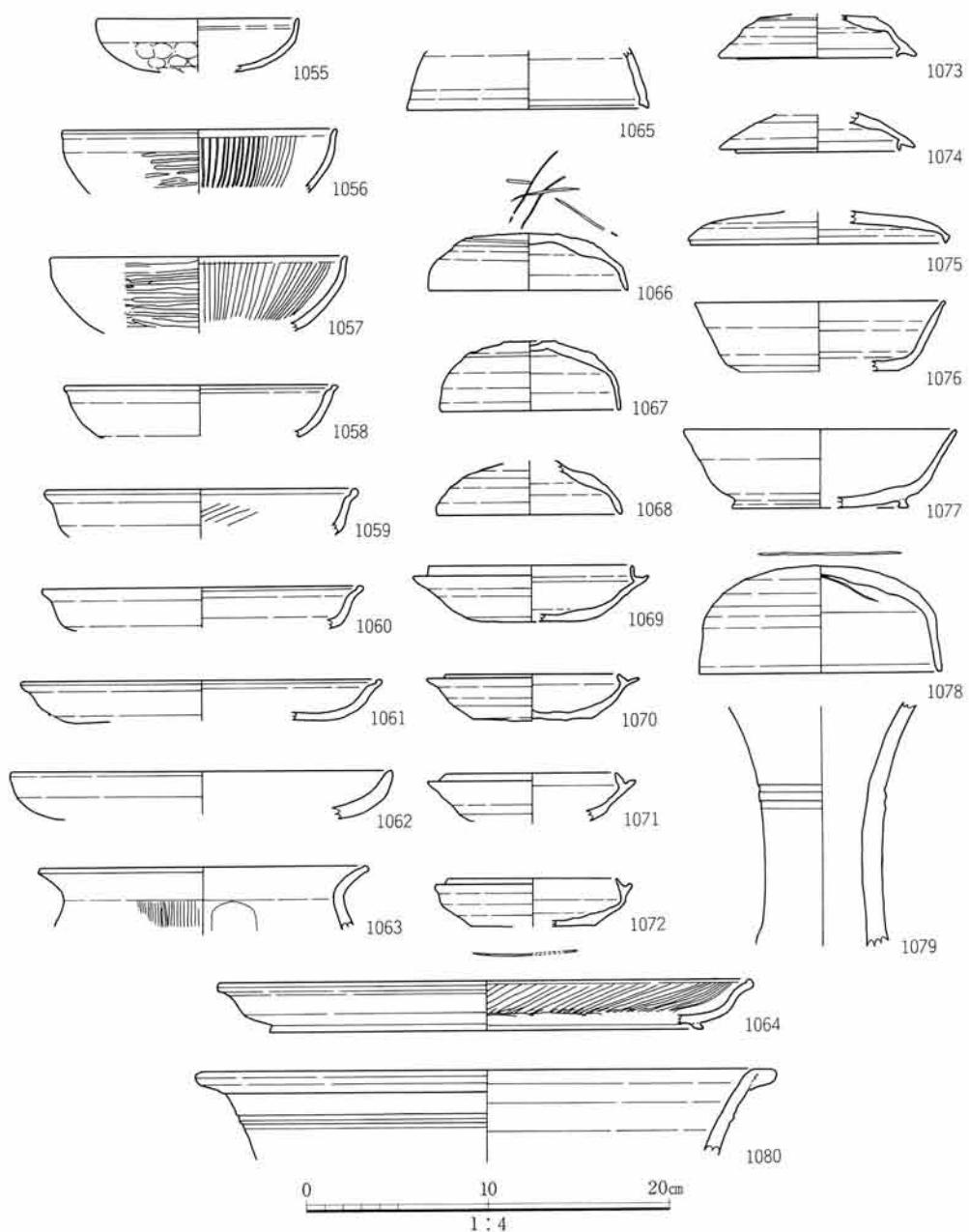


図241 第2層出土土器

石鎌(図243・写真14) 1088は凹基無茎式石鎌で、完形である。平面の輪郭は縦長の三角形で、作用部側縁はやや内湾ぎみである。逆刺の先端は丸く作られ、基部の抉りはやや浅めである。縄文時代早期から中期のものであろう。長さ2.60cm、幅1.30cm、厚さ0.45

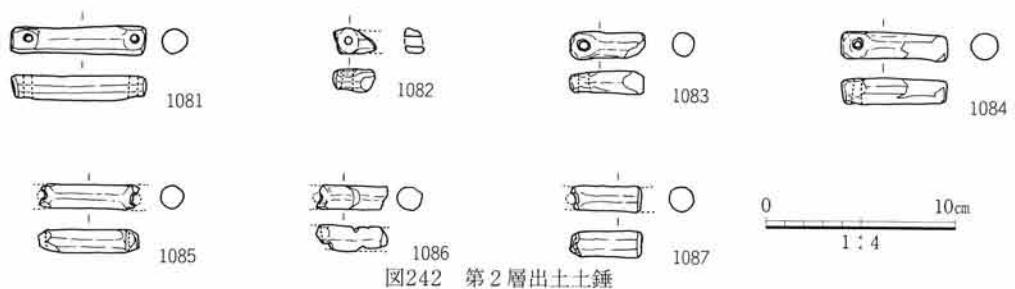


図242 第2層出土土錐



写真13 TH89-3次第2層出土土錐

表6 TH89-3次出土の土錐計測値

番号	遺存状態	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)
1081	完形	7.1	1.3	0.4	16.2
1082	端部片	2.2+	1.2+	0.4	3.0+
1083	1/2欠	3.9+	1.3	0.5	7.2+
1084	一端欠	5.6+	1.3	0.4	11.5+
1085	両端欠	5.2+	1.3	0.5	9.6+
1086	体部片	3.7+	1.3	—	6.8+
1087	体部片	3.7+	1.3	—	8.3+

+は現存値を示す

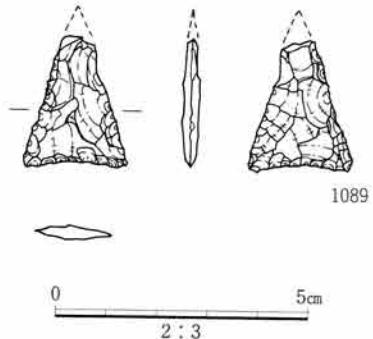


図243 第2層出土石鏟

cm、重量1.0 gである。1089は平基無茎式石鏟で、切先を古い折れで欠損する。平面の輪郭はやや縦長の三角形で、作用部側縁は直線的である。また、作用部は鋸歯縁となっている。大きさの割に薄手である。これに類似する形態は縄文時代晩期から弥生時代にかけて多い。残存長2.60cm、幅2.00cm、厚さ0.35cm、重量1.5 gである。

iii) 遺構と遺物(図版37・38・96~100)

遺構は第1層基底面と第3層上面で検出された。時期は前者が平安時代、後者が飛鳥・奈良時代に相当する。時期の古いものから順に記載し、埴輪については出土位置による差異を見い出しがたかったので、別に記載する。

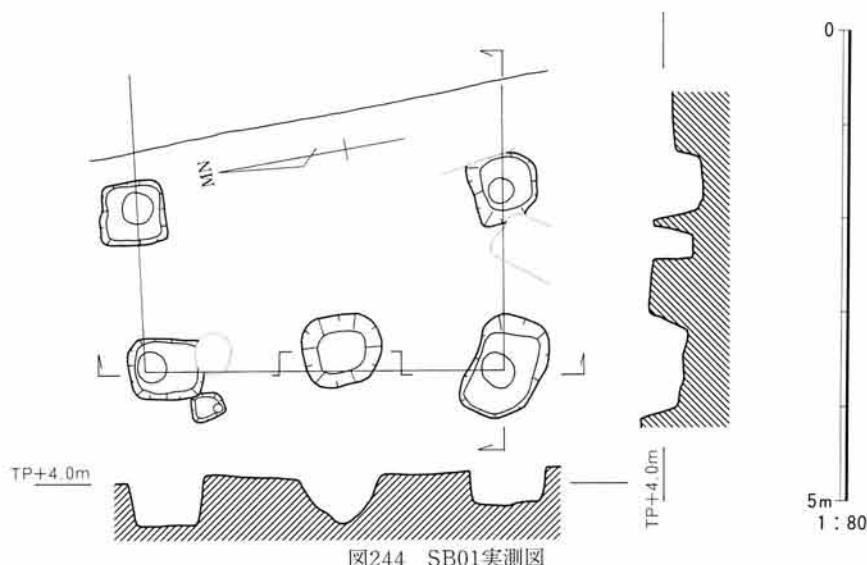
a. 飛鳥・奈良時代

SB01(図244・246) 梁行3.9m(2間)×桁行1.65m(1間)以上の掘立柱建物で、棟方位はほぼ正東西方向である。掘形の平面形は一辺70cmの方形で、深さ約50cmである。柱痕跡は径25~30cmで、掘形の埋土は含砂礫暗褐色粘土質シルトである。

掘形内から土師器甕1091と須恵器杯蓋1095が出土した。1091は大きく外反する口縁部に強いヨコナデが施される。胎土は精良である。1095は口径11.8cmで、TK217型式に属する。双方とも細片であるので建物の時期は第2層の年代も考慮して、7世紀後半から8世紀前半と考えておきたい。

柱穴(図240・246) SP01は調査区北東隅に位置する柱穴で、掘形や柱痕跡の規模はSB01の柱穴と近似する。また、SB01の妻側のラインの延長線上に位置する。よって、SP01はSB01と共存した別の建物の柱穴である可能性が高い。遺物は須恵器杯蓋1094が出土した。口径は13.6cmと大きく、身受けのかえりもしっかりしているので、時期は飛鳥Ⅲと考えられる。また、SP02からは須恵器高杯1098が出土した。

SD01・02(図245・246) 調査区南部で検出した溝である。調査時には若干の問題点を



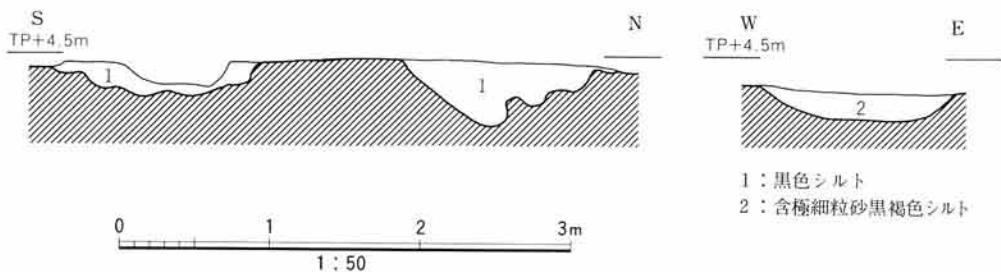


図245 SD01~03断面図

残しつつ幅4.5mの一つの溝と考えられていたが、報告書作成時に調査記録の検討によって2条の溝が切合うか合流するかのいずれかであることが判明した。北側のものをSD01、南側のものをSD02と呼称する。両者とも規模は幅1.3m、深さ0.35mで、埋土も含砂礫黒褐色シルトで近似する。方位は西でやや北に振る。両者は西側ではやや南に方位を振りながら連続することがトレンチ調査で確認できたが、東側ではSD01は途切れるか、SD02と重なる。SD02は当初東南方向へ延び、SD03に切られていると考えられていた。しかし、両者が切合うと考えられた場所から北にはSD03が延びないことから、SD02は南へ屈曲してSD03へ繋がると考えられる。両者のなす角度はほぼ直角である。

以下、両溝の遺物をまとめて報告する。双方から土師器・須恵器・埴輪の破片が出土しており、特に埴輪が多くみられた。ここでは土器について述べ、埴輪については後述する。

土師器は高杯1090、片口鉢1093、甕1092がある。1090は杯部下方に稜のある形態と考えられる高杯である。杯部は内外面ともハケ調整の後、ヨコナデが施され、脚柱部は外面がタテハケ、内面がヘラケズリ調整、脚端部は外面がヨコナデ、内面がヨコハケ調整である。脚の内面以外は赤彩が施される。[柳本照男1991]の布留式新相に相当し、5世紀初頭前後のものと思われる。以下に述べる土器とは時期が大きく異なり、埴輪に伴っていた可能性が高い。1093は口径に比してかなり深いタイプの片口鉢で、内面には放射状暗文が施される。飛鳥IIに比定される。1092は大型の甕である。

須恵器は杯1097、短頸壺1099、壺1101、甕1100がある。1097は底部がヘラ切り後未調整のもので、TK217型式に属する。1099は完形品で、底部はていねいなヘラケズリ調整が行われる。口径が胴部最大径に比して小さく、飛鳥IIまたは飛鳥IIIに属すると思われる。

以上から2つの溝の年代は比較的近似し、飛鳥II～飛鳥IIIの時期と考えられる。

SD03 調査区の南拡張部で検出した南北方向の溝である。方位は北でやや東に振り、SD02と直角をなして連続すると推測される。幅1.3m、深さ0.2mで、埋土は含粗粒砂黒褐

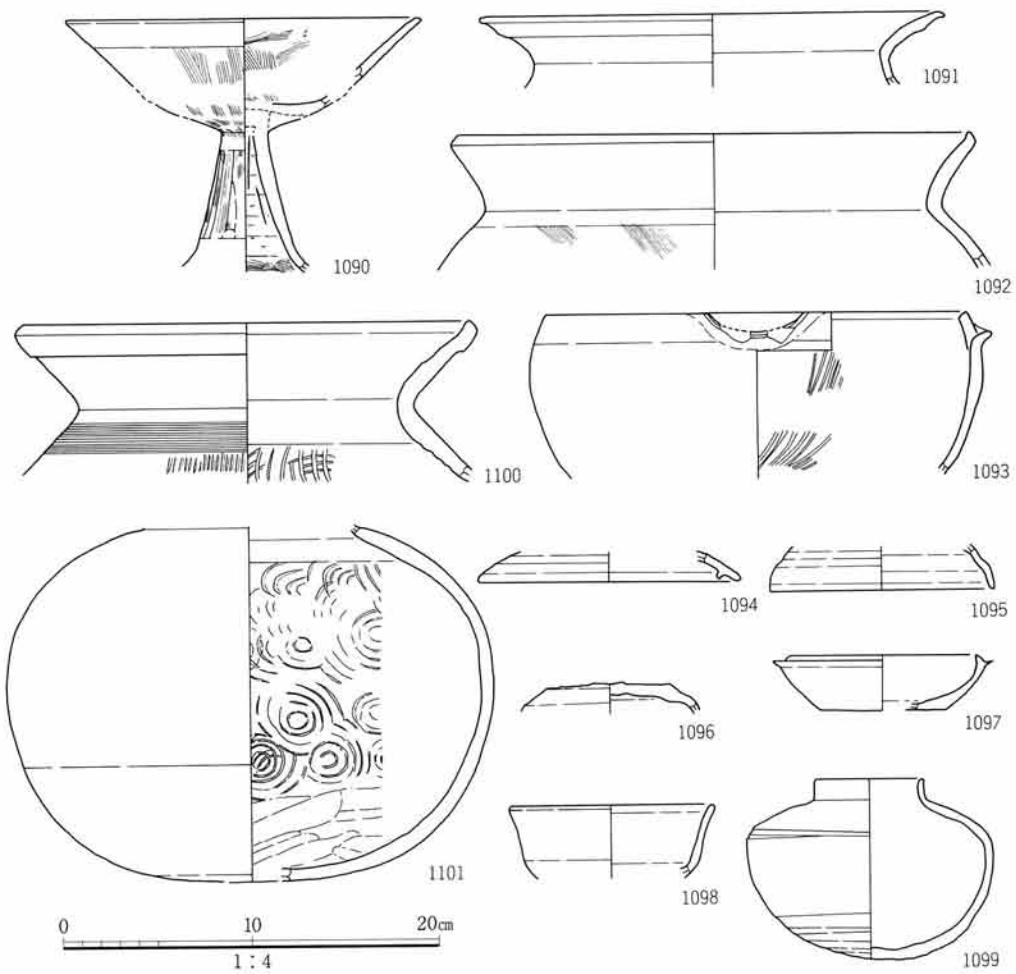


図246 SB01、SP01・02、SD01～03出土遺物
SB01(1091・1095)、SP01(1094)、SP02(1098)、
SD01・02(1090・1092・1093・1097・1099～1101)、SD03(1096)

色粘土質シルトである。遺物は須恵器杯蓋1096が出土した。天井部はヘラ切り後未調整で、TK217型式に属すると思われる。また、埴輪片も僅かではあるが含まれていた。

SK01 西壁際でSD01・02の基底で検出した不定形の土壠で、全体の形状は不明である。検出面からの深さは0.7mである。埋土は黒色シルト～含砂礫黄褐色シルトが大きな偽礫状となって落込んでおり、遺物はまったく含まれていなかった。倒木痕の可能性がある。

b. 円筒埴輪(図247・248)

埴輪はおもにSD01・02とその周辺の第2層から多く出土した。遺存状態は良好で、ほとんど磨滅していなかった。接合と個体識別の結果、基底部は少なくとも5個体分あること

が判明した。これらはすべて有黒斑の円筒埴輪の破片と考えられ、しかも鰭付円筒埴輪が含まれていることがわかった。タガの突出度はいずれも高く、断面形は上辺が内湾し鋭角的な稜をなすものが多く、稀に台形もある。色調は橙色～明赤褐色を呈し、胎土は密で長石・石英のほか赤褐色のチャートの円磨細礫を含むものが多いことが特徴である。

1102は唯一の口縁部細片である。端部はやや外反する。

1103～1107は胴部の破片である。1106のスカシ孔は方形あるいは逆三角形である。外面調整はすべてタテハケ調整と想定される。内面は1104が縦方向のナデであるほかはタテハケで、両者とも後でヨコナデが部分的に施されている。ハケメは1103・1105が6条ないし7条/cm、1106が10条/cm、1104が18条/cmである。1107は鰭付円筒埴輪の比較的大きな破片である。鰭が付く円筒部の最下段のタガから1段上位のタガまでの距離が、約20cm以上あることが確認できる。スカシ孔は方形あるいは逆三角形である。外面は一次調整のタテハケ、内面は現存するタガより上位がヨコハケ、下位が縦方向のナデ調整が施され、内外面とも後に部分的にヨコナデが施される。ハケメは14条/cmである。鰭の接合位置の下端はほぼタガの部分で終わっている。また、鰭の下端のラインは水平ではなく、若干円筒部に向って下降する。鰭は2枚の粘土板を張り合わせて作られ、表面は縦方向のナデ調整である。鰭と円筒部との接合に際しては、タガを鰭の厚さ分だけ切除し、貼付け位置には接合をよくするために2条の沈線を刻む。接合部には補強のための粘土を加え、ナデ調整がなされる。鰭は円筒部に直角につけられず、若干斜めに取付く。

1108～1112は基底部である。底径は27～32cm、最下段のタガまでの高さは21～23cmである。1108には二次調整と考えられるヨコハケが施され、ハケメは1104に近似する。内面調整はヨコハケの後、底部付近はユビオサエ、上方では縦方向のナデである。1109・1110も6条/cmのハケメが近似する個体である。1109のスカシ孔は円形あるいは半円形、1110のタガの突出度は高い。両者とも外面に一次調整のタテハケ、内面にタテハケが施され、1109では部分的にナデ調整が加わる。底面には調整後ヘラ状の工具で埴輪を起こしたと思われる痕跡がある。1111・1112のハケメは1107に近似する。1111のスカシ孔は半円形、1112は逆三角形と推測される。外面に一次調整のタテハケがみられ、1111ではナデによって一部消されている。内面は縦方向のナデ調整で、タガ付近はヨコナデ調整である。1111の底面には樹枝様の圧痕がみられる。

1113～1116は鰭の破片である。1114・1115は下端部が部分的に残存し、下端線は円筒部に向ってやや斜め下方に切られる。1116は上端部を残す破片と思われ、上端線は水平に

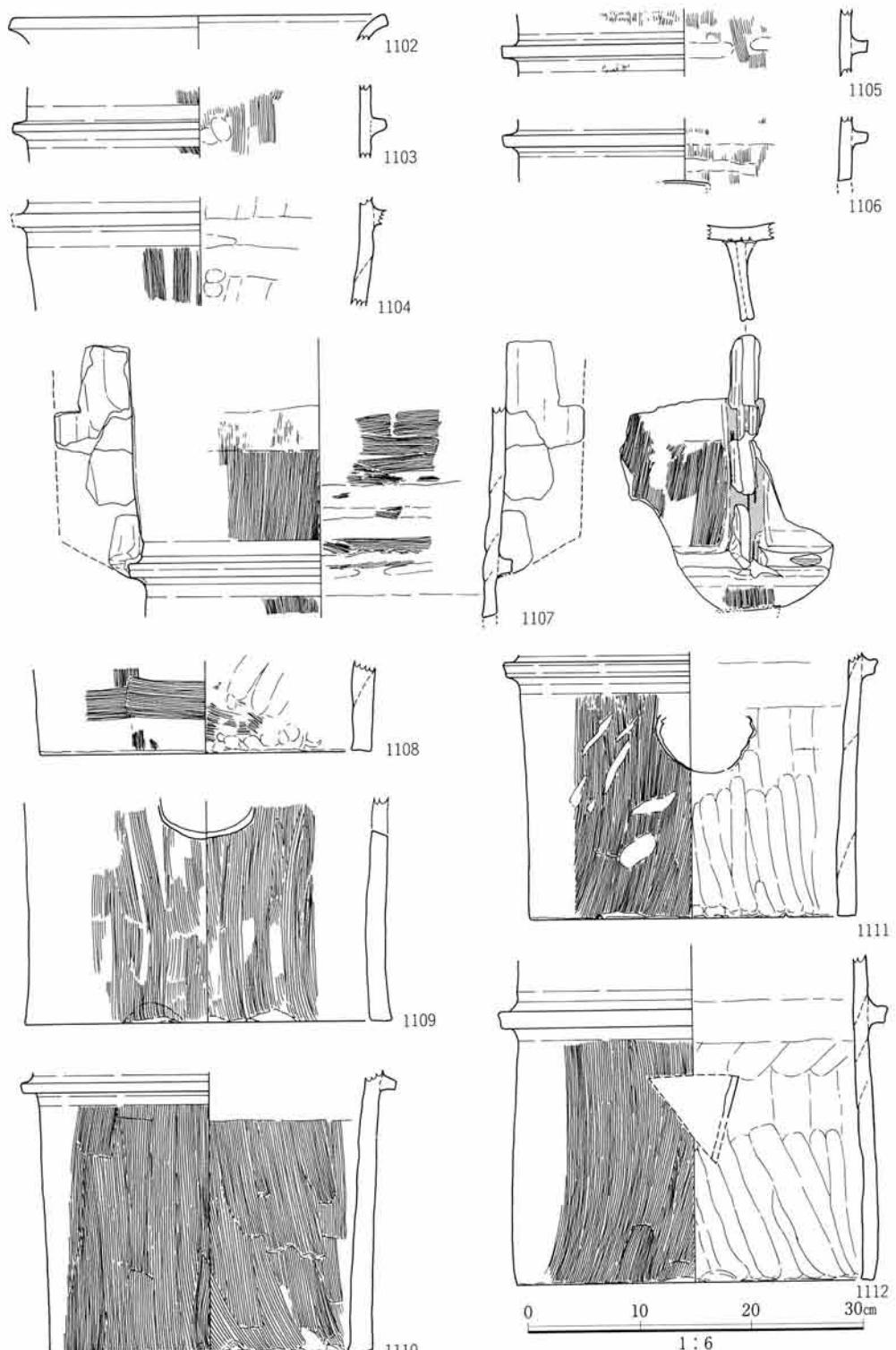


図247 円筒埴輪および鰐付円筒埴輪

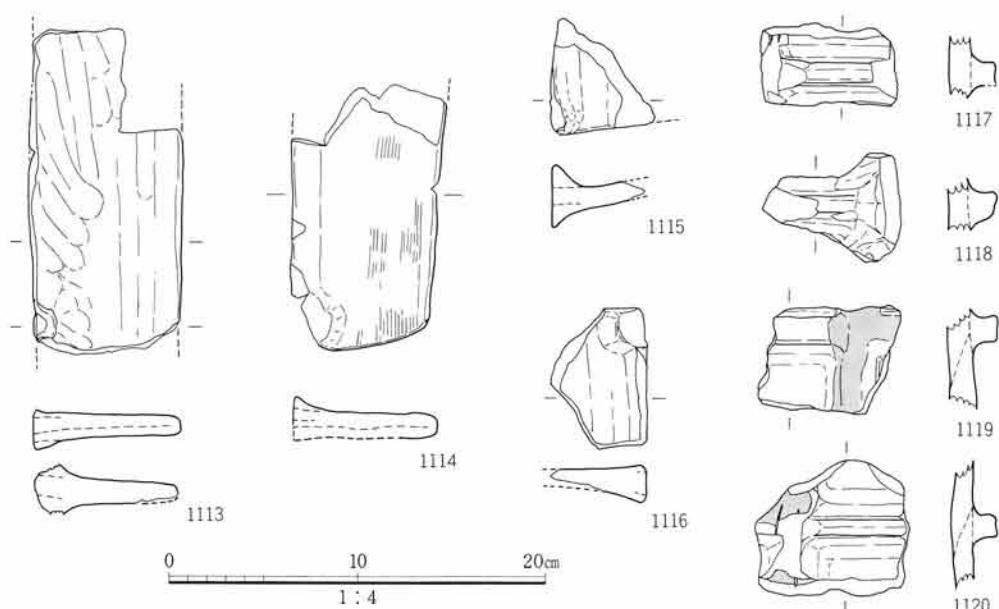


図248 鰭付円筒埴輪

近い。1113・1114では2枚の粘土板を合わせているのが明瞭にわかる。調整は1113・1115・1116が縦方向のナデ、1114がハケによる。円筒部との接合は、すべてタガを切除する方法により、補強のための粘土もタガ部分に多く施される。また、円筒部とのなす角度は直角でないことが1115などからうかがわれる。

1117～1120はタガの位置における鰭部の接合痕を残す片である。いずれでもタガを切除して鰭を取付けたことがわかる(註2)。

以上のように、今回出土した埴輪は比較的古い特徴を有し、円筒埴輪編年Ⅱ期に属する。

c. 平安時代

火葬墓(図249・250) 第1層基底面で検出した。土師器の甕を藏骨器とし、土師器の皿が蓋に用いられていた。掘形は径40～50cmの橢円形と思われ、藏骨器は逆位の状態で周囲に炭を詰めて埋められていた。上半部は現代の埋設管で削平されていたが、底部は陥没して、火葬骨に覆い被さるように藏骨器内部に残存していた。

1121は蓋に用いられた土師器皿である。口径は15.6cmで、口縁部が外反し端部が肥厚する、いわゆる「て」の字口縁の皿である。にぶい褐色～橙色を呈し、胎土には砂粒を比較的多く含む。器厚は3mmで薄い。長原遺跡の平安時代土器編年の皿期古段階に属し、10世紀後半～11世紀初め頃のものと考えられる。ただし、1121は胎土・色調において長原遺跡の皿とはやや様相を異にするように思われる。1122は藏骨器の土師器甕である。口径は15.4

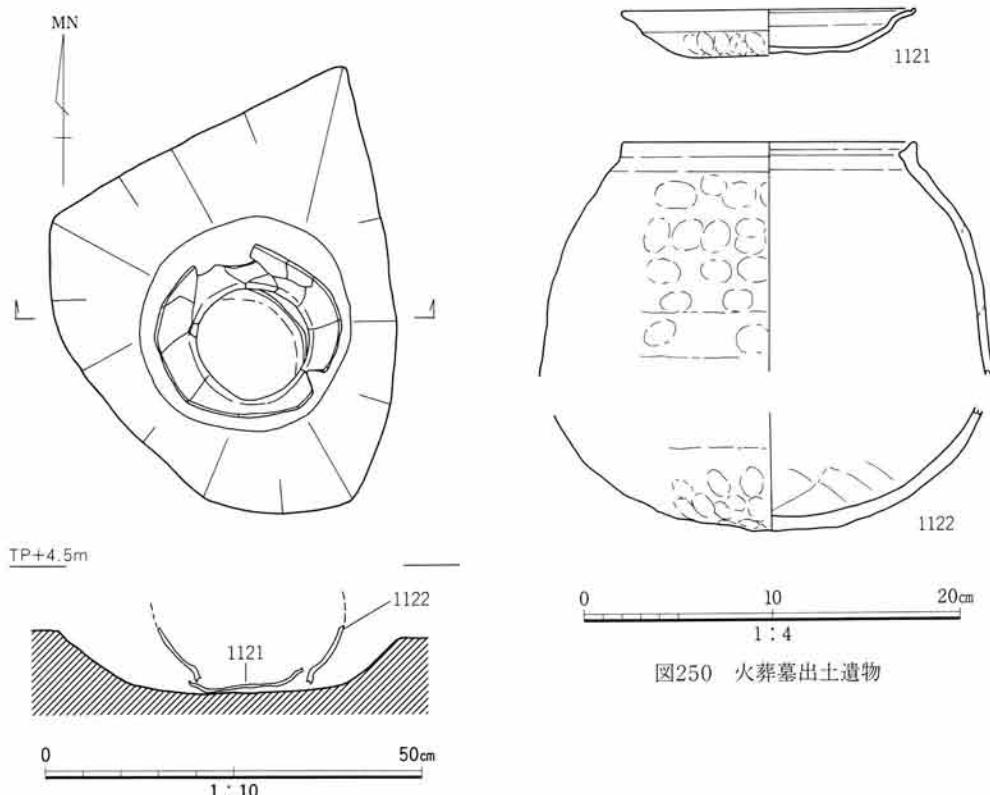


図249 火葬墓実測図

cmで1121と近似する。口縁部は短く立上がり、端部は内側に肥厚し蓋受けのような形に整えられる。底部片を図上復元すると胴部はやや縦長の球形になると思われる。口縁部はヨコナデ、内面は不定方向のナデ、外面はユビオサエののち、胴部中位から下位を粗くヨコナデ調整する。胎土はにぶい褐色を呈し、砂粒を比較的多く含み、1121と近似する。1122は煮炊具の中に類例を見い出しがたいことから、藏骨器用に作られた容器と推測される。

火葬骨(図版100)には、前頭骨眼窩上縁・後頭骨ラムダ縫合・橈骨栄養孔周辺・脛骨前縁などの破片が認められたが、細片化と変形が著しいので、成人のものであること以外は詳しいことがわからない(註3)。

周辺遺跡における同時期の火葬墓の類例として、南住吉遺跡のMN86-40次調査例[京嶋覚1988]がある。蓋に用いられた皿が2枚であること、その向きが本遺跡例と逆であること、甕の口縁部がやや長いことにおいて若干異なるが、火葬墓としての形態には類似点が多く見い出される。

図250 火葬墓出土遺物

註)

- (1) 本調査は河端氏による建設工事に伴うものである。調査は西畠佳恵が担当した。
- (2) 54は[伊藤純1994]で鰏が付くところのタガを指で押潰している例として記載されたものである。しかし、今回の報告のための観察ではこのような技法によるものとして断定できなかった。今後、良好な資料の出現をもって結論づけたい。
- (3) 人骨の同定にあたっては、大阪市立大学医学部第2解剖学講座の安部みき子先生にご教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

第3節 調査成果のまとめ

今回の調査でもっとも注目されるのは、多数の埴輪を出土した飛鳥時代の溝の検出である。埴輪と遺構の年代には約300年の開きがあり、埴輪がこの遺構に本来的に伴うものでないことは明白である。また、埴輪には多少復元できるものもあったが、すべて破片の域を越えるものではない。したがって、飛鳥時代に埴輪片がこれらの溝に捨てられたと解釈したい。溝の機能としては、溝が直角に曲ると考えられること、遺物の出土量が多く、包含層の形成も活発なことから、集落内の区画施設と考えることもできよう。

このような飛鳥時代の遺構から埴輪片が多く出土することは前章で報告した桑津遺跡(KW86-2・KW91-8・KW94-4次)でも認められた。その要因には当該期における周辺地域の開発の活発化が推測された。埴輪の時期は若干異なるが、本遺跡でも同様な状況があつたと類推されよう。

また、その背後で消滅した古墳に関する情報としてもこれらの埴輪片は重要な手がかりとなる。桑津遺跡では川西編年Ⅳ期の破片が多数を占めたが、ここではⅡ期の埴輪のみからなっていた。また、TH90-1次でも同時期の鰐付円筒埴輪が出土している。このことは本遺跡の周辺に、前期末～中期初頭にさかのほる古墳が存在したことを間接的に示している。そして、埴輪の特徴が鰐付円筒埴輪を多く含むなどの点で御勝山古墳に共通することから、それと同じ様なランクの古墳であった可能性もある。また、TH85-4次ではⅣ期に下るものが出土地したり、KW82-1次で鰐付円筒埴輪が出土した事実から、上町台地の東斜面に広範囲にわたって前期～中期にかけての古墳が存在したとも考えられよう。しかし、その存否は遺構の確認をもって結論づけるべきであり、現段階ではこれらの埴輪は「田辺古墳群」の存在有無を解明する一要素でしかない。今後の周辺部の調査がさらに期待されよう。

引 用・参 考 文 献

- 市本芳三1995、「瓦」：中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社、pp. 502-509
- 伊藤純1994、「鰐付埴輪の製作技法」：『古代文化』第46巻第6号 古代学協会、pp. 32-46
- 上田宏範1981、「大阪の古墳」：大阪市史編纂所編『大阪の歴史』3、pp. 20-42
- 1988、「生野・田辺古墳群」：新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第1巻、pp. 388-395
- 植野浩三1987、「韓式系土器の名称」：『韓式系土器研究』I 韓式系土器研究会、pp. 1-2
- 大阪市文化財協会1991、「上町台地の遺跡—大阪市天王寺区清水谷町の調査—」
- 1992、「難波宮址の研究」第九
- 1998、「山之内遺跡発掘調査報告」
- 大庭重信・寺井誠1997、「加美遺跡の方形周溝墓」：大阪市文化財協会編『葦火』67号
- 梶山彦太郎・市原実1986、「大阪平野のおいたち」青木書店
- 金村浩一1991、「辻邸建設に伴う田辺東遺跡発掘調査(TH90-1)略報」：『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 163-168
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp. 95-164 (【川西宏幸 1988】に再録)
- 1988、「古墳時代政治史序説」塙書房
- 京嶋覚1987、「山川邸新築工事に伴う田辺東之町遺跡発掘調査(TH85-4)略報」：『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 77-83
- 1988、「山本氏による共同住宅建設工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN86-40)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 77-83
- 久保和士1994、「桑津遺跡の埴輪」：大阪市文化財協会編『葦火』52号
- 1996a、「桑津遺跡の井戸」：大阪市文化財協会編『葦火』63号
- 1996b、「桑津弥生人の食を探る」：大阪市文化財協会編『葦火』65号
- 1997a、「市川氏による建設工事に伴う発掘調査(KW95-15)略報」：『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 123-132
- 1997b、「村上氏による建設工事に伴う発掘調査(KW95-19)略報」：『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 133-146
- 久保和士・宮本康治1997、「瓜破遺跡の弥生時代集落跡」：大阪市文化財協会編『葦火』67号
- 黒板勝美1986、「日本書紀 後篇」吉川弘文館、p. 254
- 古代の土器研究会1992、「都城の土器集成」
- 小林行雄1942、「大阪市住吉区桑津町弥生式遺跡」：『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12輯
- 酒井龍一1982、「畿内大社会の理論的様相—大阪湾沿岸における調査から—」：大阪文化財センター編『龟井遺跡』、pp. 239-251

- 1984、「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」:『文化財学報』第3集 奈良大学文学部文化財学科、pp. 37-51
- 櫻井久之1993、「佐竹正章氏による建設工事に伴う桑津遺跡発掘調査 (KW92-4) 略報」:『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 185-192
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp. 102-114
- 佐藤隆・前田勝己1990、「ベット？をもつ竪穴住居」:大阪市文化財協会編『葦火』24号
- 佐原眞1968、「近畿地方」:『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp. 53-72
- 1985、「石斧」:『弥生文化の研究』5 雄山閣、pp. 37-42
- 菅榮太郎1995、「石鎚資料の型式および製作技法の編年検討」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VIII、pp. 367-388
- 積山洋1992、「長原古墳群と難波地域の円筒埴輪」:『古代文化』第44巻第9号 古代学協会、pp. 35-42
- 1996、「東住吉区山坂で見つかった古墳時代の集落跡」:大阪市文化財協会編『葦火』62号
- 高島徹1983、「弥生時代集落の変遷と周辺部の様相」:大阪文化財センター編『亀井』、pp. 259-262
- 高橋工1991a、「桑津遺跡の掘立柱建物群」:大阪市文化財協会編『葦火』34号
- 1991b、「桑津遺跡から日本最古のまじない札」:大阪市文化財協会編『葦火』35号
- 1996、「西井邸建築に伴う発掘調査 (KW94-23)」:『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 97-104
- 高橋直一1922、「古瓦雜錄」:『考古学雑誌』第12巻第12号 考古学会、pp. 769-770
- 田島富慈美1993、「有舌尖頭器における剥離面の検討—大阪市内の出土例から—」:『旧石器考古学』47 旧石器文化談話会、pp. 61-72
- 田中清美1990「桑津遺跡出土の菱形透かしのみられる須恵器について」:大阪市史編纂所編『大阪の歴史』31、pp. 71-84
- 1991a、「綾杉文の刻まれた土器」:大阪市文化財協会編『葦火』30号
- 1991b、「桑津遺跡と方形周溝墓」:大阪市文化財協会編『葦火』32号
- 1992、「桑津遺跡の大きな溝」:大阪市文化財協会編『葦火』41号
- 1995、「桑津弥生集落の変遷」:大阪市文化財協会編『葦火』56号
- 1996、「上町商事株による建築に伴う発掘調査 (KW94-16)」:『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 83-96
- 田辺昭三1966、「陶邑古窯址群」I 平安学園考古学クラブ
- 谷彰一1959、「大阪市東住吉区田辺東之町の遺物包含層並びに出土遺物概報」:『貝塚』No88
- 都出比呂志1986、「墳墓」:『集落と祭祀』岩波講座日本考古学4 岩波書店、pp. 217-267
- 坪井清足1962、「桑津遺跡の調査」:大阪府教育委員会編『大阪府の文化財』
- 寺沢薰・森井貞雄1989、「河内地域」:『弥生土器の様式と編年』近畿編I 木耳社、pp. 41-146
- 土井孝之1989、「紀伊地域」:『弥生土器の様式と編年』近畿編I 木耳社、pp. 200-279
- 富山直人1988a、「谷口邸建築工事に伴う田辺東之町遺跡発掘調査 (TH86-1) 略報」:『昭和61年度大阪

- 市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp. 94-99
 1988b、「安井邸建替え工事に伴う田辺東之町遺跡発掘調査(TH86-5)略報」:『昭和61年度大
 阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪文化財協会、pp. 100-104
 直木孝次郎1988、「難波・住吉の氏族」:新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第1巻、pp. 574-
 594
- 長山雅一1975、「大阪市域における埋蔵文化財と保存の問題」:大阪歴史学会編『ヒストリア』第68号、pp.
 18-36
- 奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報第26冊
 難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九
 西畠佳恵1990、「東住吉区で見つかった鰯付円筒埴輪」:大阪市文化財協会編『葦火』26号
 原秀徳1982、「自然地理的背景」:大阪文化財センター編『亀井遺跡』、pp. 2-6
 東奈良遺跡調査会1979、『東奈良』発掘調査概報 I
 東成郡役所1922、『東成郡誌』下巻(1972年復刻版)、pp. 1363-1365
 平田洋司1995a、「仲宗根邸建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS93-35)略報」:『平成5年度大阪市
 内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪文化財協会、pp. 62-71
 1995b、「弥生時代の森の宮遺跡」:大阪市文化財協会編『葦火』54号
 1996、「調査地周辺の歴史的変遷」:大阪市文化財協会編『森の宮遺跡』Ⅱ、pp. 224-230
 広瀬和雄1986、「弥生時代の集落」:大阪文化財センター編『亀井』(その2)、pp. 238-247
 藤田実1983、「明治期地籍図にみる桑津環濠集落址」:大阪市史編纂所編『大阪の歴史』9、pp. 117-121
 松本啓子1993、「豪族の邸宅?—清水谷町の調査から—」:大阪市文化財協会編『葦火』43号
 1995、「井須邸新築工事に伴う桑津遺跡発掘調査(KW93-26)略報」:『平成5年度大阪市内埋蔵
 文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪文化財協会、pp. 75-84
 松本百合子1991、「はじめまして勝山遺跡です」:大阪市文化財協会編『葦火』31号
 南秀雄1992、「難波宮下層遺跡の土器と集落」:大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp. 93-119
 宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」:大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺
 跡発掘調査報告』I、pp. 93-119
 森田克行1990、「摂津地域」:『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社、pp. 77-191
 八木久栄1974、「御勝山古墳前方部緊急調査概報」:難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報』1973
 柳本照男1991、「土師器・須恵器」:『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣、pp. 172-189
 山本加三1926、「北田辺の一庵寺址について」:『考古学雑誌』第16巻第4号 考古学会、pp. 238-243
 ロバート・コンデン1995、「20世紀の遺跡—桑津遺跡の防空壕—」:大阪市文化財協会編『葦火』56号
 王育成1993、「桑津遺跡の道教木簡について」:大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp. 379
 -386(『文物天地』1992年6期所収、永島暉臣監訳)

あとがき

本書では大阪市東住吉区内にある桑津遺跡と田辺東之町遺跡の発掘調査成果を報告した。桑津遺跡については1981年から95年にかけて行った23件の調査、田辺東之町遺跡に関しては89年に行った1件の調査を掲載した。

財団法人大阪市文化財協会は、大阪市教育委員会と連携し、市内の遺跡の調査に主体的に係わってきており、その成果を現地説明会や小・中学生を対象にした見学会、また、発掘成果速報展や当協会発行の文化財情報誌などを通して市民や研究者に公表してきた。こうした活動により、府下屈指の弥生時代集落である桑津遺跡、多量の埴輪が出土する田辺東之町遺跡の特色が明らかにされてきた。

しかし、これまで一遺跡の『発掘調査報告』として纏め上げられたものではなく、遺跡を幅広く理解する上での便宜が図られないままであった。本書は、これまで蓄積された調査成果を報告書として公表するという責務を果たすべく作成された。諸般の事情から、発掘担当者自らが報告書作成に従事できなかつた調査が多いが、不明確な個所については発掘担当者と討議し、事実関係に誤りのないよう努めた。しかし、膨大な資料を整理・報告したために、未消化の部分もあるかと思われる。忌憚なく御批判いただければ幸いと考えている。

本書を成すにあたっては、関係各位から並々ならぬ御尽力を賜った。とくに、発掘調査と報告書作成の費用を負担して頂いた方々に対し、深謝の意を表するとともに、今後とも当協会への御支援を賜るよう切望してやまない。

(八木久栄)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

あ	朝顔形埴輪	52, 241	環濠（江戸）	61, 87, 231
	綾杉文	120, 263	韓式系土器	11, 65, 185
い	飯蛸壺	76, 121, 131, 219, 262	き	紀伊産
	家形埴輪	236, 248		行基瓦
	生駒西麓産	32, 34, 35, 45, 46, 72, 84, 87, 106, 119, 213, 215, 218, 235		京・信楽焼
				鋸齒文
				均整唐草文軒平瓦
	石庵丁	4, 26, 106, 194, 224	け	結晶片岩
	井戸（弥生）	4, 8, 34, 105, 250, 256		建築部材
	井戸（飛鳥・奈良）	159, 173	こ	鉱滓
	井戸（平安）	175, 182, 183		甌
	井戸（鎌倉・室町）	214		車輪文
	井戸（江戸）	54, 87, 93, 183, 184		重圈文軒丸瓦
	井戸瓦	183		種子
	イノシシ	121		初期須恵器
う	白玉	141, 254	す	人骨
	ウマ	26, 173		282, 283
え	円盤充填	119, 131, 209, 215	せ	犁溝
お	近江系	121, 192, 263		スクレイパー
か	貝殻腹縁	119, 263		製塙土器
	角閃石	32, 34, 45, 46, 72, 80, 84, 96, 106, 119, 120, 124, 131, 139, 210, 213, 215, 218, 235, 252, 253, 262		青磁
				青白磁
				石錐
				石槍
				石鎌
	火葬墓	281, 282		4, 106, 172, 192, 203, 209, 210, 224, 226, 227
	竈	65, 76, 166		4, 203, 224
	唐草文軒平瓦	184		4, 22, 26, 41, 46, 84, 95, 98, 106, 128, 131, 139,
	ガラス小玉	250, 252~254, 263		148, 172, 194, 201, 203, 209, 210, 224, 226, 229,
	環濠（弥生）	8, 255, 257, 264		274, 275
				4, 194
				摂津系
				119

瀬戸焼	61, 80	ハンマー	106
線刻	119, 175, 236, 239, 241	播磨系	106, 210, 218
そ 算盤玉状土製品	121	ひ 肥前磁器	18, 54, 61, 87, 148, 184
た 台形土器	121, 219, 262	備前焼	54
打製石劍	93, 219, 250	平瓶	141, 166, 245
豎穴住居	63~66, 224, 256, 257, 264, 265, 270	平瓦	22, 26, 47, 68, 76, 91, 95, 148, 172, 178, 184,
炭化米	8, 250		188, 189, 228
丹波焼	14, 61, 247	鰐付円筒埴輪	265, 279~281
ち 丁銀形土製品	170	ふ 複弁蓮華文軒丸瓦	68, 91, 172, 175, 184
て 鉄製品	235, 245, 247	へ ヘラ記号	140, 141, 155, 241, 272
と 道教符	161	ほ 紡錘車	121, 211, 213
東播系擂鉢	26, 76	墨書	26, 80
東部瀬戸内	120, 219, 263	ま 埋葬施設	45, 81, 220, 257
土器棺墓	69, 81, 258, 266	曲物	183
土器片円板	35, 209, 210	斗束	239
土器埋納	99	磨製石劍	106, 263
土壤墓	36, 210, 211, 219, 220, 258, 259, 262	丸瓦	15, 68, 91, 172, 175, 178, 184, 229
土鍾	272	み ミニチュア土器	32, 119, 121, 219,
土玉	121		226, 262
ね 根石	134, 148, 150	む 棟木	236, 239
の 軒平瓦	148, 172, 184	も 木製容器	183
軒丸瓦	15, 61, 68, 88, 91, 172, 175, 184	木簡	161
は 羽釜	18, 22, 80, 87, 175, 178, 183, 214, 247	や 矢羽根形文器台	218
白磁	22, 41, 128, 170, 175, 183, 245	山城系	192, 263
魂	140, 148, 162, 265	大和型土釜	18
埴輪	22, 52~54, 146, 155, 161~163, 232, 236~ 245, 265, 270, 271, 276, 279, 281, 284	ゆ 有茎尖頭器	26, 38, 172, 188
		よ 横瓶	236
		り 緑釉	22, 80, 182
		れ 連珠文	148
		ろ 炉壁	232
		わ 輻	47

〈地名・遺跡名など〉

あ 阿倍野筋遺跡	265	た 田辺古墳群	54, 270, 284
う 上町台地	1, 2, 267, 269, 270, 284	田辺廃寺	1, 2, 5, 15, 68, 76, 93, 172, 175, 178, 184,
瓜破遺跡	2, 263, 264		185, 230, 266, 270
お 御勝山古墳	2, 265, 270, 284	田辺4丁目所在遺跡	265, 269
か 勝山遺跡	2	て 照ヶ丘矢田遺跡	270
加美遺跡	221, 263	な 長原遺跡	12, 41, 263, 281
龜井遺跡	2, 264	難波大道	267, 270
河内渴	1	難波宮下層遺跡	2, 267
河内湖	1	に 西除川	2, 54, 267, 269, 270
河内平野	1, 2	み 南住吉遺跡	282
河内湾	1, 2	も 森の宮遺跡	2, 263
さ 酒君塚古墳	269	や 矢田部遺跡	270
狭山池	270	山坂遺跡	265, 267, 269
せ 前期難波宮	2, 267	山之内遺跡	2, 264

**Archaeological Reports
of
Kuwazu Site in Osaka, Japan**

Appendix: Tanabe-higashi-no-cho Site

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

SA : Palisade or fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SG : Pond

SK : Pit

SP : Posthole or Pit

SX : Other features

CONTENTS

Excavation report of the Kuwazu site

Table of Contents

Foreword

Explanatory notes

Chapter I	Investigation of the Kuwazu site	1
S.1	Location of the site	1
S.2	Results of investigations to date	4
1)	Excavation history of the Kuwazu site	4
2)	Report of the current investigation	8
i)	Stratigraphy of the Kuwazu site	
ii)	Main Features and remains	
Chapter II	Results of the Investigation	13
S.1	KW81-1	13
S.2	KW81-2	16
S.3	KW82-7	20
S.4	KW83-8	39
S.5	KW86-2	49
S.6	KW86-3	55
S.7	KW87-20	62
S.8	KW87-23	69
S.9	KW88-6	78
S.10	KW88-21	89
S.11	KW88-36	94
S.12	KW90-10	99
S.13	KW90-14	102
S.14	KW90-22	125
S.15	KW91-2	136
S.16	KW91-8	145
S.17	KW91-16	164
S.18	KW91-18	168
S.19	KW91-26	186
S.20	KW93-2	190
S.21	KW94-1	222
S.22	KW94-4	231
S.23	KW95-5	249
Chapter III	Conclusion	255
S.1	Kuwazu site in the Yayoi Period	255

1) Changes in the settlement	255
2) Houses and wells.....	256
3) Tombs	257
4) Eastern sector cemetery	258
5) Finds	262
6) Condition of the surrounding sites and issues for future	263
S.2 Kuwazu site in and after the Kofun Period	265
1) Kofun Period	265
2) Asuka and Nara Periods	266
Appendix	
Chapter I Investigation of the Tanabe-higashi-no-cho site	269
S.1 Location and setting of the site	269
S.2 Research results	271
S.3 Conclusion	284
References	285
Postscript and Index	
English Table of Contents and Summary	

ENGLISH SUMMARY

This volume reports two sites, Kuwazu and Tanabe-higashi-no-cho in Higashisumiyoshi Ward, Osaka City.

Kuwazu site

Location of the Site

Kuwazu is a complex site, with features and remain from the late Palaeolithic to the present. The site measures approximately 800m in diameter, and encompasses the Tanabe Haiji temple site in its southeastern sector. The site is located in the hills to the north-north-east of the centre of the Uemachi Terrace, with the Kawachi Plain situated closely to the east.

Excavation history

The site was first recognized in the 1920 and was first excavated in 1937 by Kyoto University. The Mid-Yayoi Period ruins unearthed at the site became recognized in the academic world as archetypal Yayoi Period.

Since its establishment in 1979, the Osaka City Cultural Properties Association (OCCPA) has been jointly investigating the site along with the Osaka City Board of Education. As of 1996, more than 50 excavations, totally approximately 9000 square metres, had been carried out.

Current Excavation Report

In this volume, 23 excavations from between 1981 and 1995 are reported, though this is less than half the number of excavations, they represent almost 75% of total excavated area (The site code KW will hereafter be omitted when referring to excavation).

The oldest artefacts reported in this volume are the Incipient Jomon Period tanged points. Stone arrowheads, which from their figure date to the Early to Latest Jomon Period, were also found, though Jomon pottery is unconfirmed.

Yayoi Period ruins and remain are the main focus of this volume. A large amount of pottery and other clay goods from this period were found in wells (90-14), also during six excavations, *hokeishukobo* (square-ditched burial mound) were found. These are discussed in detail elsewhere in this volume.

Kofun Period features uncovered at the site include Middle-Kofun Period pit dwellings found during 87-20. Kofun (burial mound) have not as yet been found at the Kuwazu site, however, the appearance of *haniwa* terra-cotta in the archaeological record suggests their existence.

During 91-8, a complex of six regularly arranged structures was found, dating to the Asuka/Nara Period, as well as a well dating to the former half of the 7th century. From this well, Japan's oldest incantation tablet to date was recovered. During two excavations, eaves tiles were found, possibly from the initial Tanabe Temple. A World War II

bomb shelter was found during 94-1.

After 65 years of investigation, we believe that the general outline of the site is becoming clear, however as yet, less than 2% of the site has been excavated. Future excavation and the further accumulation research results, is necessary to clarify the historical significance of this site.

Tanabe-Higashi-no-Cho Site

Location of the Site

Tanabe-Higashi-no-Cho is a complex site dating to between the Jomon and Heian Periods. It is located on low ground, between the Uemachi Terrace and a natural embankment formed by the former Nishiyoke River and covers an area approximately 300m in diameter. Closely associated with this site is the Tanabe Kofun Cluster, which features a number of *kofun*, and other remains which have been interpreted as possible *kofun*.

Excavation history

The initial discovery of the site was made by Mr. Shoichi Tani in 1959. At that time, as a result of his investigation, which included collecting pottery and other clay goods, Tanabe-Higashi-no-Cho was interpreted as an ancient low-marsh site. Since that time however, OCCPA has conducted excavations in 5 places (approx. 500 square meters) without finding marsh sedimentation.

Significant now is the large number of *haniwa* unearthed at the site.

Site Report

In this volume, we report the results of the June 1989 excavation. The oldest remains from the site were Jomon Period stone arrowheads, though the oldest features date to the Asuka and Nara Periods. Houses and ditches were found and identified as a section of a residential district at that time. Remains unearthed from these features include *haji* ware, *sue* ware, fishing net sinkers and other clay goods. There was also a numerous amount of 4th century *haniwa*. The amount of *haniwa* located at this site suggests the existence of *kofun* destroyed by Asuka Period development. Heian Period features include a cremation cemetery from latter 10th to early 11th centuries.

To date, less than 1% of this site has been investigated, which leaves many unknown factors concerning both the natural environment and the interpretation of the features and remains.

報告書抄録

ふりがな	くわづいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	桑津遺跡発掘調査報告							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	櫻井久之・久保和士・Robert Condon・岡村勝行・八木久栄							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-943-6833							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
くわづいせき 桑津遺跡	おおさかしりがいすみよしく 大阪市東住吉区 くわづ 桑津・駒川 にしいまがわ 西今川・北田辺	27121	—	34° 38' 00"	135° 32' 00"	1981.5.13 ~ 1995.6.29	6,663m ²	東住吉中学校建設などの公共事業のほか、民間の建設工事。計23件。
たなべひがしのちょう 田辺東之町 いせき 遺跡	おおさかしりがいすみよしく 大阪市東住吉区 ひがしなべ 東田辺3丁目	27121	—	34° 36' 54"	135° 31' 55"	1989.6.7 ~ 1989.6.22	255m ²	民間の建設工事1件。
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
桑津遺跡 (田辺廃寺)	集落 墓 寺院	縄文時代	竪穴住居 井戸・溝 ピット・土壙 方形周溝墓 土壙墓 土器棺墓 古墳時代中期	須恵器・土師器・埴輪・円筒埴輪・家形埴輪・韓式系土器				
		弥生時代中期						
		古墳時代後期						
		飛鳥・奈良時代						
		平安時代						
		平安時代						
田辺東之町 遺跡	集落 墓	古墳時代 飛鳥・奈良時代 平安時代	掘立柱建物 火葬墓	須恵器・土師器 藏骨器				

原色図版



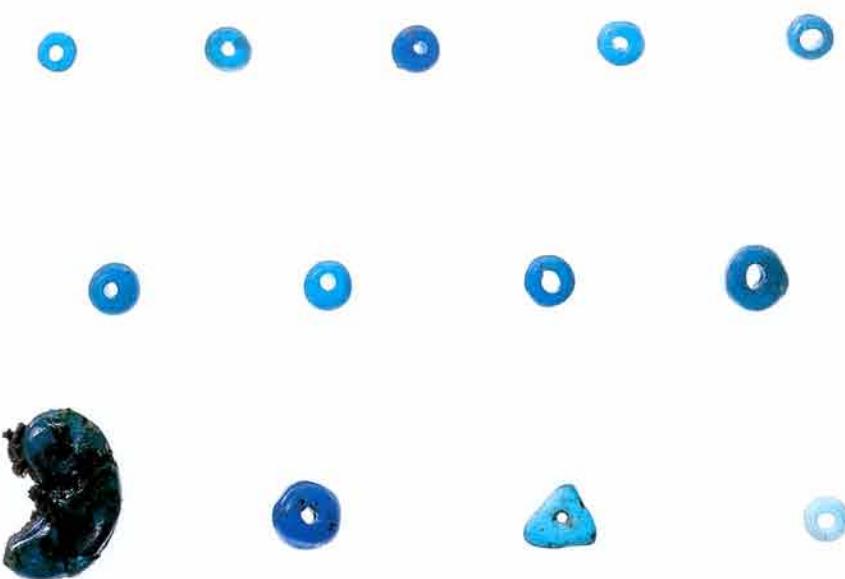
KW93-2次 方形周溝墓1(南から)



KW91-8次 飛鳥時代掘立柱建物群(北から)



KW90-14次 SE01出土器台435

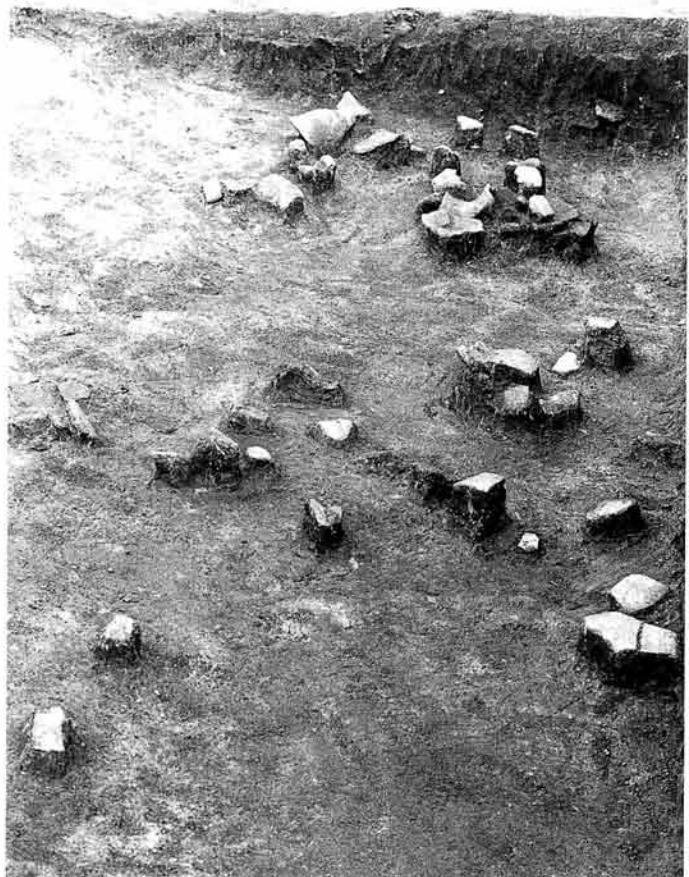


KW95-5次出土ガラス小玉と大阪市内出土の弥生時代のガラス玉(約1.5倍)
上・中段：長原遺跡、下段左3点：加美遺跡、下段右端：KW95-5次

図 版



調査地から桑津小学校
を見る (東から)



方形周溝墓1南周溝遺物出土状況(西から)



北トレンチ 方形周溝墓2 遺物出土状況(北から)



西第1トレンチ 方形周溝墓3 遺物出土状況(南西から)



南トレンチ SE01・SD01・SK01・SX02(北から)



南トレンチ SK01弥生土器甕出土状況(北から)



方形周溝墓群検出状況
(西から)



方形周溝墓群完掘状況(西から)



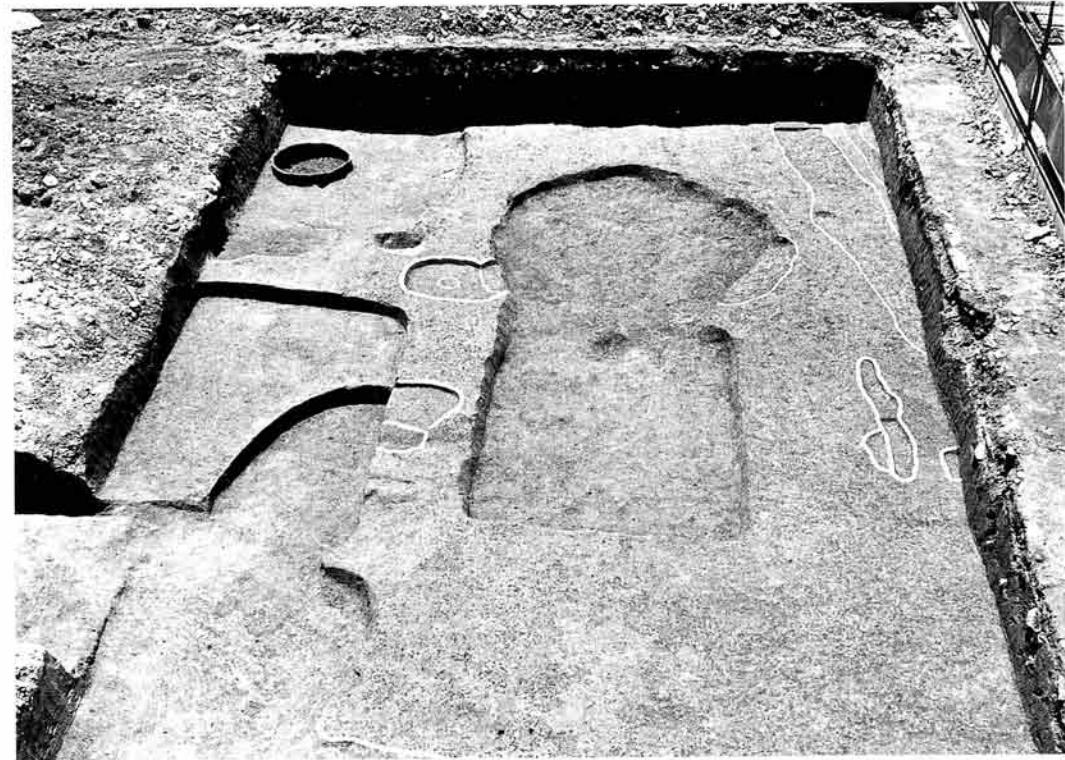
方形周溝墓2(北から)



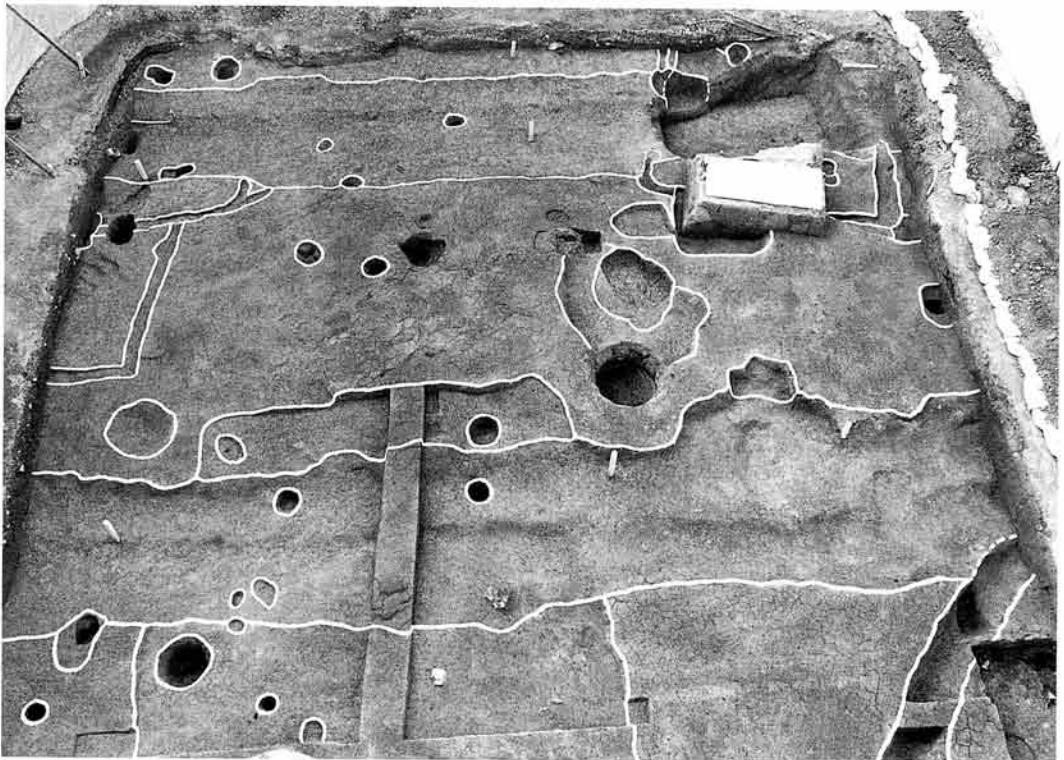
方形周溝墓4南周溝遺物出土状況(南から)



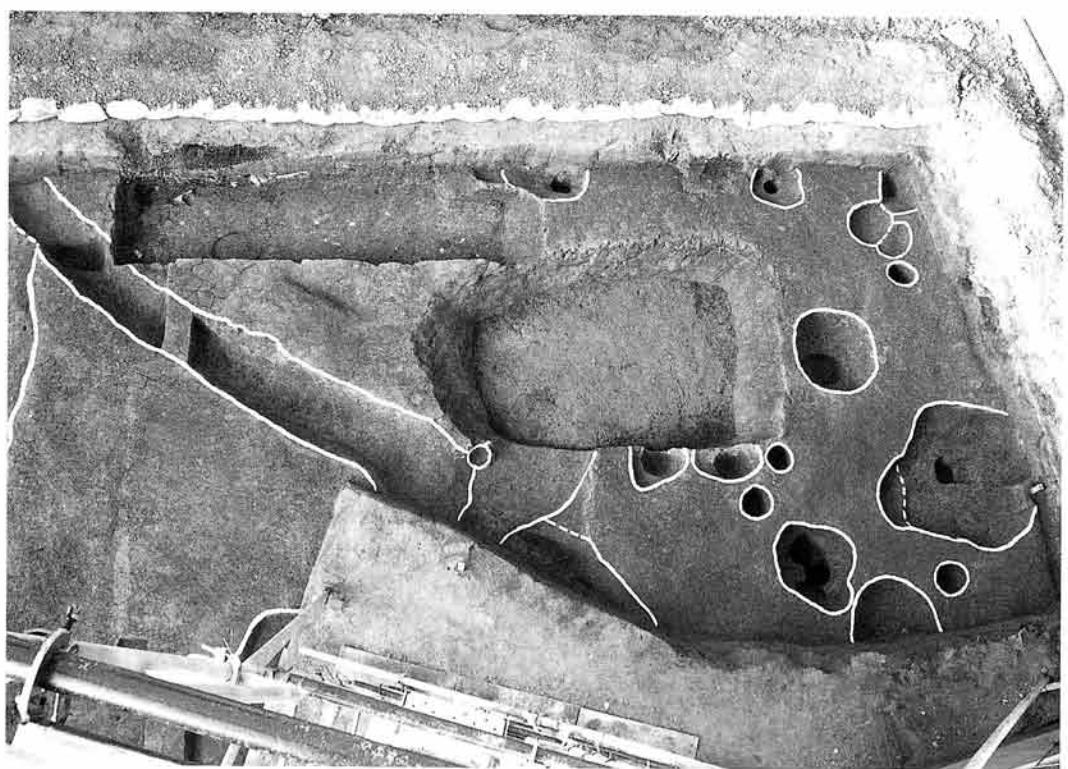
調査地東部 SD04、SE01・02(南から)



調査地西部 拡張区の遺構(北から)

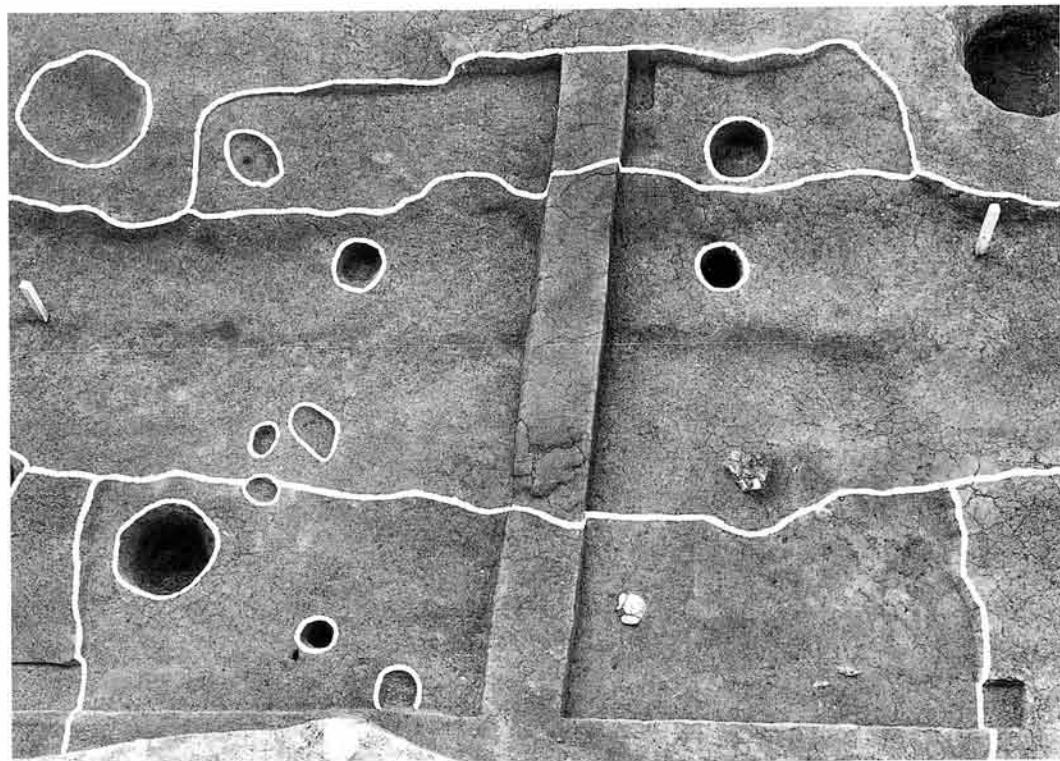


調査地西部 SB01~04、SD02・03、SK02・03(東から)



調査地東部 SD01、SK09~11(南から)

図版八 KW87—20次調査古墳時代の遺構

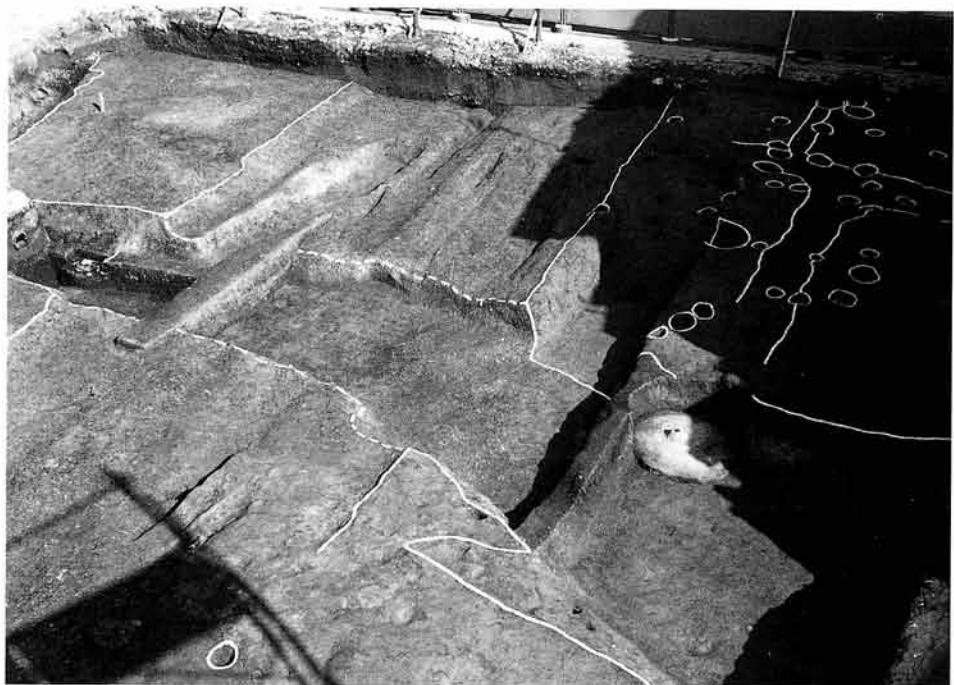


SB01(東から)



SK02検出状況(北から)

調査地東部
SD01・06
ピット群
(南西から)



SD01断面
水糸高TP+6.7m
(北から)



SD01内検出土器棺墓
(北から)





方形周溝墓 1
全景
(北から)



方形周溝墓 1
東周溝内
壺259出土状況



土器棺墓(東から)



調査地北区の遺構(南から)



調査地南区の遺構(東から)



地山直上検出遺構(北から)



SD01・02、SP01(西から)

調査地全景(南から)



調査地南部柱穴群(南から)

図版一四 K W90—14次調査弥生時代の遺構



調査地全景
(南から)



SE01上部遺物出土状況
(南東から)



SE01完掘状況
(南東から)

調査地全景
(北から)

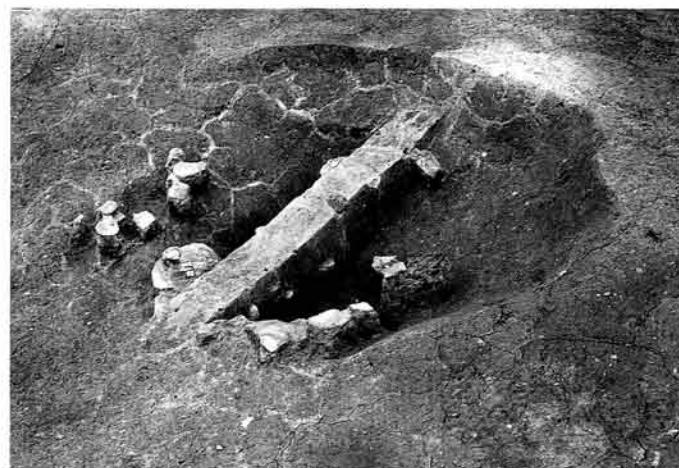


SD01・方形周溝墓2
北西隅 (南西から)



SK03(南西から)





SK02(南西から)



SK04(南西から)



方形周溝墓 1 (南東から)



方形周溝墓 1・2 (南東から)



SB01・02、SD04(東から)

図版一八 KW91-8次調査飛鳥時代の遺構(一)

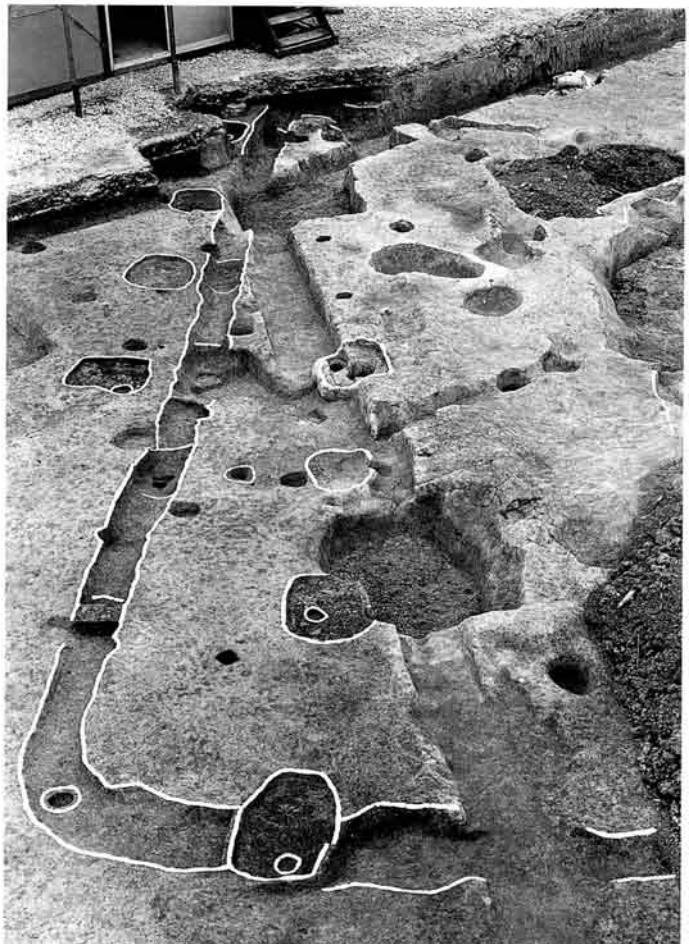


建物群検出状況(北から)

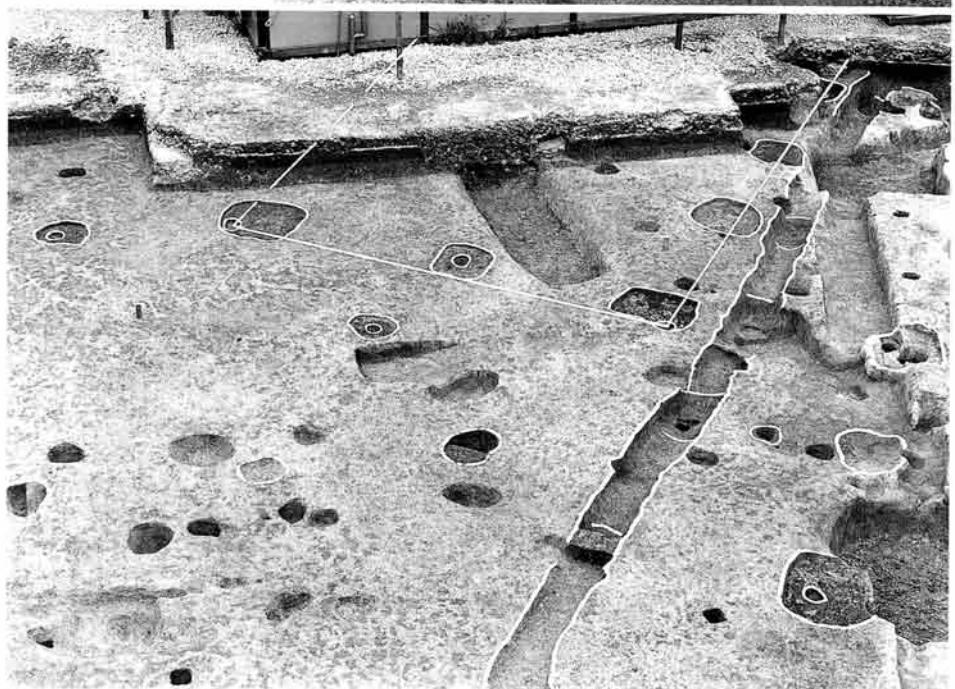


建物群全景(北から)

SB03(南から)



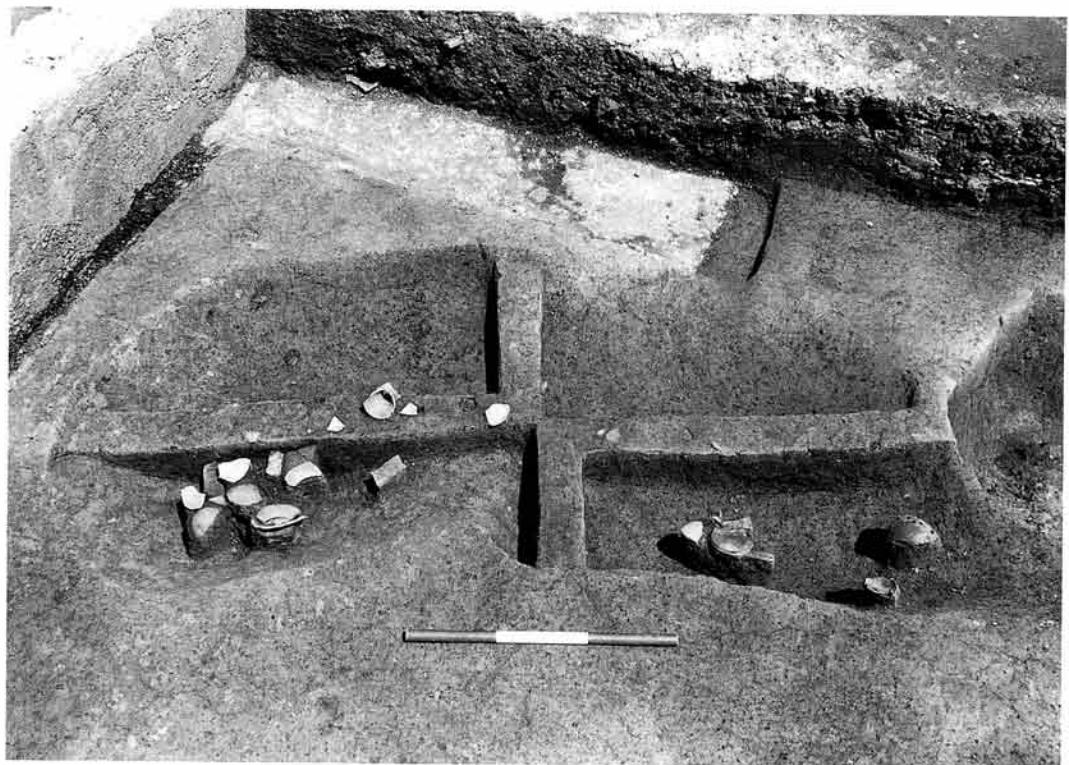
SB06(南から)







調査地全景(南から)



SK01遺物出土状況(西から)



調査地全景(北から)



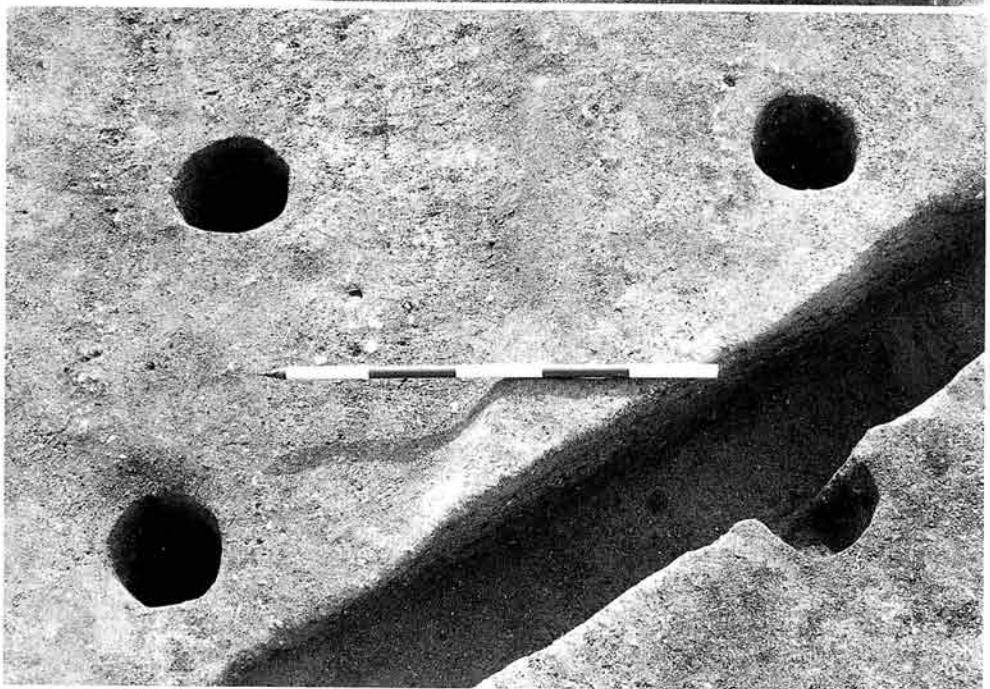
調査地全景(西から)

図版二三 K W 91—18次調査平安時代の遺構

SP05(北から)

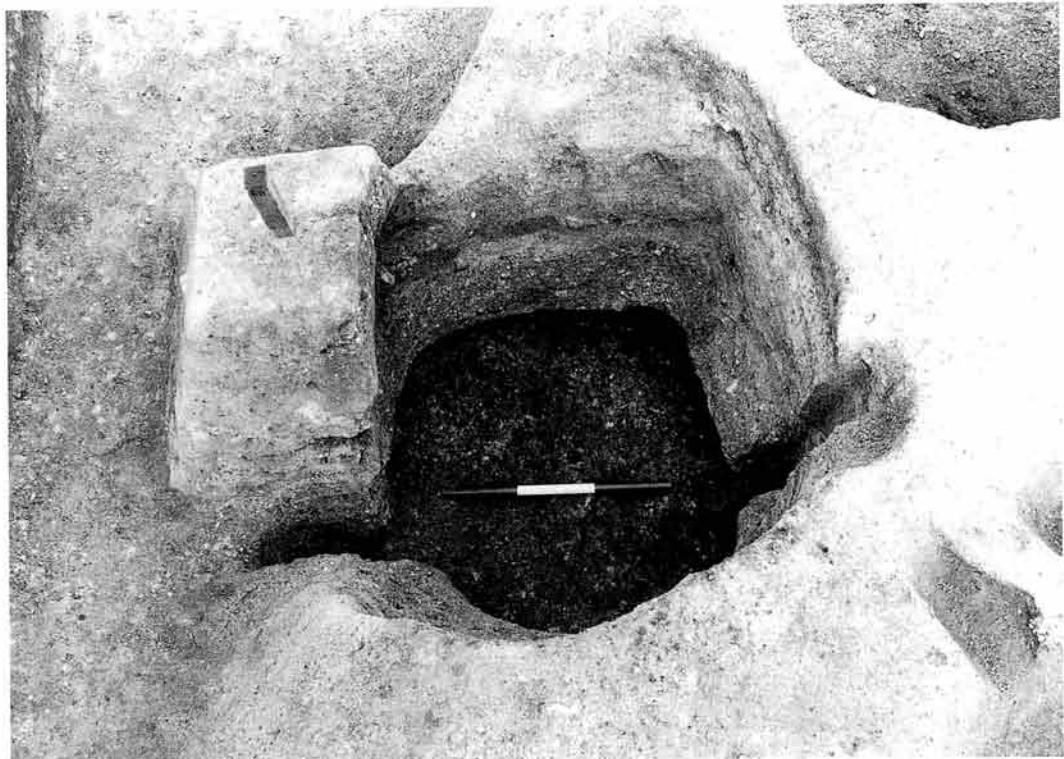


SE02(北から)

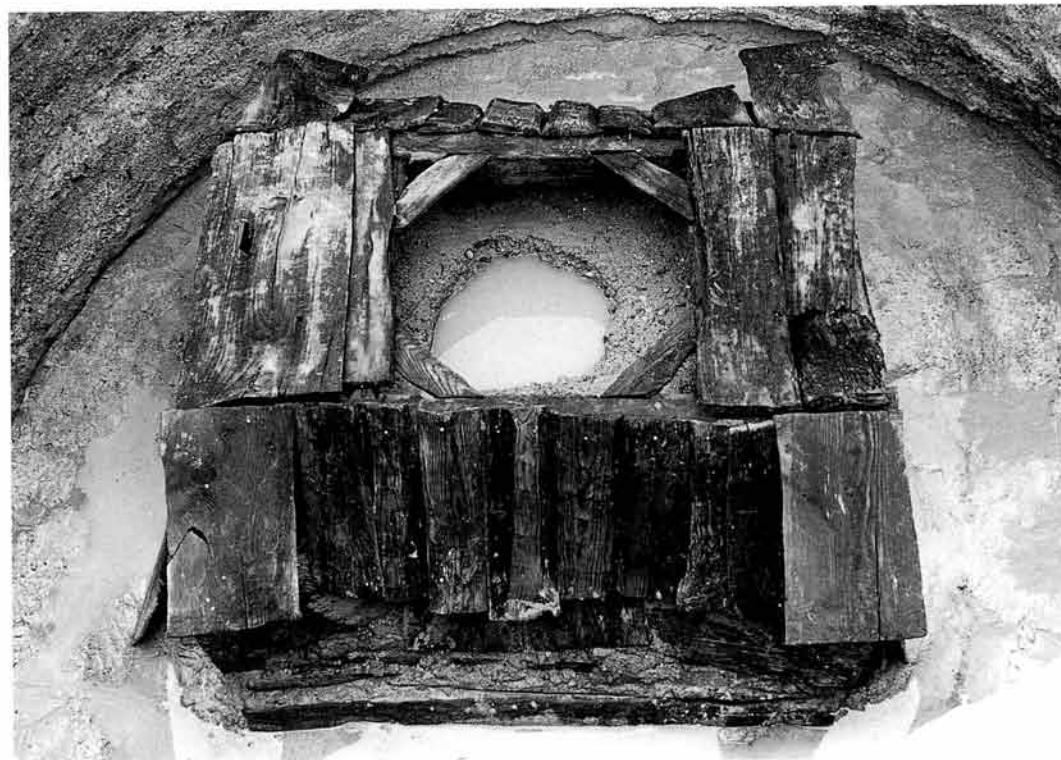


SB01(北東から)

図版二四 KW91—18次調査飛鳥・江戸時代の遺構



SE01(南から)



SE09(南から)



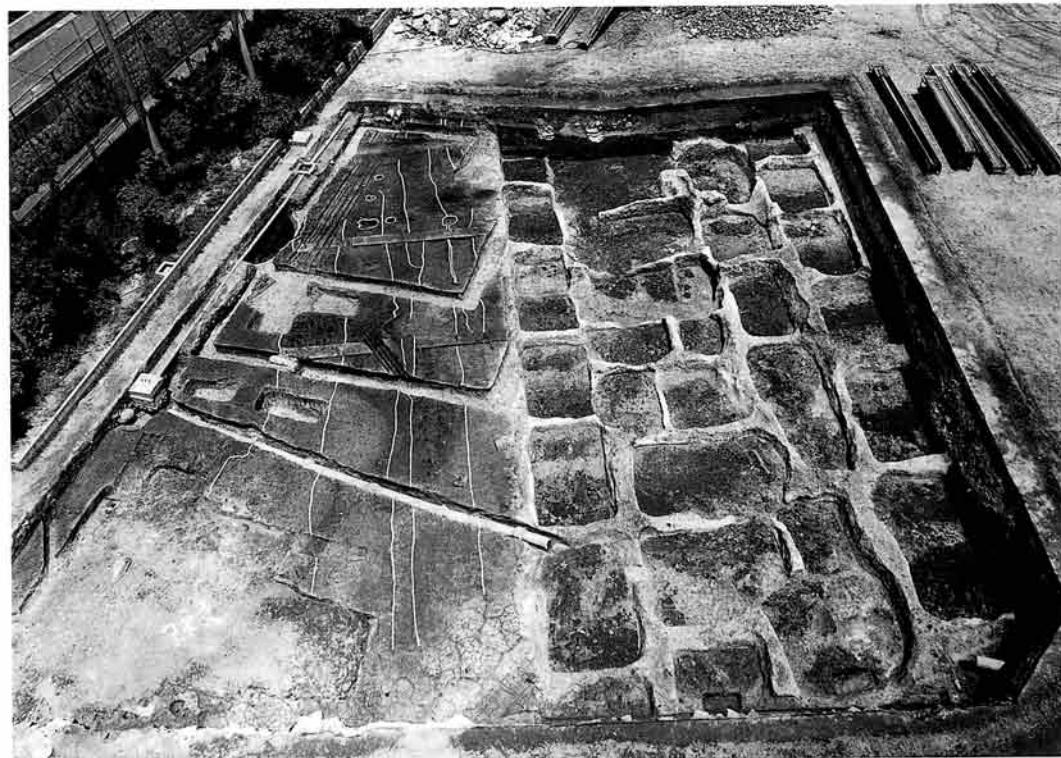
調査地全景(北西から)



調査地東部の遺構(南西から)

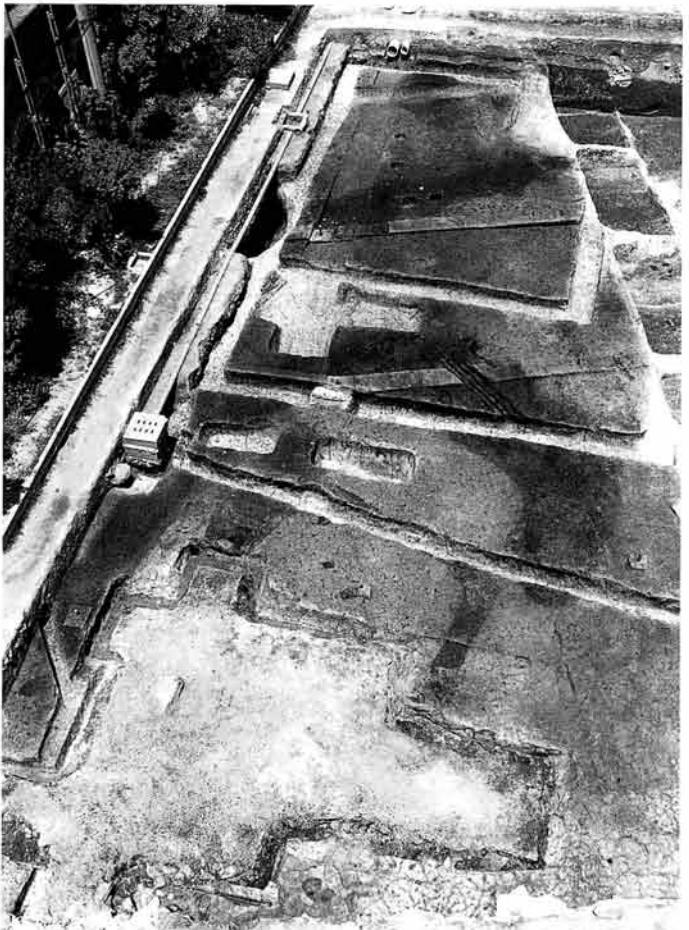


調査地から桑津小学校を望む(東から 左奥がKW90-14次、右端がKW82- 7 次調査地)



中世以降の遺構(南から)

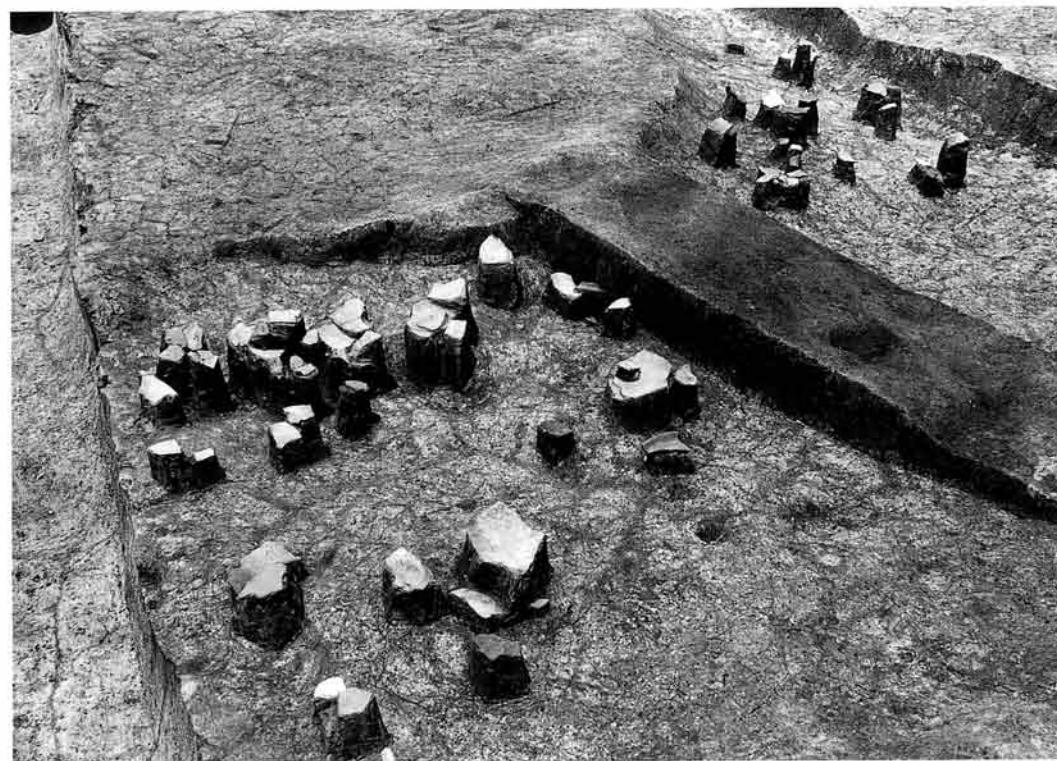
I区 検出状況(南から)



I区 方形周溝墓1(南西から)



西周溝壺836出土状況(南東から)



東・北周溝遺物出土状況(東から)



I区 方形周溝墓2・SD01(北東から)



II区 方形周溝墓3(南から 右奥が82—7次調査地)

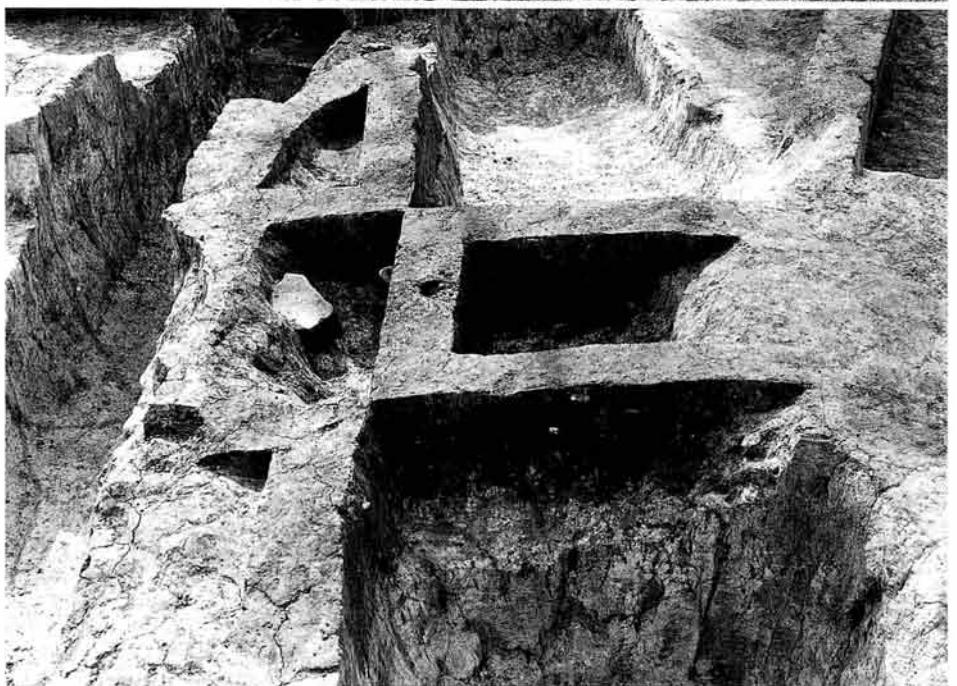


南周溝遺物出土状況(東から)



壺859出土状況(北東から)

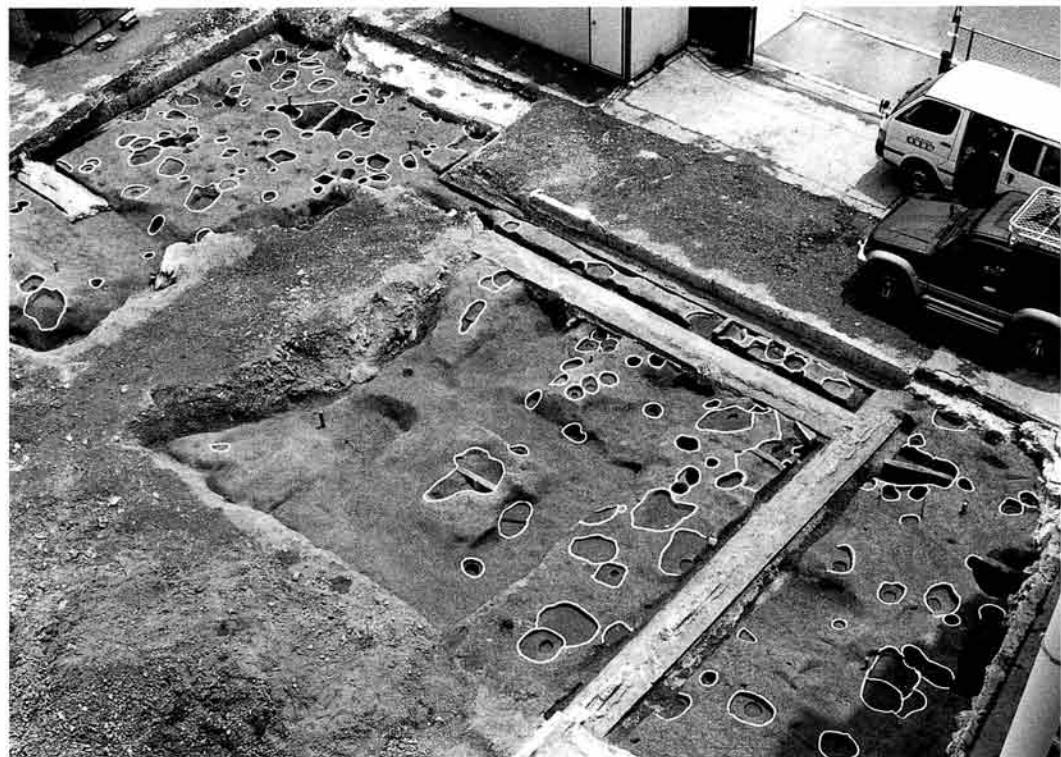
I区 SD01遺物出土状況
(西から)



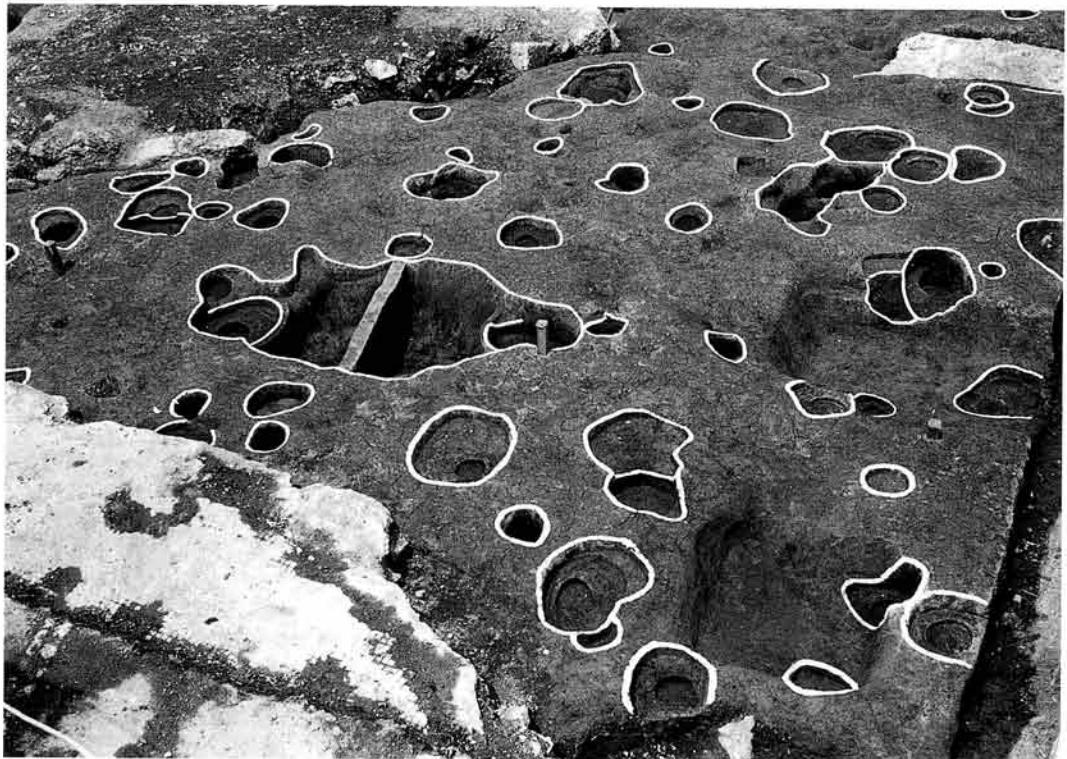
I区 土壙墓(東から)



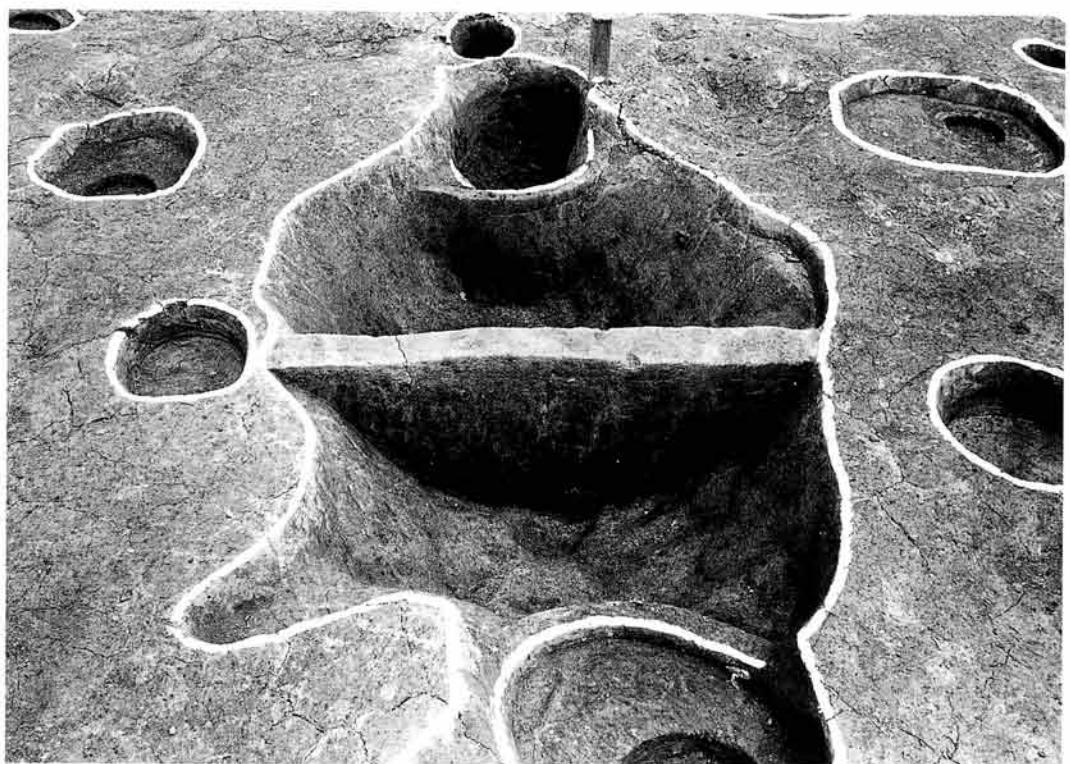
調査地全景(北西から 左下は防空壕)



調査地南地区(北西から)



SB01(南から)

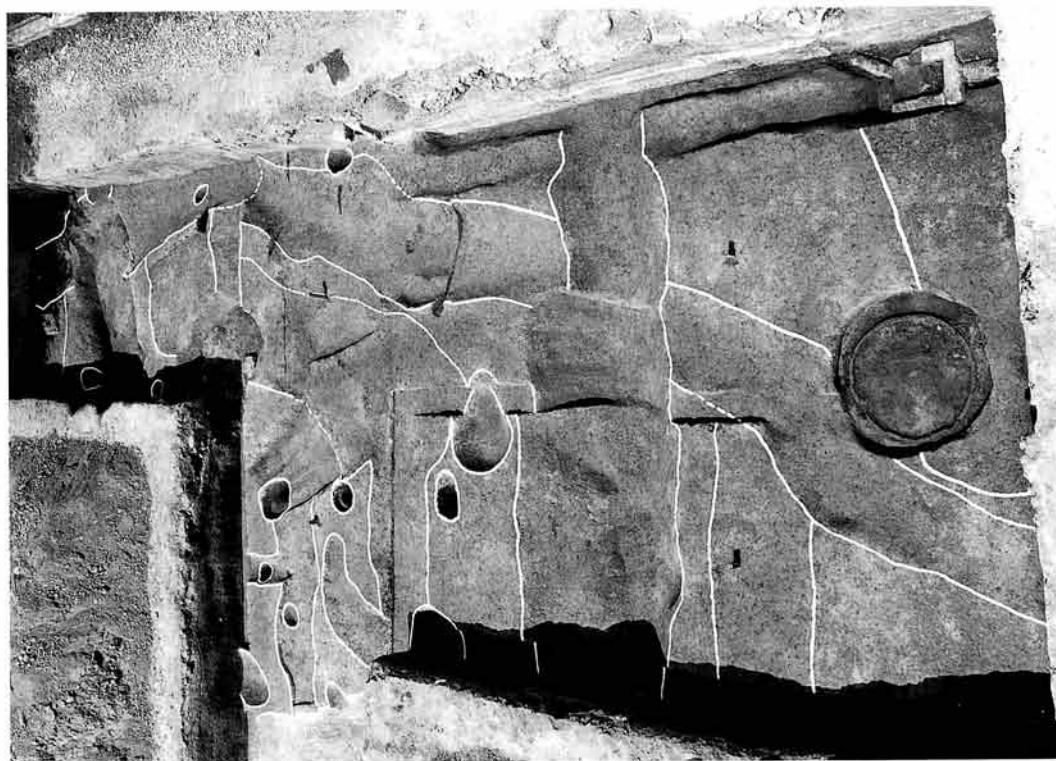


SK01(西から)

図三四 KW94—4次調査完掘状況

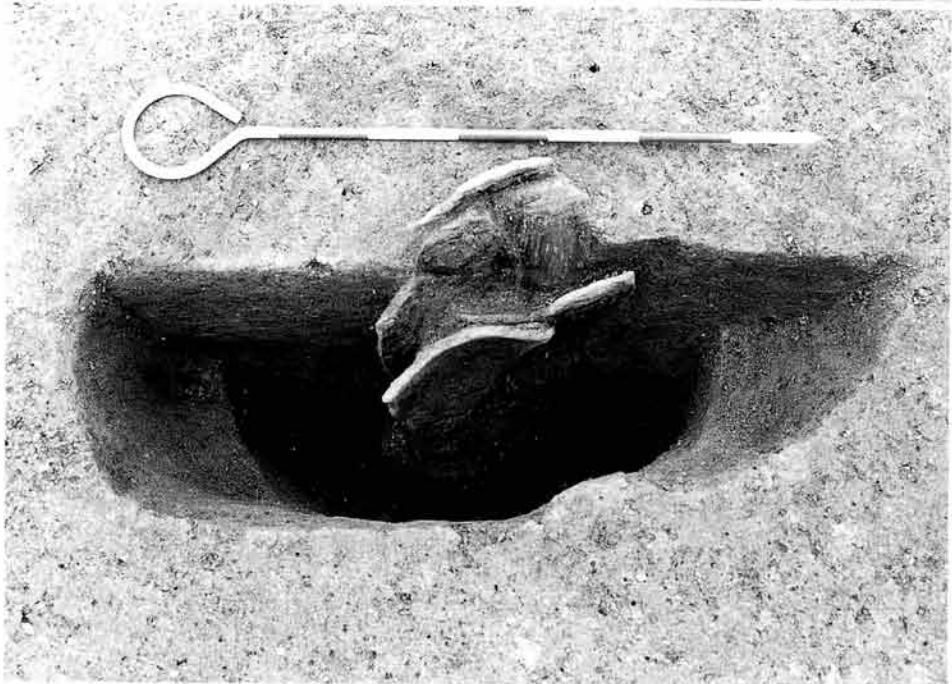
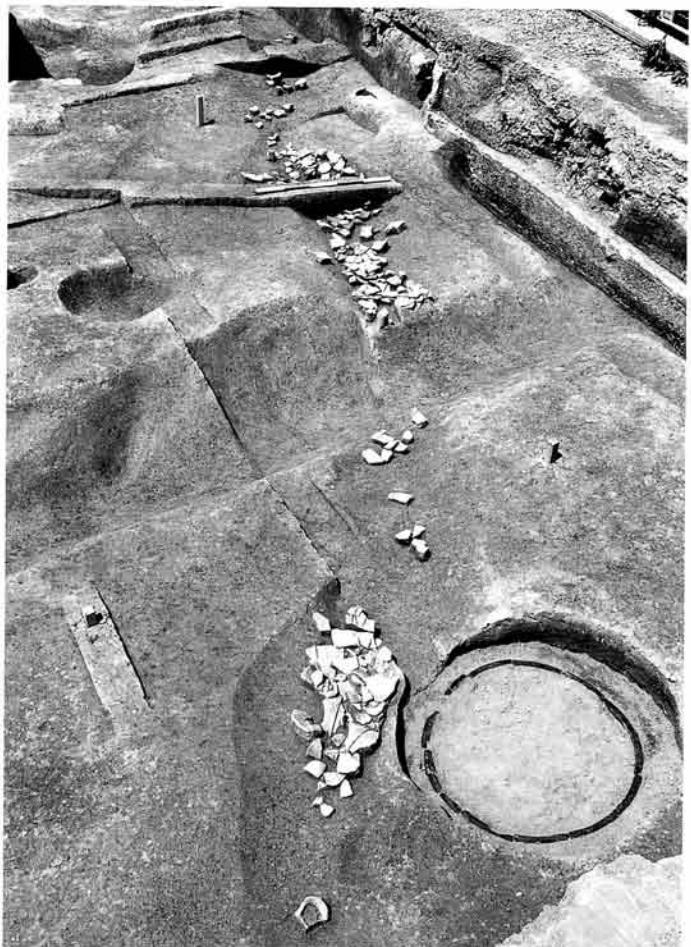


II区(西から)



I区・拡張区(南から)

SD06遺物出土状況
(南西から)



SP01鍋1027出土状況(南から)

図版三六 KW95—5次調査弥生～江戸時代の遺構



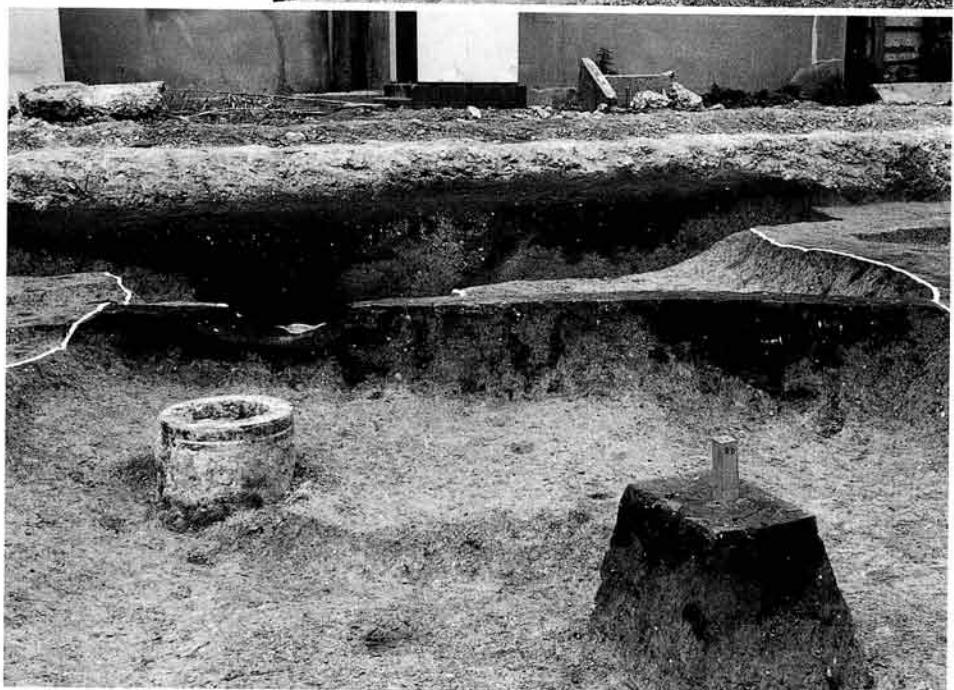
調査地中央部～西部(北から)



SE01(北から)

図版三七 TH89—3次調査飛鳥・奈良時代の遺構

調査区全景(北から)



SD01 · 02断面(東から)

図版三八 TH89—3次調査平安時代の火葬墓

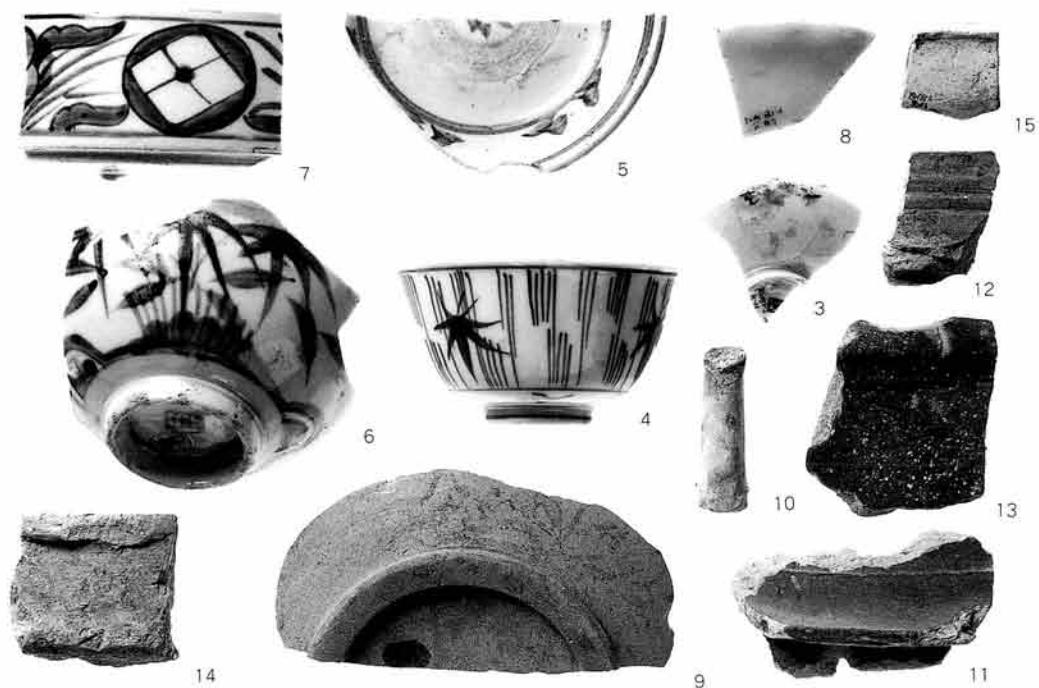


検出状況(北から)

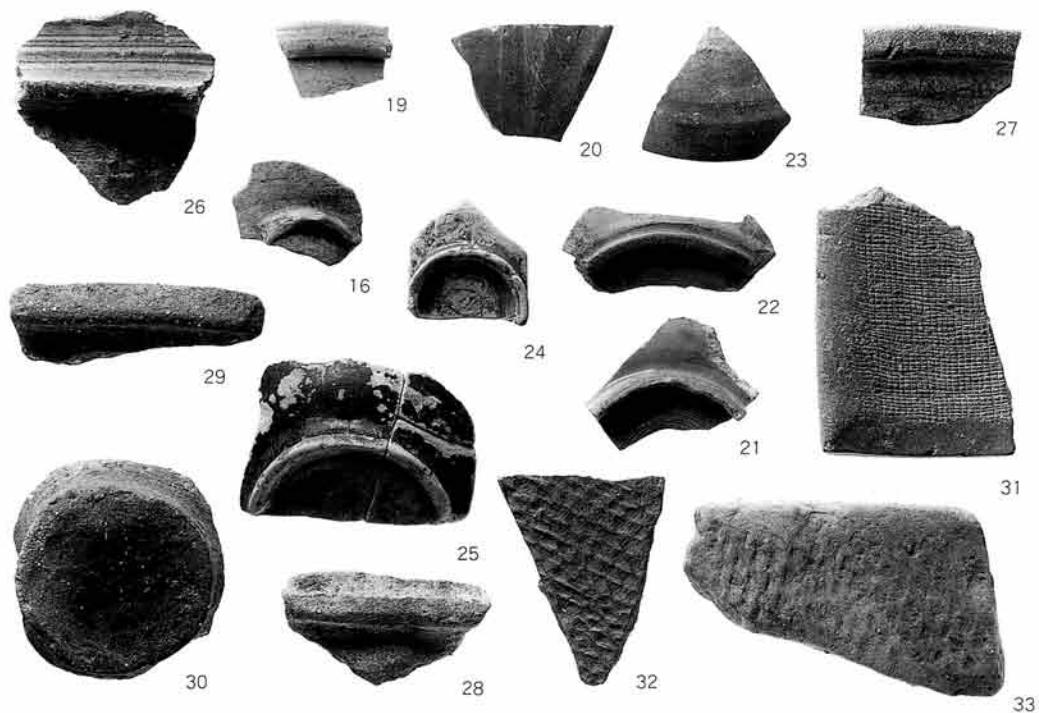


完掘状況(北から)

図版三九
KW81—2次・KW82—7次調査出土遺物



KW81—2次 桑津2層(3~11・14)、桑津3層(12・13・15)



KW82—7次 桑津3層(16・19~28・31~33)、桑津5層(29・30)



39



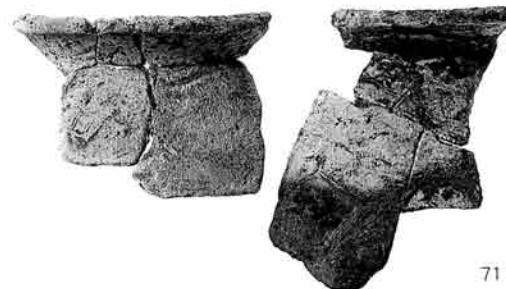
38



79



59



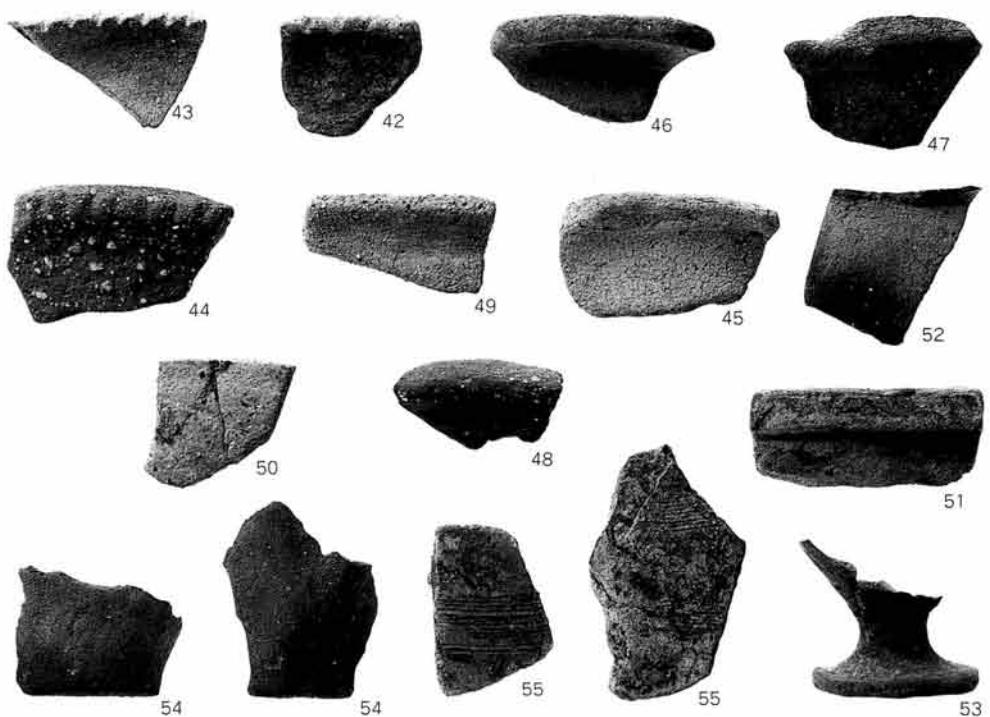
71



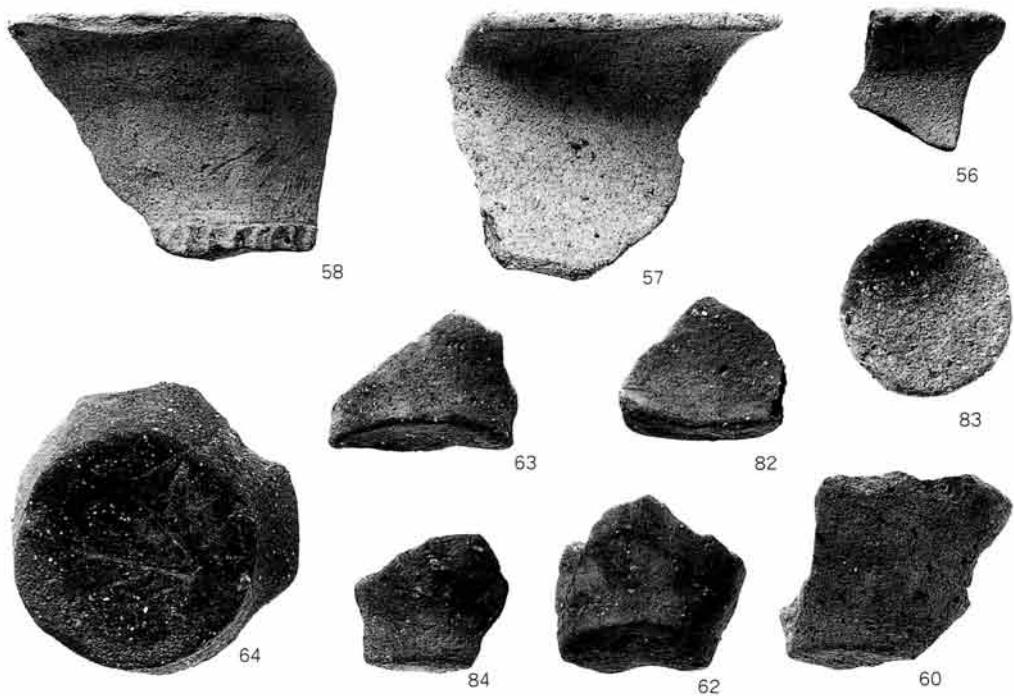
73

方形周溝墓1(38・39)、方形周溝墓3(59)、SE01(71・73)、SK01(79)

図版四一 KW82—7次調査出土遺物(二)

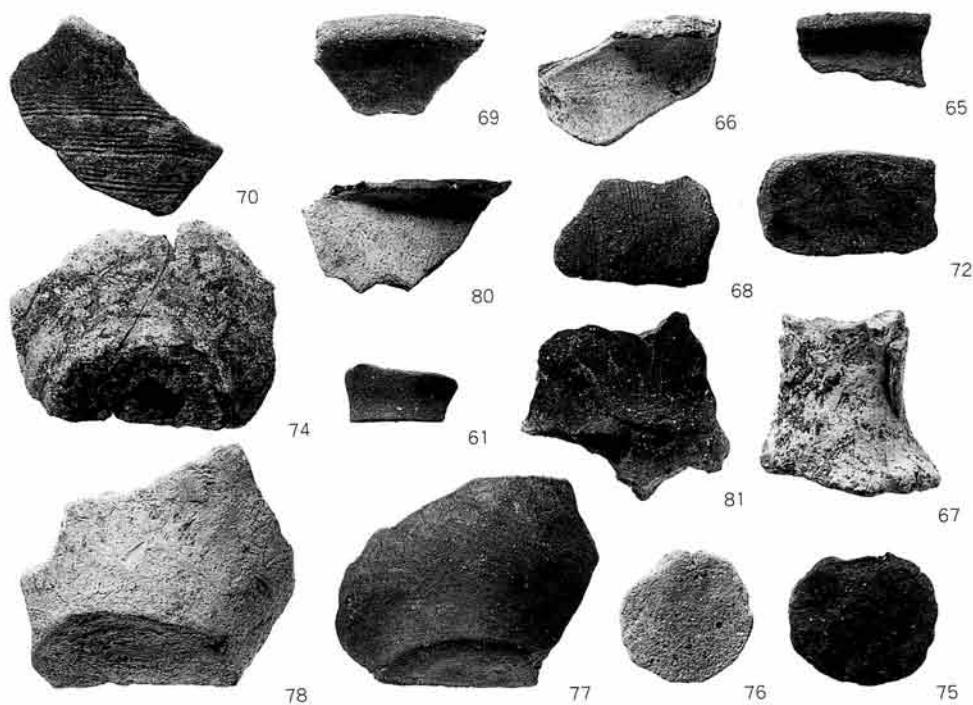


方形周溝墓2

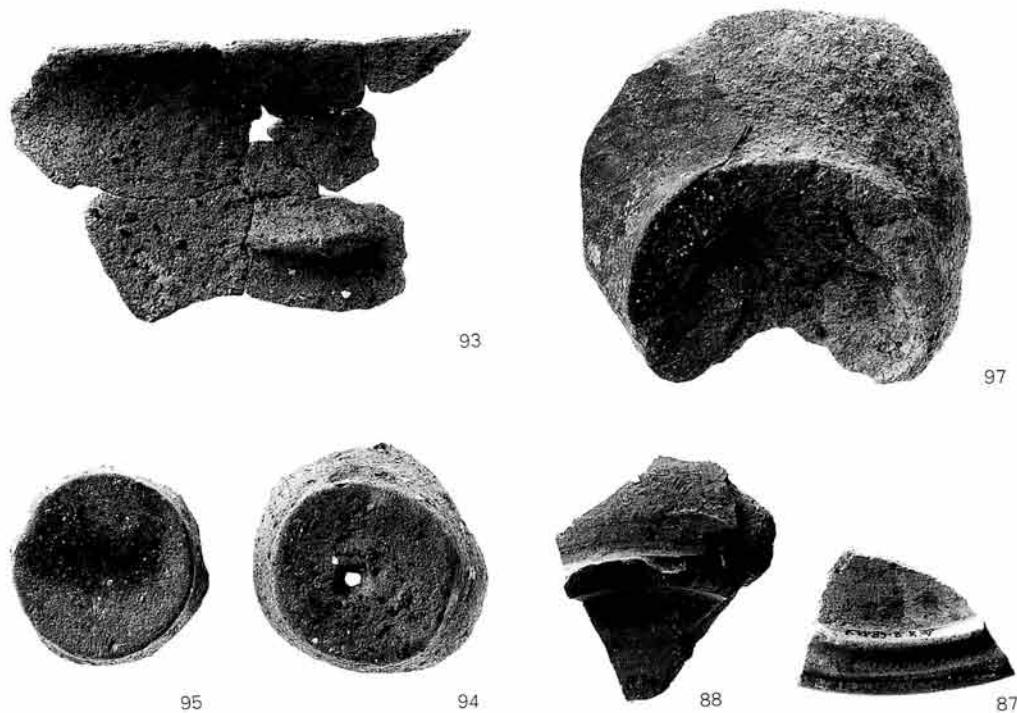


方形周溝墓3(56~58・60・62~64)、SX01(82・84)、SX03(83)

図版四二
KW82—7次・KW83—8次調査出土遺物

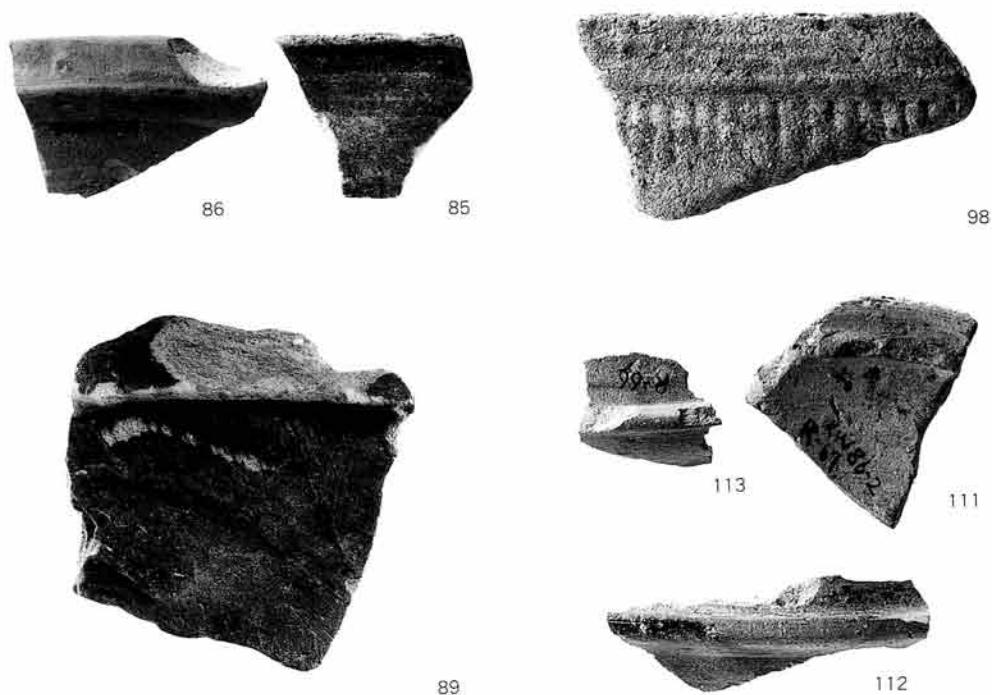


KW82—7次 方形周溝墓3(61)、SD01(66~68)、SD02(65)、SE01(69·70·72·74·75~78)、SK01(80)、SK02(81)



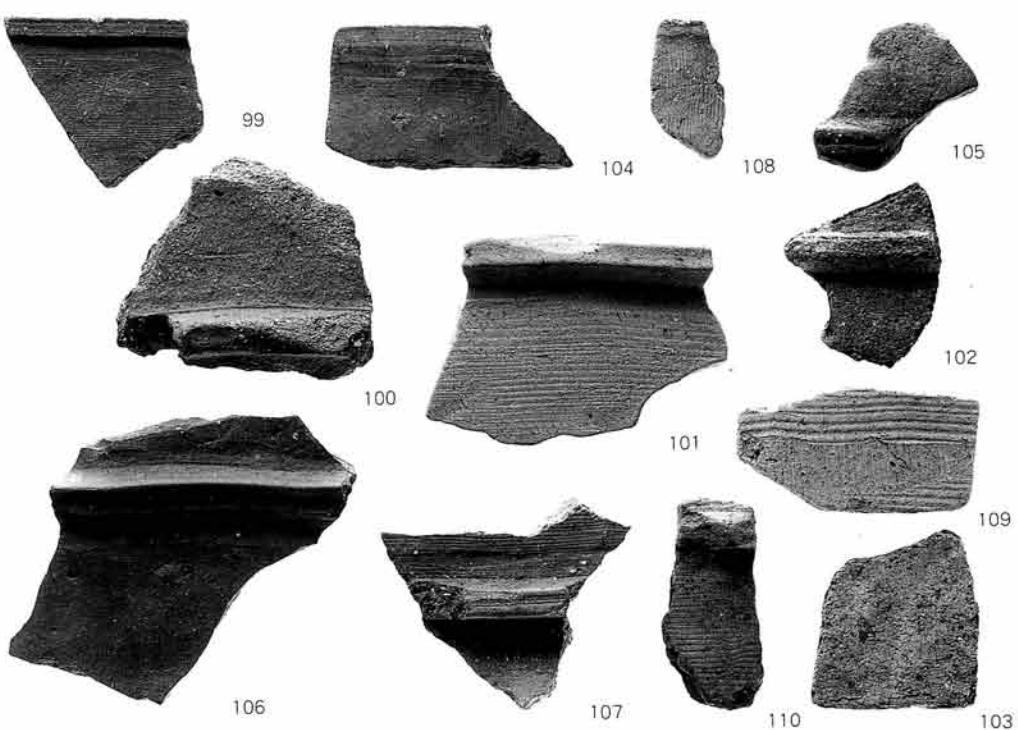
KW83—8次 桑津5層(87·88)、方形周溝墓1(94)、方形周溝墓3(93)、方形周溝墓4(97)、方形周溝墓7(95)

図版四三 KW83-8次・KW86-2次調査出土遺物

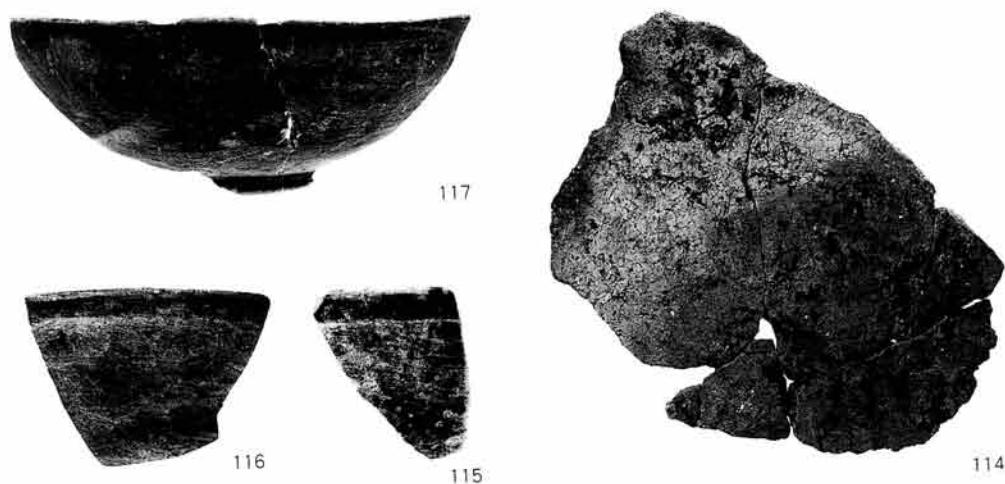
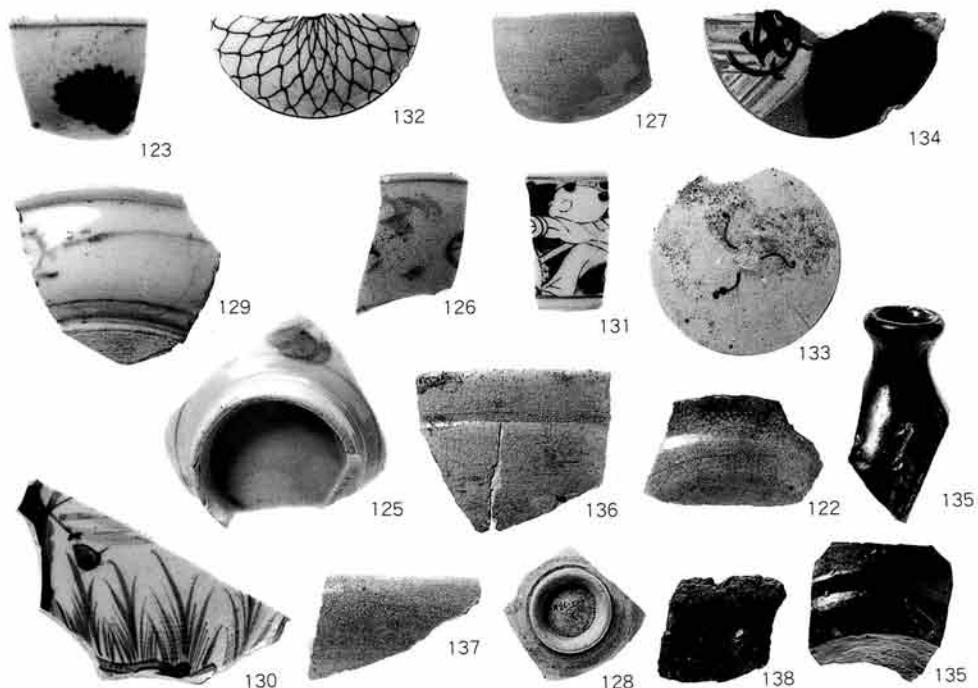


KW83-8次 桑津3層

KW86-2次 弥生土器(98)
須恵器(111~113)



KW86-2次 円筒埴輪



桑津4層(114)、SD01(115~117)、SD03(122~139)



143



160



163



161



156



161

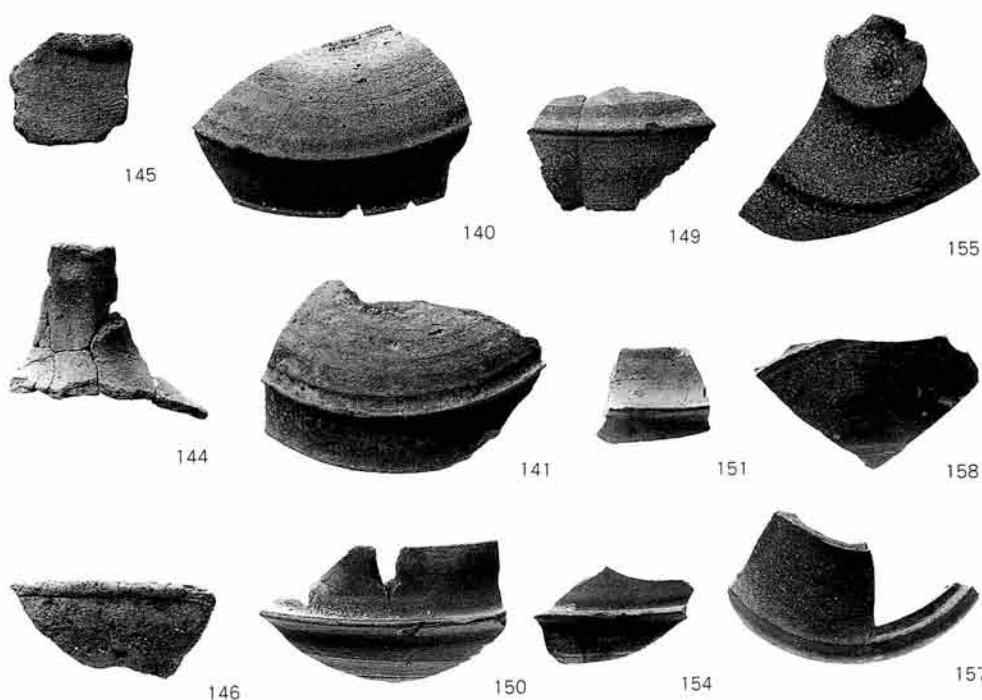


159

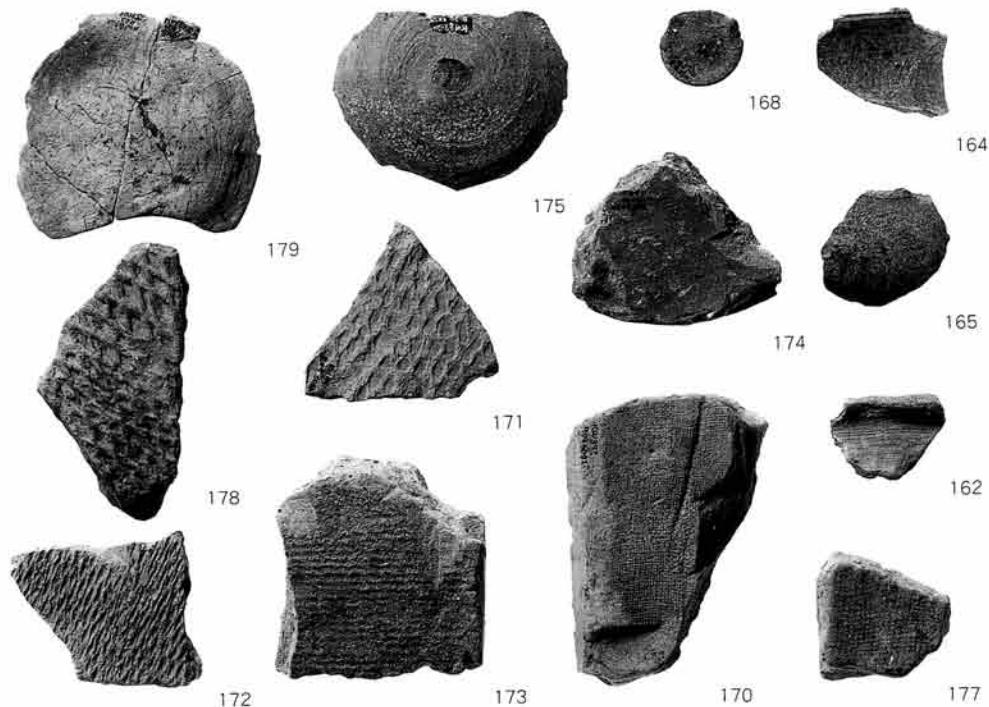


174

SB01(143)、SD01(163)、SD03(174)、SK02(156・159・160・161)



SB01(140)、SB02(144~146)、SB03(141)、SK02(149・150・154・155・157)、SK03(151)
SK09(158)



SD01(162)、SD03(164・165・168・170~174)、SK10(175・178)、SK11(179)、SP13(177)



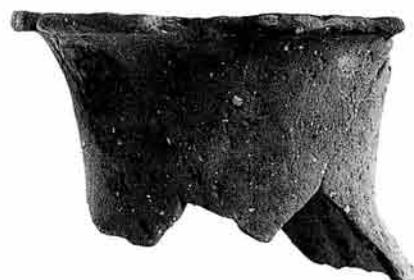
189



188



182



186



190



201



191

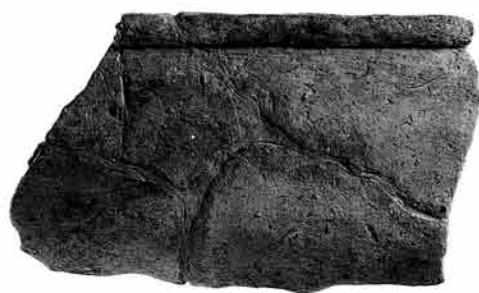


206

図版四八
KW87—23次調査出土遺物(一)



211



196



214



202



213



207



181

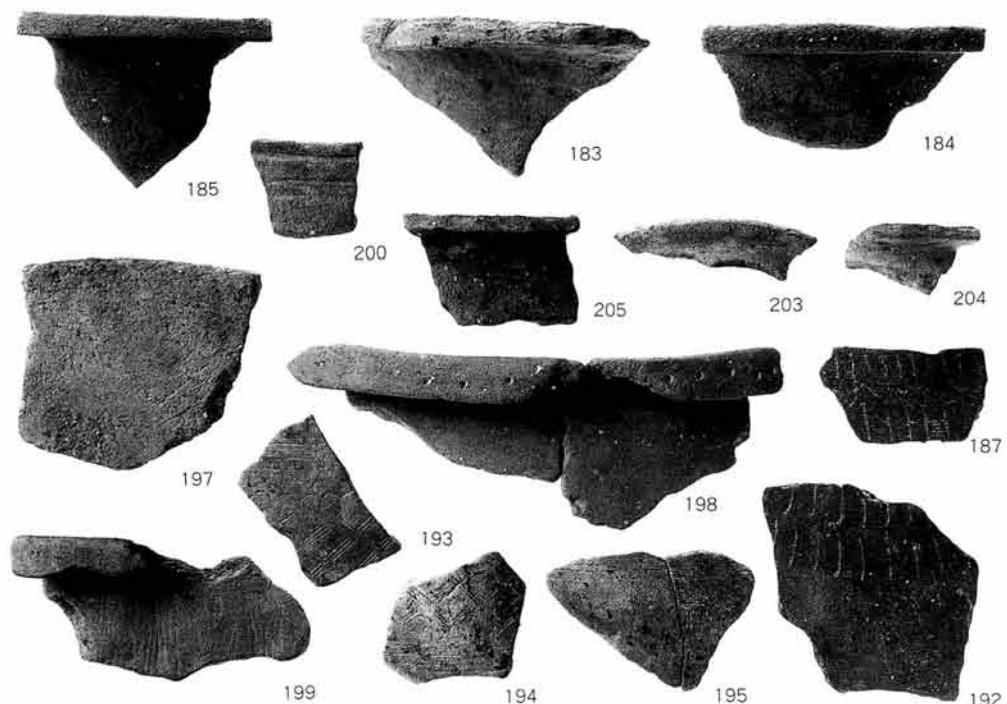


210

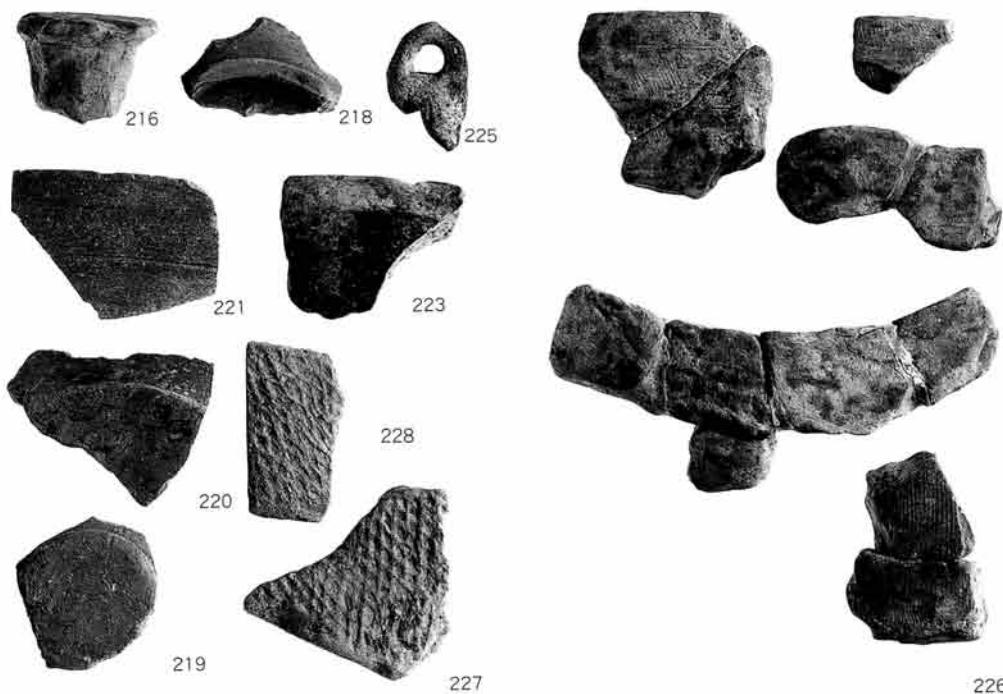


208

SD01(181・196・202・207・208・210)、SK01(213・214)、SP01(211)



SD03出土弥生土器



SD04(228)、SD06(216・218~221・223・
225~227)

SD06出土甕



262



258



259



260

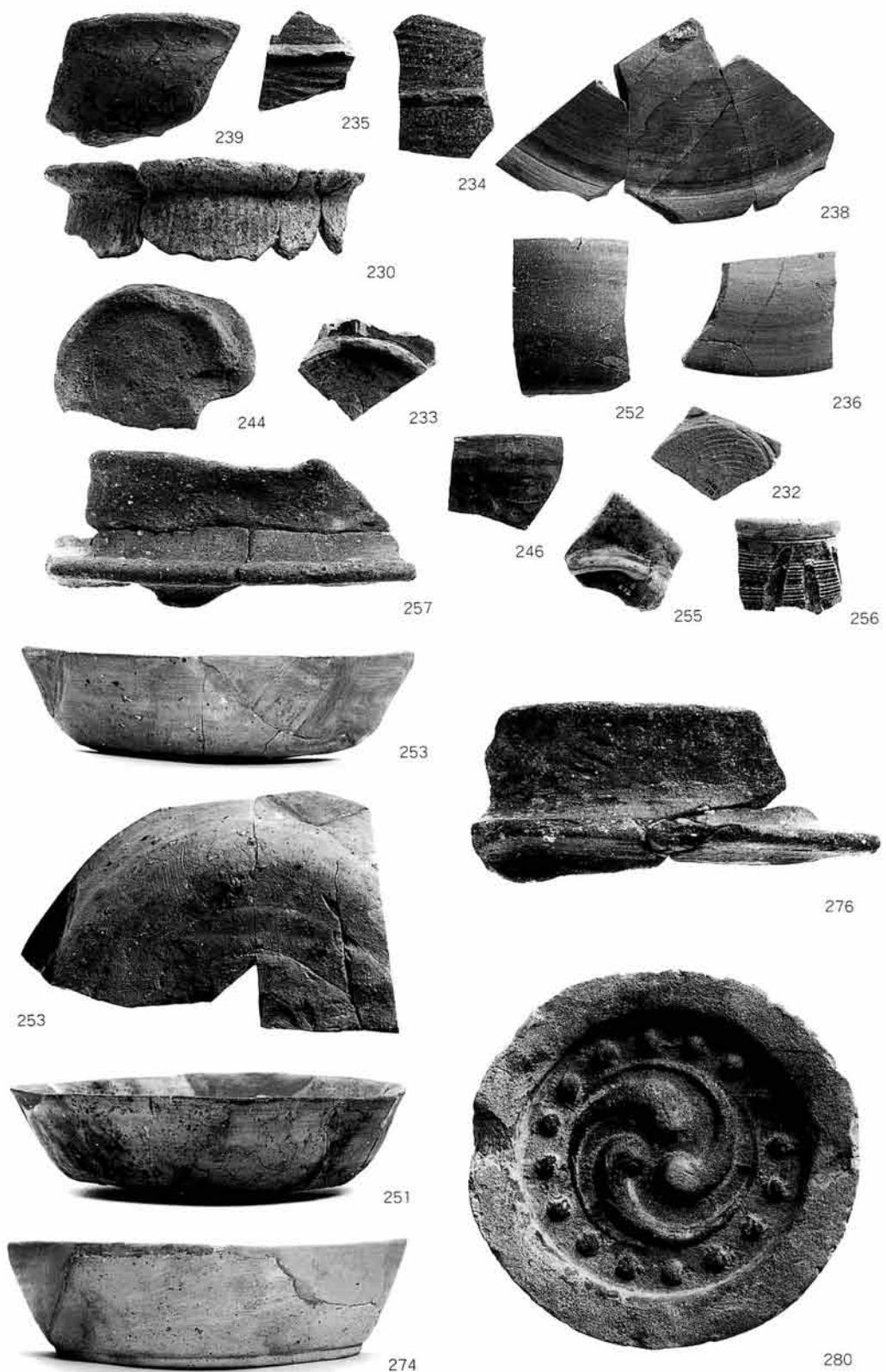


261

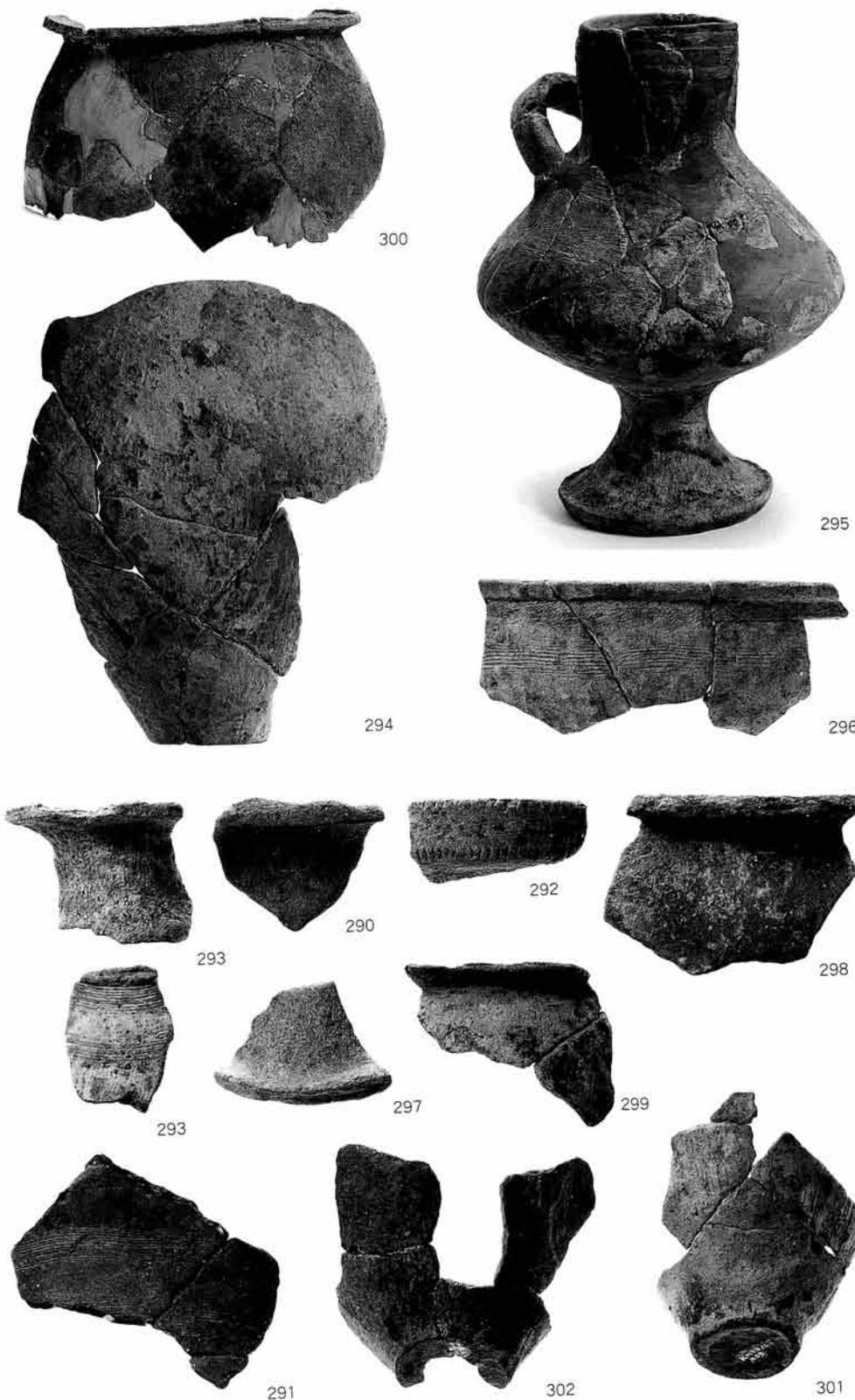


264

方形周溝墓1出土弥生土器(258・259・260・262)、SD01出土弥生土器(261・264)



桑津2層(232~234・256)、桑津3層(230・235・236・238・239・244・246・251~253・255・257)、SD03(274)、SD09(276)、桑津2層下面遺構(280)

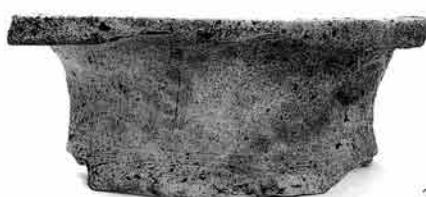




320



317



318



323



325



324



326



弥生土器壺



349



345



350



368



351



353



357



381



358

弥生土器水差・無頸壺・鉢・高杯



380



384



400



398



404



405



406



394



393



391



397



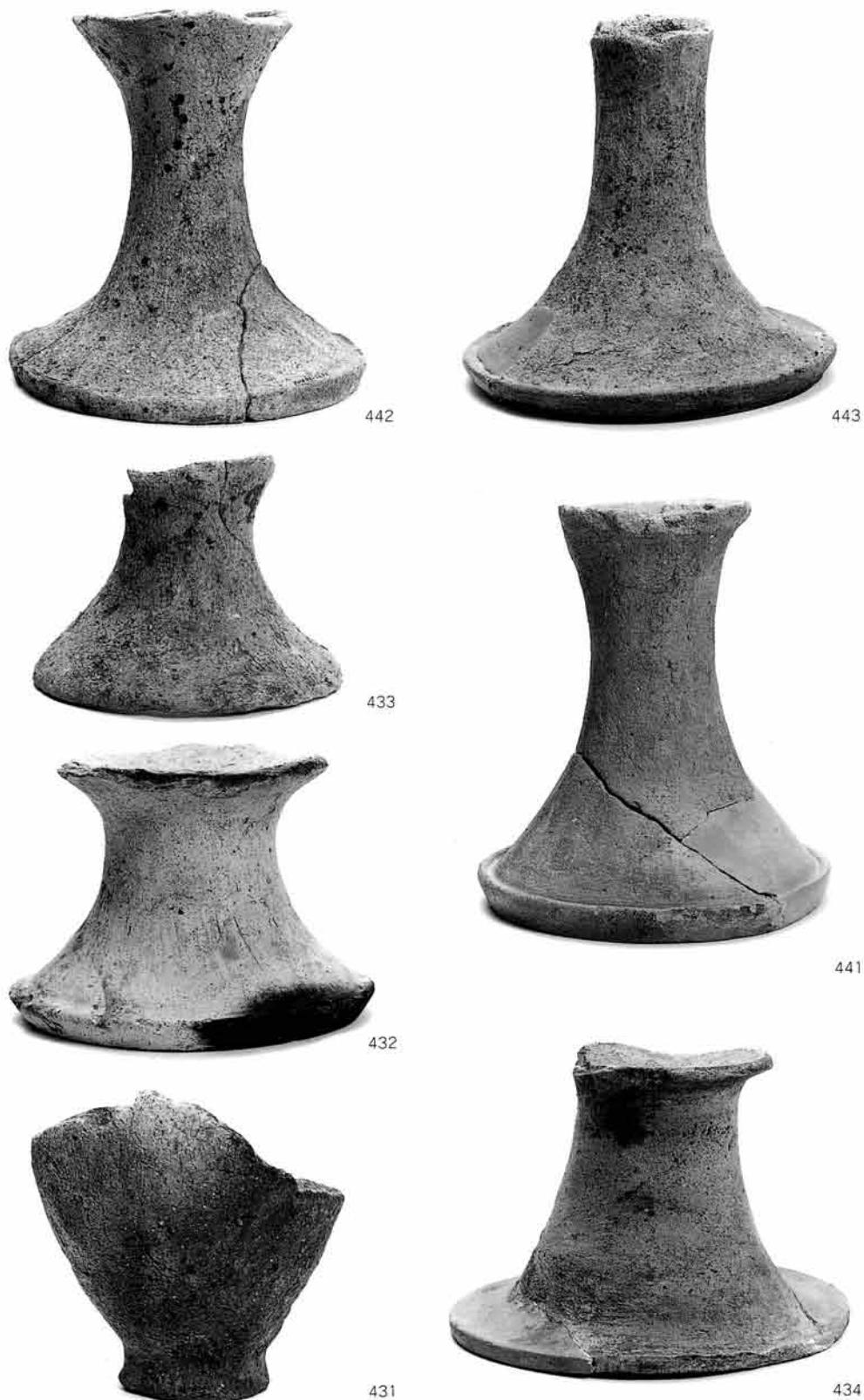
408



409

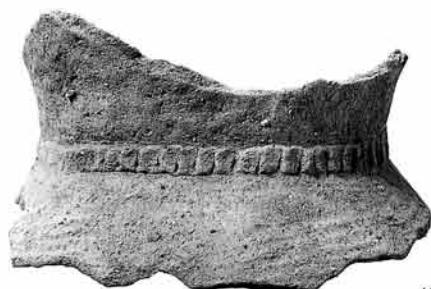


415

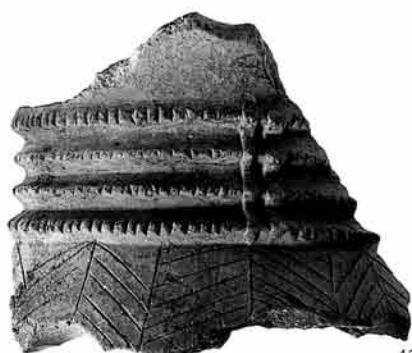


弥生土器高杯・台付鉢・甕

図版五九 KW90-14次調査 SEO1出土遺物(七)



425



435



426



423



448



418



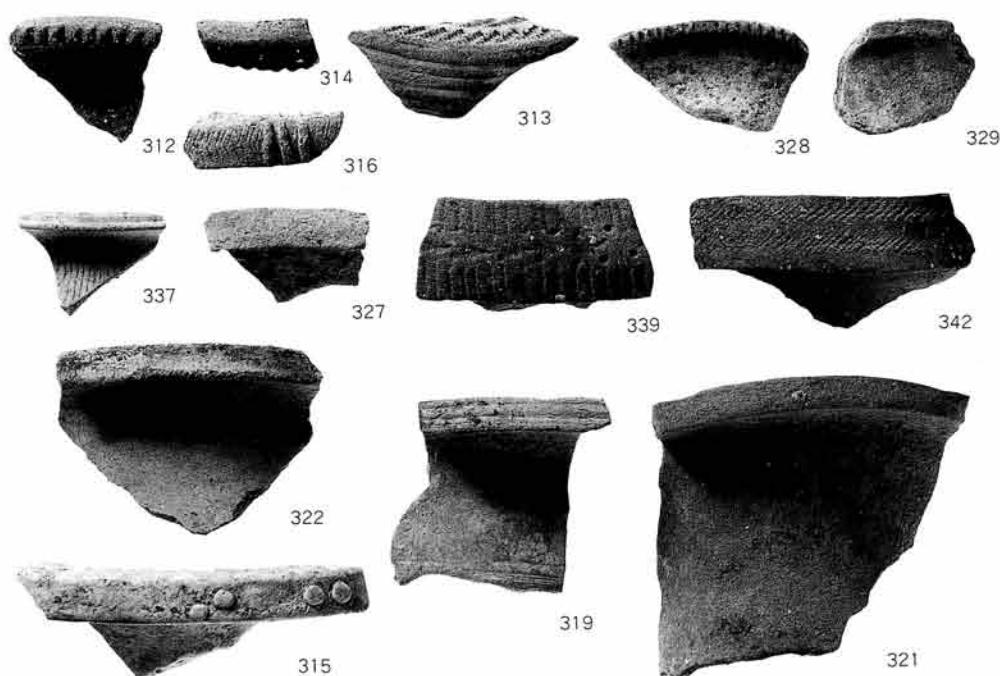
447



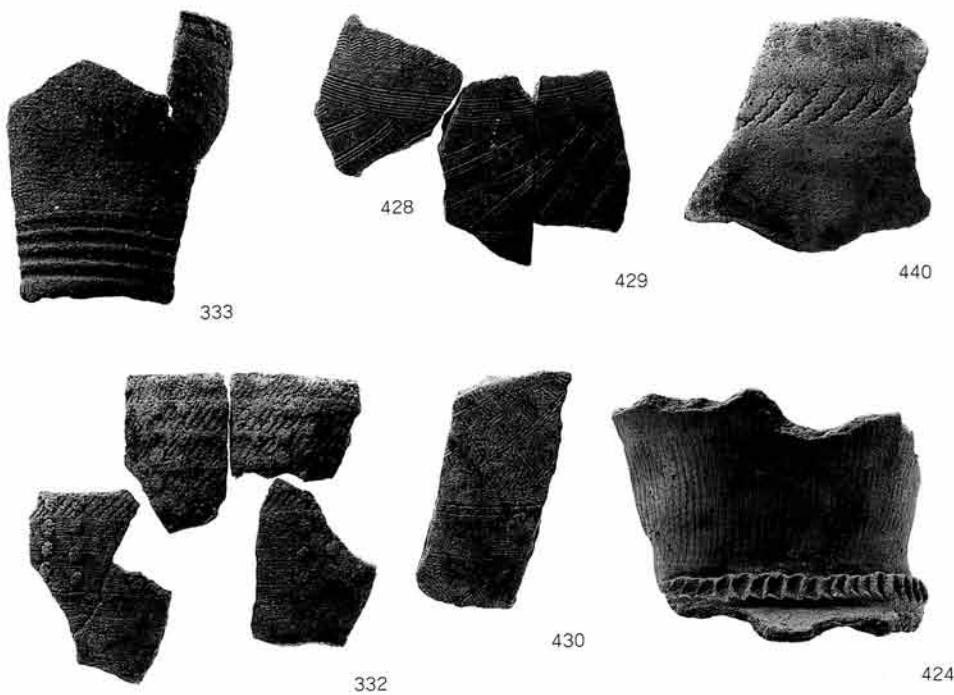
447

弥生土器・土製品・木製品

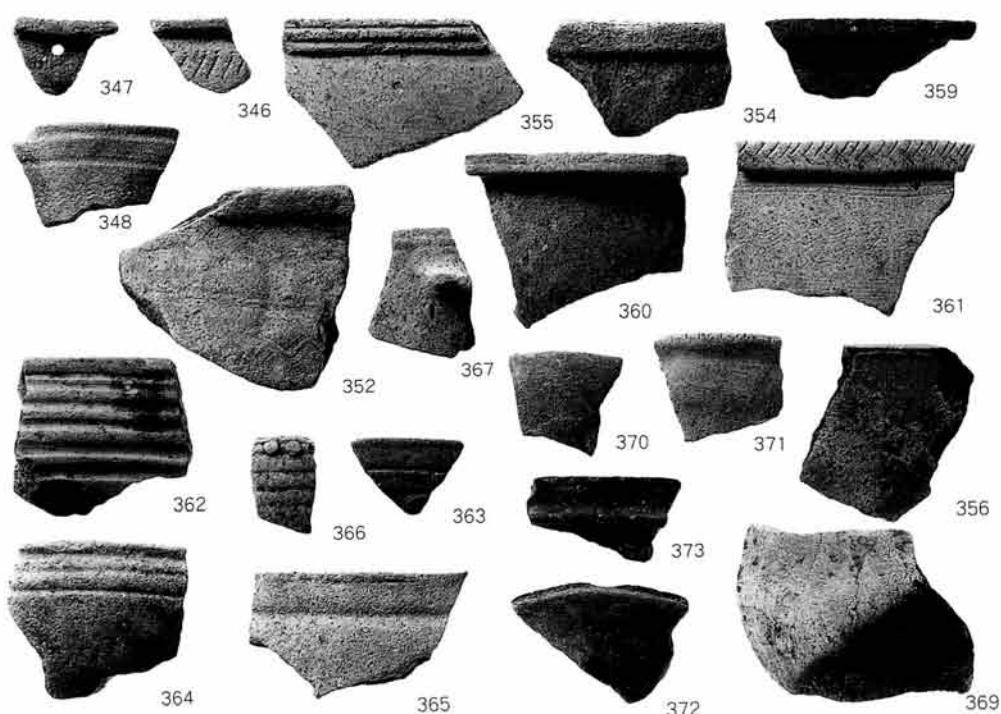
図版六〇
KW90-14次調査SE01出土遺物(八)



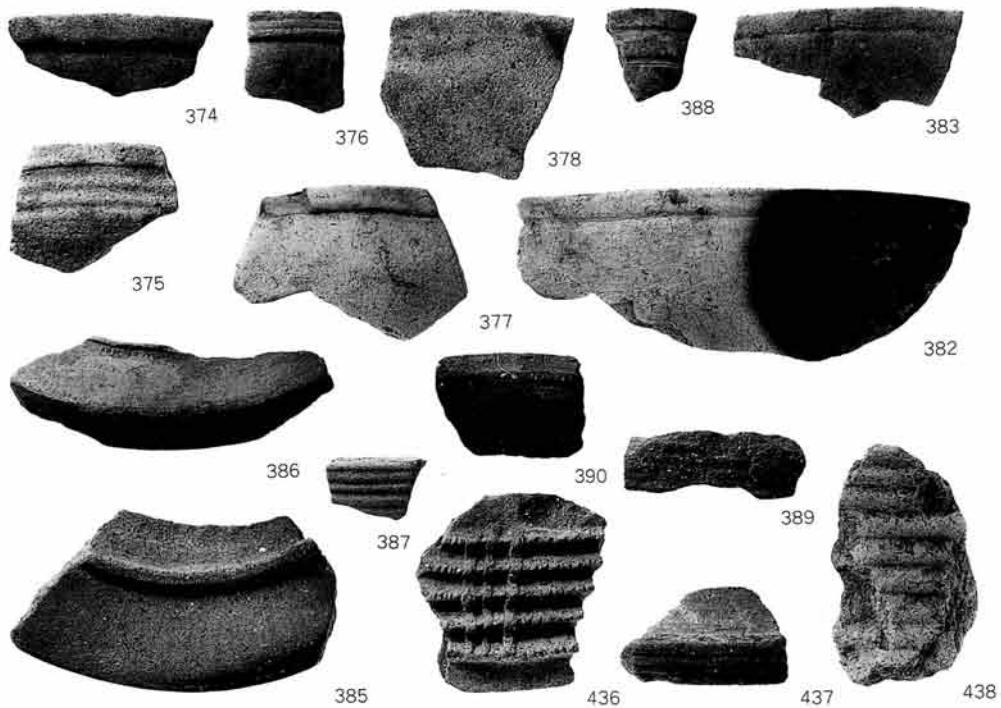
弥生土器壺



弥生土器壺

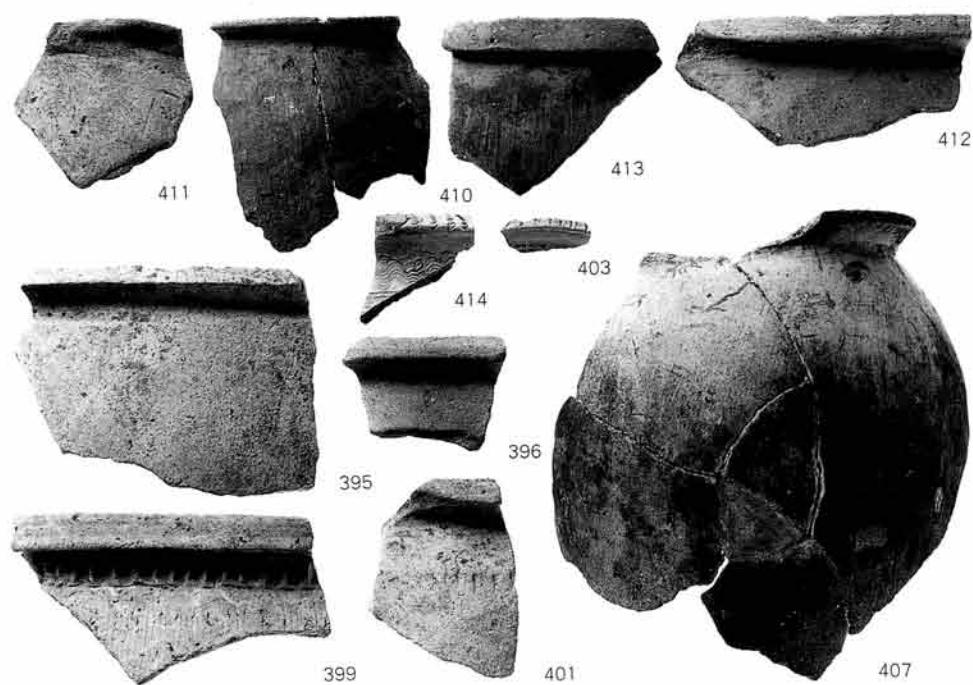


弥生土器無頸壺・鉢

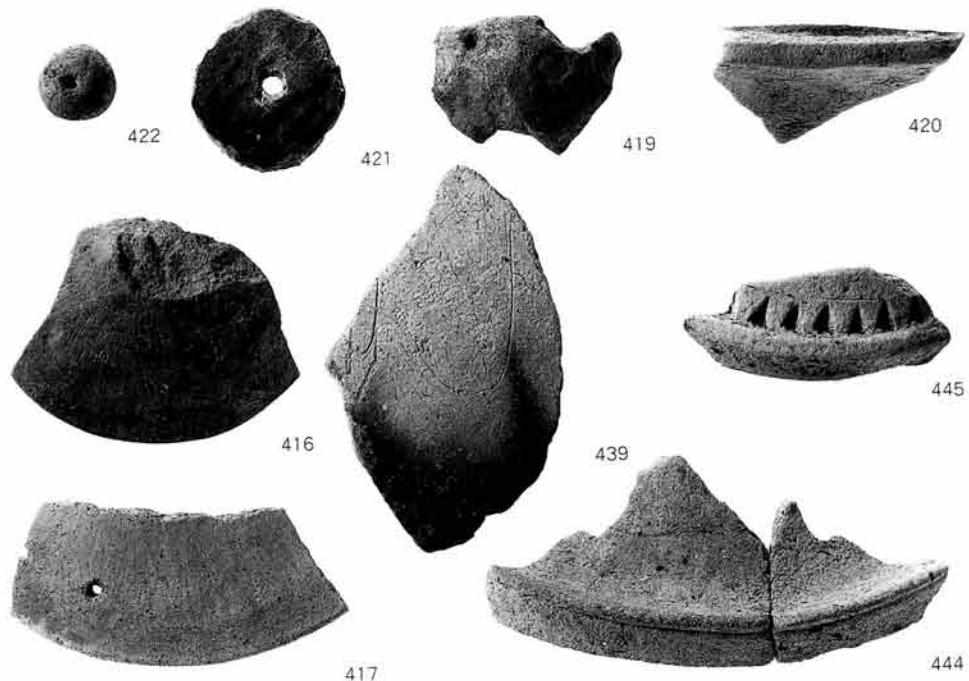


弥生土器高杯・器台

図版六二
K.W.90—14次調査SE01出土遺物(一)
(O)



弥生土器甕



弥生土器・土製品

図版六三
KW90-14次調査SK01出土遺物



462



451



450



452



453

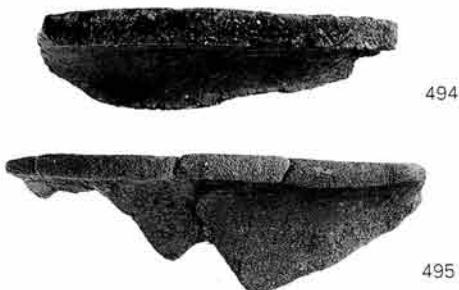


461

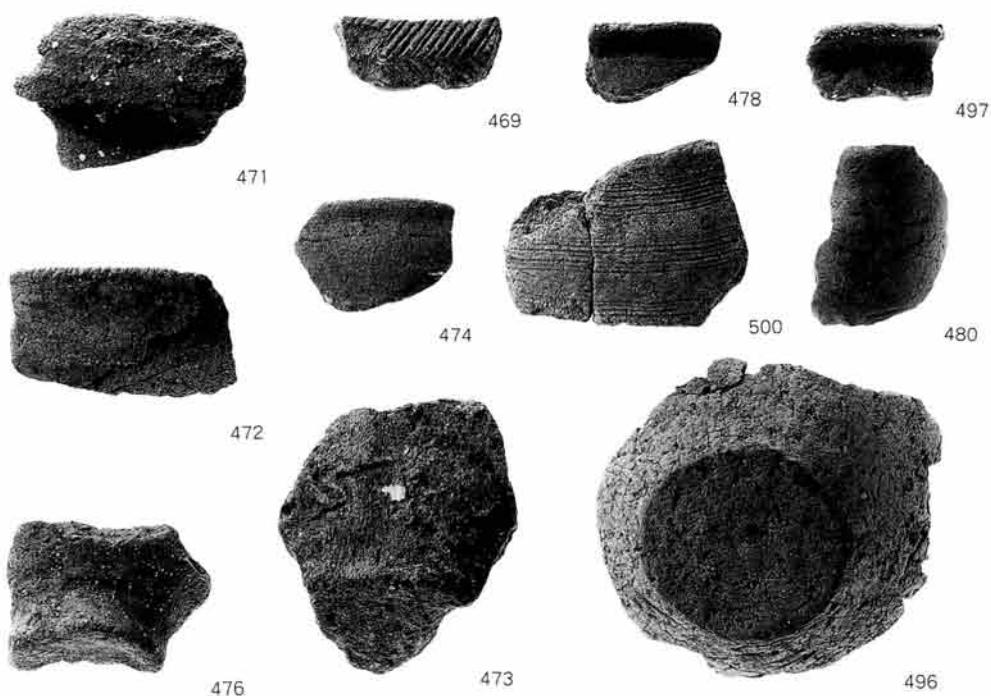


455

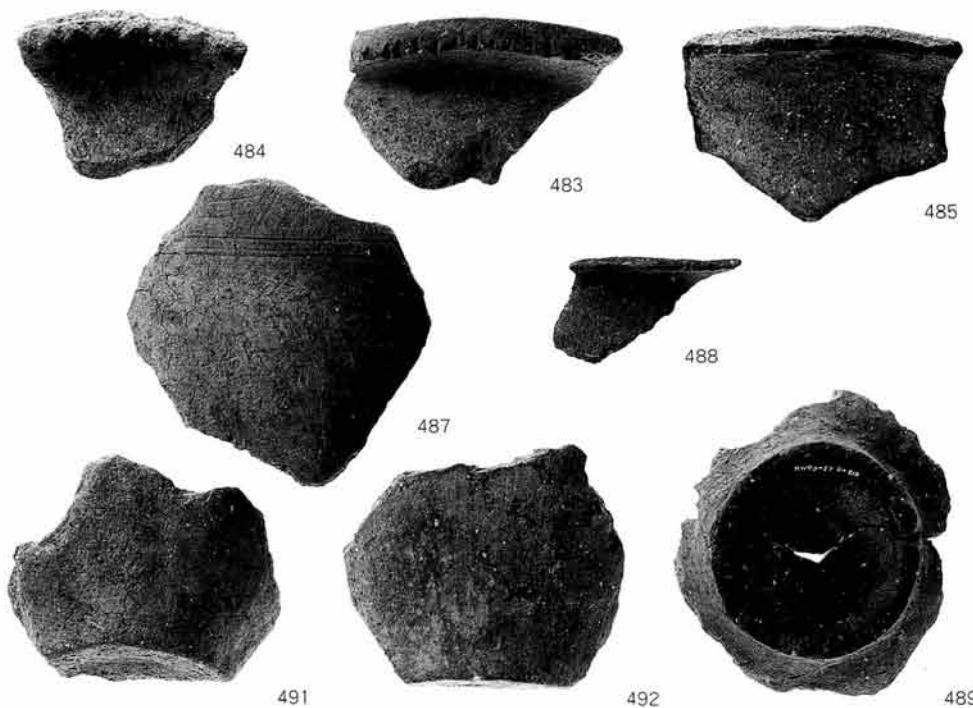
弥生土器



方形周溝墓1(470・475・477・479)、方形周溝墓2(486・490)、SK01(493)、SK02(494・495・498)



方形周溝墓 1



方形周溝墓 2



503



518



505



501



504



502



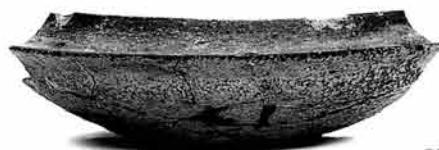
519



511



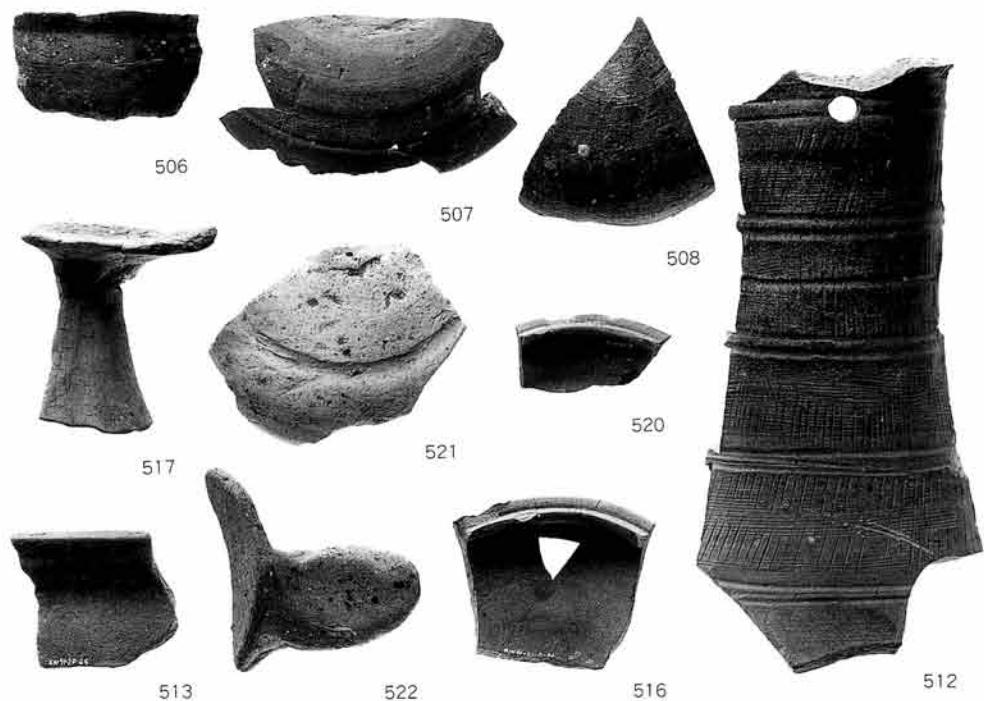
510



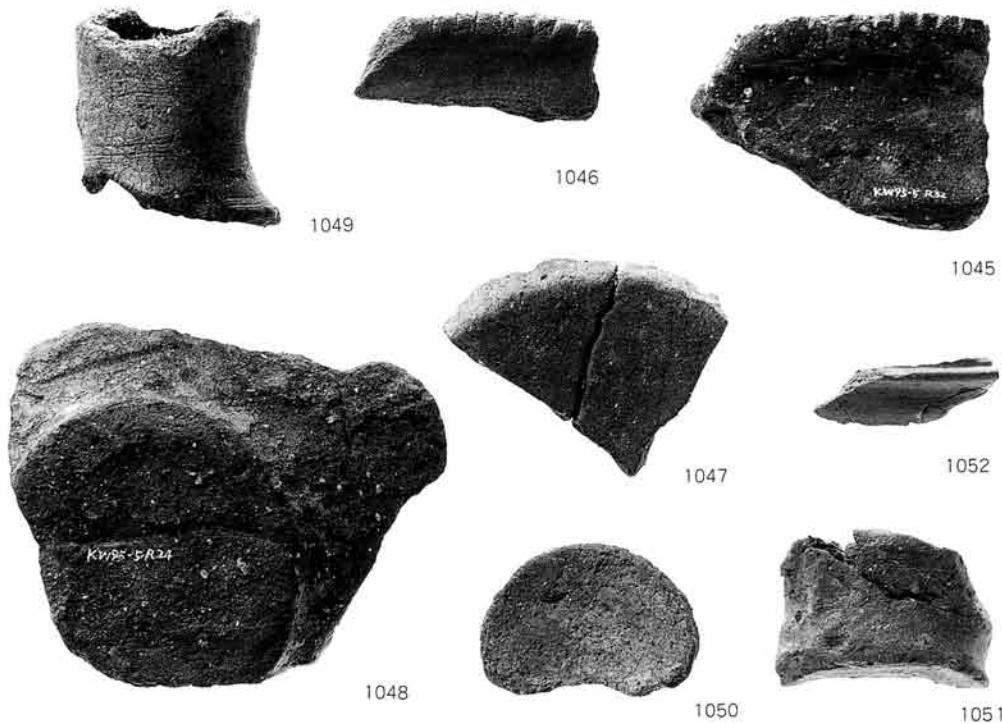
509

方形周溝墓1(501~505)、SD04(509~511)、SK01(518・519)

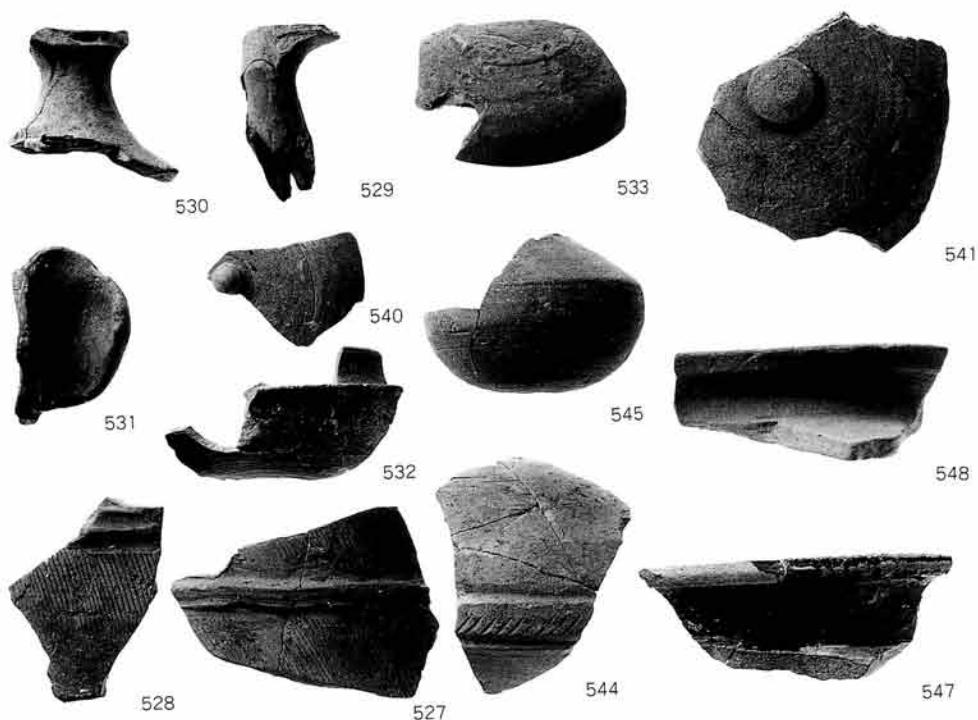
図版六七 KW91—2次・KW95—5次調査出土遺物



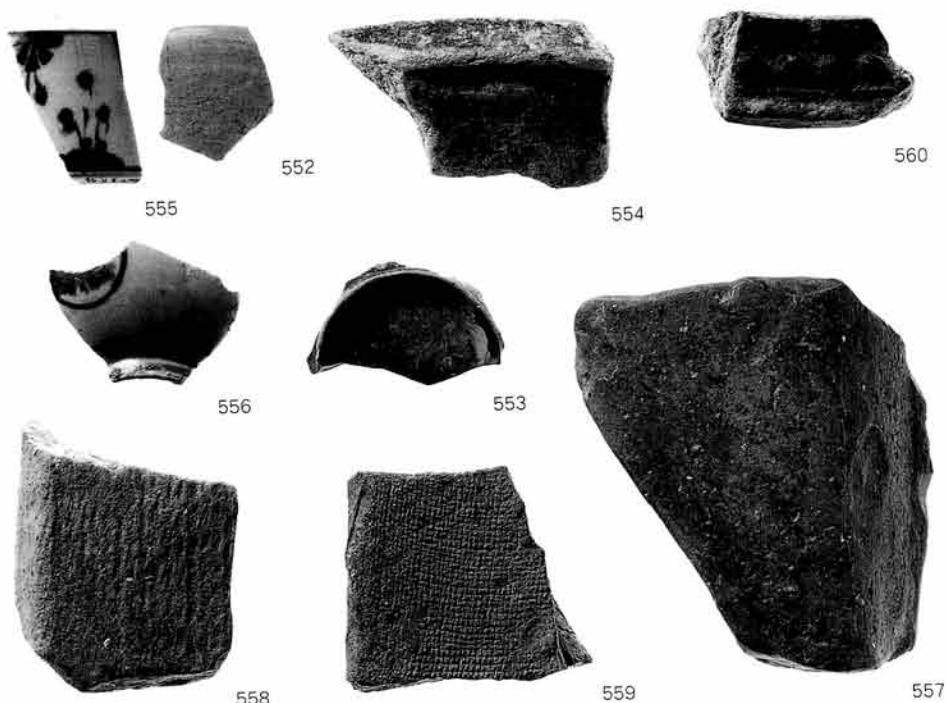
KW91—2次 SD04(506~508・512・513)、SP02(521・522)
SP03(520)、SK01(516・517)



KW95—5次 弥生土器・須恵器



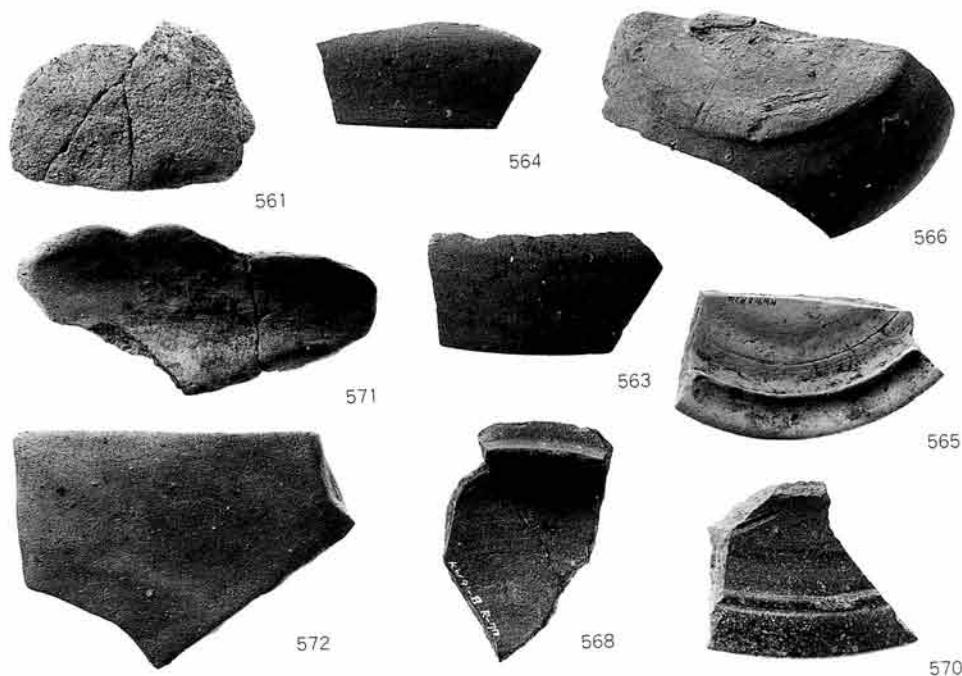
桑津5層



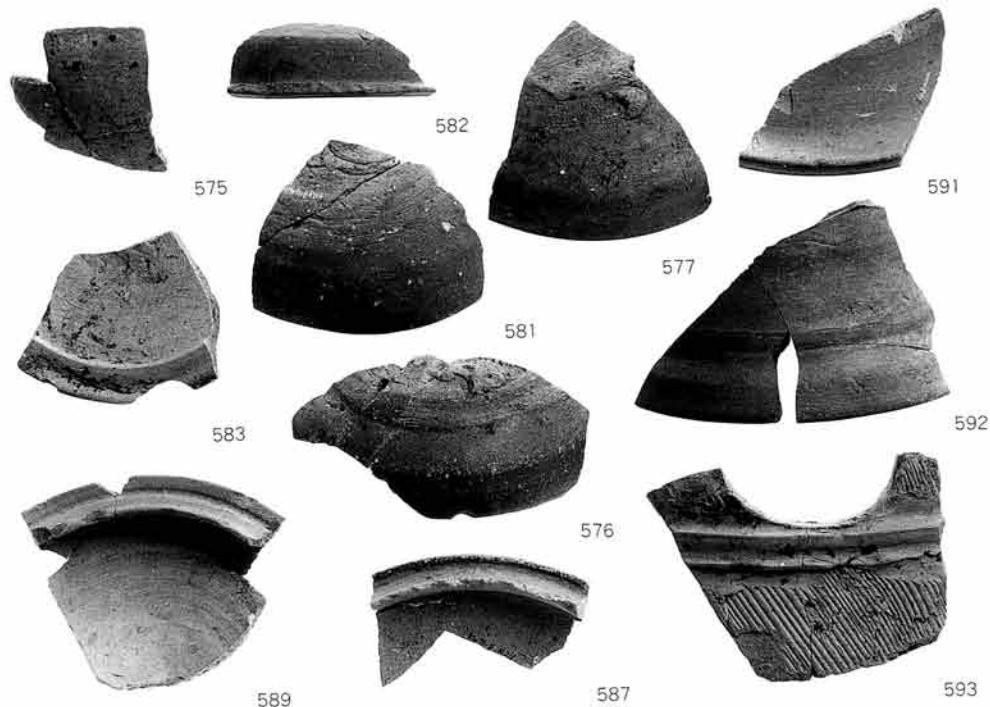
桑津2層(555・556・560)、桑津3層(552~554)、桑津5層(557~559)



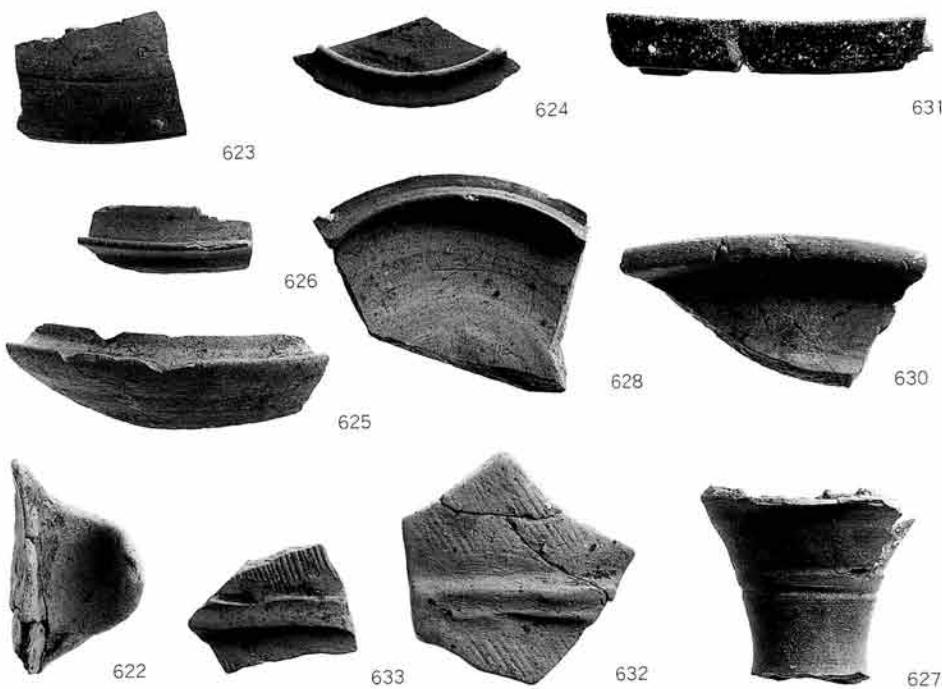
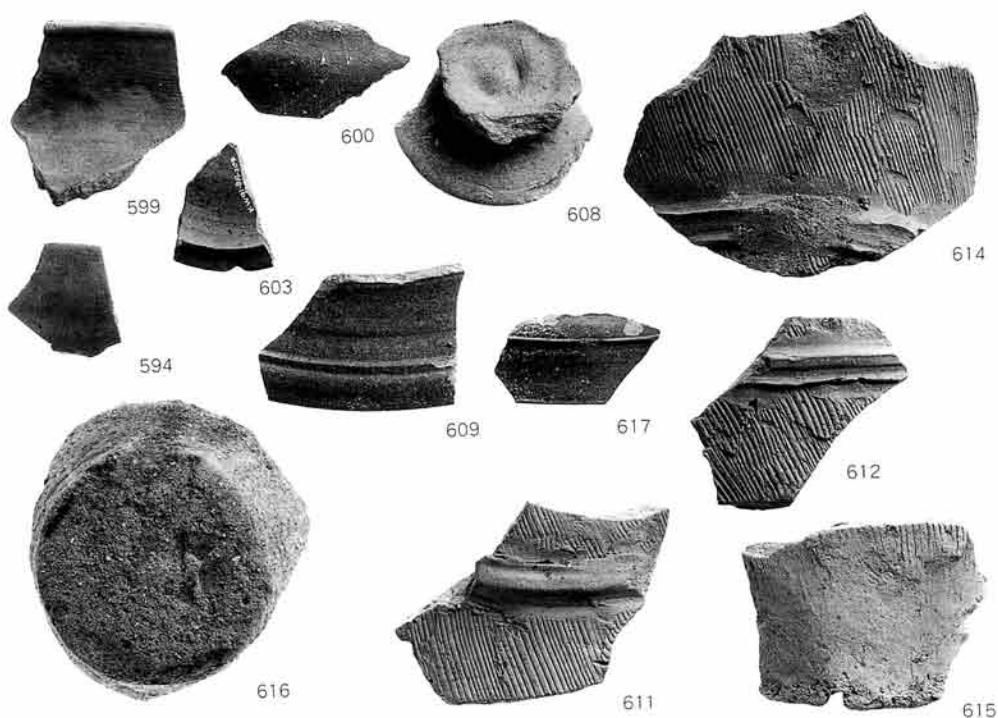
桑津2層(546)、桑津5層(538・542・543・549)、SB03(562・569)、SE01(610)、SX01(621)



SA01(564~566・572)、SB01(561・563)、SB02(571)、SB04(568・570)



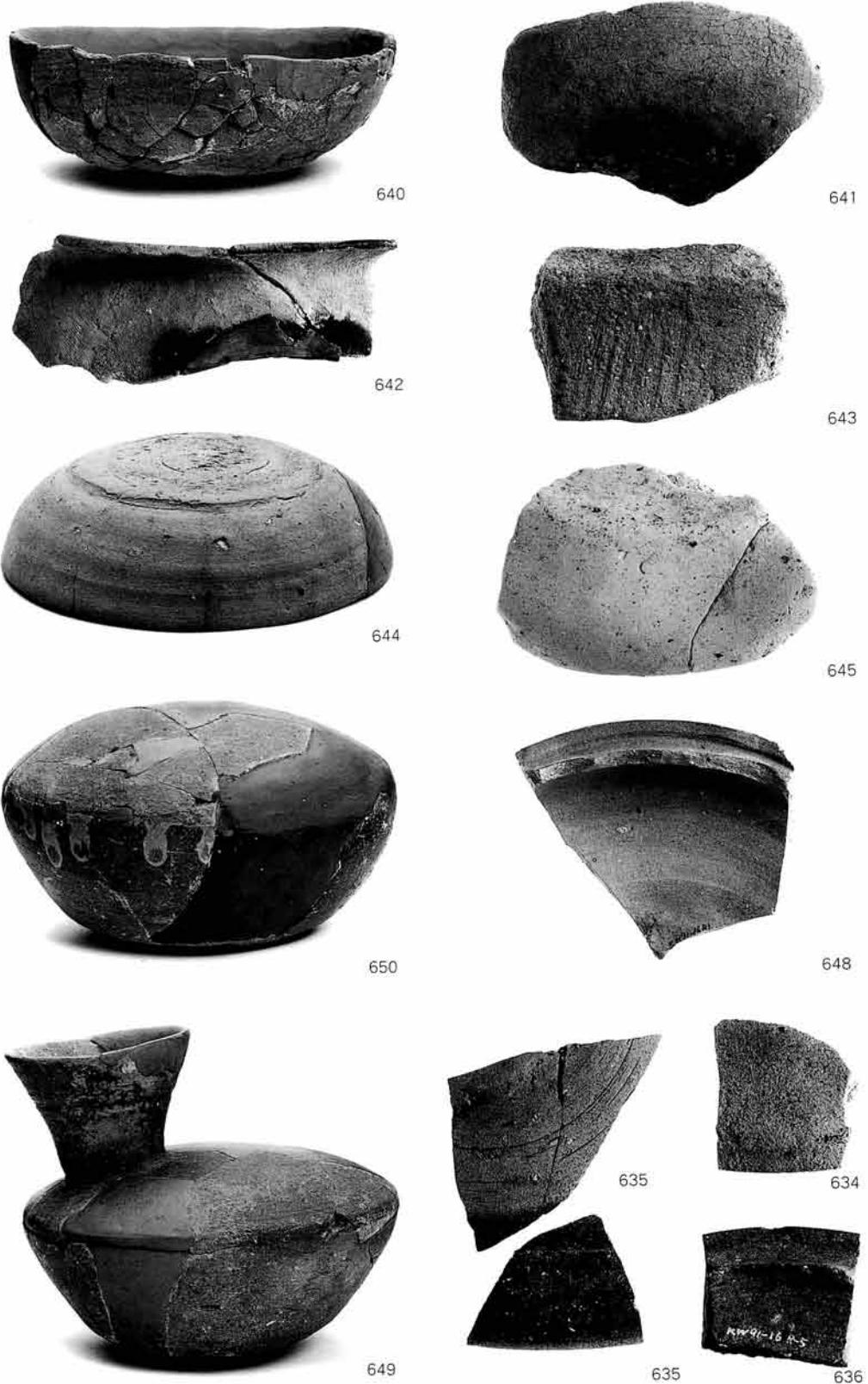
SB05(575~577・581~583・589・591~593)、SB06(587)





呪符木簡618(ほほ実大)

図版七三 KW91—16次調査出土遺物

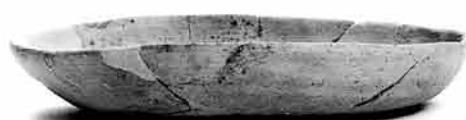


SB01(634~636)、SK01(640~645・648~650)

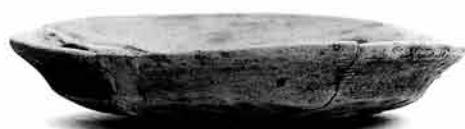
図版七四 KW91—18次調査出土遺物(一)



651



653



655



652



657



654



659



656



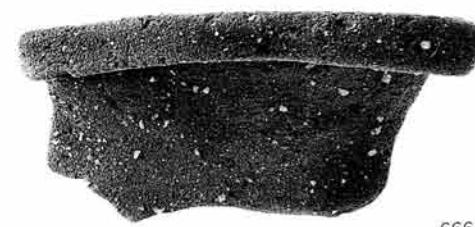
664



667

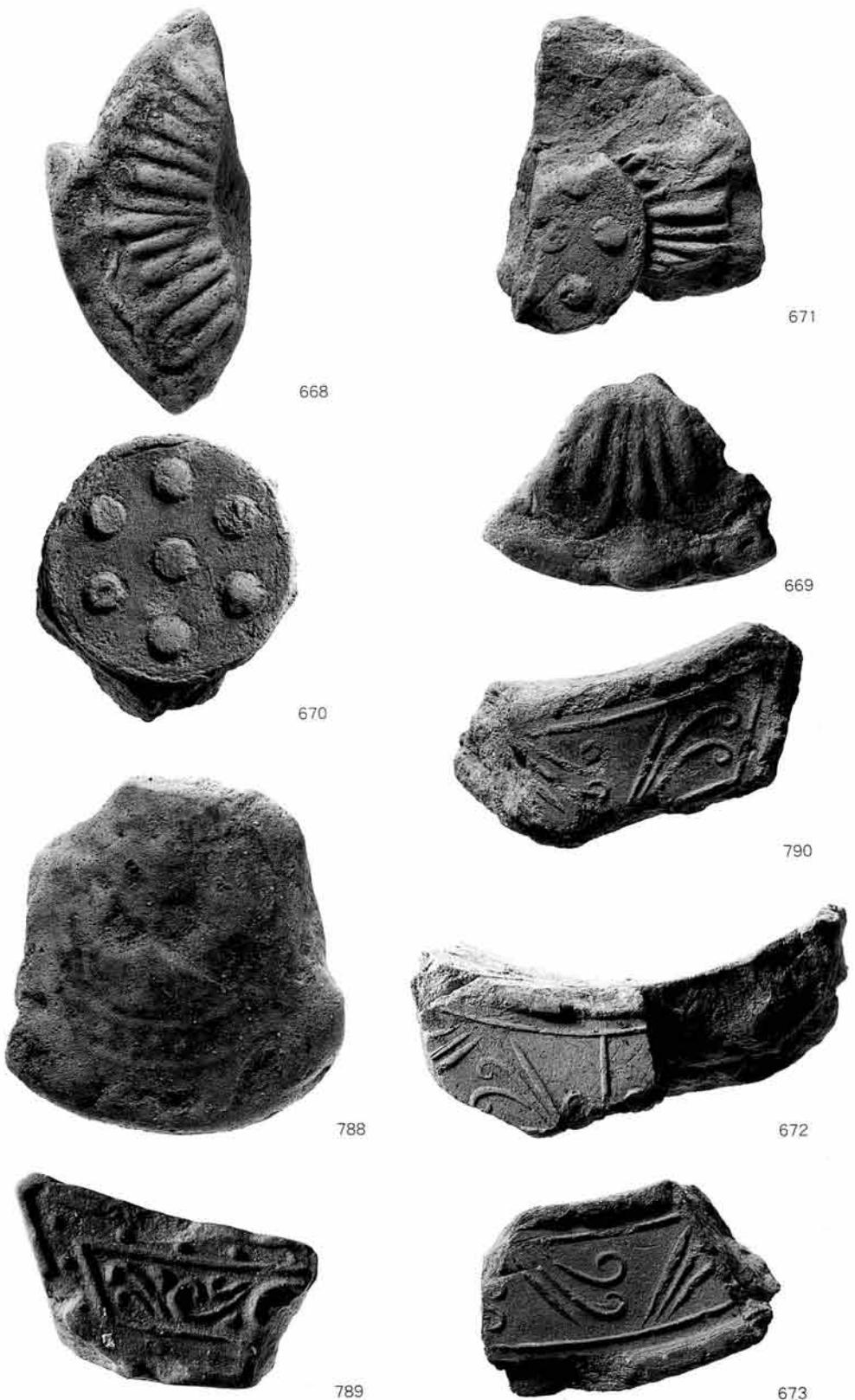


665



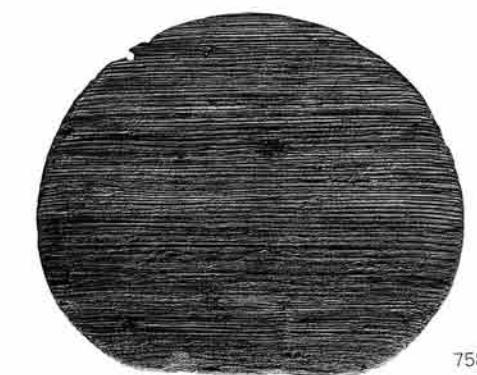
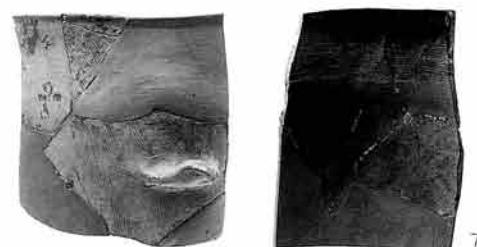
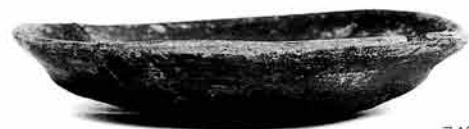
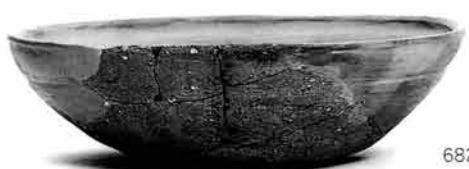
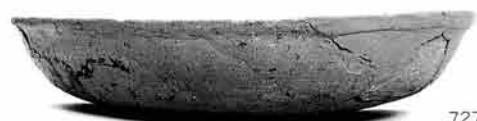
666

桑津2層(667)、桑津3層(651~657・659・664~666)



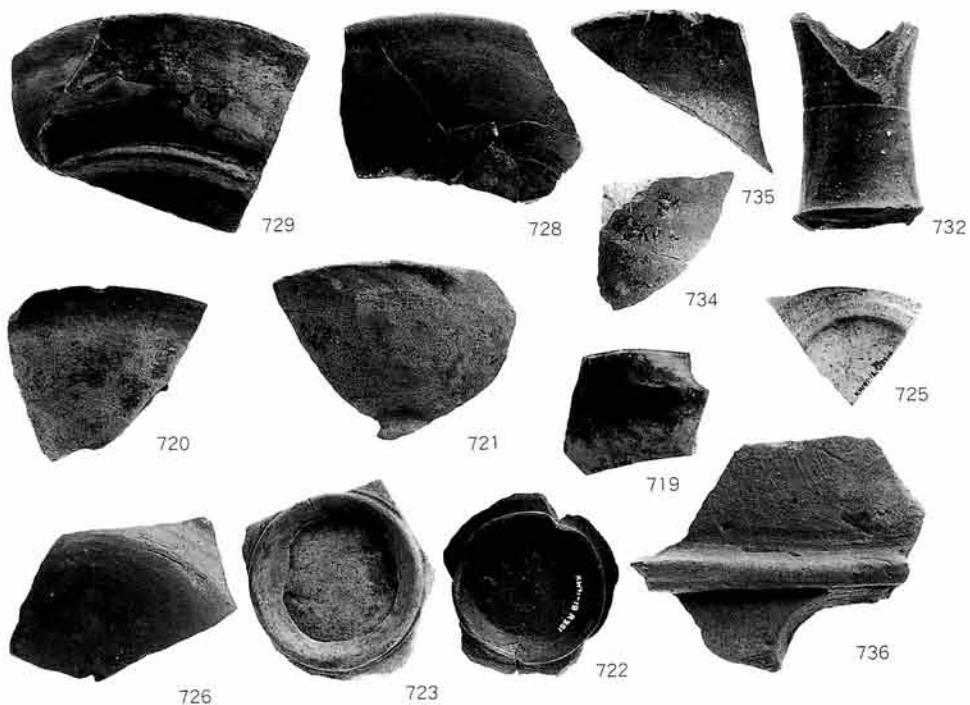
桑津3層(668~673)、SG01(788~790)

図版七六
KW91—18次調査出土遺物(三)

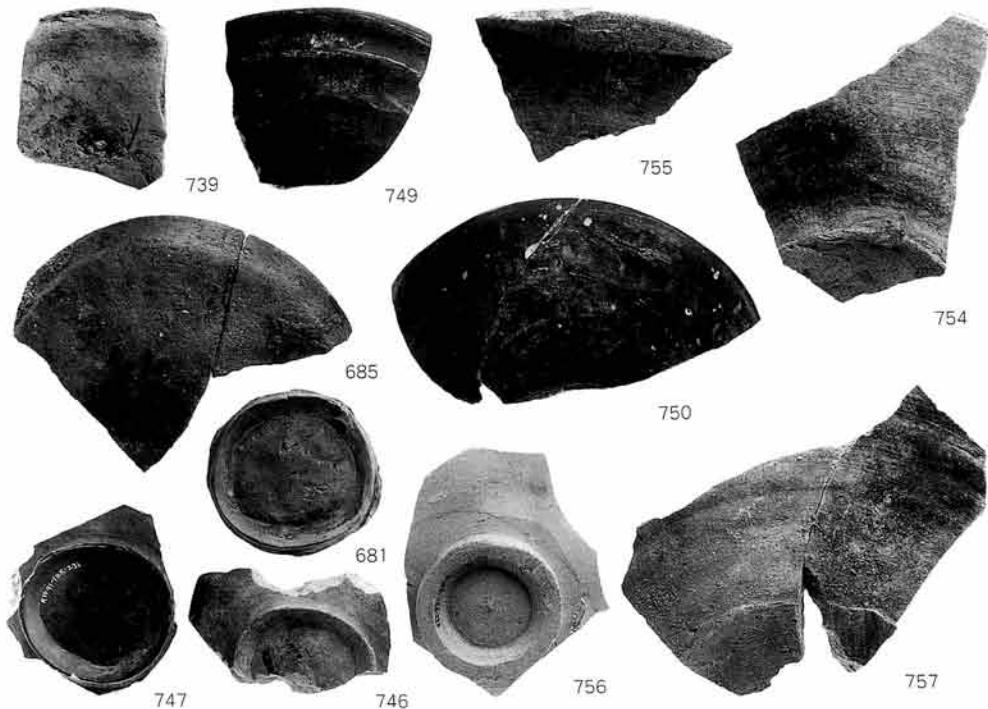


SE01(727・731・733)、SE05(740・742～744・751・758)、SE06(737・759)、SP05(682～684)

図版七七 KW91-18次調査出土遺物(四)

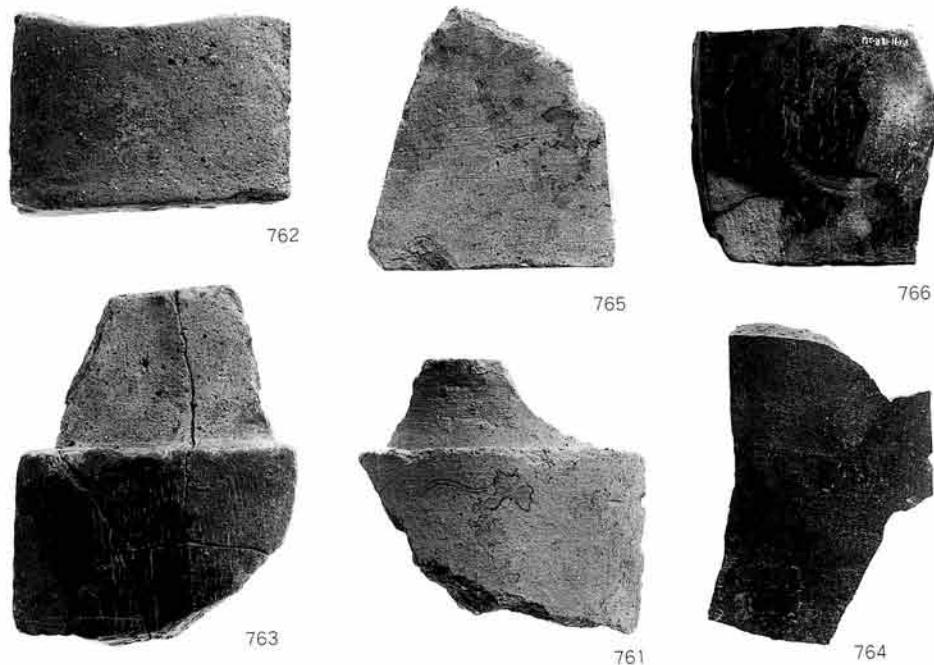


SE01(726・728・729・732)、SE03(720~723・734・735)、SE08(736)、SE10(719)
SE14(725)

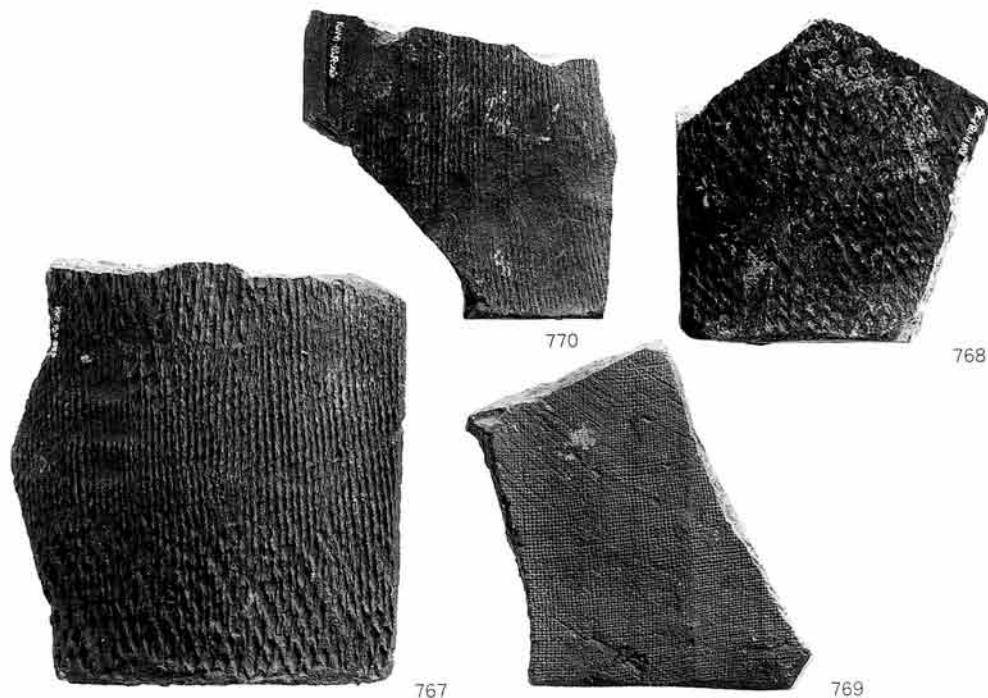


SE05(739・747・749・750・755~757)、SE06(746・754)、SP05(685)、SP06(681)

図版七八
KW91—18次調査出土遺物(五)

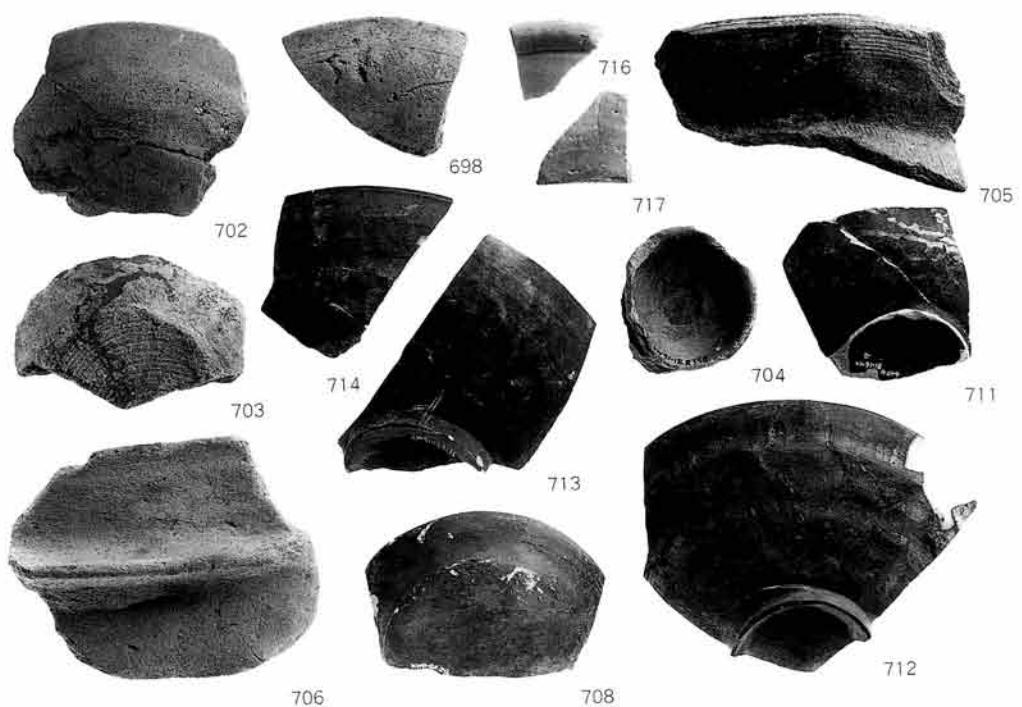


SE02出土丸瓦

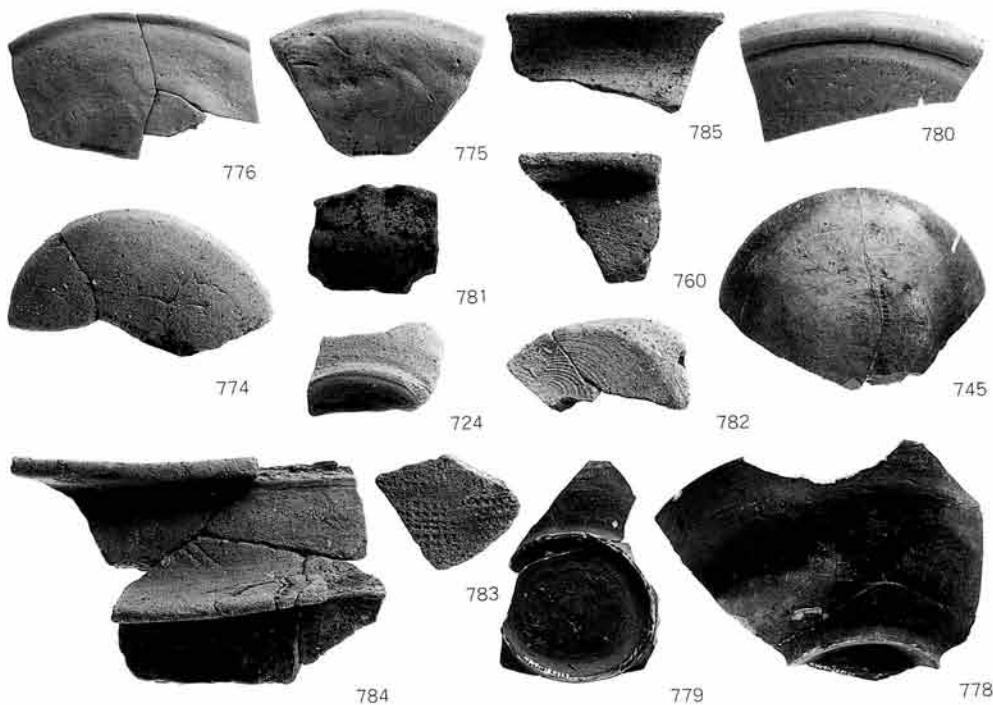


SE02出土平瓦

図版七九 KW91—18次調査出土遺物(六)



SD01



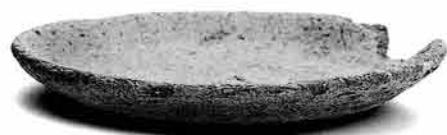
SE02(760)、SE04(745)、SE08(724)、SK01(774~776・778~780・782・784・785)
SK02(781)、SK03(783)



772



688



771



693



773



694



696



691



697



699

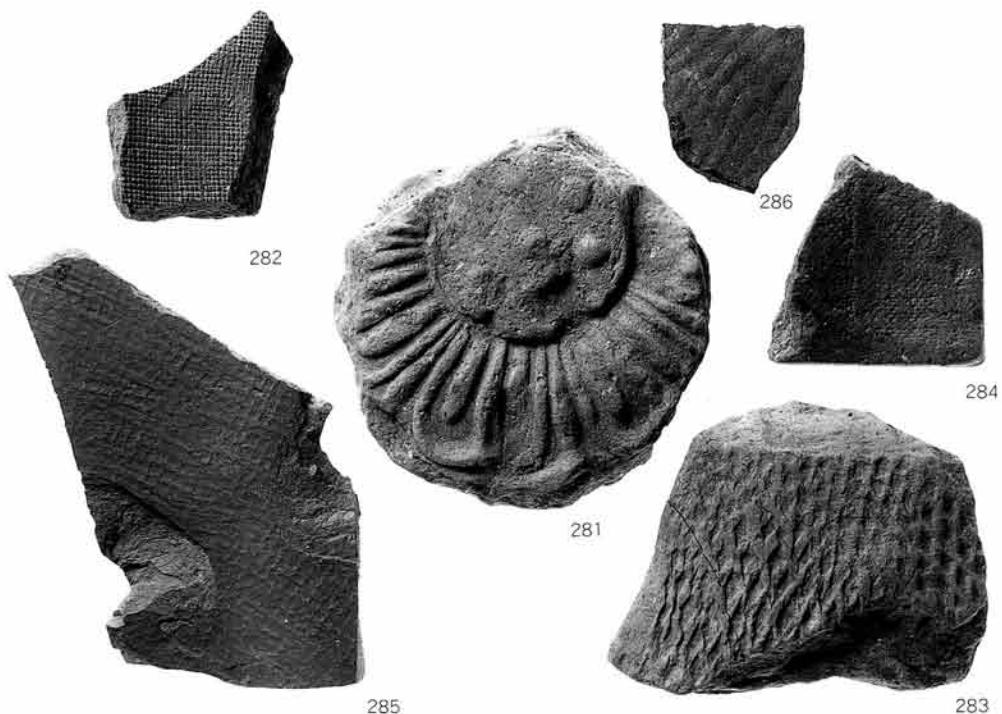


777

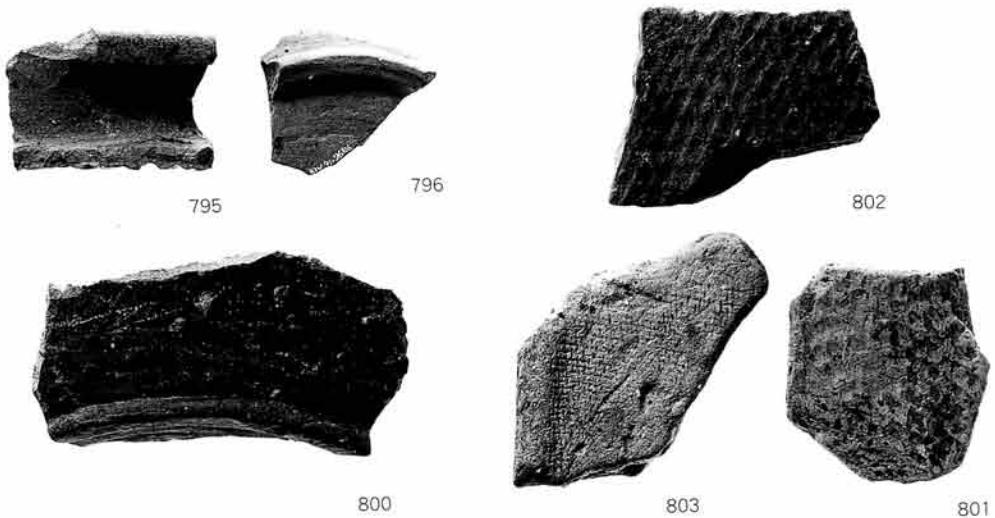


718

SD01(688·691·693·694·696·697·699·718)、SK01(771~773·777)



KW88-21次 桑津3層(281)、SK01(282~286)



KW91-26次 桑津3層

KW91-26次 桑津3層(801・802)
SD01(803)



832



844



836



859



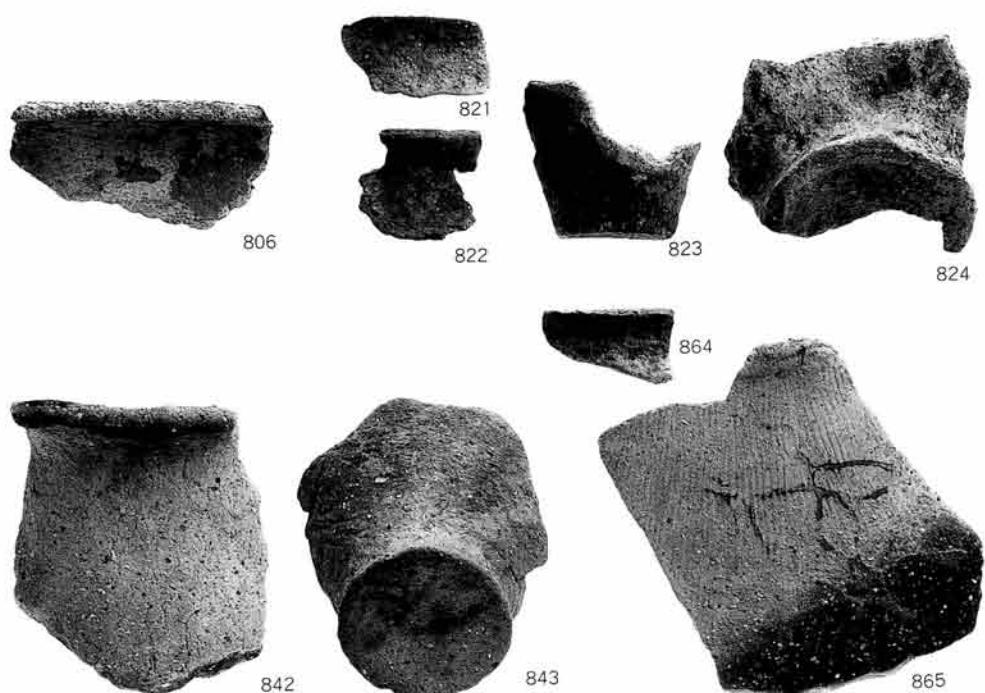
841



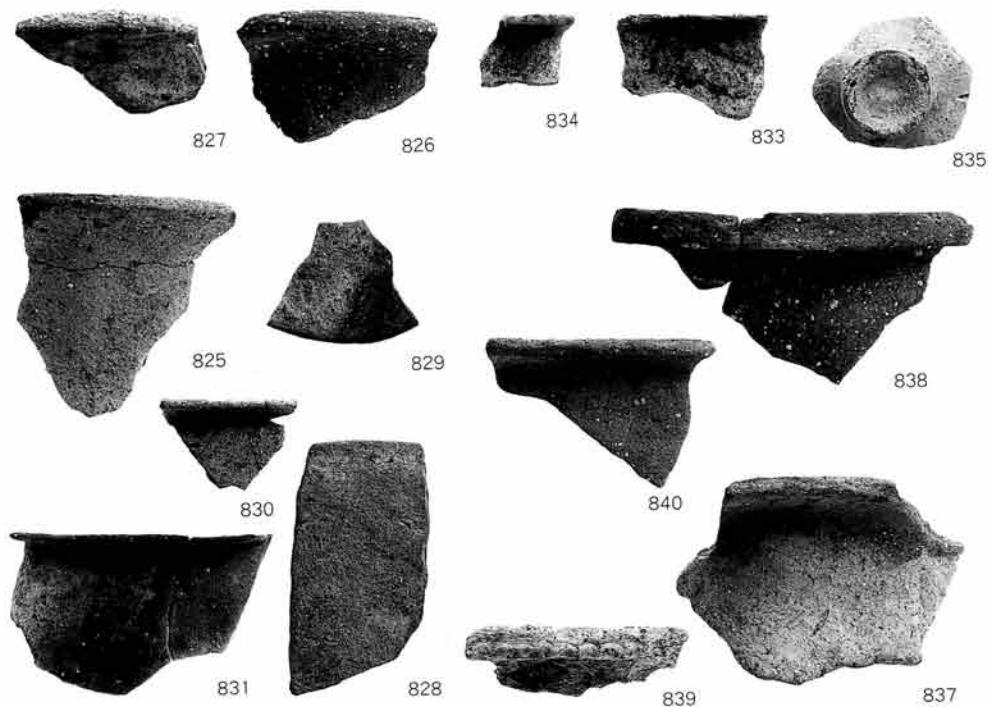
860

方形周溝墓1B(832・836・841)、方形周溝墓3(844・859・860)

図版八三 KW93—2次調査方形周溝墓出土遺物(一)

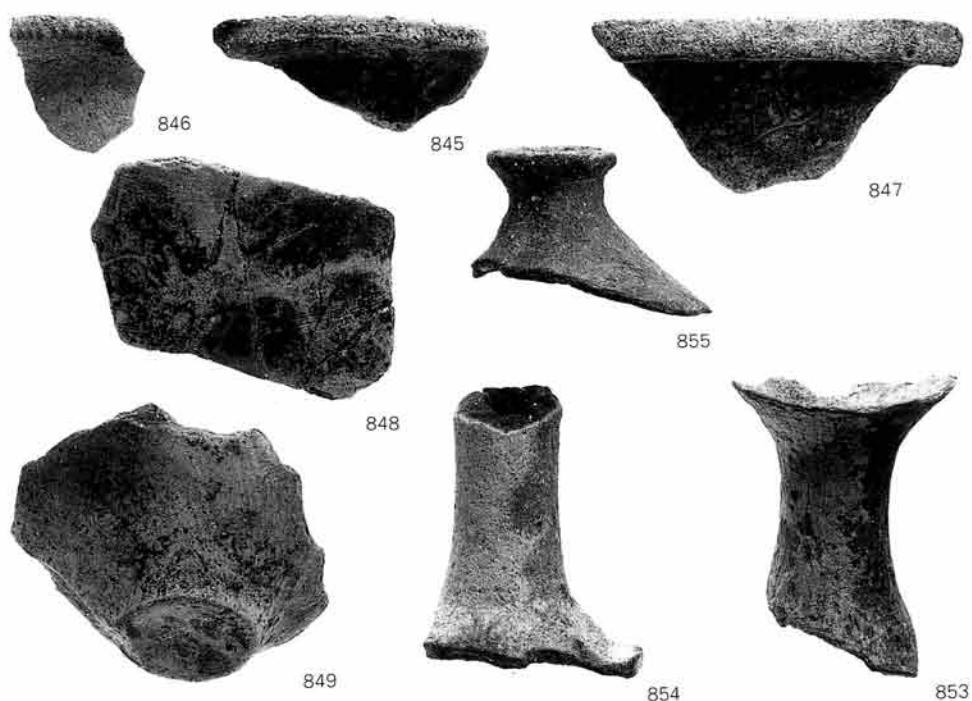


桑津2層(806)、方形周溝墓1A(821~824)、方形周溝墓2(842・843)、土壙墓(864・865)

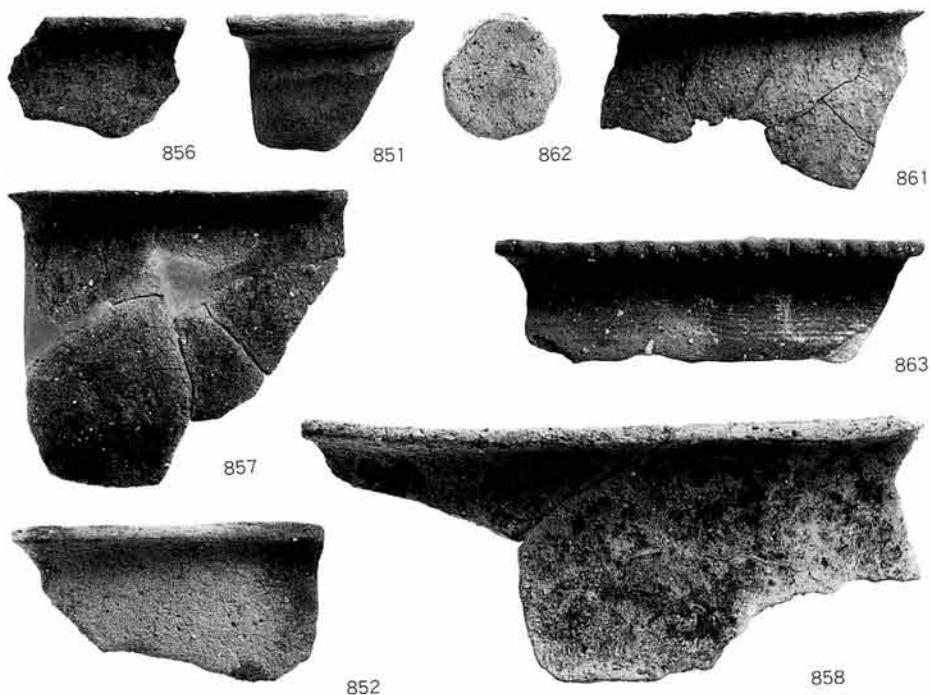


方形周溝墓1B

圖版八四
KW93—2次調查方形周溝墓出土遺物(三)

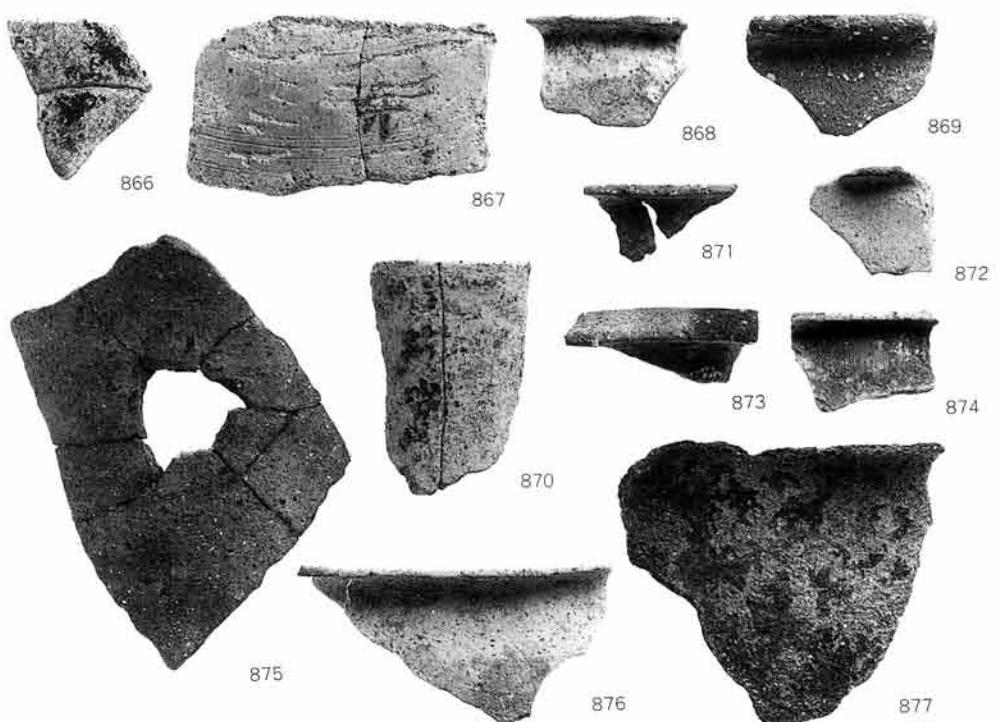


方形周溝墓 3

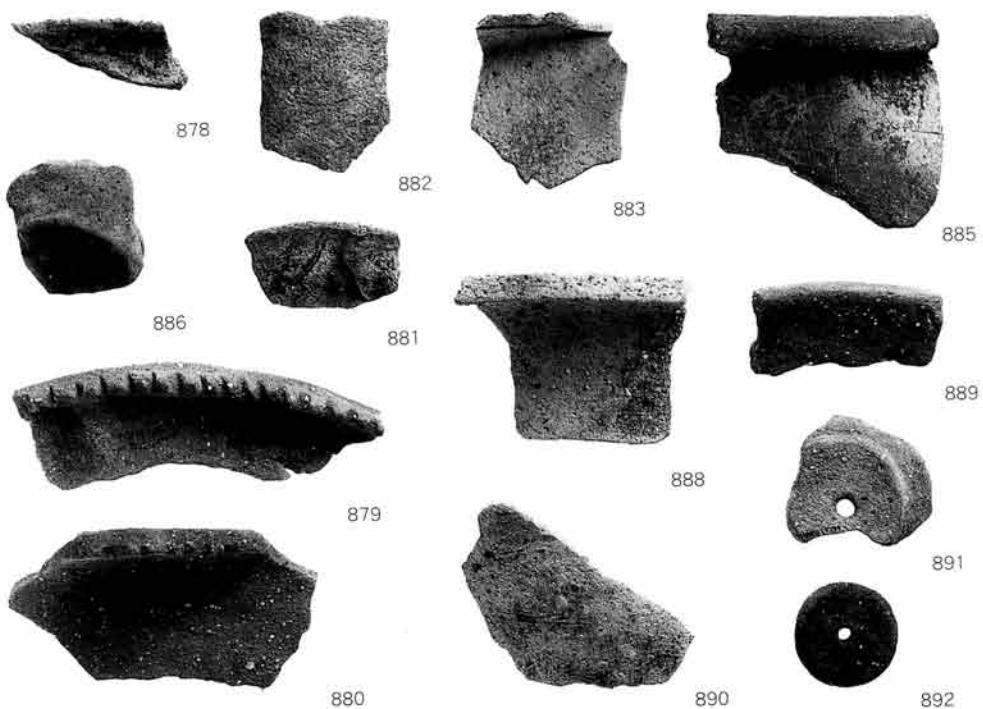


方形周溝墓 3

圖版八五 KW93—2次調查出土遺物(一)

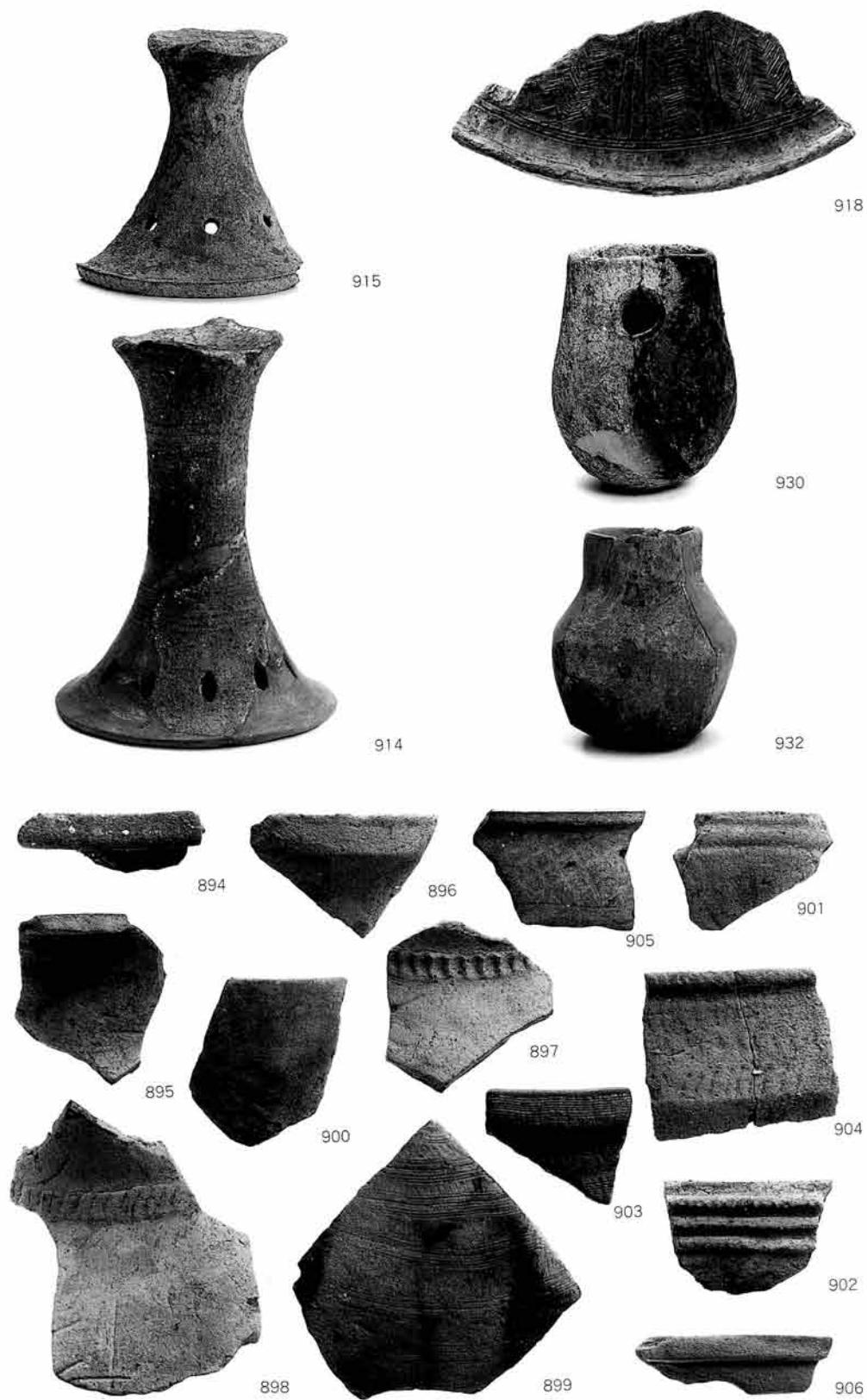


SD01

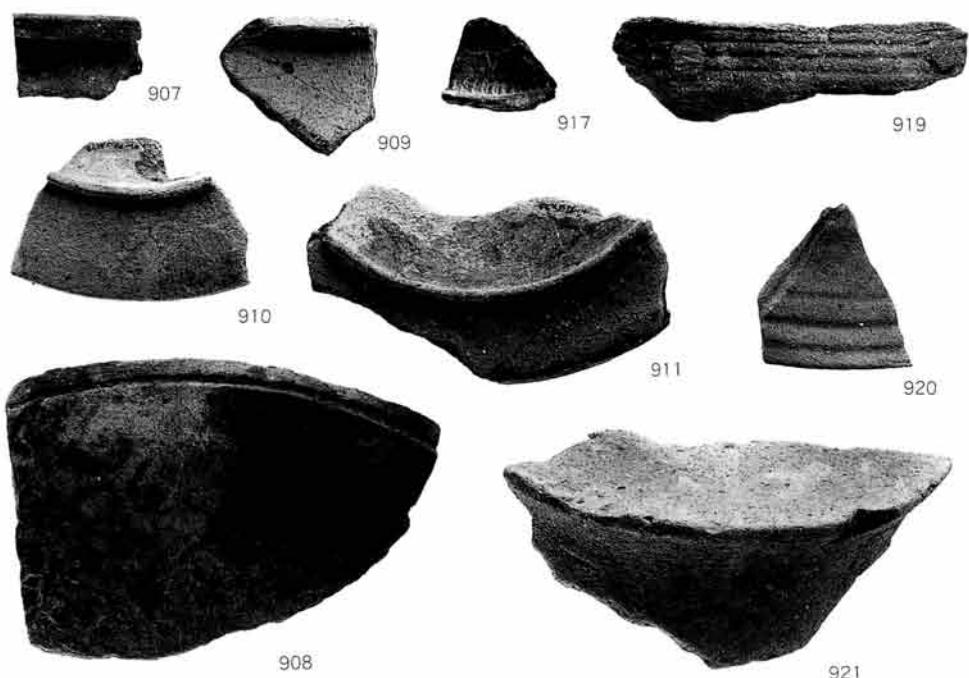


SD01

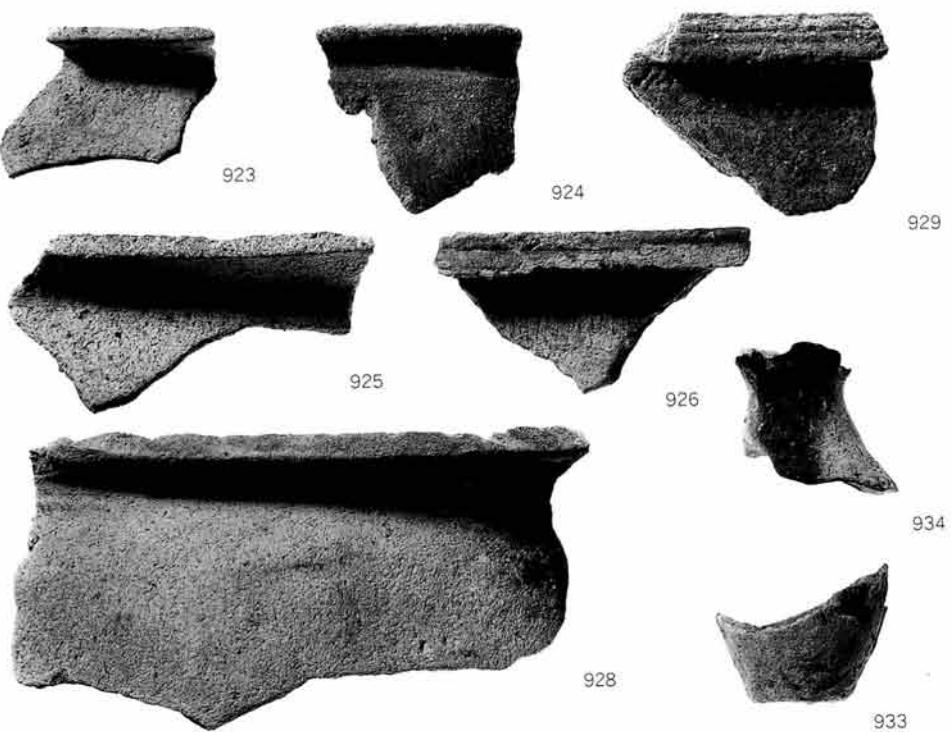
図版八六
KW93—2次調査出土遺物(二)



土取り穴群

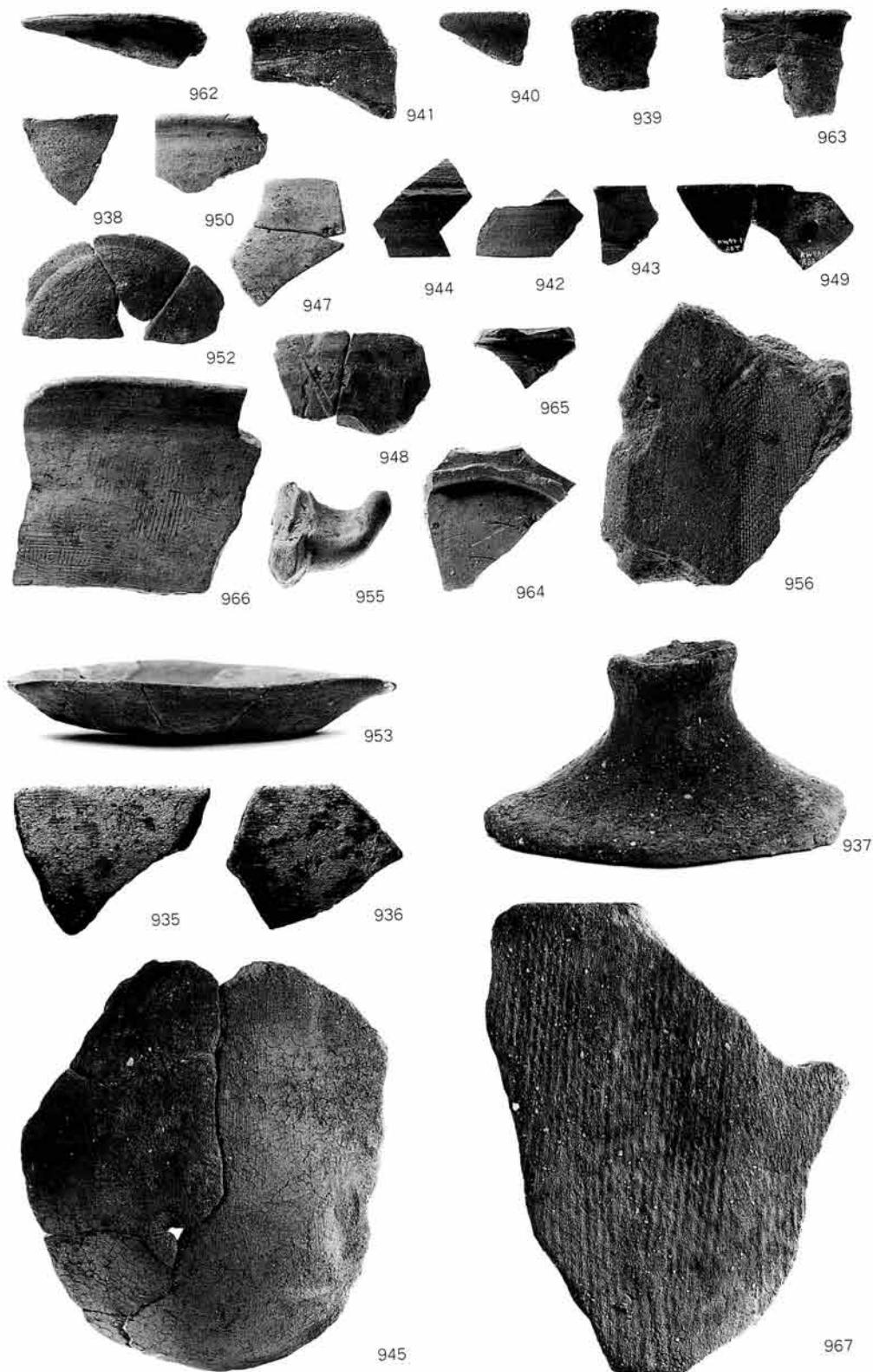


土取り穴群



土取り穴群

図版八八
K W94—1次調査出土遺物



各構出土遺物(上段)、SB01(SK01 935)、SP03(937)、SP04(936)、SP10(967)、SP14(945)
SP19(953)



997

妻部側面



997

妻部天井



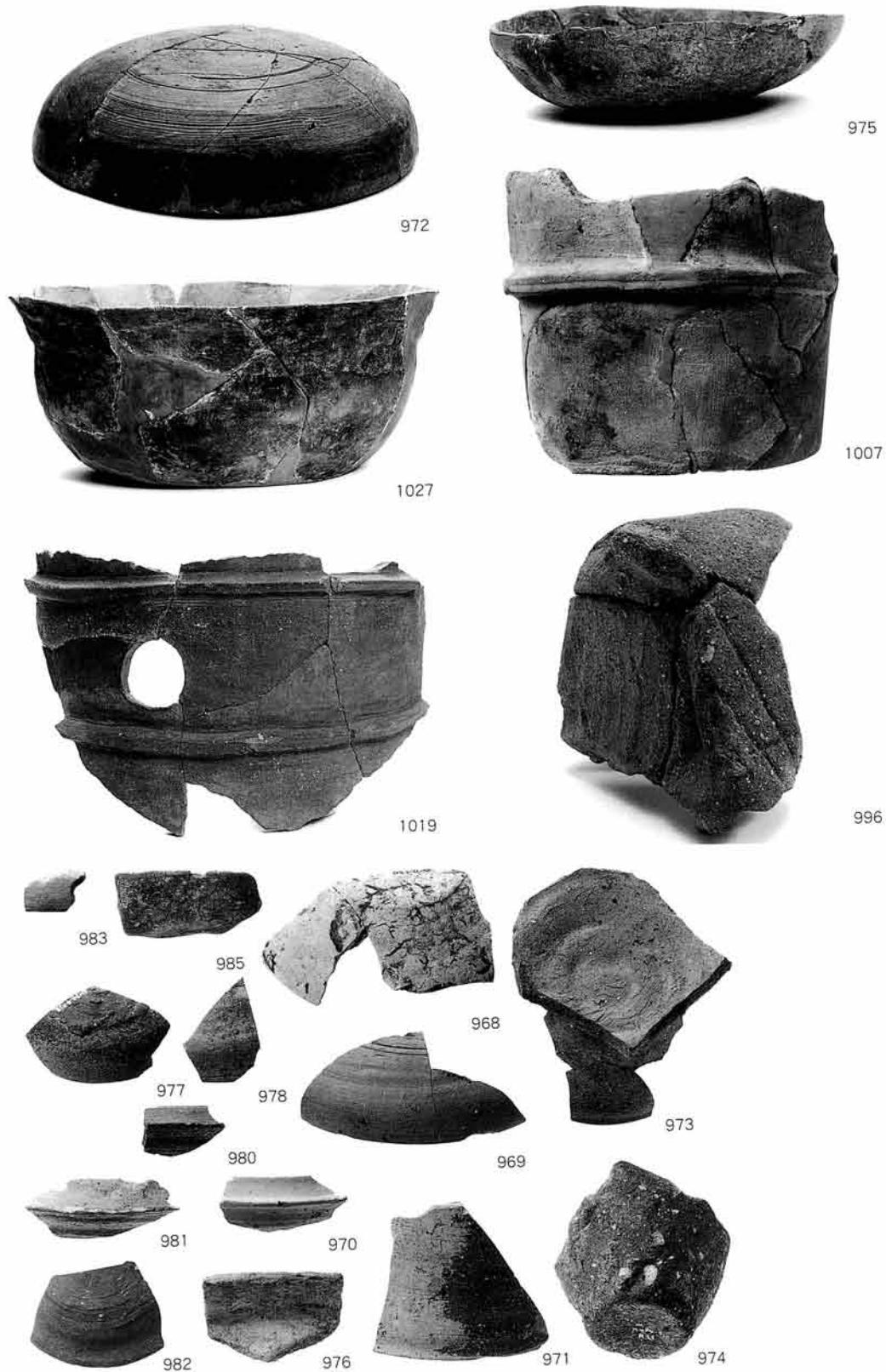
997a



997b

棟木・屋根(上)、棟持柱(下)

図版九〇
KW94—4次調査出土遺物(二)

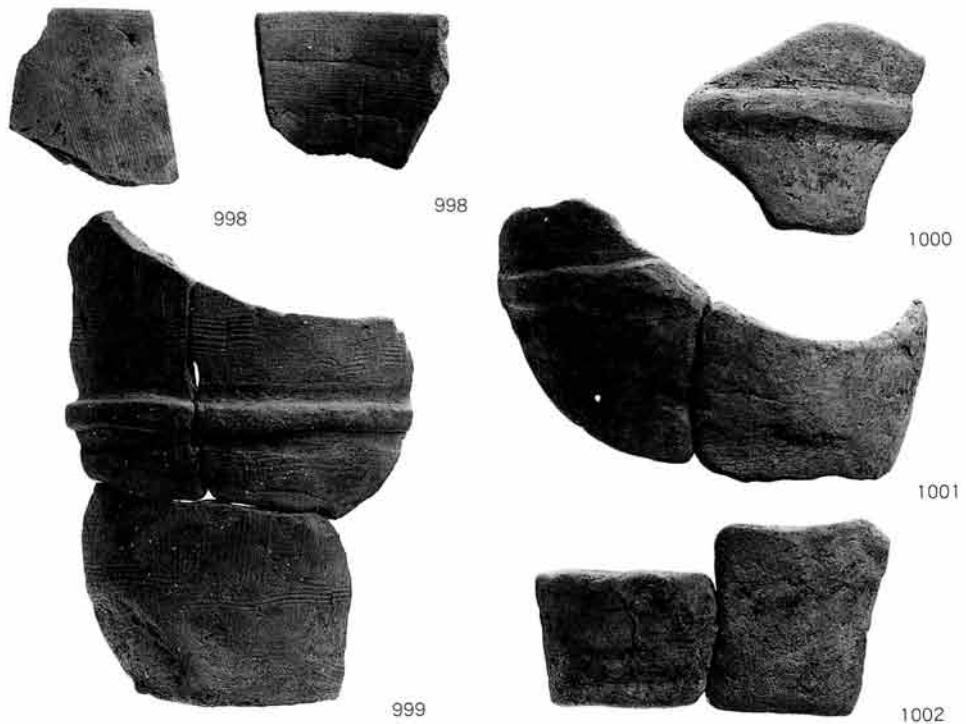


SD01(968~971)、SD03(972~974)、SD05(975~978・980~982)、SD06
(996・1007・1019)、SX01(983)、SX02(985)、SB01(SP01 1027)

図版九一
KW94—4次調査出土遺物(二)

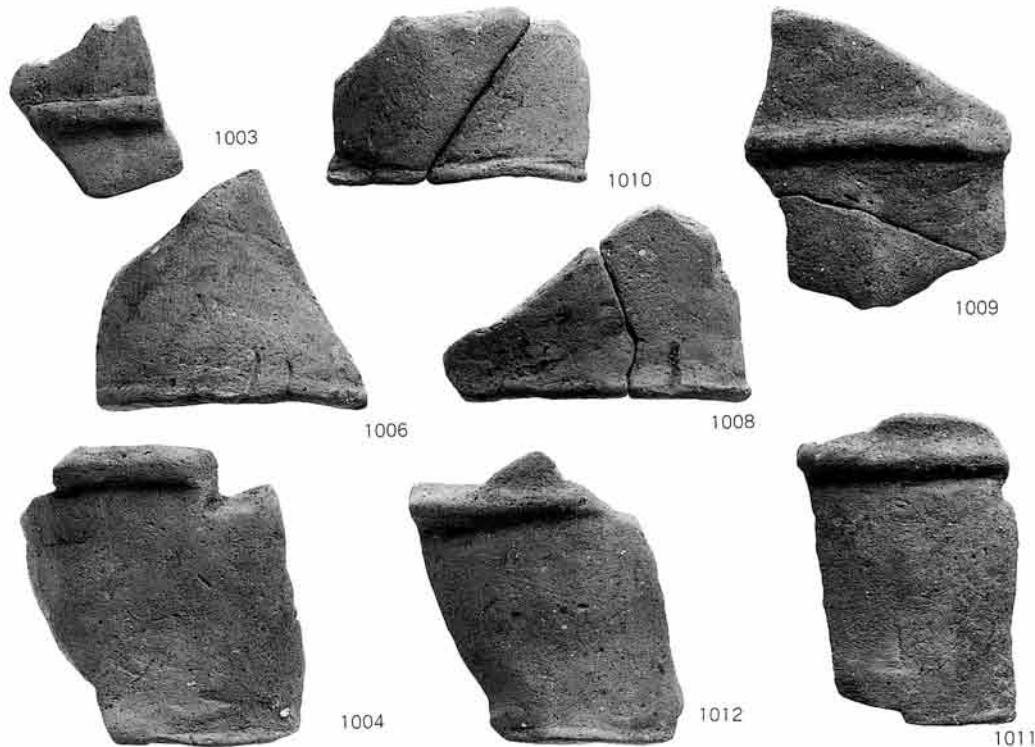


SD06須恵器

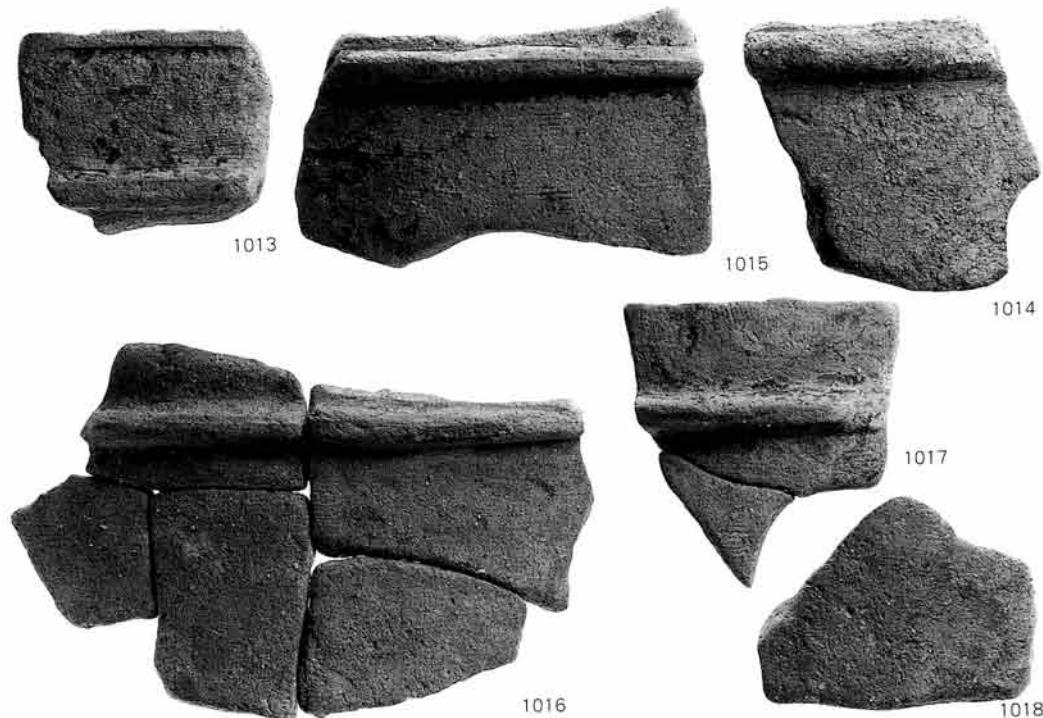


SD06円筒埴輪

図版九二
KW94—4次調査出土遺物(三)

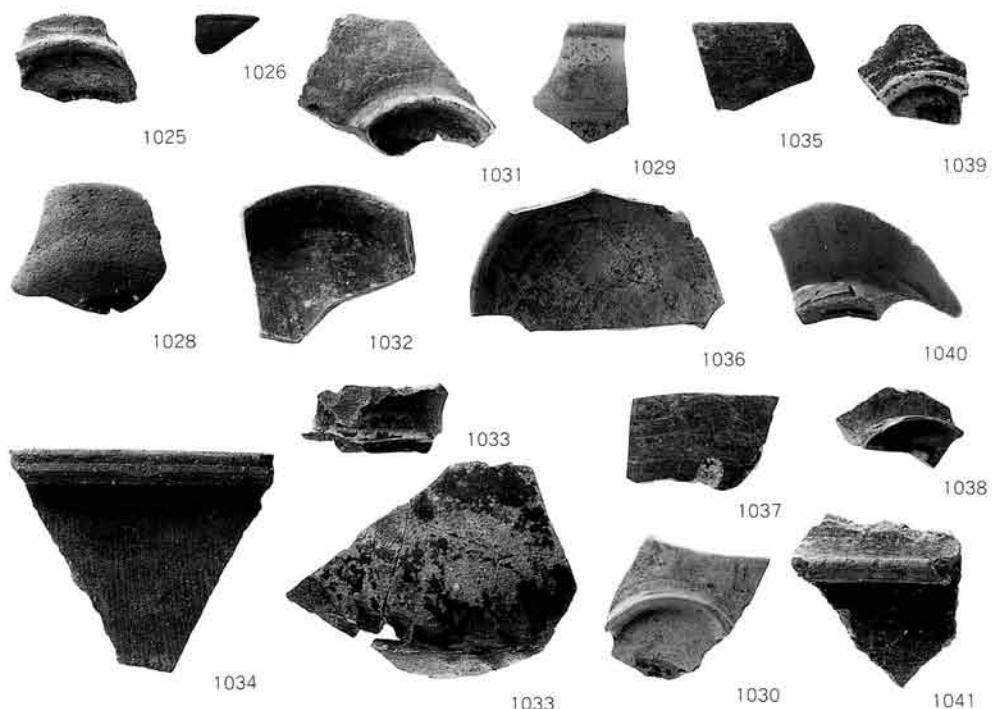
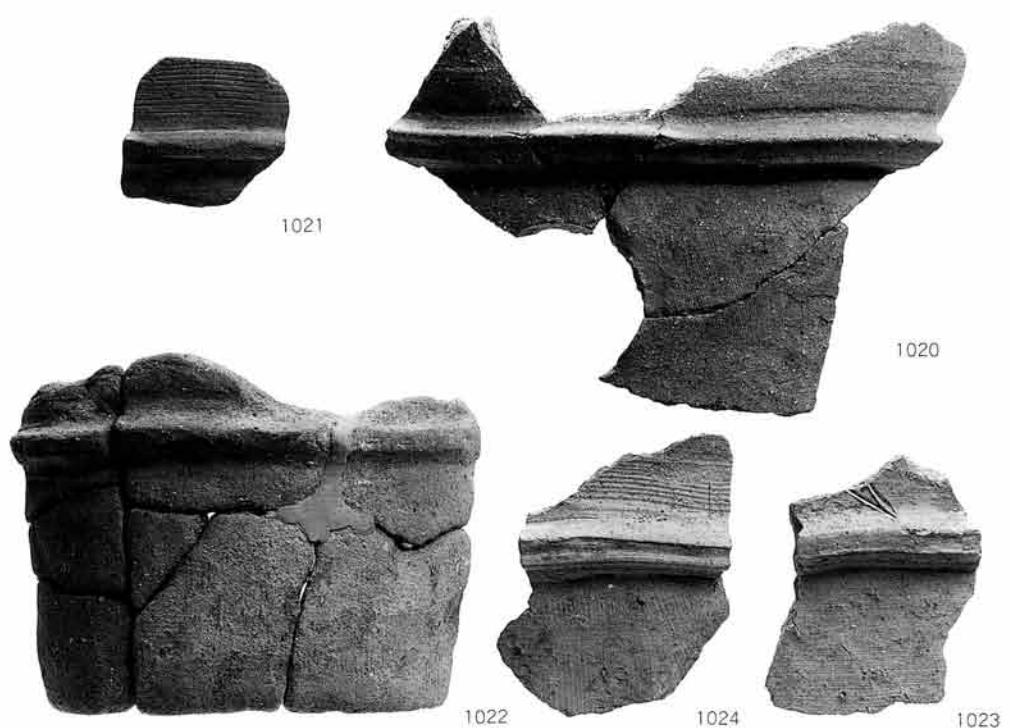


SD06円筒埴輪

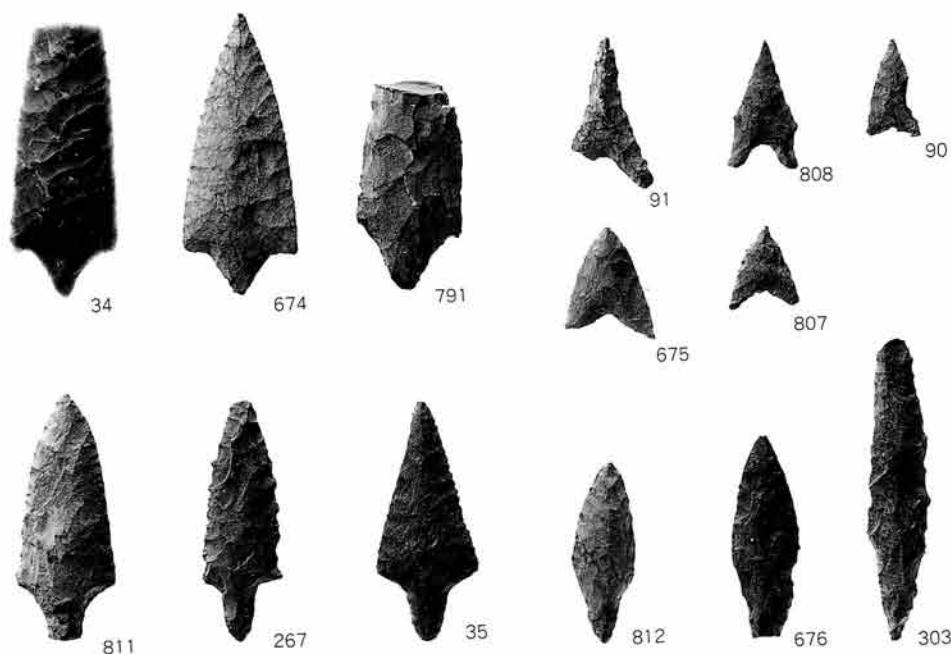


SD06円筒埴輪

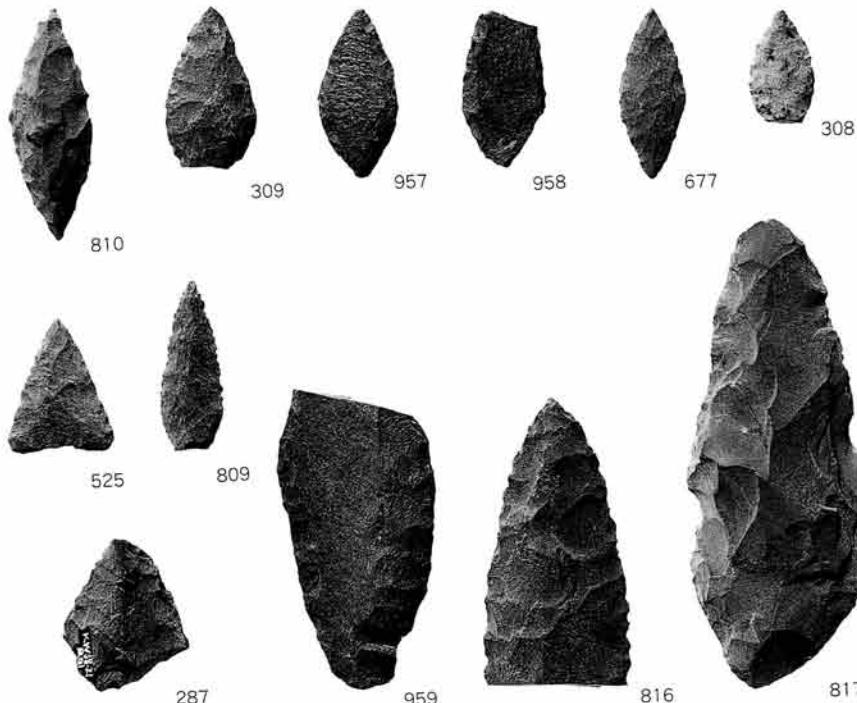
図版九三
KW94—4次調査出土遺物(四)



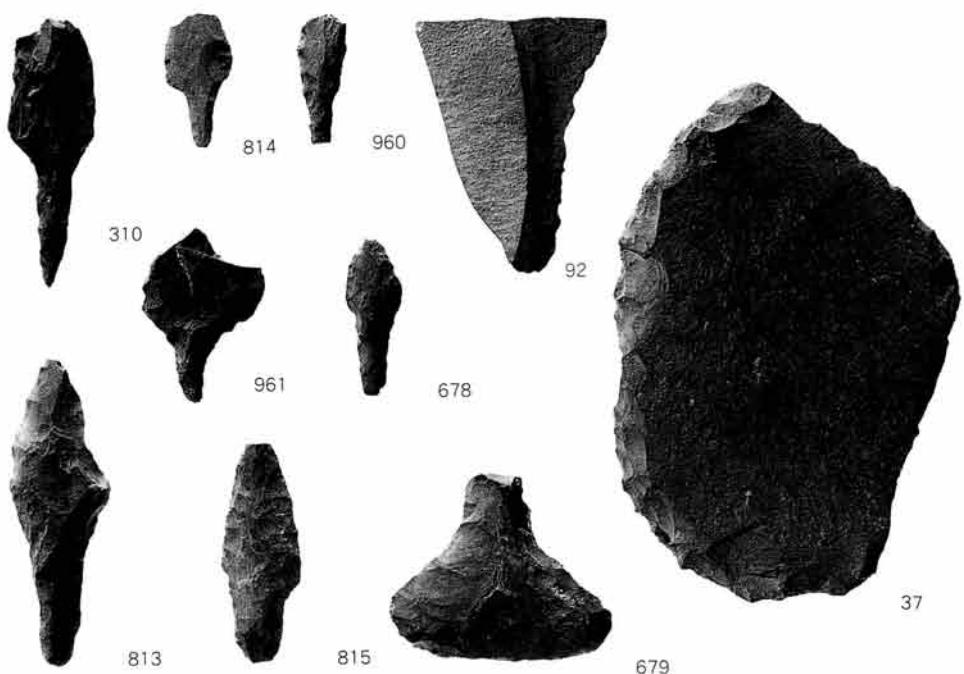
SB01(1026)、SD07(1028~1034)、SD09(1035・1036)、SK01(1041)、SP02(1025)
SX06(1037・1038)、SX07(1039・1040)



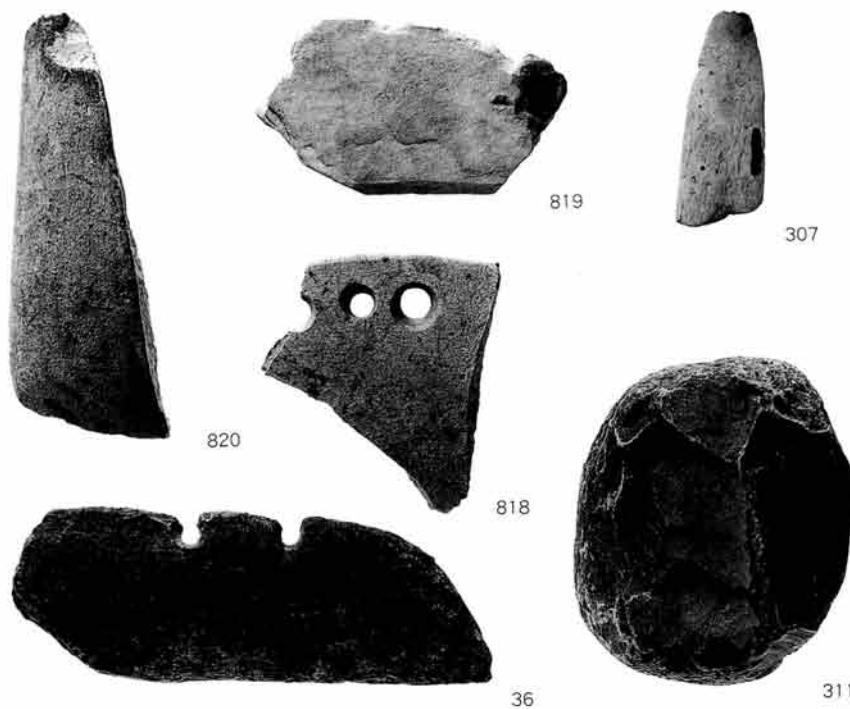
82-7次(34・35)、83-8次(90・91)、88-6次(267)、88-36次(303)、91-18次(674~676)
91-26次(791)、93-2次(807・808・811・812) × 2／3



88-21次(287)、90-14次(308・309)、91-8次(525)、91-18次(677)、94-1次(957~959)
93-2次(809・810・816・817) × 2／3



82-7次(37)、83-8次(92)、90-14次(310)、91-18次(678・679)、93-2次(813~815)
94-1次(960・961) × 2 / 3

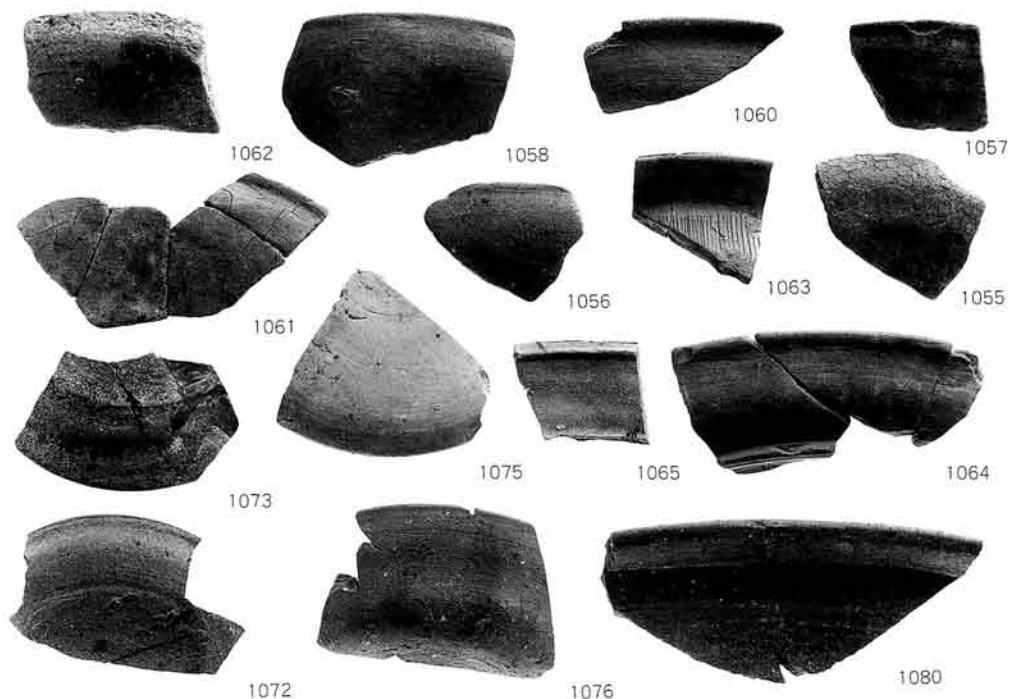


82-7次(36)、90-14次(307・311)、93-2次(818~820)

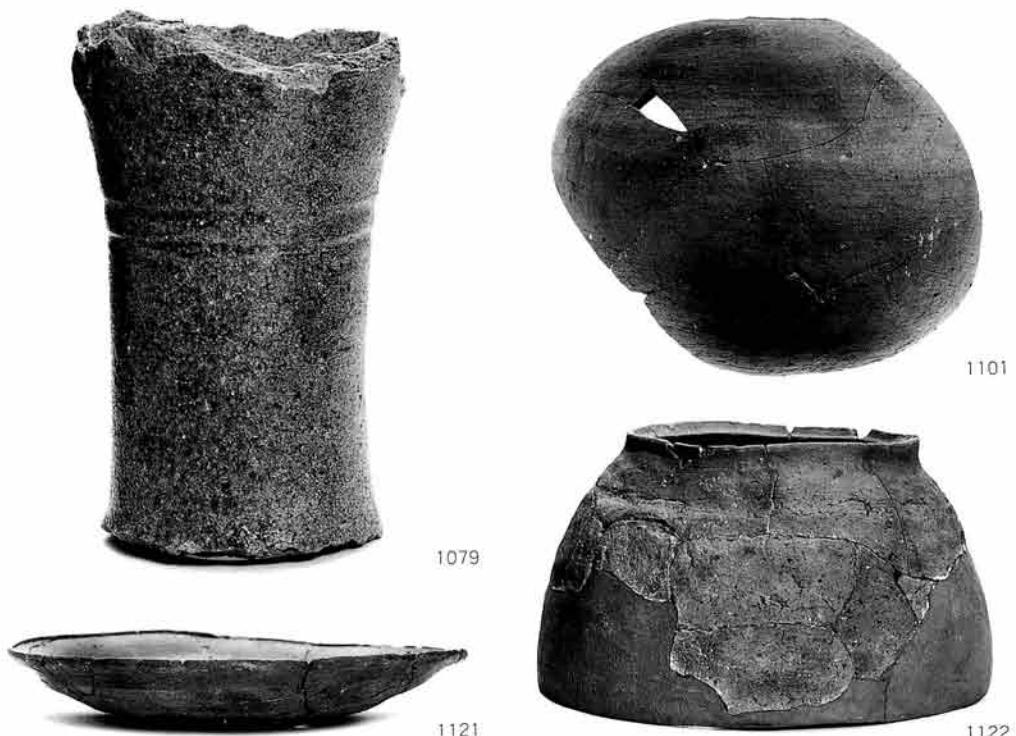
図版九六 TH 89—3次調査出土遺物(二)



第2層(1066~1070・1077・1078)、SD01・02(1092・1093・1097・1099・1100)



第2層



第2層(1079)、SD01・02(1101)、火葬墓(1121・1122)

図版九八 TH89—3次調査出土遺物(三)



1090



1107



1111



1109

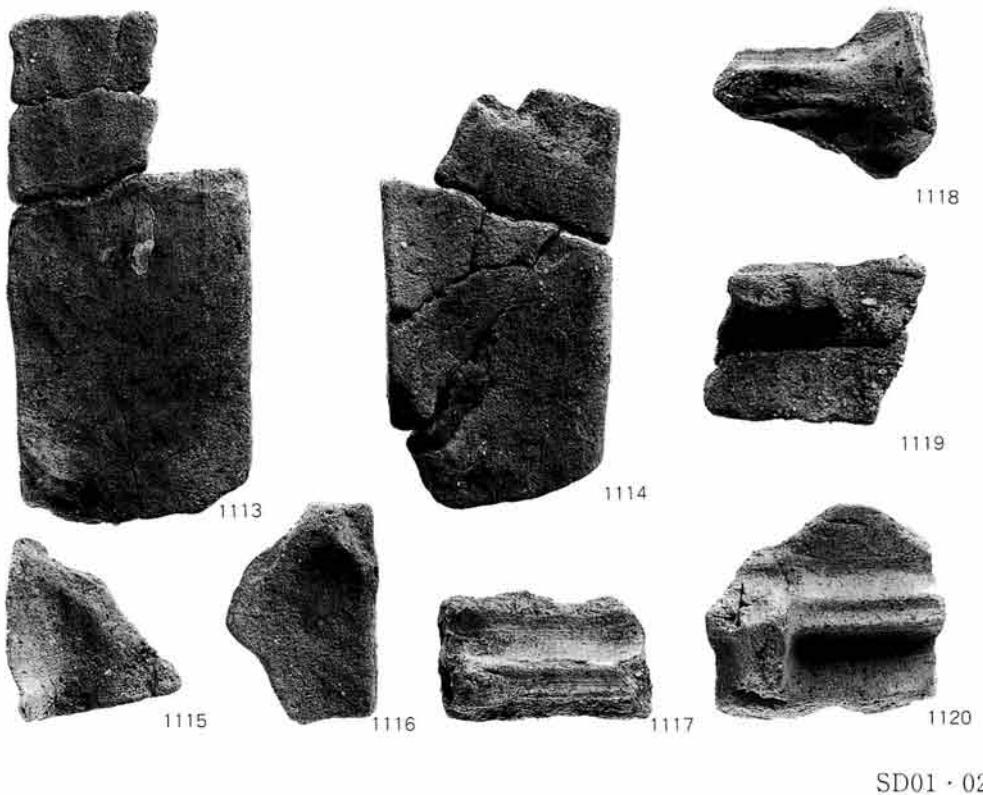
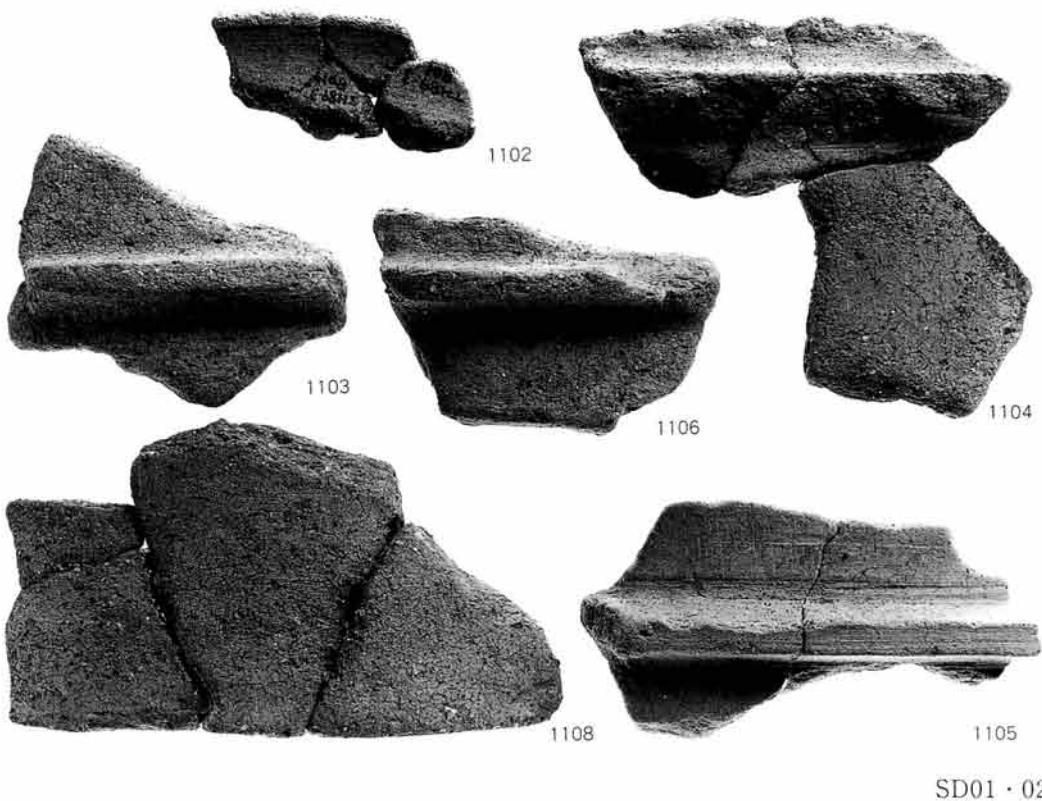


1112

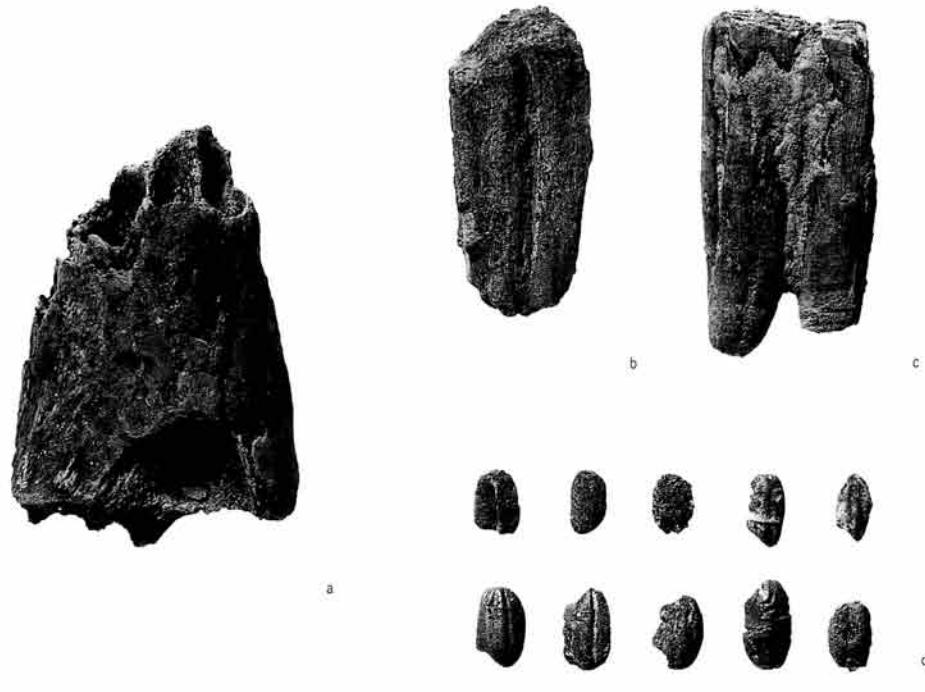


1110

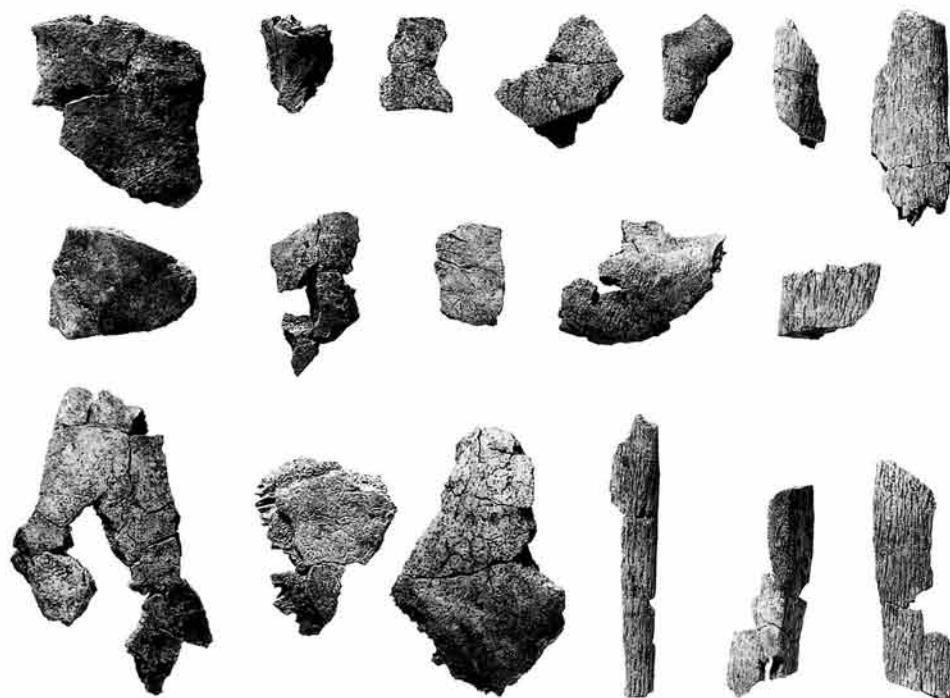
図版九九 TH89—3次調査出土遺物(四)



図版一〇〇 桑津遺跡動植物遺体・田辺東之町遺跡火葬人骨



KW90-14次 SE01イノシシ下顎骨(a)、KW82-7次 桑津5層ウマ右下顎第2後臼歯(b)、
KW91-18次 桑津3層上層ウマ右顎第3前臼歯(c)、KW95-5次 SE01炭化米(d)



TH89-3次 火葬墓 人骨

大阪市東住吉区 桑津遺跡発掘調査報告

ISBN 4-900687-24-3

1998年3月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-943-6833 FAX 06-920-2272)

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社

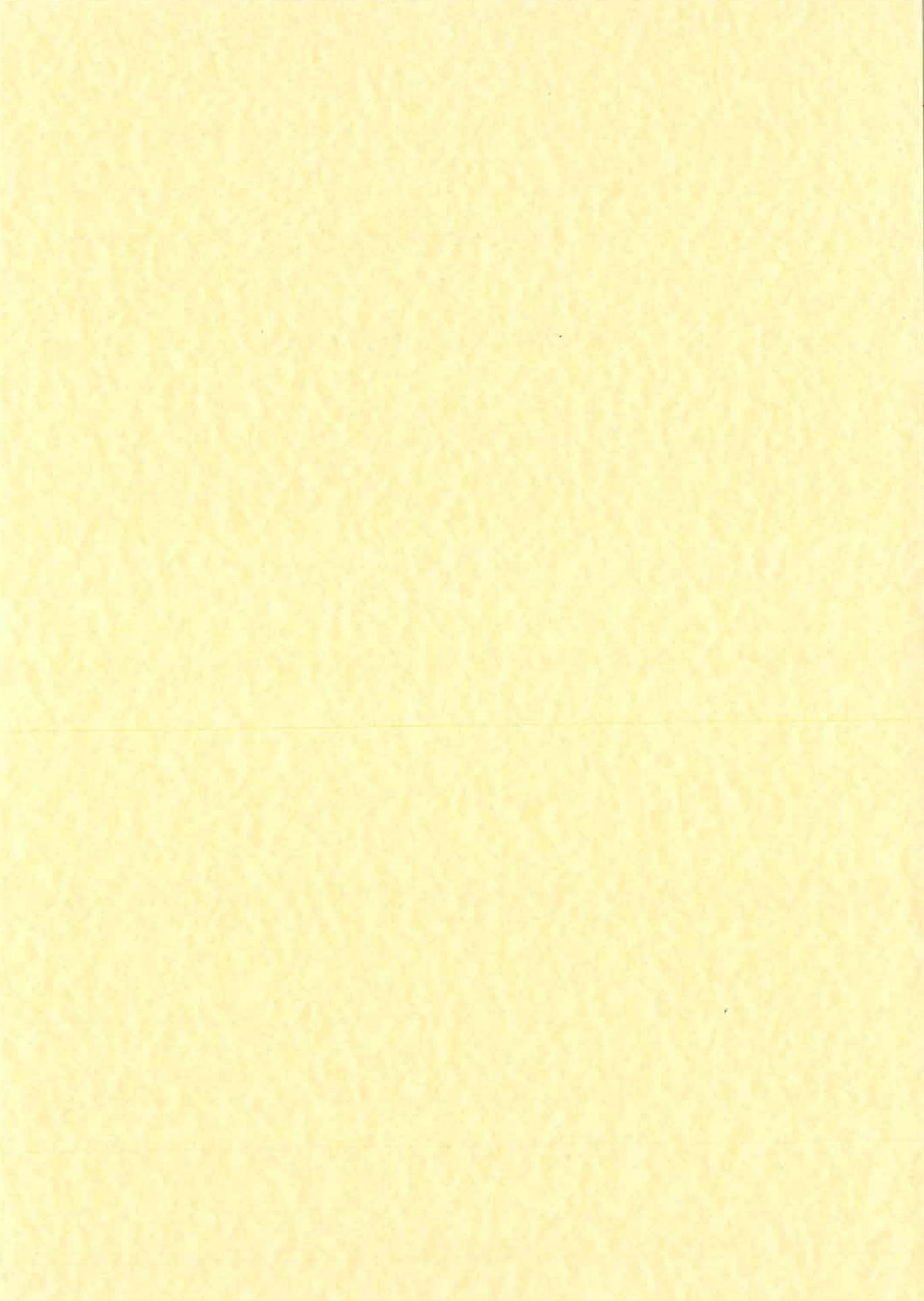
〒532-0003 大阪市淀川区宮原5-1-18

**Archaeological Reports
of
Kuwazu Site in Osaka, Japan**

Appendix: Tanabe-higashi-no-cho Site

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association



**Archaeological Reports
of
Kuwazu Site in Osaka, Japan**

Appendix: Tanabe-higashi-no-cho Site

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association